大分県文化財調査報告書　第170輯

大分の中世城館

第四集
総論編

2004
大分県教育委員会

大分の中世城館

第四集
総論編

序　文

本書は、県教育委員会が文化庁の補助を受け、平成7年度から平成15年度の9か年にわたって実施してきた「中世城館等発掘調査事業」の調査報告書です。

平成7年度から6か年間は、中世城館に関する古文書調査と現地での分布調査や縄張り図等の作製を中心に行い、その成果として平成13年度に『大分の中世城館』第１集「文献史料編１」を、平成14年度には第２集「文献史料編２」と第３集「地名表・分布図編」を刊行し、本年度は最終的なまとめとして本書第４集「総論編」を刊行いたします。

9か年におよぶ分布調査等から、大分県には569か所の中世城館の存在が明らかになりました。本書はその中から特に重要と考えられる城館152か所について、縄張り図等を活用して詳述したものです。「文献史料編１・２」及び「地名表・分布図編」と合わせてご利用いただければ幸いです。

本書が大分県における中世城館の基本資料となるだけでなく、活用されることによって中世城館の研究が進展し、さらには郷土の文化財保護の一助になることを願ってやみません。

最後に、長年にわたる調査では、郷土の城館に誇りをもつ地元の方々の熱意にも支えられ、多くの関係各位の御協力をいただきました。衷心から感謝申し上げます。

平成16年3月31日

大分県教育委員会
教育長　深　田　秀　生

例　言

１．本書は、大分県教育委員会が平成７年度から平成１５年度まで文化庁の国庫補助を受け実施した「中世城館等発掘調査事業」の報告書第４集「総論編」である。

２．本書には、計１５２か所の城館について、縄張り図等詳細なデータを掲載するとともに、調査成果として大分における中世城館の特質が分かるよう「特論」を掲載している。

３．縄張り図作成の年月日などのデータは、２１２頁からの一覧表に掲載している。

４．縄張り図に使用した地形のデータは、大分県知事の承認を得て５，０００分の１の森林基本図を複製したものをベースに用いている。(承認番号　林15－7平成16年2月4日)

５．城館の詳論で使用した字図については、市町村役場税務課、または法務局の協力を得てマイクロ化した明治２１年前後に調製された「旧字図」を集成したものである。纏める際、地割りや地目など当初段階への復元を目指したが、後の貼り込みなどで確認できなかった部分がある。また、原図のゆがみから実際の地形とは完全には一致しない。

６．本シリーズの各巻構成については以下の通りである。

第１集　文献史料編１－豊後国及び豊前国下毛郡、宇佐郡の城館に関する中世文書・記録・近世に編纂された島津氏関係の資料と、豊後国内の城郭に関わる近世初頭の記録

第２集　文献史料編２－豊後国及び豊前国下毛郡、宇佐郡の城館に関するキリシタン関係の記録、および中世文書・記録の補遺

第３集　地名表・分布図編－各城郭の所在地や名称、概要などの基礎的なデータと城館の位置を示す分布図

第４集　総論編－本巻

別　冊　文書史料や宣教師の記録、城郭の詳細データなどに対する総合索引

７．縄張り図のトレースは西嶋スミエ、高井光子、安部明美が、字図のトレースは薬師寺恵が行った。

８．本文の執筆者は、目次に示したものの他、各項目の最後に記している。

９．本書の編集は小柳和宏（大分県文化課）が行った。

目　次

序文

例言

第１章　序論 …… 1

１．調査の経過　*1*

２．調査の方法　*2*

３．調査体制　*3*

第２章　城館詳説 …… 6

１．県北部の城館　*6*

２．県中部の城館　*72*

３．県南部の城館　*121*

４．県西部の城館　*187*

第３章　考察 …… 215

１．大友氏の領国経営と城郭　*215*

２．戦国期の宇佐下毛地域と城館－16世紀後半を中心に－　*221*

３．城郭構成要素の変遷－城郭編年のための基礎作業－　*226*

第４章　特論 …… 231

１．飯沼賢司「寺と山城」　*231*

２．小島道裕「戦国期城下町としての豊後府内と臼杵」　*233*

３．千田嘉博「大分県における戦国期城郭の特徴」　*236*

４．宮武正登「高良山陣所群に見る大友氏関連城郭の構造的特質」　*239*

第５章　総括～大分県における中世城館の位置づけ～ …… 249

おわりに …… 256

索引 …… 257

城館目次

	市町村名	番号	城館名	頁数
県北部の城館	中津市	005	末廣城	7
		007	八並城	8
		014	中尾城	9
		015	犬丸城	9
		016	岩丸城	10
		017	池永城	11
		023	坂手隈城	12
		026	中津城	13~14
		027	妙相寺城	15~16
		028	仮屋敷遺跡	15~16
		029	長久寺城	15~16
		030	福島城	15~16
	豊後高田市	033	屋山城	17
		037	佐野鞍懸城	18~19
		039	奥畑鞍懸城	20
		048	智恩寺西城	21
		051	蕗政所跡	22
		053	烏帽子岳城	23
	三光村	059	ズリヤネ城	24
	耶馬渓町	069	一ツ戸城	25
		078	長岩城	26~28
		081	馬台城	29
	本耶馬渓町	086	古庄屋遺跡	30
	宇佐市	089	下高城	44~6
		090	吉久遺跡	31
		091	高山城	32~33
		095	宮熊城	34~35
		099	荒木城	36~37
		100	高森城	38~39
		107	山本砦	40
		108	山本切寄	41
		114	松山城	42~44
		115	西原遺跡	42~44
		116	時枝城	42~44
		119	平田城	42~44
		120	宇佐公通館跡	36~37
		126	光岡城	45
		130	広崎氏切寄	46
		132	敷田城	49
		134	高家城	50~52
		138	藤田遺跡	53~54
		149	城山城	55~56
		150	和気城	57
	院内町	167	副城	58
		172	妙見岳城	59~60
	安心院町	174	赤井城	61
		177	佐田城	62~67
		189	龍王城	68
	大田村	192	金輪城	69
		196	沓掛城	70
	真玉町	198	真玉氏館	71

	市町村名	番号	城館名	頁数
県中部の城館	杵築市	201	竹の尾城	73
		204	生桑城	74
		206	奈多城	75-76
	別府市	211	ふいが城	77
	国見町	213	岐部城	78
	国東町	221	成仏城	79~80
		222	御所の陣	81
		223	小城	82
		224	雄渡牟礼城	83
		225	亀城	84
	武蔵町	232	吉広城	85
	安岐町	238	安岐城	86~87
	日出町	251	真嶽城	88
		253	鹿鳴越城	89~90
	山香町	260	甲ノ尾山城	91
		261	小松城	92
		262	龍ヶ鼻城	93
		267	日指城	94
		268	樋掛城	95
		272	立石城	96
	大分市	279	天面山城	97~98
		285	大友氏館	99~103
		287	高崎城	104~107
		293	上野大友館	108~109
		295	千歳城	110
		299	鶴ヶ城	111~112
		300	小岳城	113
	臼杵市	307	丹生島城	114~115
		308	水ヶ城	116
	津久見市	317	久保泊城	117
	庄内町	342	権現岳城	118
	佐賀関町	351	一尺屋摺木砦	119
		352	烏帽子岳城	120
県南部の城館	佐伯市	359	八幡山城	122
		362	栂牟礼城	123~126
		366	小田山城	127
	弥生町など	368	彦岳城	128
	宇目町	372	朝日岳城	129~130
		374	城ノ越古城	131
		375	蔵小野砦	132
		376	荒内砦	133
		378	駒鳴砦	134
		379	皿内砦	135
	直川村	381	用来城	136
	鶴見町	383	宇土山砦	137
	竹田市	386	高城	138
		387	緩木城	139
		394	岡城	140~141
		396	騎群城	142~143
		398	津賀牟礼城	144~146
	野津町	400	武山城	147

	市町村名	番号	城館名	頁数
県南部の城館	野津町	400	武山城	147
		403	王子ヶ城	148-149
		411	寺田館	150
		413	鍋田城	151
		417	筒井ヶ城	152
		420	若山の陣	153
	三重町	424	松尾城	154~159
	緒方町	433	鶴ヶ城	160
		434	荒平城	161
		437	高尾城	162
		441	烏岳城	163
		442	加納塞	164
		448	小牧城	165
	朝地町	449	小牟礼城	166
		453	一万田館	167
	大野町	461	高城	168~169
		464	田附城	170
	千歳村	472	上門手遺跡	171
		473	石五道原遺跡	172
	犬飼町	477	高旗城	173
	久住町	487	相ヶ鶴城	174
		488	南山城	175~176
		489	小路遺跡	177
		490	上城遺跡	178
		491	山野城	179~182
		492	三船城	181
	直入町	495	田北城	184
		496	法螺貝城	185
		498	松牟礼城	186
県西部の城館	日田市	501	財津古城	188
		504	坂本城	189
		510	日隈城	190
		514	蕪山城	191
		515	高井岳城	192
		519	大蔵古城	193~194
	玖珠町	529	魚返城	195
		530	古後城	196
		531	野田城	197
		533	角牟礼城	198~199
		538	瀬戸遺跡	200
		539	帆足城	201
		540	伐株山城	202~203
	九重町	544	城ヶ尾城	204
		549	釘野城	205
		552	松木城	206
		553	陣の内山城	207
		554	殿山城	208
		558	野上城	209~210
		559	岐部城	211

※「番号」は第三集収載の地名表に記載した城館番号である

第１章　序論

１．調査の経過

平成7年度から同15年度までの9カ年に渡って実施してきた。調査に至る経緯については第３巻で記したので、ここでは各年度ごとに経過を述べたい（調査対象城館と旧字図マイクロ化対象市町村については表1参照）。

なお、平成3年の台風19号による風倒木被害が予想以上にひどく、数m先も見えないほどに木々がなぎ倒されていた城館もあり、作図調査の進行をかなり遅らせた。また、各年度とも下草の関係で、現地調査は12月から翌年の２月頃にかけて実施した。

（平成7年度）

前年度に全体計画の策定を行い、実際の調査を開始する。この段階では、平成４年度に実施した大分県全体の埋蔵文化財分布調査の結果による『大分県遺跡地図』収載の中世城館数は約300箇所であった。先ず、これら以外の城館の有無の確認を市町村教育委員会あて行った。

また、8月8日から9日にかけて調査委員会を開催し、調査の全体方針を検討した。調査委員会には調査員も参加し、各調査委員の先生方から中世城館調査の意義と方法について講義を受けた。それを受けて、11月30日から12月1日にかけて、大分市の天面山城で縄張り図作成の実地研修を調査員全員が参加して実施した。そして、12月以降、調査員で基本的に3人1パーティで調査にあたり、9城館の縄張り図を作成した。また、平行して旧字図のマイクロ化を3町で実施した。

（平成8年度）

７月31日に調査員が一堂に集まり本年度の調査計画を具体的に決定する。9月9日から10日にかけて、湯布院町にある大分県立湯布院青年の家において、調査委員会および一般県民に公開する「調査報告会」を実施し、約150名の参加者があった。報告会では、調査が始まったばかりの本事業について概要を説明した後、城館の見方などについて講演を行い、前年度の調査報告を行った。調査委員会では昨年度調査した城館の検討と当該年度の調査計画について話し合った。11月以降現地調査に入り、24城館の縄張り図を作成した。また、平行して旧字図のマイクロ化を６市町で実施した。

（平成9年度）

8月27日から28日にかけて、宇佐市にある県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館（現県立歴史博物館）において、調査委員会および一般県民に公開する「調査報告会」を実施し、約200名の参加者があった。報告会では、特に宇佐、中津地域に顕著な「平地城館」に焦点を当て検討を行った。1月以降現地調査に入り、24城館の縄張り図を作成した。また、平行して旧字図のマイクロ化を３市村で実施した。

（平成10年度）

10月16日、調査員が集まり、調査方針の確認と各地の状況の報告を行った。10月31日から11月1日にかけて、三重町において調査委員会と一般県民に公開する「調査報告会」を実施し、約200名の参加者があった。三重町には天正年間の島津氏の豊後侵攻で本陣が置かれた松尾城があることから、島津氏侵攻に関わる城館の検討を行った。12月以降現地調査に入り、10城館の縄張り図を作成した。また、平行して旧字図のマイクロ化を４市町で実施した。

（平成11年度）

８箇所の新規城館の縄張り図作成と、宇佐、中津地域の平地城館の現地調査を行った。また、日出町、安岐町、安心院町の全域と院内町、真玉町の一部の旧字図のマイクロ撮影を行った。3月6日から7日にかけて別府市で調査委員会を行い、佐田城の実地調査を行った。

（平成12年度）

13箇所の新規城館の縄張り図作成を行った。また、緒方町の全域と大分市、臼杵市、大野町の一部の旧字図のマイクロ撮影を行った。３月８日から9日にかけて竹田市において調査委員会を実施し、岡城と山野城の実地調査を行った。委員会では、来年度から刊行予定の報告書の構成について検討を行った。さらに、城館数の増加によって、調査年度を1年伸ばすことが了解された。

（平成13年度）

報告書第1集「文献史料編１」を刊行した。

また、3月22日には文化庁において「第１回中世城館遺跡保存検討会」が実施され、大分県から44カ所の城館をリストアップし、その内23カ所の説明をおこなった。

（平成14年度）

7月9日に開催された大分県文化財保護審議会において、文化課として大分県内の中世城館を今後どのように扱っていくのか、また重要城館としてどのようなものがあるのか、について説明する。7月15日には「第2回中世城館遺跡保存検討会」が実施され、残りの21カ所の城館の説明を行った後、大分県として重要城館選出の根拠と指定に向けた考え方を説明した。

現地調査では、犬飼町高畑城の縄張り図作成を行い、さらに過年度に作成した図面の修正作業を実施した。

また、報告書は第2集「文献史料編2」と第3集「地名表・分布図編」の2冊を刊行した。

（平成15年度）

縄張り図の補足調査を実施し、報告書第4集「総論編」と別冊「総合索引」を刊行する。

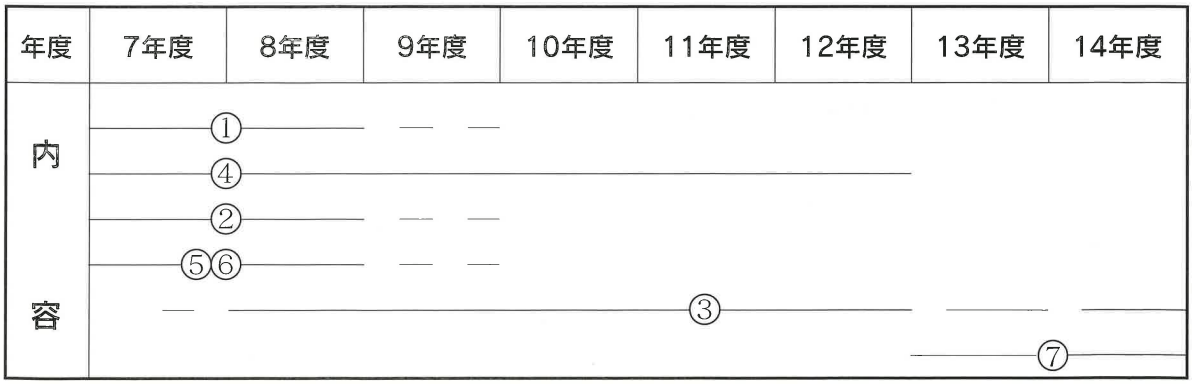
２．調査の方法

平成７年度調査開始にあたり計画した年度ごとの調査予定表が表2である。この段階で、調査項目として①から⑥が計画されていた。①は、まずどこに城館があるのかの確認を事前に行い、縄張り図作成調査につなげようと考えたものであるが、実際山に登る事自体で時間が取られ、広い調査範囲をカバーできないことがわかったため、遺構を確認した段階で縄張り図作成を行う、という方針に切り替えた。②も同様に縄張り図作成段階で平行して行う事とした。③は、大分県では明治21年前後に調製された旧字図（地籍図）は、公文書館に一括で保管されているという状況になく、各市町村役場税務課か法務局で管理されているという状況の中で、効率的に城館の検出を行い、さらに旧字図自体の保管という問題にもつながる事から計画したが、結果的に6年間で県域すべてをカバーする事ができなかった。旧字図は原則600分の１であるので、マイクロ化したものを2,000分の１に縮小して紙焼きを作成した。城館の検出に当たっては、当該部分のみで行うよりも、あるまとまりを持った平野全体や水系に沿った部分を貼り合わせながら広い範囲で見た方が、より城館の位置づけが明確になる事がわかった。特に宇佐平野は、昭和40年代からの圃場整備事業によって全く微高地や小さな谷が消滅し、一面基本的に水平な水田となっているが、明治21年段階の旧河川や微高地に展開する集落、旧道がはっきりと浮かび上がり、今まで別々に見えていた城館群が、各々つながりを持って存在していた事が明らかになった。④は、縄張り図の下敷きにする図面の収集を計画したものであるが、実際市町村によっては2,500分の１地形図を持っていないところもあり、共通する図面としては5,000分の１の森林基本図、または国土基本図に頼らざるを得なかった。ただし、5,000分の１の図面でも細かな谷や尾根は表現されていない場合があり、現地で補足の等高線を入れた場合もあった。⑤は、大分県関係ですでに活字になっている『大分県史料』や『増補訂正編年大友史料』、さらに県外の史料である『薩藩旧記雑録』、『熊本県史料』などから大分県内の城館にかかわる文書、記録の蒐集を行った。当初「屋敷」も対象としていたが、膨大な数にのぼるため断念し、城、要害、切寄、宅所等城館に係わるもの、およびそれらと密接に関わると考えられる戦関連の一部史料も収集した。⑥は、本調査の中心をなすもので、７年度には研修を兼ねた調査を行い、一定の作図レベルに達した後に調査員が各々調査にあたるように考えた。最も問題であったのが、調査員をどのような人たちにお願いするのか、ということであった。大分県では、民間のレベルで城館調査が組織的に行われた実績が皆無で、個人としても縄張り調査を行った経験のある人材は皆無といってよかった。すなわち、誰が調査を行おうとも初心者という事であった。そこで、地域に密着し、日頃図面を取り慣れている方にお願いした方が、城館の場所の確認や図面の精度の向上も早いであろうという事で、市町村教育委員会職員に委嘱する事にした。そして、大分県を４地域（県北部、県中部、県南部、県西部）に分け、その地域の中で担当の調査員が動いて調査にあたることにした。実際の調査では、5,000分の１図面を1,000分の１に拡大したものをＡ３版大のプラスチック画板に留め、その上にマイラーを貼り付け、北に合わせて磁石を固定し、距離は距離測定器（有効距離2m～30mのレンジング）で測り、作図していった。城館の複雑さや山の地形などにもよるが、慣れてくると１パーティが１日で10,000㎡ほどの面積の図化を行えるようになっていった。

表1　年度別調査城館

	縄張り図作製城館	その他
7年度	鞍懸城（豊後高田市）、佐田城（安心院町）、鹿鳴越城（日出町）、甲ノ尾城（山香町）、天面山城（大分市）、千歳城（大分市）、一尺屋摺木砦（佐賀関町）、山野城（久住町）、三船城（久住町）	玖珠町、九重町、天瀬町の字図マイクロ化
8年度	高山城（宇佐市）、宮熊城（宇佐市）、山本砦（宇佐市）、生桑城（杵築市）、岐部城（国見町）、城遺跡（国東町）、御所の陣（国東町）、小城遺跡（国東町）、御渡牟礼城（国東町）、亀城（国東町）、権現岳城（庄内町）、烏帽子岳城（佐賀関町）、朝日岳城（宇目町）、蔵小野砦（宇目町）、駒鳴砦（宇目町）、騎群城（竹田市）、王子ヶ城（野津町）、松尾城（三重町）、日隈城（日田市）、魚返城（玖珠町）、釘野城（九重町）、松木城（九重町）、岐部城（九重町）	竹田市、荻町、直入町、久住町、国東町、杵築市の字図マイクロ化
9年度	池永城（中津市）、田丸城（中津市）、鞍懸城（豊後高田市）、金輪城（大田村）、竹ノ尾城（杵築市）、奈多城（杵築市）、掛樋城（山香町）、小松城（山香町）、龍ヶ鼻城（山香町）、城山城（山香町）、水ヶ城（臼杵市）、彦岳城（弥生町）、筒井ヶ城（野津町）、烏岳城（緒方町）、小牧城（緒方町）、高城（大野町）、田附城（大野町）、相ヶ鶴城（久住町）、田北城（直入町）、松牟礼城（直入町）古後城（玖珠町）、殿山遺跡（九重町）、野上城（九重町）	宇佐市、中津市、三光村の字図マイクロ化
10年度	長岩城（耶馬渓町）、佐田城（安心院町）、立石城（山香町）、皿内砦（宇目町）、荒内砦（宇目町）、津賀牟礼城（竹田市）、若山の陣跡（野津町）、南山城（久住町）、高井岳城（日田市）、野上城（九重町）	宇佐市、中津市、山香町、耶馬渓町（一部）の字図マイクロ化
11年度	緩木城（竹田市）、久保泊城（津久見市）、妙見岳城（院内町）、副城（院内町）、大蔵古城（日田市）、城の越城（宇目町）、龍王城（安心院町）、野田城（玖珠町）、烏帽子岳城（豊後高田市）、牧城（豊後高田市）、和気城（宇佐市）、平田山土塁（玖珠町）、日指城（山香町）	日出町、安岐町、安心院町、院内町（一部）、真玉町（一部）の字図マイクロ化
12年度	吉弘城（武蔵町）、高山城（宇佐市）、城山城（宇佐市）、坂本城（日田市）、財津古城（日田市）、蕉山城（日田市）、法螺貝城（直入町）、鍋田城（野津町）、武山城（野津町）、大峠山砦（野津町）、法音寺城（野津町）、丹生城（野津町）、八幡山城（佐伯市）	大分市（一部）、大野町（一部）、緒方町、臼杵市（一部）の字図マイクロ化
13年度	長岩城（耶馬渓町）	報告書第１集の刊行
14年度	高旗城（犬飼町）	報告書第２集、３集の刊行
15年度	赤井城（安心院町）、日指城（山香町）、小岳城（大分市）、鶴ヶ城（大分市）、城ヶ尾城（九重町）、御嶽城（日出町）、馬台城（耶馬渓町）、鍋田城（野津町）、寺田館（野津町）、高崎城（大分市）	報告書第４集の刊行

表2　調査工程表（当初案）



①分布調査→正確な位置、規模、形状の把握
②聞き取り調査→伝承、地名などの現地調査
③縄張り図、測量図作成→現地調査
④地籍図調査→法務局保管地籍図のマイクロ化（委託）
⑤地形図の収集→市町村役場作成の2500分の1（あるいは2000分の1）の集成
⑥文書、記録類の調査
⑦報告書の作成

３．調査体制

名前の後に年度の無い人は平成7年度から同15年度までである。所属（肩書き）は基本的に平成15年度のものを記しているが、年度のある人はその限りではない。文化課職員については、現在文化課在職者以外は当該年度の肩書きを付している。

【調査委員】
豊田寛三　大分大学教授
服部英雄　九州大学教授
飯沼賢司　別府大学教授
小島道裕　国立歴史民俗博物館助教授
千田嘉博　国立歴史民俗博物館助教授
宮武正登　佐賀県立名護屋城博物館学芸員
芦刈政治　三重町文化財調査委員（平成10年度）
北野　隆　熊本大学教授（平成11年度）

【調査員】
今田秀樹　天瀬町教育委員会
大久保謙一郎　前豊後高田市教育委員会（平成７年度～11年度）
小野英治　前弥生町役場
神田高士　臼杵市役所（前臼杵市教育委員会　平成7年度～13年度）
佐伯　治　竹田市教育委員会
櫻井成昭　県立歴史博物館学芸員
佐藤祐二　玖珠町教育委員会
〆野勝教　安心院町役場（前安心院町教育委員会）
高松永治　前日出町教育委員会（平成7年度～10年度）
竹野孝一郎　九重町教育委員会
玉永光洋　大分市教育委員会（前大分県教育庁文化課）
坪根伸也　大分市教育委員会
豊田徹士　千歳村教育委員会
中西義昌　竹田市教育委員会（平成12年度～）
林　一也　宇佐市教育委員会
東　貴之　天瀬町教育委員会文化財調査専門員（平成11年度）
平川信哉　杵築市教育委員会
藤本啓二　国東町教育委員会（平成7年度～10年度）
北郷泰道　宮崎県文化課埋蔵文化財係長（平成10年度）
三重野誠　別府市立別府商業高校教諭（前県立先哲史料館主任研究員）
諸岡　郁　三重町教育委員会
吉本弘明　大分市教育委員会（平成15年度）
行時佳子　日田市教育委員会（平成7年度～10年度）

【文化課】
調査総括
末広利人　大分県教育庁文化課長（平成7年度）
後藤一郎　〃　（平成8～10年度）
山本芳直　〃　（平成11～12年度）
工藤正徳　〃　（平成13年度）
岩尾康晴　〃　（平成14年度）
今永一成　〃　（平成15年度）
調査事務
油布芳典　大分県教育庁文化課課長補佐兼管理係長（平成7年度）
山崎靖信　〃　〃　（平成7年度）
河野孝一　〃　〃　（平成9～10年度）
小玉学司　〃　〃　（平成11年度）
山内美徳　〃　〃　（平成12年度）
瀧上福次　〃　〃　（平成13年度）
渡邉重昭　〃　主幹兼　管理係長（平成14～15年度）

調査員

清水宗昭	大分県教育庁文化課	参事兼課長補佐
渋谷忠章	〃	参事兼課長補佐
高橋　徹	〃	主幹
高橋信武	〃	主幹
小林昭彦	〃	主幹
栗原　眞	〃	主幹
後藤一重	〃	副主幹
甲斐寿義	〃	副主幹
小柳和宏	〃	副主幹
江田　豊	〃	副主幹
田中裕介	〃	副主幹
原田昭一	〃	副主幹
吉田　寛	〃	主査
槇島隆二	〃	主査
松本康弘	〃	主任
矢部勝徳	〃	主査
山内美徳	〃	課長補佐兼管理係長（平成12年度）
石堂喜久次	〃	副主幹（平成12年度）
井川泰成	〃	主査　（平成11年度）
甲斐　猛	〃	主任　（平成8年度）
首藤　善	〃	主任　（平成10年度）
永井　実	〃	主任　（平成10年度）
藤内寿竹	〃	主任　（平成10年度）
染矢和徳	〃	主事　（平成7～8年度）
上野淳也	〃	嘱託　（平成8年度）
吉田博嗣	〃	嘱託　（平成8年度）
上角智希	〃	嘱託　（平成10年度）
東保春名	〃	嘱託　（平成10～11年度）
平野真由美	〃	嘱託　（平成10～11年度）
若杉竜太	〃	嘱託　（平成10年度）
薬師寺恵	〃	嘱託　（平成11年度）
宮田　剛	〃	嘱託　（平成11年度）
五十川雄也	〃	嘱託　（平成11、13年度）
永易昭彦	〃	嘱託　（平成11年度）
江島賢一	〃	嘱託　（平成11年度）
野口典良	〃	嘱託　（平成11年度）
野崎哲司	〃	嘱託　（平成12年度）
工藤育子	〃	嘱託　（平成12～13年度）
遠部　慎	〃	嘱託　（平成13年度）
阿比留士朗	〃	嘱託　（平成15年度）
松田幸之助	〃	嘱託　（平成15年度）
井上索裕	〃	嘱託　（平成15年度）
畔津宏幸	〃	嘱託　（平成15年度）
古庄博之	〃	嘱託　（平成15年度）

【協力者・協力機関】（五十音順、敬称略）

阿南禎久、岩尾善治、内恵克彦、後藤幹彦、小深田兼四郎、高崎章子、橋本一彦、軸丸勇、高野弘之、戸崎智弘、長田大輔、溝部安司、宮川菅雄、由見忍、長岩城保存会、県内各市町村教育委員会

第２章　城館詳説

１．県北部の城館

ここでは、豊前南部に属する旧宇佐郡・下毛郡、および豊後の国東半島西側の現西国東郡にある城館48箇所を取り上げる。この地域の特徴は、宇佐・中津平野という大分県域で最大規模の平野があり、そこに平地城館が多数存在することである。何時、どういう契機でそれら城館（厳密に言えば「城」と村が一体となった施設）が成立したのかについて議論がある。「切寄」という城郭を示す用語が天正期後半から頻出するのもこの地域である。

また、この地域は豊前・豊後国境地帯であり、大友氏の側からは豊前支配のために確保する必要があった地域であり、逆に周防の大内氏や毛利氏からみると豊後に侵攻するための足場となるべき地域であった。そのため、大内、大友両氏の攻防の舞台となった妙見岳城をはじめ、国境を廻る攻防を繰り広げた城館が多数存在する。そして、天正１５年に大友氏が豊後一国に封じられると、豊前は黒田氏の支配となりいち早く織豊系城郭が出現することになる。

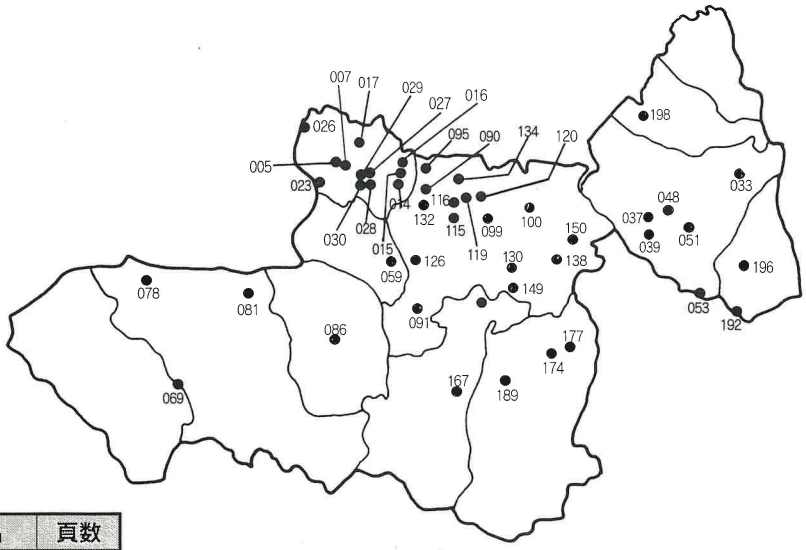
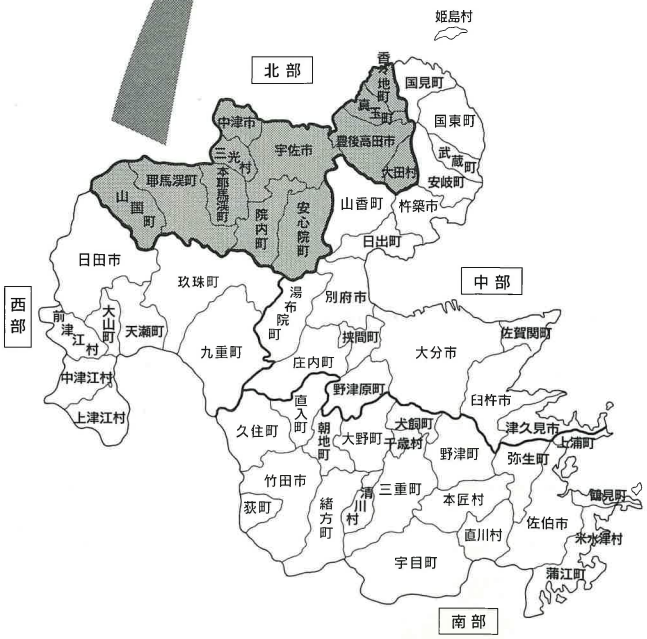


表3　県北部の掲載城館

番号	城館名	頁数	番号	城館名	頁数
005	末廣城	7	095	宮熊城	34~35
007	八並城	8	099	荒木城	36~37
014	中尾城	9	100	高森城	38~39
015	犬丸城	9	107	山本砦	40
016	岩丸城	10	108	山本切寄	41
017	池永城	11	114	松山城	42~44
023	坂手隈城	12	115	西原遺跡	42~44
026	中津城	13~14	116	時枝城	42~44
027	妙相寺城	15~16	119	平田城	42~44
028	仮屋敷遺跡	15~16	120	宇佐公通館跡	36~37
029	長久寺城	15~16	126	光岡城	45
030	福島城	15~16	130	広崎氏切寄	46
033	屋山城	17	132	敷田城	49
037	佐野鞍懸城	18~19	134	高家城	50~52
039	奥畑鞍懸城	20	138	藤田遺跡	53~54
048	智恩寺西城	21	149	城山城	55~56
051	蕗政所跡	22	150	和気城	57
053	烏帽子岳城	23	167	副城	58
059	ズリヤネ城	24	172	妙見岳城	59~60
069	一ツ戸城	25	174	赤井城	61
078	長岩城	26~28	177	佐田城	62~67
081	馬台城	29	189	龍王城	68
086	古庄屋遺跡	30	192	金輪城	69
089	下高城	44~46	196	沓掛城	70
090	吉久遺跡	31	198	真玉氏館	71
091	高山城	32~33			



第1図 県北部城館位置図

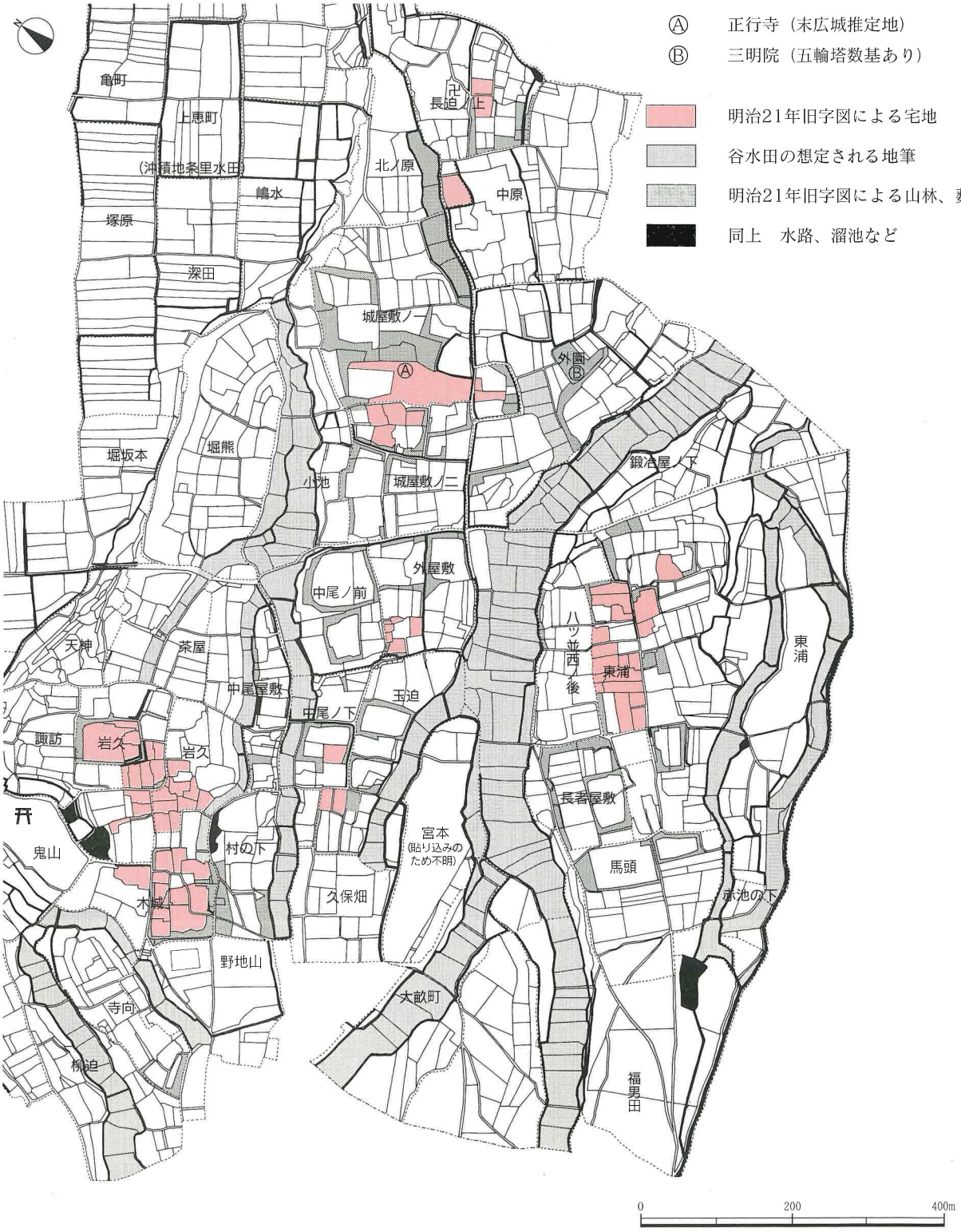
【005　末広城　中津市大字永添字城屋敷ほか】

《立地》中津平野から20m近い段差を持つ洪積台地上に立地し、東西を浅い小さな谷に挟まれた南北に長い微高地上に位置する。浅い谷を挟んで東側には八並城（007）があり、南西部には小さな谷を挟んで法華寺城（006）がある。

《現状》字図からは小字「城屋敷」から「外屋敷」にかけて土塁の痕跡を示す地割りが確認できるが、「城屋敷」にある正行寺の回り以外では土塁が確認できない。

《構造》連続する区画を持つ城であるが、発掘調査がなされた事が無く実態は不明である。主郭をなす「城」部分と、その周囲に広がる屋敷区画が連結したものであろう。その範囲は八並城や法華寺城よりも広がりを持つ。

《歴史》末広氏の城郭といわれるが、同時代史料が無く詳細は不明である。（小柳和宏）



第2図 末広城周辺小字集成図（1/8,000）

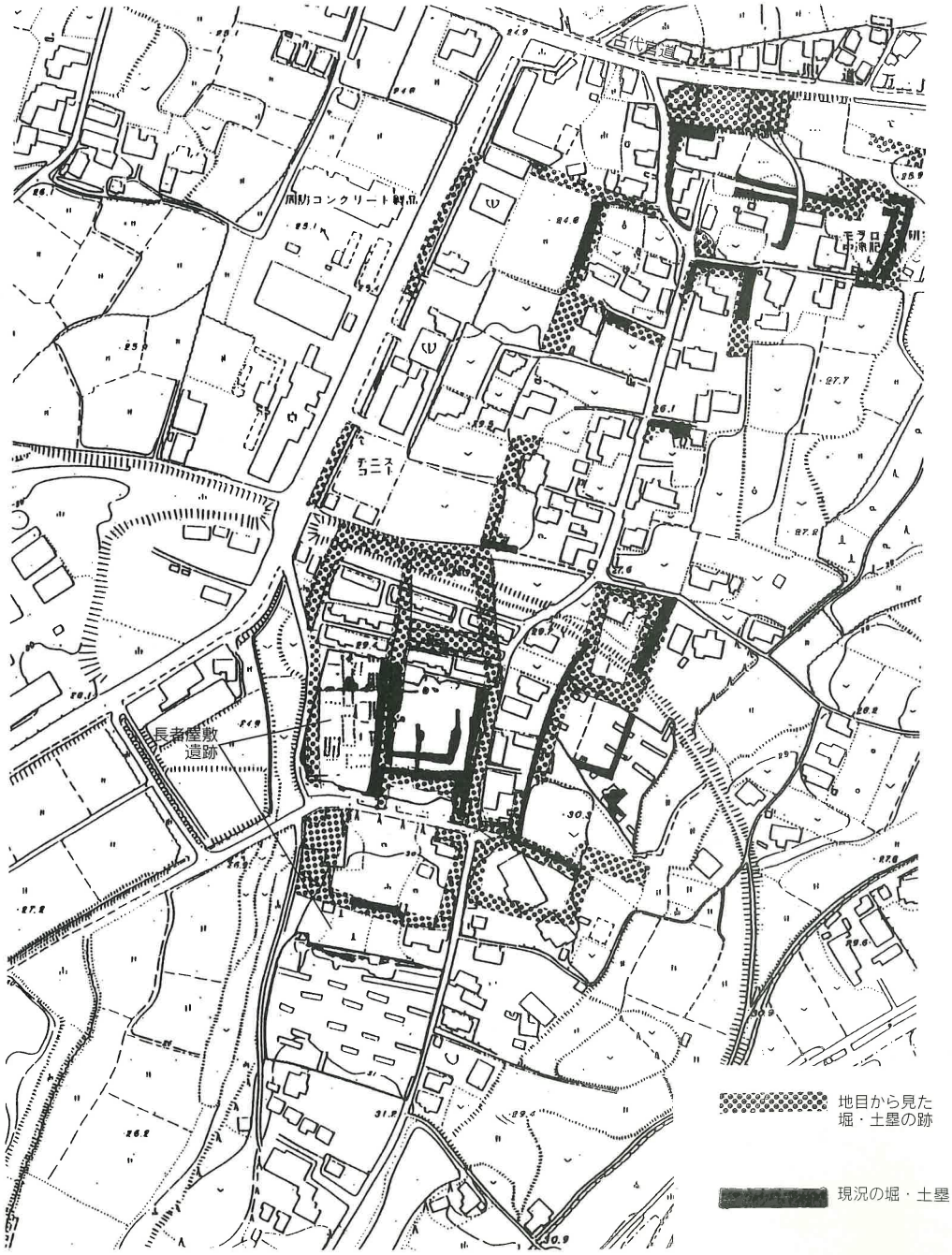
【007　八並城　中津市大字永添字城屋敷ほか】

《立地》中津市南部の標高30mの低台地上と、北側の標高25mの古代官道から台地上へ続く直線距離にして300mほどの斜面に展開。南北500m、東西150～240mの範囲で確認されている。浅い谷を挟んで末広城(005)がある。

《現状》古代官道から台地上へ通じる緩やかな登り坂の両端には集落があり、現在も土塁・堀が残る。低台地上は市営住宅だったが、建替え工事に伴う発掘調査で下毛郡衙正倉に比定される長者屋敷遺跡を検出。遺跡内から堀を二重にめぐらす方形居館が発見された。現在は将来の遺跡公園のため空き地になっている。

《構造》北端の古代官道沿いが入口となる。官道から集落への道は曲げられ、土塁が入口を鍵の手状にさえぎり、集落を隠す。台地に続くゆるやかに登る道沿いは、堀と土塁で囲まれた屋敷地の方形の高まりが階段状に連続する。台地上で検出された、堀を二重にめぐらす方形居館は、堀の内側が東西33m、南北66m。堀の幅は3～4m。以前この土地は現況より1～2m高く、堀の深さは3mほどあったという。二重の堀の間には遺構がなく、土塁が築かれていたと思われる。南西コーナー部には二重の堀の間に方形の地下式土坑が掘削されていた。台地上の方形区画が主郭となろう。宇図の地目より、主郭の周囲は方形区画で囲まれており、堅固なつくりとなっている。八並城跡は台地上の城館と北側の集落までを含めた遺跡である。

《歴史》「下毛郡誌」によれば「八並城は小城蔵人宗次によって築かれた。天文元(1532)年蔵人宗次は大友出陣に従い豊前国永添村小城に住した。宗次は小城甲斐守を撃って八並城を築き、小城を領し小城と称した」という。天正8(1580)年八並城は豪族野仲鎮兼に攻め落とされた。(高崎章子)



第3図 八並城現況図（1/3,000）〈中津市教育委員会提供〉

【014　中尾城　　中津市大字犬丸字中尾屋敷】

【015　犬丸城　　中津市大字犬丸字居屋敷、伽羅、法海寺】

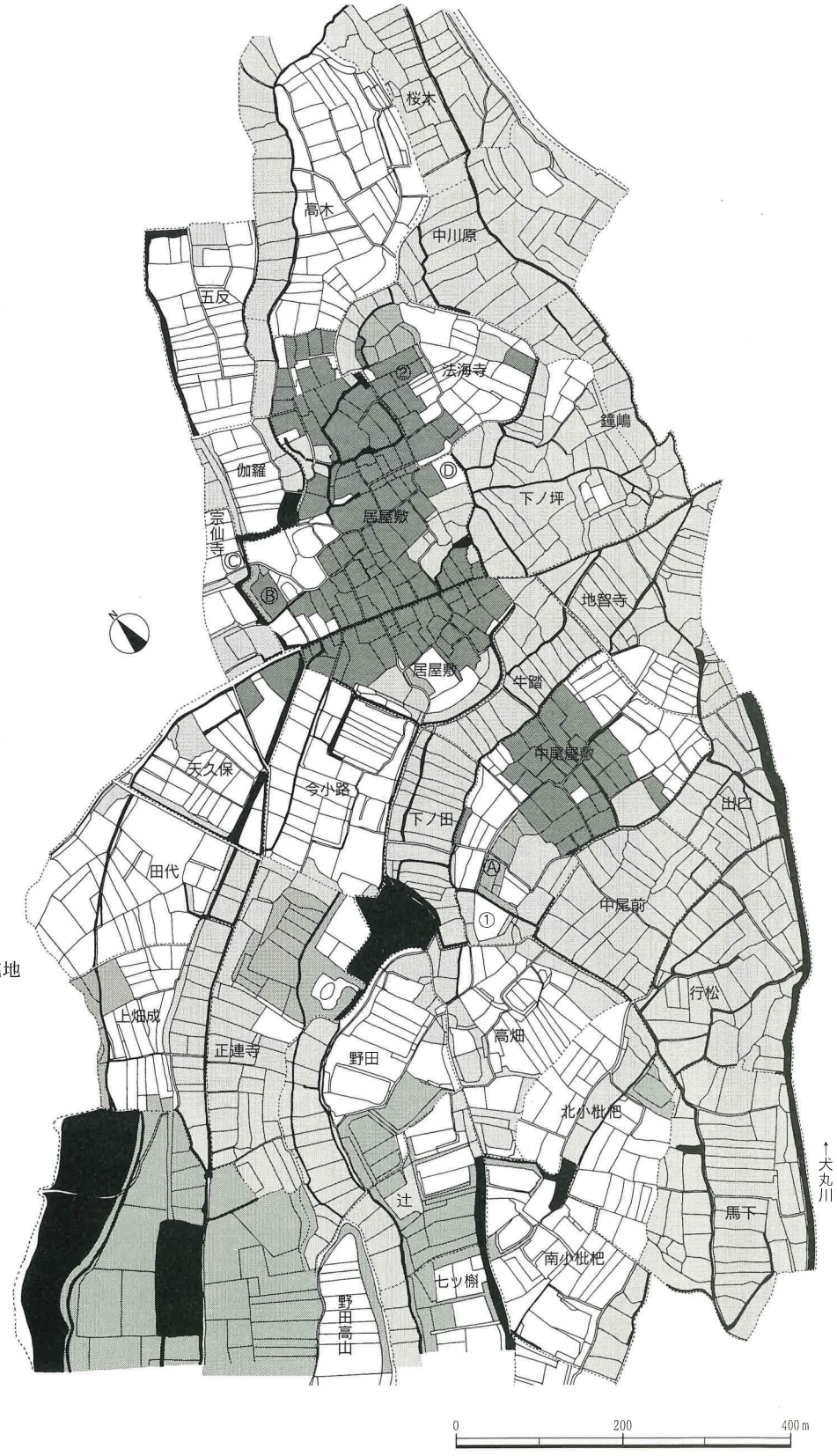
《立地》周防灘に面する海岸から約2km内陸に入った地点の、標高13mほどの低丘陵上に立地する。南東側には犬丸川が北流しており、その川に向かって幾筋もの小さな浅い谷が下っているため、丘陵上はなだらかな小さな起伏に富む。犬丸城はほぼ平坦地に立地するが、中尾城は比高差2mほどの標高15mの丘陵上に立地する。

《現状》集落、水田、畑地となっている。

《構造》中尾城は、東西方向に伸びる丘陵の最も西側が城郭推定地（①）で、北側に土塁が残る。北側と東西側には堀状の低地があったといい、現在は痕跡が認められないが明治21年の字図では水田と藪とされる部分と考えられる。また、小字「中尾屋敷」の中心部分の集落は、中尾城と一体となった屋敷群の名残と考えられよう。

犬丸城は②のやや高台となった部分が地元の伝承地であるが、特に土塁や堀の痕跡は認められない。むしろ、やや西側には水路や水田となっている堀の痕跡を認める事ができる。特に図中のCからDを結ぶ直線上には、堀の痕跡と考えられる水路と水田が伸びる。また、C部分では、小字「伽羅」、「居屋敷」の一部、「法海寺」を囲い込むように北側に直角に折れ曲がる。

《歴史》中尾城は中尾氏、犬丸城は犬丸氏の居城といわれるが、同時代文書や記録には記載がなく、詳細は不明である。（小柳和宏）



第4図 犬丸地区小字集成図（1/8,000）

【016　岩丸城　中津市大字今津字岩丸ほか】

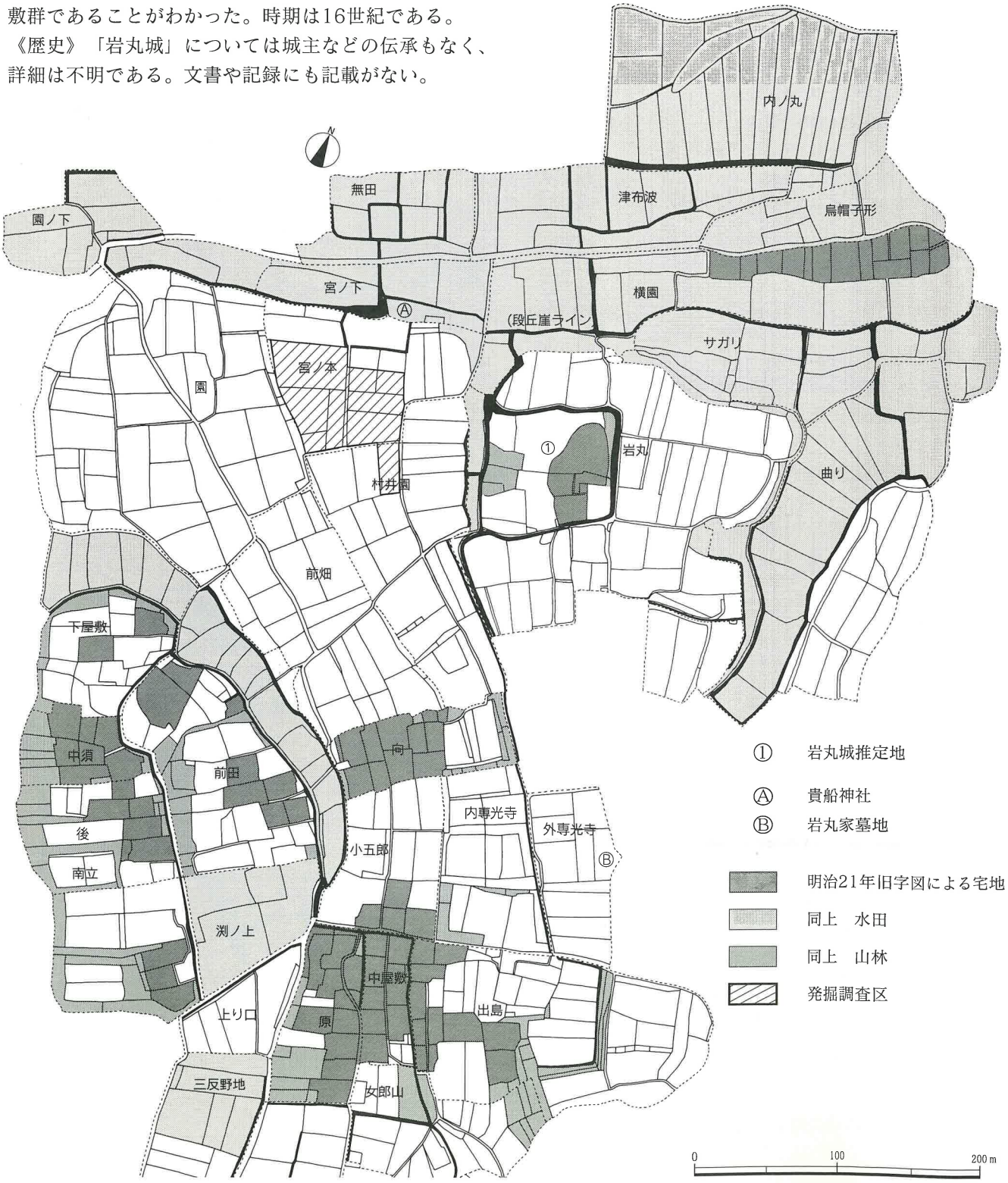
《立地》周防灘に向かって南から広がる台地が、約8mの段差で段丘崖を形成する手前の台地端部に立地する。標高は11mほどで、周辺は南に行くほど僅かに高くなるが、小さな谷を除いてほぼ平坦になる。

《現状》畑地、宅地となる。

《構造》現状、あるいは明治年間の旧字図では水路が方形に巡る区画が認められ、ここが城郭の推定地である。平成13年度に農業関連の開発事業に伴って中津市教育委員会が発掘調査を行った小字「宮ノ本」において、館関連の遺構が検出された。これが、伝岩丸城とどの様な関係があるかは不明である。

発掘調査された箇所は、貴船社以外に建物はなく、明治21年段階でも宅地は無い小字「宮ノ本」において、貴船社の参道下や現道下で堀が検出され、現在の地割りが中世段階の区画を踏襲しているのが確認された。堀で囲まれた内部からは地下式土坑や井戸、土壙墓などが見つかっており、堀を連結、または共有しながら展開する屋敷群であることがわかった。時期は16世紀である。

《歴史》「岩丸城」については城主などの伝承もなく、詳細は不明である。文書や記録にも記載がない。



第5図 岩丸城周辺小字集成図（1/4,000）

【017　池永城　中津市大字池永字城屋敷】

《立地》中津平野を望む洪積台地の端部近くに位置する。微視的に見ると、東西を浅い谷で挟まれ、北側も東側から回り込んだ浅い谷で仕切られた南北600m、東西200mほどの微高地上に立地する事になる。

《現状》住宅地となっている。

《構造》東西方向に伸びる宇佐大道から、海岸方向に向かって北に伸びる道が、約600mにわてって直線道になったところに池永城はある。道の両側に「城屋敷」、「馬場屋敷」、「屋敷」どの地名が続くが、地割りで明確な土塁や堀の存在が確認できるのは「城屋敷」部分のみである。「城屋敷」の北側には、現在東西方向に基底部幅で10m、高さ3mほどの直線的な土塁が残存している。旧字図では、南北に100m弱の区画が読み取れる。おそらくここが「城」と呼ばれた部分であろう。そこを中心として屋敷群が取り巻いていたものと考えられる。

《歴史》『豊前故城誌』によると、池永城は池永氏代々の居城で、天正16（1588）年に黒田長政に攻められ落城したという。（小柳和宏）

第6図 池永城周辺小字集成図（1/8,000）

【023　坂手隈城　中津市大字相原字坂手ノ前】

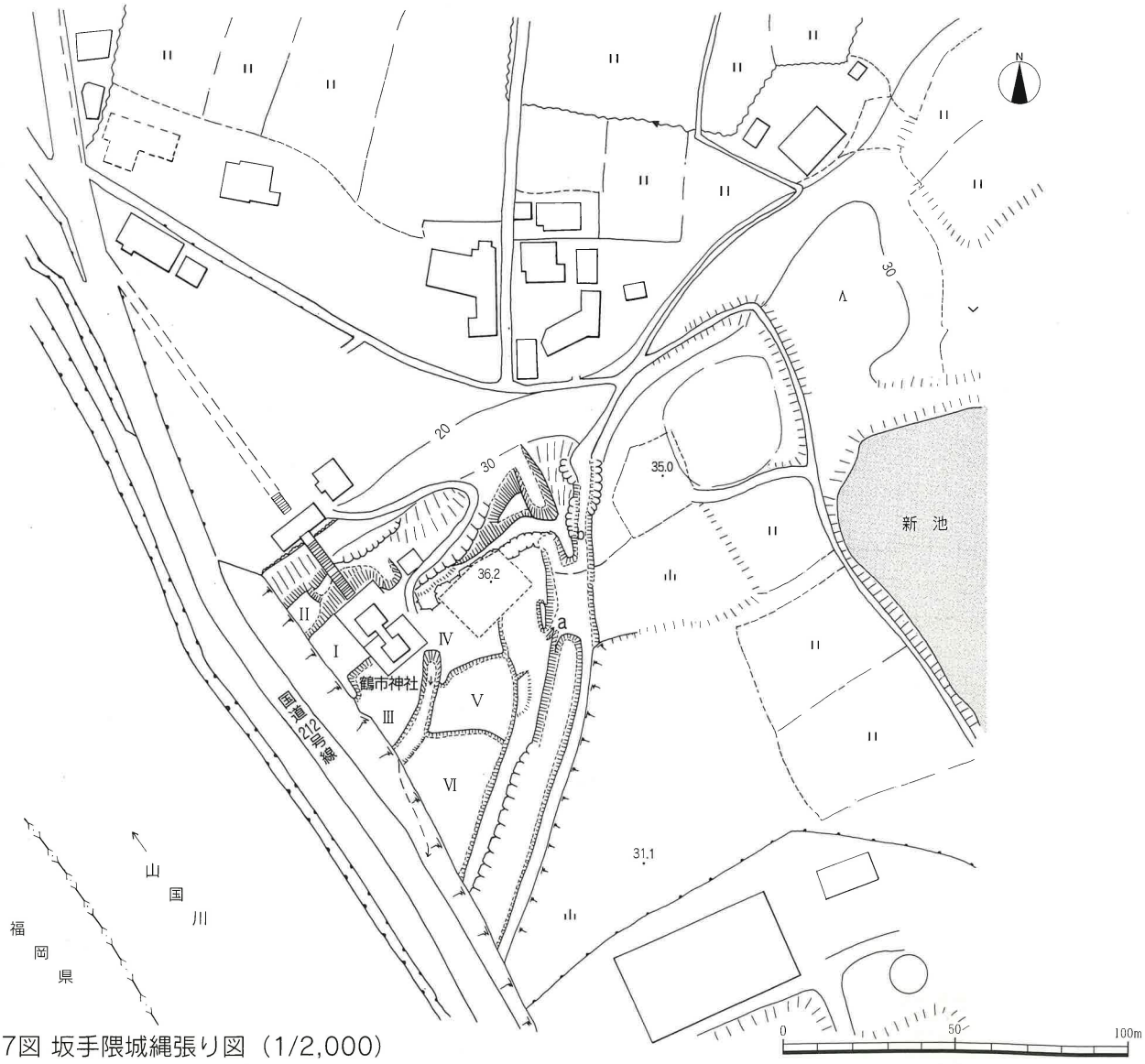
《立地》山国川に接する洪積台地縁辺に立地する。平野部との比高差は15m。東側から伸びた台地は、城のある場所で河川に突き当たるため、丁度この場所が山国川沿いに南下するルートのひとつの要衝となる。城からは中津平野、及び川を挟んで福岡県側に展開する平野を一望することができる。

《現状》現在台地上は「鶴市神社」及びゲートボール場によって一部旧状が失われ、西側は国道212号線により削られている。平成14年から15年にかけて国道の拡幅工事で、発掘調査の後崖側から幅約10m削られた。

《構造》台地の角部を二重の堀（内堀、外堀と仮に呼称する）で画し、ほぼ三角形を呈する城域（約3,000㎡）を確保する。最も高い部分が主郭（Ⅰ）で、南北15m、東西11m以上の平場を作る。主郭は南北に腰曲輪（Ⅱ、Ⅲ）を配し、その外に内堀を巡らせる。内堀と外堀の間は、幅25m程のやや弧を描く3段の曲輪（Ⅳ～Ⅵ）があり、相対的に低い曲輪Ⅴ、Ⅵでは外堀との間に高さ1m～50cmほどの土塁を持つ。その外側には幅約10mの外堀が長さ140mに渡ってやや弧を描いて掘られており、北側で1カ所土橋状に切れた部分がある。しかし、虎口はここではない。虎口は堀が一段深くなる手前の地点aとなる。この土橋状のものは、道（b）から台地に登り切った部分にあたり、敵に対し横矢を掛ける足場的な意味合いを持つことになる。虎口（a）は、土塁から連なる曲輪の塁線が若干食い違う部分を斜めに登る単純な坂虎口であるが、登る右手上部には低平な土塁を有しており、身を隠しながらの側射が可能となっている。

なお、平成15年8月の外堀南端部の発掘調査によって、当初崖を下る堀割状の道（一部石敷き）があったものを若干拡幅し、堀としたことが判明した。

《歴史》『豊前故城誌』によると「藍原左京允築く、保延の頃は藍原内記有之居る、天正七年正月九日野仲兵庫頭二千余騎を以って城を囲む、城主藍原新左ヱ門、同名右近を頼んで降る、（中略）城は天正十六年に破却しき」とある。同時代文書では、豊前の土豪成恒、土井、久恒三氏の観応2（1351）年の軍忠状の中で、「酒（阪）手隈」において敵を追い散らしたことが記されるが、この「酒手隈」は、立地の項で述べたように交通の要衝としての場所と考えられ、地形から見ても南北朝期の城があったとは考えにくい。城の構造から見ても、戦国末期のものであろう。（小柳和宏）



第7図 坂手隈城縄張り図（1/2,000）

【026　中津城　中津市二ノ丁ほか】

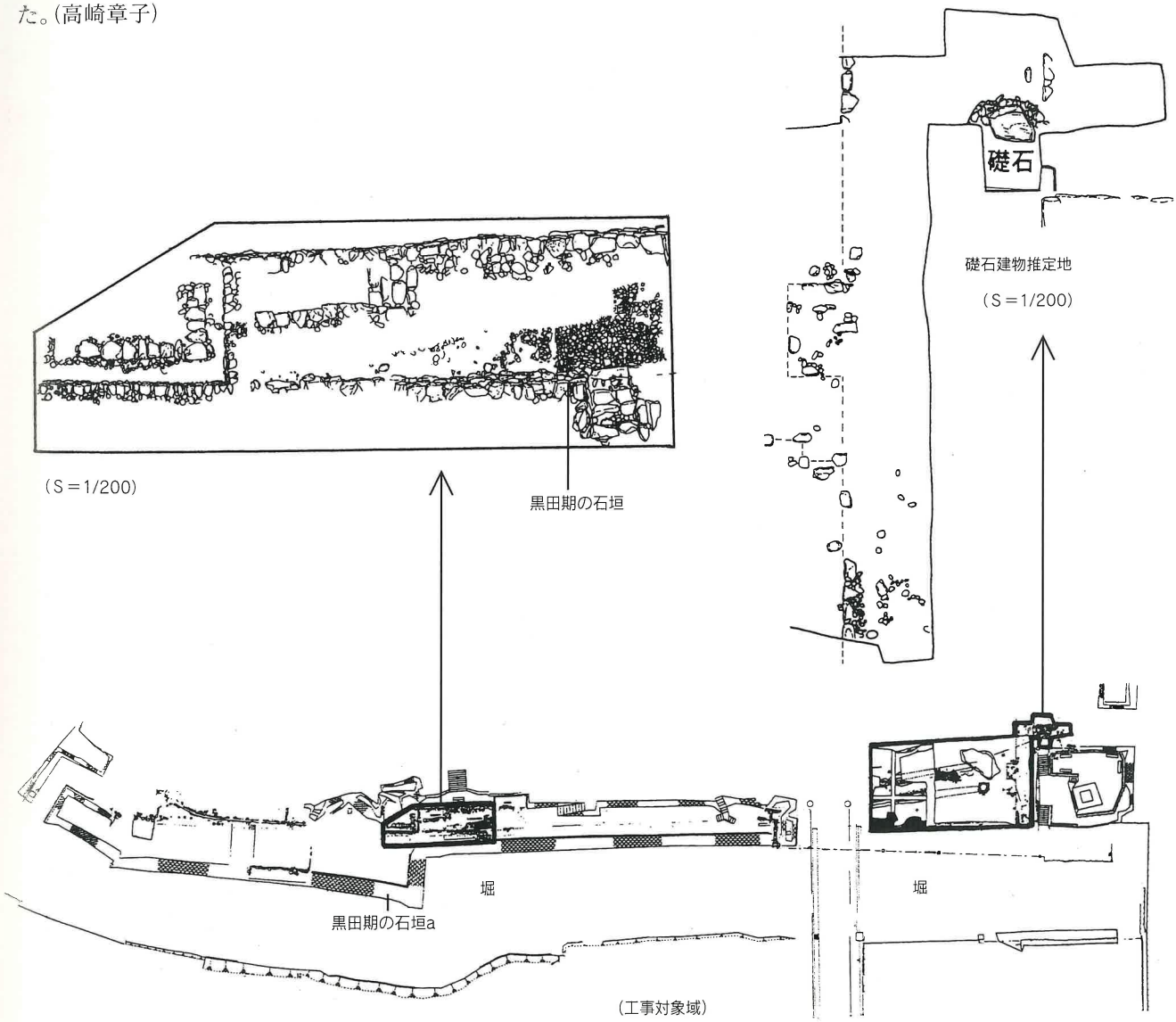
《立地》中津市の最北端、福岡県との県境を形成する山国川の河口沿いに立地する。標高4.6m。川と海に面した要衝の地である。

《現状》明治維新後、中津城の廃城に伴い本丸跡の構造物は取り壊された。現在ある天守閣は昭和39年に造られたコンクリート製の観光用である。本丸内は上段が神社地、下段が公園地である。二の丸は裁判所やプールなどの公共施設、三の丸は住宅街となっている。堀は本丸東側の薬研堀以外は全て埋められている。石垣は一部取り壊された場所もあるが、比較的よく残っている。現在本丸と三の丸の間の堀と石垣の復元工事を行っている。

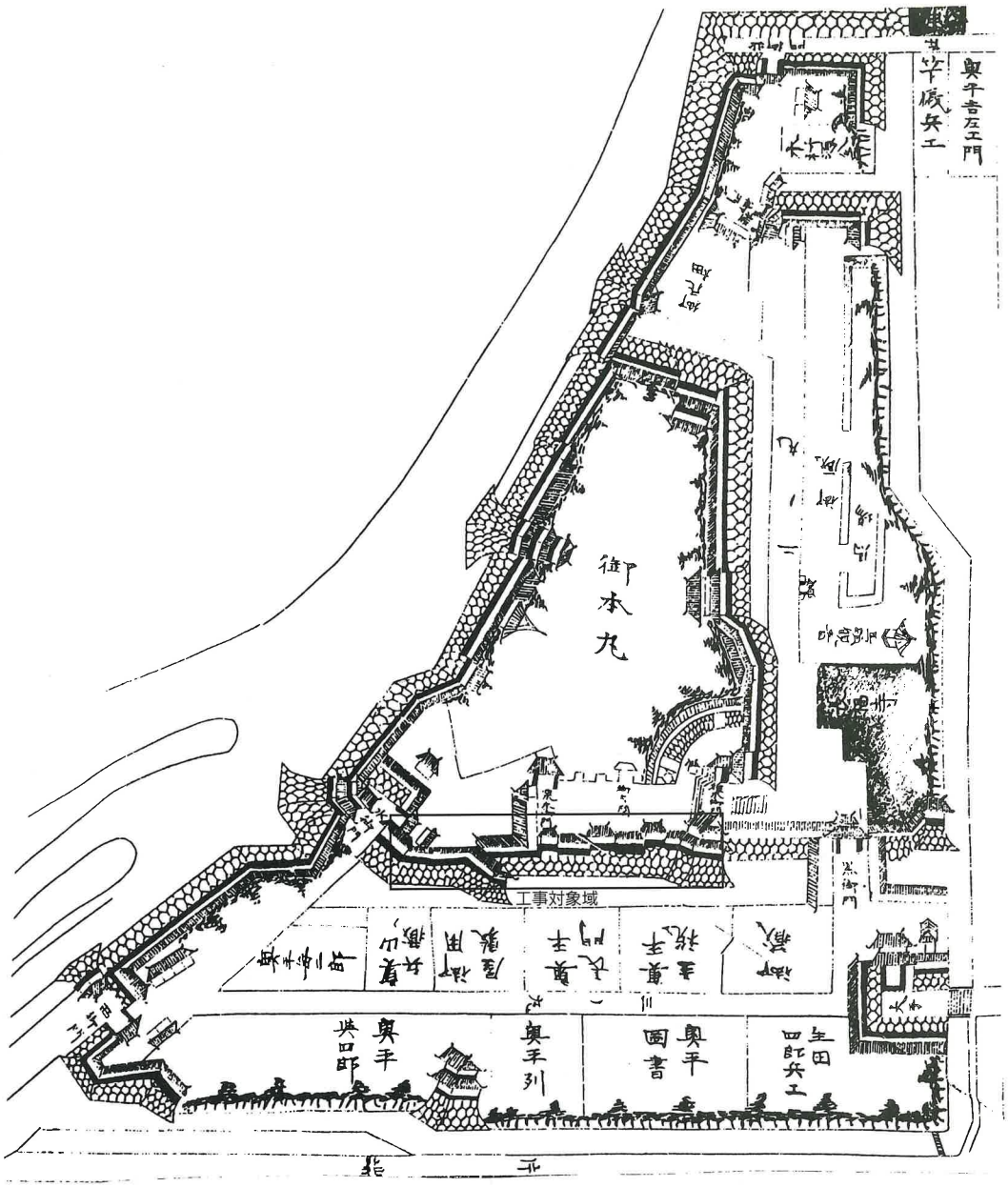
《構造》薬研堀、内堀中堀を含む本丸跡全域で24,000㎡。城域は直角三角形で、北西側は山国川が堀の代わりをする。本丸、二の丸、三の丸からなる。本丸内は北側の一段高くなった所を上段、南側の低い所を下段という。

天守閣があったかどうか意見が分かれている。本丸周囲は総石垣で囲まれる。本丸東側に二の丸を、南側に三の丸を配す。城の入口の大手門は三の丸の東にあり、そこから黒門を通じて二の丸へ入り、本丸南隅の椎ノ木門へと通じる。本丸東側と南側にある堀の水は潮の干満で水位が上下する。内堀、外堀には「おかこい山」と呼ばれる土塁があり、堀と土塁に守られて城下町が形成された。「黒田如水縄張」という絵図では現在の城と形が異なっている。この絵図の成立が黒田時代とは断定できておらず、築城当初の様子はよくわかっていない。しかし、近年の調査により、黒田時代の石垣が随所に残っていること、本丸と三の丸の間の石垣は、当初今より低く、幅が狭かったが、数段階を経て現在の形まで増築されていったことが判明した。また椎ノ木門近くでは大きな礎石が検出されており、黒田時代の大型建物が想定されており、調査は現在も進行中である。

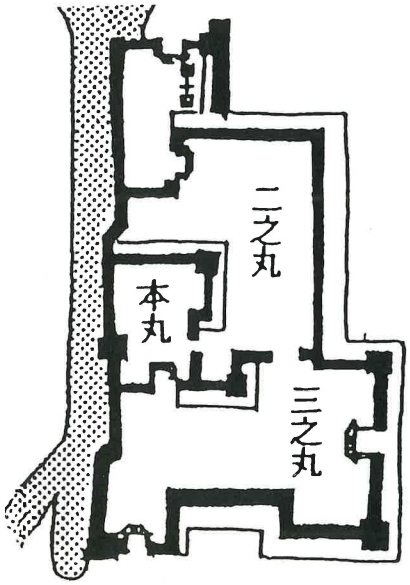
《歴史》天正15年、秀吉は豊前六郡の領主として黒田孝高を配した。天正16年中津江太郎の居城であった丸山城を修補し、入城した。享保の人である奥村甘斉の「閑居草庵記」によると「城はかきあげばかりでみるべきものはなし」とあり、城郭、櫓などの修補にも古材木を使っていたという。「黒田如水縄張」図に描かれている城は現在の扇形と異なり方形で、城外には町や寺があったことが記されている。城は黒田の後、細川、小笠原、奥平氏が入城し、明治3年廃城を願い出、翌年取り壊された。(高崎章子)



第8図 中津城調査区遺構配置図 (1/1,200)〈中津市教育委員会提供〉



第9図 中津城絵図（日下田家所蔵絵図<幕末>）



第10図 中津城黒田期縄張図
（黒田如水縄張図に加筆したもの）

出角の石垣（2002年）

〈いずれも中津市教育委員会提供〉

【０２７　妙相寺城　中津市大字福島】
【０２８　仮屋敷遺跡　中津市大字福島字仮屋敷】
【０２９　長久寺城　中津市大字福島字寺内】
【０３０　福島城（山中城）中津市大字福島字本丸、二ノ丸、三ノ丸】

《立地》犬丸川流域に展開する平野で、浅い谷と微高地が複雑に入り組む地形である。犬丸川流域では条里区画が認められる。北部では妙相寺城や長久寺城に接するように東西方向に宇佐大路が伸びる。古代官道に基点を持ち、基本的に直線道である宇佐大路は、この福島で大きく北に膨らんでおり、中世に形成されたこの地の様々な要素に規制されたものと考えられる（参考『宇佐大路』大分県教育委員会　1991）。

《現状》妙相寺城は浄土宗寺院、長久寺城は浄土真宗寺院となっており、境内地がそのまま城域となる。仮屋敷遺跡と福島城は現在宅地、および畑地、水田となっており、旧状が失われた部分が多い。

《構造》妙相寺城は一辺120mのほぼ方形をしており、南側を除く３辺は土塁と堀で囲まれている。堀は土塁を挟むように２重に廻る。旧官道（宇佐大路）から延びる直線的な道を通って境内に入るが、官道とは東に30度近い傾きを持っている。

仮屋敷遺跡は現状で一部に土塁が残されているのみであるが、かつてはその西にある高台から続く台地があり、そこを掘り切って方形の区画を作り出していたという。旧字図から復元すると、南北80m、東西60mほどの長方形の区画となる。以前、区画の内部から地下式土坑が発見された。また五輪塔の一部が中央部付近に積み重ねられている。現在は中山一族の住宅地となっている。

長久寺城は妙相寺城に隣接してあるが、長軸方向が異なる。南側を除く３辺を幅約5mの土塁で東西120m、南北160mの規模で囲まれており、その外側には幅3m前後（一部は池状となっている）水堀が廻り、内側にも空堀が廻っている。堀と土塁は長方形区画の南東角部で折れを持っている。内部は寺院があり、中央部分の旧状は失われていると思われる。旧官道からほぼ直角に折れ直線的な道が延び境内にはいるが、城の主軸は妙相寺とは逆に30度ほど西に振れている。

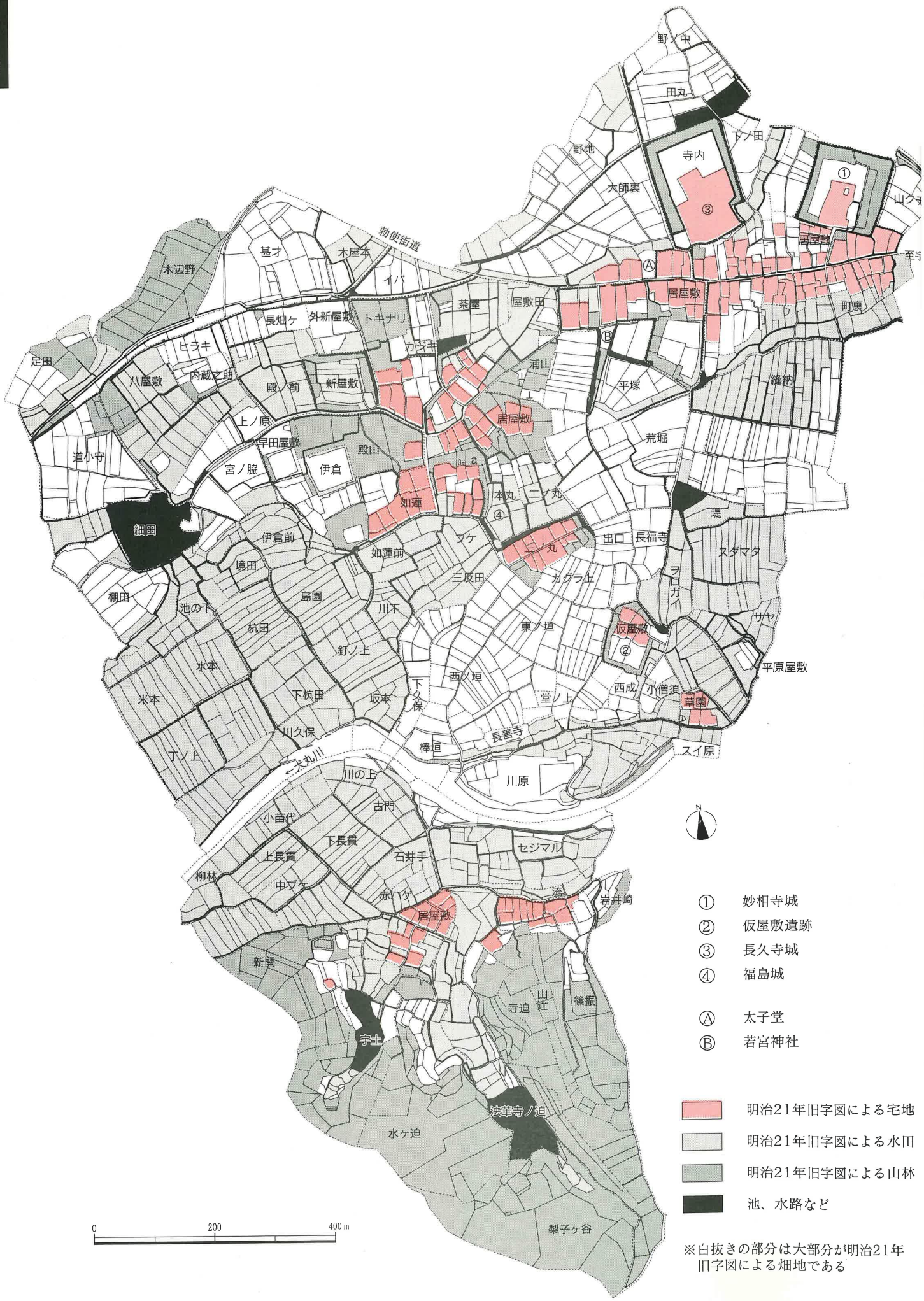
福島城は、小字で「本丸」、「二ノ丸」、「三ノ丸」が残る。この辺りが周辺に比べて高いわけではなく、むしろ南側の「東入垣」や「西入垣」の方が高い。現在「二ノ丸」と「三ノ丸」の間に堀が残るが、他は明確な城郭を示す遺構はない。本丸の伝承地は小字「本丸」の西側の「居屋敷」にある堀に挟まれ方形に画された一段高い部分（ａ）である。

その他、城館の伝承はないが、宇佐大路に沿って「外屋敷」、「新屋敷」、「殿ノ前」、「殿山」、「早田屋敷」など方形区画の認められる一角がある。この内「殿山」は「殿屋敷」とも呼ばれ、この地の中心的な館があった可能性が高いが、伝承などもなく詳細は不明である。また、田丸城と妙相寺城の付近では、宇佐大路に沿って「居屋敷」と呼ばれる地区に、やや区画の小さな短冊形地割に近い区画が認められる。「町裏」の小字があることから、この部分に「町」が形成されていたものと考えられる。

《歴史》『豊前故城誌』によると、山中城は代々福島氏の居城であったが、「文明九年三月但馬守祐斉に至りて同村田丸の城に遷りぬ」という。福島氏は、天正７年からの豊前動乱で大友方に付いている。同時代の文書や記録では記載がないが、「福島城」を城郭として、さらにそれを取りまく屋敷群は「切寄」として整備した可能性がある。文書に記載のある「築地村切寄」がこの地を指すのではないかとも思われるが確証はないものの、この一帯が広い洪積台地上の中でも、館や屋敷、あるいは城郭が集中する特異な地域であるのは間違いない。

第11図からわかるように、現在寺域となっている妙相寺城と長久寺城は別にして、福島城の中心郭であったと思われる小字「本丸」や領主館の可能性がある小字「殿山」や「新屋敷」などが、明治21年段階の旧字図では畑や山林などになっているのに対し、小字「三ノ丸」や各地の「居屋敷」が明治21年段階に宅地であり、居住地として継承されてきた可能性が高い事は、中世段階での居住者の性格を推し量る上でも興味深いものがある。

（小柳和宏）



第11図 福島地区小字集成図（1/8,000）

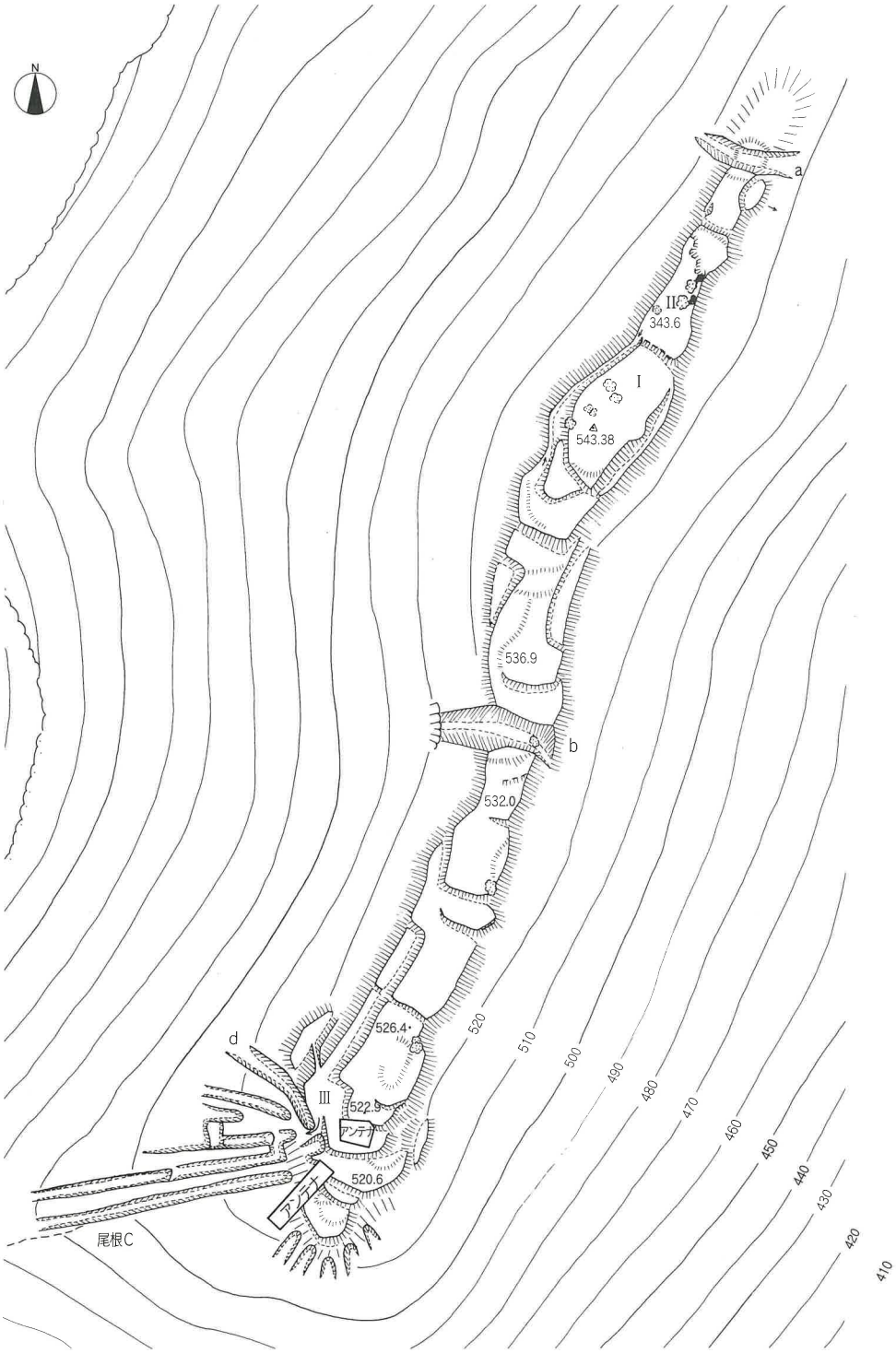
【033　屋山城　豊後高田市大字加礼川】

《立地》標高543.38mの独立峰「屋山」の頂上に立地する。麓の集落との比高差が450m近くある完全な山城であるが、標高320m地点には中世の六郷山（国東半島に点在する天台宗寺院の総称）の中核的寺院であった「屋山（長安寺）」がある。

《現状》山頂部の南側にはテレビアンテナがあり、幅5～8mで、長さ30m程にわたって削平、盛土などがなされ、旧状が不明である。また、主郭の部分には、幕末に建てられた金比羅社の石祠と石灯籠があるが、旧状を壊すほどではない。山頂部は杉の植林であったが、平成3年の台風19号による風倒木が激しく、見通しがききづらい。

《構造》山頂部は幅約15～20mで、長さ約400mの細長い平場が続く。その平場の南側300mを堀切で画し城域とする。山頂部は安山岩の露頭があり、至る所に2～3m程もある巨石がある。図面では完全な平場に見えるが、厳密には完全な削平と完全な切岸の形成は困難であり、1m程度の岩はそのまま放置されている。主郭は二つの堀切（a、b）で挟まれた曲輪群の、その中央に位置する幅20m、長さ30mの部分（Ⅰ）で、両側に一段低い「犬走り」が付設される。北側の曲輪Ⅱは、主郭より数十cm高いが、幅が狭く北側に行くほど傾斜を持つのでこちらが主郭ということはなかろう。基本的には主郭Ⅰを中心とした堀切で画された部分が城の中心的な曲輪群であり、堀切bより南側の曲輪群は、その最南端にある城虎口とそれに伴う曲輪群と評価される。虎口は、この山頂に急崖を通らずに唯一登って来ることのできる尾根線cからのルート上にある。尾根に平行する2本の長大な竪堀を利用して登ってくると、竪堀頂部で左折し、竪堀dを回り込むように他の竪堀で囲まれた空間を4折れして、坂を上りながら虎口受けの曲輪Ⅲに至る。ここからは堀切bに向かって階段状に大小6つの曲輪が配されるが、それらの西側には通路状の帯曲輪が通っている。ここが主郭に至るルートであろう。また、虎口部の曲輪Ⅲから南側にも3段の曲輪が配されており、その先端には畝状竪堀が現状で5本認められる。これは、虎口を登ってきた敵が、東側へ回り込むのを阻止するためのものである。

《歴史》屋山城が文書に初出するのは天正7年の吉弘統幸に対する大友義統の書状で、「屋山要害誘之儀無御油断趣」云々、とあるものである（文書番号401）。これは、豊前の不穏な動きに対して、大友義統が豊前・豊後国境を警固する一環として行ったものである。この後、天正年間に「屋山岳篭城」といった事態も起こっていた（文書番号849）。（小柳和宏）



参考文献
『豊後国都甲荘1』（大分県立宇佐風土記の丘民俗資料館・1988年）

第12図 屋山城縄張り図（1/2,000）

0　50　100m

【037　佐野鞍懸城　豊後高田市大字佐野字野添】

《立地》豊後高田市の西方、桂川と都甲川との合流点から南東に臨む野添丘陵に位置する。標高116m、比高約80mあり、遺構は丘陵頂部の南北約90m、東西約50mの範囲に確認され、北流する桂川によって形成された矢原・西村・大村・丸山地区等の沖積地を一望できる丘陵先端部に築城されている。城山、城、城下などの字名とともに、西側の丘陵裾には、「トノヤシキ」(殿屋敷)の名があり、切岸による曲輪群で構成される空間が存在する。

《現状》雑木林の中に、石垣を築いた曲輪や石列、堀切が良好に遺存するが、石垣は数ヶ所にわたり崩壊している。この石垣の崩壊は、自然的なものではなく人為的ないわゆる「破却」に関連すると考えられる。

《構造》遺構の特徴には、大きく二つの要素がある。一つは、丘陵南端頂部を南北約60m、東西約33mの略長方形に石垣で囲う空間の存在であり、もう一つは、石垣区画から北に約10mのところで、丘陵の南側と北側を遮断する堀切及び連接する竪堀の存在である。この二つの遺構は、全く異なる築城プランによると考えられる。

石垣で区画される曲輪空間は、丘陵の南端から東にかけての急崖側に主郭（曲輪Ⅰ）を寄せ、比較的緩やかな西側に一段低い腰曲輪、それに連接する北側には、大きく張出させたす曲輪（曲輪Ⅱ）を配し、主郭を堅固に防備する縄張りである。主郭は、南北30m、東西15mあり、西・北側の塁壁に石垣を築いている。石垣の大半は意識的に壊されているが、幸い北東隅及び南西側が遺存している。北西隅の石垣は高さ3m前後あり、二段築成の高石垣であるが、南西側は1m前後と低い。曲輪内は平らに造成されているが、南東部は岩山がそのまま残り、造成は行なわれていない。平場は２区画あり、北側が小規模で一段低い。この平場の西塁壁に虎口ⓐがあり、虎口内側が「L」字状に折れる内桝状の通路と接することから広義の虎口空間と考えられる。虎口は幅１mほどの平虎口構造を取り、両側に板状の側石を立てる。曲輪Ⅱは主郭西側を囲む腰曲輪と一体化するもので、主郭から3mほど低い曲輪空間を形成している。虎口は東側ⓑと西側ⓒの２箇所にあり、ⓑの虎口がこの城を最も特徴づける。石垣は大きく破却され崩壊しているが、基底部の状況から復原すると、片方を大きく東側に大きく張出させた「L」字状の食違い虎口となる。虎口から南へ幅約3m前後の通路が設けられ、多折れして曲輪に入る構造となっている。西側の虎口は小規模な平虎口である。石垣で構築された塁壁（線）は、北東虎口部同様、破却されている箇所が多いが、随所に屈曲や折れを設け、強固な横矢が掛かるよう工夫され、規模は、南北約20m、東西約25mである。石垣の高さは、南が１mほどで低いが北に向かってしだいに高くなり、3m前後の高石垣となっている。以上の南北約50m、東西約25mの空間は、最高所の主郭とそれを腰曲輪と一体化させた曲輪Ⅱの大きく二つの曲輪から構成され、食違い虎口と随所に屈曲を設けた塁壁には高石垣を使用する、いわゆる総石垣の哲学が貫徹された空間と考えられる。石垣は、主郭及び北曲輪の高石垣部分は、横長であるが比較的四角形に近い大きないしを使用し、隅角には算木積みが見られ稜線はとおり、規方が成立するなど、主要石垣には石垣の勾配角度を調整する機内系石垣の技術が取り入れられている。一方、低石部の築石は、荒く割った横長の扁平石を垂直に小口積みした程度のものであり、長岩城や角牟礼城三の丸等の石垣に類似し、中世在地系石垣の特徴も存在している。

もう一つの特徴である遺構は、土造りの中世山城にみられる丘陵を遮断する堀切と連接する竪堀の存在である。堀切は丘陵を横堀状に掘削し、中央を開口して陸橋（土橋）とし、西斜面の竪堀と連接して横方向の動きを封じる構造である。注目されることはこの竪堀を横断する虎口ⓑに連なる石列が、この竪堀を壊して構築しており、明らかに石列が時期的に後出することである。

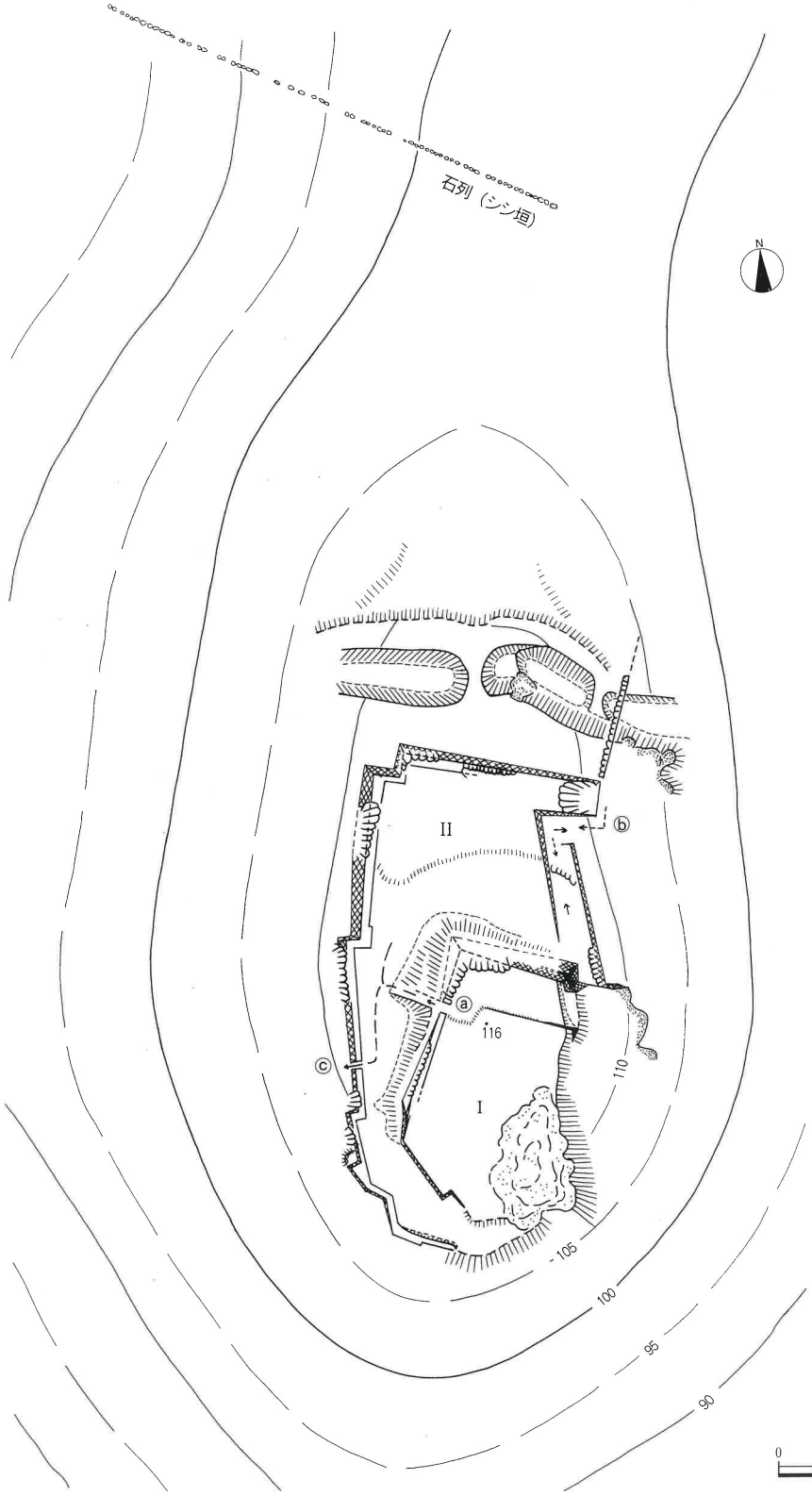
《歴史》佐野鞍懸城については、天正7（1579）年2月23日、大友義統は田原宗亀（親宏）に対し、鞍懸要害に城番を置くよう命じるもの（文書番号古文書部404）、続く12月23日の田原総領家の跡を継いだ豊前馬ケ岳城主長野種信の子親貫が、一族の如法寺親武らに蔵掛城の普請と妻子とともに在城するようを命じるもの（文書番号古文書部422・592）などがある。一方、正平4（1394）年の深江種重軍忠状写（文書番号古文書部50）や応永年間（1367～75）頃の大友氏継感状案（文書番号古文書部102）等、南北朝期頃にも「鞍懸」、「鞍懸城」の名がみえ、この時期に築城されたとすることも可能であるが、「豊田家文書」によれば桂川左岸の奥畑にあった馬頭寺（神宮寺）を掘り崩して築城（奥畑鞍懸城：城番号39）したと伝えられおり、野添へは戦国時代に移ったと言う。以後の佐野鞍懸城は、天正８年、田原親貫が大友氏に反旗し、2月21日当城に立て籠り（文書番号古文書部439・440）同年10月に落城（文書番号古文書部567・568）する。鞍懸城史料の大半はこの田原親貫の乱に関連するもので、蔵掛城の他「鞍懸塁」・「鞍懸要害」・「鞍懸塞」・「くらかけの城」等の名がみえる。この戦いで国東田原氏は滅亡し、田原氏最後の拠点であった鞍懸城はその歴史の幕を閉じるとされている。

鞍懸城は、古くから石垣のある城として知られていた。しかし、上述の高石垣の築城技術は中世の九州地方には類例がなく、織豊系大名が九州に進攻した段階に出現する城郭に類似する。織豊系城郭は、大分県では天正１６年の黒田孝高の中津城や高森城の築城が最も早く、その後、大友氏が除国され、秀吉大名が豊後に入部してきた文禄３年以降に普及すると考えられる。この期の石垣は、隅角に算木積みがみられ、築石は野面石や粗割り石を

使用した布目崩しを特徴とする。また、在地形とされる石垣（石積み）は、近年大友段階の中世城郭に散見できるが、城域全体を囲むといった状況になく、虎口や石塁など城郭を構成する一部に行なう程度である。

両者の特徴をもつ鞍懸城は、おそらく織豊系プランに、一部在地系（在地の石工）の石積み技術を導入した近世初期段階の城郭と考えられよう。とすれば、鞍懸城は、堀切や竪堀など土造りの中世山城を石造りの城郭に改変したことになる。

今後、発掘調査や古文書等の精査が必要であり、現段階では築城主体・時期については不明としか言いようがないが、黒田孝高が中津城にいた天正16（1588）年～慶長5（1600）年の間で、中津城の支城網の一つではないかと思われる。（玉永光洋）



北西隈角部の状況

第13図 鞍懸城縄張り図（1/2,000）

【039　奥畑鞍懸城　豊後高田市大字佐野字城】

《立地》奥畑鞍懸城は周防灘を北に望む標高約400mの急峻な山上にあり、南東には西叡山、南後背には華岳が控え、そこから派生し北へのびる山塊のピークを城域としている。この城の東側にある奥畑集落の谷筋は、立石峠に抜けるルートのひとつとなっており、要衝を抑える一つのポイントとして城が存在することが考えられる。また、眼下に佐野鞍懸城を見下ろすことができることから、平城的に利用された佐野鞍懸城に対し、詰城としての意識をもって築かれた城とも考えられる。

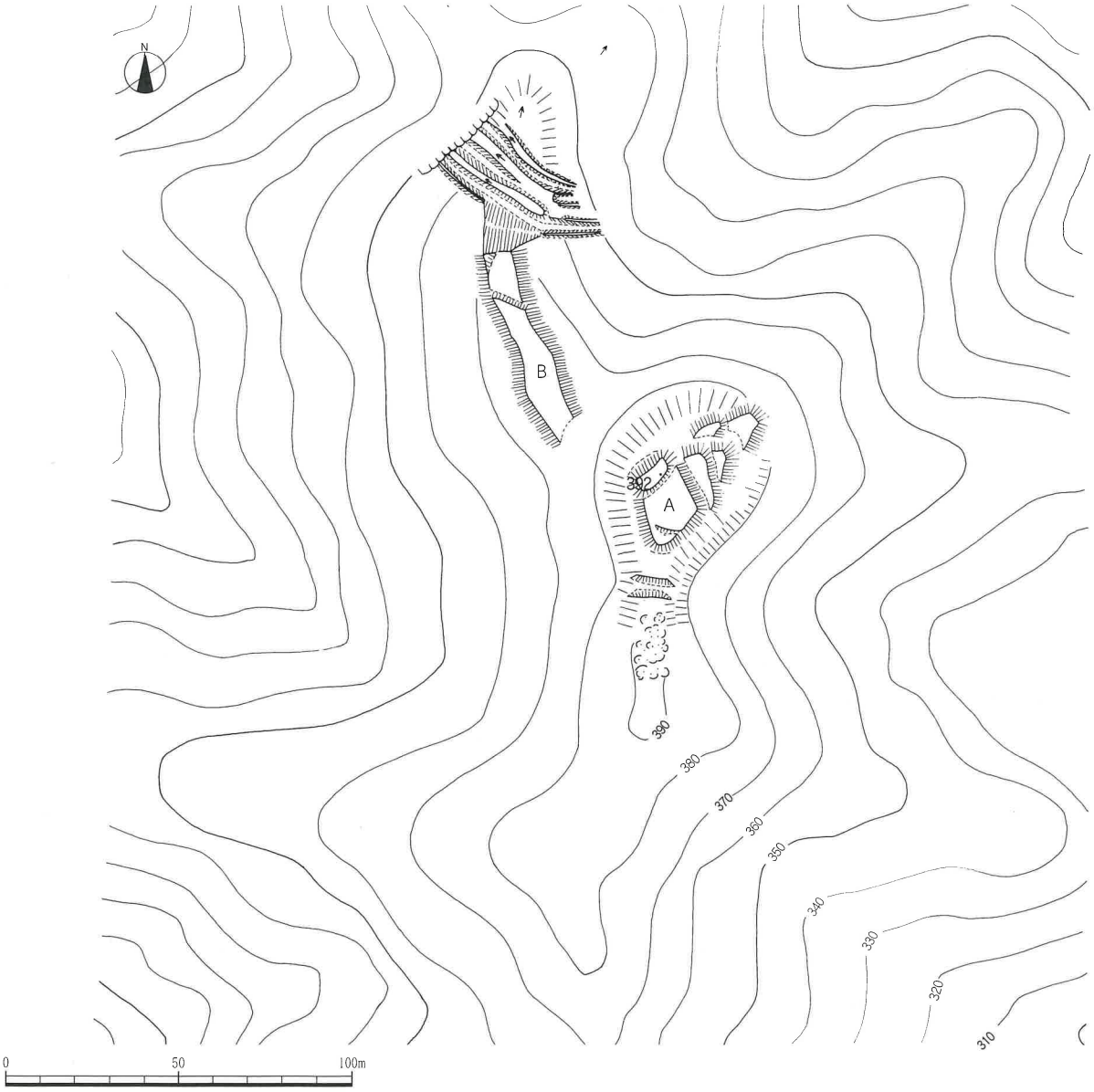
《現状》近代の人為的な活動は全く見られず、破壊、改変を受けていない雑木林のなかにある。

《構造》大きく分けて2つのパートに分けることができる。山頂部（上段）にある曲輪群（A）と、山頂からのびる尾根筋（下段）を曲輪とした（B）である。（A）のピークには長方形の小段がありその部分を含む方形の曲輪が当城の主郭となる。主郭部より南側には第2ピークがあるがその部分は岩塊が露頭しており、加工の跡は見られないが、堀切を設置し遮断されている。また、主郭部より北側にのびる尾根には小規模な曲輪が数段みえ、その先は岩が露頭した断崖となっている。

また、主郭部より北西に尾根筋がのびていくが、その部分には、長さ約60m、幅10mの曲輪が形成され、その北端部を大規模な切り岸で遮断、さらに、3条の堀切を施し侵入に備えている。堀切は掘った際の廃土を土塁として積み上げ、さらに効果的な防塁としている。

《歴史》鞍懸城の名が文献に登場するのは、南北朝期（1350年〈史料編古文書部50〉、1375年ごろ〈史料編古文書部102〉）と天正8年田原親貫の反乱の時である。城の立地、規模から考え、前者に当たるのがこの奥畑鞍懸城で、後者に当たるのが佐野鞍懸城（037）と考えることができる。

豊後国内を走る主要道である豊前への道のルートを押さえられる立地にあり、城のピークから佐野鞍懸城を望むことができることから両城には密接な関係があったと推定でき、本城である佐野鞍懸城の出城と考えることもできよう。（豊田徹士）



第14図 奥畑鞍懸城縄張り図（1/2,000）

【048　智恩寺西城　豊後高田市大字鼎】

《立地》周防灘に向かって西流する桂川とその支流である都甲川の合流点を望む丘陵の先端部に立地する。丘陵先端部のピークには六郷山寺院のひとつ智恩寺があり、一段低い所に「寺屋敷」と「西城」と呼ばれる区画を持った平坦面が存在する。沖積地からの比高差は38mほどである。

《現状》畑地や椚林であり、旧状は比較的よく残っている。しかし、過去に畑地として利用されており、削平を受けている可能性がある。

《構造》一部発掘調査されており現状と併せて考えると、「西城」は3カ所に櫓台状の突出部を持ち帯曲輪を廻らせるもので、堀切や竪堀はない。周辺部にも埋没した堀が確認され、さらに東にある「寺屋敷」でも堀と土塁が一部二重に取り巻いているのが確認されており、この丘陵一帯が防御されるべき地域とされていたのがわかる。発掘調査では西城からは13世紀の遺物が出土し、寺屋敷からは13世紀後半から15、16世紀に至る遺物が出土している。

《歴史》通称「西城」と呼ばれる地点は智恩寺に対する「西」にあたり、智恩寺との強い関係が窺われる。この智恩寺がある場所は来縄郷にあたり、鎌倉時代には来縄郷司であり来縄郷本郷の地頭も兼帯していた大友一族の小田原氏が勢力を保持していた。智恩寺院主も鎌倉時代からすでに小田原氏が兼ねており、文禄の役に参加した人物まで一貫して小田原氏はこの地に足場を築いていた。西城や寺屋敷も鎌倉時代から何らかの施設があったことが窺えるが、最終的な姿に整えられるのは戦国期であろう。(小柳和宏)

〈『智恩寺』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館、1992年）より転載〉

0　50　100m

第15図 智恩寺西城測量図（1/2,000）

【051　蕗政所跡　豊後高田市大字蕗字政所】

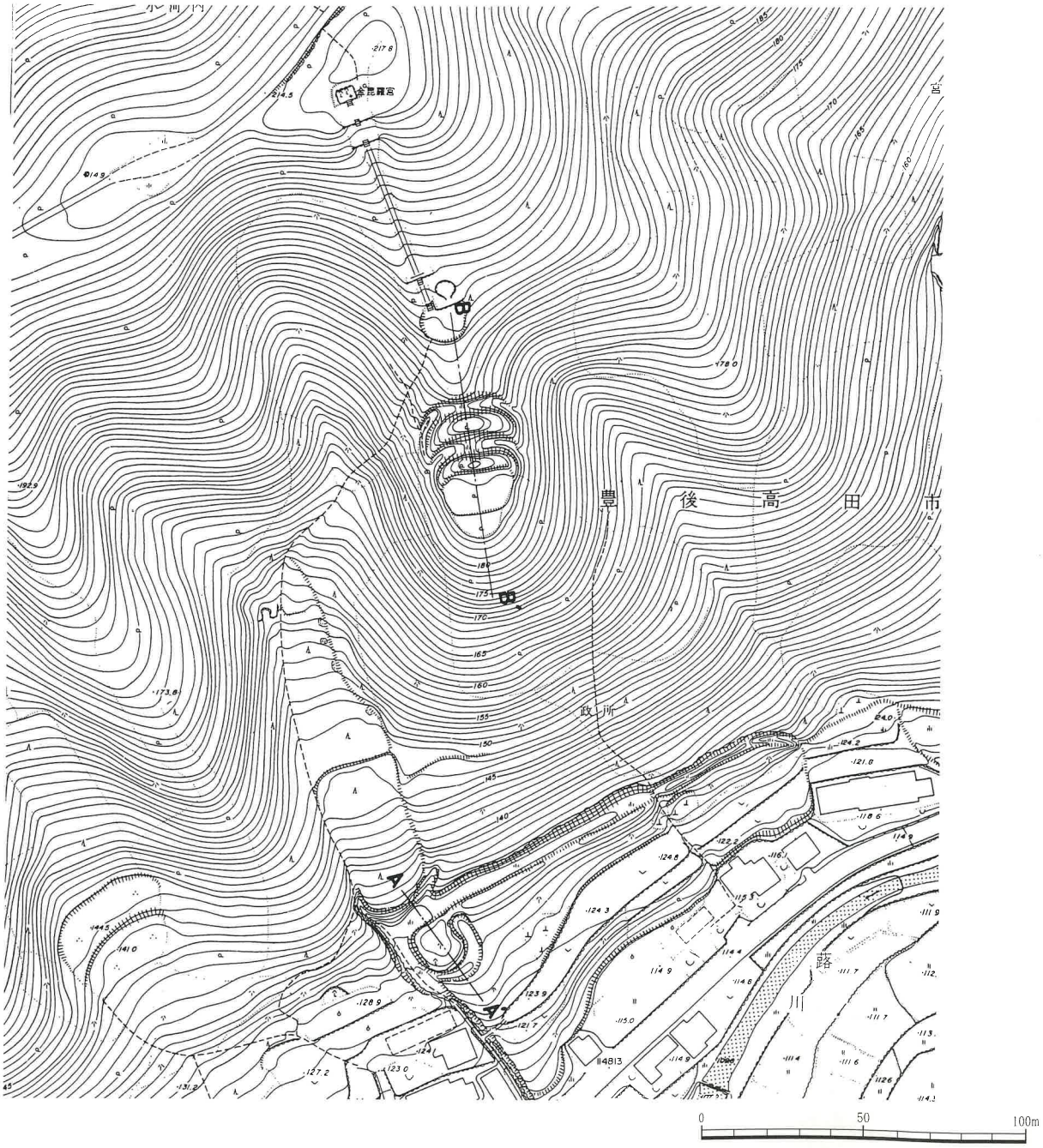
《立地》桂川の支流蕗川が作り出す狭い沖積地を望む丘陵の尾根の先端部、および麓の段丘上に立地する。尾根の先端部は、麓から約50mの比高差がある。

《現状》山林で、残存状況はよい。

《構造》丘陵は頂部に金比羅宮があり、そこから直線で約100m、比高差で30mほど下った尾根の先端部を二条の堀切で遮断する。堀切は幅10mで、土塁上からの深さは5mほどとなる。堀切の南側、すなわち先端側は東西22m、南北12mほどの平坦面を形成しており、曲輪と見なす事ができる。

山裾の遺構は、約125mに渡って直線的な土塁を築き、その外側（山側）に幅７m前後の堀を「コ」字状に巡らせるもので、東西の屈曲部から南側は現状ではよくわからないがが、おそらく緩斜面を竪堀状に蕗川まで直線的に下っていたものと想定できる。そうすれば、東西約120m、南北50～80mほどの区画が10m近い段差を有しながら作られていた事が想定できる。

《歴史》小字からすると、ここが室町期からその存在が明らかとなる「田染政所」として、地域支配の拠点的施設であった可能性が高い。堀と川で挟まれた内部は江戸期は庄屋屋敷であり、近世以後庄屋屋敷となっていったものと考えられる。今見る事のできる政所としての（公的な）館と、背後の山にある山城的な軍事施設の形成は戦国期にまで下るものであろう。（小柳和宏）



第16図 蕗政所縄張り図（1/2,000）〈『豊後国田染荘の調査』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館、1986年）より転載〉

【053　烏帽子岳城　豊後高田市大字平野】

《立地》豊後高田市から山香町に抜ける道を望む標高493.7mの独立峰「烏帽子岳」山頂に立地する。この場所は豊後の北端であって、豊前境、あるいは周防灘を挟んで周防境にあたる。麓からの比高差は300mほどあり、周囲は大部分切り立った崖である事からも一際目立つ存在である。

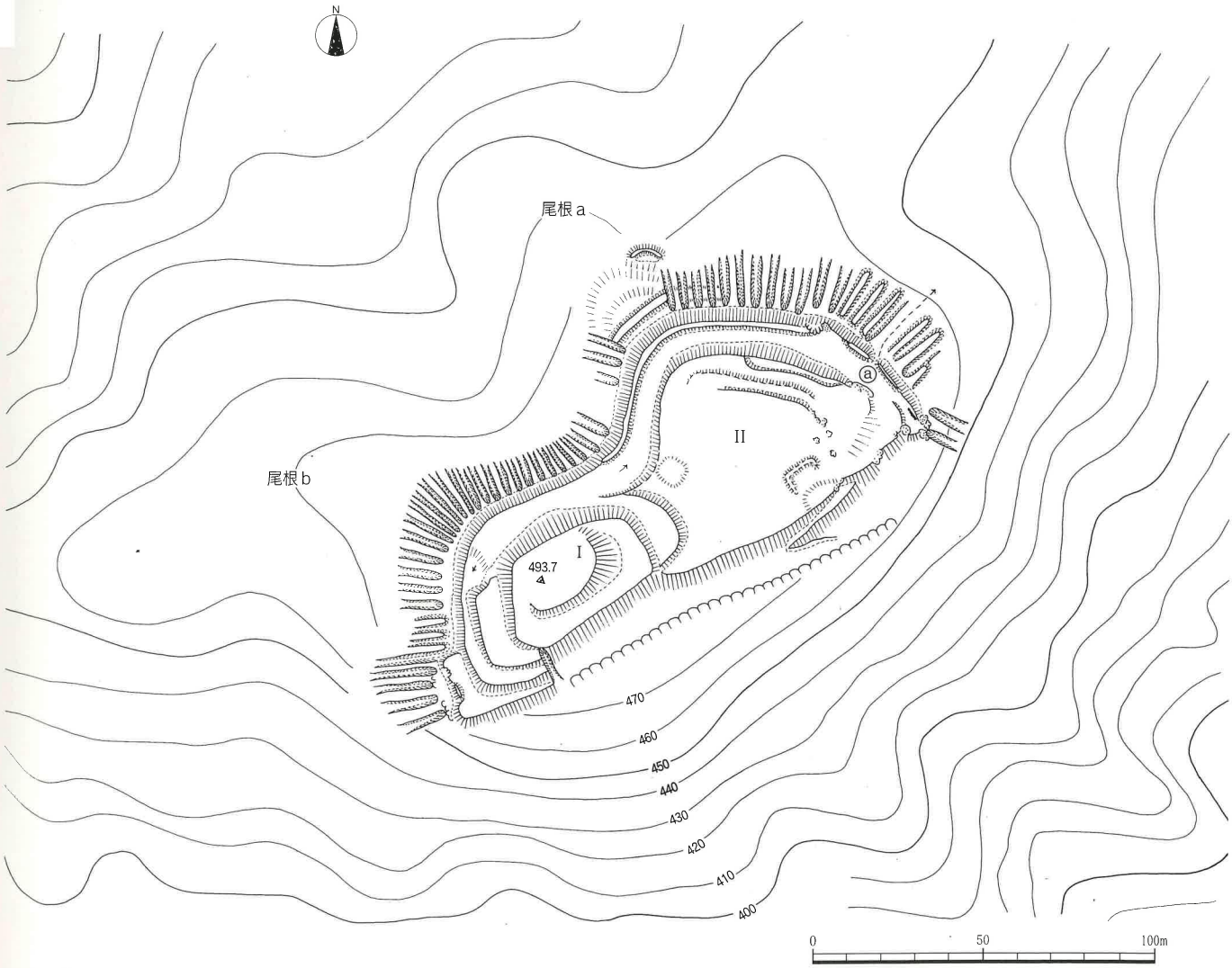
《現状》雑木、あるいは植林であるが、平成３年の台風19号の風倒木により西側半分は地形の確認が困難な状況となっている。

《構造》急崖の南側を除く三方には畝状竪堀が取り巻き、その数は54条と大分県でも妙見岳城や野田城と並んで数が多い。北側では畝状竪堀は一部横堀となる帯曲輪と組み合わさって下っている。尾根aは、畝状竪堀を入れる必要が無く、横堀状の帯曲輪のみが現れている。三角点のある主郭（Ⅰ）は東西40m、南北25mの略方形で、中央部が1.5mほど一段高くなっている。周囲には半円状に帯曲輪が取り巻き、その北東側は東側に展開する第Ⅱの曲輪へとつながるスロープとなる。第Ⅱ曲輪は中央部は平坦であるが、東側に行くと下りになり、数段の帯状の曲輪を形成する。最も外側（畝状竪堀の廻る部分の一段上）は、主郭へとつながる横堀が北側半分に認められる。この横堀が後述の虎口部から始まることを考えると、主郭への連絡を意識したものであるのは間違いなかろう。虎口はⓐの部分で、帯曲輪の外側に土塁を設け、途切れた間を入らせる平虎口である。この部分の畝状竪堀の間が広く開いているので、この斜面を登らせるものと考えられる。

主郭部は切岸できっちりと固めるのに対して、そこから一段下る東側の広い曲輪Ⅱは、大きな石が点在するなどほとんど手を入れることなく、北側に通路状の横堀を拵えて、兵の詰める空間であるとともに主郭部に対する一つの大きな虎口受けの空間として機能していた。これは、玖珠郡の野田城（531）と相通じるものがあり、畝状竪堀のあり方などから考えても、時期的に近接したものであろう。

《歴史》『豊後国志』によると「古澤右馬允之據、文禄二年廃」とある。同時代の文書、記録には記載がない。

（小柳和宏）



第17図 烏帽子岳城縄張り図（1/2,000）

【059　ズリヤネ城　下毛郡三光村大字下深水字土居】

《立地》犬丸川の上流域に開ける平野部を望む丘陵の先端付近に立地する。丘陵は宇佐平野との境をなし、宇佐郡と下毛郡との境となっている。標高は71mで、沖積地との比高差は約20mとなる。

《現状》工場によって大部分が失われている。

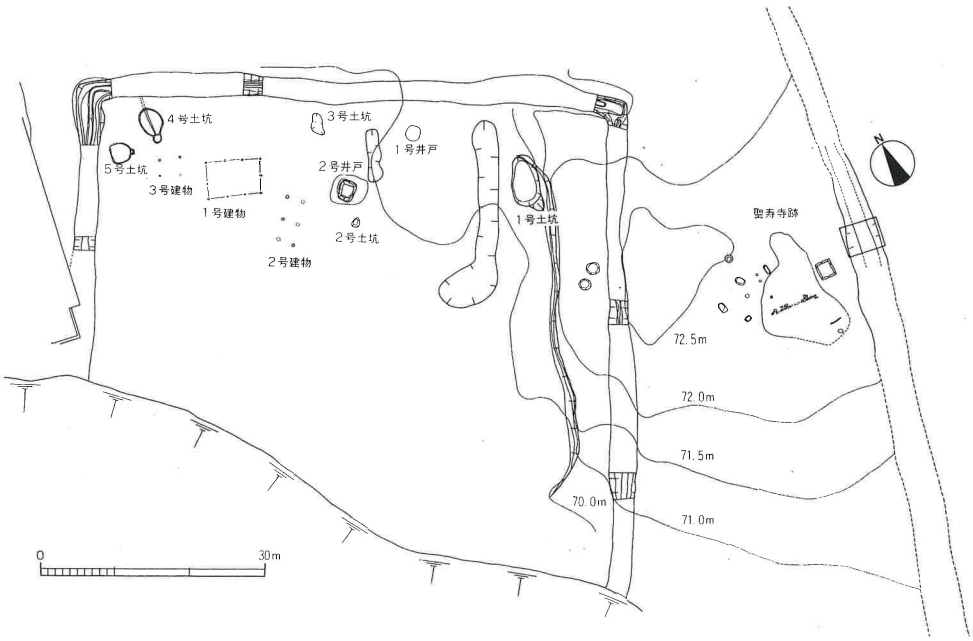
《構造》工場建設に先立ち発掘調査が行われている。現状ではまったく遺構が確認できないので、発掘調査の結果によって構造を把握するしかない。それによると、台地先端部の緩斜面で「コ」字形に溝が検出されていて、東西74m、南北64（＋α）mほどの方形区画を作り出している。溝は、幅2～3m、深さ1.2～1.7mで、箱薬研堀となる。

方形区画の内部からは3間×2間の掘立柱建物跡1棟、井戸2基、土坑4基が検出されている。

出土遺物は、12世紀～16世紀の遺物があるが、15世紀後半から16世紀前半に主体があり、戦国末期まで下るものではない。遺構も大部分がこの時期のものと考えられる。

《歴史》ズリヤネ城一帯の丘陵地は、宇都宮氏の一族である深水氏の本貫地であり、この城も深水氏との関連が考えられる。『豊前故城誌』によると「下深水村城址」は「深水氏代々の居城にして建久七年宇都宮宗房の四男、大和守信房の舎弟深水伊賀守興房築く（中略）城は天正十六年破脚せりと云ふ」とある。（小柳和宏）

参考文献『三光村の遺跡』（三光村教育委員会、1989年）



〈上記参考文献より転載〉

第18図 ズリヤネ城遺構配置図（1/1,000）

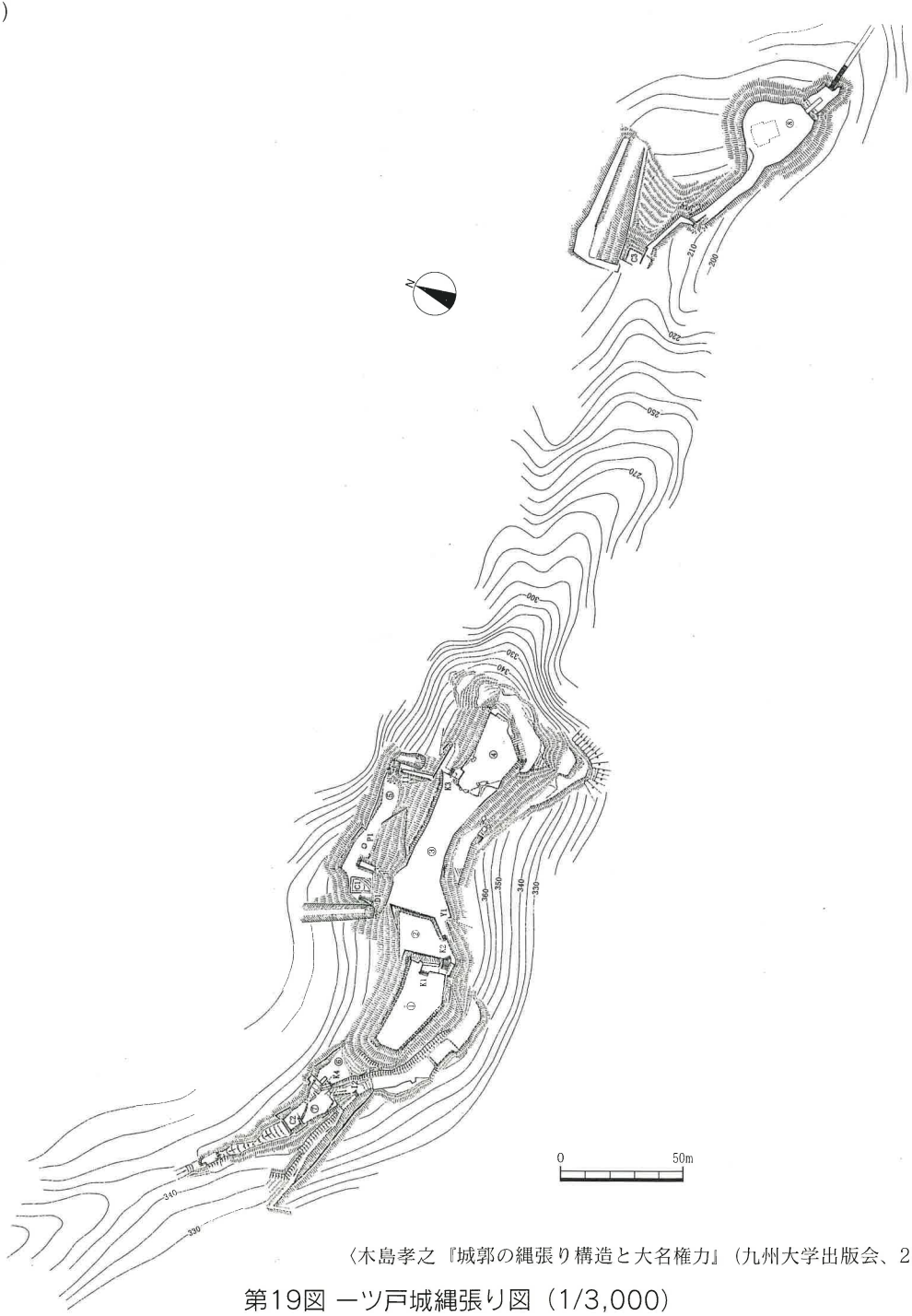
【069　一ツ戸城　下毛郡耶馬渓町大字宮園字城山】

《立地》山国川の上流域に位置する。このあたりは平野が狭く渓谷のような地形を呈するが、その谷を見下ろす比高差220mほどの急峻な山頂部に立地する。山頂部は幅20m、長さ200mほどの平坦部が取れるほどしかない。この川筋は、山国川を遡及し筑前、筑後方面に抜ける重要な交通ルートであった。

《現状》急峻な山頂部にあるため後世の開発行為は入っていないが、石垣の自然崩壊は進んでいる。

《構造》最も高い主郭から三段にわたって曲輪を作り出す。各々の虎口も明確で、主郭には二折れの内枡形虎口が、第三の曲輪にも同様の虎口が見られる。第2曲輪の北側下には両端を竪堀と土塁、石塁で固めた腰曲輪があり、瓦が散乱する櫓台状の高まりがある。主郭西側は尾根の斜面に対して階段状に曲輪を設けているが、主郭直下の曲輪などに枡形の虎口を設け、先端部には櫓台状の高まりがある。主郭から連なる曲輪群の塁線には石垣が認められ、部分的に崩壊しているものの総石垣であったことが想定できる。

《歴史》最終的な姿は、慶長5(1600)年豊前に入部した細川氏の支城となった段階のものである。その段階で総石垣で、瓦葺きの建物が建つ近世城郭に作り直されている。豊後との境界に近く、さらにその先に筑後があるという要地であったことが、このような急峻な山城を近世城郭に作り直す要因であったのであろう。中世段階では、宇都宮氏一族の中間氏の城として機能していたが、天正15(1587)年の黒田氏入部に伴い傘下に下り、黒田氏転封に伴い慶長5年に同地を去った。(小柳和宏)



〈木島孝之『城郭の縄張り構造と大名権力』(九州大学出版会、2001)より転載〉

第19図 一ツ戸城縄張り図 (1/3,000)

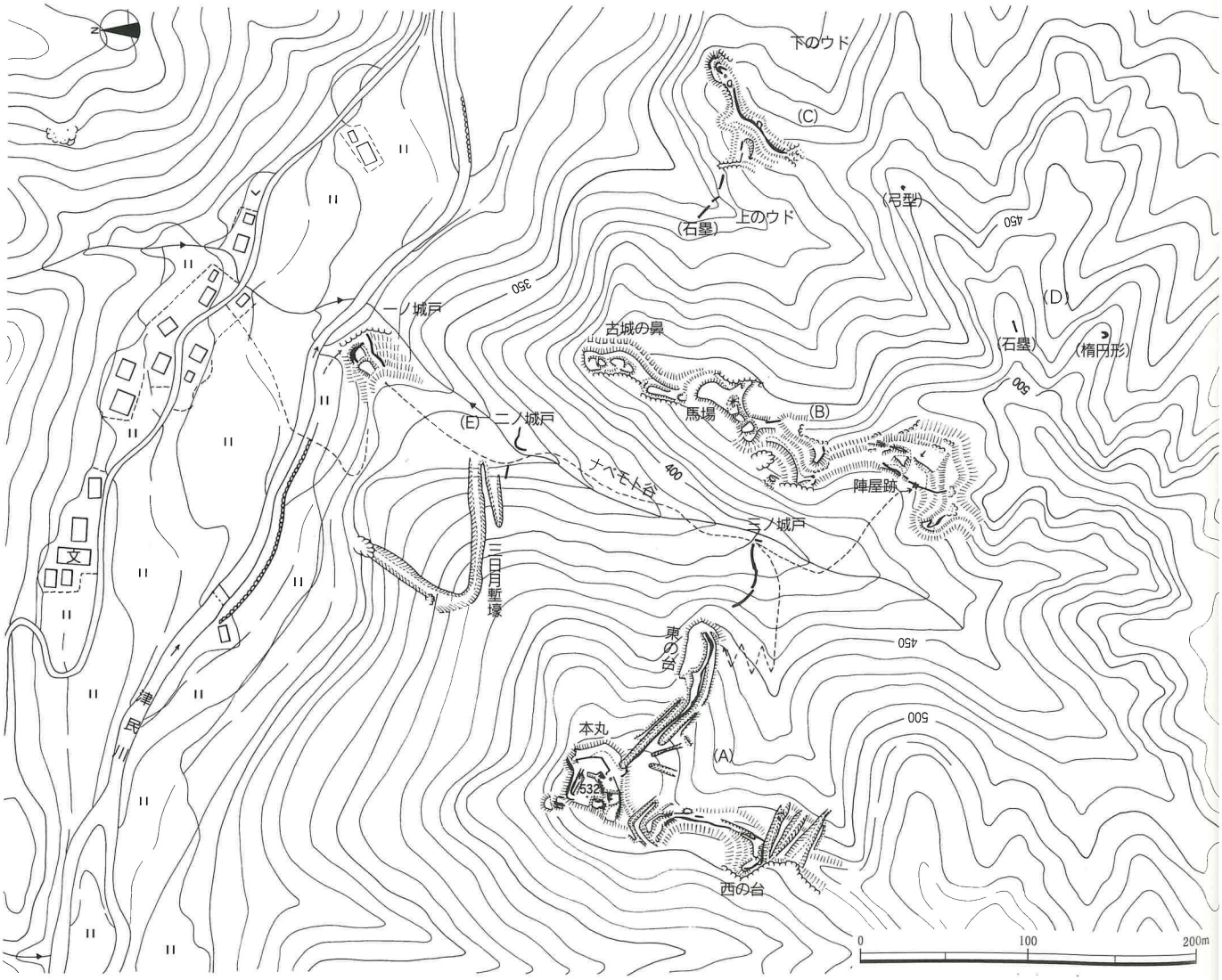
【078　長岩城　下毛郡耶馬渓町大字川原口】

《立地》　耶馬渓溶岩によって奇岩を織りなす、するどく切り立った山塊に立地する。麓の集落との比高差は、最高所で230mあまりある。北に津民川を挟んで英彦山から連なる標高1,000m級の山々がそそり立ち、その向こう側（北側）は宇都宮一族城井氏の本貫地である城井谷などがある。

《構造》　遺構は東西500m、南北480mという広い範囲に広がる。しかし、遺構は次の五カ所のエリアに分けて考えることができる。通称「本丸」、「西の台」、「東の台」と呼ばれる長岩城の中核部分（A）、「古城の鼻」から「陣屋跡」の一帯（B）、「上のウド」、「下のウド」と呼ばれる谷に挟まれた尾根上（C）、さらにそこから山を登って痩せ尾根上に石積み遺構が点在する地帯（D）、そして城郭への入り口部を形成する「一の城戸」、「二の城戸」、「三の城戸」が並ぶ「ナベモト谷」（E）の5つのエリアである。

先ず、この城郭へ接近するには三本の谷、すなわちナベモト谷、上のウド、下のウドから入るしかない。唯一山の稜線を登ることのできる斜面には「三日月塹壕」と呼ばれる長大な竪堀が掘られている。谷部の内、下のウドからは「弓形」や「楕円形」の石積み遺構のある尾根上には登ることができないので、実質的には前二者からしか主郭部（Aエリア）に接近できないことになる。上のウドには谷の途中に高さ2m弱の石塁が約30mあり、城戸を形成している。ここを突破しても古城の鼻から馬場がある尾根上にはかなりの急崖をよじ登ることになる。最も難なく本丸直下にたどり着けるのはナベモト谷である。そのため、ここには一から三の城戸が設けられる。一の城戸は津民川に向かって突出した尾根の先端部にあり、小さな二段の曲輪の先端を石塁で取り巻き、片側（南側）に直線的な石塁を設ける。石塁の途切れる所が虎口になる。虎口の先は斜面となり、川は徒渡りできるほどの瀬となっている。二の城戸は谷川の両側に高さ1.5～2mほどの石塁が築かれる。三の城戸も東の台から下る石塁が城戸を形成している。ここを抜けると道は左右に分かれ、右の谷を登ると本丸へ、左の谷を登ると陣屋跡に至る。

本丸に登るには、先ず東の台に取り付くことになる。ここは本丸から下った尾根の先端で、東西30m、南北12mの平場があり、南側には本丸から下る石塁と土塁がある。尾根斜面の石塁は両側に土塁を有し、さらにその外側に土塁を持つ。登城ルートは本丸直下につながる竪堀が想定できるが、かなりの急斜面になる。登り着いた本丸のある山頂は、1,000㎡ほどの広さがある。遺構は、南西角に櫓台状の高まりをもつ主郭の回りを幅7～8mの帯曲輪が取り巻き、さらに東側には傾斜を持つ



第20図 長岩城全体縄張り図（1/4,000）

第21図 長岩城主要部縄張り図（1/2,000）

幅10mほどの帯曲輪を回す。主郭北面、帯曲輪東面には高さ約2mの石垣を二段に重ねた石垣がある。主郭南側は土塁と切岸である。石垣は、この山に産する板状の安山岩を平積みにしたもので、石塁もまったく同様に平積みしたものである。ただし、石垣、石塁とも、昭和年間の修築により一部積み直しが行われており、積み方が単純なだけに当初のものと積み直しのものと厳密に峻別するのは難しいが、当時の記録からしても全面的な積み直しは行っていないようであるので、基本的な部分は当初の姿を留めている可能性が高い。そうすれば、主郭部は単純な平虎口を持つ曲輪を同心円状に配した構造となる。

本丸から南西に延びる尾根を三本の掘切で遮断し、その先の鞍部になった細尾根には両側に石塁を設け通路を確保している。そして、その先には通称「西の台」と呼ばれるピークがあり、狭い平坦面の西側を石塁で固める。その「西の台」の南側の尾根は三本の掘切があり、完全に遮断している。

Bのエリアの南端には「陣屋跡」とされる石塁で遮断された谷がある。谷は100㎡ほどがほぼ平坦で、谷奥に向かって傾斜がきつくなる。谷を見下ろす西側尾根の先端には石塁を先端部で半円形に丸めた施設がある。ここから斜面の通路を通って北に向かうと石塁の途切れた虎口を入り、通称「馬場」からつながる細長い曲輪に出る。ここから片側に石塁のある尾根を北に進むと「馬場」に至る。比較的広い平坦面があり、中央付近に土塁の痕跡が認められる。ここから更に北に進むと「古城の鼻」に至る。ここは切岸で小さな曲輪が作られており、石塁は認められない。

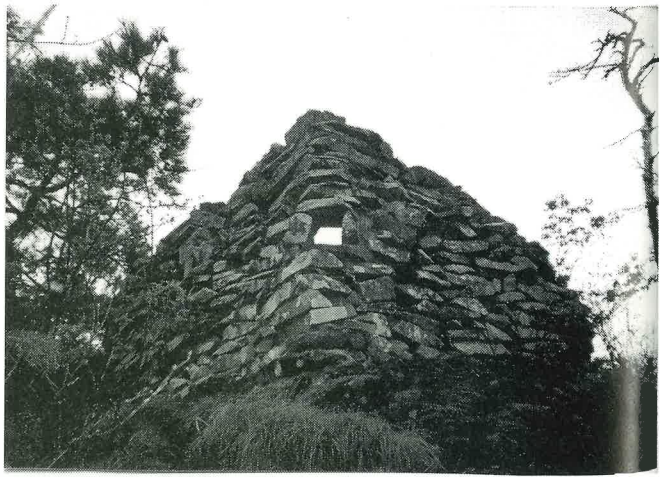
Cのエリアは「古城の鼻」の東の尾根で、細尾根の上に石塁が認められ先端部で馬蹄形に石塁が廻る。この尾根上にはDエリアからは行く事ができず、上のウドから登ってくるしかない。

Dのエリアは二箇所に石積みの「櫓」状施設が、一箇所に石塁が認められる。ここでは石塁で防御ラインを形成することなく、尾根を登ってくる道を点で遮断している。楕円形に高さ1.2mほどに積み上げた石積みには従来「銃眼」といわれた穴が３箇所空いているが、銃眼ではない。外を広く見渡せるものでもなく、用途は不明といわざるを得ない。弓形に1.5mほど積み上げた石積みには一箇所の「銃眼」があるが、やはり銃眼とは言い難い。

《歴史》同時代の史料には城郭の記載はないが、『豊前故城誌』によれば城主は代々野仲氏で、弘治2（1556）年に大友家に背き大友軍から長岩城が攻撃された、という。さらに天正16（1587）年には豊前に入った黒田長政に攻められ落城したという。

「古城の鼻」と呼ばれる所には石塁もなく、また「本丸」から西へ延びる尾根線の掘切など、部分的に古い段階の城郭の姿を窺う事ができる。そのような一般的な城郭が、最終的に石を多用した城郭に改変されていったのは、防御ラインの構築ということからしても、天正16年の対黒田氏に備えた時期であった可能性が高い。ナベモト谷を挟んで西側の山には土の堆積があり堀切も十分掘る事ができるが、東側の山には土の堆積がほとんど無く、特に尾根上は岩盤の露出した状態であり、堀切よりも石塁、あるいは石積みの施設で守った方が効果的であったこともこのような特異な城郭を作り出していった要因と考えられる。（小柳和宏）

「東の台」から「本丸」に伸びる石塁



石積み「櫓」

【081　馬台城　下毛郡耶馬渓町大字福土】

《立地》標高375mの独立峰の山頂に位置する。麓の集落からの比高差は約270mである。山頂は南北2カ所のピークがあるが、その内南側の広い平坦面（約4,000㎡）を有する山頂部に遺構はある。

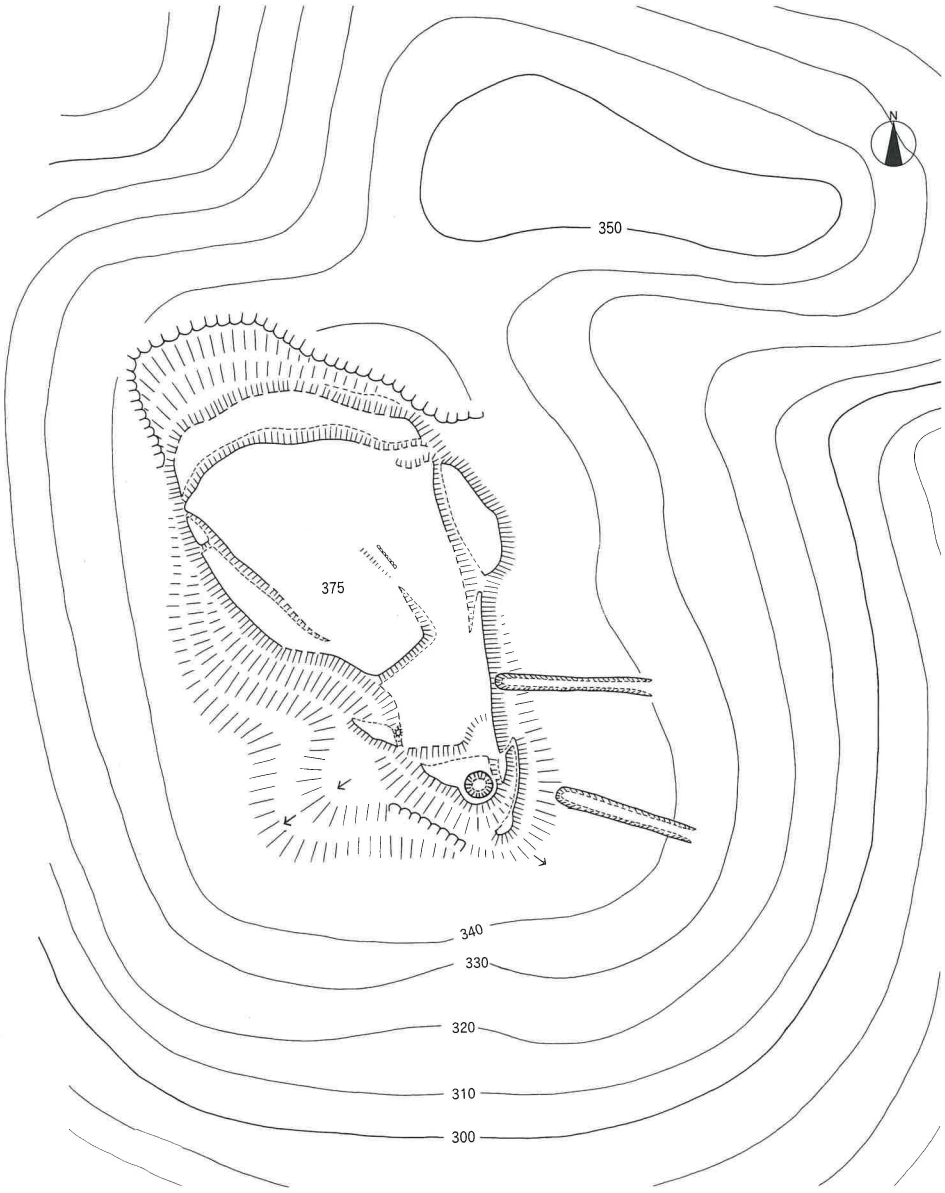
《現状》山頂部北側は平成3年の台風19号による風倒木被害がひどく、ほとんどの木が倒されているため、遺構の詳細な観察ができなかった所がある。そのため、一部石列が確認されてはいるが、それがどのように伸びるか、など今後の調査にゆだねた部分がある。その他は、炭窯があるなど後世の活動が予想されるが、基本的には良好な残存状況である。

《構造》基本的な構造は、急崖があるためほとんど明確な遺構を形成しない北側に対して、南側は先端部に塹壕状の径６mほどの落ち込みを土塁で囲む遺構を配し、その南側直下に小さな曲輪を設ける。さらに東側斜面には独立した竪堀を２本入れている。これは、この城の虎口が南側の先端部付近にあったことを予測させるが、明確な虎口遺構は形成されていない。可能性としては、矢印を１本伸ばした尾根線から登ってきて、小さな曲輪に取り付いた後、現状で獣道状に確認できる道を通って上位の曲輪に登ったことが考えられる。

なお、主郭部は風倒木がひどく詳細がわからない部分が多いが、北側と西側、東側の三方に帯曲輪状の平場を有し、ほぼ中央部には長さ7～8mにわたって石列の痕跡が確認できる。また、周辺部の切岸は弱い部分がある。

《歴史》弘治3（1557）年、野仲十郎は豊田対馬守を殺害し、万（馬）台城を乗っ取った（文書番号326）。この万台城は、妙見岳城と並んで大内氏にとっては重要視していた城であった（文書番号319）。大内義隆が天文20（1551）年に死んでからは、大友義鎮の弟を大内義長として大内家に入れ「御両家御一体之儀」が保たれたが、この万代城の乗っ取りがそのバランスを崩すのではと心配されたが、いささかも緩みは無かった（文書番号326）。しかし、特に「諸境目之儀」について堅く下知を加えたことでわかるように、この万台城は、日田方面（豊後）での豊後国境を押さえる意味を持っていたと考えられる。

大内氏が弘治三年に滅んで豊前の支配が大友氏の手に入ると、おそらく境界の城であった馬台城の役割は終えたものと考えられる。竪堀を2本持つだけの比較的単純な城の縄張りは、16世紀中ごろ以前のひとつの形としてよいであろう。（小柳和宏）



第22図 馬台城縄張り図（1/2,000）

0　50　100m

【086　古庄屋遺跡　下毛郡本耶馬渓町大字落合字古庄屋】

《立地》周防灘に注ぐ山国川の上流に位置し、その支流である西谷川と東谷川が合流する地点の両河川によって三角形状に形成された段丘上に立地する。

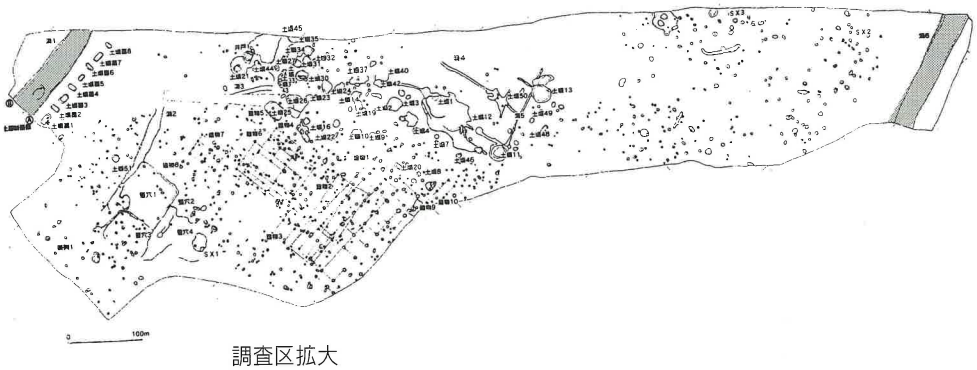
《現状》水田であったが、道路建設に伴って発掘調査され遺跡が確認された。

《構造》西は山、東は川によって限られた地形の中で、南辺と北辺を幅3m前後、深さ0.3m前後の溝で画し、ほぼ方一町規模の居住域を形成する。発掘調査が全体に及んでいないため全体の様相は不明であるが、概ね主要建物を南東部に配置した館の構造が把握できる。主屋と考えられる四面庇を持つ3間×6間の総柱建物をはじめ10棟の掘立柱建物や井戸、土坑などが検出されている。また、南側の溝の内側で、主軸を交互に違えながら溝と平行に配置された８基連続する土坑が確認された。調査者は土壙墓と考えているが、溝の内側では他に遺構が無く土塁の存在も推定できる事から、その性格の解明については今後の類例の増加に期待したい。この遺跡は、出土遺物より12世紀末から13世紀前葉に成立し、14世紀前葉には溝が埋没している。

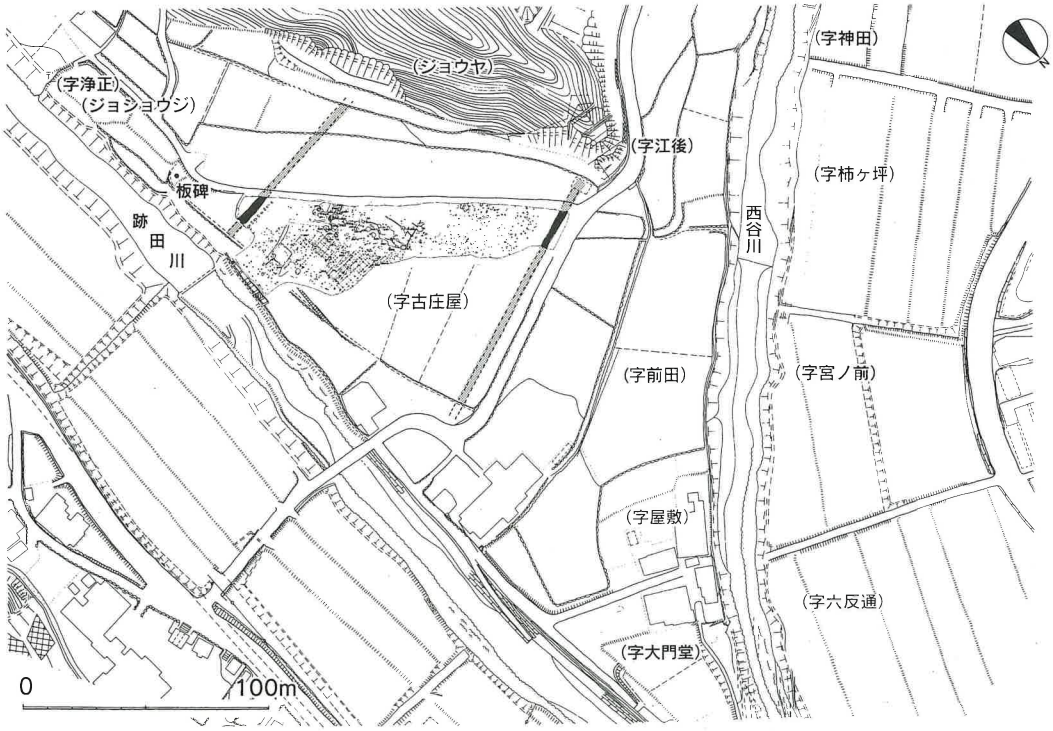
《歴史》直接的にこの遺跡の性格に係わる史料は残されていない。しかし、調査者は鎌倉時代になって西国に下ってきた御家人の一人宇都宮氏の一族が、地域の「支配機構の中枢として」築いたのではないかと推測している。

（小柳和宏）

参考文献『古庄屋遺跡』（大分県教育委員会 2002年）



調査区拡大



〈上記参考文献より転載（一部改変）〉

第23図 古庄屋遺跡遺構配置図

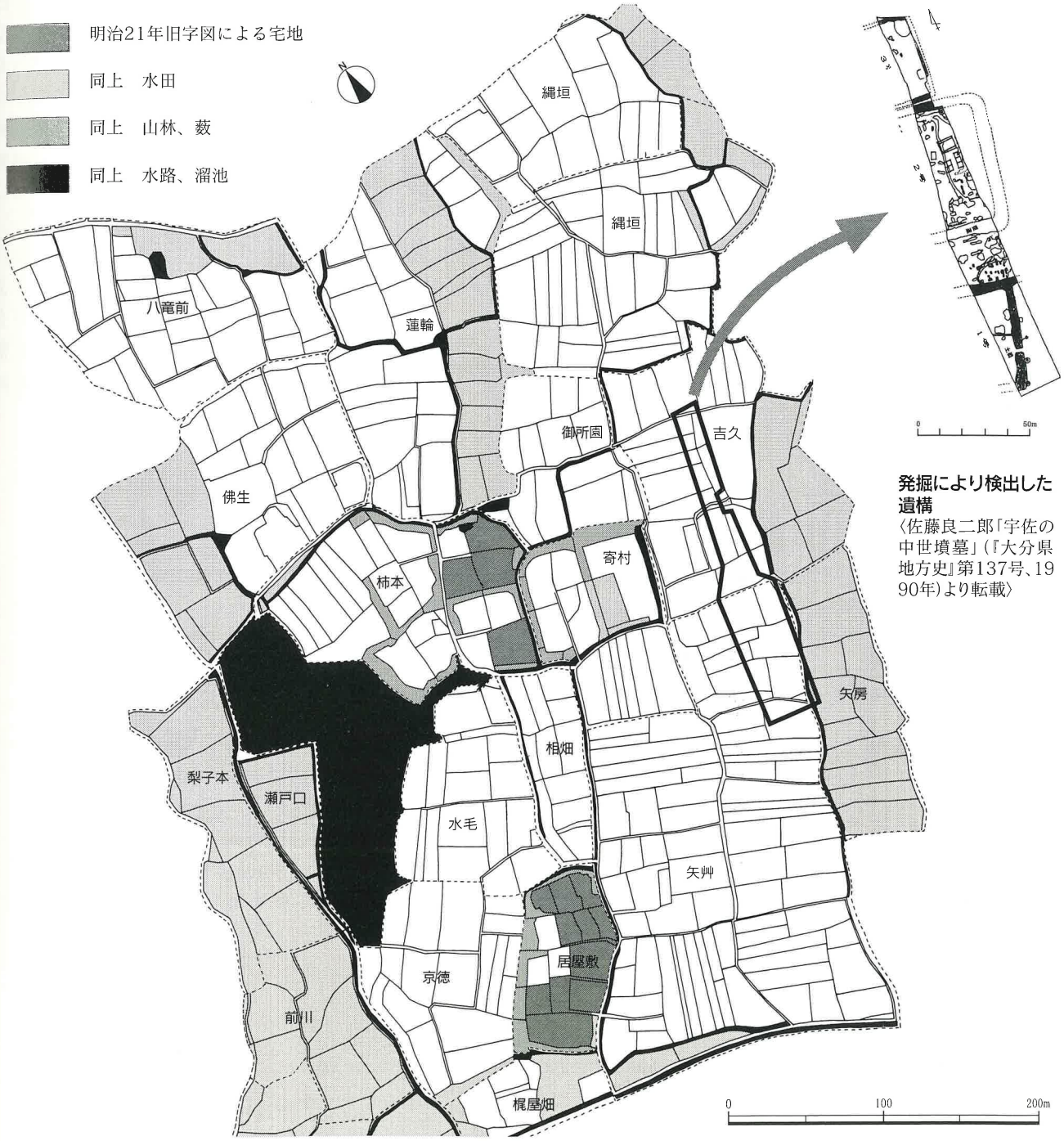
【090　吉久遺跡　宇佐市大字下敷田字吉久ほか】

《立地》宇佐平野の南端近くで、五十石川の右岸に形成された微高地上にある遺跡である。微高地は南北に長く、南から上敷田、中敷田、下敷田の各集落が形成されている。この吉久遺跡のある場所は下敷田にあたり、沖積地からの比高差は＝mほどである。

《現状》畑や宅地となっており、一部は道路工事によって発掘調査の後壊されている。

《構造》旧字図によると小字「寄村」、「御所園」あたりに屋敷区画を示すと思われる方形の区画がある。それは、一部「吉久」や「柿木」にかけて広がっており、さらに南にある「居屋敷」にも認められる。これらの区画を示す地割りは、現状で一部溝状となって残っており、本来堀が形成されていた事を窺わせる。実際に、「吉久」の一部が発掘調査されており、14世紀に遡る堀で区画された3区画の施設が検出されている。

《歴史》天正14年の「阿曽沼元秀感状」（文書番号764）にある「天津城」が吉久遺跡のことを指す可能性があるが、確証はない。この吉久遺跡は、鎌倉時代に宇佐平野に点在したムラが、南北朝期になって集村化した結果出現した「集落」の上に、戦国期末の防御的集落が重なっていると考えられる。その防御的集落の中核部分が「天津城」と呼ばれた可能性もある。（小柳和宏）



第24図 吉久遺跡周辺小字集成図（1/4,000）

【091　高山城　宇佐市大字麻生字高山】

《立地》伊呂波川上流部に接する山頂上及びその下方の鞍部上などに立地する。谷間の平野部との比高差は約400m。東側から伸びた尾根の先端部分に当たり、院内及び下毛より宇佐平野へ抜けるルートの要衝となる。城からは宇佐平野及び豊前海を一望にすることができる。

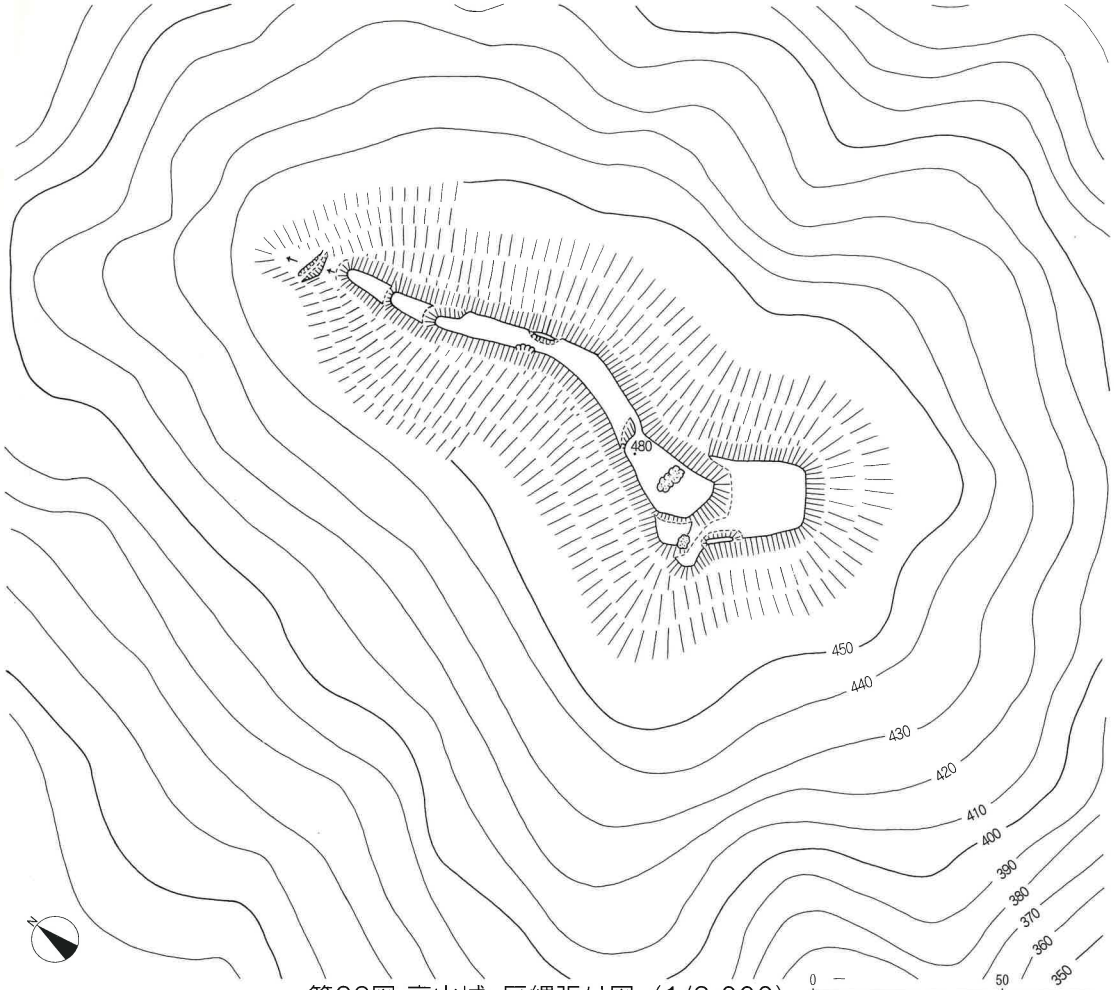
《現状》城跡のある山林部分は下刈りのされた自然林であり、その下方の傾斜のやや緩やかな斜面には杉や桧が植林されている。遺構は高山山頂部（本城）と、その南東側裾部の尾根上（支城）との２カ所に存在している。宇佐市内では数少ない山城で、保存状態も良好である。城は集落との比高差が大きいことなどにより詰城として使用されていたものと考えられる。「麻生老人憩いの家」が存在する場所の通称が「陣内」と呼ばれていることなどから、平時の館跡aがあった場所の可能性が考えられる。

《構造》高山山頂部の城跡は南北方向に約160mと細長いものである。主郭部は25×14mの規模をもつ略５角形を呈し、北東側に虎口をもつ。主郭の南東側には20×19mの規模をもつ曲輪などが構築されている。虎口北側には幅６m、長さ60mの細長い曲輪が伸びている。その先端には３段の曲輪と幅３mの堀切が構築されている。

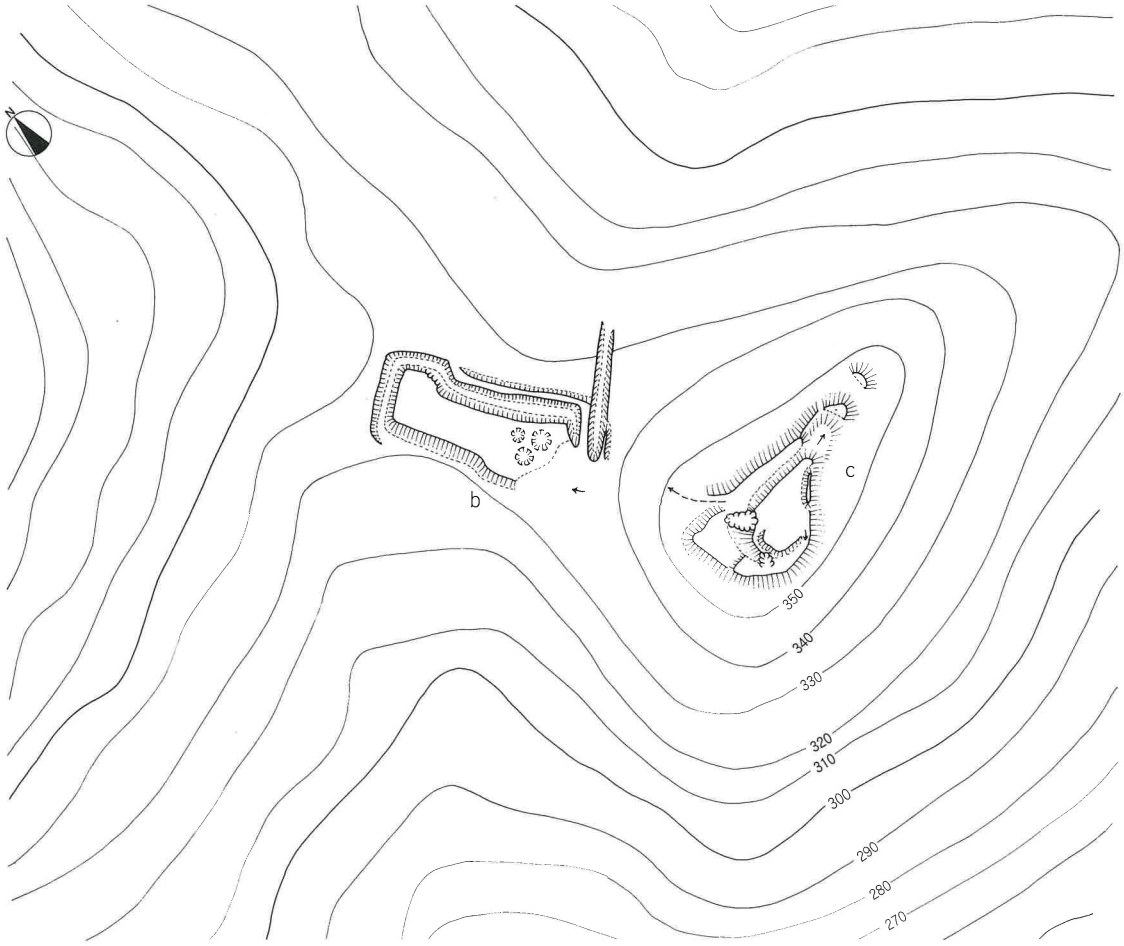
山頂部及び斜面部分には直径２m以上の岩が多く露出しており、その上部が小規模な曲輪として利用できるほどである。支城cは本城aより120mほど低い位置に存在し東西52m、南北25mで略５角形を呈している。主郭部は25×14mの規模で、北西側に虎口を構築されている。主郭は東側以外の３方向に腰曲輪を配している。その北辺部に出入口を設置し、鞍部の曲輪bへと続いている。南北に伸びる鞍部には幅10m、長さ42mの平場が造られている。その両先端部分の幅は15mと広くなっており、櫓などが存在していた可能性をうかがわせる。平場の東側及び北側には幅５～７mの横堀が巡っている。この横堀は市内の高森城や山本切寄、光岡城などと同様の屈曲を有している。横堀南東側には幅５m、長さ37mの竪堀が１条掘られている。竪堀と横堀の間から横堀の東側に屈曲して伸びる幅２mほどの土塁は本城aと支城cとをつなぐ通路として使用されていたものと考えられる。

《歴史》『豊州城堡記』などによると、藤原氏末葉の内尾三郎伊家が応安2（1369）年に築城したとある。また、嘉吉年間（1441～3）になると麻生氏の所領となり大内氏に属した。明応7（1498）年頃には大友方に与するようになり、天文年間（1532～54）には「内薗」に土城を構えたとある。弘治３（1557）年には毛利勢の攻撃を受けている。永禄９（1566）年には田原親賢との確執が生じ高山城に盾籠もったため、大友方の総攻撃を受け落城した。（文書番号 資料編1 148、368、369・資料編2 補遺15）この麻生攻めの際に両軍が構築した砦や陣の跡については、一部が確認できるのみである。（林一也）

第25図 高山城遺構配置図（1/3,000）



第26図 高山城a区縄張り図（1/2,000）



第27図 高山城b、c区縄張り図（1/2,000）

【095　宮熊城　宇佐市大字宮熊字城】

《立地》宇佐平野西部を流れる伊呂波川西側に存在する微高地の北東端部に立地している。城跡の北側600mで現在の海岸線となっている。城跡は集落の東側に突出した微高地に構築され、集落との比高差は3mである。城跡の周囲は水田となっているが、城が存在していた当時は入江または湿地帯であったと考えられる。

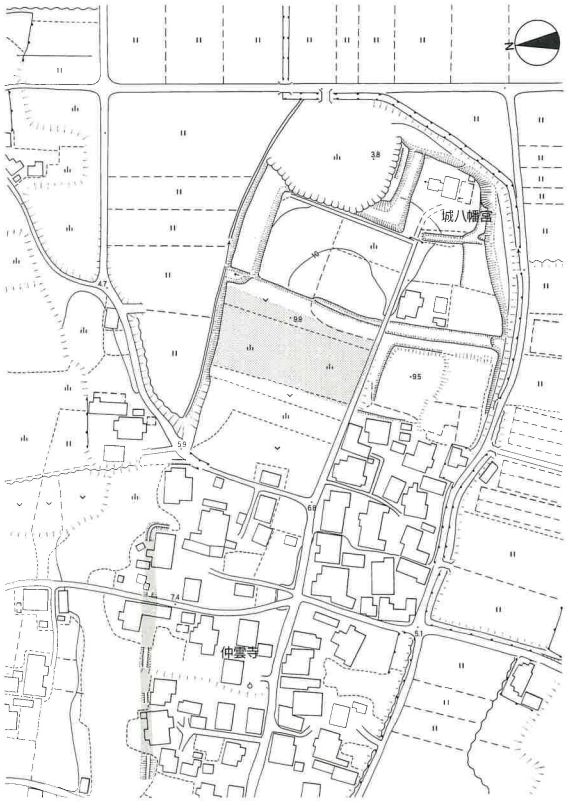
《現状》城跡の北東端部は昭和56年11月以前の土取りにより削平を受けている。また、中央北側の畑でも土取りが実施されていたため同年11月より一部発掘調査を実施した。城跡内部には城八幡宮や民家が建てられているため西側の範囲については不明瞭であるが、聞き取り調査などにより調査区西側の畑については同じ高さであったことが確認されている。城跡西側の集落北縁部には、城跡の北西部より伸びていたと考えられる土塁が部分的に遺存しているが、これは潮風より集落や農作物を守るためのものである可能性が想定される。

《構造》城は東西210m、南北150mの規模をもち略長方形を呈している。その縁辺部は切岸となっている。城内部は堀切や横堀などで区画している。主郭部分の西側には南北方向に延びる幅7m、長さ150mの堀切が掘られており、その南端部では2.5m下方に狭い平場が遺存している。これは社地の東側や南側の切岸下方の平場とつながるものであれば腰曲輪の可能性も考えられる。社地北側には幅9mの横堀が40mほどあるが、その西側は直角的に北側に折れ30mほど伸びている。その先端部分は土取のため消失している。また、社地西側には幅4m、長さ30mの南北方向の横堀がある。しかし、鳥居部分については北側の横堀につながっていたのか土橋があったのかは不明である。主郭北側の一段低い部分には12×60mの平場があるが、これも社地の南側などにある腰曲輪の可能性も考えられる。

《歴史》宮熊城西側の畑の地下げに伴う発掘調査では、築城以前である13～14世紀代の土師器や瓦器・青磁・白磁などを伴う土坑や土師器・和鏡を伴う土坑墓、柱穴群などが検出された。また、表採遺物として青白磁の合子が出土している。築城時の遺構としては堀切に平行し南北方向に伸びる柵列が1条検出されたのみであった。

『萩原家系図』によると、大永3(1523)年に萩原綱雄が豊後萩原より宇佐の広山荘に入り、宮熊に城を築いて八幡宮を造営したことや、その子鎮次が天正13(1586)年に敷田に築城したことなどが記されている。『豊州城堡記』では、萩原綱雄により応永中(1394～1428)に築城され、綱重が大内盛見に属し宮隈と敷田の地頭職となったことや、武綱の舎弟重純が敷田に土井城を築いたこと、大永6(1526)年より重純の子重蔵が代官職になった。弘治元(1555)年より鎮次と鎮宗が大友方となり敷田土井城に移った、などと記されている。この両資料の記載内容には食い違う点が多く見られる。

(林一也)



昭和56年発掘調査区

0　100　200m

第28図 宮熊城全体縄張り図（1/4,000）

第29図 宮熊城周辺小字集成図（1/4,000）

【099　荒木城　宇佐市大字荒木字御所園ほか】
【120　宇佐公通館跡　宇佐市大字森山字任補】
《立地》四日市から流れる川の左岸に展開する微高地上にあたる。微高地も小さな谷によってほぼ南北方向に画されており、そのほぼ中央の微高地に宇佐公通館跡（②）があり、その東の微高地の集落に荒木城（B）がある。
《現状》宅地や水田になっていいるが、水田については圃場整備事業によって大きく改変されている。
《構造》宇佐公通館は、平安時代末期に平田井堰水路を開削し、平家物語にも登場する宇佐宮大宮司である公通の館跡とされる遺跡で、現在は安楽院という寺院となっている。寺の回りには幅３mで高さ２mほどの土塁が巡る。前記した宇佐東西道に南の一辺が接しており、宇佐東西道との強い関係が窺える。また、現在の館跡は小字「任補」にあるが、宇佐東西道を西に行くと小字「塔ノ本」と「西ノ門」、東へ行くと小字「東ノ門」があり、現状で確認できるよりもさらに広い範囲に何らかの施設が展開していたことを想定させる。

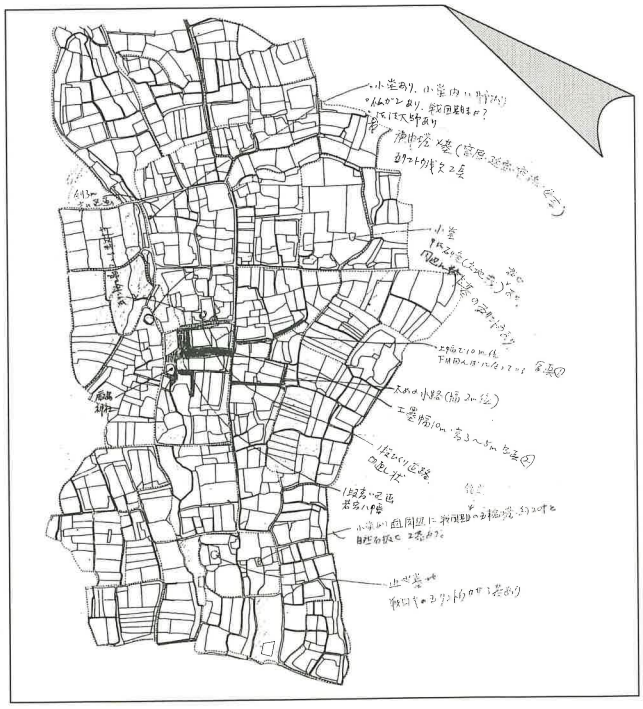
また、宇佐東西道を挟んでやや東寄りには小字「左衛門太郎」という区画があり、その南側には、真宗寺院である「教覚寺」と、さらにその南には門前の市の存在を示唆する「市場」や「横市」がある。

さらに、教覚寺と谷を挟んで東に位置する荒木の集落は荒木城（①）の跡と言われている。現状では小字「西屋敷」の東辺に土塁が確認できるのみで、他に城郭の痕跡を示すものはない。乙咩氏に係わる墓地や神社、寺院などがあり、乙咩氏を村落領主とする防御的な屋敷群が形成されていたと考えられる。
《歴史》宇佐平野の水田化に大きく寄与した平田水路の掘削に係わり、宇佐宮の盛期の大宮司であった宇佐公通に係わる伝承がこの地にあるが、現状で残る宇佐公通館は土塁の規模などから、平安時代まで遡るものではない。しかし、「左衛門太郎」も含めて、周囲に方形区画が連続する事もなく、集落に埋没してしまう館ではないのは成立時期の古さを表している可能性もある。（小柳和宏）

＜＜登城余話＞＞

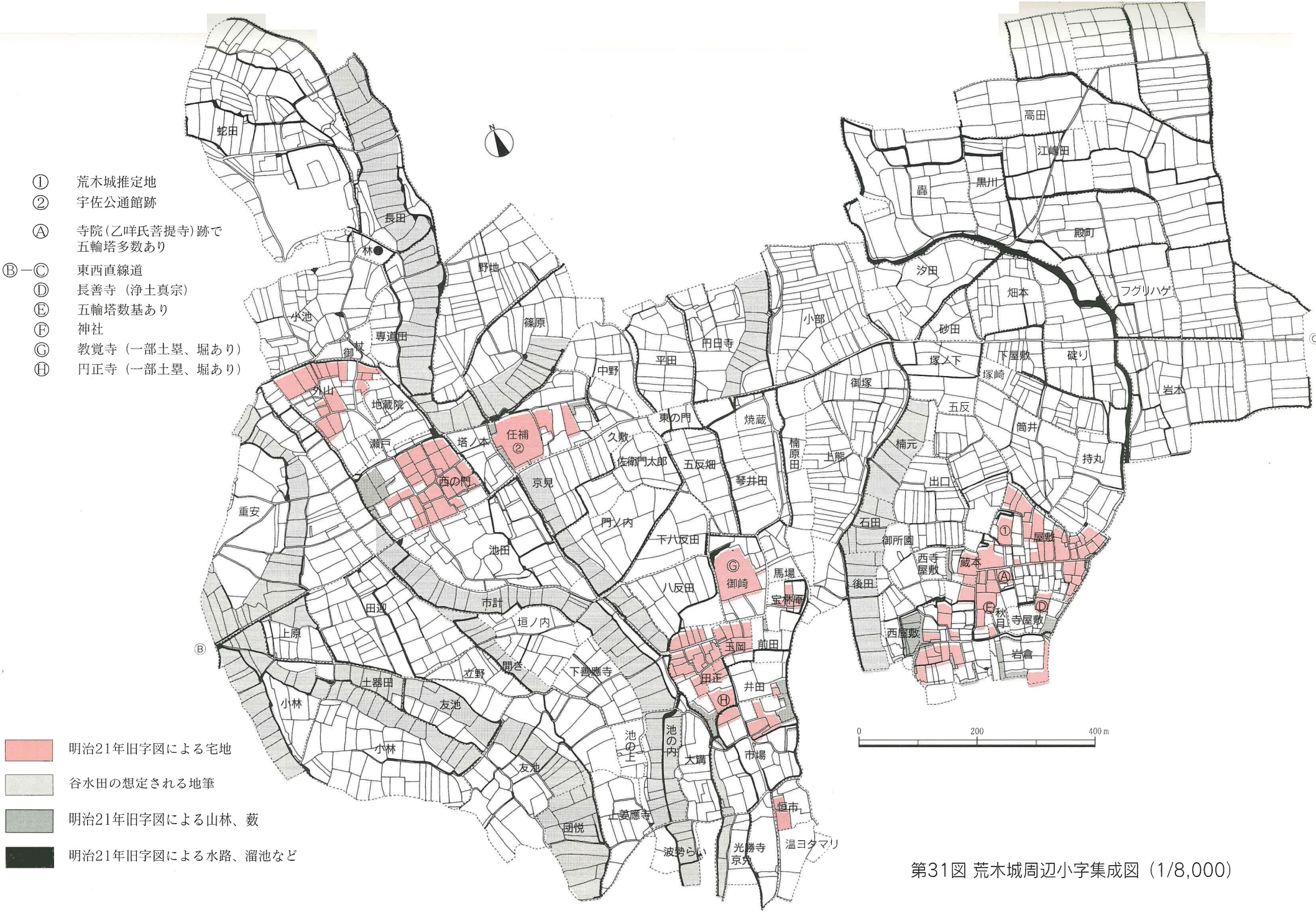
大分県は山がちな地形が大勢を占め、平野が少ない。そのため、城郭調査の多くはイコール登山ということになる。そのような中で中津平野と宇佐平野は“広大”な平野で、逆にこの地では集落の近辺に「山城」を作るような適当な山が無い。調査開始前には「山城」が無くてこの地の調査は楽だ、と考えていたのだが、そんな事はなかった。足を棒にして延々と歩かなくてはいけない。しかも、その事前準備は結構大変なものだった。

平地城館の調査はまず「地籍図」で、というのが一般化しているが、今回の調査でも大いに役立った。今にも破れそうな和紙の旧字図を倉庫から引っ張り出してもらい、ある時は貸し出してもらい、またある場合は役所の一部屋を借りて撮影機材を持ち込んでマイクロ写真を撮影した。そして、マイクロ写真を印画紙に2,000分の１に縮めて焼き付けた。こうすることによって、いつでも必要な時に必要な部分を簡単に取り出せ、しかもかさばらない大きさで集成作業ができるようになったのである。先ず、平野を歩く前に字図の貼り合わせを、を合い言葉に来る日も来る日も字図を貼り合わせる作業が続いた。そうすると、今では圃場整備で一面均等な水田で覆われ尽くした宇佐平野の、微地形が織りなす美しい旧地形が鮮やかに浮かび上がってきた。さらに、今では痕跡すら窺えない「道」までが姿を現した。



大分では、県立歴史博物館が国東半島で中世荘園村落遺跡の調査を継続して行い、旧字図を利用した景観復元も先行して行われていた。そこではっきりしたことは、字図は最低でも一つの水系、あるいは一つの地形のまとまりで見ていくと情報量が飛躍的に増える、ということであった。そこに地目の情報を乗せる事によって断然生きた図になってくる。旧字図が歴史を語りかけてくるようになるのである。

そして、その図面を持って現地に出かけるとまた思わぬ発見に出あったりし、新たな情報が加えられる。左の図面は現地調査を行った時の図面である。残念ながら、すべての情報を載せることは出来なかったが、今回掲載した図面からでもまた新たな発見があるかもしれない。



第31図 荒木城周辺小字集成図（1/8,000）

北

【100　高森城　宇佐市大字高森字本丸、三ノ丸】

《立地》宇佐市の中央部を流れる駅館川下流の東側台地上に立地している。城は駅館川に突出した台地を土塁と堀とで分断し構築されている。主郭部分からは宇佐平野や豊前海及び黒田氏の主城である中津城方面が一望される。城の対岸にある中世の港町である江島津との比高差は約18mである。

《現状》城跡は、農業用水路建設や道路建設・圃場整備・老人ホーム建設などにより部分的な破壊を受けていた。さらに昭和61年から63年の道路建設により中央部が大きく削られることとなった。しかしながら城跡の規模が大きなものであるため、その他は神社地や畑及び杉・桧を植林した山林として使用されており良好な状態で遺存している。確認される城の規模は南北約400m、東西約250mであるが、城の南側にある「上地」集落内には堀割りや鉤の手状の道路などが存在しており、小規模な城下町風の佇まいが伺えるものとなっている。

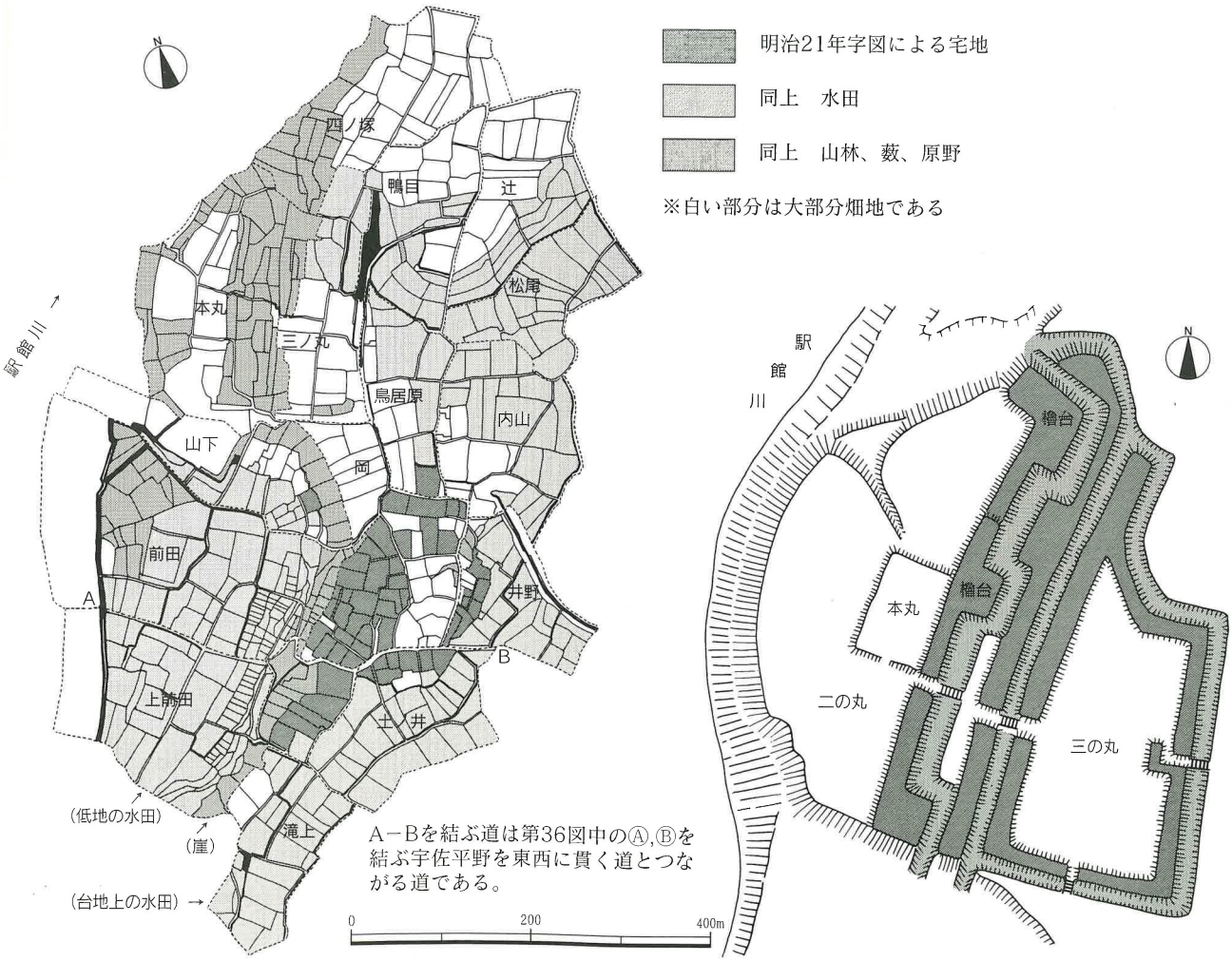
《構造》3条の土塁と2条の堀とで分断し主郭部分（小字本丸）を構築し、その東外側に1条の土塁と堀（外堀）を巡らして大規模な郭（小字三ノ丸）を構築している。道路建設や民間開発に伴う発掘調査では、西側土塁中央部に接した主郭部分において堀を巡らした18×12mの方形の郭が確認された。その堀内部より人頭大以上の多量な自然石とともに鬼瓦を始めとする各種瓦などが出土した。これによりこの部分に天主郭が存在した可能性が伺える。その北西部では20棟ほどの掘立柱建物群や柵列・溝などが確認されている。第一・二土塁は直線的には延

〈宇佐市教育委員会提供〉　第31図 高森城測量図（1/2,000）

びず中央部及び南北の両端部において枡形の食い違いを有している。また、その間にある第一堀内部には土塁と平行して延びる削り出しの小土塁（高さ約4m）が確認されている。三ノ丸地区の土塁中央部より城内部に里道が延びているが、この部分の里道が屈曲しており虎口であることが伺える。第三土塁は2カ所において土塁が構築されていない。このうち北側部分において平成12·13年度の発掘調査により重層構造の大型礎石建物１棟が確認された。この建物は柱間の狭さなどにより櫓跡であることが確認されており、その構造や立地場所などにより注目されるものとなっている。これに対し大手門推定地となる南側部分では平成14·15年度の発掘調査により南側の土塁が壊された痕跡が確認されたのみで、土塁の切れ間は狭かったことがわかる。これにより大手門は小規模なものであったと考えられる。

高森城跡は、その立地や規模・構造などにより豊後方面からの攻撃を強烈に意識して構築されていることがよく分かる。

《歴史》『豊州城堡記』によると「元暦年中（1184～5）に緒方三郎維栄が源義経と呼応するため高森城を造営し、一族家人に籠もらせた。明徳（1390～94）以来は宇奈瀬弾正忠の子孫に代々在陣させた」とあるが、この時期の遺構は確認されていない。『益永文書』によると「天正九（1581）年に大友家が宇佐神宮を焼打にした際に、橋津氏が高森に陣した」とある。『黒田家譜』などによると、天正15（1587）年に黒田孝高（後の如水）が九州平定の恩賞として豊臣秀吉より豊前六郡を配領し、翌年に実弟の利高に一万石を与え高森城を構築させている。その際、宇佐神宮の政所惣校行益永宗世などが反乱を起こし高森城での戦闘で戦死している。これ以降、宇佐地方では在地豪族の反乱はなくなったようである。『豊州城堡記』によると、高森城の留守居役として山本より佐々木助四郎を呼び寄せているが、このことは高森城と同様の土塁の張出し部を有する山本切寄との関係を考える上で注目されることである。また、『黒田家譜』によると、慶長5（1600）年に黒田如水は秀吉亡き後の天下統一を目論み、八千余騎の兵を高森城に終結させ豊後へと出陣し、石垣原にて大友氏を滅ぼしたとある。このように、高森城は関が原の合戦が行われた同時期に歴史の表舞台に登場している。しかしながら、黒田氏に次いで豊前の領主となった細川氏の時世では廃城となっている。（林一也）



第32図 高森城周辺小字集成図（1/8,000）

第33 図 高森城見取り図

〈千田嘉博「築城術」（『歴史群像シリーズ38黒田如水』学研より転載）〉

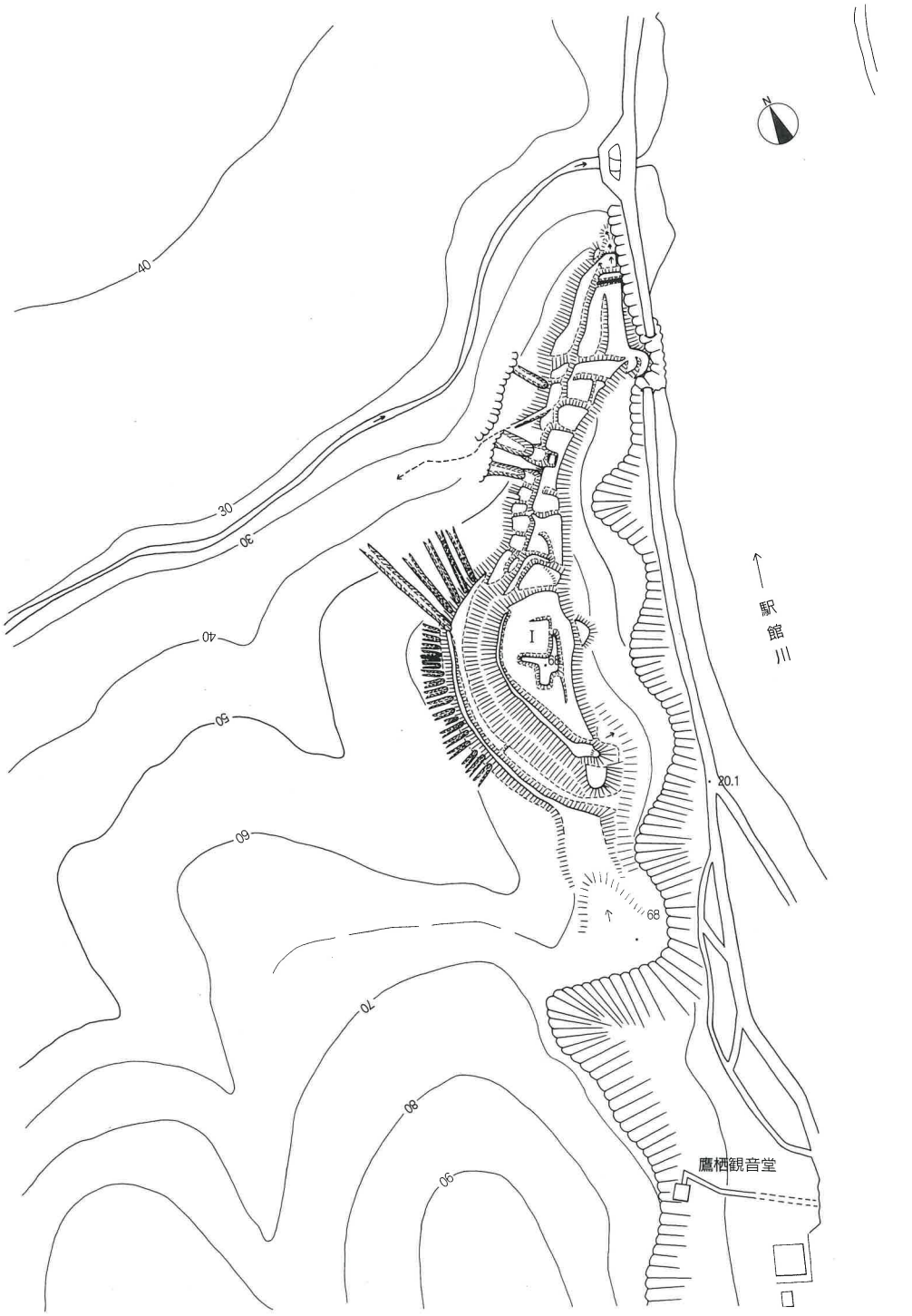
【107　山本砦　宇佐市大字山本】

《立地》 妙見岳から北に延びる尾根の先端にあたる。駅館川に面した崖上に立地し、比高差は＝ｍある。西側にも谷が入り、南側でも小さくくびれる事から、城域は独立丘陵の様相を呈している。崖下には鷹巣観音堂がある。

《現状》植林と雑木林となっており、残存状況は良好である。

《構造》南側から延びる尾根の付け根から、西側に緩やかに傾斜する斜面部に半円を描くように横堀を入れ、外側の土塁直下からは幅1mほどで長さ数ｍの小さな畝状竪堀を17本入れて斜面部の横移動を防いでいる。また、横堀の終わる北西斜面には５本の竪堀を連続して入れ、その北側にある虎口部からの南側への回り込みを防いでいる。横堀と竪堀で守られた主郭部（Ⅰ）は崖面以外に土塁を半周させ、その土塁の南端部には櫓台状の方形の区画がある。内部平坦面の中央には50cmほどの高さを持つ蔀状の高まりがあり、内部を区切っていた可能性がある。主郭から北に延びる幅10mほどの尾根は、主郭部から階段状の小さな曲輪に拵え、先端部を低平な土塁で仕切る。階段状の曲輪群の西側は一段低く、同様に階段状に削られ切岸にアクセントを加えている。その階段状に削られた部分から３本の竪堀が掘られ、その間を斜めに城道が登り、階段状曲輪の直下に取り付くものと考えられる。

《歴史》同時代の文書、記録に記載が無く城主などは不明である。この山本砦は宇佐平野の南端にあたり、狭い谷間を縫うように流れてきた駅館川が沖積地を形成し始めるまさに地形の変換点に立地している。この南側（上流）には大友氏の重要な城郭である妙見岳城や龍王城があり、宇佐平野との結節点に位置する山本砦が、大友氏にとって宇佐平野への足がかり的な位置にあると言えるであろう。（小柳和宏）



第34図 山本砦縄張り図（1/2,000）

0　50　100m

【108　山本切寄　宇佐市大字山本字切寄】

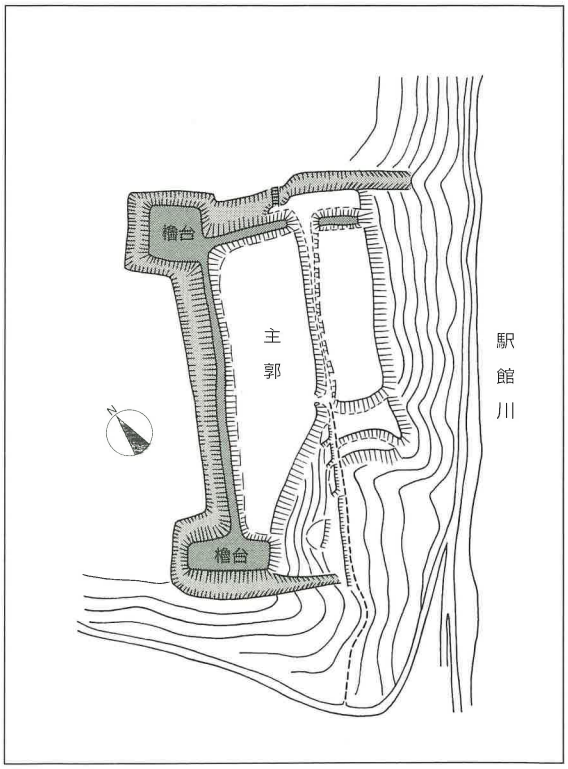
《立地》宇佐市の中央部を流れる駅館川上流部の西岸丘陵に立地している。切寄の東側は駅館川に接する崖面となり、南側には急峻な谷が存在し天然の要害となっている。城対岸の東側谷部は院内・安心院へと延びており、豊後と豊前を繋ぐ街道筋となっている。また、切寄の立地する丘陵の南側尾根の最高部には大友氏や周防の大内・毛利氏が豊前支配の拠点とした妙見岳城がある。

《現状》切寄の南半分は桧を植林した山林で、北半分が鬱蒼とした竹薮となっている。切寄の北側及び西側の外側は昭和30年代の大規模な畑造成を受けており付属施設等を示す遺構は確認できなかった。また、南側部分では後世の地崩れなどにより築城当時の状況が失われている可能性が伺われる。横堀の北西の一部が宇佐別府道路の建設により失われているものの、遺存状態が良好な単郭式の丘城である。

《構造》切寄は駅館川より丘陵上に派生している小さな谷地形を竪堀として利用し、その先端部より横堀へと続く。横堀の内側には土塁がL字形に巡りっており、その北西コーナー部分には櫓跡と考えられる約21m四方の平坦部が配されている。また、南西コーナー部分では北西部ほど明瞭でないが土塁の張出しか確認される。このため横堀は北西及び南西コーナー部分が桝形に屈曲している。このような土塁の張出しは高森城や光岡城と共通する構造である。平成2年度の宇佐別府道路建設に伴い北西コーナーの横堀部分の発掘調査を実施した結果、堀は幅約8m、深さ約4mで断面V字形を呈していた。空堀であったと考えられるが底部で細い溝が検出されており雨水などが流れた痕跡を確認することができた。土塁は約1mほどの高さがあり、堀との比高差は約10mほどである。切寄のほぼ中央部を南北に里道が縦断しているが城との関係については不明であるが、集落方向である北側に開口していることなどにより虎口であったことが想定される。その東側には32×10mほどの曲輪がが構築されている。

《歴史》切寄の存在する丘陵上における宇佐道路・宇佐別府道路建設に伴う発掘調査では、中世末から近世にいたる集落跡が確認されている。16世紀以降の集落跡には円形又は方形区画の溝を伴っていた。このような集落の在り方は、中世の地方豪族の屋敷の在り方と同じものであり市内でも吉久遺跡や上居屋敷遺跡などでも確認されている。この切寄の記述についての古文書などは確認されていないが、『豊州城堡記』の高森城の項に「黒田孝高が実弟の兵庫頭（利高）を城主として置き、駅館川筋の支配をまかせた。佐々木助四郎を山本より呼寄せて城の留守居役とした」とある。この佐々木助四郎なる人物が山本切寄に関係するものでなるならば、同じ構造の張出しを伴う城との関係と重複しており注目されるものとなる。（林一也）

〈宇佐市教育委員会提供〉



〈千田嘉博「築城術」（『歴史群像シリーズ38黒田如水』学研）より転載〉

第35図 山本切寄測量図(左,1/2,000)と見取図(右)

【089　下高城　宇佐市大字下高】
【114　松山城　宇佐市大字上高】
【115　西原遺跡　宇佐市大字上時枝】
【116　時枝城　宇佐市大字上時枝】
【119　平田城　宇佐市大字森山字小東】
《立地》宇佐平野は、最も東を駅館川、最も西を五十石川が流れ、その間に伊呂波川などの小河川が北流し、南北に長い微高地を数多く作り出している。その南北に長い微高地のうち、最も大きなものが時枝の微高地である。これは、糸口山の丘陵から北（海岸）に向かって幅200から300m、比高差3から4mで伸びるもので、現在も集落が立地している。
《現状》集落や水田、畑地となっている。特に水田部分は圃場整備によって大きく改変されている。
《構造》現在は圃場整備が行われ一面平坦であるが、旧字図を見ると旧河道が幾筋も蛇行しながら北流しているのがわかる。そして、その微高地ごとに方形の区画を確認することが出来る。さらに、古道も復元が可能で、時枝の微高地の真ん中を南北に貫いて、善光寺（天徳2〈958〉年創建伝承）の東辺にあたる道（「時枝南北道」と仮称）と（註：字図では南北道は善光寺の手前で西に曲がり、善光寺の正面に向かうが、善光寺の北側では、また南北道にほぼ乗る道がある。おそらく、南北道が当初にあり、その後善光寺が道を遮断するように造営されたものと考えられる。）、善光寺の南辺を東西に伸びる道（「宇佐東西道」と仮称）が宇佐平野の主要幹線道であったことが窺える。

その南北道と東西道の交点に善光寺があるのは興味深いが、さらにその交点を挟んで南東側に時枝城（A地点）があるのは、交通の要衝を押さえる意味でも重要である。時枝城は現状で中央部に東西方向の広域農道が通り破壊されているが、北半分はわずかに残っている。明治の旧字図では水堀となっており、平安末期に開削されたといわれる平田井堰の水路との関係も考慮に入れる必要がある。字図によって復元してみると、大きく３箇所の曲輪を持ち、東側の谷に面する部分には堀が無いものの、土塁と堀でほぼ矩形に囲まれていた。

時枝城から時枝南北道を南に下ると、南北端がクランクになった長さ300mほどの直線部分があり、その直線部分を挟んで東西には方形区画が連なる西原遺跡（B地点）がある。まったく伝承などは無く、城郭とは断定できないが、連続する区画の内、図示した南東角部を「ヤグラ」と呼ぶなど何らかの防衛的な施設を伴った集落であったと考えられる。明治21年の旧字図で確認できる堀、または土塁の可能性のある地筆の内、現在確認できるのは一部のみである。

また、時枝の丘陵とは二つの谷を挟んだ東側に別府の丘陵がある。ここには平田城（C地点）がある。ここは、平田井堰水路の末端にあたり、平田別符の故地である。ここに一辺40mほどの堀と土塁で囲まれた区画がある。

D地点は松山城でE地点が下高城であるが、下高城については、この地の領主であった宇佐宮土器長職を相伝した高牟礼氏の城郭である可能性があるが、その場所も含めて特定する事ができない。
《歴史》旧字図でわかるように、上記の５城館の他にも様々な方形区画が認められる。これらは、「城館」としての伝承が無いだけで、寺社地を除いては中世に起源を持つ城館、屋敷、ムラの痕跡であると考えても間違いは無いであろう。その中でも、やはり時枝の微高地に展開する方形区画群は、規模や密集度から群を抜く存在である。特に「時枝城」は、明治の段階の水堀が中世にまで遡る可能性が高く、戦国末期の平地城館の一つの到達点を示すものであろう。この地は天正7年から15年にかけての豊前南部の動乱の舞台となった場所であり、その際に「時枝切寄」や、「平田村新城」が文書にでてくる。「時枝切寄」は、反大友の主勢力である時枝氏ら（「時枝悪党」）が立てこもったもので、特に天正10年には「時枝切寄廻り」で激戦が行われた。この「時枝切寄」は、おそらく時枝城や西原遺跡を含むこの時枝の微高地一帯に広がる防御施設を持った集落を指すものと考えられる。それは、この動乱が豊前南部（宇佐郡、下毛郡）を広く巻き込み、特に宇佐平野では各集落ごと（厳密には集落領主＝在地土豪ごと）に大友、反大友方に別れて戦ったものであり、集落そのものの城塞化が進んだ契機をそこに求めることが可能である。

平田城が、文書に出てくる「平田村新城」かどうかは確証がない。小字「別府」のなかにも方形地割りが認められるのでそちらを指すものかもしれない。（註:「切寄」ではなく「城」という言葉を使っていることからすると、単郭の城郭を示している可能性が高い。そうすれば平田城を指すものである可能性が高くなる。）

このように、北に向かって蛇行しながら幾筋もの小河川が流れ、その間に比高差数mの微高地が南北に長く連なるといった自然環境の中で、戦国末期には各々の微高地上で防御的な施設を持った集落が広範に出現していた様子を窺う事ができる。（小柳和宏）

① 西原遺跡
② 時枝城
③ 平田城
④ 松山城
⑤ 下高城推定地

Ⓐ－Ⓑ 東西直線道
Ⓒ 善光寺
Ⓓ 通称「ヤグラ」

明治21年旧字図による宅地
谷水田の想定される低地
明治21年旧字図による山林
ⓐの部分が第42図のⓐと接合する

0 200 400m

第36図 時枝地区小字集成図（1/8,000）

【126　光岡城　宇佐市大字赤尾字光岡】

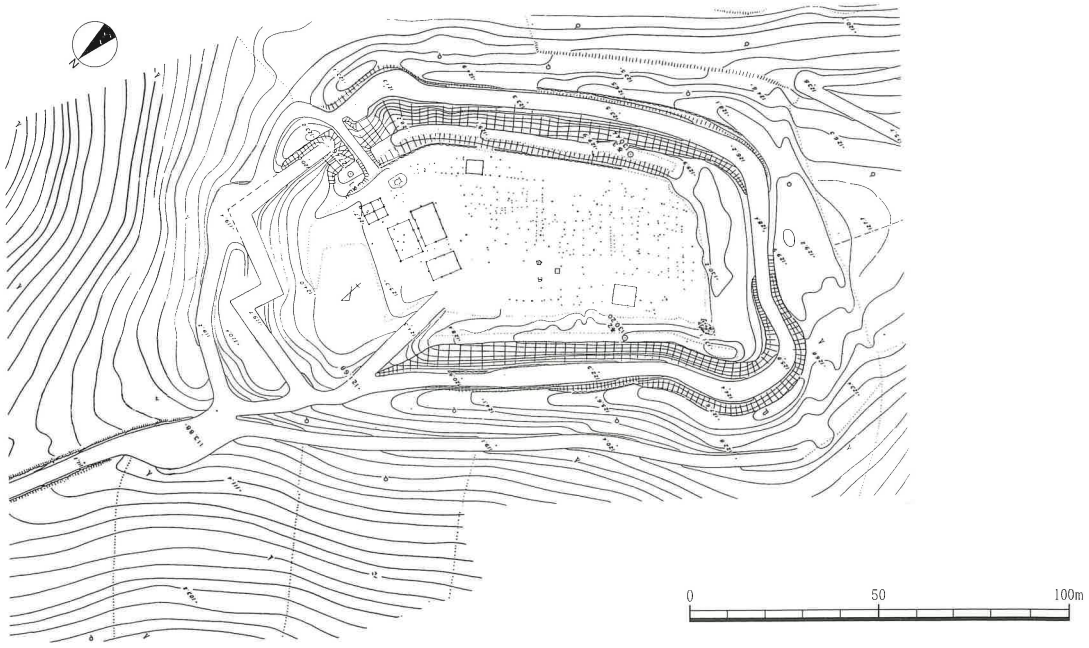
《立地》市内西部の上赤尾地区にある標高130mの丘陵上に構築された山城であり、集落との比高差は約80mを測る。平時は谷内にある館で生活し、非常時に立て籠もる詰城として使用されていたものである。館跡の堀・土塁の一部は近年まで現存していた。城跡からは宇佐平野をはじめ西国東から東中津が、前面には豊前海が一望にできる。また、当時の主要な城である時枝城・高家城・高森城が、背後には妙見嶽城も望むことができる。さらに、晴天時には山口の宇部・小野田（旧周防国）も望むこができるという地理的にも重要な場所に立地している。

《現状》昭和58年の調査時には、城跡内部の北側及び南側の土塁の一部が壊され、横堀を埋められた状態で確認された。平成2・3年度の発掘調査では多くの建物跡などが確認されるなど保存状態はかなり良好なものであるといえる。城跡北側約250mの尾根の斜面には岩盤より染み出る水を溜める升形の掘込みが構築されており、地元民はこれが井戸跡であると伝えている。現在城跡は、大分県指定史跡として建物等の遺構表示（床面復元1棟を含む）・説明板の設置などの史跡整備が実施されている。さらに、史跡周辺の整備もなされており、市内外から多くの観光客が訪れている。

《構造》丘陵の尾根上に横堀を巡らした単郭式の山城であるが、内部の土塁の各コーナー部分に張出しが構築されていることや虎口部分の外側土塁に食違いを持たせていることなど当時としては斬新的な構造をしているのが特徴的である。主郭は南北約140m、東西約80mの規模をもち、谷を見下ろす位置に土橋の虎口が構築されている。内側土橋の張出し部分のほか4カ所において櫓跡と想定される平場及び階段の痕跡が確認された。主郭内部は2段の曲輪で構成されている。発掘調査で確認された4棟の大型掘立柱建物跡は郭北側の虎口前面に集中し、その内の1棟は検出状態より物見櫓跡と想定される。柵列の南側部分では岩盤をノミで穿って柱穴を掘っている。横堀は空堀であり、平成2・3年度の発掘調査により北側及び南側部分は破城時の内側土塁の土砂により2.7mほど埋められていたことが確認された。復元される土塁との比高差は約10mを測る。北側の横堀では鉤の手状に屈曲していることが注目される。堀の掘削により生じた石を利用して外側土塁上に高さ1m程の石垣を構築し、その内側には幅1mほどの犬走りが巡っている。

《歴史》『豊州城堡記』によると、「建武年中（1334～6）高武蔵守築之、貞和六（1350）年四月筑前原田之余流赤尾孫五郎種親か族赤尾次郎左衛門尉種綱尊氏将軍ニ属、吉田村之地頭職ニ被補任、嫡男兵庫介弘種・嫡孫修理亮国種か代大内家ニ従、兵威ヲ輝也、文明中（1469～87）寺庵建立吉田村ヲ赤尾ト改、」とある。また、『今永家文書』（市内森山）の文安2（1445）年頃の記述には「赤尾城近村五ケ村云々」とあることなどから、赤尾氏が1350年以降からこの地の豪族として勢力を誇っていたことがわかる。しかしながら、『今永家文書』にあるの赤尾城が光岡城のことであるかは不明である。これに対し『佐田文書』には、「天正八（1580）九月八日に、築上郡の城井氏や長野氏らが、赤尾三河入道（統秀）の宅所と切寄を攻撃し村中に放火した」ことが記載されており、すでに平時の館である宅所と詰城となる切寄（光岡城）とが存在していたことがわかる。

光岡城跡の主郭内部の発掘調査では遺物が一点も出土していないため城の存続時期などは不明である。しかしながら、堀・土塁の特徴的な構造などから、現存している遺構は天正15年以降のものである可能性も考えられるため、これから解明していかなければならない課題としてあげられる。（林一也）



第37図 光岡城遺構配置及び測量図　〈宇佐市教育委員会提供〉

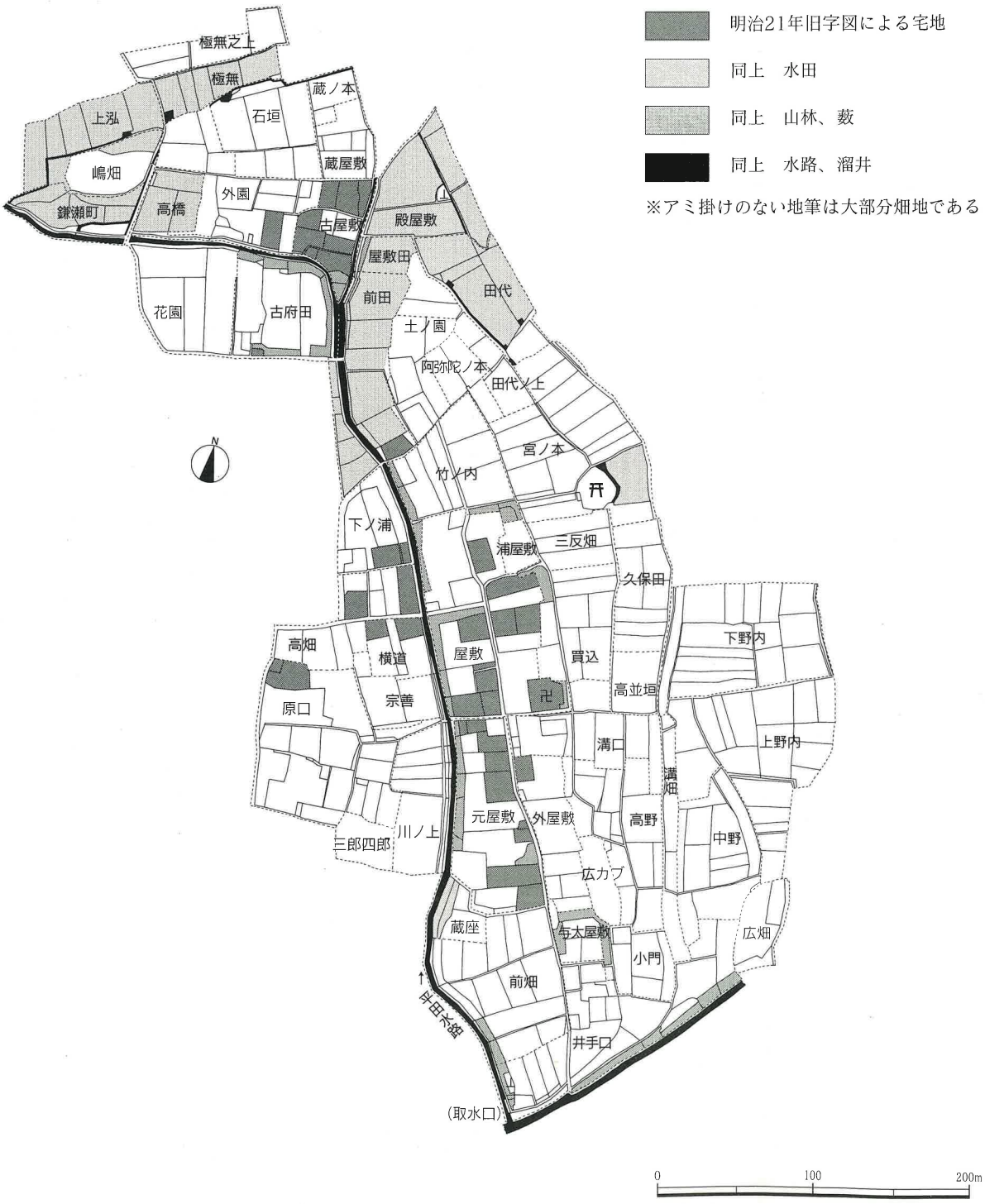
【130　広崎氏切寄　宇佐市大字中原字屋敷ほか】

《立地》山間を抜けた駅館川が北流し、宇佐平野に出たすぐの左岸にある微高地上に立地する。

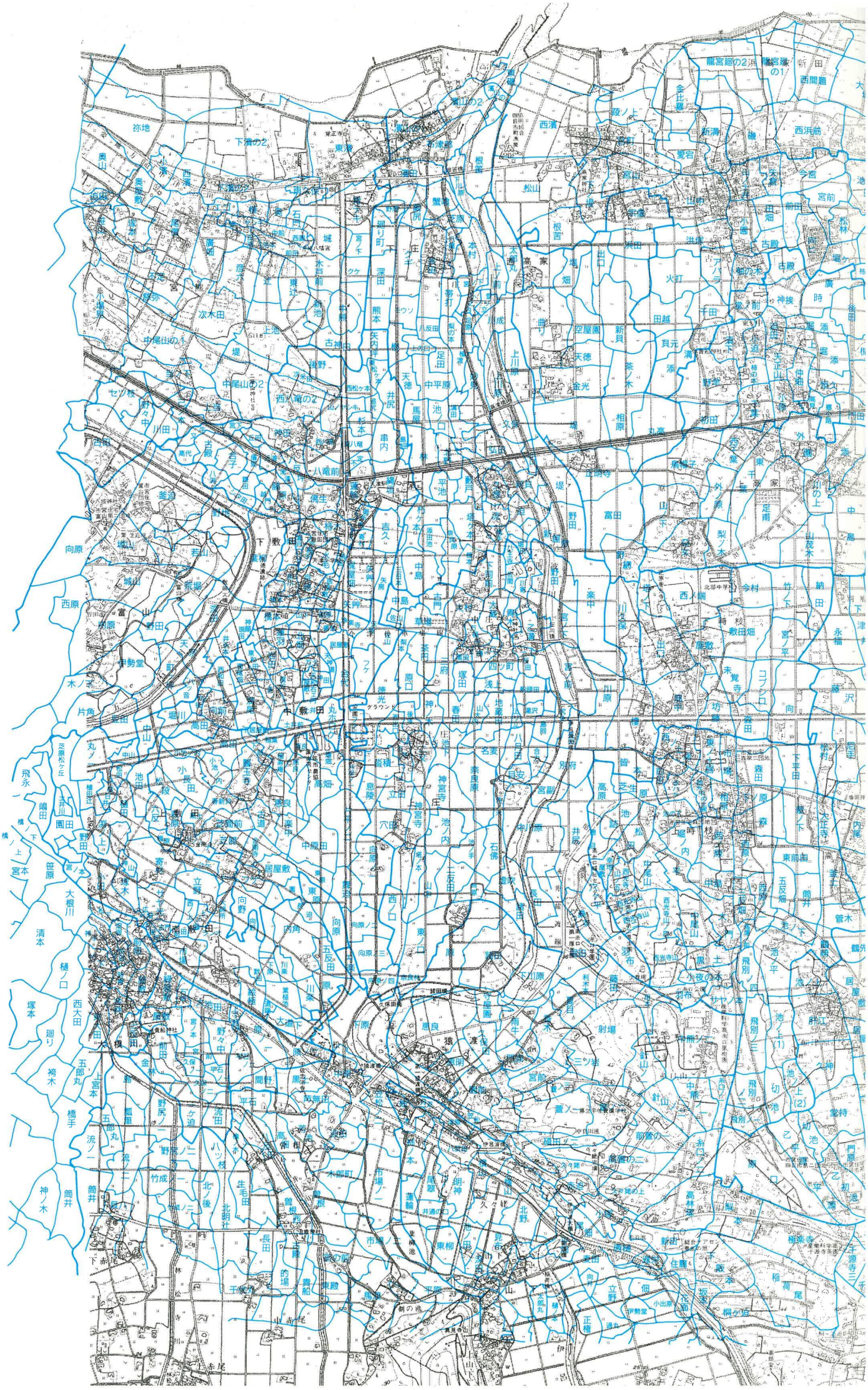
《現状》集落となっており、屋敷と畑地が広がる。明治21年調製の旧字図の状況と大きく変わるところはない。

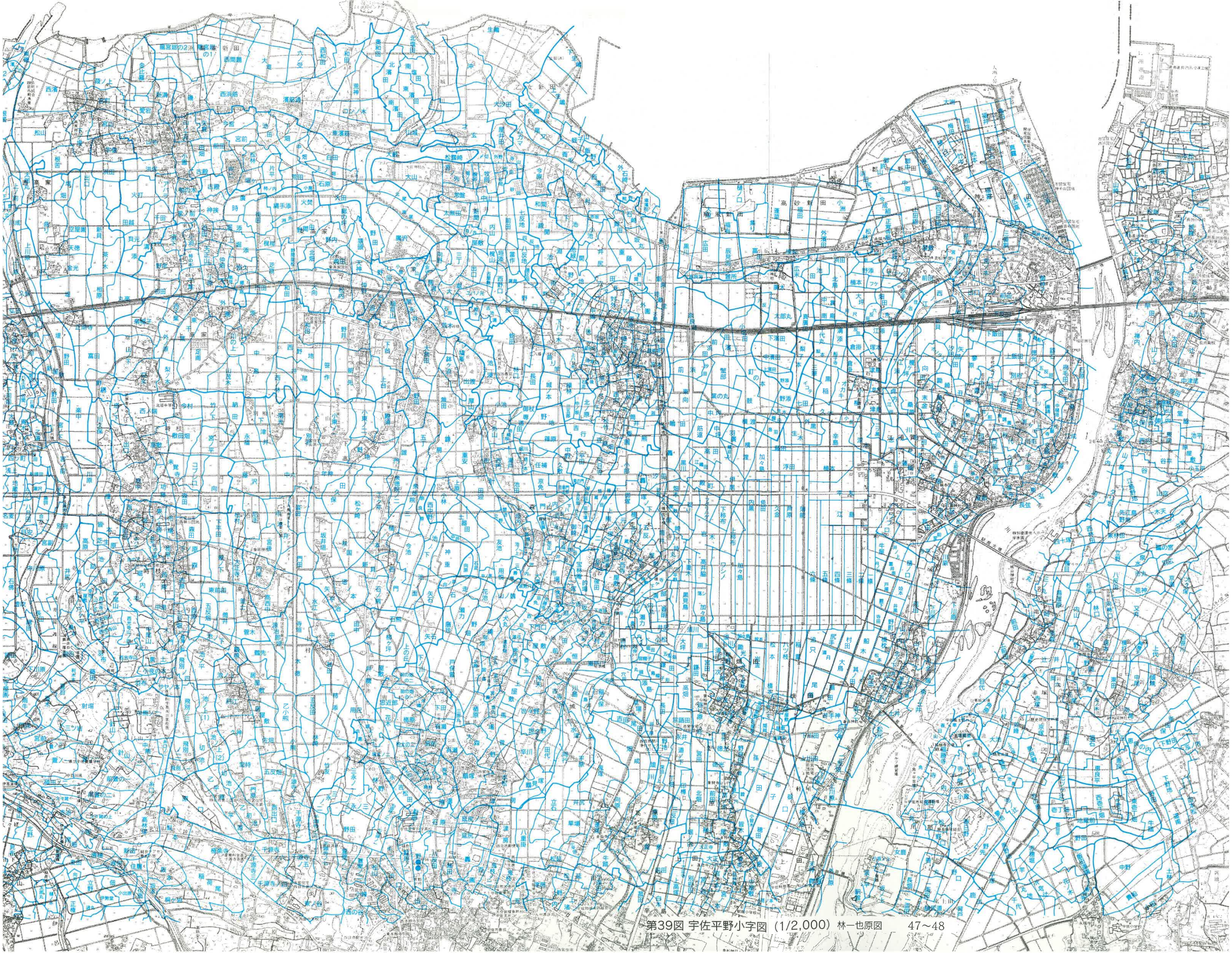
《構造》現在、集落の南側は駅館川に、西側は平田水路に、東側は中世の水路の跡と考えられている「溝畑」によって画されており、南北400m、東西80の範囲に集落が展開している。そのほぼ中央付近に「屋敷」地名が残り、現在土塁が部分的に見られる。また、もっとも北側には「殿屋敷」の字が残るが、現状では土塁や堀は確認できない。切寄といわれるが、集落形態に近いものと考えられる。

《歴史》同時代の文書、記録には記載がないが、広崎氏の切寄といわれる。（小柳和宏）



第38図 広崎氏切寄周辺小字集成図（1/4,000）





第39図 宇佐平野小字図（1/2,000）林一也原図　47～48

【132　敷田城　宇佐市大字中敷田】

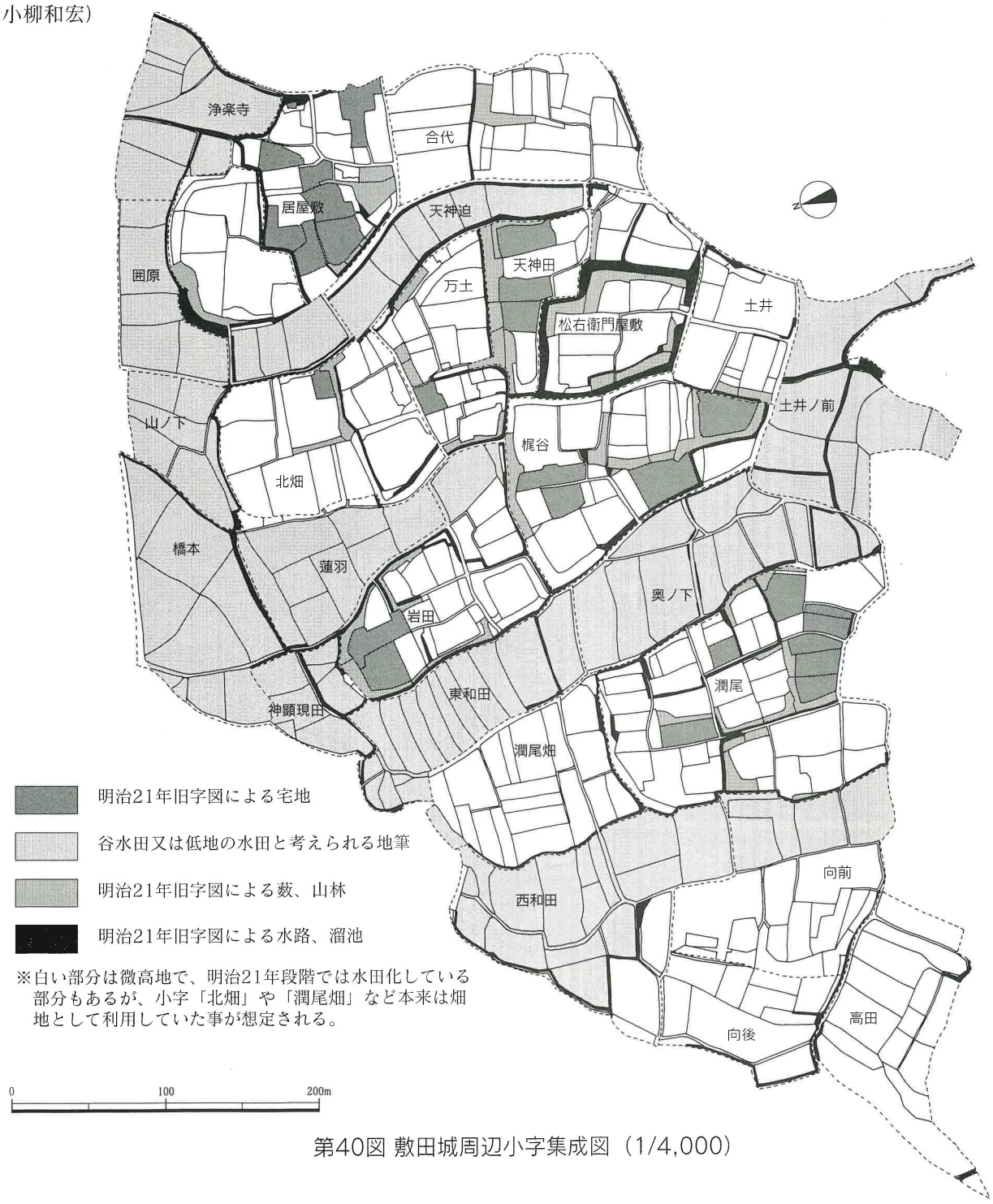
《立地》宇佐平野の東端に近い、宇佐郡と下毛郡の境界付近にある。五十石川と伊呂波川に挟まれた微高地上に立地し、同じ微高地上には吉久遺跡（090）などがある。さらに微視的には二つの小さな谷に挟まれた幅100m、長さ200mほどの微高地上に立地している事になる。

《現状》周辺は圃場整備されており、水田部分は旧状を留めない。城郭の中心部分は堀の跡が残っている。

《構造》敷田城は小字「松右衛門屋敷」と呼ばれており、南北80m、東西70mのほぼ正方形を呈している。鬼門にあたる北東角部は15mほど内側に屈曲している。堀と土塁がほぼ全周するが、南側一辺のほぼ中央部で途切れており、ここが虎口となる。この虎口に向かって小字「土井」に直線的な道が延びている。「松右衛門屋敷」以外にも小字「岩田」、「万土」、「潤尾」、「梶谷」などで方形区画が認められる。しかし、規模や水堀の状況などから「松右衛門屋敷」の優位性は明らかである。

《歴史》唯一人名で呼ばれる「松右衛門屋敷」がこの地の領主であった「萩原氏」の居城であったのは明らかであろう。そして、その周囲には鍛冶屋の存在を示す「梶谷」を始め家臣団、あるいは一族の居住地が広がり、さらに「天神道」の谷を挟んだ東側には一般の集落である「居屋敷」が付属する集落形態を復元する事が可能である。

（小柳和宏）



第40図 敷田城周辺小字集成図（1/4,000）

【134　高家城　宇佐市大字東高家】

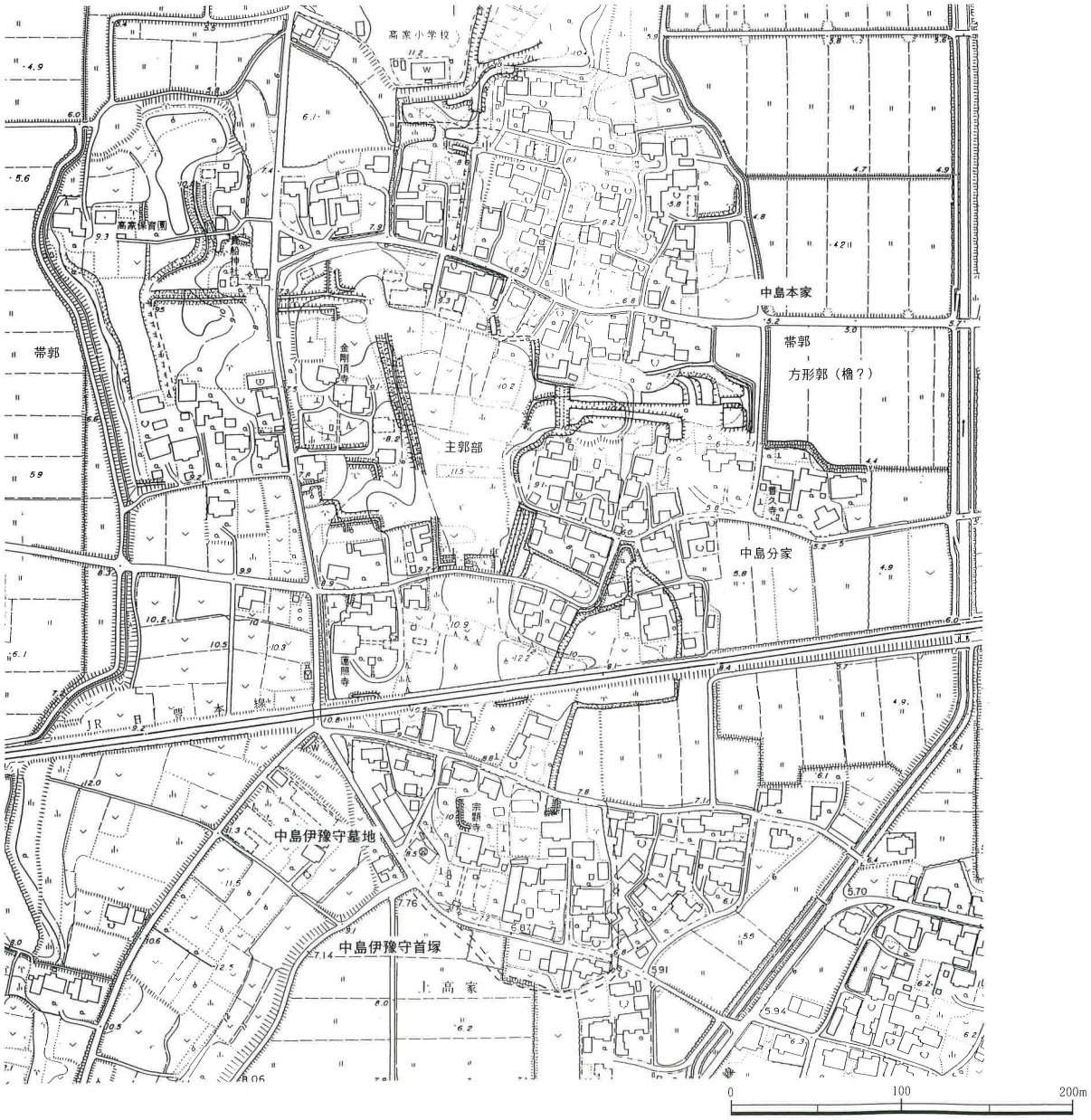
《立地》　時枝の微高地からさらに海側（北側）に伸びた微高地上に立地する。高家城が在る部分では微高地は周辺の水田に比べ、3～5mほど高く、幅400mほどで、遺構の広がりは南北に600mほどの長さである。

《現状》集落と重なっており、宅地化で遺構の破壊されている部分が多い。

《構造》微高地でも最も高いA部分が中心郭と考えられ、堀と土塁が南北200m、東西80mの略長方形に廻っていた可能性がある。しかし、堀や土塁が認められるのはこの部分のみではなく、四方に土塁や堀の痕跡を認める事ができる。特に現在「中島家」のある主郭部東側は櫓台状の一辺10mほどの方形の高台や大規模な土塁が残存している。全体としては東西400m、南北600mほどの集落全体を複雑に囲い込むものであろう。

《歴史》「高家城」、あるいは「高家要害」では、永和2(1376) 年2月に合戦が行われている。この戦いには北朝方として都甲氏が参じている。この段階で文書に表れる城郭（○○城や○○要害）は総じて比高差の大きい山岳頂部に位置するが、この高家城は平野部に立地する。

一方、戦国末期の天正期になると、豊前動乱の中で「高家切寄」と呼ばれるようになる。現状で確認できる堀や土塁などの大部分はこの時のものであろう。「高家切寄」には、大友方として、在地領主であった中島氏らが差し籠もった。ここは、南側に繋がる微高地上の「時枝切寄」に籠もる反大友方の「時枝悪党」に対する最前線としての意味もあったのであろう。（小柳和宏）



第41図 高家城遺構模式図（1/4,000）〈林一也作製〉

第42図 高家地区小字集成図（1/8,000）

【138　藤田遺跡　宇佐市大字南宇佐字藤田】

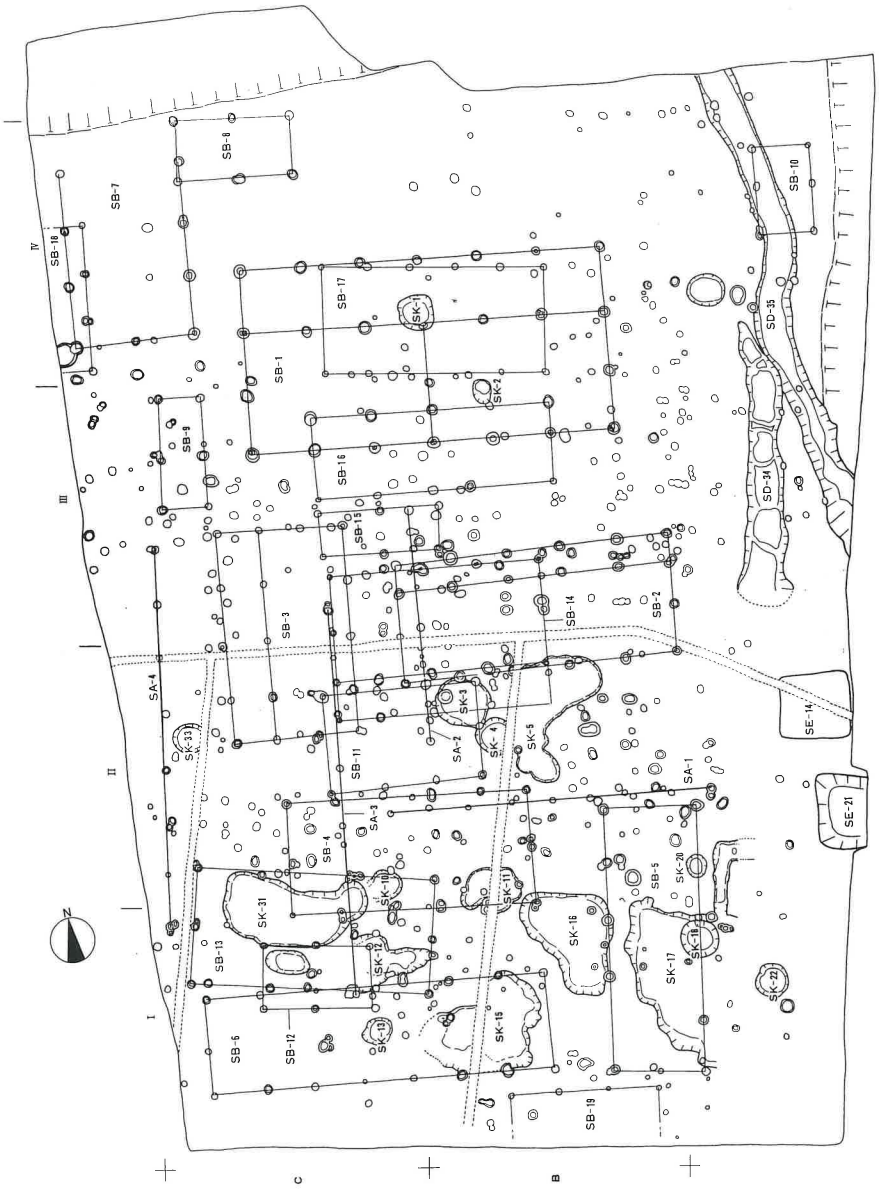
《立地》寄藻川流域に開けた、東西1km南北0.8kmほどの盆地の中にあり、その東端に宇佐宮がある。藤田遺跡は、その宇佐宮に向かって西から延びてきた官道（宇佐大路）沿いに展開する「宇佐町」の南側の背後にあたるところに位置する。

《現状》近世以降も引き続き門前町として機能しており、宅地や水田、畑地として利用されている。

《構造》藤田遺跡そのものは全体を調査したものではなく、その構造については詳細は不明であるが、２カ所の調査区で9世紀から14世紀に至る20棟の掘立柱建物や井戸、区画を示す溝や柵列などが確認されており、出土遺物も白磁の水注など優品が多く含まれている。

《歴史》この遺跡は「社務宿館」と考えられている。「社務」とは宇佐宮大宮司のことで、「社務宿館」は文字通り「大宮司の公邸」を指すとされる（海老沢衷『「社務宿館」考』下記②文献所収）。（小柳和宏）

参考文献　①『藤田遺跡』宇佐市教育委員会　1983
②『藤田遺跡Ⅱ　高森城跡』宇佐市教育委員会　1984

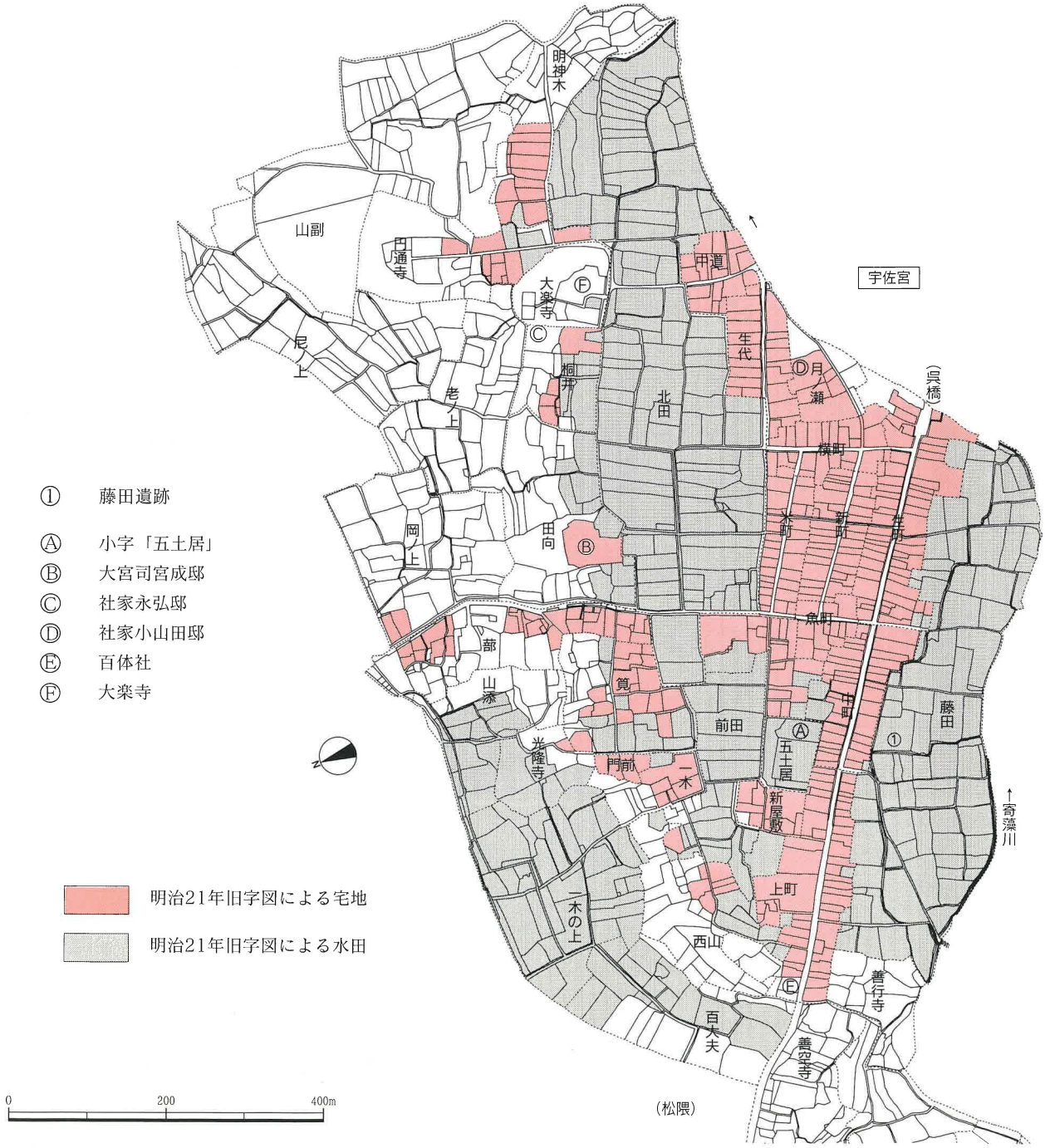


第43図 藤田遺跡遺構配置図　〈参考文献①より転載〉

<<宇佐町>>藤田遺跡のある宇佐町（現在の宇佐市大字南宇佐および北宇佐）は、古代に成立した宇佐宮の門前に広がるいわゆる「門前町」である。しかし、単に門前に市が立ち、町へと発展していったのではなく、広く九州各地に荘園を有した宇佐宮大宮司家を始めとする社家の家々が屋敷を構える「領主都市」でもあった。延慶2(1309)年の大火では松隈から出火し、「松隈より樽(呉)橋まで、北は田より南は河まで、東西五町南北三町」が灰燼に帰した。つまり、当時の町は現在は水田になっている藤田遺跡のある小字「藤田」まで広がっていた。この宇佐町には当時「社務宿館」と呼ばれる大宮司の公邸があり、他にも大宮司出光氏の「出光殿御館」や大宮司宮成氏の「宇佐御大路屋敷」などがあった。これらの屋敷（館）がどこにあったのかについては考古学的な知見は無いが、宇佐大路沿いや山際のもう一つの「大路」沿いに展開する屋敷群のどれかに相当するものであろう。

宇佐大路からやや北に入った小字「五土居」は「御土居」のことと思われ、方形区画を宇佐大路の短冊形地割りによって切られており、短冊形地割りに先行する遺構と考えられる。「応永の古図」と呼ばれる古図には、「本町」、「横町」、「魚町」、「米町」などと呼ばれる「田」の字状の一角が描かれるのみであり、少なくとも15世紀前半には街村的な町は形成されておらず、有力者の館が点在する景観を復元できる。「五土居」と宇佐大路を挟んで向かいにある藤田遺跡もそのような一角であろう。（小柳和宏）

参考文献　『宇佐大路』大分県教育委員会　1991



第44図 宇佐町小字集成図（1/8,000）

【149　城山城　宇佐市大字矢部】

《立地》標高298.4mの城山（大城）と、そこと尾根続きの標高300m強の山頂（小城）に遺構がある。矢部の集落との比高差は約230mである。矢部から正覚寺を通って佐田に抜ける主要な古道があり、この古道との関係は注意される。

《現状》後世の改変や風倒木被害も無く、良好に残されている。

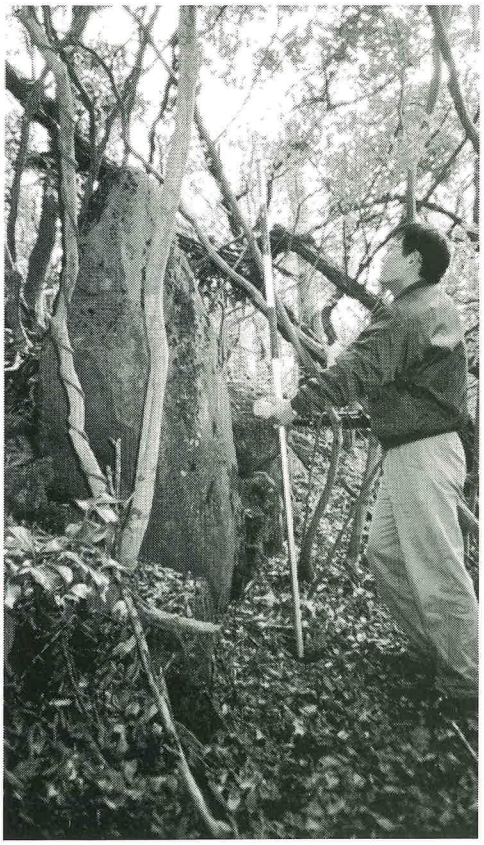
《構造》通称「大城」と呼ばれる城山の遺構は、東西100m、南北15mのやや弧を描く細長い山頂部を、直線的な2～3段の石積み（高さ１m前後）で囲ったもので、東端部には半円状に2mほど低い腰曲輪が取り巻く。腰曲輪の前面は石塁（現状で高さ50cmほど）が巡る。西端部には1段低い曲輪が付される。虎口のひとつは、主郭北西部にあり、塁線が食い違い細長い内枡状の空間を作っている。もう一つは「小城」に向けて単純に開かれたもので、東端部にある腰曲輪の石塁が途切れ、斜面に石列が認められる部分で、その先には土橋を有する堀切（＋竪堀）が設けられている。主郭から西端の曲輪に移行する部分や、北西部の虎口部分などに石積みの屈曲部があるが、隅角部は算木積みなどは認められない。石積みは単純な野面積みである。

通称「小城」は、大城の東端虎口から直線で約230mのピークにある。主郭は南北30m、東西20mの長方形で、西側の一部と南側に土塁を有する。また、西側と北側の一部には土留めの意味を有すると考えられる石積みがある。虎口は、北側塁線が大城方向に伸びた尾根に向けて斜めに途切れた部分と、主郭南側土塁を東側から回り込む部分にある。後者はすぐに堀切に当たるが、そこを越えたところにもう一本土橋を有する堀切があることからすると、直下の堀切も平時は木橋などを架けて、通路に利用していたと考えられる。

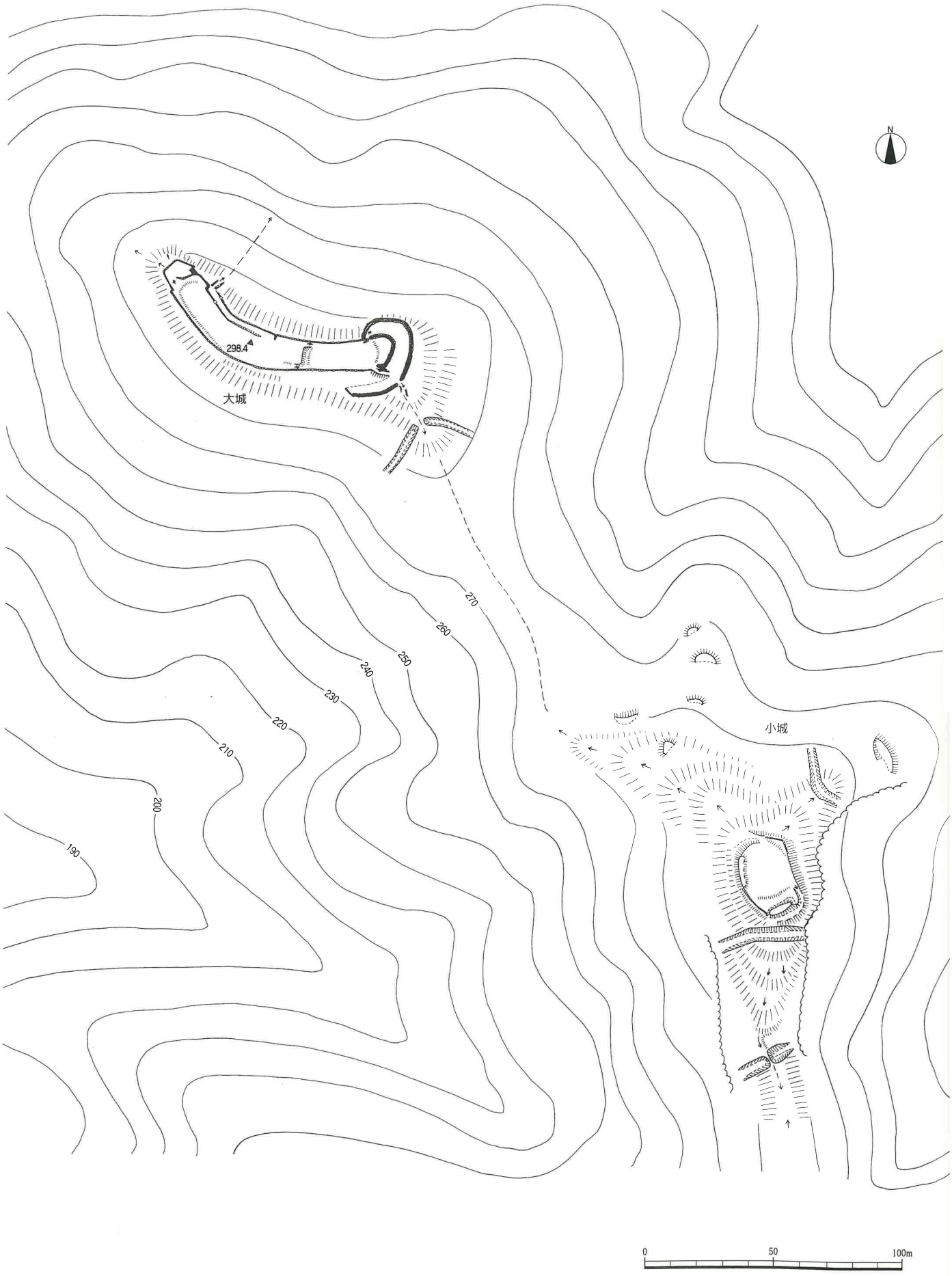
なお、主郭から北東に延びる尾根も堀切で遮断する。

このように、大城と小城はその構造が全く異なるにもかかわらず、虎口の位置からすると、（独立的に機能するとはいうものの）両者は一体的にとらえる必要がある。これは、大城が全面を明確な塁線の折れを有する石積み、石塁で囲うという極めて新しい技法を採用していることからすると、最終的な改修が小城には及ばなかった、と考えざるを得ないであろう。

《歴史》　石積みや虎口の状況から大城は黒田入部以後に改修を受けたことは明らかであるが、文書、記録には記載が全くない。（小柳和宏）



「大城」の周囲を取り巻く石積み。右は2m近い立石。



第45図 城山城縄張り図（1/2,000）

【150　和気城　宇佐市大字和気字城山】

《立地》寄藻川が形成する肥沃な扇状地奥の西側台地にある先端部に立地する。平野部との比高差は約20m。平野部は近年の圃場整備事業により水田になっているが、以前は寄藻川に及びその支流により形成された湿田地帯であったと想定される。城跡の南側にも台地より派生した小川が流れていおり、和気清麿の上陸地とされる場所には「船つなぎ石」が存在している。城跡は山香・立石方面より宇佐へ入る街道を見下ろせる位置にある。

《現状》城跡のある台地先端部の周辺が和気地区の集落となっており、西側以外の横堀の一部は宅地造成などによる掘削を受けている。北側及び東側部分は昭和60年の調査時点では幅約6m程の横堀が巡っていたことが確認されている。城の西側は畑地として造成を受けているため城跡の範囲ははっきりとはしていない。山林となっている主郭部分は保存状態もほぼ良好である。

《構造》台地先端部分を幅約10mの堀切により分断し、最大75×45mを測る台形を呈した主郭を構築している。主郭南側には堀切より延びる幅約５m帯曲輪が巡っており、そのほぼ中央内側には虎口が構築されている。虎口に隣接して20×25mの方形区画の曲輪がある。主郭内側には高さ約１mほどの土塁が巡っているが、北側の一部は欠いている。土塁の東側コーナー部分には開口部があり、その外部に何らかの曲輪があったことが想定される。堀切に面する西側の土塁は幅約3m、長さ約35mを測り、その北側コーナー部分には６m四方の櫓跡と想定される平場が残っている。堀切西側の竹やぶ内には規模の大きな曲輪状の平場や帯曲輪状の平場が存在しているが、後世の造成の可能性も想定される。

《歴史》和気城については古文書等で確認できない。（林一也）

第46図 和気城縄張り図（1/2,000）

【167　副城　宇佐郡院内町大字上副】

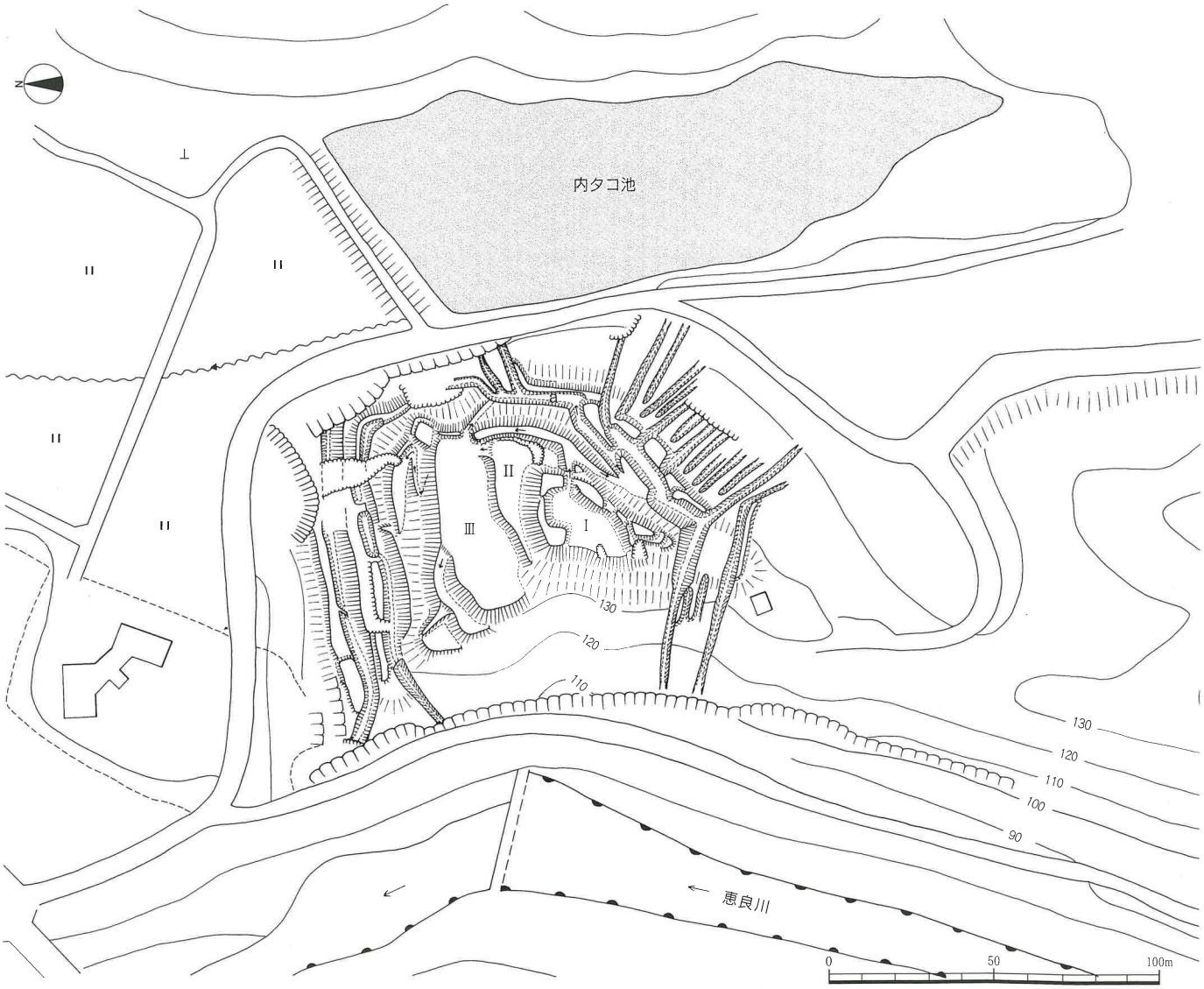
《立地》恵良川沿いに開けた沖積地を望む標高130m強の丘陵部先端に立地する。沖積地の標高が100m前後であるので、比高差は30m程となる。主郭部からは恵良川下流に向けて開けた沖積地を望むことができる。

《現状》城山全体が、町の公園化計画によって散策道や東屋の設置が進み、旧状が失われつつある。一部それに伴い発掘調査が実施されている。

《構造》基本的な構造は、丘陵の先端部を垂直の崖をなす西側を除いた三方を二重の堀切、横堀で囲むという頑丈な防備の城である。曲輪はⅠからⅢがあり、最も高い位置にあるⅠが主郭となる。主郭は西側を除く三方を土塁で囲み、東側中央部に土塁の切れ目があり、そこが虎口となる。虎口を出て、曲輪Ⅱから続く堀を回って左に土塁を下ると曲輪Ⅲに、右に下ると横堀aにつながっており、この堀を通って登城することが想定できる。(ただし、この場合、下位の曲輪を経由することなく、直接主郭に至るという弱点があり、虎口のあり方に再考が必要かもしれない。)曲輪Ⅲは最も面積が広く、発掘調査によって4棟前後の建物の存在を示す礎石が検出されている。また、曲輪Ⅲの東側には土塁があり、その間が切れており虎口と考えられる。斜めに下る道が付設して横堀aとぶつかるが、横堀aとの間には1.5mほどの高低差があり、梯子等がないと登ることが不可能である。外周部に目を向けると、北側、西側の横堀、土塁とも明瞭な屈曲を伴い、特に南東部は屈曲部に櫓台状の平坦面を持ち、さらに斜面部には畝状空堀を施すなど、頑丈である。

このように、崖部分以外に横堀を全周させているのは、礎石建物の検出からも伺えるように、日常的な居住が行われていたことに起因するものであろう。

《歴史》文書、記録には記載がないが、副氏の居城と言われる。この種の土塁と横堀を巡らせる城郭の年代を、単純にそれを持つことによって天正年間まで下らせる、という考えは、城郭の性格を無視した議論である。日常的な居住を目的としたこの種の城館は、比較的古くから横堀、土塁を巡らせていても何ら不自然ではないと考えられる。発掘調査によって備前焼甕、擂り鉢などが出土しており、それによると16世紀が想定されている。(小柳和宏)



第47図 副城縄張り図（1/2,000）

【１７２　妙見岳城　宇佐郡院内町大字妙見】

《立地》標高442mの妙見岳頂上とそこから派生する尾根、斜面に位置する。麓の沖積地との比高差は390m近くある。山は比較的急峻で、谷は深い。頂上からは北は遠く山口（周防）が望め、宇佐平野は眼下に広がる。南側（豊後側）は恵良川沖積地から、遠く安心院盆地も望める。その背後には豊後の山々が広がる。

《現状》山頂部を中心として笹竹が生い茂り、視界の効かない部分があるが、遺構の残りは良い。

《構造》山頂の主郭Ｉから４方向に広がる尾根線上に遺構の広がりがある。それぞれを図のようにａ～ｅとする。ａは主郭があり、南西角部に南北5mで東西10m、高さ１m近い長方形の基壇状の高まりがある。櫓台跡と考えられる（現地の説明版には、これは文書に記載のある「芝矢倉」の跡と記されているが、根拠が明らかでない）。北東角部には北に下るスロープがあり、ここが虎口と想定される。北側方向には、ｃの尾根に向けて階段状に曲輪が配されており、その曲輪群の東側の細長い帯状の曲輪が城道で、主郭虎口に至ると考えられる。ｂには、比較的整形の明瞭でない鞍部を経て曲輪Ⅱを中心とした曲輪群がある。南東部先端は掘り切られており、堀切から続く竪堀とその間を縫うように畝状空堀が展開する。ｄは主郭から北西に延びる尾根で、曲輪Ⅲを中心として、それより先端側（北西側）には６本の堀切を、それより上位（東側）には階段状の曲輪を配している。登山道を登ってくるとこの曲輪Ⅲの南東端に取り付き、そこから階段状曲輪群の南側に掘り込まれた竪堀状の城道登ることになる。しかし、ａの北西角からｄに向かって土塁が下り、右手（南側）への展開を許さないので、道は北東側に折れ、ｃとの間をつなぐ谷部を取り巻く長さ70m近い弧状の曲輪に入り、そこからｃの尾根に至る。曲輪Ⅲの南側の斜面から、ｅの長大な堀切（＋竪堀）の間まで、畝状空堀を施す。ｅは主郭直下を掘り切るのを初め、４カ所を堀切で遮断している他は明確な曲輪の形成は認められない。Ⅳは南側に低い土塁が認められるが、積極的に曲輪とすることはできない。しかし、さらに西側の尾根先端部付近にも堀切が認められるので、ある段階では曲輪として機能していた可能性もある。

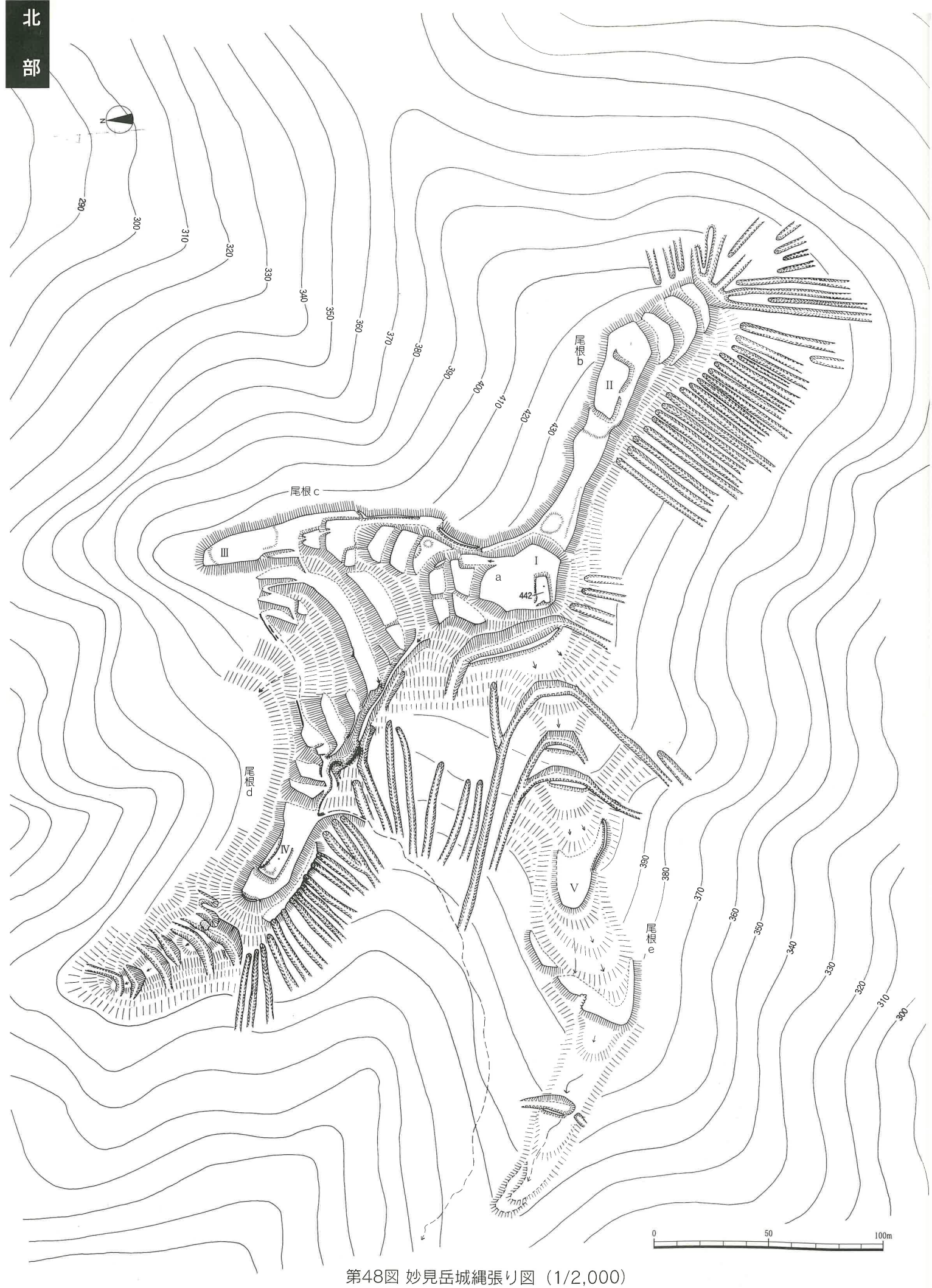
全体的には、斜面の緩やかな部分には畝状空堀を入れ、尾根は幾重にも堀切を入れ遮断する。曲輪はピーク部を中心として階段状の曲輪を配し、その片側を通路として利用する、という構造が浮かび上がる。

全体的には最も標高の高い主郭部と、そこから伸びる三方向の尾根に設けられた曲輪群は、面積的な優劣はほとんど無い。特にｂの尾根は主郭と一体となり機能していた可能性が高い。ｃ、ｄの尾根は先端部に比較的広い曲輪を配し、主郭との間を切岸のきつい階段状の小さな曲輪群でつなぐもので、主郭部防備の最先端の位置づけがあったものと考えられる。特に、尾根ｃとｄの間の谷は、宇佐平野方面からの登城ルートであった可能性が高く、そこを挟み込むように守備していたものであろう。そうすると、畝状竪堀は南側（豊後側）を向いてはいるものの、これらは南側に回り込まれるのを用心したもので、本来防御の主体は北側（宇佐平野側）であったあったろう。

《歴史》最も古い記録は、文亀２（1502）年のもの（文書番号159）であるが、明応８（1499）年には「宇佐郡院内衆」が同心して「妙見尾」に（城郭を）誘った（拵えた）とあり（文書番号160）、少なくとも15世紀末から16世紀初頭には、妙見岳に城郭が整備されていたことがわかる。これは、大友親治が豊前に攻め込んだ時の大内側の備えのためであった。天文元（1532）年には、大友義鑑と大内義隆の激戦の舞台となり、多数の死傷者が出た。その際には、大友方は「切岸」に攻め登り、そこで大内方は応戦したのであった。この後も、大内氏は妙見岳城に「城番」を置き、この間しばしば大雨で崩れた施設、特に「芝矢倉」などの「築繕」を行わせている（文書番号309）。天文20（1551）年に大内義隆が死に、弘治３（1557）年に大内氏が滅ぶと、大友氏は豊前の支配を確立し、妙見岳城も大友氏の手に入る。そして、永禄２（1559）年には、大友氏は「往代以来諸役御免除」の宇佐宮領に対しても「妙見岳御城誘」を命じている（文書番号348）。さらに天正７（1579）年には、田原紹忍が妙見岳に差し籠もって「普請」をなしている（文書番号407～412）。

一方、天正14（1568）年に薩摩軍が豊後に侵攻した折りには妙見岳城には大友義統の弟である田原親盛がおり、府内から逃れてきた義統や宣教師達を一時的にかくまう。

このように、妙見岳城は複数回の「城誘」や「築繕」がなされており、これらはいずれも宇佐宮領も含めた宇佐郡院内衆などが負担するものであった。妙見岳城の縄張りを見ると、当初から統一的なプランが存在したとは思えず、防備の甘い部分に堀切や竪堀を追加していったものと考えられる。（小柳和宏）



第48図 妙見岳城縄張り図（1/2,000）

【174　赤井城　宇佐郡安心院町大字佐田】

《立地》佐田の平野を望む、三方を谷で囲まれた標高150mの台地上に立地する。台地平坦面は南北200m、東西70～40m程の細長いもので、その南端の最も幅の広い部分を利用して城郭を築いている。麓の集落との比高差は50mである。山蔵川を挟んで東側の山には佐田城がある。直線で主郭まで約１kmである。

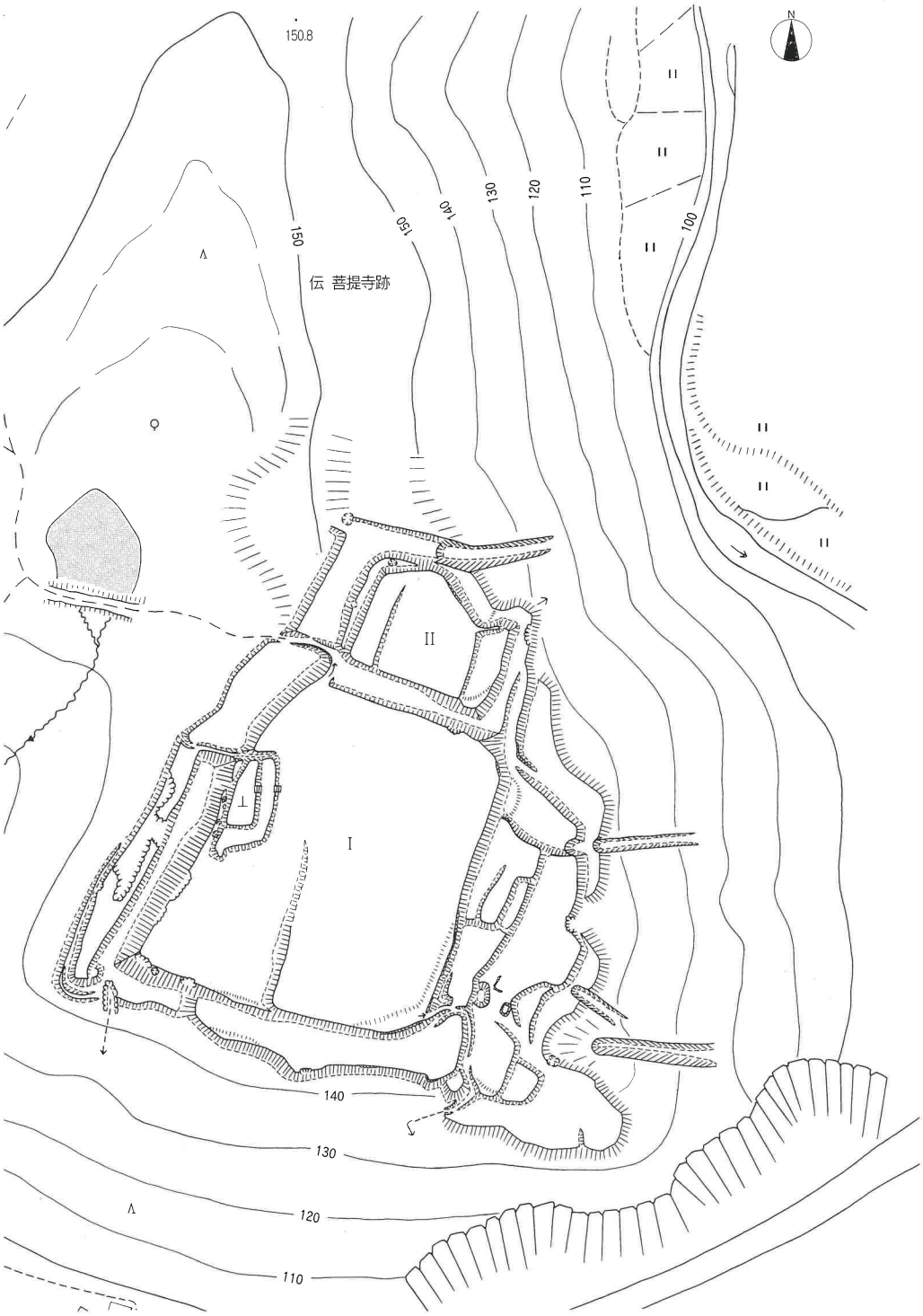
《現状》現在、城域はすべて山林（植林、雑木林、竹林）であるが、以前は畑地として利用されていたと思われ、改変が至るところで見られる。特に、斜面部の階段状の削平は城郭の遺構との区別が付きにくい部分がある。また、山の作業道が至るところに造られ、当初の城道の推定を困難にしている。さらに、平成３年の台風による風倒木も著しい。

なお、赤井城の尾根続きの北側は「菩提寺」の跡と言われており、井戸跡や石列が見られる平坦面がある。

《構造》台地先端部に南北90m、東西60～80mの台形の平場（Ⅰ）を作り、北と西は堀、南と東は切岸で画し、さらに北側の堀を共有して30m×40mの第二の曲輪（第Ⅱ郭）を付設する。この曲輪の北側は堀切（＋竪堀）で尾根を遮断している。主郭は、西辺中央の堀を望む部分に、幅1m程度の帯曲輪状の平場を巡らせる20m×5mの基壇状の高まりを有している（現状では戦国末期以降の佐田氏の墓地）。西側の横堀（堀底から主郭平坦面までは8m近くある）は、その基壇状の高まりに合わせるごとく、そこから北側には延びていないが、本来は第Ⅱ郭との間の横堀につながっていたと考えられる。

東側斜面には第Ⅱ郭の北側堀切から続く竪堀を入れて４本の竪堀が認められる。その竪堀の頭部の位置から考えて、不整形な削平段も城域として理解している。

《歴史》明応七年（1498）に大友親治が周防大内氏の宇佐郡代であった佐田氏を攻めた時、「菩提寺」に佐田俊景が立て籠もった（文書番号160号）。菩提寺の伝承地は、赤井城の続きの北側であり、城と寺の関係はにわかには決しがたいが、ここが佐田氏にとって「佐田古城」や「佐田山所々御陣」と言われる佐田城とともに重要な位置にあったことは間違いなかろう。遺構から見ると、佐田城が山城から出発して、最終的に居住も可能な空間に改変されているのに対して、この赤井城は当初から居住を目的とした「館城」として整えられた可能性が高い。（小柳和宏）



第49図 赤井城全体縄張り図（1/2,000）

【177　佐田城　宇佐郡安心院町大字佐田】

《立地》標高約300mの青山を中心として、そこから派生する尾根や尾根先端のピークに城郭遺構が見られる。麓との比高差は200mである。佐田城の位置する場所は豊前の南端に近く、ここからは東へ行くと豊前宇佐との境をなす立石へ、南へ下ると背後に府内を抱えた別府湾の山手に出ることとなる。まさに豊前・豊後の国境に位置する交通の要衝ということになる。

《現状》大部分が雑木林で、部分的に植林となっている。一部平成3年の台風19号による風倒木があるが、大きな被害とはなっていない。全体的に城郭の残存状況は良好である。

《構造》図のように、ａからｇの7箇所に遺構があるので、この順番で説明する。

ａは、比高差約200ｍの山頂にあり、最高所の主郭を含む約400mの範囲が中心曲輪群である。山頂部は登山道の険しさに比べ比較的広く平坦で、天然の要害となる急峻な山容を利用する城とは違った縄張りである。最高所の主郭は、大規模な土塁と横堀が巡り、直径55m×短径20～25mほどの曲輪で、北西部のコーナーが地形に合わせて北側に張出して不定形あるが基本的には長方形を呈し、他のコーナーはしっかりとした角をとっている。東南辺の土塁中央ほどに開口部があり、平虎口となっている。曲輪群は主郭を中心に南西、北西、東にのびる丘陵に両肩及び片方に土塁をもつ大規模な堀切、横堀、これらに連接する竪堀で固められた曲輪がそれぞれ一つあり、主郭を強固に固めるが、曲輪内方は主郭に比べ平場の形成が弱く、丘陵先端向かって削平段状の平場を階段状に繋げている。曲輪の外側にも多くの削平段と横のラインを守る横堀や丘陵を遮断する堀切が設けられ、二重三重に固め、堅固な構えである。特に南西の曲輪に横堀と繋がった竪堀群が集中的に認められ、この方面からの攻撃に神経をとがらせ、丘陵尾根を二重の大規模な堀切で遮断し、横掘は随所に高低差のあるクランクや不連続部を設け、堀底には障壁を設け、縦方向の堀を連接させて斜面や横堀内での横の動きを封じている。また守りの重要なポイントとなる南西曲輪の先端部北側や東曲輪の東端、主郭虎口南側に自然石や粗割の石材を垂直に小口積みした石積み（石垣）が築かれている。

ｂは、中心のａから比高差約100mの谷を隔てた東側400mの、ほぼ独立した山の上にある。楕円形状を呈する単郭の曲輪の南半に横堀を巡らせる。横堀は、ａとの関係を意識するように西側中央で土橋を持つ。曲輪の削平は十分でなく、周辺は不明瞭な削平段となる。

ｃは、ａから西側に向かって伸びる尾根の先端部に位置するもので、尾根の堀切から連続して、土橋を持つ横堀に繋がる。主郭は南北7m、東西15mほどの長方形で、北西角部が基壇状に約30～50cm高くなる。主郭周りには切岸により数段の腰曲輪や帯曲輪を作り、一部は横堀状を呈する。南西斜面には土塁を伴う竪堀が一条入れられている。城に至るには、尾根を下って来て、堀切に当たると南から回り込み、横堀外側の土塁上を通って横堀の土橋部分から虎口受けの曲輪に入り、そこから斜面を登り腰曲輪に入ることになる。

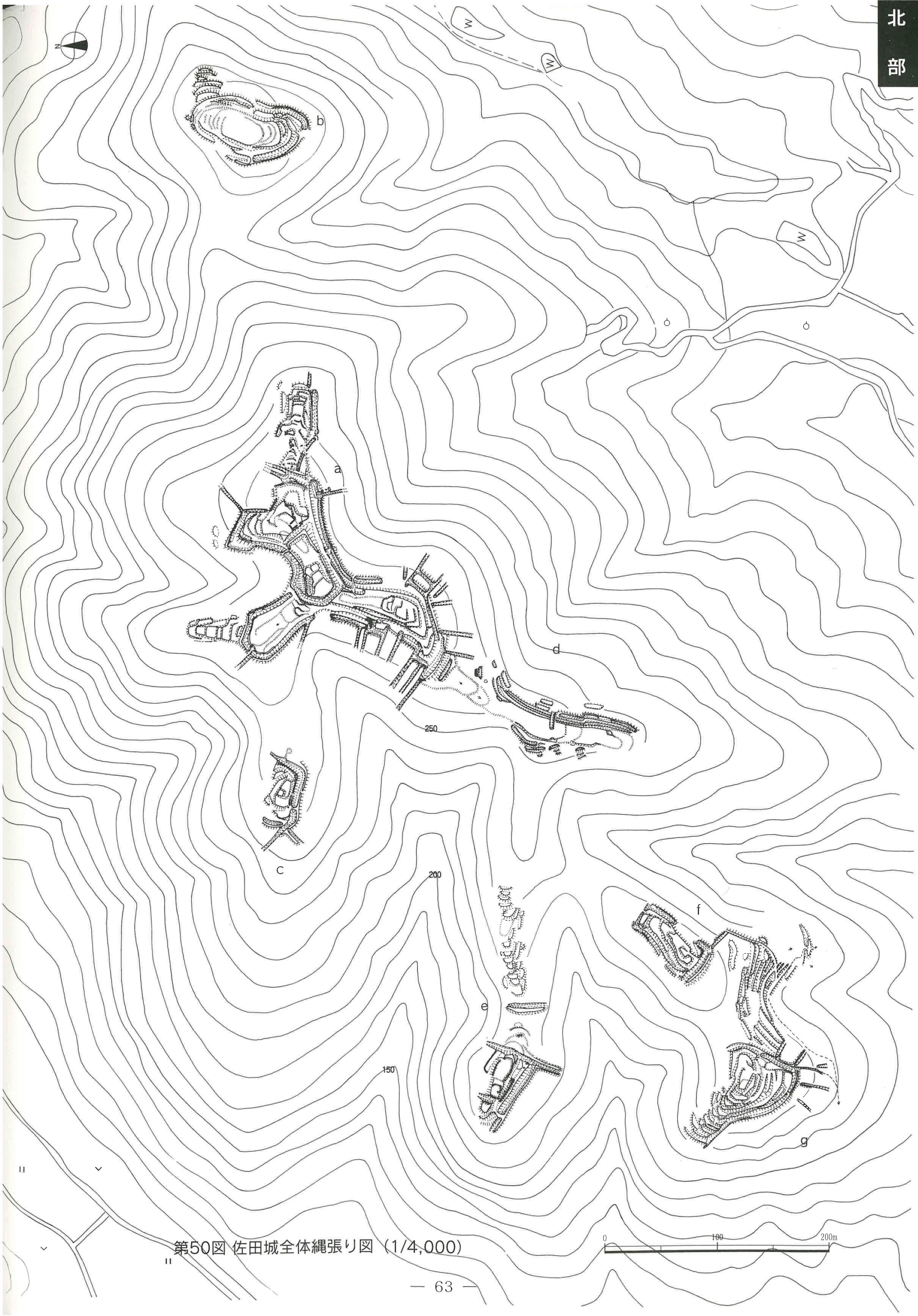
ｄは、中心のａから南に伸びる尾根上にあるが、平坦面は何ら加工が無く自然地形のままである。しかし、尾根の東側斜面には横堀が二重に設けられており、西側でも一部横堀があるなど、明らかにこの尾根部からａの曲輪群への接近を意識した配置となっている。

ｅは、ｄから西に伸びる尾根の先端部に位置し、二重の堀切で掘り切った先端部を城域とする。両側が竪堀になる二つ目の堀切からは横堀が派生し、南西斜面を固める。主郭は東西35mで南北10mほどの長方形で、土塁がほぼ巡る。西側は一段低くなり、その先は堀切である。主郭の南北には帯曲輪があり、北側の帯曲輪には土留め用と考えられる石列が端部に認められる。南側の帯曲輪は一部横堀状となるが、東端には角を有する高さ１ｍほどの石積みがあり、何らかの施設があったことが想定できる。隅角部は算木積みとはならないが、50～70cmほどの自然石を野面積みにしている。城内へは、ｃの曲輪群と同様、南側の横堀外側の土塁上を進み、土橋から狭い虎口受けの曲輪に入った後、斜面を登って主郭西側の曲輪に入るものと考えられる。

ｆは、ｄから西に伸びる尾根が分かれて南西に下り、いったん高まった部分に位置する。南東部の一部を除いてほぼ横堀が全周する。しかし、周囲の頑丈さに比べ、内部の曲輪部分は広い平坦面を作り出すことが無く、狭いピーク部を中心として帯曲輪が取り巻く形態をとる。北側の堀切は二重になっており、外側の東寄りに土橋を持つ。ここが虎口である。

ｇは、ｆからさらに鞍部を経て、西南西に伸びる尾根の先端部に位置する。ｆから伸びる尾根を掘り切り、それと連続して東側から南側、さらに西側と横堀、あるいは横堀状の帯曲輪が繋がって、全体として城域の3分の２を囲い込むことになる。北西に伸びる尾根は、階段状の曲輪を設けることによって処理している。その曲輪群の南西側は横堀から繋がる竪堀で押さえている。南側斜面部にも竪堀が6本認められる。曲輪部分は狭い主郭を何段にも帯曲輪が取り巻くもので、明確な技巧性は認められない。城へは、おそらく南側の竪堀を登って横堀に入り、そこから帯曲輪に取り付くものであろう。

なお、ｆとｇの曲輪群の間には南側斜面に帯曲輪状の平場が6～8段にわたって造られている。そして、その



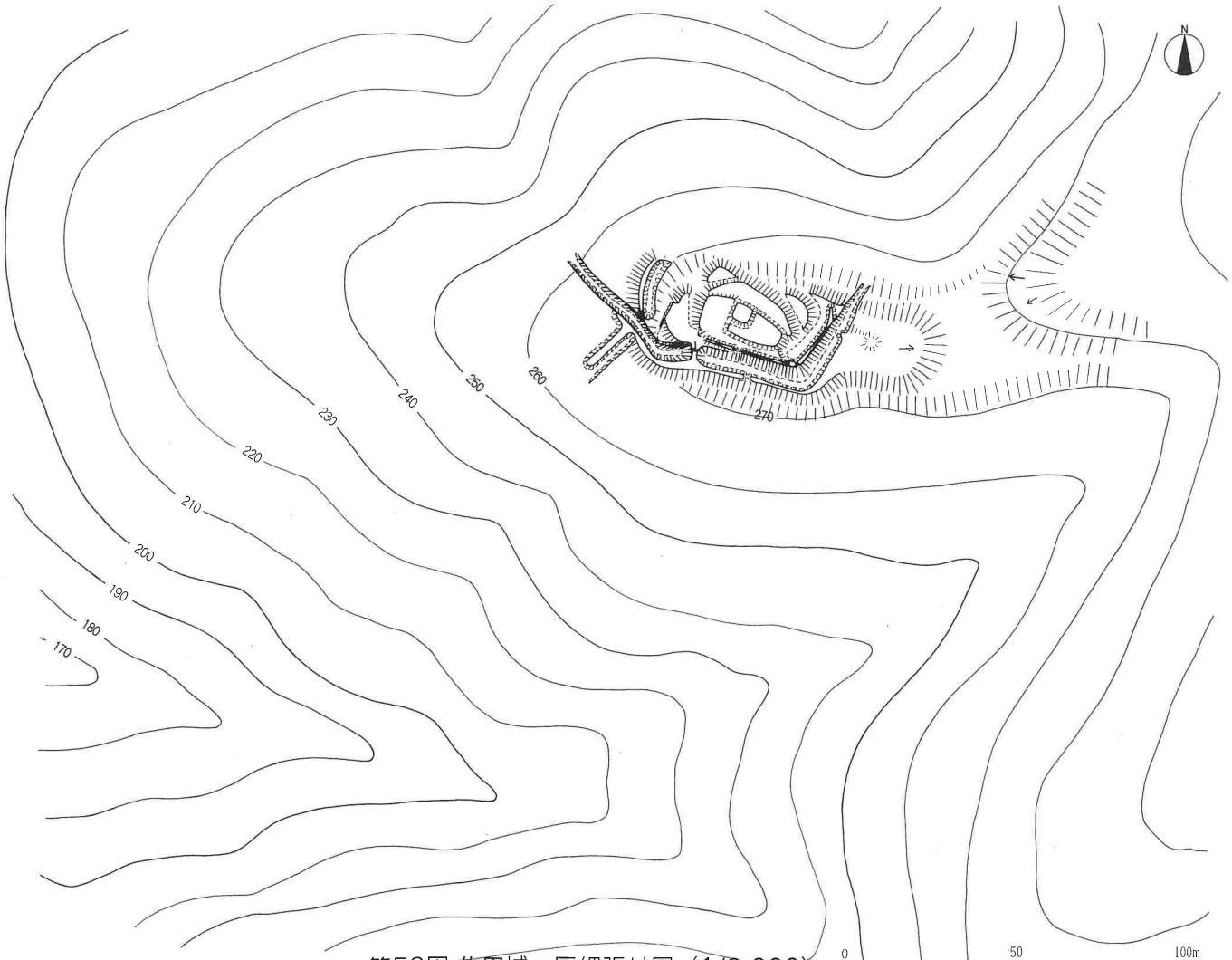
第50図 佐田城全体縄張り図（1/4,000）

第51図 佐田城a.d区縄張り図（1/2,000）

0 50 100m

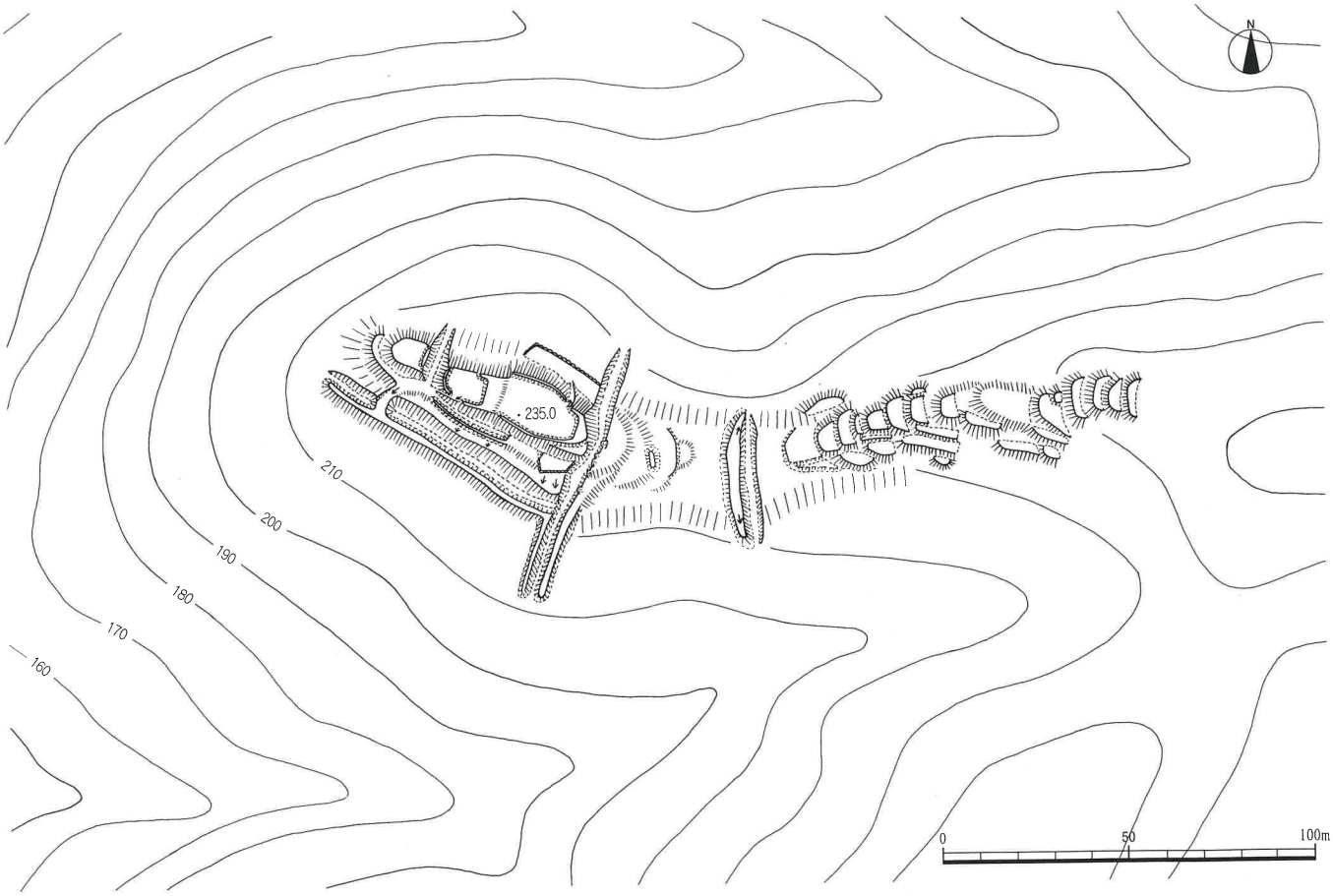
第52図 佐田城ｂ区縄張り図（1/2,000）

0 50 100m

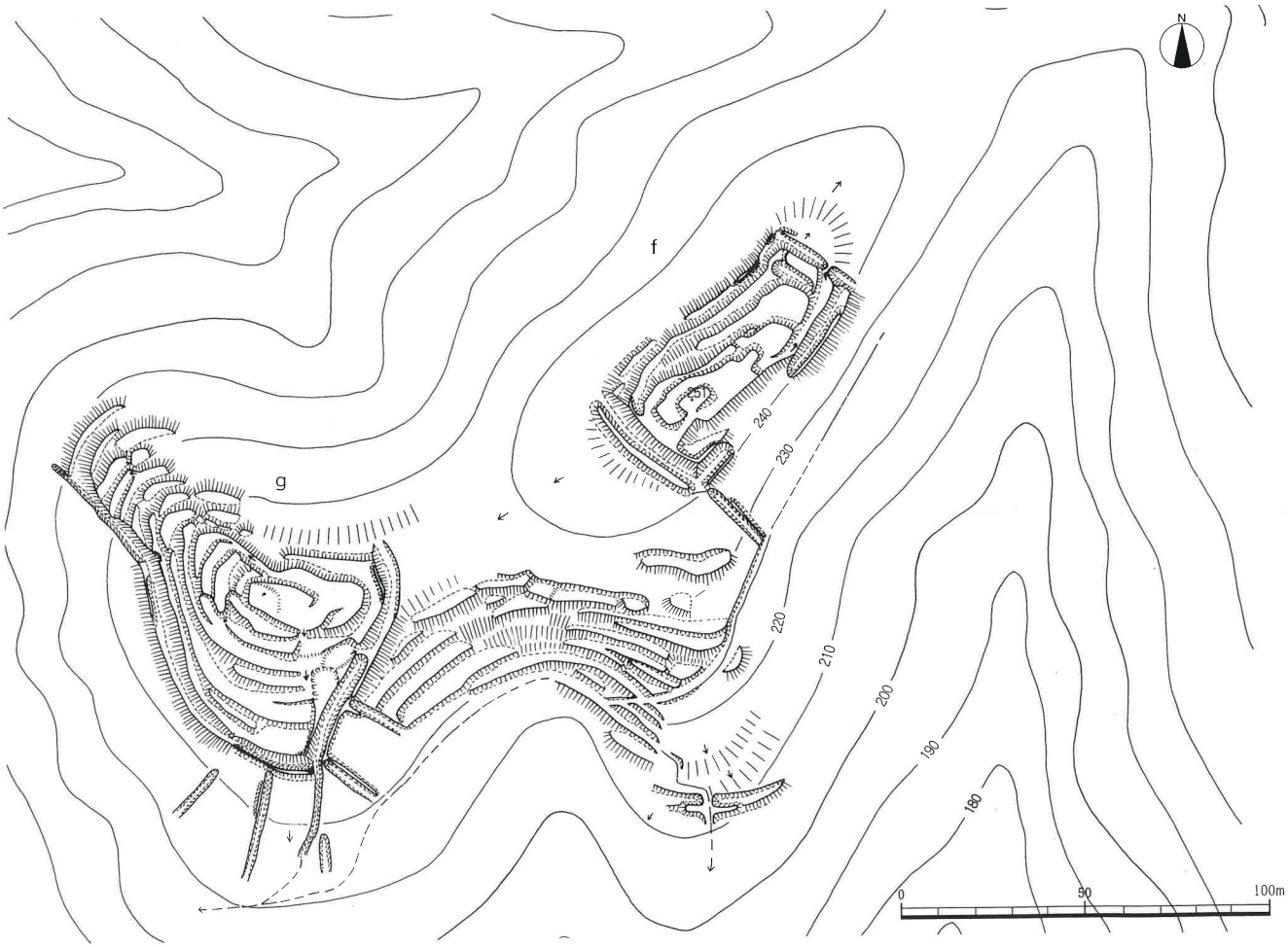


第53図 佐田城ｃ区縄張り図（1/2,000）

0 50 100m



第54図 佐田城e区城縄張り図（1/2,000）



第55図 佐田城f,g区縄張り図（1/2,000）

最下段の尾根のやや突出する部分には土橋を有する堀切がある。そのため、ここが両曲輪群全体の虎口と考えられる。なお、この佐田城全体で考えると、dの尾根を南から真っ直ぐ登るのが中心の曲輪群であるaに至る最短ルートである。

以上が中心部及び周辺曲輪群の概要である。周辺部の曲輪群の特徴は、主郭に連なる中心曲輪群の特徴ときわめて類似する。すなわち、曲輪内方の平場形成が弱く、削平段状の平場を階段状に配置し、外縁を塹壕的な横堀と竪堀で固める手法、さらには、横堀や堀切と竪堀への連接手法等々であり、中心曲輪群と同じ手によると考えられる。これらから、青山山頂の主郭を中心する曲輪群をそれに通じる尾根筋や独立丘陵を固める配置と言え、山全体の城砦化を図ったと考えられる。まさに、本陣と周辺の陣立ての構えであり、c・e・f・gの配置から西―北方に防禦の正面性（交通の主要ルート側か）が窺える。とすればbは後方の抑えであろうか。

《歴史》文書での初見は、明応7（1498）年に大友親治が「佐田古城」を攻めた時である（文書番号古文書部149）が、その際防備側の佐田泰景は「飯田山佐田山所々御陣等」を馳走した（文書番号160）。これ以後、佐田城に関する文書は一切なくなる。これだけの規模と明確な意図を持った縄張りの城郭が文書・記録に残らないのは不思議なことである。佐田山に点在するaからgの曲輪群は、dを除けば一つ一つは独立した城郭である。それが「佐田山所々御陣」に相当する可能性は高い。この「所々御陣」には「御前勢御面々衆」がいたが、佐田泰景はそれらを「存じ上げ」ていたことから、大内氏の宇佐郡代として直接掌握していた人々であった可能性が強い。しかし，竪堀と組み合う横堀の出現年代は永禄～天正期頃と考えられており、中国の毛利氏や北部九州東部の秋月氏等の城郭に特徴的な縄張りときわめて類似していることも確かなことである。従って、本城に係る陣立ての主体については、大友氏と毛利氏や島津氏の抗争、さらには黒田氏の豊前入封を契機とする一揆等々の背景を含め、その蓋然性を追及していく必要がある。（玉永光洋・小柳和宏）

a曲輪群主郭部の南側土塁を外側から見た状態

e曲輪群の主郭南側の帯曲輪にある石積み

a曲輪群南西曲輪の先端部北側の石垣

【189　龍王城　宇佐郡安心院町大字龍王】

《立地》安心院盆地を見下ろす標高315mの竜王山頂上に立地する。麓の集落（近世の城下町があった場所）が位置する段丘上との比高差は180m、沖積平野（安心院盆地）との比高差は210mほどある。

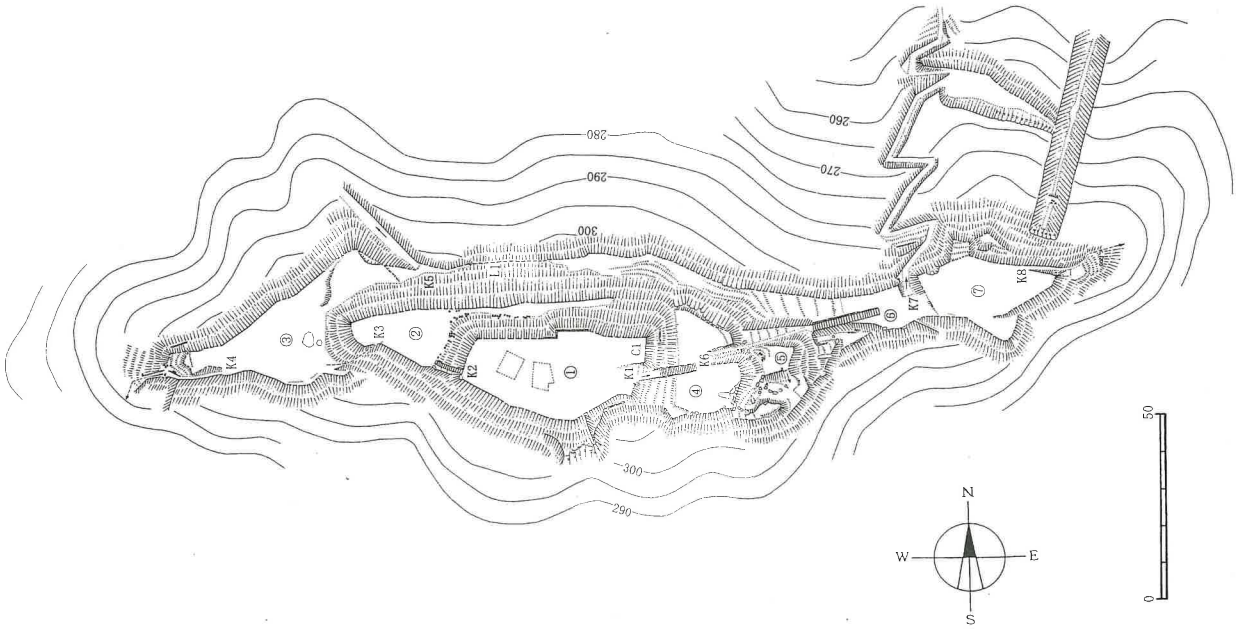
《現状》山頂部にテレビの中継アンテナが複数立っており、主郭部の平坦面が若干削平され、さらに入口部などでも後世の改変が及んでいる。

《構造》東西に長くかなりの比高差のある頂上部のほぼ中央に主郭を拵え、東西両側にそれぞれ数mの段差を持つ二箇所の大きな曲輪を設ける。このような基本的構造は天正10年段階の安心院氏籠城段階でできあがっていたと考えられ、この後天正14年の終わりから15年にかけて大友義統が在城した折りにどのような改修を行ったのか、あるいは行わなかったのかについては記録からは不明であるものの、図中のａ地点には細川段階以前と考えられる石垣が一部見られる。矢穴痕が無く表面をはつっただけのもので、自然の巨石にもたれかかるように積み上げている。これが、大友段階であるとすると文禄２年までの間に龍王城にも手を入れたことになる。

現状では虎口周辺など細川段階の石垣が見られるが、虎口はすべて平虎口で技巧的なものではない。石垣の隅角部も１段しか残らず、山の中腹あたりまで矢穴痕の残る石材が点在していることから、破城されたことが考えられる。

《歴史》若干の疑問が残る「宇佐郡三拾六人衆着到状案」に弘治2（1556）年「大友宗麟公豊前国龍王山城御在陣中宇佐郡三拾六人衆着到」とあるのが初見であるが、この段階では妙見岳城を廻る動きはあるものの、他に龍王城の動静は知られない。確実なのは天正10（1582）年に佐田弾正忠宛の大友義統の書状にある「安心院中務入道切寄」が初めてである。これは、天正７年頃から起こった豊前の動乱に呼応して安心院氏が龍王城に立て籠もり反大友の立場を明確に示した際のもので、「切寄」という呼称からこの段階で築城あるいは改修された可能性が高い。田原紹忍を中心にこれを討ったことから結果的に紹忍の城郭となり、天正14年12月に島津氏に府内を攻め込まれた大友義統は妙見岳城を経由して龍王城に紹忍を頼って逃げ籠もる。そして、この龍王城と紹忍の養子である田原親盛の妙見岳城の二城は、天正15年以降豊前に黒田氏が入っても大友氏に留め置かれた。このように、龍王城は天正10年に表舞台に登場し、一挙に妙見岳城と並ぶ城郭として扱われる意味は判然としない。

黒田氏が慶長5年に転封すると、その後細川氏が豊前に入部し龍王城を改修する。（小柳和宏）



〈木島孝之『城郭の縄張り構造と大名権力』（九州大学出版会 2001）より転載〉

第56図 龍王城縄張り図（1/2,000）

【192　金輪城　西国東郡大田村大字上波多方 / 速見郡山香町大字上畑】

《立地》田原山から峰続きの標高462.0mの山頂に位置する。この山塊は国東半島（豊後高田市～大田村～杵築市）と山香町を画するもので、この山塊を越えて国東側と山香側を結ぶ道を、中世には「山香道」と称していた。その山香道のひとつが金輪城の裾を巡る道である。山香側の集落「越井」からの比高差は160m、大田側の集落「乗越」からは110mである。「越井」には城主「田辺氏」の子孫を名乗る家がある。

なお、金輪城の北側峰続きには「白川稲荷」があり、現在は車でそこまで行くことが可能である。

《現状》現在は植林、雑木林であり、後世利用された痕跡がないので保存状況は良い。

《構造》山頂部は10m四方ほどの狭い平坦地で、北側と西側に低平（高さ30cmほど）な土塁を持ち、北東角部はやや広がる。主郭の北側と南側の尾根鞍部は堀切で遮断し、さらに南側には帯曲輪を有する曲輪群が階段状に作られている。城郭の周囲は岩場が至る所にあり、急崖をなしている。

《歴史》文書・記録に記載はないが、地元では国東田原氏の被官「田辺」氏が築いたと言われている。田原氏の勢力下であった国東半島と、大友氏の直接支配が行き届く「山香郷」との境界の位置にあり、田原氏側からは山香郷が見渡せる絶好の位置を占めたということができるであろう。（小柳和宏）

第57図 金輪城縄張り図（1/2,000）

【196　沓掛城　西国東郡大田村大字上沓掛】

《立地》桂川の上流に開けた狭隘な平野部を望む、標高165m前後、麓との比高差25mほどの丘陵先端部に立地している。近くにはこの平野部（田原別符）の地頭であった田原氏に係わる石造物などが残されている。

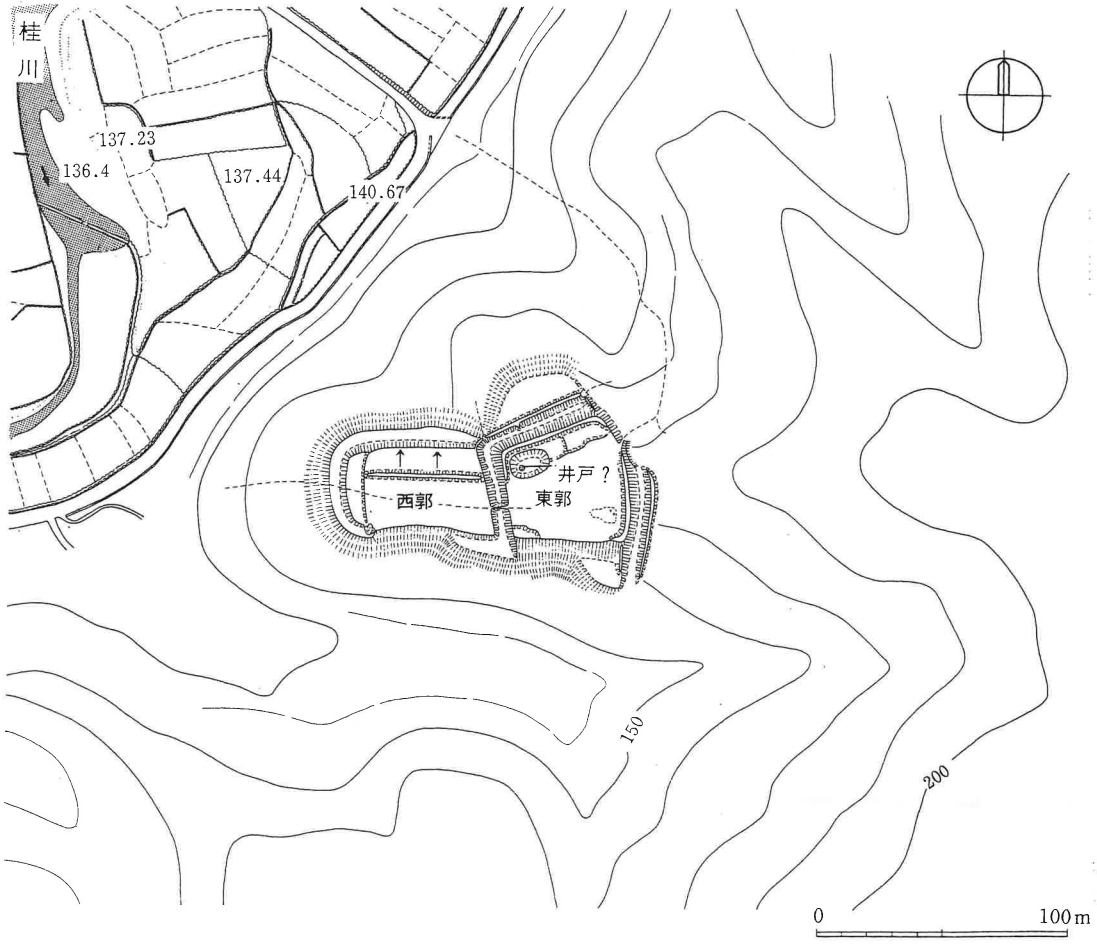
《現状》北東隅部が一部破壊されているものの、内部については比較的良く残っている。

《構造》二つの曲輪からなる。城域は、山頂部から下ってくる尾根線を幅10m、深さ５mに掘り切ることによって確保する。掘切の南側はそのまま小さな竪堀に繋ぎ、北側は破壊されて不明であるが西側に回り込む横堀と連結していたものと思われる。内側には高さ2mほどの土塁を回す。堀と土塁で三方を囲まれる上位に位置する第一の曲輪（主郭）は、一辺約50mの略方形に整形される。その西側に続く第二の曲輪は東西50m、南北30mの長方形で、中央やや北寄りで東西方向に延びる高さ1m前後の土塁で仕切られている。この曲輪には北側と西側に幅4～5mの帯曲輪が付設されている。

このような、小規模でありながら土塁と横堀を廻らせる城郭は少ないが、比高差などを勘案しても居住機能を有した「館城」と考えられるものだろう。

《歴史》田原別符の地頭であった田原氏の城郭といわれる。しかし、中世の文書でそれを裏付けるものはない。立地は、田原谷の南側半分を見渡せる位置で、眼下にある館跡（岡の前遺跡）や田原家墓地（丸山墓地）の存在から見ても、田原氏に係わる館城であったのは間違いないだろう。（小柳和宏）

参考文献『豊後国田原別符の調査Ⅰ』（大田村教育委員会,1994）



〈上記参考文献より転載〉

第58図 沓掛城縄張り図（1/3,000）

【198　真玉氏館　西国東郡真玉町大字西真玉字内城ほか】

《立地》周防灘に向けてなだらかに延びてきた台地上の標高16m前後のところに位置する。微視的に見ると北側に浅い谷が入るが、ほぼ平坦な地形である。

《現状》真玉寺という寺院が館跡の南東部に位置し、一部旧状が失われている。また、本来館の回りを廻っていたと考えられる堀と土塁は、大きく改変されている真玉寺の周囲は別として、北側の一部を除いて残存していない。内部の平坦面は過去に学校用地であったため削平を受けている可能性もあるが、確認されていない。

《構造》堀の外側まで入れると東西140mで南北110m以上の館部分が小字「内城」、その外側が「外城」といい、二重構造の館であった。実際、発掘調査によって小字「外城」とその北側の小字「貴船」との境に14世紀代の溝が検出されており、その内側、すなわち「外城」では掘立柱建物群が確認されているものの、小字「貴船」の部分では全く検出されていない。よって、略方形の館の北側に幅60m規模の区画が接続される構造であったと考えられる。また、真玉寺が近世になって現位置に移ってきた（『真玉町史』）と言われており、現真玉寺の部分は小字「貴戸の前」であることから、ここが虎口として機能していた可能性が考えられる。

「内城」の回りの堀は、旧字図によると東辺の北側半分では明確に痕跡を確認できない。北側を東西に延びる堀は、おそらく東側の浅い谷にそのまま落としていたものと考えられる。また、現真玉寺を取り巻く水堀の北東角部は、「外城」の東辺を南に延長した線とズレを生じており、ここで一つの単位が終結している可能性がある。つまり、真玉寺の造営が堀の形状を大きく改変しているという前提に立てば、一見方一町以上の方形館に見えるものの、実際は東西140m、南北80m程度の長方形の区画（内部でさらに分かれていたことも考えられる。）になる可能性がある。

《歴史》大友系木付氏が大友氏時の命を受けて真玉荘地頭に封ぜられた南北朝期以後、この地で旧来の地頭であった大神系の真玉氏と争いながら勢力を得る。発掘調査で確認された最も古い時期が14世紀であり、この木付系真玉氏の入部と館の構築が関係する可能性がある。今後、発掘調査によって解明される事が期待される。（小柳和宏）

第59図 真玉氏館周辺小字集成図（1/4,000）

2．県中部の城館

ここでは、豊後の中枢部にある城郭36箇所を取り上げる。守護所があり、戦国期の中頃になって大友宗麟が臼杵に移るまで政庁が置かれ町が形成された府内と、宗麟が築き一時期政庁が置かれた臼杵があり、そこにはそれぞれ高崎城、丹生島城というやや性格の異なる大友氏ゆかりの城郭がある。

そして、府内の防御のために北に鹿鳴越城があり、南には鶴ヶ城を始め畝状竪堀を有する城郭群が点在する。

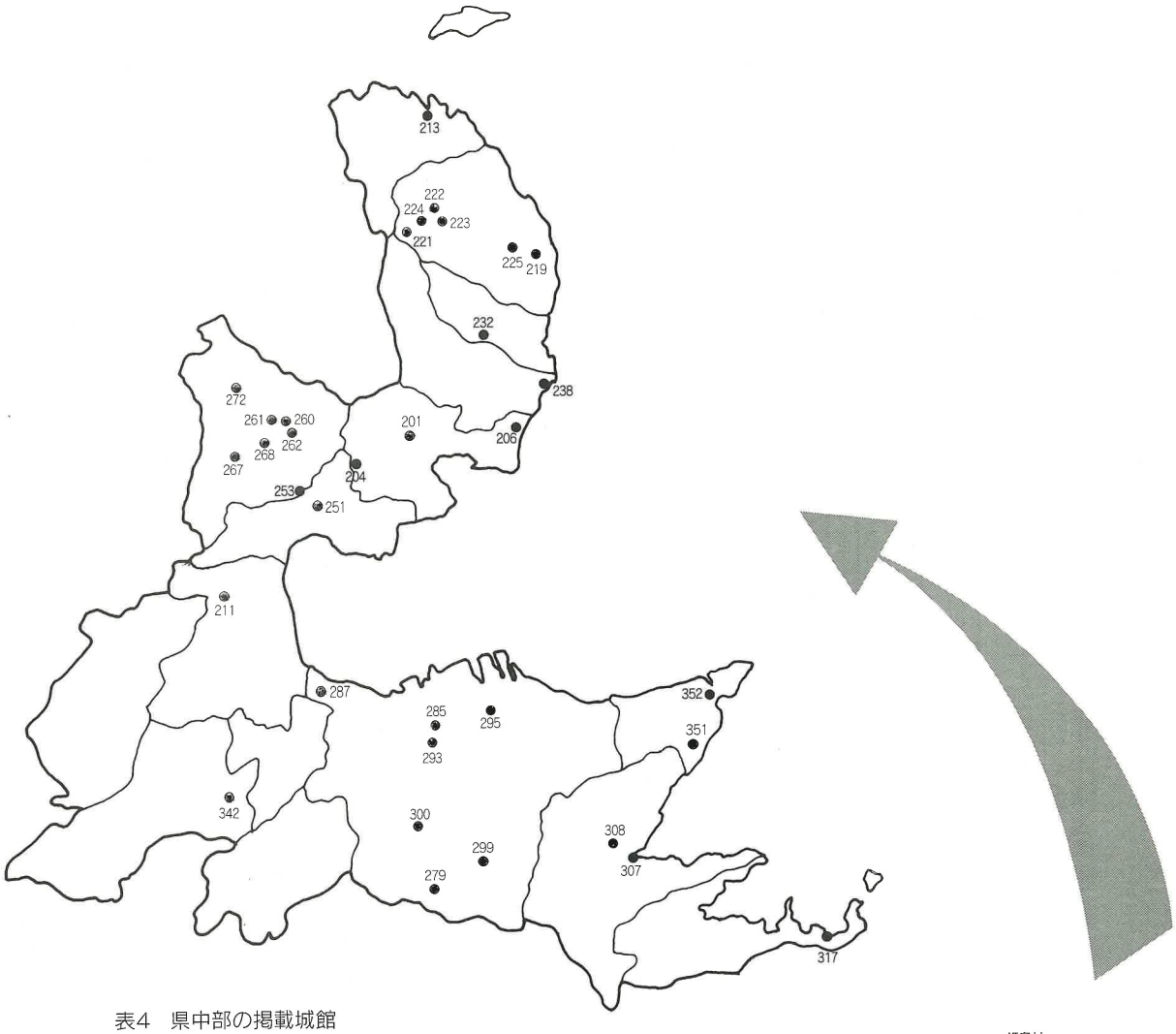
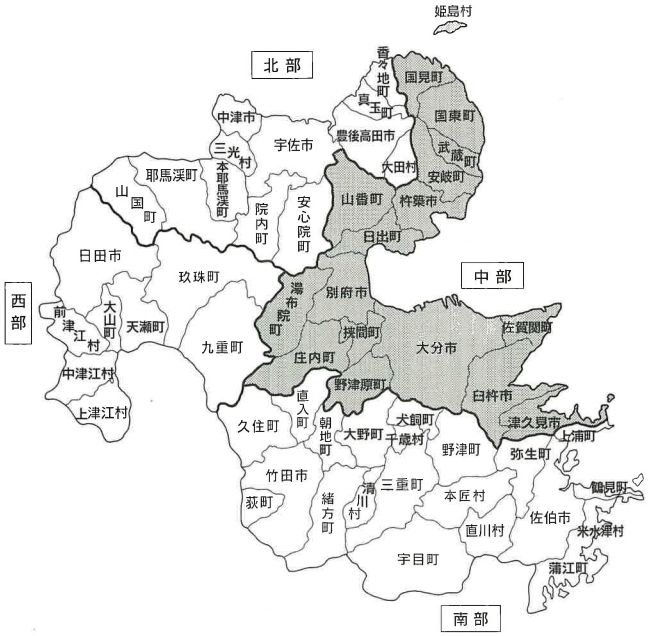


表4　県中部の掲載城館

番号	城館名	頁数	番号	城館名	頁数
201	竹の尾城	73	267	日指城	94
204	生桑城	74	268	樋掛城	95
206	奈多城	75~76	272	立石城	96
211	ふいが城	77	279	天面山城	97-98
213	岐部城	78	285	大友氏館	99~103
221	成仏城	79~80	287	高崎城	104~107
222	御所の陣	81	293	上野大友館	108~109
223	小城	82	295	千歳城	110
224	雄渡牟礼城	83	299	鶴ヶ城	111~112
225	亀城	84	300	小岳城	113
232	吉広城	85	307	丹生島城	114~115
238	安岐城	86~87	308	水ヶ城	116
251	真嶽城	88	317	久保泊城	117
253	鹿鳴越城	89~90	342	権現岳城	118
260	甲ノ尾山城	91	351	一尺屋摺木砦	119
261	小松城	92	352	烏帽子岳城	120
262	龍ヶ鼻城	93			



第60図 県中部城館位置図

【201　竹の尾城　杵築市大字鴨川】

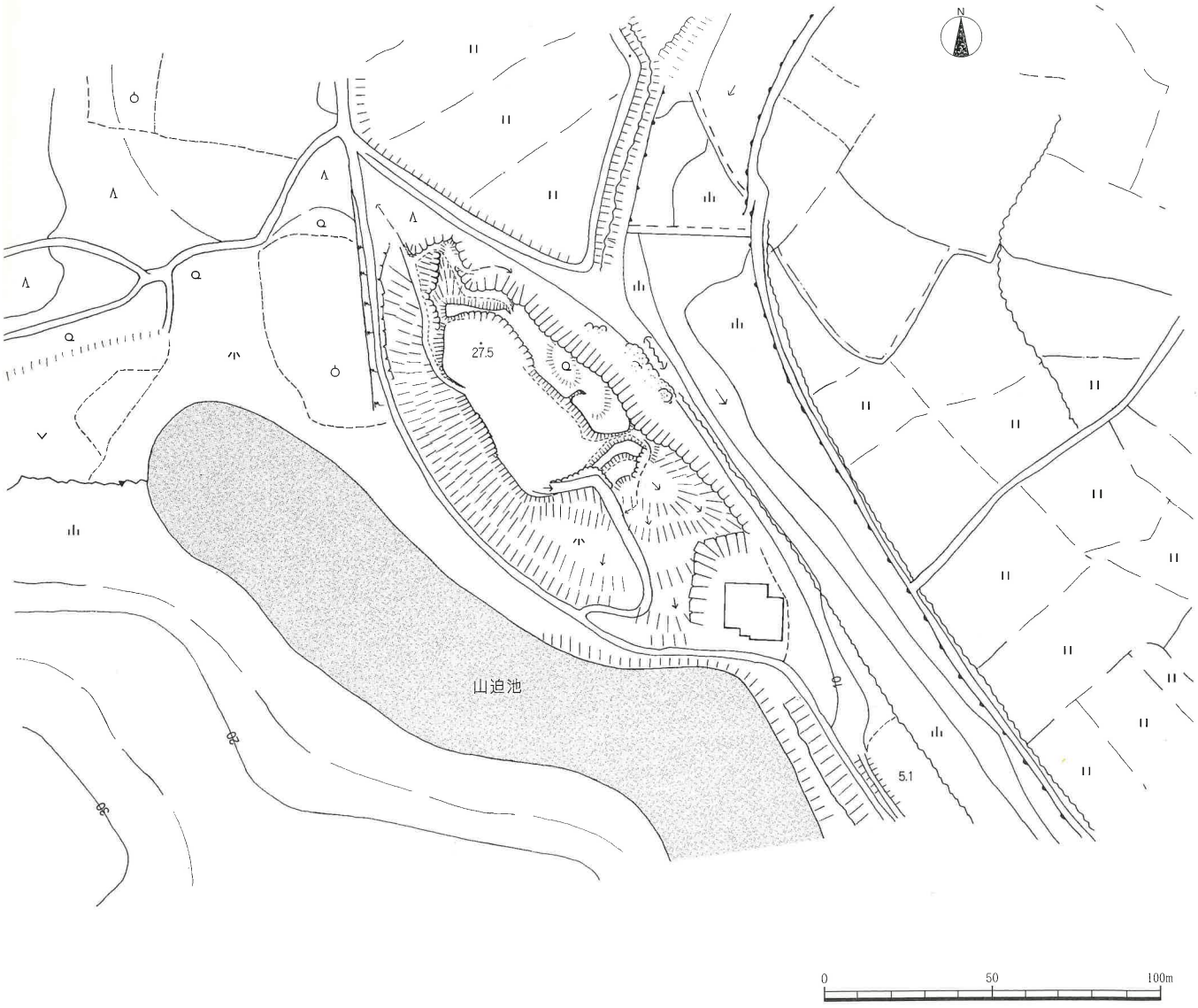
《立地》杵築湾に注ぐ高山川右岸の残蝕丘陵上に立地する。丘陵は南北120m、東西40mほどで、比高差20mほどである。そして、高山川に面する東側はほぼ垂直の崖となっている。

《現状》丘陵上の北端に墓地があり、その一角は削平を受けているが、他は概ね残されている。しかし、最近丘陵上に登る車道が取り付けられており、その部分は削平されている。

《構造》南北に細長い丘陵上面をそのまま城域とするが、本来上面が山状になっていたものを、東側崖面に面した部分を土塁状に残しながら西側3分の2を削平し、平坦面（曲輪）を作りだしたものと考えられる。削り残しの部分は幅10m、高さ2mほどの土塁となり、北端部では地形に沿って西に屈曲し、先端部がやや櫓台状に広くなる。逆に南端部は一度途切れ、再び南面する辺に土盛りで構築されたと考えられる土塁を設ける（南西角部は破壊のため不明）。そして、この土塁は東端で屈曲し、削り残し土塁との間の一端途切れた部分が虎口となる。そのため、主郭に至るには、斜面を登ってこの屈曲する南面土塁の先端部を回り込み、土塁の切れ目から内部に入るものと考えられる

主郭の西側面は土塁は無く、切岸のみである。北側から斜めに登ってくる道は、後世のものである。

《歴史》大友系の木付氏が弘安年中頃に築いたと言われ、応永元年に現在の杵築城（近世城郭が築かれている）の位置に移ったとされる。しかし、現在残された遺構は戦国期に下ると考えられる。（平川信哉）



第61図 竹の尾城縄張り図（1/2,000）

【204　生桑（いくわ）城　杵築市大字生桑】

《立地》西を八坂川、東を野狐（やっこ）谷に挟まれた、幅の狭い丘陵の先端部に位置する。標高は51.9mで、麓の集落との比高差は30m程である。麓には、中世以来の曹洞宗寺院である「生桑寺」がある。

《現状》山頂部は神社が建っており、削平や盛土の影響で旧状が失われている。それ以外は雑木林であり、旧状を留める。

《構造》神社西側の最も高い部分が主郭で、北側は横堀、東側は神社でよくわからないが、横堀から一段低い帯状の曲輪が巡っていたと考えられる。北側の横堀のさらに北側は、北西方向の山塊からの尾根が伸びてくるが、その間を4本の堀切で遮断している。特に第1、第2の堀切のあたりは、尾根幅が2m程しか無く、両側はほぼ垂直に切り立った崖となっている。あるいは両側は削り込まれ、道を意識的に狭めた可能性もある。

主郭南側斜面はやや下ったところに数段の帯曲輪が見られる。

《歴史》中世文書には記載がないが、「古城」として地元では認知されていた。生桑寺は、この地域が中世に属した「八坂荘」の地頭であった八坂氏の菩提寺であり、野狐谷池掛かりの水が八坂荘中心部の大半をまかなっていたことを考えると（ただし、池の成立は下る可能性はあるが、この谷水は利用されていたはずである）、この地を押さえる生桑城は、規模は小さいものの重要な意味を持っていた可能性がある。（小柳和宏）

第62図 生桑城縄張り図（1/2,000）

【206　奈多城　杵築市大字奈多】

《立地》国東半島の東部海岸沿いに展開する低丘陵の先端に位置する。奈多城のある場所は、微視的に見ると北西から伸びてきた丘陵が、一度くびれてやや広がる部分にあたる。標高は25mほどで、麓の集落部分との比高差は10～15m程度である。

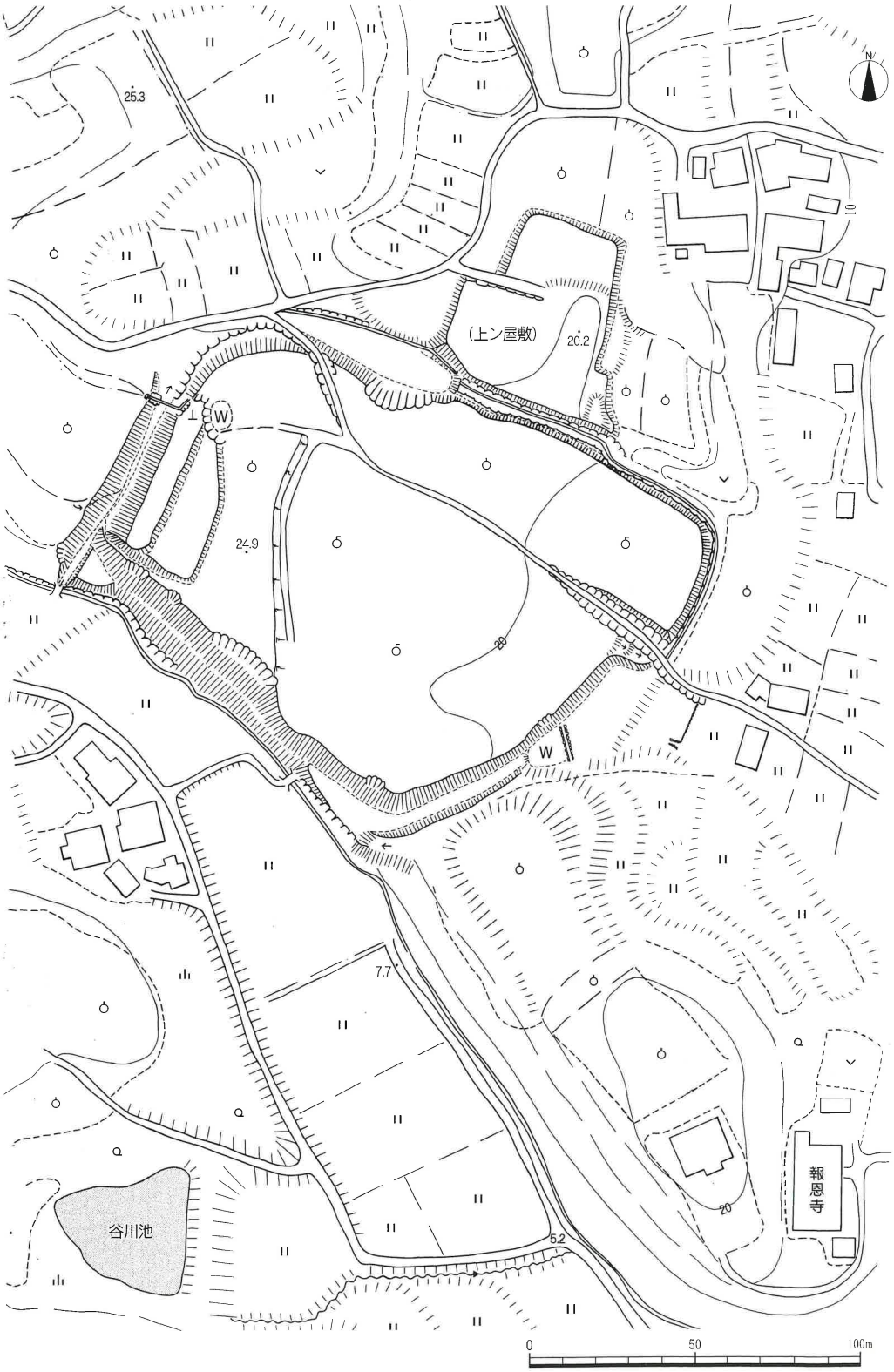
奈多城の南東部の尾根続きには奈多氏の菩提寺である報恩寺がある。また、さらに南約1㎞の海岸には、奈多氏が宮司を務めた八幡奈多宮がある。

《現状》全面畑（現在は蜜柑）であり、平坦面の削平等が著しい。周辺部も特に北側は旧状が失われている。

《構造》主郭部は、東西140m、南北80～110mの不整長方形を呈する。西側には幅6m程の土塁状の高まり（平坦面からの高さは2mほど）とさらに一段の平坦面がある他は、ほぼ平坦である。さらに、北側には堀を挟んで「上ん屋敷」と呼ばれる平坦地がある。これも一体と考えてよいであろう。そうすると、2つの郭を備えた城館ということになる。

外周部は、第1郭の西側は、丘陵を切断するように幅約12m、深さは内部の土塁上から約5mほどの横堀で直線的に掘り切る。南側は高さ6～7mほどの切岸となり、そのまま南側に回り込んで横堀となる。第1郭に南東部から登る道は、城館の手前で屈曲しており、そのまま坂を登って城館内部に入るが、この道を境にして、郭の東辺が食い違っており、城館が機能していた当時からこの道が存在したことを推測させる。

《歴史》遺跡名は「奈多城」とされ、今回も呼称をそうしたが、実態は「奈多館」である。館に入る道は、東南東方向に直線的に伸び、そこで「古町川」に突き当たり、川に沿って迂回する。そのあたり（国道の東側）が、いわゆる「古町」と呼ばれる集落で、館、寺、町といった要素がこの地に見られることは注目される。（小柳和宏）



第63図 奈多城縄張り図（1/2,000）

明治21年旧字図による宅地

同上　水田

同上　山林

同上　水路、溜池

奈多城の曲輪面は、明治21年段階で水田化しているが、報恩寺まで伸びる丘陵上にあたり、小字谷川の水田とは、比高差が数m程ある高台である。奈多城西側の山林は、切岸の斜面を表している。南側は堀である。

0　100　200m

第64図 奈多城周辺小字集成図（1/4,000）

【211　ふいが城　別府市大字野田】

《立地》別府市街地の扇状地を望む鶴見岳や硫黄岳の火山群から東に張り出すように延びる丘陵の先端部にあり、小さな独立した山の頂上の北東隅に立地している。標高は390mほどで、湯山の集落とはあまり比高差はないものの、一度谷に下るため実際は70mほどの比高差となる。場所は、高原地帯を通って豊前や玖珠方面に抜けるルート上にあたる。

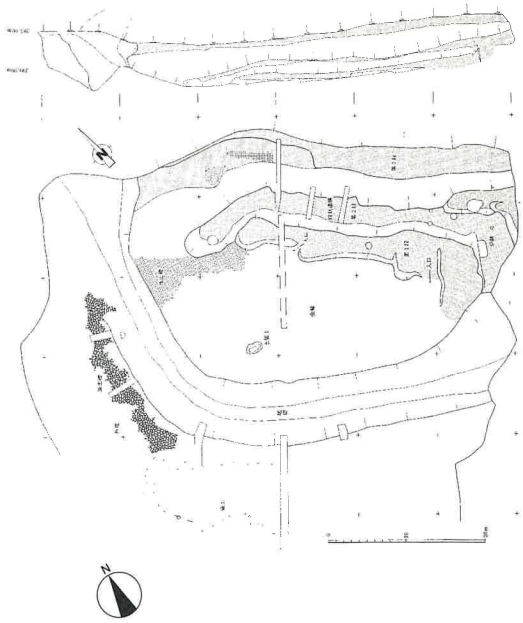
《現状》大分自動車道建設工事に先立ち発掘調査が行われ、調査後主要部は破壊されている。

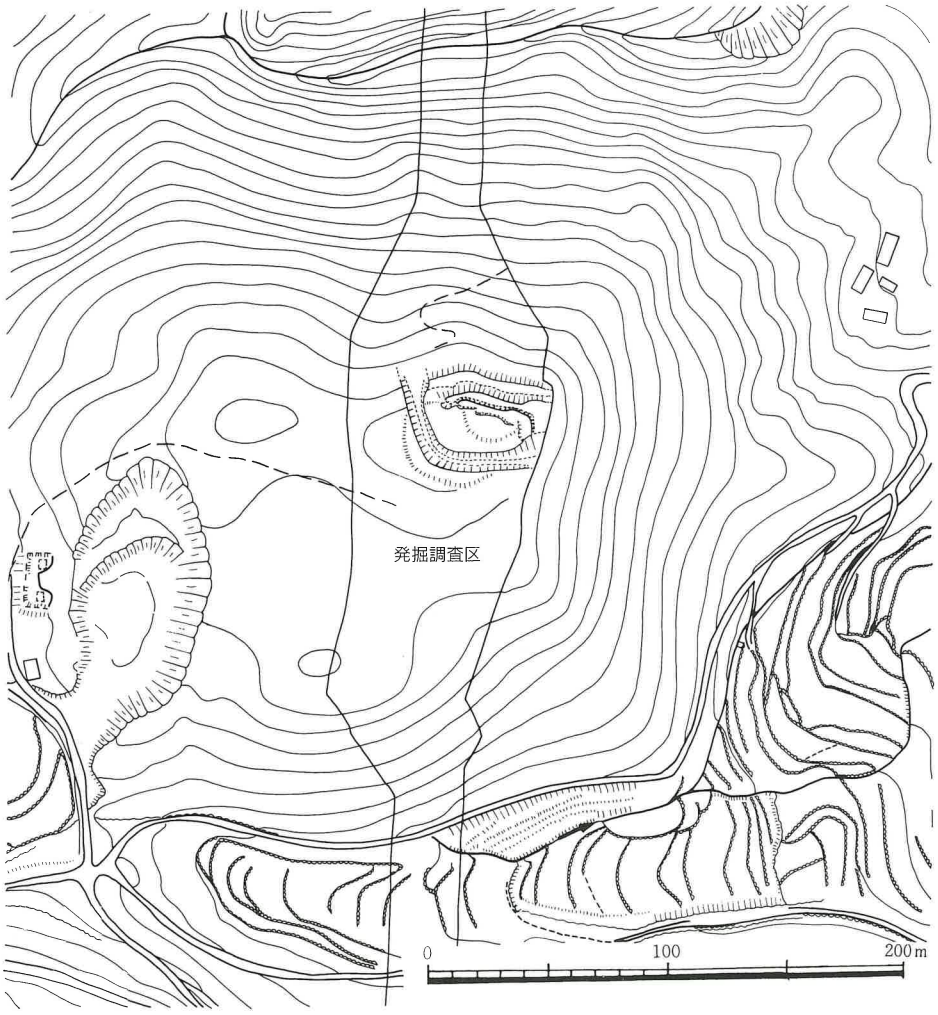
《構造》山頂部は150m四方ほどの平坦面があるが、城はその内東側のピーク部分を利用して造られている。最高所を「L」字状に横堀で囲み、東西44mで南北28mほどの平場（曲輪）を形成している。横堀は、幅6～8m、深さは2～3.5mある大きなものである。堀の外側には盛土が認められ、土塁が構築されていたと考えられる。堀は一度掘り直しされているが、規模は拡大されていない。曲輪は北側に三段の帯曲輪を有す。全面調査されているが、建物は確認されていない。

出土遺物は少ないが、堀の構築は14世紀中頃から後半、掘り直しは15世紀から16世紀前半とされる。

《歴史》同時代史料には記載が無く詳細は不明である。しかし、位置から別府市北部に広がる竈門荘の地頭竈門氏との関係を想定できる。一般に横堀の発達が戦国期後半であることからすればやや突出した時期になるが、南北朝期における小城郭の一類型として貴重な存在である。（小柳和宏）

参考文献『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（2）』
（大分県教育委員会、1990）





〈上記参考文献より転載（一部改変）〉

第65図 ふいが城測量図（上）と概略図（下）

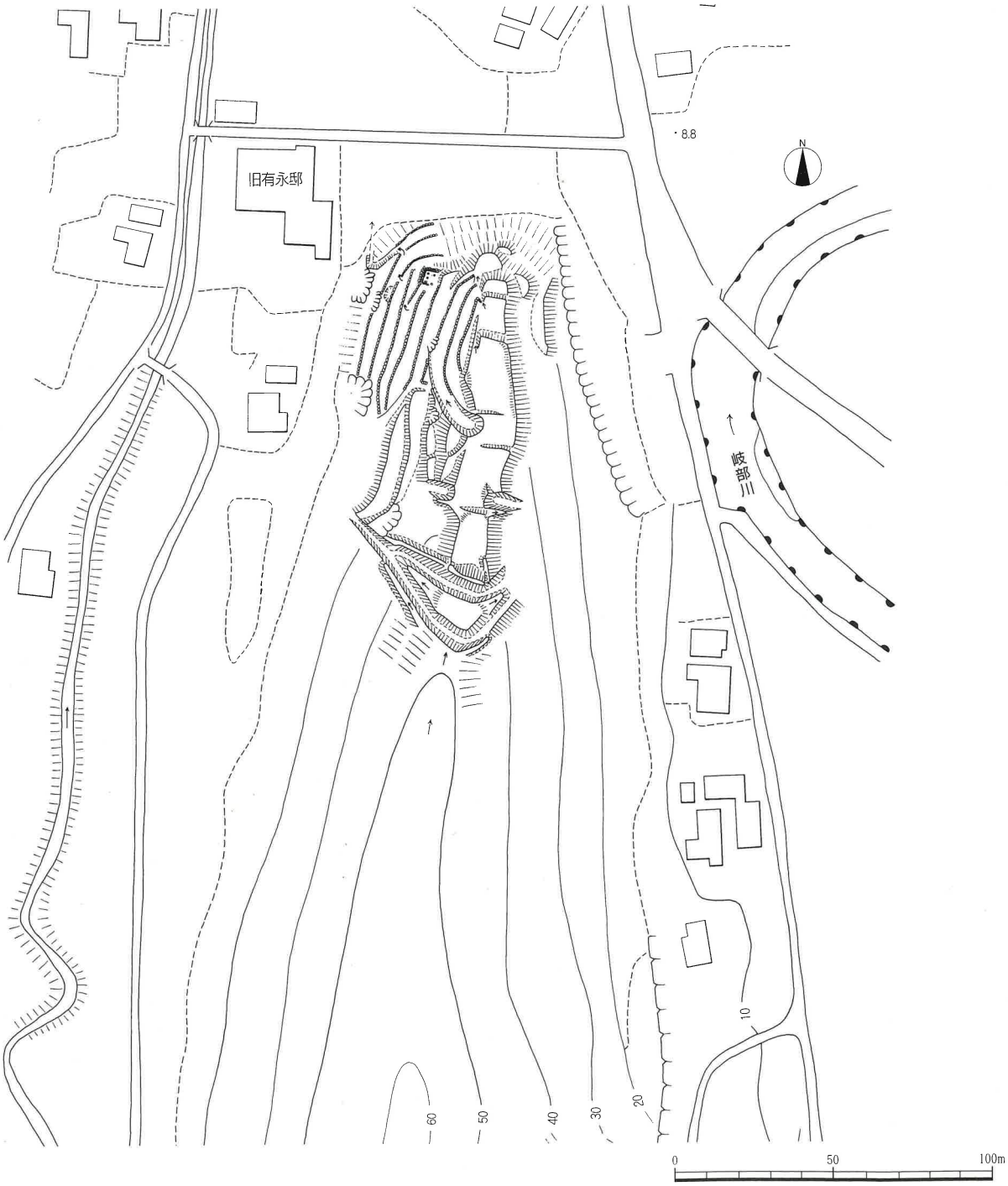
【213　岐部城　東国東郡国見町大字岐部】

《立地》国東半島の北岸で、岐部川と小さな谷に挟まれた細長い丘陵が、海岸平野に突き出た、その突端の50mの等高線が回るあたりに位置する。麓の沖積地は標高が4～5m程である。

《現状》現在は雑木林で工作物は無いが、城郭の北西側斜面には8段に渡って棚田状に石垣が積まれている。さらに、ほぼ中間の地点には柱穴を伴う櫓台状の石垣がある。これらは、城郭の北西裾にある、庄屋であった有永家の借景として構築されたものである可能性が高い。

《構造》南側から伸びてきた丘陵の先端120mほどの地点で2カ所堀切（＋竪堀）を入れ、遮断している。内部は、7段の階段状の曲輪が作られている。特に、最も上位の曲輪（主郭）は、手前の曲輪との境に東西両側に小さく竪堀を入れ、横方向の回り込みを防いでいる。残りの下位の曲輪は単純に階段状に作られているが、下位曲輪との通路はジグザグに設定されている。

《歴史》在地土豪の岐部氏の城郭と言われるが、当該期の文書、記録には見あたらない。しかし、国東半島の浦々を支配する小規模な在地土豪（浦部衆）のひとつの典型的な城郭と考えることができる。（小柳和宏）



第66図 岐部城縄張り図（1/2,000）

【221　成仏城　東国東郡国東町大字成仏字城】

《立地》国東半島中央部に位置する標高720mの両子山から、北東に約１㎞下った標高397mの山頂に位置する。最も近い集落「京乱」との比高差は約200mほどある。山頂は火山岩が露出する部分が多い。

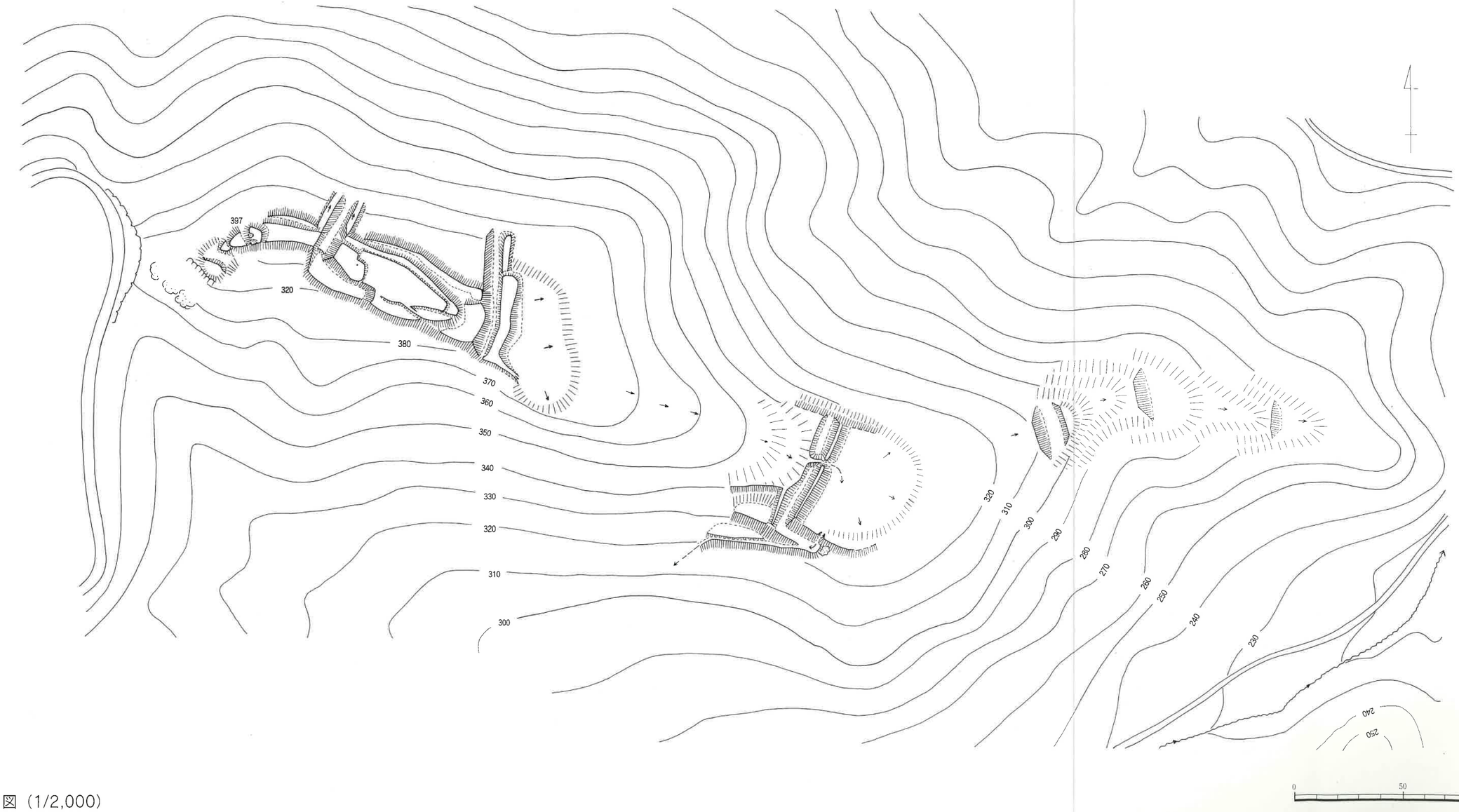
《現状》全体的に雑木林や植林、草地であり、残存状況は良好である。しかし、両子山から伸びてきた尾根の鞍部をなす部分に掘り割りで県道が通っているため、その部分に堀切が存在したかどうかが不明である。

《構造》両子山から下ってきた尾根は、鞍部を経て再び高くなるが、その最も高い部分が主郭で、そこは東西に堀切を設け、東西60m、南北20mの略長方形の空間を確保している。北側、南側ともに帯曲輪を設ける。西側堀切の西側にも数段の小さな曲輪と一条の堀切がある。東側の堀切の外側は幅4～5m、高さ2m程の土塁があり、南側がスロープとなって土塁上にあがり、（おそらく橋を架けて）堀を越えて主郭に入っていたと考えられる。

さらに、主郭部から直線距離で東南東に約130m、比高差70mを下った地点に土橋を有する堀切を設け、城虎口を形成している。坂を西側から登ってくると堀切から屈曲して続く帯状の曲輪に着き、そこに虎口曲輪（II）に登る単純な坂虎口がある。虎口曲輪は、自然地形を残す。そこからは土橋を渡って、また自然地形のままの斜面を主郭方向に登ることになる。

また、虎口曲輪から東側に下る尾根の途中3カ所に大規模な切岸（高さ6～8m近い段差を作る）を設け、尾根を通って登るルートを完全に遮断している。

《歴史》当該期文書には記載が無く、また地元での伝承もはっきりしない。そのため城主等は不明であるが、雄渡牟礼城を中心とする国東田原氏の城郭群のひとつと考えることもできるだろう。国東半島は、他の谷に移動しようとすれば、一度浦に出るか、または谷の一番奥の両子山の裾を回ってまた下るか、の道が想定できるが、この成仏城の位置は、まさに後者のルートの押さえの位置とすることができる。何となれば、城の両側を流れる谷は田深川の源流であり、これを下るとまさに国東田原氏の本貫地に至るからである。（小柳和宏）



第67図 成仏城縄張り図（1/2,000）

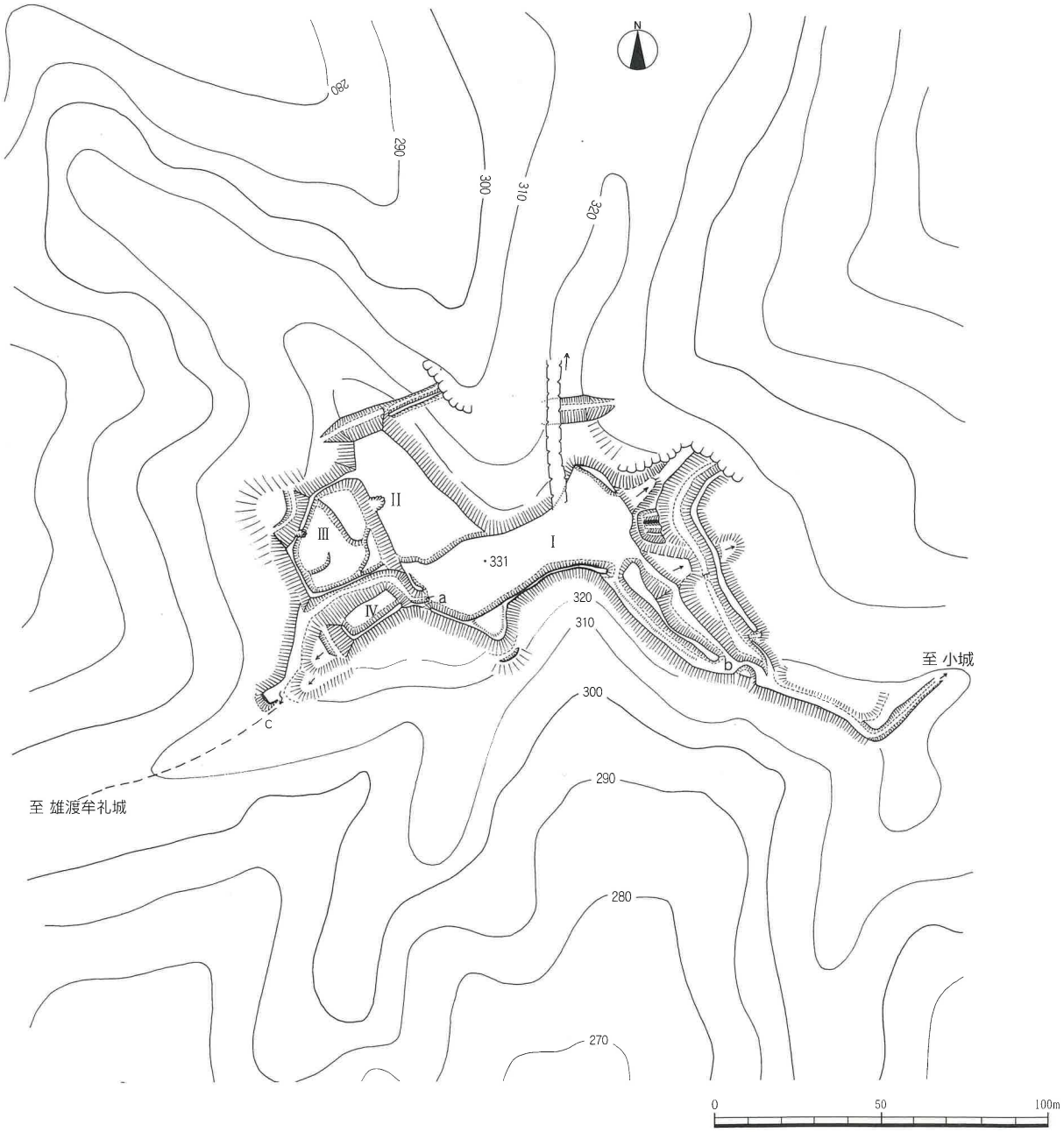
【222　御所の陣　東国東郡国東町上成仏】

《立地》標高535.1mの小門山（雄渡牟礼城）から北東に約1km下った標高331mあまりの尾根の結節点の平場に位置する。周囲に集落はないが、南側の田深川流域の沖積地との比高差は200mほどある。

《現状》植林であったが、平成3年の台風19号の風倒木被害で、城郭遺構にもやや影響が出ている。また、切り倒した木の搬出のための作業道も新たに作られており、一部堀切等が破壊されている。

《構造》尾根の結節点の平場を巧みに使い、L字状に2カ所の曲輪（Ⅰ、Ⅱ）をつなげ、尾根と繋がる部分をことごとく堀切で遮断する。そして、224の雄渡牟礼城と223の小城に繋がる尾根には虎口の施設を設ける。前者（a）は、曲輪Ⅱから下る土塁で囲まれた曲輪Ⅲと、曲輪Ⅰの西側に一段低く作られた曲輪Ⅳの間を城道が通り、曲輪Ⅰの壁（石積みが見られる）に当たり右折し、さらに左折しながら坂を登る虎口である。曲輪Ⅳが十分に防御機能を発揮することができる。後者（b）は、後世の改変があり十分に復元できないが、横堀によって狭められた尾根上を通り、櫓台状の高まりを回り込んで曲輪Ⅰに至る。コンパクトにまとまった城郭である。

《歴史》「御所の陣」という呼び名は地元の言い伝えであり、江戸期の記録にも出てくる（『豊城世譜』）。天正8年、反乱を起こした田原親貫に対して、大友義鎮は次男の親家を雄渡牟礼城に入れる。雄渡牟礼城は224で詳細を記すが、技巧性に乏しいやや古い城郭で、この天正8年段階のものとは思えない。むしろ、御所の陣がそれにふさわしい城郭と考えられる。「御所」という呼称も、大友本家の存在を暗に示すものではなかろうか。



第68図 御所の陣縄張り図（1/2,000）

【223　小城　東国東郡国東町上成仏】

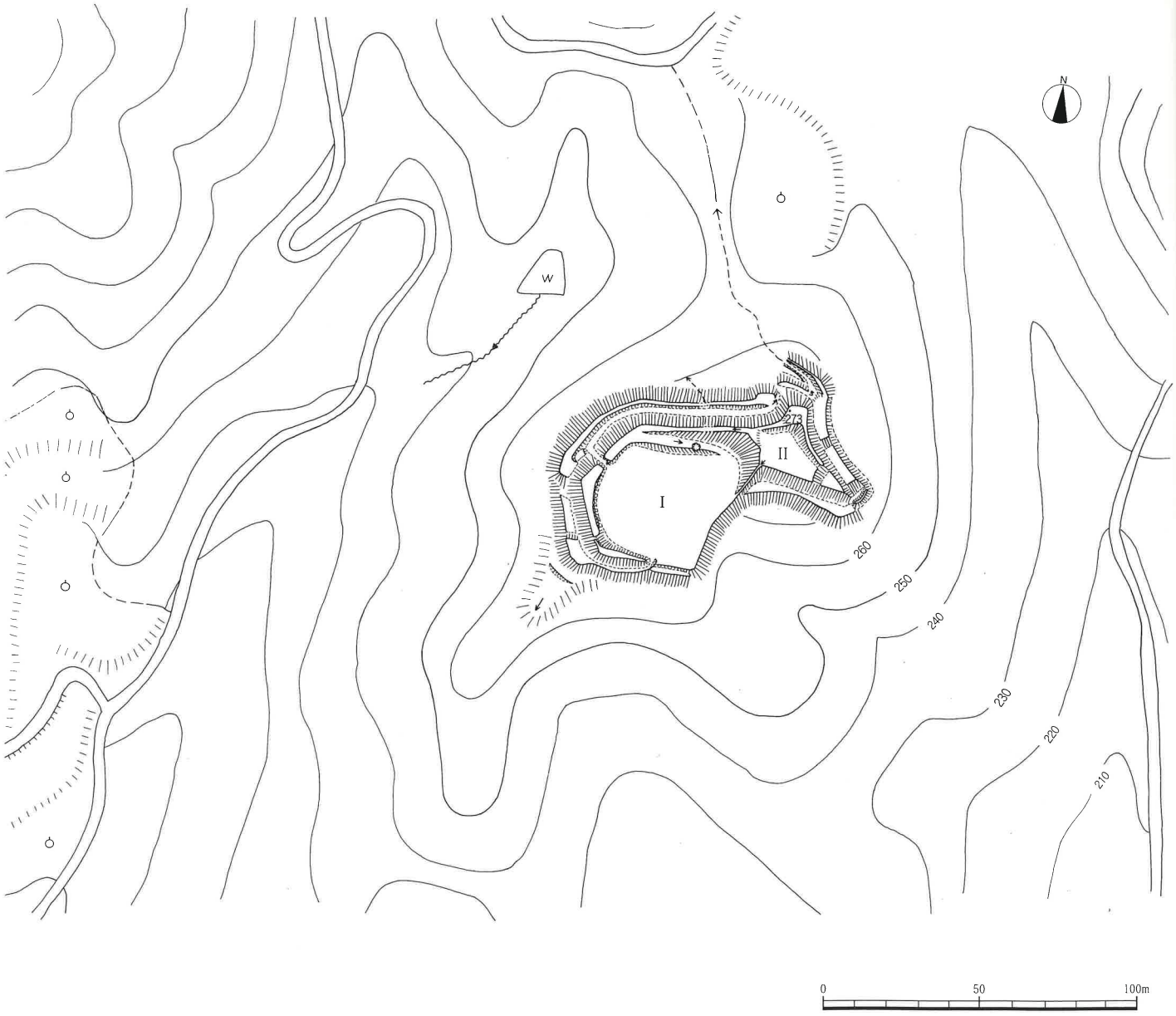
《立地》御所の陣（222）から、南東方向に直線距離で500mほど尾根伝いに下ると、標高273mの小丘がある。その頂上部につくられたのが小城である。田深川の沖積地との比高差は140mほどある。

《現状》雑木林となっており、旧状がよく残っている。

《構造》三方を土塁で囲まれた約40m四方の曲輪（Ⅰ）と、そこを見下ろす10m四方程度の小さな曲輪（Ⅱ）からなる。北側の尾根伝いに登ってくると、曲輪Ⅱの北側に突出した櫓台状の高まりに見下ろされるように回り込みながら、曲輪Ⅰの北側に延びる横堀に入ることになる。この横堀の北側土塁の東西の端部には櫓台状の広がりがある。この横堀を西に進むと曲輪Ⅰの土塁が切れた虎口がある。

曲輪Ⅰは、曲輪Ⅱから下ってくる土塁から連続して南側まで土塁を4分の3周させる。曲輪Ⅱは、北と東側に土塁を設け、東と南側には一段低く帯曲輪を設けている。さらに、曲輪Ⅰに向けて北西角と南西角部から土塁を下らせている。

《歴史》同時代の文書、記録には記載がないが、地元ではこの城のことを「小城」と呼んでいる。地理的関係、また構造的にも上位曲輪から下位曲輪に向けた土塁、横堀の状況の共通性などから御所の陣（222）との関係が深いものと考えられる。



第69図 小城縄張り図（1/2,000）

【224　雄渡牟礼城　東国東郡国東町成仏】

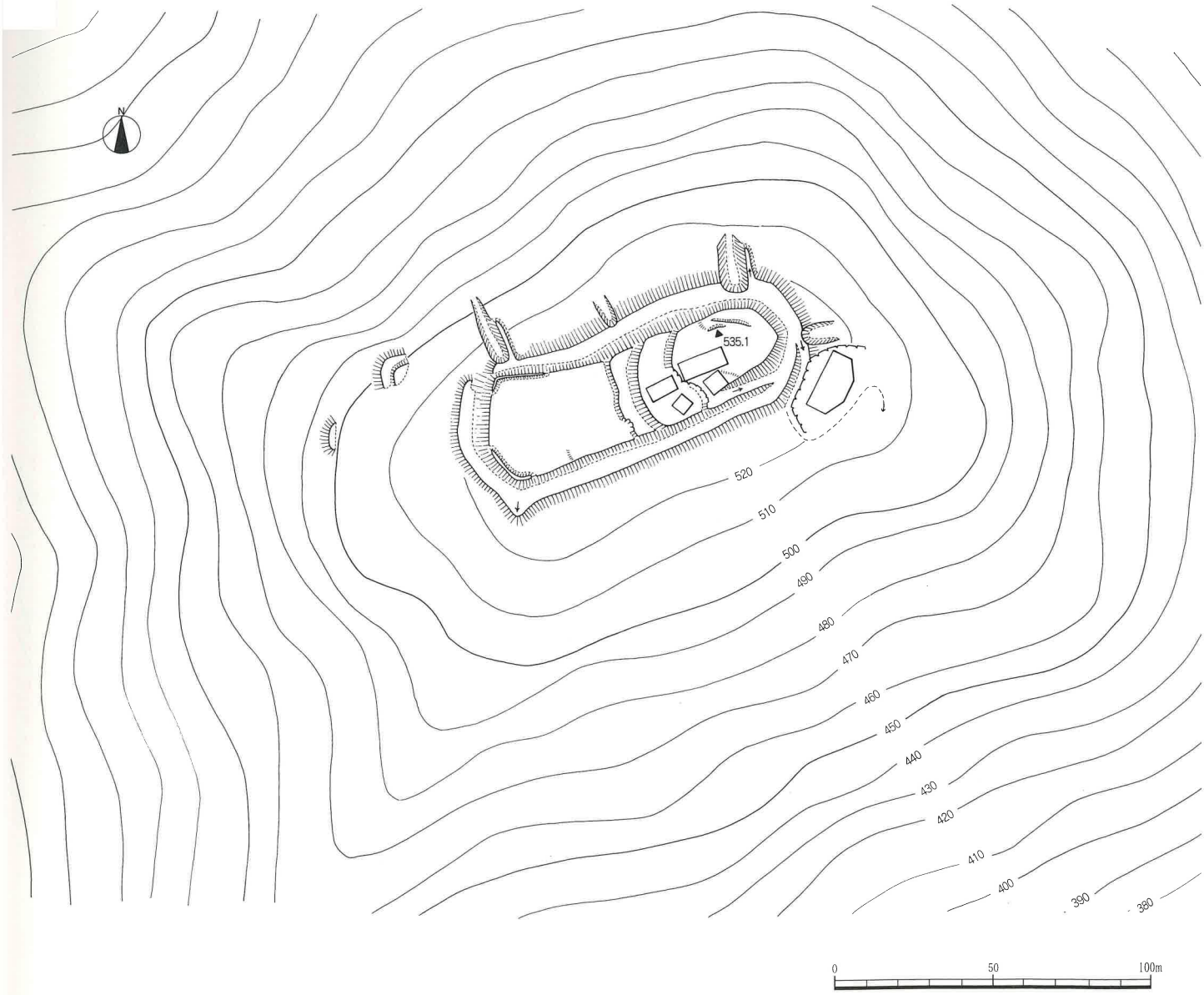
《立地》国東半島中央から東部に掛けての地域でひときわ高い独立峰「小門山」頂上に位置する。標高は535.1mで、田深川の沖積地までの比高差は380m近くある。山頂からは360度の展望が得られる。

《現状》山頂部にテレビの中継施設があり、大きく壊されている部分があるが、基本的な構造は押さえることができる。山頂部の平坦面は台風による風倒木被害があり、現状では草地となっている。斜面部は植林である。

《構造》４つの階段状の曲輪からなり、その周囲には一段の帯曲輪を巡らせている。曲輪群は全体で東西95m、南北20～35mの長方形を呈し、最も下位の曲輪の北西角と南西角を中心とした部分に低平な土塁が残存している。帯曲輪は北西角部で途切れるが、ほぼ一周し、そこから北側斜面で三本、東側斜面で一本の計四本の竪堀が掘られている。

虎口は、作業道や施設の関係で十分に検討ができないが、曲輪Ｉに帯曲輪から斜めに直接登る道があり、現状では唯一曲輪に取り付くルートとなっているので、この部分に本来の虎口が存在した可能性はある。

《歴史》南北朝期以来、国東田原氏の城として文書に頻出する。構造的には田原氏の館といわれる亀城（225）と基本的に同じである。館城（亀城）を山頂にそのまま持って行ったような構造である。そうすれば、現状の遺構が、国東田原氏によって形作られたことは間違いないであろう。竪堀の入れ方などから、戦国末期まで下るものではない。御所の陣（222）の項で触れたように、天正8年大友氏が田原氏を討つために雄渡牟礼城に大友親家を入れたが、この際の改修は無かったか、あるいは文書の「雄渡牟礼」とは御所の陣のことであったのか、どちらかであろう。



第70図 雄渡牟礼城縄張り図（1/2,000）

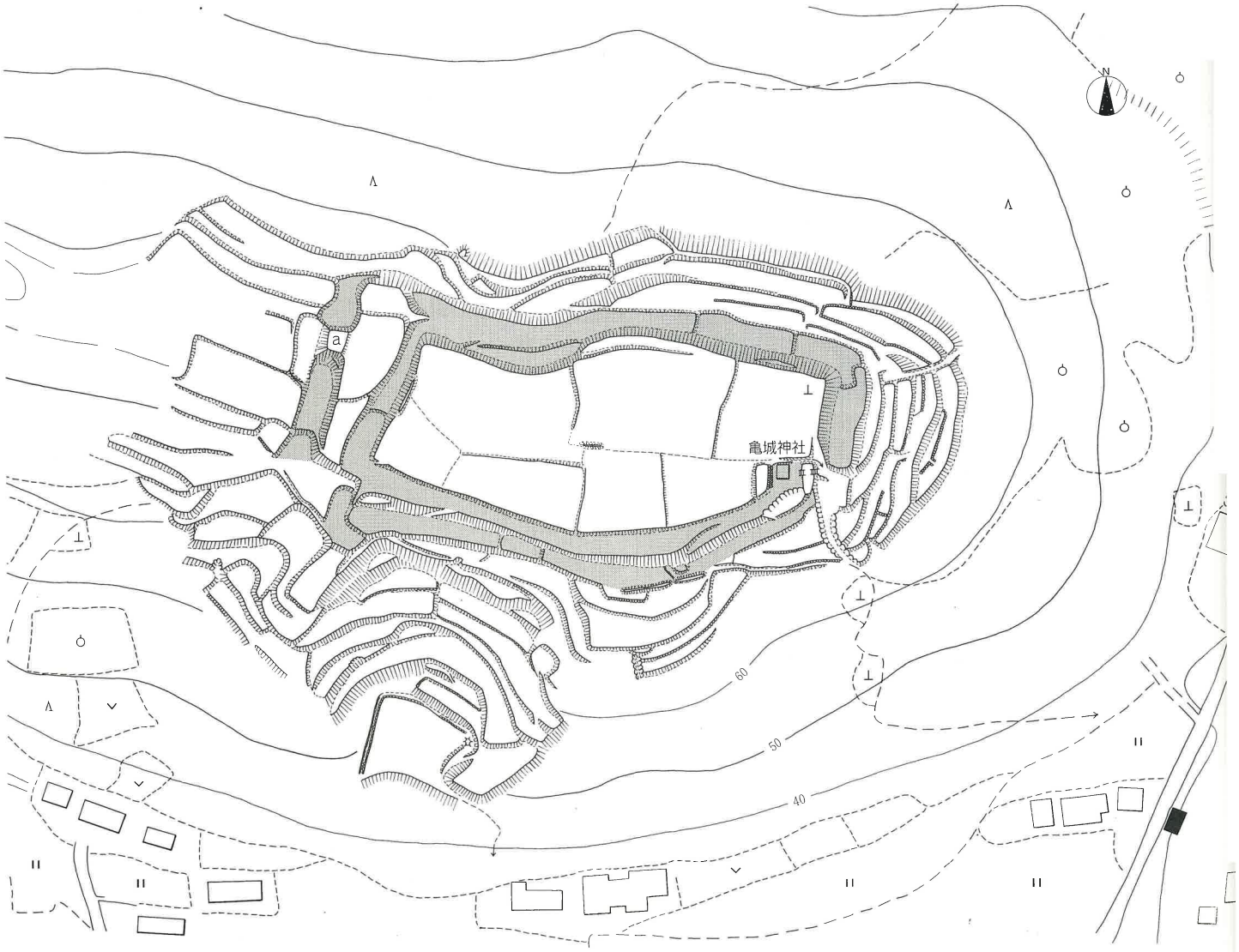
【225　亀城　東国東郡国東町大字中田】

《立地》田深川と横手川に挟まれた丘陵の先端、二つの川が合流する地点に位置している。標高は約80mで、麓の集落との比高差は50m程である。

《現状》標高80mのラインが取り巻くあたりが丁度平坦面をなしており、現状では雑木林と植林、畑地となっている。また、台地南東部には「城八幡社」や墓地が作られており、旧状が一部失われている。全体的には、段々畑の段差と城館の切岸による段差が区別できない状況である。

《構造》基本的には東西130m、南北40～60mの略長方形の平場（曲輪）の回りを二段に帯曲輪が巡る（螺旋状）ものである。西から延びてきた丘陵を、帯曲輪から繋がる二カ所の堀切で遮断する。外側の堀切の中央やや北寄りには「オテンス（お天守？、お天主？）」と呼ばれる櫓台状の高まりがある。曲輪内部は明確な段差は無く、現状で地目の境がわずかな段差や浅い溝で認められる程度である。また、南東角部にある神社境内が西から伸びてきた帯曲輪とつながり、ここから主郭に入ったものと考えられる。神社に南から登ってくる道は新しいと考えられるので、どこからか帯曲輪に取り付き、虎口に至るものであろう。主郭周囲の二重の帯曲輪より下位の曲輪状の平場は、後世に畑地として利用した事は確実であるので（新しい石垣が至る所で見られる）、どこまでが城郭に伴うものかは判断できなかった。

《歴史》国東田原氏の館といわれるが、同時代の文書には記載が無い。（小柳和宏）



※アミ掛けは堀切及び横堀状の帯曲輪

第71図 亀城縄張り図（1/2,000）

【232　吉広城　東国東郡武蔵町大字吉広】

《立地》国東半島東岸に注ぐ武蔵川の支流、吉広川の沖積地から比高差110mほどの丘陵上に立地する。標高は185.5mで、南側から伸びてきた丘陵の先端部に位置するが、丘陵が比較的なだらかなため、北側にある沖積地を見下ろすことはできない。沖積地には、国選択無形民俗文化財に指定されている「吉広楽」で有名な楽庭八幡社がある。

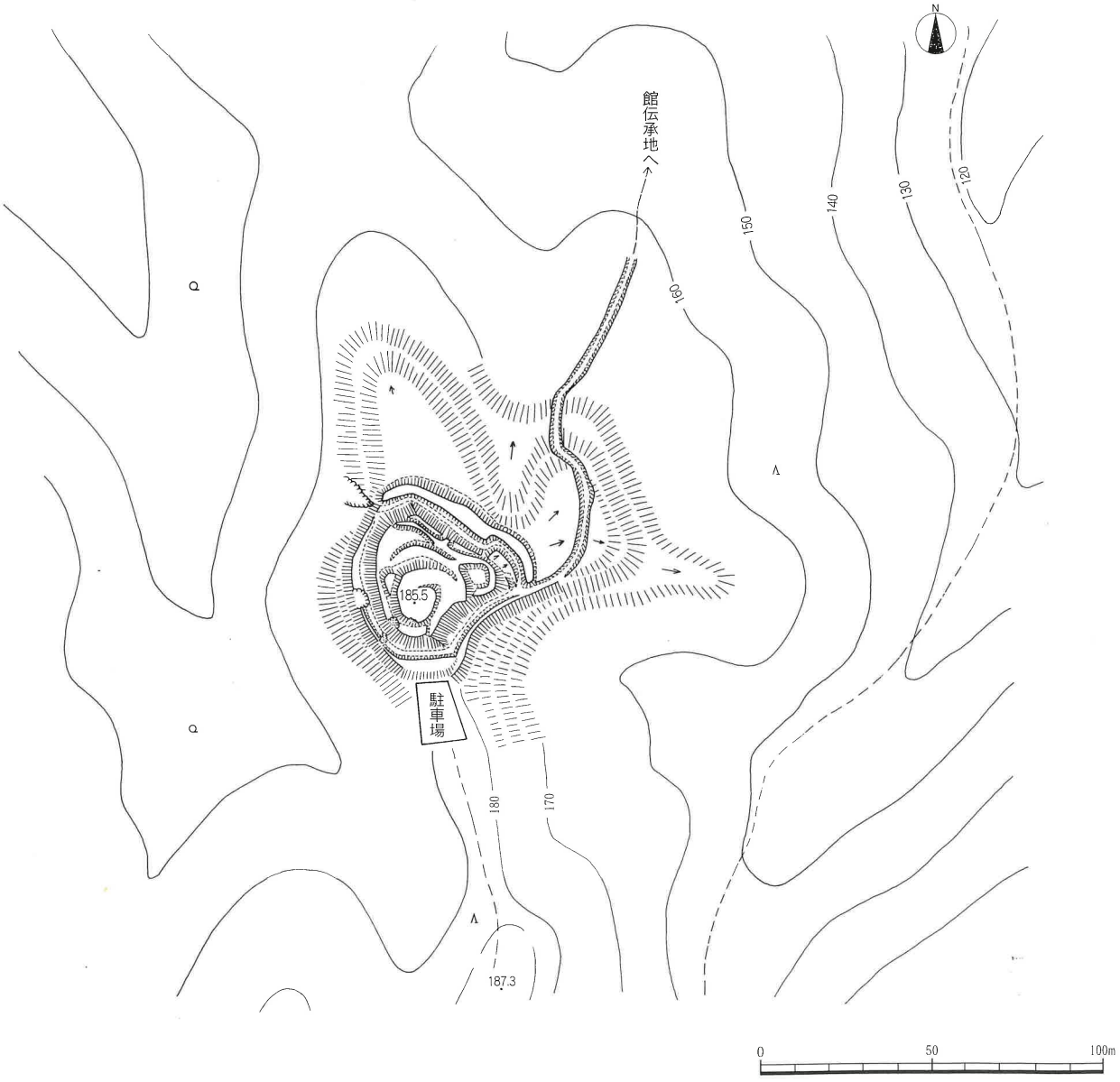
《現状》雑木林であったが、平成12年度に町が史跡整備として、樹木の伐採と植樹、駐車場の整備を行った。そのため、南側から伸びてきた丘陵と、城郭との接点の部分が若干破壊されたが、全体的な残存状況は良好である。ただし、調査時点で伐採した樹木が城域に放置されていたため、地表面観察が不十分な場所がある。

《構造》標高185.5mの最高所に、削平が不十分な8×10mほどの平坦地を作り、そこからひな壇状に帯曲輪を巡らせる。南側は丘陵の鞍部を掘切り、そこから東西に横堀状の帯曲輪（一部横堀）が伸びる。北側は幅広の舌状丘陵基部を横堀で遮断し、外側には幅3～4mの土塁を盛る。横堀は南東部で屈曲し、そこに小さな曲輪を形成し、その上部（西側）には土塁を半周させる武者溜まり状の曲輪を持つ。ここは北側から丘陵を登ってきた道（城道か？）と接続するところでもあり、虎口であることを想定させる。

全体的に見ると、外周部と虎口の丁寧さに比べ、曲輪は削平が十分でなく、臨戦的な立て籠もるべき城として作られたことがわかる。

なお、城道と想定される道を下ると、伝吉広氏館跡に至る（未確認）。

《歴史》同時代文書に記載は無いが、武蔵田原吉広氏の城郭といわれる。吉広氏は、田原別符を名字の地とする田原氏（大友一族）が国東郷を手に入れ、後、南北朝期に一族が武蔵郷吉広を所有し吉広氏を名乗ったものである。城郭の構造からすると、最終的には戦国末期にまで下るものであろう。（小柳和宏）



第72図 吉広城縄張り図（1/2,000）

【238　安岐城　東国東郡安岐町大字下原】

《立地》安岐町東方の安岐浦に位置し、伊予灘に注ぐ安岐川河口左岸の標高約13～16mの下原台地に立地する。台地の東端部に築かれており、北は自然の谷、東から南は海・川に面し断崖となる。

《現状》字本丸・天守・小丸・内堀・南堀・北堀・門口・西出口・浦門・馬落等の城郭名称が残り、城域の範囲や構造を推定できる。一般国道213号及び県道201号線が通り、その多くは住宅地が占め、他は畑地、水田、山林となっている。住宅や道路建設によって、地形環境が大きく改変されているが、畑地や山林部には掘や土塁が比較的良好に遺存している。また、字本丸地区は昭和58度より三年次にわたり一般国道213号安岐バイパス工事に伴う発掘調査（大分県教育委員会編『安岐城跡・下原古墳』大分県文化財調査報告第76輯　1988）が実施さており、15世紀後半～17世紀初めにかけて大きく3期にわたる遺構変遷が明らかとなっている。これによって、字本丸の東端部は削平消滅している。

《構造》本丸地区の調査は、堀と土塁（報告では土塁基部に石積みを持ち、表面に栗石を葺くとあるが、栗石は崩壊した石垣の裏込め石と判断される。）で囲った主郭の約東半分にあたり、北面の土塁と東面の石垣と北東隅の石垣による櫓台が残るが、これら遺構の下部に大規模な整地層が検出されている。さらにその下で溝や堀で区画される掘立柱建物跡群が確認され、大きく3期にわたる遺構の変遷が明らかにされている。Ⅰ期は主屋を含む建物跡群を幅1.5～3mの溝が囲み、南北80m、東西30mほどの規模をもつ居館段階。Ⅱ期は南側で整然と配置される建物群を、上幅約4m、深さ約3,8m堀と上幅約7m、高さ約2mの土塁で囲い、前段階の居館をさらに拡大、拡充し防禦機能を強め館城へと発展した段階。Ⅲ期は大規模な整地を行い、石垣や瓦葺の礎石建物が出現し、壮大な規模のいわゆる近世城郭の段階となる。出土遺物の年代からⅠ期を16世紀中頃、Ⅱ期を16世紀後半、Ⅲ期を16世紀末～17世紀初頭とされ、大きな画期をⅢ期とする。すなわち、最終段階の遺構群は、新たな築城技術である織豊系プランの城郭と判断されている。従って、Ⅰ・Ⅱ期は戦国時代の城館遺構となる。

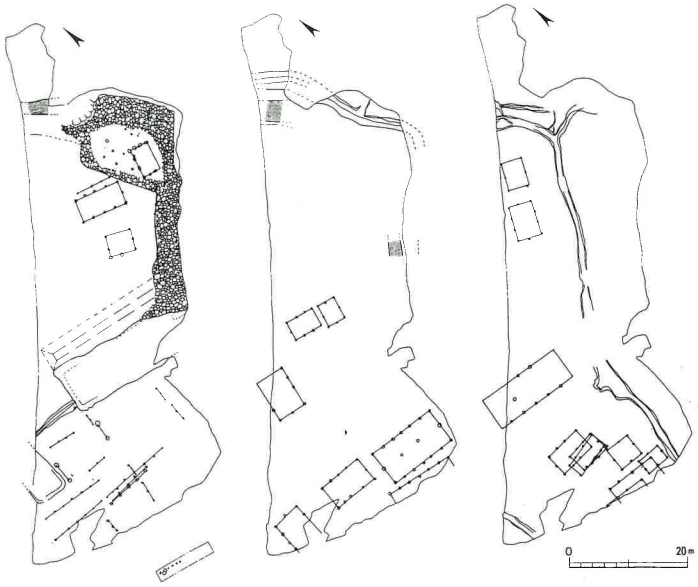
縄張りは、東端部の河口に近い断崖を背にして主郭を設け、西方向に堀と土塁を巡らす3つの郭により主郭部を防禦する構造で、主郭部を片隅に寄せ奥深く防禦する梯郭式の平城である。また、主郭部の北側には船入を設け、北面を堀と土塁で巡らす海城的機能を兼ねている。平坦な台地を堀で切断し、自然地形をたくみに利用した城の総面積は約130,000㎡の規模である。主郭は、約方1町の規模で、調査によりさらに堀で４つに区画されることが分かっている。隅櫓は、北東部と南西隅に現在確認できるが、大正13年作成された図（『史蹟名勝天然記念物調査報告第２輯』1913）では、北西・南東方向にも記されおり、主部を囲む土塁の四隅には、石垣による隅櫓台があったと考えられる。また、主部を囲む西土塁中央部に方形の高まりがあり、字名から天守台とみることも可能である。主部を囲む堀は、内堀と考えられ幅約12～15mで、西面土塁は高さ約5m、上福7～10m、下幅12～15mの規模である。主部西方の施設は、土塁と堀で区画される3つの郭が復原できる。主部から西へ第二郭・第三郭・第四郭すると第二郭は、字小丸・内堀を言う。北面では堀と土塁の一部が残存し、主郭を囲む内堀と接する東隅に両袖桝形的虎口（北虎口）がある。第三郭は最も広く、字長若寺・門口町・ホキを含み、北西部に2条の堀と土塁、西面北隅に隅櫓台がある。この北隅櫓台と対置すると思われる遺構はすでにない。第四郭は帯郭的であり、字西出口・南堀を含み、西面から南門にかけて人工の堀をめぐらし、北はしだいに傾斜し、字北堀と称する自然谷に接する。この堀は城域を画する外堀と評価される。大手口は、外堀の南方の台地への登り口あたり、西虎口は字西出口の土橋遺構、搦手口は字裏門（東）にそれぞれ比定されよう。このように、本城は在地城館とは一線を画し、県内における永禄～慶長期の近世城郭の縄張りを知る好例と言える。

なお、出土遺物の大半は、Ⅰ・Ⅱ期の遺構に伴い、しかも青花等の多量の輸入陶磁器とともに鍋や釜、擂鉢といった国産陶器等の生活雑具を多量に含んでおり、非日常的施設ではなく生活を基盤とする居館のあり方を示している。

《歴史》文禄2（1593）年大友義統除国後、豊臣秀吉は国東など北４郡の検地奉行に鳥取城主宮部善祥坊法印珪俊（継潤）を派遣し検地を行い、文禄3年熊谷直陳に15,000石が与えられ、安岐城には熊谷外記を留守として置かれた。Ⅲ期の縄張りは熊谷氏の改修によると考えられる。熊谷直陳は、慶長5（1600）年の関が原の合戦では、西軍に属し黒田如水に攻められ落城し、その後廃城となる。このとき「熊谷城」（文書番号古文書部876・877）と記され、「黒田家譜」では城主熊谷内蔵允の居城で、熊谷外記と云うものが留守として楯籠るとあり、構えについては「此城の形は、南北に長くして、東は海なり、東北は石壁高く、屏風を立たるがごとし、西のほうは山近し。城と西の山との間は平地にて、堀をほり南の方を大手とす。土橋あり。又乾の方にも土橋あり。平城なれど要害堅固なり」とあり、現況や調査成果とほぼ合致する。

整地層下の居館段階については、国東田原氏の居館と考えられるが、史料上の初見は天正8年（1580）の13代田原親貫の反乱に関連する史料群である。天正8年7月10日の大友円斎書状（文書番号古文書部509）では荒木伝兵尉に緒軍が「安岐切寄」攻めの軍忠を賞しており、大友家文書録鋼文では田原親貫の拠る「安岐塁」と記され、切寄・塁と呼ばれた。同年7月19日の田原親家感状（文書番号古文書部514）には「切寄構口」、同年8月13日の

大友円斎書状（文書番号古文書部521）には、安岐の切寄へ粮船が安岐の湊へ入ろうとしたが警戒厳重であったため退散したと見える。同年9月15の大友義統感状（文書番号古文書部545）には「切寄高櫓口」とあり、防禦の備えた状況が伺え、同年10月14日義統書状（文書番号古文書部573）に初めて「鞍懸・安岐両城令落去」とみえ、城として認識されている。この大友氏が攻め落とした安岐城とは、年代からII期段階の遺構（館城）を示す。（玉永光洋）



Ⅲ期　　II期　　I期

第73図 発掘調査による遺構変遷図

（本丸部分『安岐城跡・下原古墳』大分県教育委員会1998による）

谷地形、低地部

堀跡と考えられる地筆

土塁と考えられる地筆

舟入と考えられる範囲

堀の想定される地筆

Ⓐ　天守台

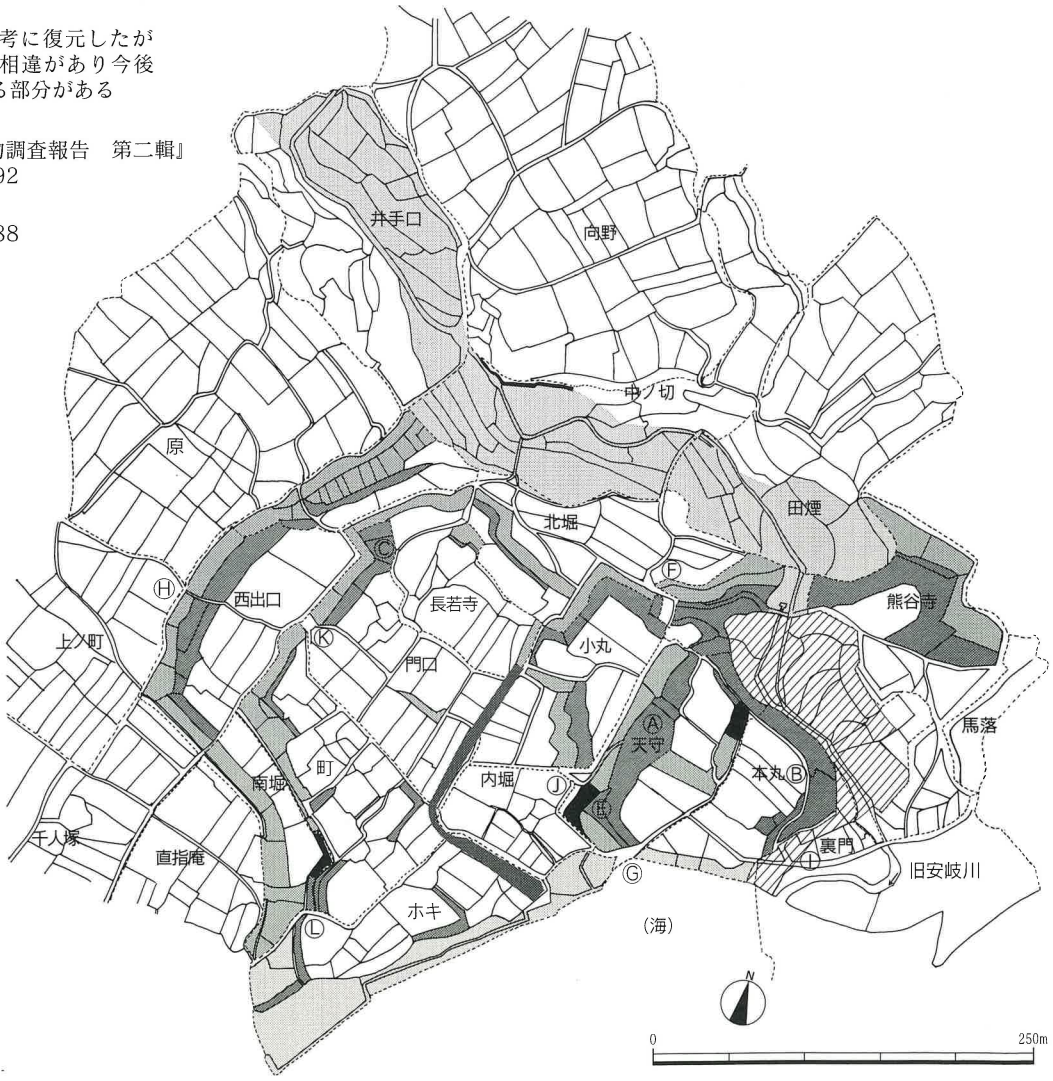
Ⓑ～Ⓔ　櫓台の痕跡が残る部分

Ⓕ～Ⓛ　虎口

※下記調査報告書を参考に復元したが内堀の位置等若干の相違があり今後の調査にゆだねられる部分がある（小柳）

・『史跡名勝天然記念物調査報告　第二輯』大分県教育委員会 1992

・『安岐城跡下原古墳』大分県教育委員会 1988



第74図 安岐城周辺小字集成図（1/5,000）

【251　真嶽城　速見郡日出町大字藤原字城山】

《立地》辻間の北にある標高340mの城山の頂上に位置する。集落からの比高差は200mである。主に山頂部の東側に遺構が確認される。

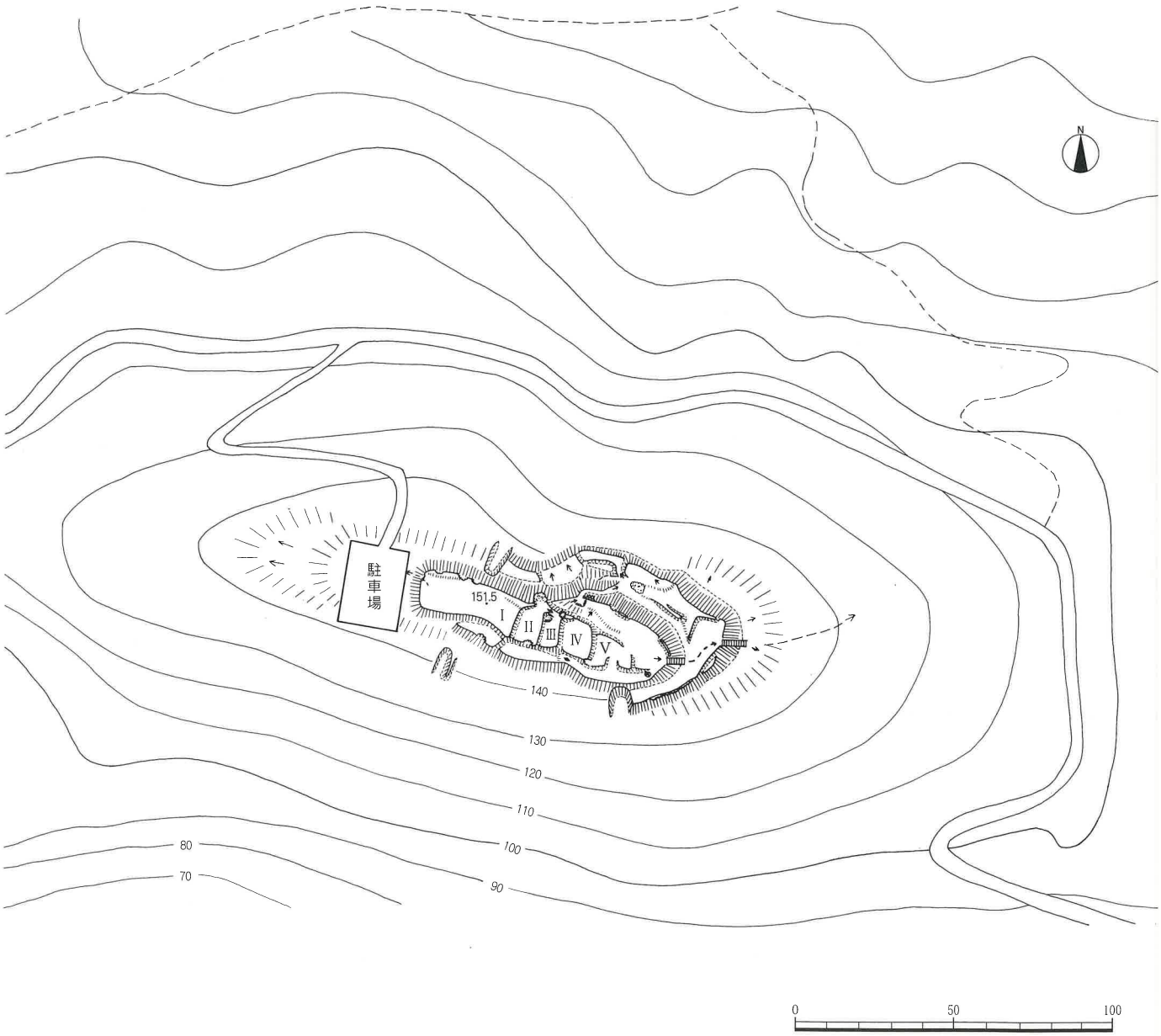
《現状》山頂部の西側は駐車場があり7～9m四方が削平されている。そのために西側の旧状は不明である。また主郭と思われる部分には、近世になって作られた四国霊場や神社（石祠）があるために曲輪に石段が設けられているが、遺構全体を壊すには至っていない。しかし、細部には掘削された部分も見られる。

《構造》主郭（Ⅰ）の周りには一段目の帯曲輪状の平場があり、この帯曲輪の北端には鈎手状の石列があってここに虎口があったのではないかと思われる。この虎口の下にも二段目の帯曲輪が存在し、東端には土留めの石列が部分的に確認できる。この二段目の帯曲輪の北と南の両端には竪堀が設けられていて、西側に回りこめないようになっている。

主郭Ⅰの東側には階段状に曲輪が4つ（Ⅱ～Ⅴ）存在し、虎口から一段目の帯曲輪をまわっての曲輪Ⅴに入り、曲輪ⅣからⅡを通って主郭に至ると思われる。

一段目の帯曲輪の南西端の下位にも竪堀が見られるが、これは東側に回りこまれるのを防ぐために設けられたと考えられる。なお、駐車場より西側には遺構は確認できない。

《歴史》麓に地名を残す辻間氏の居城というが、同時代の文書・記録では記載が無い。（畔津宏幸）



第75図 真嶽城縄張り図（1/2,000）

【253　鹿鳴越城　速見郡日出町大字豊岡字城山】

《立地》日出町中央の北方、山香町との境に位置する。山香町の標高598,7mの唐木山から放射状に裾野が広がり、その裾野から派生する南側の尾根の一つ、標高約520mの先端部に立地する。南東約1,5ｋｍの豊岡の扇状地や別府湾を臨む城山山頂に築かれた真嶽城より奥まったところではあるが、日出から鹿鳴越峠を越え、豊前宇佐や安心院に抜けるの主要交通（豊前道）路上にあり、峠を見下ろし、睨みを利かす絶好の位置にある。

《現状》山林であり、斜面はしいたけ栽培等に利用されているが、遺構はきわめて良好に遺存している。

《構造》丘陵南端の二つの頂部を利用して平場（曲輪Ⅰ・Ⅱ）を造成し、その間と北側を竪堀と連接する2条の大規模な堀切で遮断し、北東斜面部に削平段と壮大な長さの竪堀群とで防禦する構造であり、峠方向を強く意識した構えとなっている。

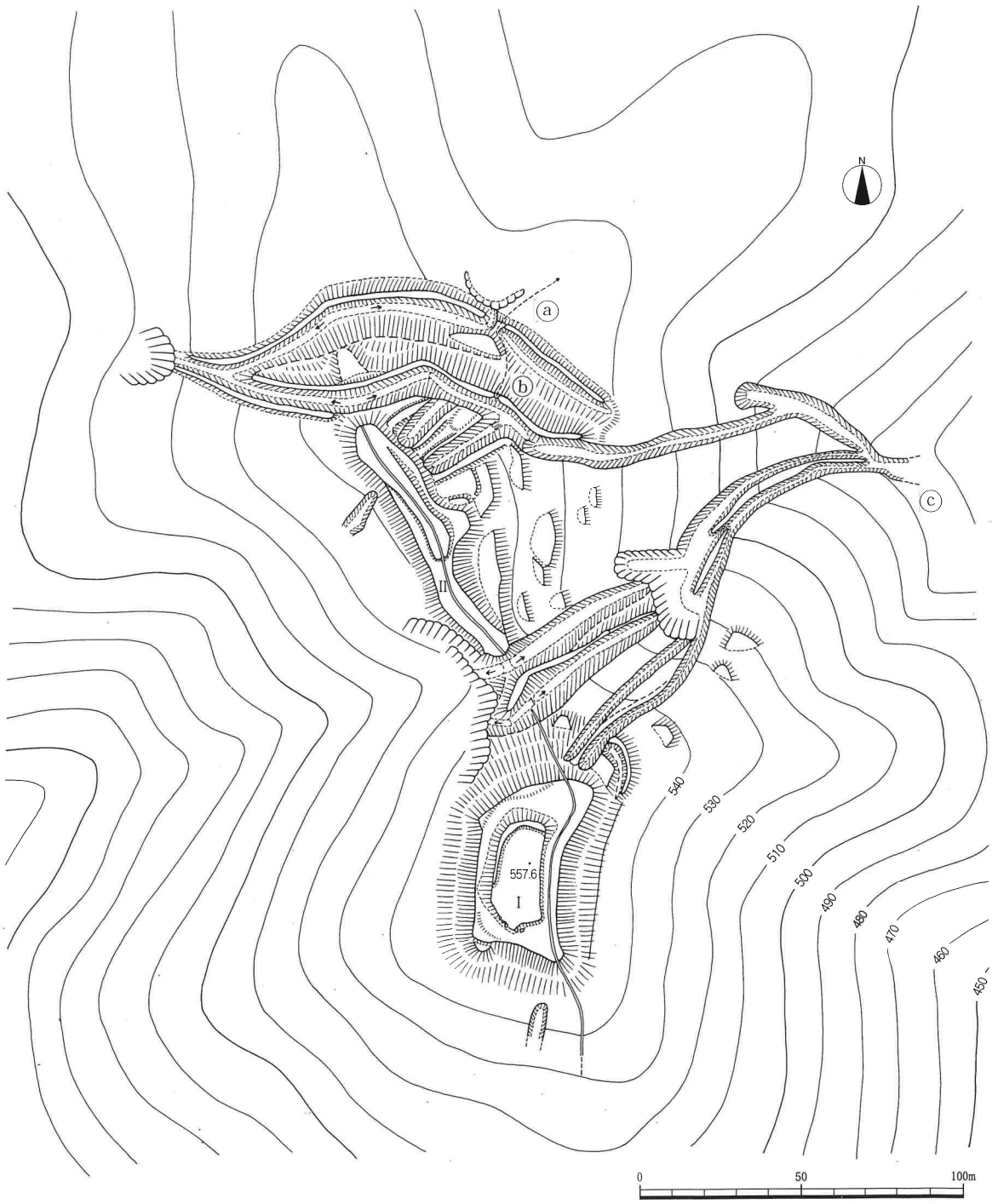
丘陵南端の最高所の曲輪Ⅰが主郭と考えられ、南北約26m、東西約13mの略長方形の平場に腰曲輪を巡す。腰曲輪を含めた主郭部は南北45m、東西21mほどの規模となる。主郭部の西・東・南斜面は急峻であるためか南斜面の竪堀１条を掘削しているのみであるが、鞍部となる曲輪ⅠとⅡの間及び北東斜面部を集中的に防禦し、主郭部へのルートを遮断している。鞍部には２条の堀切、斜面には４条の竪堀と主郭部直下及び斜面部の削平段を配置する。堀切は２条掘削し中央に土塁を盛り、そのまま2条の竪堀に繋げる。曲輪直下の削平段前面には外側に土塁をもつ横堀を巡す。曲輪Ⅱは丘陵尾根を細長く切って、中央東側を張り出させるもので、長さ約67m、幅約6m～10m（張出し部を含めた幅約15m）である。西斜面には１条の竪堀を設け、斜面への廻り込みに配慮するが、防禦の中心は北側の丘陵を遮断する2条の堀切と東北斜面の３条の竪堀と斜面部の削平段である。特に、堀切は大規模で壮大な長さをもち、いずれも土塁を外側に盛り（一部内側にもある）、掘底との高低差を増しており、内１条の竪堀と連接する。竪堀は曲輪直下から始まる２条は両側に土塁を盛り、斜面の起伏をより大きくする工夫をして、横への防禦を厳しくしている。

虎口ははっきりしないが、一つは最北部の堀切と土塁部分に土橋と開口部ⓐが想定される。土橋の内側正面に平場を設け、この部分をポイント的に守り、次の開口部ⓑへ導く構造と考えられる。また、曲輪Ⅰ・Ⅱからの竪堀が合流するところⓒは、東に開く谷の谷頭にあたり、ここから竪堀底を通り各曲輪に取り付くことも可能であり、この部分の位置付けもその可能性の一つと思われる。

なお、大規模な堀切及び連続する竪堀などは、曲輪Ⅱの東斜面にある竪堀を切ってⓓ造られていることからみて、最終段階に行われた改修の可能性が高い。

《歴史》鹿鳴越城は、永正年間（1504～21）の18代大友親治が田北親幸に宛てた書状写（文書番号古文書部143・144）に見えるのが最も古く、田北氏を中心とする鹿鳴越城衆が城番を努めており、大友氏の要の城として位置付けられている。永正15（1518）年、19代義長から家督を継いだ義鑑の大永2・3（1522・23）年の感状（文書番号古文書部189・190）にも鹿鳴越城衆各中及び田北氏に対して、登城のうえ堅固な守備と落人逮捕や鹿鳴越城への在城を命じている。また、天文2（1533）年の田北氏宛ての書状（文書番号古文書部237）には、大友氏と大内義隆の鹿鳴越城に楯籠った牢人退治に対する感状（文書番号古文書部177）、翌年には渡辺氏に鹿鳴越城勤番を賞する感状（文書番号古文書部278）を与えている。これらは、宇佐・速見郡の妙見岳城、大牟礼（大村）山（勢場ヶ原の戦い）を舞台とする大友氏と大内氏（義隆）の攻防戦の動向を背景として出されたもので、義鑑は国東衆を中心とする杵付、帯刀、長野、田原、吉弘、都甲、林、廣瀬、大神、田原の10名に鹿鳴越城の改修（城誘）を命じ、遅滞しているのは心得違い（曲事）である（文書番号古文書部294）と咎めている。さらに、20代宗麟の永禄末から元亀ころにも渡辺氏や新辺氏、河内氏などに登城勤番を命じて（文書番号古文書部382・383）いる。これは大内氏に代わって毛利氏の九州侵攻に対応する指示と考えられる。このように、鹿鳴越城は交通の要衝地であるとともに、大友氏の豊前方面に対する戦略上の拠点であった。（玉永光洋）

※城館名は文書上は「鹿越城」であるが、現在の地名「鹿鳴越」をとって「鹿鳴越城」とする。



第76図 鹿鳴越城縄張り図（1/2,000）

【260　甲ノ尾城　速見郡山香町大字倉成字甲ノ尾】

《立地》山香町のほぼ中央に位置し、標高223m甲尾山山頂に築かれる。山香盆地の四方を遠く望める独立丘陵となっており、また、日出鹿鳴峠から安心院・宇佐へのルート上にあり交通の要衝地でもある。

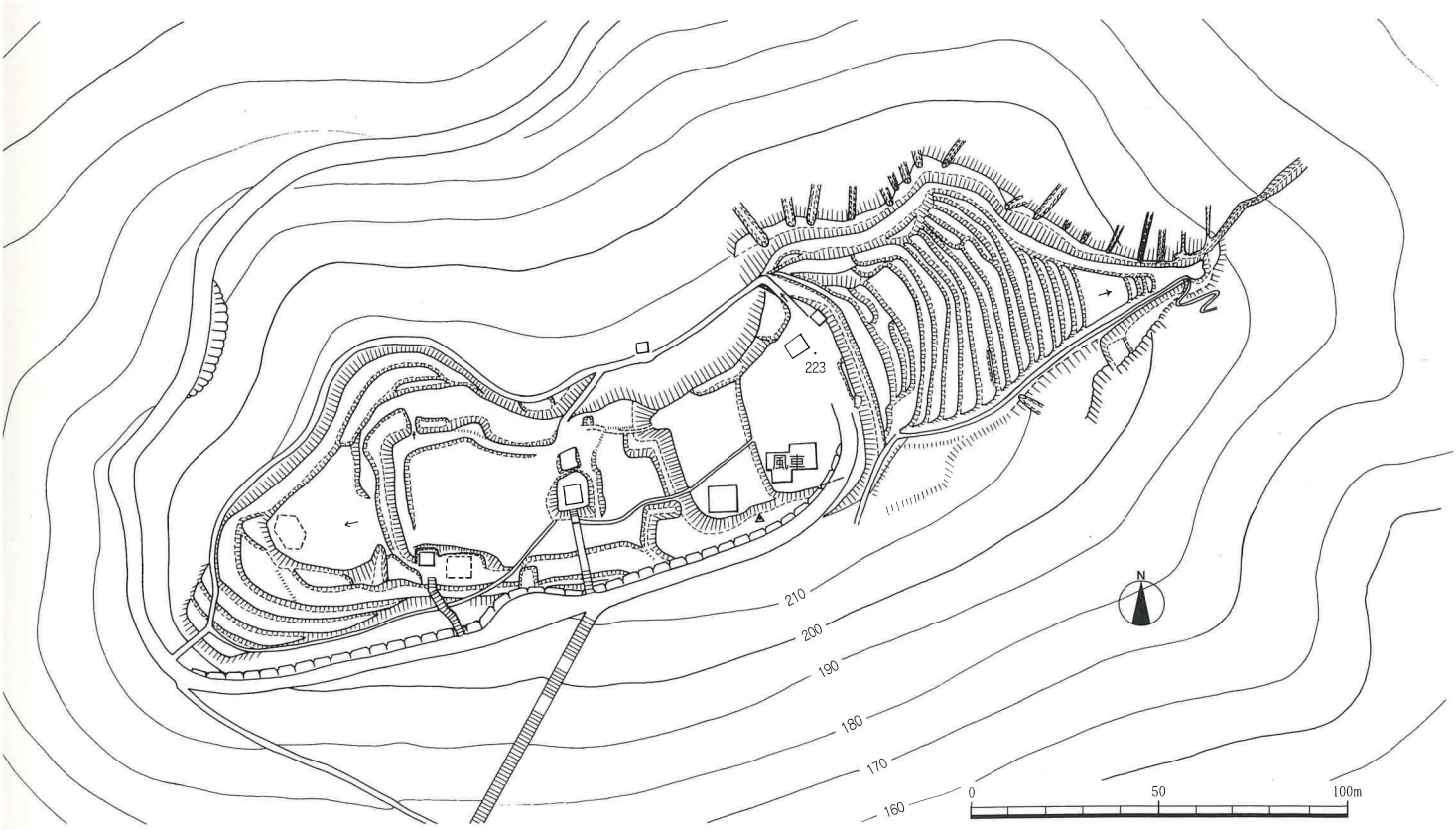
《現状》甲尾山公園として整備されており、改変が大きいが、全体としては比較的良好に遺存している。

《構造》中央の最高所の曲輪群（Ⅰ-a・b・c）が中心曲輪群であり、曲輪Ⅰ-aが主郭と考えられる。主郭は東西約30m、南北35～50mの北東部が北に張出すいびつな略長方形をなし、西側に一段低い東西20m、南北35mの曲輪（Ⅰ-b）と南側にさらに一段低い（主郭より－約2,7m）東西に長い帯曲輪（Ⅰ-c）を設け、四方を土塁と堀、切岸で囲う構造（主郭東は大規模な土塁と堀切機能を兼ねた横堀で区画し、南辺は削平を受けているが、曲輪Ⅰ-cの西の横堀に繋がると思われる。曲輪Ⅰ-bは、北西隅が西側に張出しており、それに連動する横堀もL字にクランクさせる。北側は横堀と切岸で画する。）である。曲輪群の景観は、この中心曲輪を境にして、西と東側とでは大きく異なる。

西側は、中心曲輪群と同様の土塁と横堀、切岸で囲う2つの曲輪（曲輪Ⅱ・Ⅲ）とその三方（北・西・南）を固める帯（腰）曲輪と削平段が階段状に配置し、南斜面に2条の小規模な竪堀を掘削する構造である。特に曲輪Ⅱ・Ⅲは中心曲輪群と一体となるものと理解される。中心曲輪群と一体となる西側の景観は、いわゆる平地でみられる四方を土塁と堀で区画し、中心居館とそれに連なる居館群を山上に上げ、城郭機能を付加したプランと考えられ、塁線に折り（クランク）を設け、周囲を階段状の曲輪群や削平段等で固め、より防禦を強固にした館城的縄張りと言える。

東側は西側と一変し、南北に細長い帯状の削平段を階段状（植林のための畝とも考えられる。）に累々と連ね、周囲を岸切及び竪堀、畝状空堀群で固める陣城的縄張り景観である。畝状空堀群は北面から東端斜面に集中しており、上段の切岸による通路機能を兼ねた細長い平場と組み合わせ、この方向の防禦に特段配慮した構造である。戦国期後半段階の戦時に対応した拡充と考えられる。

《歴史》本城に関する第1次史料はないが永禄年間（1558～70）に大友家臣本庄新兵衛が築き、天正年間（1573～92）には加判衆（天正4年2月26日）田北鎮周が居城とするが、宗麟の日向出兵での耳川の合戦で戦死、その後は中尾平の日差城主田北鑑生が入ったと伝えられる。大友氏は室町時代になると本城の所在する山香郷に郷政所を設置し（明応5年12月13日：1496「大友氏加判衆連署奉書案」碩田叢史所収平林文書）、郷の多くを押さえ、16世紀には山香郷東西一揆衆を日差村に入った田北氏が統括し、鹿鳴越城の改修や城番、軍事等々、様々な役を負担させるとともに、他国への出兵にも同陣させており、縄張りの特徴は加判衆に列せられた田北氏の居城とされるのも不思議なことではなく、本地域の拠点城郭の一つと評価される内容である。（玉永光洋）



第77図 甲ノ尾城縄張り図（1/2,000）

【261　小松城　速見郡山香町大字内河野】

《立地》八坂川によって形成された沖積地に向かって北西から延びる丘陵の先端部付近に立地する。標高は約130mで、沖積地との比高差は約40mである。

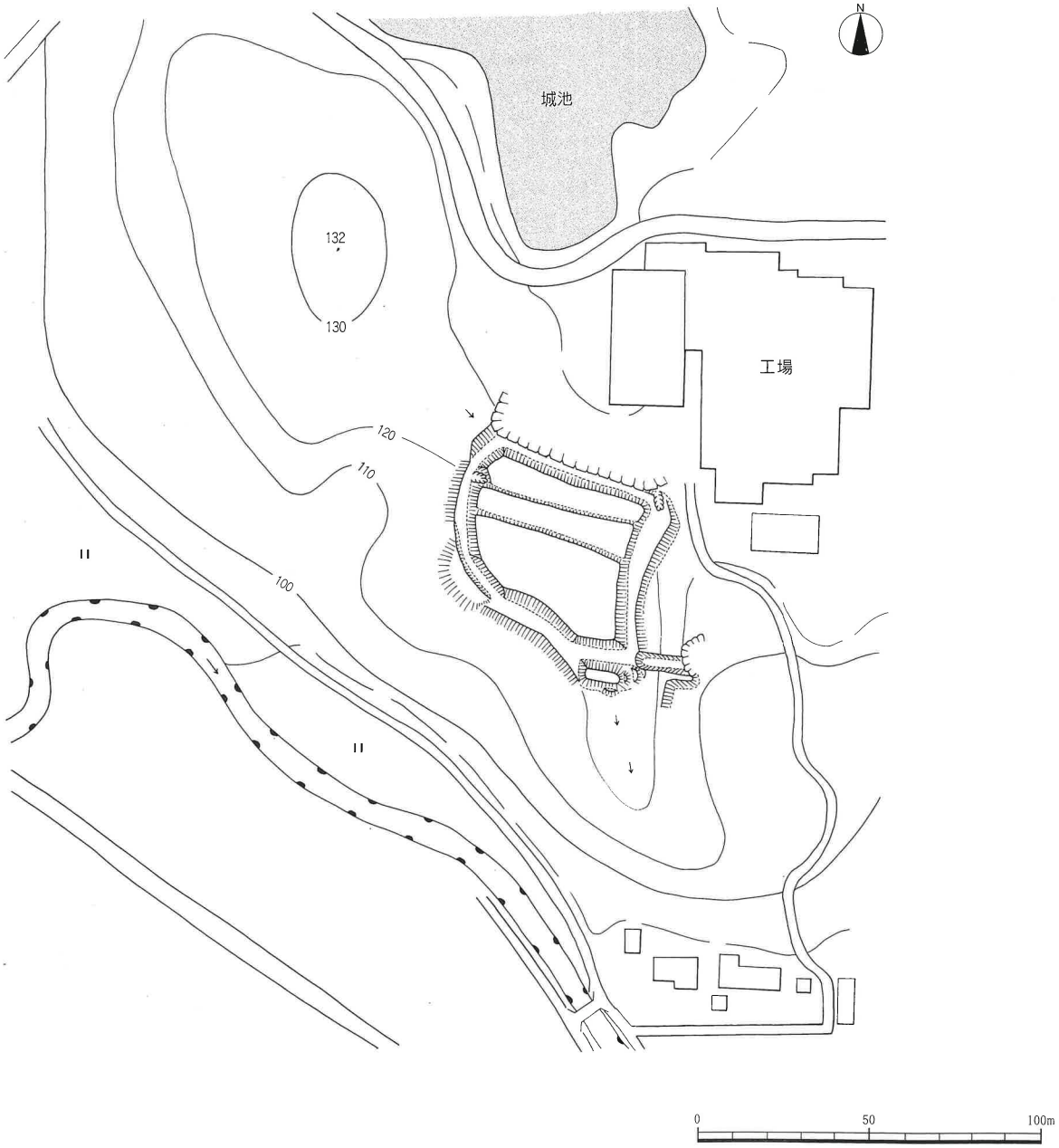
《現状》工場によって北側が破壊されているが、工場用地は谷部を埋め立てて確保されている状況から見て、概ね城域は残されていると考えられる。城域は現在杉の植林となっており、遺構の残存状況は良好である。

《構造》北西から延びる尾根の最も狭まった部分を掘り切り、そこから先端部に向けて横堀状の帯曲輪を一周させ、南北35m、東西45mの城域を確保する。南側は丘陵先端部を掘切り、外側に土塁を持つ。さらにその堀切は東側斜面に竪堀となって下る。

曲輪は、地形に沿ってややいびつに屈曲するが、基本的には方形を指向しているようである。内部は約50cmほどの段差を持つ３段の曲輪に分けられている。

虎口は、北側が壊されていることもあり明確にはわからないが、南側に伸びる丘陵先端から登ってきて、土塁と竪堀によって狭められた部分を回り込んで城に入った可能性が考えられる。

《歴史》『速見郡史』等によると、源平合戦の落人である平経俊（小松刑部経俊）の築造とされるが、もちろん現在の小松城がここまで遡るものではない。小松城は、平地との比高差や構造から「館」、または「館城」と考えられ、地域の小領主クラスが日常的に居住したものであろう。（小柳和宏）



第78図 小松城縄張り図（1/2,000）

【262　龍ヶ鼻城　速見郡山香町大字倉成字高取】

《立地》八坂川が半円を描くように大きく北に屈曲する地点に突き出た丘陵の先端部に立地する。この丘陵は、現在の山香町の中心部（平野）から見ると、あたかも龍が頭を北に向けて横たわっているように見える。その龍の先端（鼻）に城がある。標高は116mで、麓との比高差は約30mである。

《現状》土塁上にテレビの中継アンテナが立っており若干旧状が失われているが、他は良好に残る。現在はほぼ全体が杉の植林となっている。、

《構造》南から延びてきた丘陵の先端部を約35mほど残して大規模な土塁、堀で遮断する。内部の曲輪はほぼ全体で削平が十分でなく、むしろ自然地形を残しているといった方が良い。先端近くに5m四方の若干の高まりが認められる。北側は曲輪面から垂直な崖となっており、東西は丘陵裾部で急崖となるので、土塁・堀の北側で曲輪に取り付くのは不可能に近い。

土塁は曲輪内側からの高さは1m、堀の深さは土塁上から2.5m程となる。堀は平坦面から斜面部にかけてほぼ直線的に入れられており、東側では現在数軒の家がある段丘上で屈折し北東方向に土塁のみが伸びる。

堀切より南側に伸びる丘陵には１カ所小さな堀切があり、さらに南へ行くと曲輪状の削平段と、現在道となっている堀切状の削り込みがある。

《歴史》天正9(1581)年、長野因幡守が「龍ヶ鼻」への3年間の在城で大友義統より感状を与えられている（文書番号599）ように、天正6年（日向耳川、高城敗戦）以降の混乱の中で城番を置き、北からの豊後中枢部への侵攻に備えたものと考えられる。このように大友氏が城番を置くほど重要な城郭であるにも拘わらず、曲輪内部の削平（普請）がほとんど無いことが一見奇異に見える。他にも同様な城郭があり、緊急的に拵えた臨戦的な城郭と評価されていたが、龍ヶ鼻城のように長期にわたって城番を置くような城でも、曲輪内部がほとんど手つかずのものがあることを注意しておくべきであろう。（小柳和宏）

第79図 竜ヶ鼻城縄張り図（1/2,000）

【267　日指城　速見郡山香町日指】

《立地》中尾川と久木野川に挟まれた幅の狭い標高200m近くある丘陵の先端部付近を城郭としており、麓の集落との比高差は約40mである。ここは豊前と豊後の重要な接点のひとつに当たり、豊前豊後国境の立石峠や別府湾に抜ける鹿鳴越峠、さらに豊前側では大内氏の宇佐郡代をつとめた佐田氏の本貫地佐田へ抜ける場所である。大内氏と大友氏が戦った勢場ヶ原や大村山はここから直線で3kmほどの所にある。

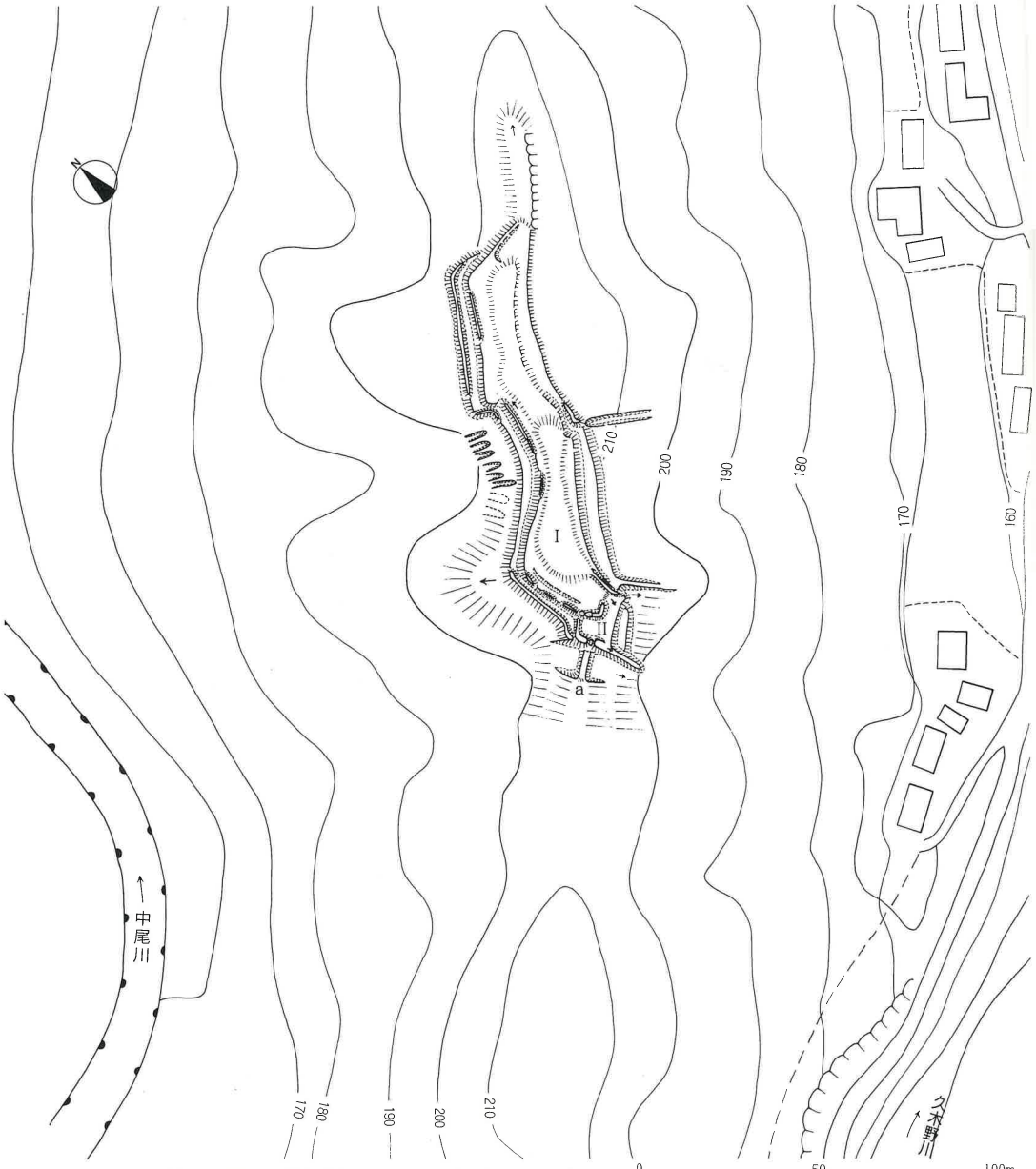
《現状》杉の植林であるが、平成3年の台風19号による風倒木被害がひどい部分がある。しかし、概ね城郭遺構は残存している。

《構造》南西から延びてきた丘陵の鞍部を掘切り、その先約120mを城域としたものである。堀切には土橋があり、そこを越えると土塁と切岸で囲まれた虎口受けの曲輪に入り、さらに正面の土塁を右手から回り込みながら坂を登って曲輪に入る、という虎口構造を持つ。

曲輪は幅15～20m、長さ105mほどあるが、中程で1m近いなだらかな段差がある他は、全体的に明確な削平は行われず、中央部が高く周辺に向け傾斜している状況である。北東側は城域を画する明確な施設が認められなかった。この先は、丘陵の両側と先端部は急崖となっており、必要なかったのかもしれない。

外周部の北西側は途中で一度屈曲する横堀で、南東側は切岸で固められており、さらに北西斜面には現状で6本の畝状空堀が認められる（この部分は風倒木がひどく確認できなかったが、さらに南西側に広がる可能性がある）。南東側は中程の曲輪が屈曲する部分と帯曲輪が終わって虎口空間に当たる手前の所に竪堀を入れている（西側の竪堀は明確でないが、土塁は明確に下る）。

《歴史》日指田北氏の城郭といわれ、館とされる場所も丘陵南側麓にある。田北氏の本貫地は直入郡の下田北であるが、その一族がこの地に足がかりを得て田北氏を名乗る。同時代の資料に城郭の記載はないが、大友氏と大内氏との15世紀前半代の争いの中で、この地（文書上では「日差」）が重要であったことは大内側（文書番号116）と大友側（同124）の文書からわかる。この段階でここに城郭が築かれていたかどうかは不明であるが、現存する遺構は、虎口の構造や横堀、畝状空堀のあり方から見て天正年間まで下るものであろう。（小柳和宏）



第80図 日指城縄張り図（1/2,000）

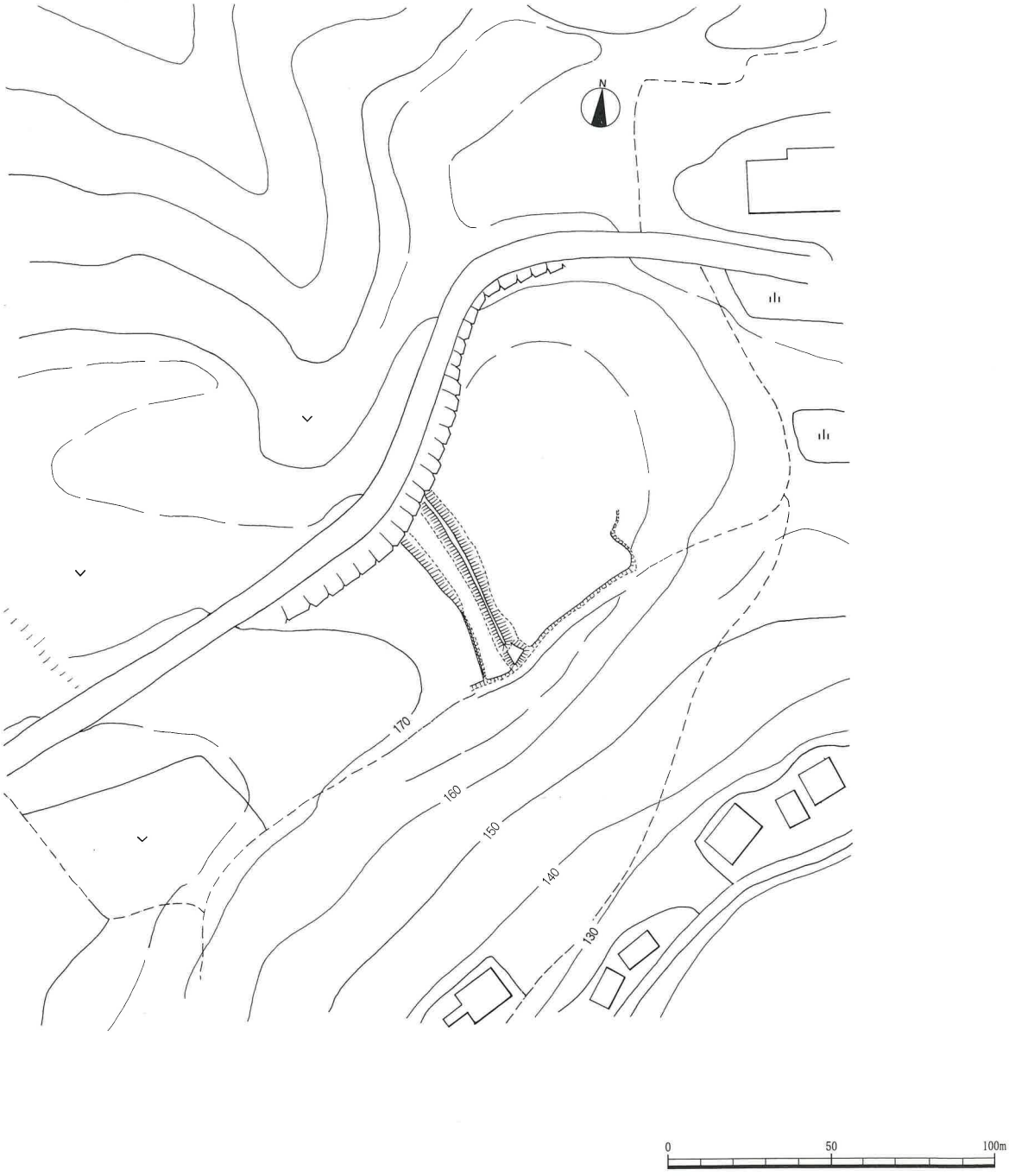
【268　樋掛城　速見郡山香町大字野原字樋掛】

《立地》八坂川が蛇行してできた山香の沖積平野の南側を画する丘陵の、東端部付近の標高168m付近に立地する。麓の集落との比高差は50m程である。

《現状》現在はほぼ全体が雑木、竹林である。北側を道路が通り、若干遺構が削られている他は概ね良好に残るが、以前畑地であったと思われ、石垣や小道が通っている部分がある。

《構造》西から延びてきた丘陵が最も狭くなった部分を堀と土塁で断ち切り、その東側に城域を確保する。しかし、現状では曲輪と考えられる部分には何ら城郭に関連する遺構は確認できない。この部分のさらに東側に城があったとも言われるが、現在は工場が建っており、確認できなかった。堀は幅10m近くあり、内側に高さ2mほどの土塁を有している。斜面に連続する竪堀は確認できなかった。

《歴史》本庄新左衛門の居城といわれるが、同時代資料では確認できない。構造的には極めて単純な城郭であるが、城と言うより、むしろ館的なものと考えた方が良いのかもしれない。（小柳和宏）



第81図 樋掛城縄張り図（1/2,000）

【272　立石城　速見郡山香町大字立石】

《立地》豊前、豊後国境から5kmほど豊後側に入ったところの標高288.3mの城山と、そのすぐ南東部にあるやや高いピークの２カ所に遺構を持つ。ここは、実質的な国境である立石峠を押さえ、かつ安心院の佐田側（豊前）からの回り込みを押さえる要衝の地である。麓の集落との比高差は170m近くある。

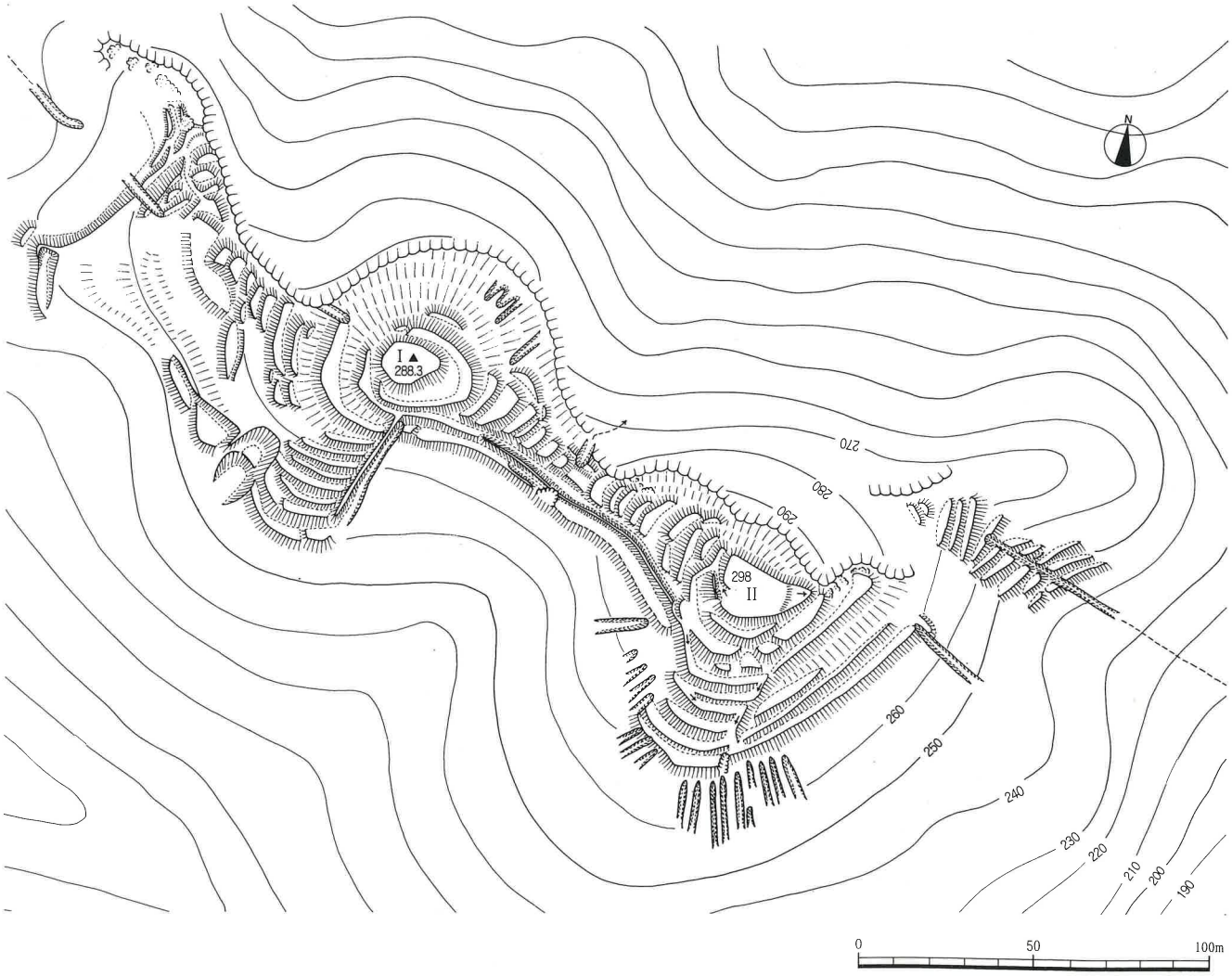
《現状》全山植林であるが、平成３年の台風により至るところで風倒木が見られる。しかし、概ね遺構は良好に残されている。

《構造》約120m離れた２つのピークに遺構はある。仮に西側を第Ⅰ郭、東側を第Ⅱ郭とすると、第Ⅰ郭は15×10mの主郭回りの４分の３に腰曲輪を巡らせ、さらに東西と南の尾根には階段状に曲輪を設けている。そして、南側は竪堀を１本入れて東側への回り込みを防いでいる。北東斜面には畝状空堀が４本認められる。

第Ⅱ郭は、第Ⅰ郭との間を階段状の曲輪群で繋ぐとともに、南側には土塁を持った帯曲輪を通路状に築いている。主郭は第Ⅰ郭よりやや広く、南側の尾根に向かって階段状に曲輪群を配している。さらに、その曲輪群の下側では、最も東寄りに竪堀を１本入れるとともに、南側尾根線を中心として17本の畝状空堀を施している。主郭虎口は西側にあり、一度折り返して斜めに坂を登る単純な坂虎口であるが、外側に張り出した部分には低平な土塁が認められる。

なお、第Ⅰ郭の北西部と、第Ⅱ郭の東側で直線的に山を下る堀状のものがあるが、植林の伐り出しに伴うものである可能性もあり、図化はしているが城郭関連の遺構では無い可能性がある。ただし、第Ⅱ郭の東側のものは両側に階段状の平場を形成しており、麓へ降りる最短ルートではあるので、判断は留保しておきたい。

《歴史》大友氏対大内氏のいわゆる姫岳合戦（臼杵市と津久見市の境界）に連動して永享7年10月に「立石城」で合戦が行われている（文書番号118）。この「立石城」が別府市の立石城（城郭番号212）の可能性も残るが、豊前・豊後国境の山香町立石城のことと考えられる。城郭の構造は、小さな主郭に対して尾根線を階段状の曲輪で固めるという古い要素を持つものであるが、その曲輪群の下側に畝状空堀を持つなど、新しい手法も取り入れながら改修を重ねた状況を読み取る事ができる。（小柳和宏）



第82図 立石城縄張り図（1/2,000）

【279　天面山城　大分市大字河原内】

《立地》山間を縫って流れてきた大分川が、大分平野に入り込む手前の左岸約3kmの天面山（標高403.0m）山頂に立地する。山頂部からは遠く大分平野を望むことができる。大分川支流の沖積地に展開する集落との比高差は300m以上ある。しかし、場所からして、本来は大野郡から安藤を通って（現在の県道大分大野線）大分（府内）へ至るルートを押さえる意味もあったのかもしれない。

《現状》城域全体が大分市の管理する公園となっており、樹木の管理はなされているが、一部駐車場用地や道路によって削平を受けている。

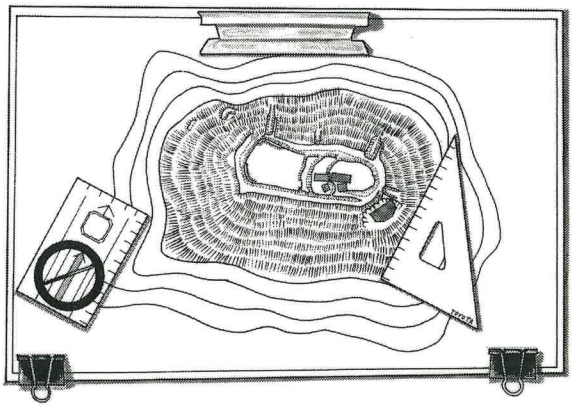
《構造》天面山山頂から北東に向けて一段下る（比高差で約40m）尾根の先端部までの、長さ360mにわたって遺構が展開している。山頂部に南北方向に30m、東西方向に15mほどの略長方形の主郭があり、北側の尾根斜面に向けて3段の階段状の曲輪を配し、全体に帯曲輪を巡らせる。東側斜面の北側半分には土橋を有する横堀が設けられており、山頂部から北東側の一段低い尾根から通路状の竪堀を登ってきた道とつながる。北東側の一段低い尾根までの斜面には階段状に6段の曲輪が設けられており、その北側には前記したように通路状の竪堀がある。急な斜面を下ると緩やかな斜面になり（標高368.2mのあたりから北東側約150m）、そこには北西側に土塁を有する曲輪がある他、明確な遺構は認められないが、最東端には北側に向けて一条の竪堀がある。この部分が、城全体の虎口になると考えられる。

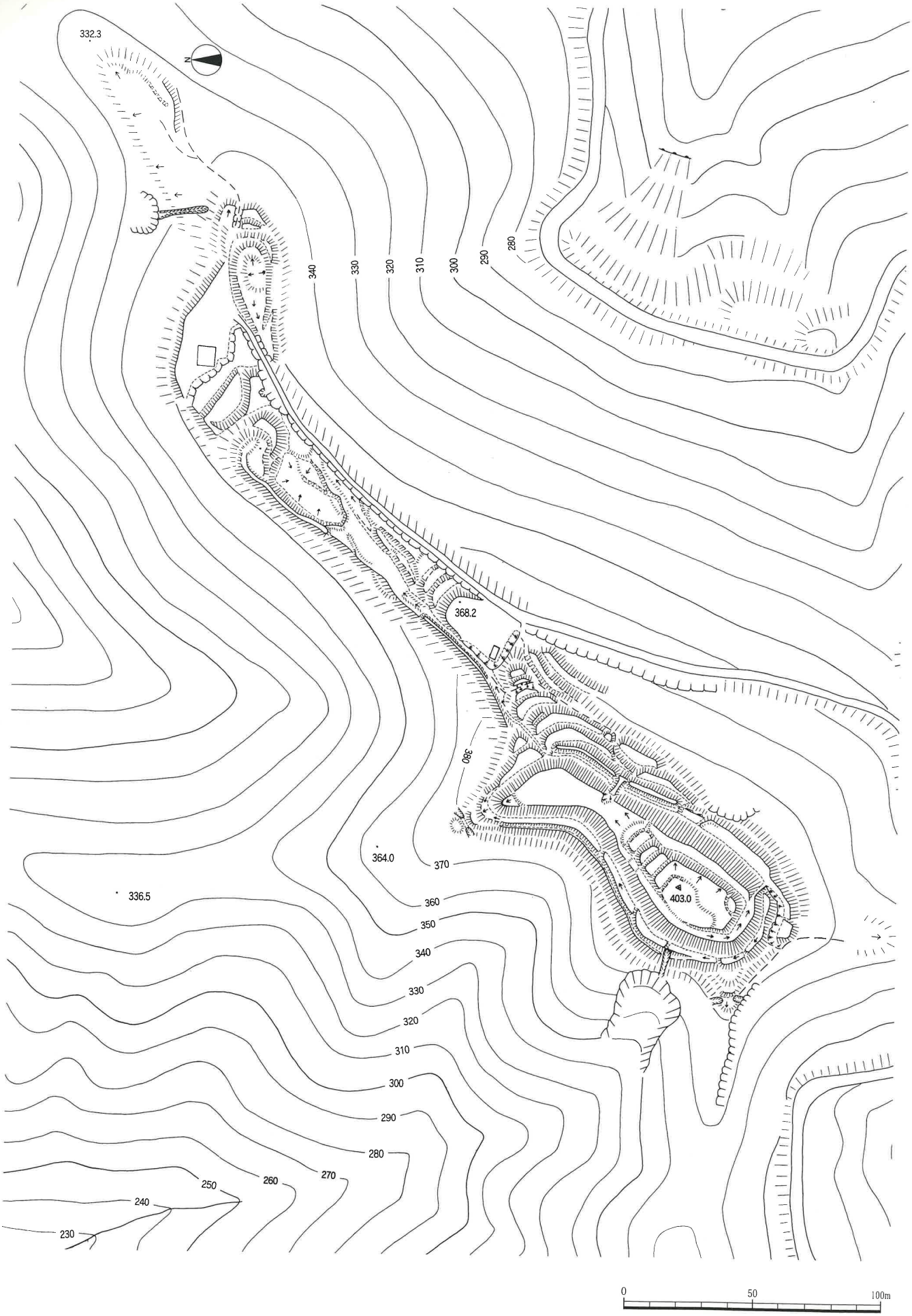
《歴史》同時代文書には記載が無いが、大友家文書録によると、天正14（1568）年に大友義統に反旗を翻した柴田紹安が「尼顔塁」に入ったという。『豊後国古城蹟并海陸路程』には、「雨面と申山有。（中略）土手築廻し申跡有之。土手惣曲輪百拾間。（中略）いニしへ百姓等取りあかり申由申伝也。」とある。（小柳和宏）

＜＜登城余話＞＞

今回の調査開始の時点で、県の担当も含め調査員の大部分は縄張り図を作成したことがなかった。そのため、まず研修をすることになり選ばれたのが天面山城であった。天面山城は車で主郭直下まで行ける事と、公園として樹木の管理が行き届いているという理由で選ばれたのである。講師をお願いした佐賀県立名護屋城博物館の宮武正登氏の指導のもと、初めての作図に参加した16名で４人一組のチームを作り挑戦した。しかし、２日間かけてできあがった図はとても使えるものではなく、結果的にその２日間に指導の合間を見て一人で作図をした宮武氏の図面が今回報告する図面である。

この研修では、発掘現場における図面との表現や視点の相違を学んだが、足腰の大切さや、ダニなどの虫や少々の凸凹には頓着しないで藪の中に入っていく心構え（勇気？）は後々の実践の中で学んでいく事になる。





第83図 天面山城縄張り図（1/2,000）

【285　大友氏館跡　大分市顕徳町三丁目】

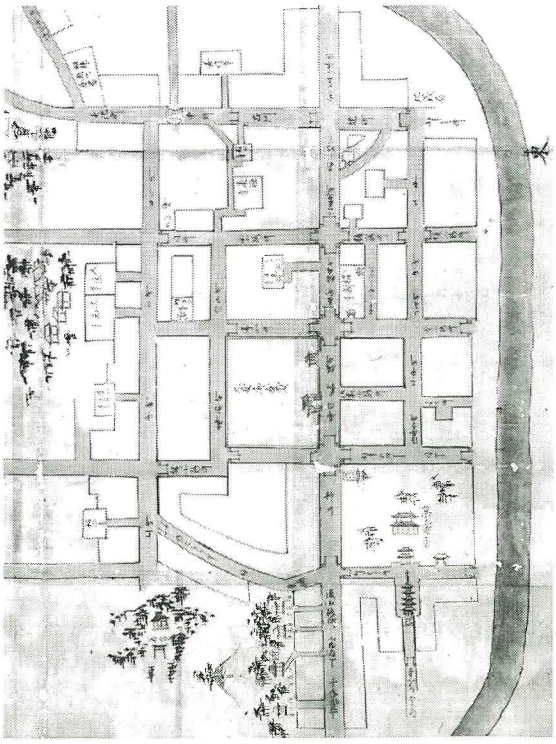
《立地》大分川左岸の自然堤防上に展開する中世大友府内町の中心に位置する。遺構の検出標高は5m前後を測り、黄茶色土を基盤土層とするが、当該層の約1m程度下位において古墳時代の包含層、水田土層を確認することのできる地点がある。

《現状》大分市街中心部の東部に位置する。昭和62年に戦国時代の府内を描いたとされる「府内古図」を基に、明治期の地籍図などとの対比から「戦国時代府内復原想定図」が作成され、この想定図により、大友氏館は一辺約200m（二町四方）、総面積約四万㎡の方形館と想定された。当該地の本格的な発掘調査は平成10年に館推定範囲の東南部を対象に実施され、東西長66mを超える池を伴う庭園遺構が発見された。この発掘調査成果により想定図の信憑性がにわかに高まることになる。その後館東辺に相当する部分において、国道10号拡幅事業に伴う発掘調査により「府内古図」に描かれた南北道路跡が検出され、館の東辺ラインが確定した。館の推定範囲内は「近隣商業地域」及び「準防火地域」となっており、個人専用住宅を中心にアパートなどが密集している。平成13年8月13日に国の史跡指定を受け、現在、地権者の同意の得られた部分から指定公有地化が進んでいる。

《構造》「府内古図」には館東辺に大小二つの門が描かれており、それぞれ礼門と脇門に相当するものと考えられるが、発掘調査による検証はなされていない。また、館東辺部の調査所見により、東側の区画施設と南北道路の間には幅約10m程度の空間地の存在が想定されている。館北限推定ライン上に相当する第7次調査では、並行する二条一組の溝状遺構が確認されている。溝間には版築状の積土を伴い、築地状の構築物の存在が推定されている。三組検出された溝状遺構は切りあい関係から3時期の変遷を示し、次第に北方向へ拡張していった状況を看取することができる。現状で館の囲繞施設が直接確認されているのは、この北辺のみである。

館の内部構造に関しては、庭園の位置や「府内古図」に描かれた門の位置などから、洛中洛外図屏風に描かれる将軍邸などを忠実に再現した施設配置が考えられるが、現段階では庭園以外の主要施設等の配置は不明である。しかし、主殿の存在が想定される館推定範囲の中心部で盛土整地が確認され（第6次調査）、基壇状の高まりの上面には根じめと考えられる小礫を内包した大形の土坑列が検出されており、大型建物遺構の存在が推定されている。また、当該地点の周辺には土師器皿の大量廃棄の状況が随所に確認されており、空間の利用状況とその性格を示唆している。

《歴史》「府内古図」は戦国末期の府内の様子を描いたとされるが、これまでの大友館の発掘調査結果は概ねこれを傍証する所見を示している。庭園跡に関しては、第Ⅰ期から第Ⅲ期までの時期変遷が確認され、第Ⅲ期庭園は、出土遺物から16世紀末葉前後に構築され、池の規模からもこの段階には館が二町四方の規模であったことを首肯する。一方、第Ⅱ期庭園に関しては、16世紀中葉頃の所産と考えられるが、この段階で館が方二町の規模であったかどうかに関しては、いまだ確証がない。近年、鹿毛敏夫氏は、大友氏の発給文書史料から、天文16(1547)年に大友義鑑によって「大友館」の各施設の建設が実施され、天正元（1573）年に義鎮により館の大規模拡張工事が実施されたと推定する。つまり、方二町規模への館拡張が天正元年の「土井廻屏」の作事に代表される一連の土木工事によるものである点を示唆したのである。第Ⅲ期庭園の造作がほぼこの時期に相当することは遺物の年代観から想定されるが、第Ⅱ期庭園の作庭が天文16年の作事に対応し、この段階で二町四方規模への拡張がなされていたか否かの検証については、今後の調査の進展を待たねばならない。



第84図「府内古図」(大分市歴史資料館蔵)

また、天正14(1586)年の島津氏の府内侵攻後、館内には町屋遺構の浸潤が認められ、館が復興された痕跡は認められない。

平成14年度に調査を実施した第12次調査では、15世紀前半に比定される規格性の高い掘立柱建物跡を確認している。これらの建物群の性格については不明であるが、享徳4(1455)年の相国寺僧端渓周鳳の日記『臥雲日件録』に大友15代親繁の館を訪ねたときのことが記載されており、「大友宅、葺以茅茨、敷以竹」といった内容が記されている。当時の守護館の状況を示す史料として重要であり、第12次調査で確認された掘立柱建物跡群との関連が注目される。（坪根伸也）

第85図 旧府内地区小字集成図（1/8,000）

第86図 大友府内城下町跡調査区位置図（1/8,000）平成15年9月現在

<<中世大友府内町跡>>

戦国時代の豊後国の中心地である「府内」は、伝承された古絵図によると大分川の西岸の自然堤防上に立地する。古絵図には、多くの街路をはじめ、守護館である「大友館」、「万寿寺」をはじめとする寺社や町屋が表現されている。この古絵図に描かれた範囲は、明治時代の地籍や現存している寺社、地形などを検討し、現在の地図上での位置を検証した結果、その範囲は、南北約2.2km、東西0.7 kmであることが確定できた。

しかし、この絵図を描いた意図や製作者の空間認識の問題か、当時確実に存在していた「府内」の南側にある標高約30mの上野丘陵上の土塁で囲まれた「上原館」、「金剛宝戒寺」や「円寿寺（岩屋寺）」など旧仏教系寺院や、府内の祇園会と関る「祇園社（弥栄神社）」などは省かれている。さらに、近年の発掘調査では、上野丘陵の南側の沖積地である古国府地区にも町屋や居館が確認されている。このように、古文書に登場する「府内」は古絵図に描かれた範囲よりも広い可能性が強い。

この大分川西岸地域の状況についての初見的な記述は、天喜元（1053）年と承保４(1077)年に「市河」と呼ばれる河原市の存在を示すものがある。その後、文暦元（1234）年と仁治３（1242）年に「府中」として登場する。特に仁治３年の「新御成敗状」は、町域での活動の規制を示している。しかし、この史料の表す実態については異論もあり、11～13世紀の「市河」や「府中」については、現在のまでの発掘調査で場所や範囲を特定できないものの「府内」は大分川岸での商業活動に起源をもつ可能性が強い。

このことを裏付けるように、古絵図にも大分川沿いの南北に延びる街路には上市町・下市町・工座町などの商工業者に関連する町名が見られる。この街路（一之大路）は発掘から、15世紀代には存在した可能性が強く、その方位もＮ－９°－Ｅと府内町の他の南北方向の街路とは異なる。この方位に直交・平行する区画性の強い溝は、大友氏館跡の南側などで検出され、15世紀代に範囲は不明であるが「府内」は計画的な整備が行われていたことが推測される。

発掘調査の結果、「府内」は16世紀後葉に大友氏館を中心にＮ－４°－Ｅの方位で再整備が行われている。しかし、一之大路の方位は改変されず、再整備された大友氏館の東側の南北方向の街路（二之大路）と整合するよう、東西方向の名ヶ小路町・御所小路町の街路を一之大路に直交するよう取付けている。この街路（二之大路）の規模と構造は、幅を約11mにし、砂と土を版築状に積み上げている。

この16世紀後葉の再整備は、街路のみに留まらず、大友氏館の東側や万寿寺の北側の堀が埋め立てられ、御蔵場の周辺を囲う施設が構築されている。また、大友氏館の東側の街路を挟んで対峙する御所小路町と桜町も埋め立てを行い、町屋を造成している。この大友氏館の東側の町屋は、二之大路と名ヶ小路の交差点の南東側には青銅加工した痕跡や分銅が多数出土する礎石建ての建物が立つ区画があり、二之大路と御所小路の交差点の南東側には堀と石積みで囲まれ、武家儀礼に使用される京都系土師器が多量に出土する区画がある。このように大友氏館東側の町屋には有力商人や武家屋敷の存在を窺わせる区画がある。これらの区画以外は、４～６ｍの小区画の町屋が並び、その裏手には共同と推測される井戸が掘られている。

また、一之大路と御所小路の交差点の南西側にも裏手に屋敷墓と凝灰岩の板状切石による六角形の井戸を持つ大きな区画がある。そして周辺には、商工業者の存在を裏付けるように、間口が10～12尺（３ｍ強）の地割や、石製のフイゴや鉄器が集中的に出土する鍛冶屋跡と推測できる場所も確認されている。こうした町屋の裏手には一之大路東側の横町・清忠寺の事例から井戸・廃棄土坑などが掘り込まれている。

さらに戦国時代「府内」を特徴付ける事象としてキリシタンの存在がある。古絵図にも「府内」の西側を南北に貫く四之大路沿いにその存在を示す記述がある。発掘調査でも、この街路沿いで墓地の一部を確認し、成人５体、乳・幼児７体を発掘した。このうち、成人２体と幼児２体は伸展葬で埋葬されていた。特に成人の１体は、腕を胸の上で十字に組む姿勢で、大阪府高槻城で調査されたキリシタン墓と極似する。それ以外は、伝統的な側臥屈葬である。このことは、「府内」に在住した宣教師たちの1557年の報告で、大友宗麟から地所を与えられ、病院と墓地に分けて使用した記述と合致する。すなわち、病院には改宗者以外も多数来院しており、乳・幼児の埋葬事例の多さも育児院の存在から理解できる。

この時期の「府内」を象徴するもうひとつの事象が南蛮貿易である。大友氏の貿易は中国南部や東南アジアに留まらず、博多を支配していたため朝鮮半島との貿易も行っている。このため「府内」各所から出土する陶磁器から見ると、ミャンマー産の黒釉陶器三耳壺、タイ産の焼締四耳壺や鉄釉染付け合子や練上げ手クンディ、ベトナム産白磁印花文碗や焼締長胴壺、中国南部の華南三彩、景徳鎮窯青花碗や皿、漳州窯の碗や皿、朝鮮半島からの朝鮮王朝産白磁や焼締碗などがあり、その対外交渉の多様さが窺われる。（坂本嘉弘）

【287　高崎城　大分市大字高崎】

《立地》大分市北西方の標高628.4mの高崎山山頂に築かれる。西は別府市、南は狭間町と境を接し、北は別府湾を臨む。鐘状火山の高崎山は、「多加佐岐とよむべし、名ノ義は高キ山の出埼有ルによれり」(「太宰管内志」)と記されるように海に面する北側は断崖となり、天然の要害である。万葉集には「四極山」と詠まれるように四方を見渡すことができ、東方約10kmの豊後の中枢であった大友氏の守護館跡（大友館跡）や中世府内町跡を一望できる。

南麓は標高約100～200mの丘陵が続き、江戸時代には由原村から城ノ腰をぬけ、銭瓶峠（赤松峠）を越え、別府に至る豊前道がとおっており、城ノ腰には「府中より弐里」の道標がある。現在の海岸線を通る国道10号ルートは、「…山の東の海辺なるがけ路をゆく、近し、道細くしてあやうしと云」（「豊国紀行」）とあり、道は険しく海路をとる場合が多く、この銭瓶峠ルートが古くからの主要道として使われていたと考えられる。

《現状》瀬戸内海国立公園の特別保護地区及び天然記念物高崎山サルの生息地に指定されており、山頂の遺構群は極めて良好に遺存している。東南斜面の竪堀群については平成元年度の登山道整備より一部が影響を受けたが、その大半は埋土保存されている。昭和61年、大分市史編纂事業に伴って500分の１の地形図が作成され、また登山道整備に伴う発掘調査により、竪堀・畝状空堀群の構造の一端が明らかとなっている。

《構造》山頂は、北から南東に細長く弓なりにのびる形状であり、縄張りは中央の最高所から北に約100mほどのところを掘り切り、2条の竪堀で両側を固め北の境とし、東南端の削平段群までの全長約600mの範囲とすることができる。幅は最高所のところで約90m、東南端で約120m、高低差は北側で約23m、東南端で53mある。縄張りの評価については、石を使わず構築する曲輪Ⅰ及び周辺の平場群は、曲輪Ⅱから東南半部の石を多用する縄張りに比べ年代的に古い構造で、後者は天正期のものとする見解（村田修三編『図説中世城郭辞典３』等）が示されている。別言すれば、最終段階に石の多用がみられる堀切ⓒから石塁ⓓの東南半部が集中的に改修されたとする評価である。

最高所に位置する曲輪Ⅰは、長径62m、短径57mほどの五角形に近い形にしっかりとした土塁を巡らし、北東辺中央に開口部（虎口ⓑ）を設ける。塁線はきわめて整っており、正面から左側は一層高さを増し横堀が巡るが後方の土塁で囲い遮断する。内部はほぼ平坦で奥の方に土壇状の高まりと右手土塁の東北隅に狼煙台といわれる石組みの井戸の形（炊口状の開口部をもち加工石を円筒形に積み上げた石組み施設があるが、近年の発掘事例「長崎県多良見町琴ノ尾岳のろしがま」等から江戸時代の九州沿岸に現れる外国船を長崎奉行に知らせる狼煙台跡と考えられる。服部秀雄著『景観にさぐる中世—変貌する村の姿と荘園史研究』「第２章の３　長崎周辺の烽火台」1995）をした遺構、それに長径12mほどの楕円形状の窪み（窪みと土壇状の高まりの機能については不明であるが、第二次大戦で高射砲が設置されたとのことであり、それに関わる遺構の可能性が高い。）がある。また、連続する東南や北西の平場群も石の使用は全くなく、平場の形成や切岸も不明瞭で自然地形を多く残す。曲輪Ⅰは立地や規模から主郭と判断されるが、確かに主郭から堀切ⓐの北西半部には石を積む・盛るといった痕跡はほとんどみられない。しかし、北方向から主郭の北・西面斜面への廻り込みを遮断する等高線に直行する石塁や南辺を固める石塁（土と礫を盛り両側を塁壁状に石積みする構造）等には石の使用が認められる。これらは北西半部に限定した防禦施設ではなく、主郭周辺を含めた南辺外辺部の防禦を貫徹させる防塁（石塁）に連なっており、山城全域の防禦に関わる施設と評価される。

一方、東南半部の景観は一変し、石を多用する曲輪空間が展開する。曲輪Ⅱは長径約50m、短径約30mの長方形を呈し、片方（西側）を大規模に掘り切り、東辺前面の横堀と石積みによる石塁を巡らし、空掘には石橋（土橋の両側に大石を立て並べる）を渡し、東辺には割石を積み両側に巨石を立て門構えとする虎口ⓕを設けている。内部は東西2区画（曲輪Ⅱ—a・Ⅱ—b）に分かれ、後方の西側(Ⅱ—a)を一段高くして向かって右側にも正面と同様に立石による虎口ⓖを設けている。曲輪Ⅱには直接入らず、一旦通路から二折れして曲輪Ⅲに入る。そして、左に折れ曲輪Ⅲの虎口ⓗ、さらに虎口ⓖへと向い、最も高い曲輪Ⅱ—aへ入る複雑な構造を取り、曲輪Ⅲの虎口ⓗも横矢の掛かる石積みの張出し部と一体となる虎口構造である。東南半部は、この曲輪Ⅱを頂点として石塁ⓓに向かって階段状に一直線に配置される連郭式をとり、虎口は南西面の通路側に各1ヶ所設け、横堀（上り坂道となる竪堀状の通路）機能をもつ通路側に側射がかかる構造である。北西を堀切ⓒ、東南を石塁ⓓ、南西を防塁状の石塁、北西側を切岸による階段状の平場群で固める独立空間となっており、出入口は石塁ⓓの中ほど位置する虎口ⓖと防塁となる石塁と繋がる東南隅の虎口ⓙの２ヶ所ある。その内、虎口ⓙは大手口と呼称されている。虎口の両側には割石を数段垂直に積み、石塁と方形の櫓台で前面と東側を画し、内方に四角い空間を設けるいわゆる内枡状の虎口構造をとり、西に登る通路と石塁に繋げる。通路を約70m登った曲輪Ⅴ脇にも石塁と一体となる石積みによる方形の櫓台を設け、通路幅を減じ本エリアの中心部曲輪への最終防禦ポイントとしている。東南辺の虎口ⓖは片方が内側に折れ込むいわゆる食い違い虎口の形状である。

虎口ⓘの状況（南から）

虎口ⓙ付近（南から北方向）

II-b曲輪南東角部の状況

第87図 高崎城縄張り図（1/2,000）

外縁部は、東南虎口外側の北東にのびる尾根筋から斜面にかけて帯状の曲輪群や削平段（捨曲輪・出曲輪）を階段状に連ね、大手口正面から東側の東南斜面に竪堀と畝状空堀群を配置している。空堀群は18条あり、曲輪直下に位置する群とやや下位の群がある。規模は幅3m、全長16mほどから、幅9m、全長90mをこえるものがあり、概して急傾斜地の空堀の規模が大きく空堀相互の間隔も広くしているのに対して、南斜面の緩傾斜地では規模の小さい空堀の数を増すといった工夫がみられる。V字やU字形の断面をもつ空堀両側には土塁（石混じりの盛土）を設け、堀底との比高差を増すことによってより起伏にとんだ地形を造り出している。

登山道新設に伴う竪堀群の調査において、出曲輪直下の竪堀及び周辺から、16世紀代の土師器坏片約300点、備前甕片数点、瓦器質擂鉢片等比較的多くの遺物が出土しており、また山頂部の曲輪内から多くの備前大甕片が採集されている。

本城の構造は、以上のように大きく３つのエリアに整理することができる。城造りの技術進歩といった視点からみると、石を多用する曲輪Ⅱを頂点とする曲輪空間の構造は、確かに主郭周辺部より新しい手法と考えられ、強固な防御性と屋敷的と言える構え（防禦性の追及とは無縁の格式・権威性を表すような巨石を使った立石等）の曲輪Ⅱは、曲輪Ⅰ（主郭）に比べ規模は劣るものの主郭と同等もしくはこれに準じる評価が与えられる。このことは、本来最高所の主郭が最終段階には曲輪Ⅱに主郭を移動させ、城域をコンパクトに約2分の１の規模に集約して、東南部斜面の竪堀、畝状空堀群を設け外縁部の防禦を完璧に固めた城に改修したとすることも可能である。しかし、南面外辺部の石を積んだ防塁や等高線に直行する斜面部の石塁など最終段階の改修が主郭Ⅰ周辺にも及んでいることから、主郭本体および周辺曲輪の改修は行わないもののこれを含めた全長約600mの範囲を統一された縄張りとすることが妥当と考える。

大友氏の本城におけるこうした特異とも言える縄張りの成立については、永禄5（1562）年に宗麟が丹生嶋城に移り、天正元（1573）年にその子義統が家督を継ぐが、実態は宗麟と義統の二重支配が続いており、惣領家のこうした支配構造の力学が反映された。また、累代の主郭を背後に残し、守り崇めるとする武家作法の一つ等々の可能性が指摘できる。いずれにしても、曲輪Ⅱにみる屋敷的な構えや石積み技法など極めて強い在地性を示すとともに、石積みの虎口構造や外縁部の畝状空堀群等は当該期の最先端の技術と言え、大友氏城郭の到達点を示すものとして評価される。

《歴史》本城が記される史料を年代的に整理すると大略４つに分けられる。

①建久７年（1192）豊前・豊後両国の守護識兼鎮西奉行に任命された初代大友能直の先発隊として派遣された古庄重能が上陸にあたり、土着武士阿南惟家が「高崎山に陣取り」抵抗した（「大友家文書録」）、及び正平４（1349）年、筑前国深江大蔵允種重が豊後に進行した時、鞍懸、高牟礼、「高崎」等を退治した（文書番号古文書部50）とするのが古い事例であるがこれを裏付ける傍証史料はない。

②城名が初めて現れるのが南北朝の争乱に関わる正平14年（延文４年：1359）から応安４（1371）年の史料群（高崎城、竹崎城、高崎御要害）である。この時代、大友氏の本城として機能し、また九州における北朝軍の拠点となった。文和４年（正平10年：1355）懐良親王と菊地武光の南朝軍は府内に侵入し、府内は簡単に敗れ、南朝に降伏する。これを契機に８代大友氏時は山城高崎城を築いた（『雉城雑誌』）と伝える。4年後の正平14年、再び親王軍は氏時の籠る高崎城を攻め（文書番号古文書部66）ている。正平16年（康安16年：1362）には、九州探題斯波氏経が入り北朝軍の指揮をとるが、万寿寺を本陣とする南朝方の武光軍が有利であったが決着つかず（文書番号古文書部73・74）、さらに応安4年（建徳2年：1371）九州探題今川了俊の子義範が田原氏能の案内で当城に入り（文書番号古文書部87～89、91～93）、同年8月6日から翌年1月2日までの間、100余度の合戦（文書番号古文書部101）があった。

③永正16（1519）年、朽網親満が18代大友親治に反して成敗される史料群。この時、親満は楯籠っている（文書番号古文書部186・187、他に178～183・185）。

④最後に、天正14（1586）年の豊薩戦争に関連する史料群があるが、その大半は島津氏側のものである。天正14年、鶴ヶ城をめぐる攻防で敗れた大友義統軍が、一時楯籠り龍王城に退去する（文書番号記録部1/11・13・16・18）といった内容である。この時、大友義統は田原紹忍の指示に従って「城普請」を行うよう賀来氏（賀来社大宮司）に命じ（文書番号古文書部768）ている。

以上であり、豊薩戦争以後高崎城は史・資料から消える。おそらく、文禄2（1597）年の大友義統除国に伴って廃城となったと考えられる。なお、南北朝以後の城管理についてであるが、永禄5（1562）年とされる大友家文書録綱文（文書番号古文書部358）によれば、「初当家世々構館於府内居之、築城於高崎山為不虞之守」とあり、代々不虞の備えをしており、本城として機能していた。（玉永光洋）

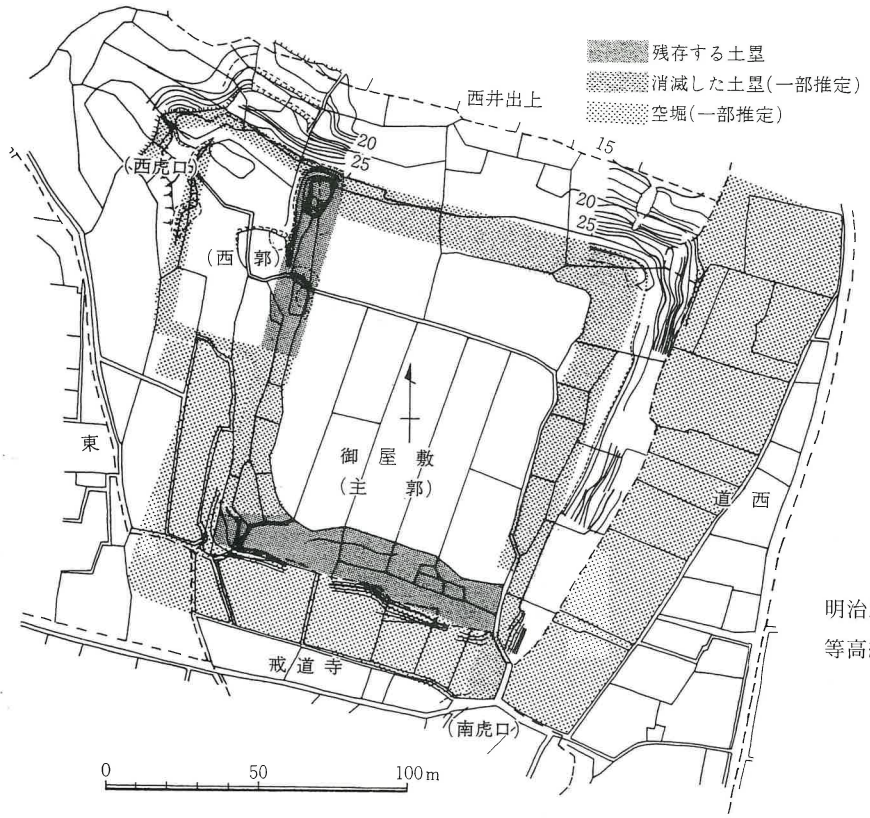
【293　上野大友館（上原館）　大分市上野丘西】

《立地》大分川の左岸を東西方向に延びる上野丘陵の先端付近には、東西約900m、南北約600mの平坦地が展開し、上原館はこの平坦地の中央北寄りの台地縁辺部に位置している。館は小谷地形の奥部の舌状に張り出した自然地形を利用して北・東・西を方形に整形し、北西部分に「郭」状の方形張り出し部を形成する。館所在地の小字は「御屋敷」と称し、館中央地点での標高28.9mを測る。

《現状》館内は宅地化されており、四周を廻っていたと推定される土塁は南辺と西辺の北側部分を残すのみであり、他はすでに削平されている。西・南・東面に存在する堀跡も大半が埋め戻され、往時の姿を留めない。北側斜面地も大部分がコンクリート擁壁により被覆されており、改変されているが、北東部分には傾斜45度程度の斜面地が遺存し、旧状を示している。

《構造》南北に長い長方形プランを呈する主郭部は、土塁基底部で南北長156m、東西長112mの規模を有し、遺存する南側の土塁規模は現状で基底幅17m、高さ2.5mを測る。北面を除く他の3方には堀が掘削され、地籍図上で確認される堀の規模は、南堀幅20m、東堀幅30m、西堀幅10mに復元することができる。北西部の「郭」状の張り出しは、自然地形を利用して整形を施したもので、南北40m、東西30mの規模をもち、内部は館本体よりも約2m低い平坦地となっている。

これまで下水道工事、個人住宅の建設等に伴い、5地点の発掘調査が実施されている。調査の結果、土塁の存在が想定される各地点において土塁基底部を確認し、館の四周に現存する南側土塁と同規模の土塁が存在していたことが判明している。土塁の内部構造は、基本的に性質の異なる粘質土を交互に版築状に積み上げて構築するものであるが、断面観察結果から新旧２時期の施設の存在が明らかとなっている。古段階のものは、水平方向を基調として版築状に積土を行う構造のものである。これに対して新段階のものは、先行する古段階の施設を被覆するように構築され、斜堆積を基本とする積土により構成される。新段階の積土は古段階のものに比して積土単位も大きく、造作は概して雑である。古段階の積土内から青磁碗破片が出土しており、この遺物の年代観から15世紀後半～16世紀前半の所産年代が推定されている。新段階のものは先行する古段階の施設を改修したものと考えられる。具体的に年代推定の手掛かりとなる遺物の出土はないが、土塁、堀の規模や館内部から出土する遺物内容



明治22年の旧字図に現地形・主郭部等高線を重ねた図である。

〈玉永光洋「高崎城の縄張りと織豊系城郭の成立」(『大分県地方史』第143号)より転載〉

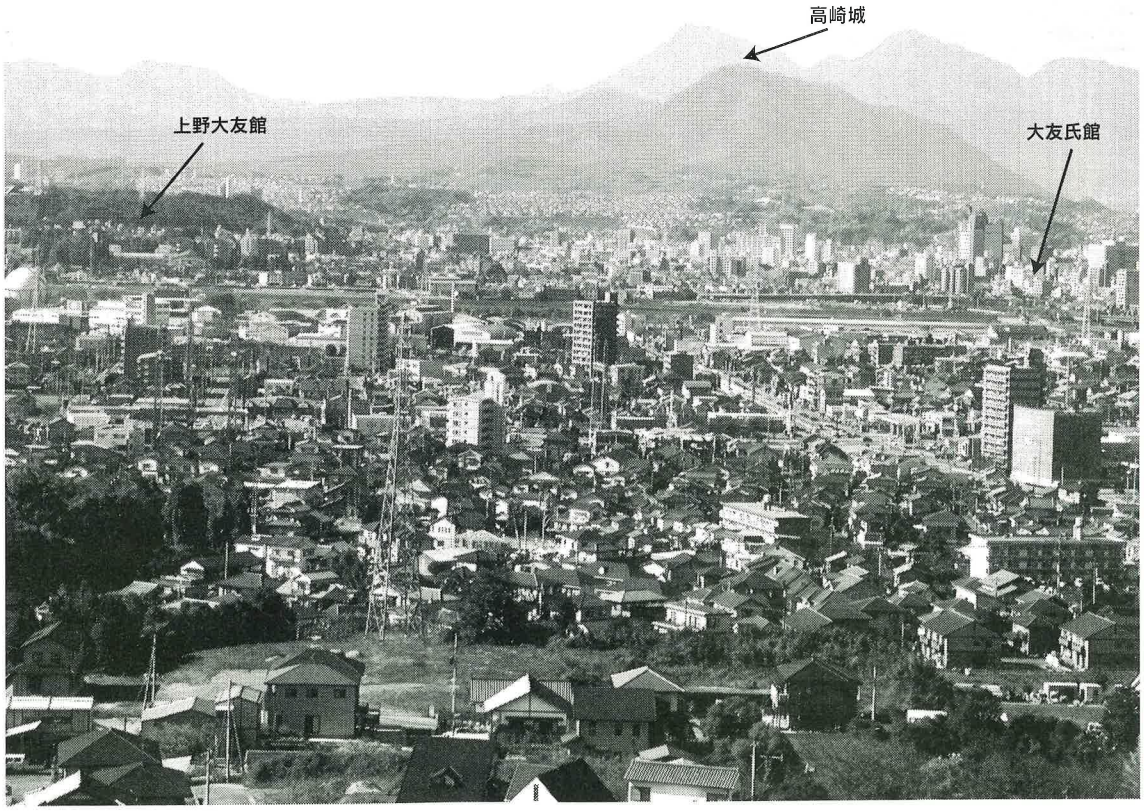
第88図 上野大友館現況図（1/2,500）

から16世紀末葉の島津氏の府内侵攻に備えた改修事業である蓋然性が高いと推定される。さらに、調査により北側土塁の内側基底部に人頭大の河原石の前面を揃えて2段+αに積み上げた石積が確認されており、土塁内側基底部に犬走り風の施設が存在していた可能性を示している。

また、館内部の施設配置に関しては、これまでの調査対象範囲が狭小なため不明であるが、各所で整地層を確認しており、館機能段階の遺構が比較的良好な状態で遺存している可能性を示唆している。このような点を踏まえ、計画的な発掘調査による内部の建物配置の究明が今後の課題といえよう。

《歴史》上原館の具体的な成立年代は不明であるが、『豊後国志』の豊後国府の項に「今古国府村是其址也、古者毎国皆有府、国宰所居、王制既廃、建久以還大友氏修飾為館、元弘以後廣大其地及上野原、更築為城居焉、名府内城」とあり、また、『太宰管内志』にも類似の記述がみられる。両史料は、元弘（1331～1333）・建武（1334～1336）年間、すなわち大友氏6代貞宗、あるいは7代氏泰の頃に相当するとしている。

ちなみに、現状での考古学的な所見としては、先述の古段階の囲繞施設積土内出土遺物から導きだされる15世紀後半を上限とする。また、上原館関連の史料としては、『大友家文書録』の中に永禄元年(1556）に大友義統が上原館で誕生した記載がみえ、天正６（1578）年に上原館から日向へ向け出発したとする内容記載がある。さらに、ルイス・フロイスの『日本史』には、天正14（1586）年の項に「うえのはるに一城を築く」とあり、発掘調査で確認された新段階の土塁改修との関連が注目される。島津氏の府内侵攻時の様子については、『豊薩軍記』に「島津中務少輔家久ハ守岡ニ一夜止宿シ、逆瀬豊前相良民部両入ニ軽卒百二十人相添テ府内ノ様ヲ点検セシメ、翌レバ上ノ原ト云處ニ天台宗圓壽寺トテ六坊アリシヲ本陣トシテ、其後大友ノ居城ニ移リ来年ノ三月マデゾ居ラレケル」とある。その後の館状況に関しては、元禄7（1694）年、貝原益軒による『豊国紀行』に「大友城跡は今の府内の南半里にて上の原と云所也、元府内と云ひ今は荒野と為る。」とする記事がみえる。加えて『雉城雑誌』には、「当邑（六坊邑）農家の裏にあり大友氏代々の館址也（中略）此城趾當代猶大門口、小門口、千貫井戸等の名を存在し湟の處々残れり、村老の話を聞くに四五十年前迄當山所々に芝山あり里民往々畑に開きたることのありしに大成水瓶の如きもの幾つともなく出で、且往々陶器の類を堀出すことありと伝えり。」とあり、現況にいたる経過をたどることができる。（坪根伸也）



明野台から旧府内町方面を望む（写真 坂本嘉弘）

【295 千歳城（せんざい）　大分市大字千歳】

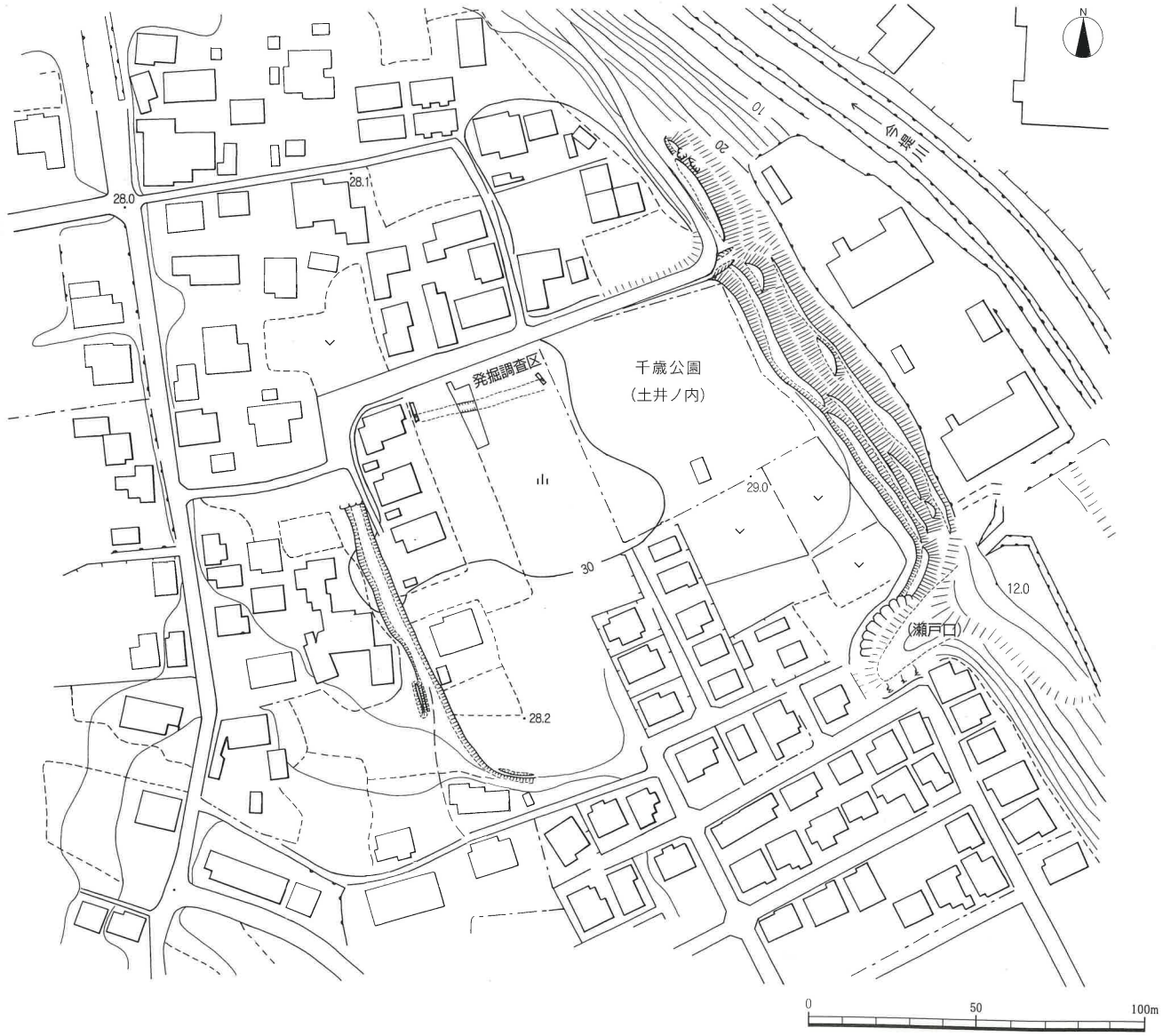
《立地》千歳城は、大分平野のほぼ中央に展開する鶴崎丘陵の先端付近にあり、乙津川を望む台地東辺に位置する。標高28mを測り、東側の低地との比高は約15mである。

《現状》主郭内部は、北東部の約四分の一が地下げされ児童公園になっており、その他の部分は宅地化されている。

《構造》台地縁辺部に構築された方形館である。小字を「土井ノ内」と称す。明治期の字図によると、北・西・南には堀の痕跡と判断される区割りが認められる。館東辺は台地斜面を利用し、南辺は小さく開析する谷地形を利用し堀様に造作していたと考えられるが、谷開口部を除き宅地化により旧状をとどめない。西側には一部に堀跡が認められ、現在でも湧水と帯水の状況を確認できる。北側の堀部分は道路となっている。東側の斜面部は崖状になっているが、帯曲輪状の平坦面を４段程度造作している。館の規模は、東西120m、南側東西140m、南北125mを測り、堀まで含めると北側東西132m、南北140mの規模に復元できる。

平成４年度に館内北西部の一部について発掘調査が実施され、土塁基底部と土塁内側に構築された溝状遺構が検出されている。確認された土塁は、黄褐色土を基調とした混土を版築状に積土した構造を示し、最高所で56cmの遺存高を確認することができる。土塁内側の溝は、幅2.2m、深さ1.2mの規模を示し、この溝と堀痕跡と考えられる現在の道路との距離は現状で6.4mを測る。

《歴史》千歳城跡は、中世吉岡氏の居館跡とされており、『豊後国志』に「千歳城、在高田郷千歳村、吉岡宗歓築以居焉」とみえる。その後、吉岡宗歓が鶴崎城を築城し、千歳城から鶴崎城に移ったという伝承もあるが、吉岡氏系図によると、宗歓は千歳城で没したとされており、千歳城を本拠としていたと考えられる。また、千歳城の北西に位置する字「行永」には、正徳5(1715)年に延岡藩千歳役所が設置された。（坪根伸也）



第89図 千歳城縄張り図（1/2,000）

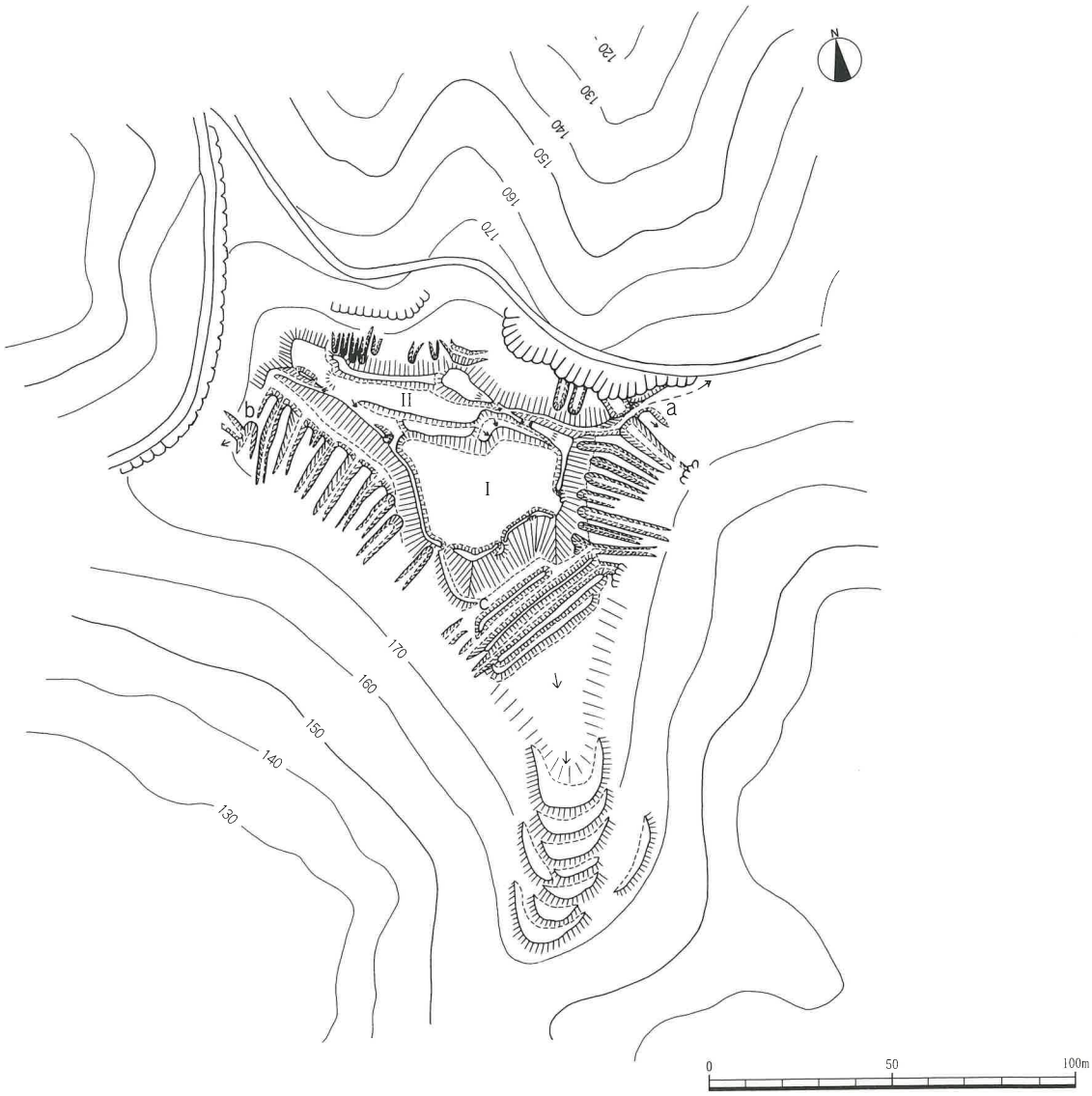
【299　鶴ヶ城　大分市大字中戸次】

《立地》山間部を縫って北流した大分川が、佐賀関半島から大野町に連なる山塊を突き破り、大分平野に注ぐまさに関門のような地点の右岸山地上に立地する。遺構は標高193mの山頂から八手状に広がる尾根先端部にかけて展開する。山容は比較的なだらかな、優雅な広がりを見せる。山頂からは大分平野を望むことができ、麓の集落との比高差は150m近くある。

《現状》平成3年の台風による風倒木被害があり、木の搬出のための作業道が作られているが、ほとんど遺構には影響がない。主郭部分は杉の植林で若干の風倒木はあるものの遺構の残存状況は良いが、尾根の先端部付近は草地となって遺構が確認しづらい。しかし、全体的に里山であったため後世人の出入りが多かったと思われ、細かな部分で旧状が失われている。

《構造》主郭（Ⅰ）は、一段高い北側を除く三方を高さ0.5～1mの土塁で囲む東西40m、南北25mのややいびつな形を呈す。北側は約2～3mほど高い細長い平場（Ⅱ）があり、さらにその北端には櫓台状の平場を持つ土塁がある。主郭の土塁は北東隅部で櫓台状に幅が広くなり、さらにそこから北西方向に伸びて上段の曲輪の土塁とつながる（ただし、現状では東側から登ってくる道との接点に面が合い、北端の土塁との差は2m近くある）。すなわち、主郭と考えられる最も面積の広い曲輪は、北側の一段高い曲輪から見下ろされることになり不都合であるが、このような状況にならざるを得なかったのは、大規模な改修の結果と考えられる。

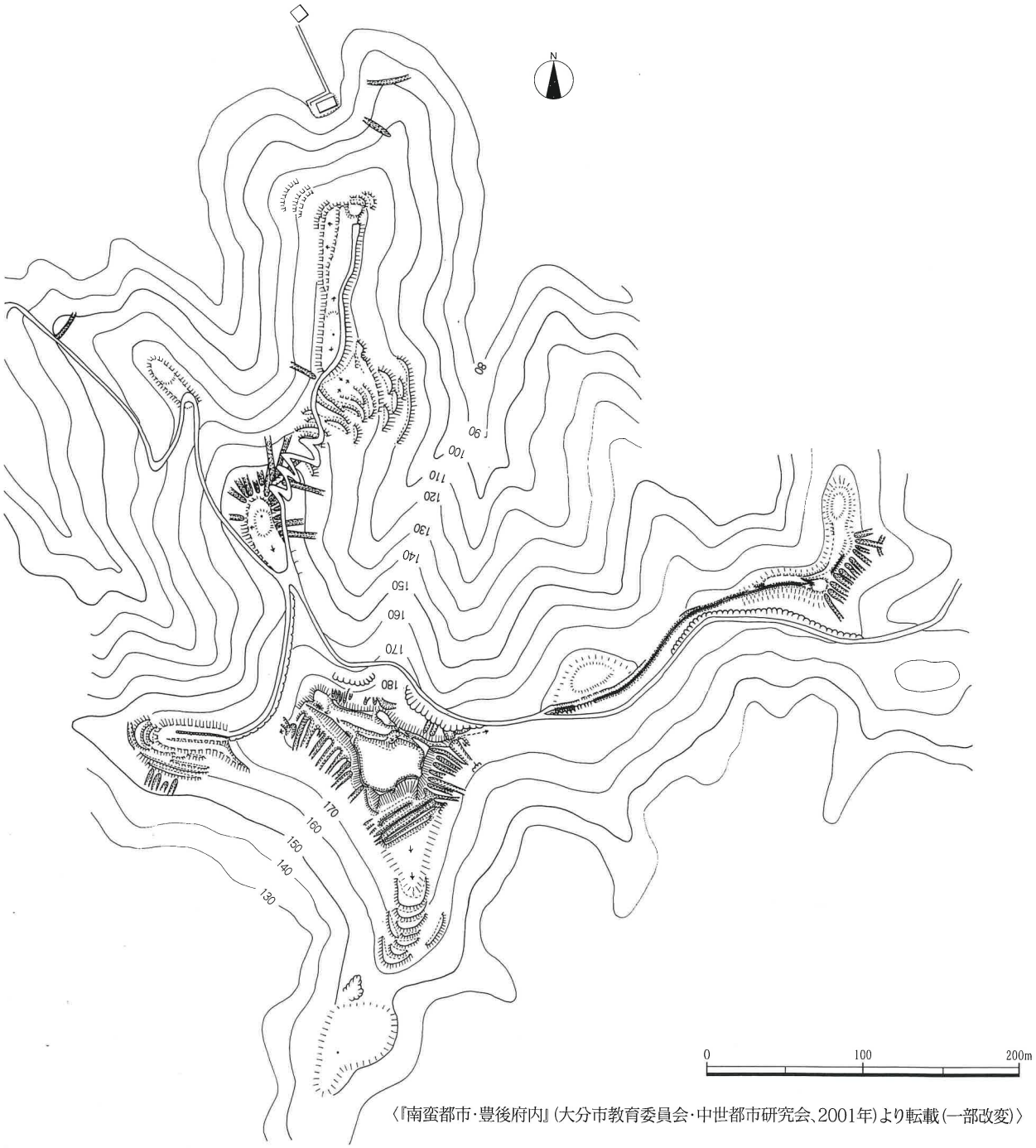
主郭から南に延びる尾根は比高差8m程の切岸となり、三条の平行する堀切と土塁で頑丈に遮断している。主郭北東部から東に下る鞍部は土橋を有する堀切で遮断し、その両脇に畝状竪堀を入れて通路を絞り、主郭北側斜面を斜めに登る虎口を形成する。主郭西斜面は6～7mの比高差がある切岸で作られた横堀状の帯曲輪の端から畝状竪堀が10本入れられており、西端には上位曲輪との連絡通路が造られている。主郭北側の一段高い平場の北側斜面は、小さな尾根に対して堀切を入れ斜面には畝状竪堀を施す。



第90図 鶴ヶ城主要部縄張り図（1/2,000）

この主郭部に対して、更に91図のようにそこから派生する尾根の先端部付近には畝状竪堀を斜面に入れた曲輪が三箇所に見られる。尾根線を利用した防御ラインの形成を指向したものである。

《歴史》同時代文書で唯一確認できるのは、天正14（1586）年の大友義統感状(案)（文書番号758）にある「利光越前入道要害」であるが、フロイスの『日本史』にも「府内から三里離れたところにある利光と称するキリシタンの貴人の城」と出てくる（文献資料編2の68）。島津側の記録によると、城下（下城）は即日悉く破却したが、本城（上城）は警固が緩まずに、なかなか攻略できなかったという（文書番号記録部一の11、13、14など）。（小柳和宏）



〈『南蛮都市・豊後府内』（大分市教育委員会・中世都市研究会、2001年）より転載（一部改変）〉

第91図 鶴ヶ城全体縄張り図（1/4,000）

【300　小岳城　大分市大字中判田】

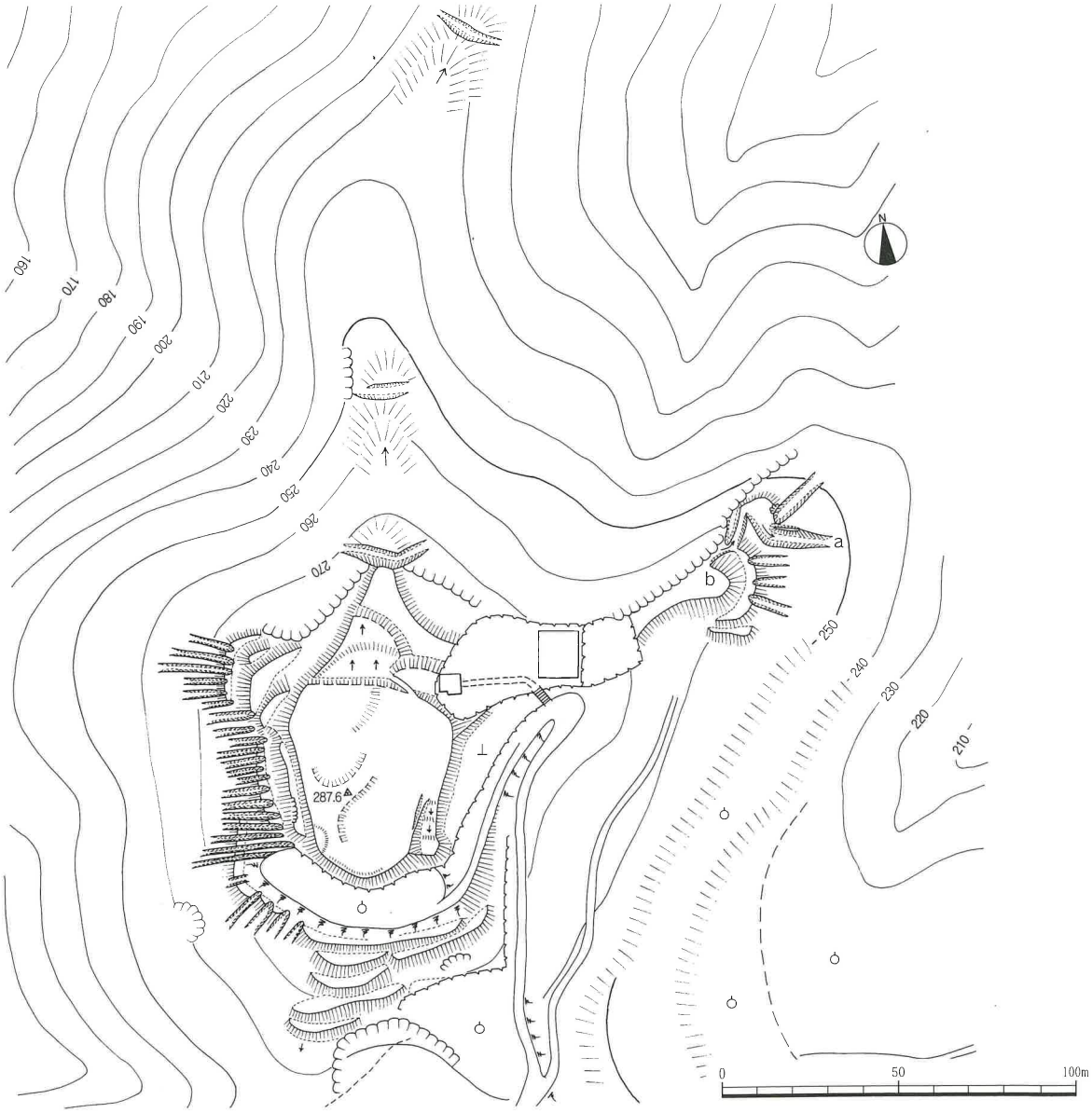
《立地》大分平野の南にある中判田の平野を見下ろす標高287.6mの独立峰の頂上に城郭はある。ここは、大野郡から大分に抜ける古道が山裾を取り巻いており、大分平野を目指して北上するには小岳城は重要な関門になる。その山裾を取り巻く道沿いにある集落との比高差は約60mで、中判田の沖積平野との比高差は260m以上となる。

《現状》主郭から一段低い東側に天守を模した住宅が建っており、一部旧状が失われている。また、城郭の北側約3分の2も公園として花などが植えられ、整備されているためやや旧状が不明な部分がある。また、主郭南側の一段下がった部分も畑で破壊されている。中心の曲輪部分については良好に残されている。

《構造》南北50m、東西40～25mの不整な台形状を呈する主郭があり、北側はなだらかな斜面を数段に加工した曲輪が続き、3本の堀切によって遮断される。南側は主郭直下は破壊されているが、その下に階段状の曲輪群が配される。西側は三段の帯曲輪が伸び、そこに重なるように畝状空堀が25本入れられている。東側は破壊されて不明である。

主郭は削平が十分に行われておらず、内部は起伏がある。また、北側の曲輪との境は、後世に若干の手が入ったとしてもきわめてあいまいで、一応数段の曲輪を表現したがほとんど自然地形のままかもしれない。また、東側に大きく伸びる尾根の先端部には6本の竪堀と小さな曲輪群がある。ここが城全体の虎口になると考えられる部分で、竪堀(a)を登り小さな曲輪に一旦出た後、さらに回り込んで坂を上り曲輪(b)に至るものである。ここから主郭までの間は破壊されており、ルートは不明である。主郭には虎口と考えられるスロープが南東部にあるが、その南側が壊されており旧状は不明である。

《歴史》野尻紀伊守の居城といわれるが、同時代の文書では確認できない。むしろ、フロイスの『日本史』にしばしば出てくる「清田城」の可能性が高い。そうすると、城主は宗麟の娘婿である清田鎮忠の可能性がある。位置から考えると、鶴ヶ城と同様、天正14年の島津氏豊後侵攻に備え改修されたと考えられる。本来は、主郭の周りを帯状に幾重にも曲輪が取り巻くタイプの城郭であったと思われるが、島津氏の侵攻に備え、畝状竪堀を入れたものであろう。(小柳和宏)



第92図 小岳城縄張り図（1/2,000）

【307　丹生島城　臼杵市大字臼杵】

《立地》臼杵川、末広川、熊崎川、塩田川、海添川の5河川が合流して形成される臼杵の沖積地の先、臼杵湾最奥部に浮かぶ、海抜21mで東西約500m、南北200mの島上に立地する。丹生島と呼ばれるこの島は、阿蘇第Ⅳ期溶岩によって形成された島であるため、頂部は比較的平坦であるものの、その周囲の岸壁はほとんど垂直に近く切り立つ。大友氏築城から近世初頭の稲葉氏入封直後までの丹生島とその周囲の景観は、島の北・東・南を海が取り囲むものであった。唯一臼杵川に沿って堆積した祇園洲という砂州に接近する島の西側も、満潮時には入り江が形成されるため、城は隔離される景観をみせていた。

《現状》現在は市街地とつながり、公園として整備されている。江戸期には臼杵城（近世段階のものは臼杵城と呼ぶ）本丸・二の丸が所在していた丹生島は、明治4年の廃城後、内務省所管の公園として一般公開され、昭和25年には都市公園として都市計画決定を受けた。明治から昭和にかけての公園整備によって、郭内の景観は大幅に変更され、今なおかろうじて近世期の石垣の一部・空堀と2基の櫓が当時の姿を留めるのみである。昭和40年に県史跡指定を受け、平成2年に史跡整備計画が策定された事によって、石垣・櫓の修理が現在継続して行われ、既存遺構整備による城郭景観の回復が行われているところである。

《構造》近世以降の度重なる改変によって、大友段階の城下町構造はもとより、城郭の構造を復元することが困難な状況にある。これらの様相を唯一具体的に物語るフロイス『日本史』によれば、大友義統期の天正6年以降の丹生島にはすべての城郭機能が集約されていたようで「蔵」、「屋敷」、「礼拝堂」、正室の居住区・義鎮（宗麟）前夫人の居住区から構成される「館」という私的空間があったほか、「政庁」機能を果たす公的施設の存在が窺える。弘治～天正6年の義鎮期の詳細については不明だが、『日本史』は、政庁機能を果たす公的施設が城外に存在していたことを窺わせている。

第93図 臼杵地区小字集成図（1/8,000）

《歴史》丹生島城の城郭化は、メストレ＝ベルショールの書簡にあるように、大友義鎮が弘治２年に起きた豊後南郡衆による叛乱から逃れるため、この年に丹生島にその本拠を移したことにはじまる。

大友氏除国後の文禄3(1594)年には福原直高が入城したが、慶長2(1597)年に太田一吉と交代、太田氏は慶長5(1600)年まで在城する。太田氏最末期の段階で臼杵城には31櫓7櫓門があったとされ、このころには近世城郭としての体裁が整っていたようである。

稲葉氏入封(慶長5年)以降、祇園洲周辺と丹生島北側の三の丸築地の埋め立てが進み、明治以降には島の南側、昭和40年代には東側の大規模な埋め立てが行われた事で、丹生島は完全に陸地化され、現在では往時の景観を失っている。また、慶長13年に行われれた三の丸周辺の大規模な再整備によって開削された、祇園洲を東西に横切り、町場と三の丸を画する水濠(堀川)も昭和39年に埋め立てられたことから、三の丸周辺においても当時の城域を把握する事は困難な状況となっている。(神田高士)

＜＜16世紀後半期の都市臼杵＞＞

戦国都市臼杵の具体像を知るには、ルイス＝フロイスの『日本史』や『文禄検地帳』などわずかな一次史料や数例の発掘調査成果、近世初頭の藩政史料から推察するほかはない状況にある。

『日本史』の記述を分析する限りでは、義鎮が丹生島に築城した弘治2(1557)年から永禄年間にかけて、おそらく二王座台地縁辺部にまず大友家中の有力家臣団屋敷の形成がはじまり、町衆による町場の形成は、臼杵教会の創建された永禄8年頃、府内から義鎮を慕って移住したキリシタンたちによって初めて行われた印象がある。この後、臼杵町には天正8年に修練院・新教会が設立され、一大キリシタン都市が形成されたことが伺えるが、一方で同時期に多くの「異教徒」がこの町に住んでいたと『日本史』は記録し、天正年間には多種多様な階層、信条を持つものが混住する「都市」になっていたろうことがわかる。

町衆による経済活動の実態については未だ不明な点が多いが、義鎮段階では、16世紀前半までに形成されていた都市臼杵の西に位置する市村(市浜村)の市機能の臼杵町移転が何らかの起因となって都市臼杵における本格的な経済活動が始まった可能性も考えられよう。市村は天正年間に臼杵町中の掛町に移転したとされる(『役家先祖書』)が、この掛町こそ文禄年間に府内の豪商、中(仲)屋宗悦が居した街区である。

16世紀後半の臼杵町の空間構成は、二王座台地に武家地が、その縁辺にあたる横浜と呼ばれる砂浜上に町場が、それぞれ現在の二王座歴史の道と本町通りを基軸に展開し、そこから横浜浦という入江を挟んだ祇園州と呼ばれる砂州上に掛町・唐人町等の町場が形成されていたものと現段階では考えられる。このV字形となる町場域の要位置にあたる、現・畳屋町付近に教会施設がかなり広い敷地をもって所在していたろうことが、『日本史』から窺える。(神田高士)

第94図 近世臼杵城下町復元図（正保年間の絵図による復元：神田作図）

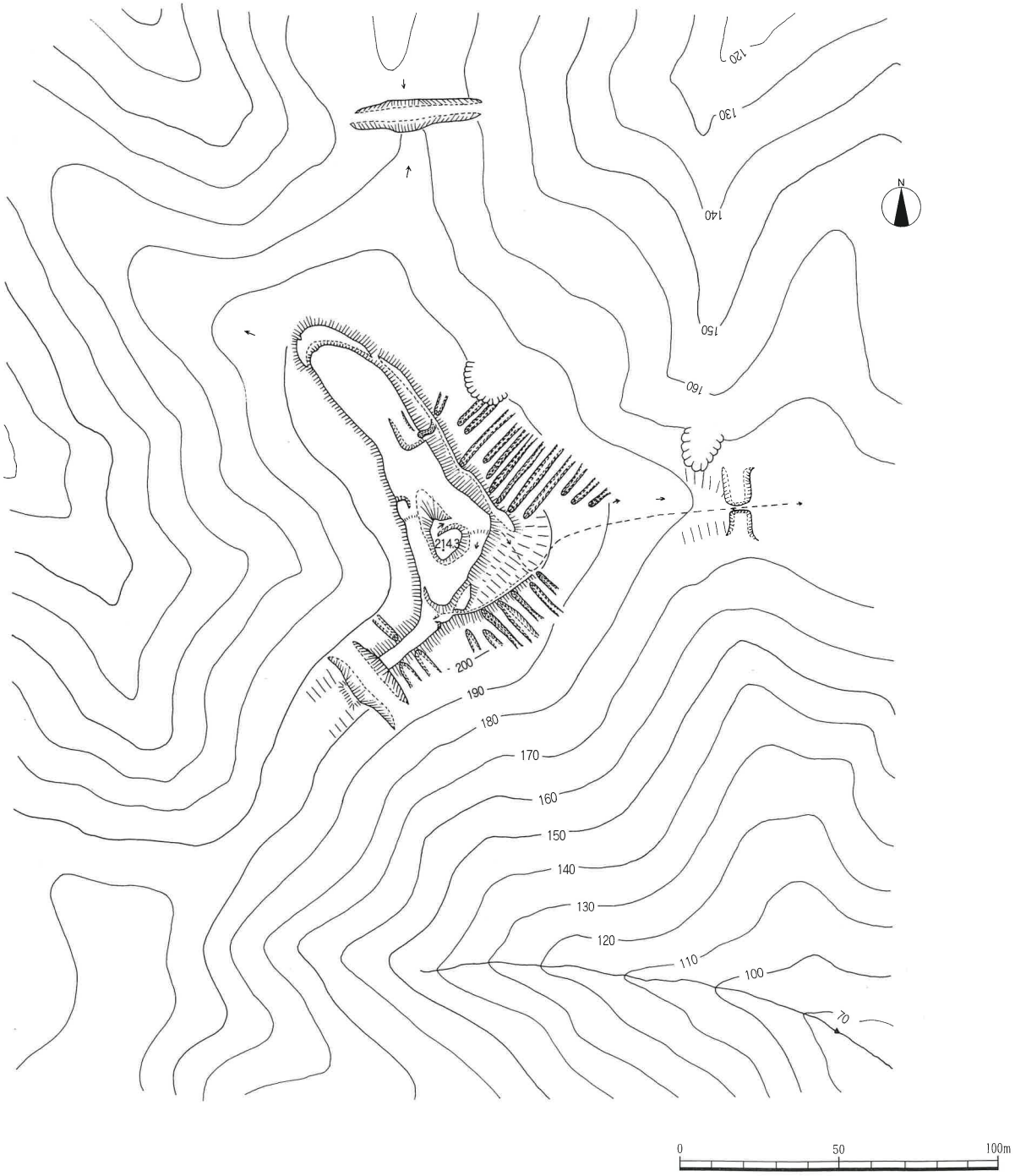
【308　水ヶ城　臼杵市大字江無田】

《立地》標高214mの山頂で、臼杵市街地北部を見渡せ、麓より180mの標高差である。　しかし最高所は700m南で標高280m、地図ではそこが水ヶ城と標記されているが、遺構はみられない。名称としては「水上城」「水賀城」とも表記される。

《現状》保存は良好で大きな改変はないと思われる。東側斜面に繁茂しているシダ類が地形の起伏をわかりにくくしている。

《構造》頂上中心に一段高い約8m四方の平場が設けられ、なだらかな傾斜する広い平場を主郭とする。南北に帯曲輪があり、特に東側斜面に沿って犬走り状となっている。南・北・東の3方向の尾根上に堀切りがある。なお東側堀切には土橋が設けられており、ここから尾根伝いで主郭南側に通じる虎口であると思われる。虎口南側や主郭の北東側等に畝状竪堀群が集中する。

《歴史》永正二年(1505)に臼杵長景による築城といわれ、以後臼杵氏の居城とされている。フロイスの『日本史』で「臼杵殿が臼杵城の真向かいに設けていた別の城」（第68章）とされる城と考えられる。（諸岡郁）



第95図 水ヶ城縄張り図（1/2,000）

【317　久保泊城　津久見市大字四浦】

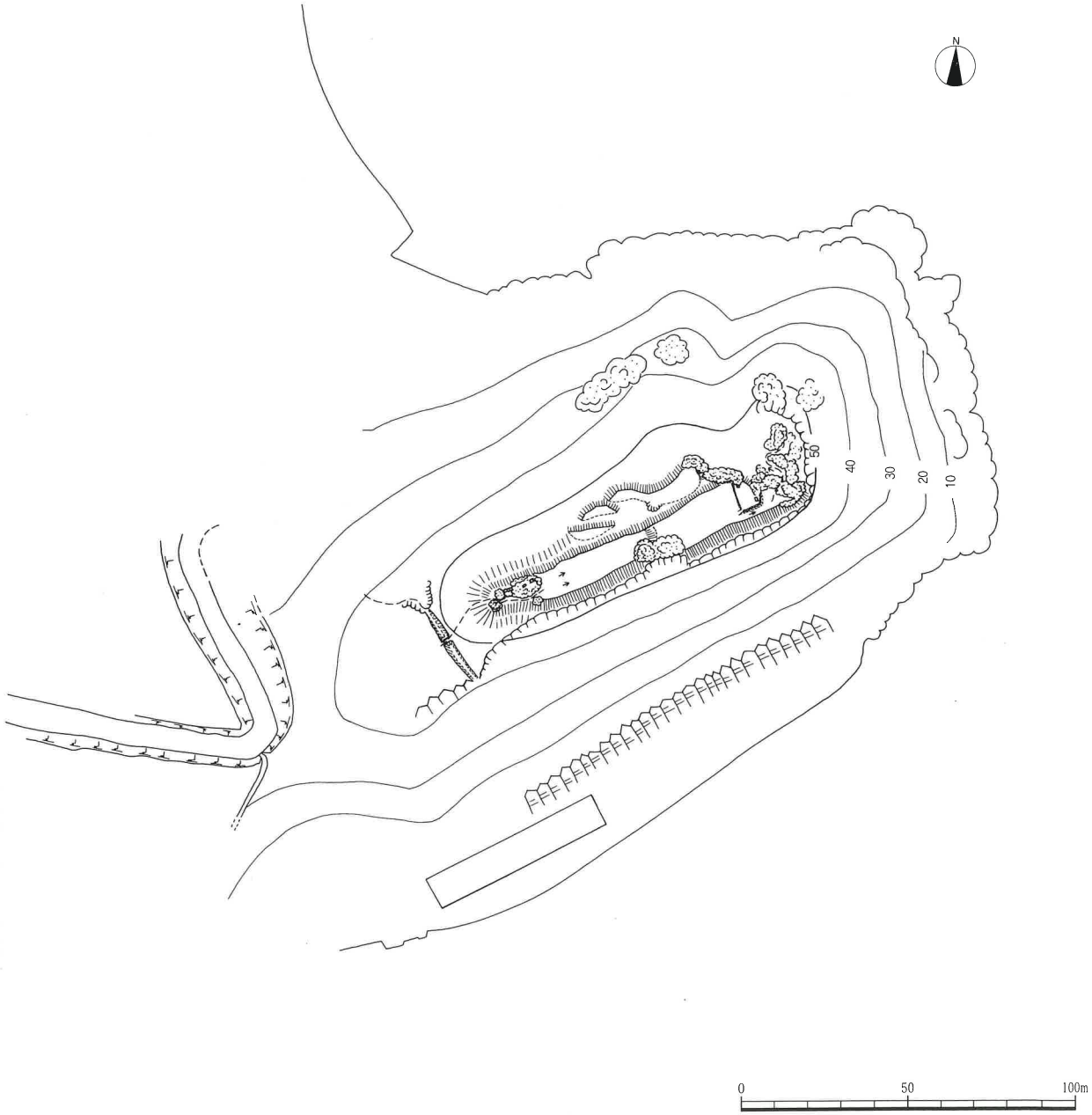
《立地》複雑で入り組んだ入り江が多くある四浦半島にあり、海上に突き出た半島の上にある。三方は海で囲まれているが、非常に切り立った崖があり、山側の尾根筋でしか城にとりつくことはできない。

《現状》特に大きな改変は受けていないが、個人の墓地と祠が作られ、その基壇に石垣が築かれている。

《構造》山頂部は、東西に長くのびており幅4m長さ20mほどの曲輪が2段ある。海に突き出た先端部は岩が露頭、その手前には、石垣を施され一段高くなった場所がある。南側の斜面は急峻な崖で数段の曲輪がつく。また、西側端には一条の小規模な堀切があり、土橋が設置され登城道となっている。

きわめてオーソドックスでコンパクトな縄張りであり、自然地形をうまく利用している。攻略する際は、山側に続く尾根筋を突破しない限り不可能で、少数の兵でも守備ができるようになっている。駐屯域も広く、海上からの攻撃に対して高みからの反撃が可能であり、まさに天然の要害と呼ぶにふさわしい城といえる。

《歴史》『大友家文書録綱文』〈史料編古文書部773〉によると、天正14年、豊薩戦争の際に鳩浦の鳩兵部少輔源介、久保浦の賀島中務少輔右馬助、深浦の賀島三河守主殿助、越智浦の紀主馬助九郎がこの久保泊城（塁）に拠って守ったとされる。また、鳩氏らは日向より海を渡って攻めてきた薩軍に対しよく守り、宗滴より鉄砲と火薬を遣わされたとある。（豊田徹士）



第96図 久保泊城縄張り図（1/2,000）

【342　権現嶽城　大分郡庄内町大字龍原】

《立地》庄内町中央のやや南方に位置し、北流する芹川が大分川に合流するあたりの右岸、猿渡の標高216mの独立丘陵上に立地する。丘陵頂部は大岩が露出し、急峻な山容を示している。また、豊後府内と玖珠・日田、さらには庄内を経由して久住・竹田を結ぶ主要交通路上にある。

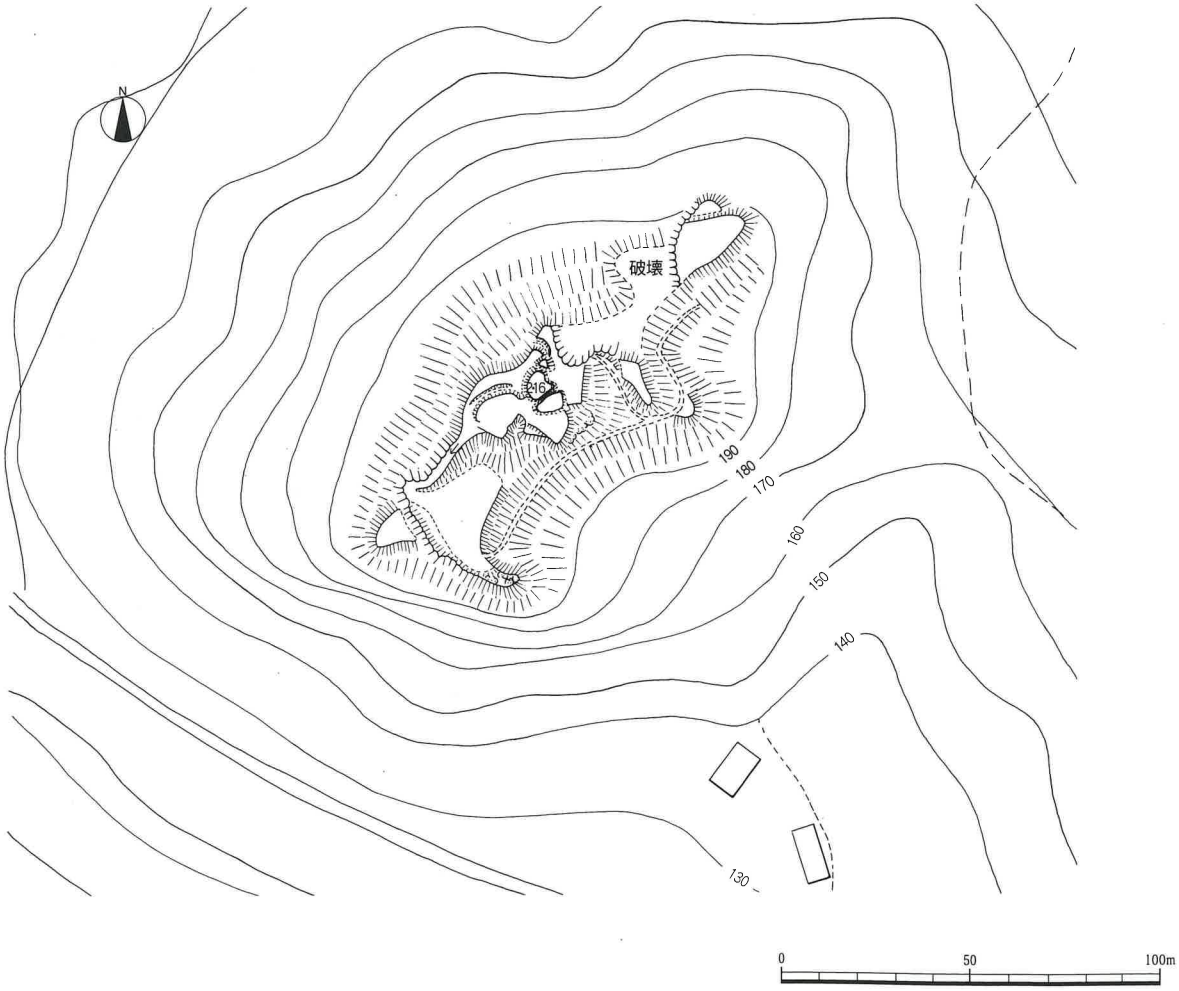
《現状》丘陵北東側の大半は、大規模な削平を受け、当該期の状況は把握できない。また、近年の登山道の取り付け工事等により山の景観は大きく改変されている。

《構造》山上は大岩が露出し、狭小で複雑な地形ではあるが、地形の特性をうまく利用して平場群を配置している。最高所は幸い遺存しており、二つの小規模な平場の周囲を切り、花弁状に配置される下段の平場群が取り付き、各平場の間を竪堀ないしは横堀状の堀を掘削し、中心部を固めている。おそらく、北東部側も地形に合わせながら、小規模な平場群を連続させていたと考えられる。一方、南西側には、両方の岸を切った細尾根を下り降りたところに、最大規模の平場があり、先端の削平段が固めている。この平場は、最高所との比高差約20m強あり、谷底の広い空間といった景観であり、武者溜り的機能が想定される。

本城は、独立した急峻な天然の要害を巧みに利用し、立て籠ることに特化した砦的山城と理解され、切岸による平場群、竪堀及び横堀機能をもつ堀で構成される。

《歴史》「狭間家譜」（狭間文書）によれば初代直重の時、阿南郷龍原村権現嶽に在城と記され、狭間氏の居城と伝える。狭間氏は藤姓大友氏庶家で、初祖は大友親秀の四男直重。文永の役の恩賞地大分郡阿南庄松富名に土着し、狭間村とも呼ばれる地名から狭間氏を名字とした。

天正14年12月6日、島津義弘は岡城攻略に向い、新納久時以下4000余騎は大分郡に進撃する。まず、直入りの松牟礼城を攻め、12月7日には庄内の松ケ尾城に押し寄せ、激戦の末攻略する。続いて同船ケ尾城も落とす。一方辻の台・鳥ケ鼻両城の大友勢は、船ケ尾城の救援に赴くが形勢は決しており、急ぎ松ケ尾城に入る。島津軍はこの城を攻め、翌18日には権現嶽城に籠もる狭間氏を攻撃するが、「難所の高山」であったため、数日の包囲で持ちこたえた。（文書番号記録部2、2、21、35）（玉永光洋）



第97図 権現嶽城縄張り図（1/2,000）

【351　一尺屋摺木（するぎ）砦　北海部郡佐賀関町大字一尺屋字摺木】

《立地》速吸瀬戸を臨む佐賀関半島の南西方の一尺屋にある。この地は、室町時代から戦国時代にかけて大友水軍の主力として活躍した若林水軍の軍港として発達し、江戸時代にも瀬戸内海海上交通の一拠点として栄えた上浦（東浦）・下浦（南浦）港ある。城跡は、標高430.2mの樅木山の峰から南に派生する丘陵の一つで、上浦港西方の標高約200mの丘陵先端部に立地し、港湾が一望できる。

本来、若林水軍の城としては「丸尾山砦（一尺屋砦）」(※)が知られており、上浦集落に隣接する西方の標高約50mの独立的な丘陵に比定されている。しかし、現況は蜜柑園などの造成が進み、往時の姿は確認されない。

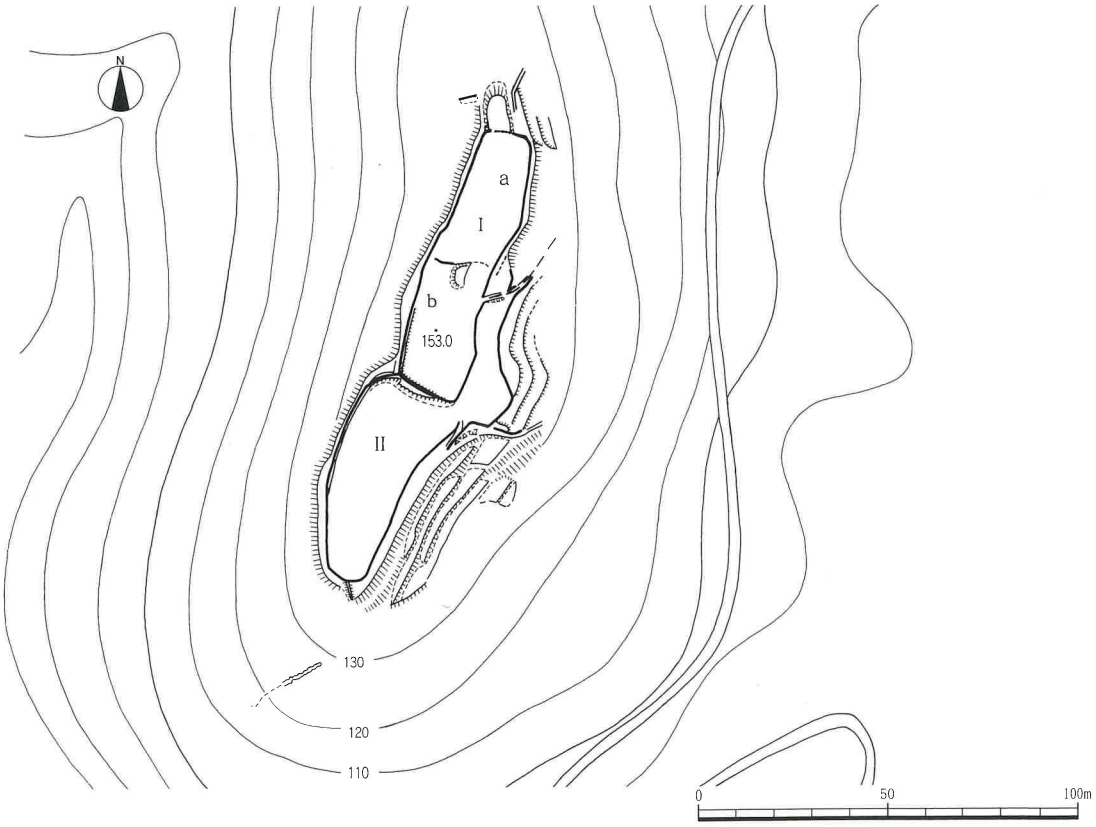
《現状》現況は荒地として放置されているが、以前は蜜柑園として利用されていた。城跡と判断される丘陵上の遺構群は比較的良好に遺存する。

《構造》南北に長い丘陵の先端部を利用し、高さ約2m前後の石積みで曲輪（曲輪Ⅰ・Ⅱ）の周囲を囲い、東面の斜面を階段状の帯曲輪で固める特異な構造である。曲輪Ⅰは、南北約70m、東西約20mの略長方形をなし、中央の石積みで段差を設け、北（曲輪Ⅰa）と南（曲輪Ⅰb）を区画する。その結果、曲輪Ⅰaが一段高い空間となっている。石積みの周囲には犬走り状の細長い平坦部が廻る。曲輪Ⅰbの北西コーナー付近には石積み塁線に沿って土塁が盛られ、さらに、北側には出曲輪状の小規模な平場を設け、平場東側の通路的空間をポイント的に防禦するとともに、平場西側には斜面に直行する土塁を盛り、西斜面への廻り込みを遮断している。曲輪Ⅱは、曲輪Ⅰより一段低く、比高差は約2mである。曲輪Ⅰの東から南側にかけて、曲輪Ⅰと同様の石積みと犬走り状の平坦部を廻す。石積み塁線上の土塁は北西コーナーを中心に確認される。南端部の犬走りには土塁を盛り、横への廻り込みを遮断する工夫がなされている。特に、曲輪Ⅰの東側は、横矢を掛けるため、塁線を大きく張り出させ、前面の階段状帯曲輪群との連動により、強固に防禦する構えをとる。虎口と想定される施設は、曲輪Ⅰbの東塁線部と曲輪Ⅱの張り出し部に確認され、いずれも犬走り状の平坦部から登って入る単純な構造である。

石積みは、佐賀関町烏帽子岳城の石積み同じ技法の積み方であり、横長の大小の結晶片岩を垂直に小口積みするもので、特に隅角を丸くおさめるなど、他地域に見られない技法を用いている。

《歴史》今回の調査で、新たに発見された城跡のため、伝承や記録はないが、鶴見町の宇土山砦と酷似する縄張りであることから、海部水軍に特有な石積みの城とすることもできる。しかし、山口県長門地方にも類似の石垣をもつ城の存在が指摘（宮武正登氏の教示）されており、広域圏での検討も必要である。本砦は一尺屋を本拠とする若林水軍に関連することは確実と考えられ、集落に近接する丸尾山砦（館城か）とセットをなす山城と考えられる。（玉永光洋）

※この城郭は、第3集の一覧表で「丸尾山砦」としたものであるが、「丸尾山砦」は地元では別地点にかつて存在したといわれていたことがわかり、今回調査した城郭は「一尺屋摺木砦」として報告する。



第98図 一尺屋摺木砦縄張り図（1/2,000）

【352　烏帽子岳城　北海部郡佐賀関町大字関・白木・志生木】

《立地》佐賀関町東部の志生木、関、白木地区のほぼ中央、標高267mの城山山頂にある。山頂からは、佐賀関半島を取り巻く速吸瀬戸の三方を臨み、遠くは四国を望むことができる。山頂は、最高所から北西方の尾根aと南西方の尾根bがのび、全長約230mの細長い尾根上に遺構群が確認できる。

《現状》眺望がきくことから町民の憩いの場として整備されており、ツツジ等の植栽が行われている。最高所には、第二次大戦の大砲の台座が残り、また登山道の取り付け等により、最高所及び周辺は部分的に改変や削平を受けている。

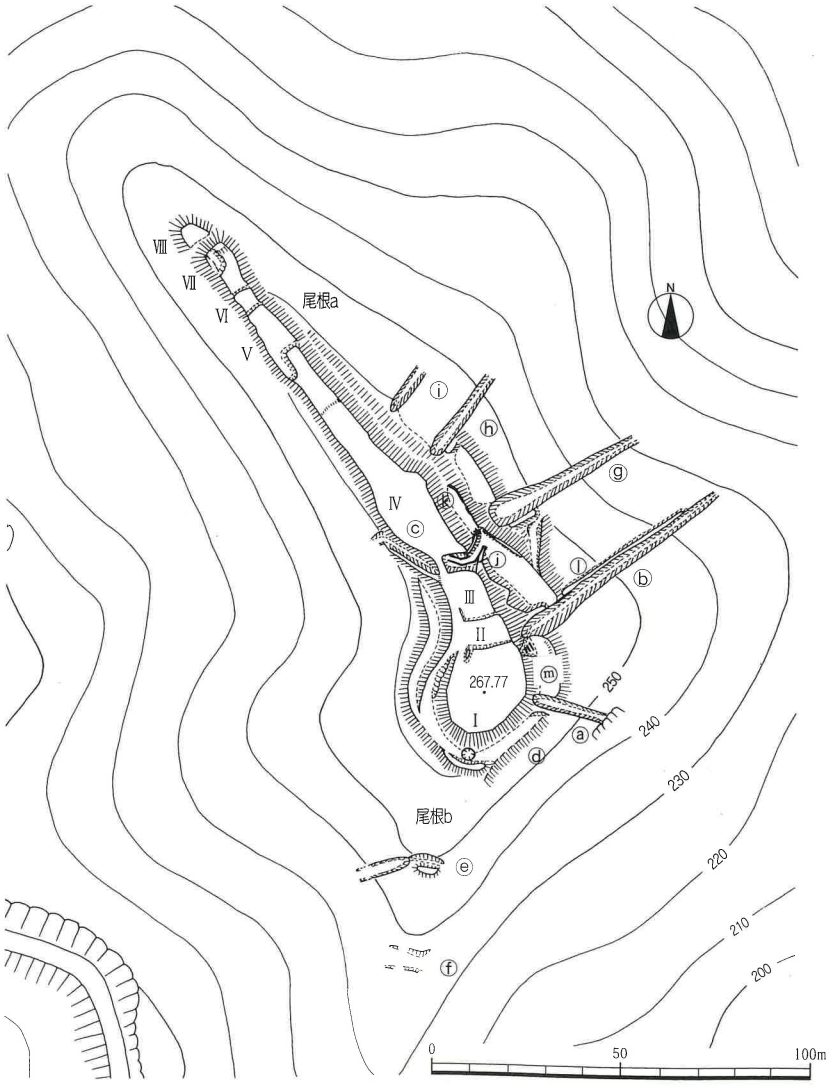
《構造》最高所の曲輪Ⅰが主郭と考えられ、階段状に曲輪Ⅱ・Ⅲが取り付く。この主郭を含めた曲輪群の周囲は、比高差の大きい切岸と下段の腰曲輪機能をもつと考えられる曲輪群で固める。さらに、東斜面には切岸下の曲輪と連動して防禦機能を高める2条の竪堀ⓐ・ⓑを掘削している。この竪堀と曲輪には土塁を部分的に盛っており、特に竪堀ⓑは最大規模である。曲輪群はこうした周囲の防禦装置の他に、曲輪Ⅲ北側の尾根を堀切（堀切ⓒは、現状では土橋があり通路が確保されているが、本来は堀切であったと理解した）って遮断し、主郭南方の尾根bについても3ヶ所を堀切（堀切ⓓ・ⓔ・ⓕ）り、主郭周辺を強固に防禦している。堀切ⓒから北西方の尾根aは、階段状に曲輪Ⅳ～Ⅷが配置され、周囲を切岸で固め、北東斜面には切岸下の曲輪と連動する3条の竪堀ⓖ・ⓗ・ⓘを設けている。竪堀は、主郭から北西方にのびる尾根の東側に5本集中しており、東側を意識した構えをとっている。

また、本城には4ヶ所に石積みⓙ・ⓚ・ⓛ・ⓜが確認される。海部地域に特有な扁平で横長の結晶片岩を使用し、垂直に小口積みするものである。ⓚの曲輪塁腺上の石積みか最も高く、110cm程ある。また、ⓙ部分は高さ80cm程積上げ、通路状の構造をもち虎口的であるが、この部分は大きくは堀切に当たり、堀切底を使って構築していることから、当初からとするには疑問が残る。ⓛは竪堀ⓑに伴う土塁基底部をおさえるものとも考えられるが、横の切岸下曲輪に接するところは土塁がなく開口しており、この開口部に関わるとも理解される。ⓜは階段状に積まれており主郭下の曲輪へ通じる施設とも理解される。すなわち、石積みⓚは、類似の曲輪に見られる塁線上の土塁と同じ防禦用の機能をもち、ⓙ・ⓛ・ⓜは通路や虎口に関わる石積みと理解される。とすれば、竪堀ⓑから石積みⓛをぬけ切岸下曲輪へ入り、石積みⓙへ通じるルートが想定されるが、本来の虎口は特定できない。

《歴史》弘治2（1556）年佐伯惟教らは大友義鎮に謀反を企てたが失敗し、一族は四国に逃れるが、永禄12（1569）年義鎮から許され、佐賀関に上陸し、海辺の烏帽子岳と言う新城をこしらえ、船出の押さえ（水軍の軍監）に命じられた（「大友興廃記」）とあり、この時期佐伯惟教により築城されたとする。また、元亀元（1570）年に惟教は、宗麟から旧領である佐伯を還受され、烏帽子岳より、栂牟礼城に移った（文書番号古文書部381。）

また永禄12年の綱文「文書番号古文書部378」にも同様の内容あり）とされるが、これらを証す史料はない。いずれにしても、本城の縄張りや石積みの特徴は、永禄・元亀段階とするには、無理があると考えられ、佐伯氏が栂牟礼城へ移ったあと若林氏か大友氏が手を加えた可能性が高い。

また、「豊後国古城蹟并海陸路程」（文書番号記録部2/2）には、「入口二ツ有」と記されるが、入口すなわち虎口は現地にて明確な比定はできない。なお、天正16（1588）年には、城を構えていた状況（「若林越後入道宛大友吉統袖判条々掟書」若林文書）はみられない。（玉永光洋）



第99図 烏帽子城縄張り図（1/2,000）

3. 県南部の城館

ここでは、豊後南部に位置する「南郡」と呼ばれた地域を中心とする城郭46箇所を取り上げる。この地域には戦国期に「国衆」と呼ばれた大友家臣団の中核を担う実力者の大規模城郭が点在する。それらの城郭に対して、大友氏が直接掌握を行ったのかどうか不明であるが、豊前国境に見られるような大友氏による「城誘」はまったく知られていない。

一方、この地域は日向国境地帯でもある。天正14年に薩摩の島津氏は日向口（現宇目町）と肥後口（現竹田市）から侵攻したのであった。その際の備えとして築いた城郭が点在する。

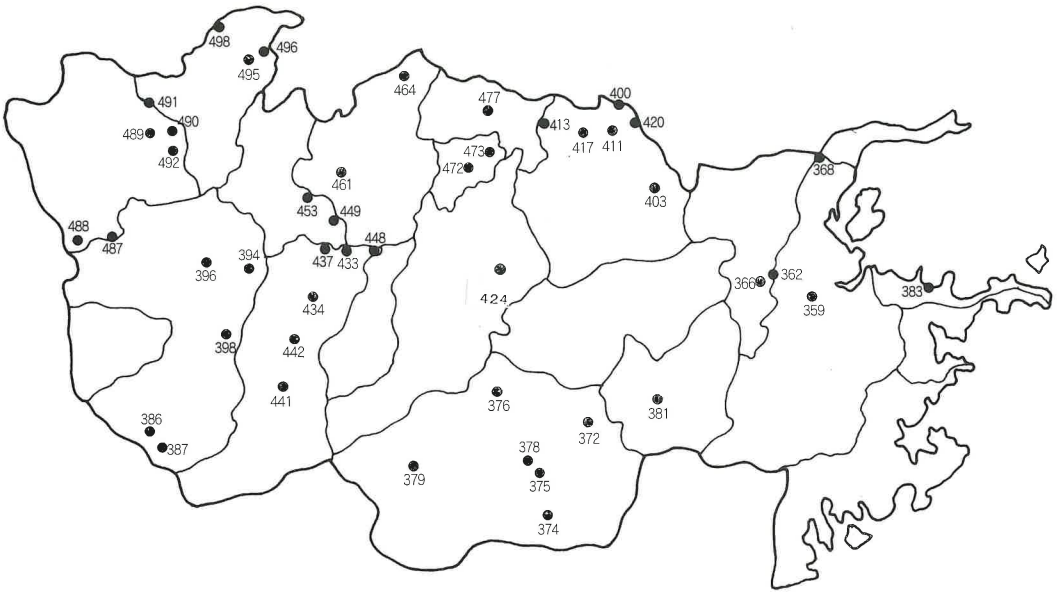
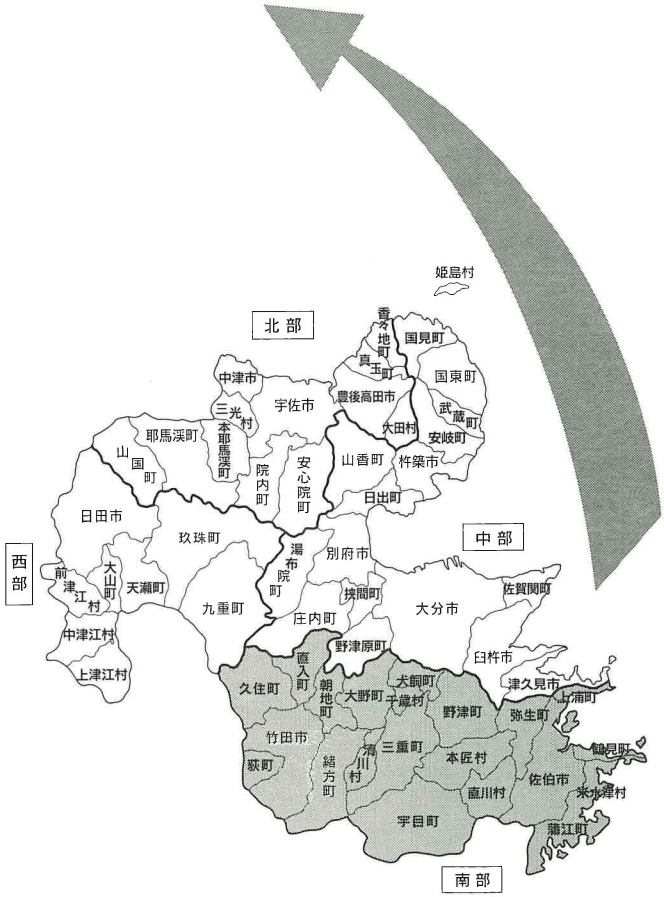


表5　県南部の掲載城館

番号	城館名	頁数	番号	城館名	頁数
359	八幡山城	122	424	松尾城	154~159
362	栂牟礼城	123~126	433	鶴ヶ城	160
366	小田山城	127	434	荒平城	161
368	彦岳城	128	437	高尾城	162
372	朝日岳城	129~130	441	烏岳城	163
374	城ノ越古城	131	442	加納塞	164
375	蔵小野砦	132	448	小牧城	165
376	荒内砦	133	449	小牟礼城	166
378	駒鳴砦	134	453	一万田館	167
379	皿内砦	135	461	高城	168~169
381	用来城	136	464	田附城	170
383	宇土山砦	137	472	上門手遺跡	171
386	高城	138	473	石五道原遺跡	172
387	緩木城	139	477	高旗城	173
394	岡城	140~141	487	相ヶ鶴城	174
396	騎群城	142~143	488	南山城	175~176
398	津賀牟礼城	144~146	489	小路遺跡	177
400	武山城	147	490	上城遺跡	178
403	王子ヶ城	148~149	491	山野城	179~182
411	寺田館	150	492	三船城	181
413	鍋田城	151	495	田北城	184
417	筒井ヶ城	152	496	法螺貝城	185
420	若山の陣	153	498	松牟礼城	186



第100図 県南部城館位置図

【359　八幡山城　佐伯市大字長谷】

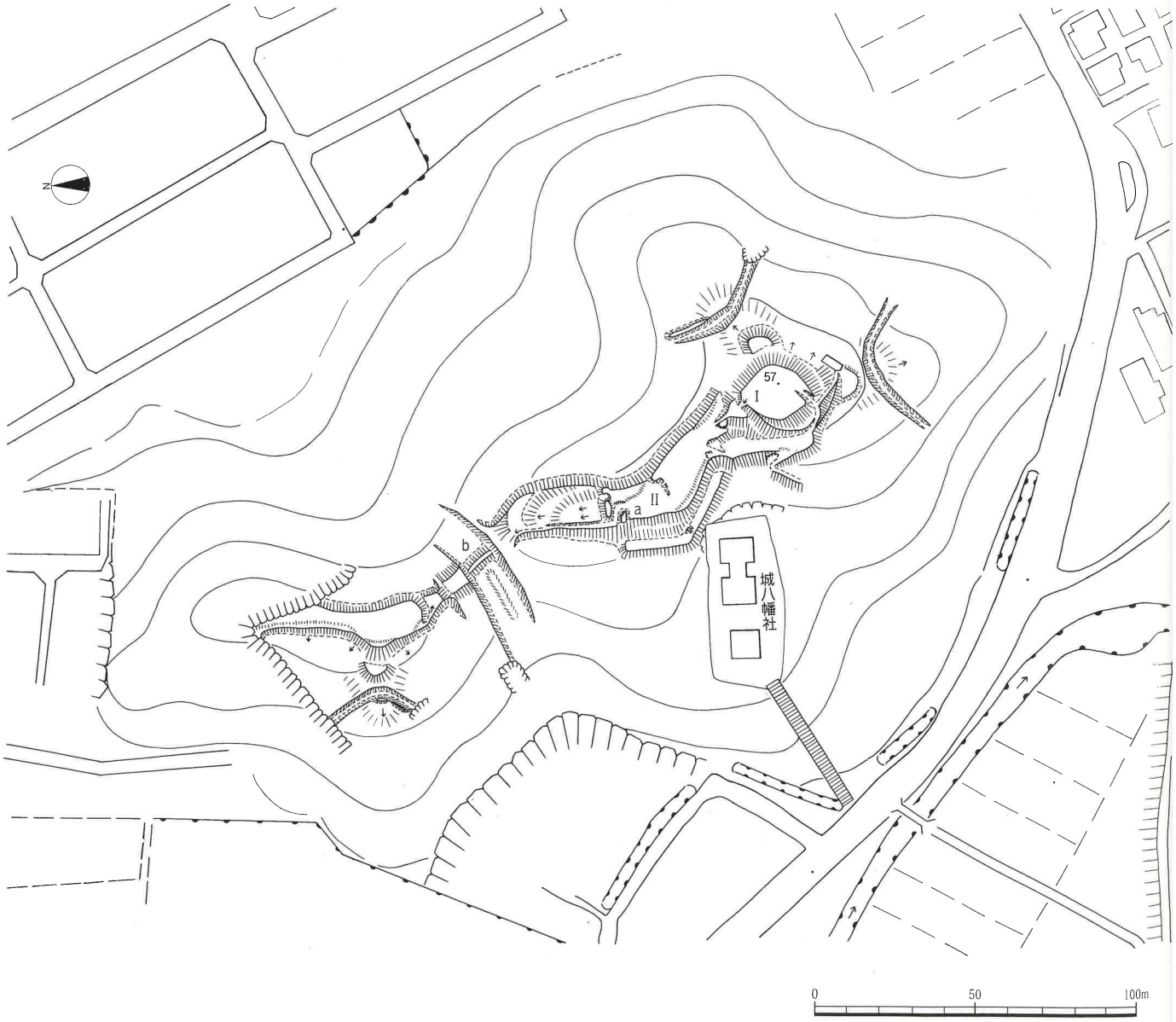
《立地》番匠川と堅田川に挟まれた山塊から南に伸びた丘陵の先端部が、沖積地の中に島状に取り残されたように見える山の上に立地する。最高所の標高は57mで、麓の沖積地は標高3mであるので、比高差は54m程になる。

《現状》山の中腹に「城八幡社」があり、境内地として削られているが、城郭遺構には影響は無い。丘陵北側は団地、学校用地造成に伴い削られており、完全に城郭の北端部が失われている。他は雑木林、植林で残存状況は比較的良好であるが、平坦面（曲輪部分）は最高所（主郭）に石祠があるなど後世人の手がかなり入った状況があり、新しい道も作られているなど、旧状が失われた部分がある。また、主郭南側斜面にはアンテナが立っており、その部分は僅かに破壊されている。

《構造》丘陵先端部の最高所が主郭（Ⅰ）で、尾根の延びる南側と北東側は一段の腰曲輪を設けた上で、堀切（＋竪堀）を入れている。西側は北から延びてきた尾根上の曲輪を回り込ませ、腰曲輪とする。北側の曲輪（Ⅱ）の北端には土塁を喰い違わせた虎口(a)がある。そこを出ると尾根斜面の西側を下り、土橋を有する幅12mほどの堀切(b)に出る。そこまでの尾根西側斜面には「く」字状に折れる帯曲輪が認められる。土橋を有する堀切より以北は、明確な切岸を伴った幅5～10mほどの細長い曲輪が伸びるが、北端は削られており不明である（『日本城郭体系16』によると、この部分には堀切が3本あったとされる）。西側に伸びる尾根は、主郭部と同様の腰曲輪と堀切（＋竪堀）がある。

この城は、全体的に見ると非常にバランスがとれており、一度の縄張りで造られた、すなわち後々の大規模な改修を受けていない城郭と評価できる。

《歴史》まったく同時代の文書、資料では確認できないが、後世の記録によると天正十四年の島津侵攻の折に、佐伯惟定の陣が置かれたという。（小柳和宏）



第101図 八幡山城縄張り図（1/2,000）

【362　栂牟礼城　佐伯市稲垣・上岡／南海部郡弥生町小田・井崎・上小倉】

《立地》　番匠川とその支流によって三方を囲まれた栂牟礼山の山頂付近に遺構が展開する。栂牟礼山は標高223.65mで、八手状にやや急峻な尾根を発達させている。麓の集落との比高差は210m近くある。中世段階では、現佐伯市街地（近世佐伯城下町）は沖積化が進んでおらず、この栂牟礼山の東裾部の沖積地が中世佐伯荘の中心的な活動域であったと考えられる。

《現状》山頂部に栂牟礼神社がある他は施設等も無く、ほぼ全体が植林、雑木林であり、全体的に保存状況は良好である。

《構造》山頂部は標高223.65mの北端部が最も高く、南側に下りながら約200mの長さで平坦面が広がる。主郭は最も高い北側の平坦地で、中ほどで段差1mほどの切岸を設ける、幅6～10mで長さ60mほどの長方形を呈する（Ⅰ、Ⅱ郭）。周囲は切岸のみで土塁などは無い。南東端に虎口があり、坂を下りながら二つの虎口受けの曲輪を通って第Ⅲ曲輪に至る。その間、東側斜面には通路を狭め、東側への回り込みを防ぐ竪堀が入れられている。

第Ⅲ、第Ⅳの曲輪はほぼ同一標高で、間を一状の浅い堀切で画している。第Ⅳ曲輪は最も広く、ほぼ中央付近に方形の高まり（0.5mほど）が2ヶ所ある。これについては、喰い違いの虎口であるという評価もある（『図説中世城郭事典』第3巻）が、現状ではかなり形状が崩れており、判断は保留しておきたい。

これらⅠからⅣの曲輪群への接近を防ぐために、これに通じる尾根を堀切等で幾重にも遮断するのがこの城郭の特徴である。aからeとしてそれぞれ見ていこう。aは366の小田山城に通じる尾根で、最も西側、すなわち外側の堀切を最大（幅12m）とし、他に3本の堀切と3本の竪堀で尾根を処理している。特に、急崖をなす北側斜面は良いとして、やや緩斜面の南側には尾根上の平坦面を半分ほど削り込んだ特異な竪堀を入れている。この片側のみ尾根上を掘り切る竪堀を海老沢氏はβ型堀切と呼び、佐伯氏独自の技法ではないかとしているが、今回の全県的な調査によってもこのような堀切、あるいは竪堀は確認されていないことから、栂牟礼城独自の技法である事は確かである。（海老沢衷「栂牟礼城の堀切り・竪堀群とその歴史的性格」下記文献収載）。これは、この尾根上が通路として利用されていたことを示しているのであるが、これらの堀切を入れる尾根部と第Ⅳ曲輪との間には約20m近い段差があり、その間階段状に曲輪群が配されている。

bは上岡から登るルートにあたり、a同様第Ⅳ曲輪から20m近い段差の後、堀切と竪堀で尾根筋を処理している。同時に、尾根平坦面を曲輪としても利用しており、間で一段の段差を有する二つの曲輪（第Ⅴ、Ⅵ曲輪）がある。これらの曲輪の東側斜面に竪堀を入れ、さらに東に小さく伸びる尾根は堀切で遮断する。第Ⅳ曲輪の南側尾根上は単純な堀切とともに、両側への回りこみを防ぐ切岸と竪堀の組み合わせや、先端部には小さな堀切を入れている。

cは主郭直下のため、大きく斜面上側を削りこむ堀切（＋竪堀）を二本と、単純な堀切を二本入れている。dは直下に小さな堀切を一ヶ所と、やや離れた地点に三ヶ所、さらに離れた所に土橋を持つ堀切を入れる。

eは登ってくる尾根ではないが、斜面に切岸を入れ、結果的に数段の曲輪を作り出している。

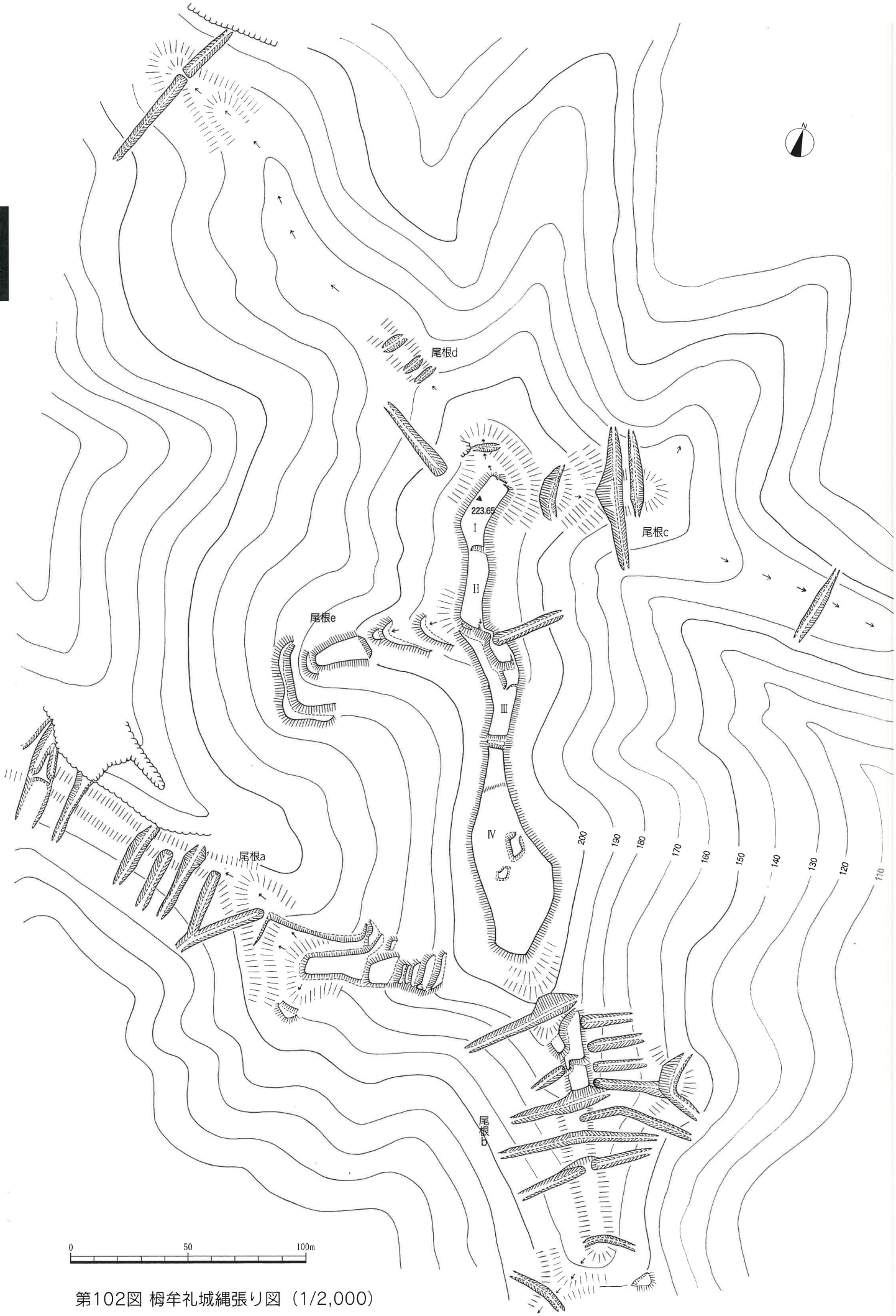
基本的には切岸のみで守る主郭とそれに連なる曲輪群に対して、尾根を掘り切ることによって周辺部を固めるという思想の城郭であり、城域は必然的に広大となる。尾根続きの小田山城（366）とは好対照をなす。このようなあり方は津賀牟礼城（398）や王子ヶ城（403）とも相通じるところであり、築城時期の近い事を示すものであろう。しかし、主郭部の虎口のあり方はやや特異であり、この部分の整備は時期的に下るものであろう。

なお、第Ⅲ曲輪の西側斜面には階段状の小曲輪があるとされているが（『日本城郭体系16』新人物往来社1980、および下記文献）、城郭遺構とは判断できなかったので今回は図化していない。

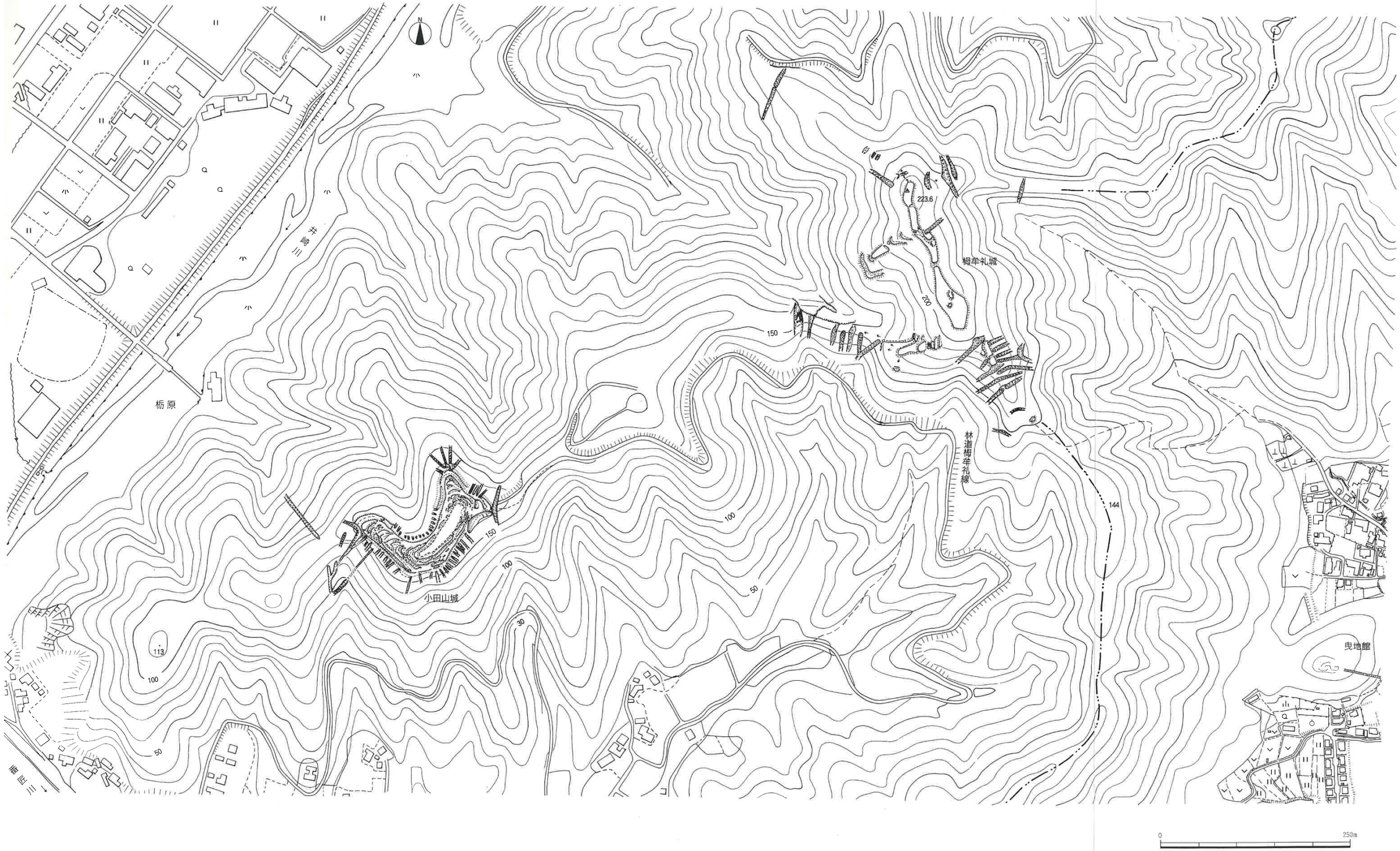
第Ⅱ、Ⅳ曲輪が部分的に発掘調査されており、遺構は確認されていないが、15世紀後半から16世紀前半のものと、16世紀後半に収まる遺物が出土している。これが、下記に記した大永年間と天正年間の2度の大きな戦いに対応するものと考えられている（下記文献）。

《歴史》後世の編纂物にもしばしば取り上げられる城郭であるが、同時代文書で確認できる初出は、大友義鑑が佐伯惟治を攻めた大永7（1527）年の時で、同城攻口において傷を負った久保中務丞に対する感状である。これにより、この時栂牟礼城において戦が行われたことがわかる。その後、天文22（1553）年の在城（文書番号321）、天正13（1585）年の城番（文書番号735）が確認できる。さらに、天正15年になると、島津氏の豊後侵攻に関係して佐伯惟定の城として「其城」（文書番号786）、あるいは「同城」（文書番号814）と記載があり、栂牟礼城のことかと思われるが、隣接する「小田山城」も形態から同時期と考えられ、考慮の必要があろう。（小柳和宏）

参考文献『栂牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書』佐伯市教育委員会　1994



第102図 栂牟礼城縄張り図（1/2,000）



第103図 梅牟礼城と小田山城配置図（1/5,000）

【366　小田山城　南海部郡弥生町大字小田】

《立地》栂牟礼城と峰続きの山岳のピークに位置する。主郭からは東側を除く三方を見渡す事ができる。

《現状》町が史跡公園として整備する一環として堀に橋を架け、主郭の半分ほどを発掘調査後に削平した。他は植林や雑木林であり、良好に残されている。

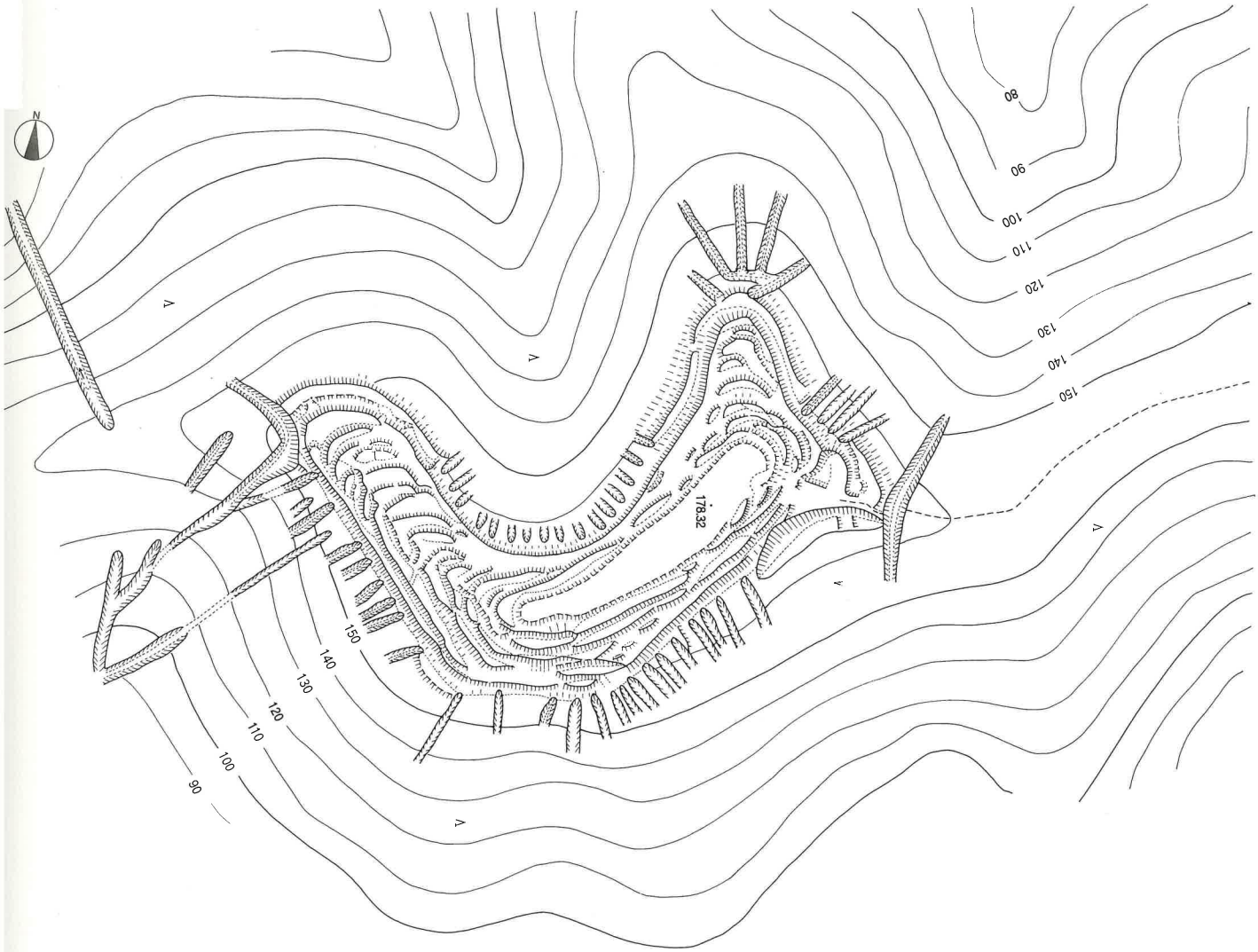
《構造》「く」字形に折れる山頂部を十分に削平することなく、小さな平場を重ねる事によって曲輪化を図ろうとしている。特に中心となる広い曲輪についても明確な切岸は認められない。そして、主郭部平坦面から伸びる三箇所の尾根についてはいずれも狭い階段状の曲輪で削りながら、その先端を堀切で遮断し両側を竪堀とする。しかし、尾根の斜面も階段状に削った両側はスロープをそのまま残すなど徹底されていない感を受ける。尾根に挟まれた他の斜面は帯曲輪最下段に取り付くように畝状竪堀を入れ、結果的に竪堀がほぼ全周している。その数は44本である。

小田山城は曲輪そのものを技巧的にしたり、遠くの尾根を掘り切ることによって防備するというより、曲輪周辺部を畝状竪堀で防塁ラインを築く方向性を持つ城郭である。隣接する栂牟礼城とは対照的な、まさに新しい発想による臨戦的な城郭とすることができよう。

主郭部の一部が発掘調査されており、16世紀末葉に比定できる遺物が僅かに出土している。

《歴史》『元禄十年上野村絵図』(佐伯市立図書館蔵)に小田山城を「新城」と記しているように、尾根続きの栂牟礼城(同じく「つがむれ」とされる)とは対照的な城郭である。天正14年の島津氏豊後侵攻時に備えた城郭と考えられるが、同時代の文書や記録には記載がない。(小柳和宏)

参考文献　『小田山城跡と関連遺跡』第1次～3次調査報告書　弥生町教育委員会　1994－1996



(上記参考文献より転載)

第104図 小田山城縄張り図 (1/2,000)

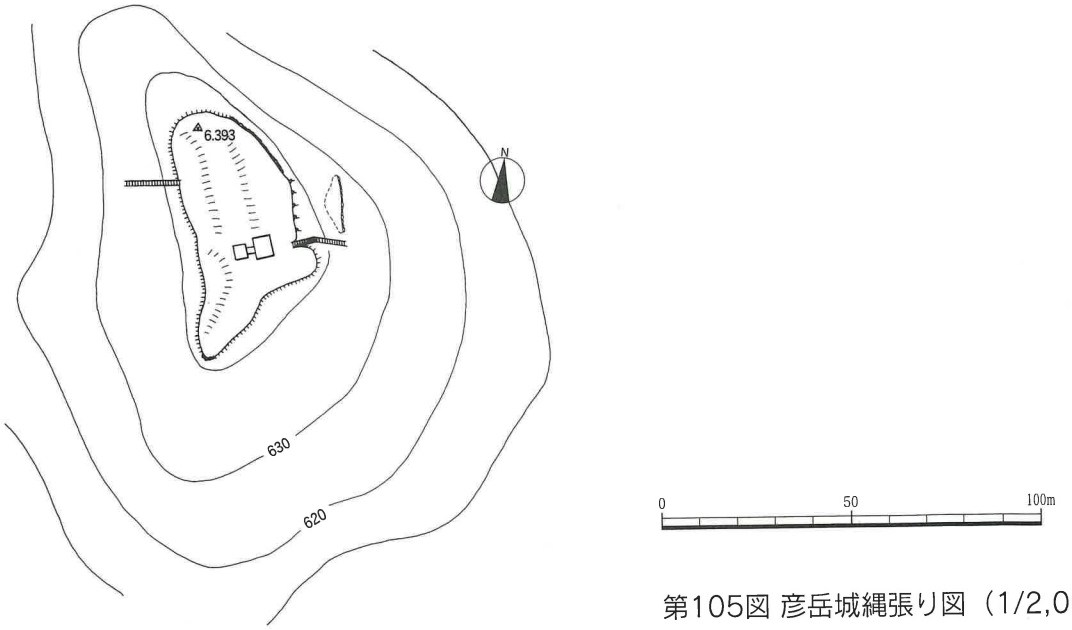
【368　彦岳城　弥生町、佐伯市、上浦町、津久見市】

《立地》佐伯湾を一望する彦岳（標高639.1m）の山頂部に立地する。海上を監視する目的で構築された、栂牟礼城の支城と推測されるが、西方尾根の峠（標高400m）部は津久見市と弥生町の境界で、ここには堀切道を土塁で囲むところから、彦岳と1200m離れるものの、これを守備する役割も考えられる。

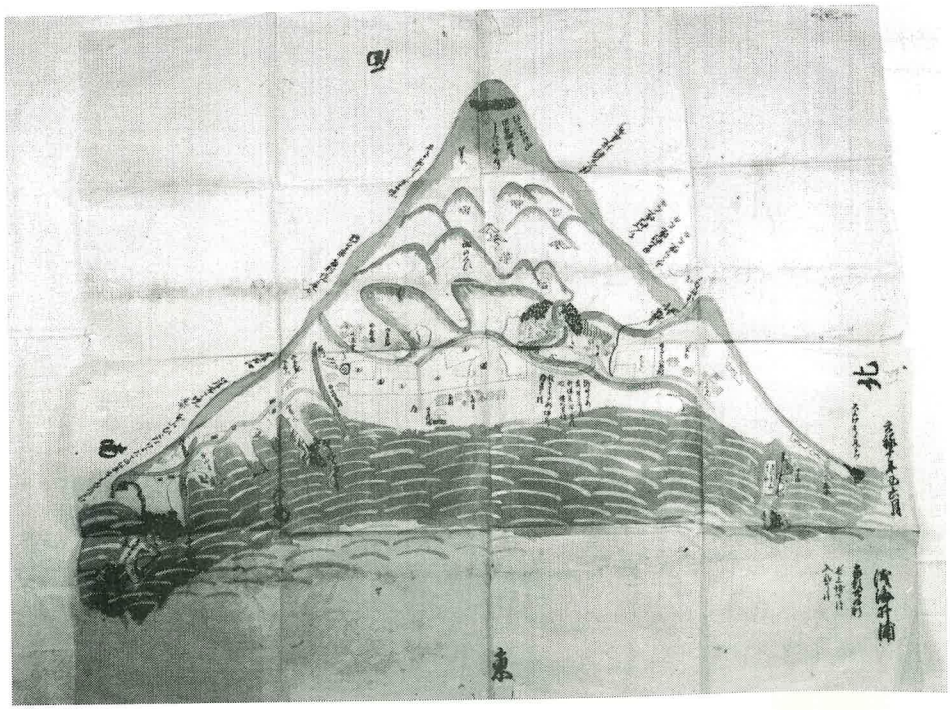
《現状》現在山頂部には彦嶽神社があり、神殿と拝殿、参拝道などで一部旧状が失われている。なお、山頂東北部と東部参道横に一部石積みがみられる。

《構造》山頂部は東西25m、南北65mの平場となり、東北面と東面一段下に土留石垣の小曲輪があるが、南北端は岩石、他は切岸で囲む。

《歴史》「元禄10年６月・浅海井浦絵図（旧佐伯藩主毛利家伝来・佐伯市立図書館蔵）」には『ひこたけ山但古城石つきうしろに井あり』と記して石垣が山頂部に描かれている。中腹部には『城のくひ』と記入がある他は史料がない。ただ、栂牟礼城からは海が望めない事、両山は見通しのよいことなどから連絡可能である。大永７（1527）年、大友義鑑が栂牟礼城主佐伯惟治を攻めた時に大友配下の臼杵長景軍は津久見の坂を越したと「栂牟礼実録」にあるが、この時彦岳城での戦いは記されていないので、その後に構築されたとも考えられる。（小野英治）



第105図 彦岳城縄張り図（1/2,000）



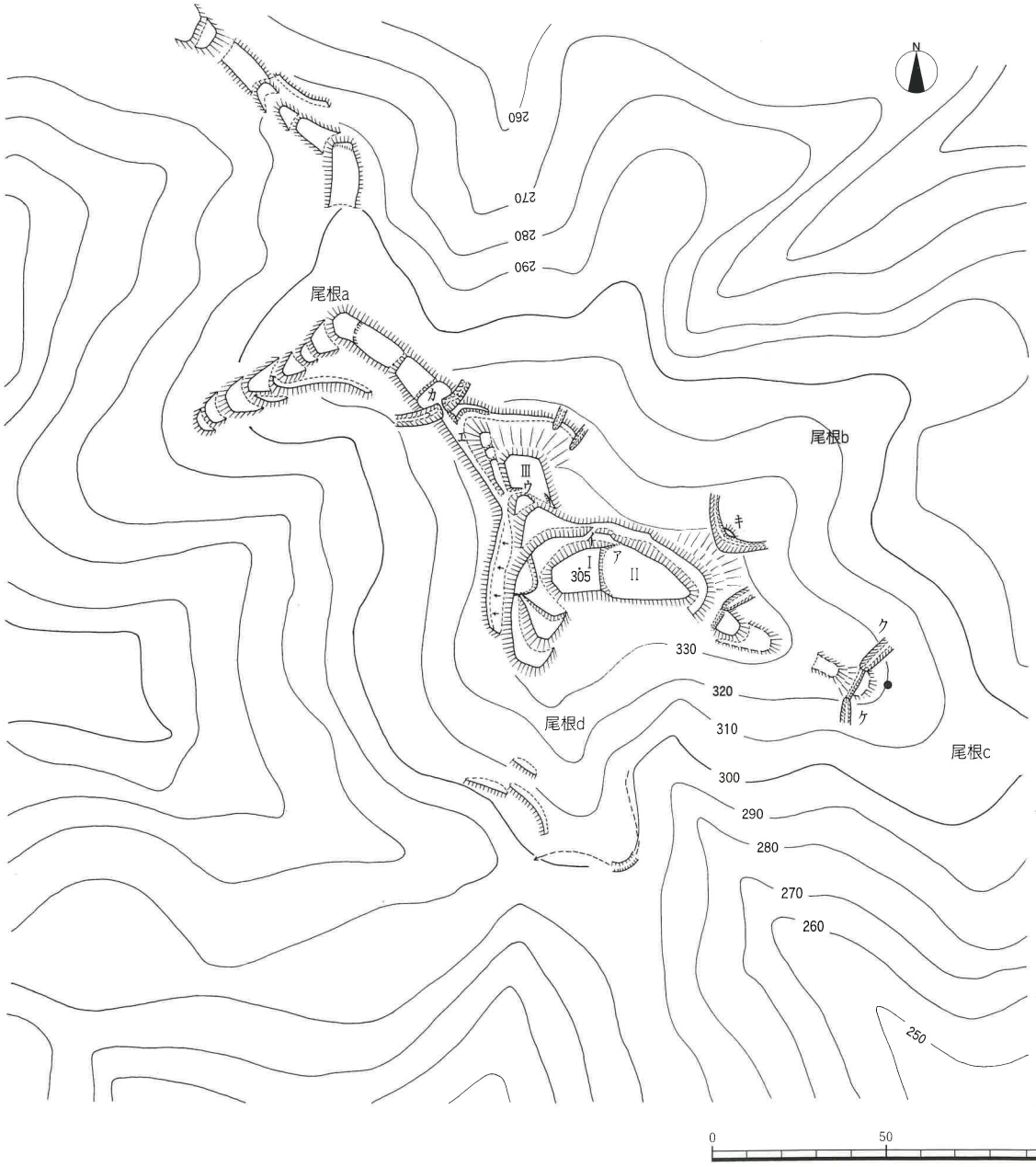
浅海井浦絵図

【372　朝日岳城　南海部郡宇目町大字塩見園字城下、高谷口、仲畑】

《立地》本城の立地する宇目町は、県の最南端、南海部郡の南西隅に位置し、南は宮崎県日之影町、北川町に接する。傾山系の峰々から発する北川支流は、多くの渓谷を形成し、起伏のとんだ複雑な地勢を形づくっている。この地は、豊後国と日向国の境にあり、古代より両国を結ぶ交通の要衝地となっており、戦国時代には大友軍の日向侵攻の本陣が置かれ、また、島津軍の豊後侵入口の一つでもあった。本城は、宇目町東部の標高305mの朝日岳山頂にある。

《現状》朝日岳山頂は山頂から北東、南東、南へ細尾根が延び、全体的には北東―南東に細長い山容である。南北の尾根には横断する林道があり、古くから峠道として利用されていた。遺構群は山頂及びそれに連なる尾根上にあり、遺存状況は良好である。

《構造》全長約300mの大規模な山城である。東西に長い不定形な最高所の曲輪が主郭と考えられ、西側の最高所の曲輪Ⅰと一段低い東側の曲輪Ⅱで構成される。切岸を廻し、西・北・東の三方を段差のある腰曲輪や小規模な曲輪で固め、曲輪Ⅱと一段下の帯曲輪に虎口(ア・イ)が想定され、北面を意識した構えとなるが、土塁の痕跡はない。主郭部北面にも比較的大きな曲輪Ⅲがあり、西斜面の小規模な曲輪群と帯曲輪を大きく廻し、東斜面の終点を2条の竪堀で斜面部を遮断する。この西面の帯曲輪エには、上段部に横矢の掛かる小規模な曲輪を配置しており、主郭へのルートを厳しく防備する工夫がなされている。この帯曲輪は北の尾根aからの通路的な機能も想定され、曲輪Ⅲの虎口ⓒがこのルートに接することからもその蓋然性は高い。最高所の曲輪群に通じるルート、すなわち、尾根a・尾根b・尾根cは、いわゆる堀切ⓕ・ⓖ(ⓕについては現状が土橋となっているが、後世に埋められ山道として利用されたと判断した。)、堀切(切岸と堀底をミックスした構造で尾根を遮断するが、いわゆる堀切とはイメージが異なる。)と連接させる竪堀ⓒ～ⓘによって遮断し、中心部分を強固に固める。ただ、南の尾根



第106図 朝日岳城縄張り図（1/2,000）

d（堀切状の遺構があるが、尾根に対して掘削方向が逆であることなどから、尾根を横断する山道の切通しと判断した。）には、小規模な削平段が確認されるのみで、東･北方面に比べ防御意識は稀薄である。

中心部への進入を遮断する堀切外側の遺構は、北の尾根aに確認される。堀切ｈの外側尾根上には階段状に削平段が連なり、一部に帯状の平場を設け斜面部を固める構造である。

本城は、県南地方の大規模城郭の一つとすることができる。縄張りは、主郭や虎口が明瞭で、主郭を腰曲輪等主郭周辺を防御する曲輪群で構成される中心部を堀切、竪堀で固め、さらにその外側の尾根を階段状の削平段によって守備する構造と言え、基本的には岸切った小規模な平場と堀切、竪堀で構成される。

《歴史》国境宇目は、天正6（1587）年、大友氏が日向侵攻の時、宇目酒利を本陣とし、天正14（1586）年の島津氏豊後侵攻の際にも、進軍・撤退時とも宇目を経由するなど軍事戦略上きわめて重要なところであった。このことは，天正12（1584）年、大友府蘭（宗麟）は、島津氏北上の動きに合わせるかのように、岡城の志賀道輝に宇目切寄の検分（文書番号古文書部731）を行わせていることやルイス・フロイスの1585年（天正13年）11月3日付、イエズス会総長宛ての書簡においても「祖父（道輝）を豊後と日向の国境にある宇目と呼ばれる国境の城を配置」（文書番号宣教師記録部29）したとあること、また、島津氏は豊後出陣に先立ち「梅口朝日岳、又豊後内端」へ加持祈祷を施した針を伏せた（文書番号古文書部751）こと等々から裏付けられる。道輝が入城した城が、朝日岳城であったかは諸説（皿内城とする説）あるが、フロイスが「難攻不落の所にある城」とする城は、朝日岳城の可能性もある。「大友興廃記」では、天正13年（10年、14年とする説もある）、星降（河）城の柴田紹安が築いたとあり、所在地は内田村（文書番号記録部2/1）とされる。天正14年10月、島津軍が進入してくると、城主紹安は無抵抗裏に城を開城し、島津家久は紹安の子左京亮を井田・尼顔墨に移し、土持親信を入れた（文書番号古文書部759）。天正15年、島津軍の撤退に際し、栂牟礼城の佐伯惟定は、土持親信の拠る朝日岳城を攻め落とした（文書番号古文書部837）とある。（玉永光洋）

（『大分県史中世編Ⅲ』より転載）

第107図 嶋津軍侵入概略図

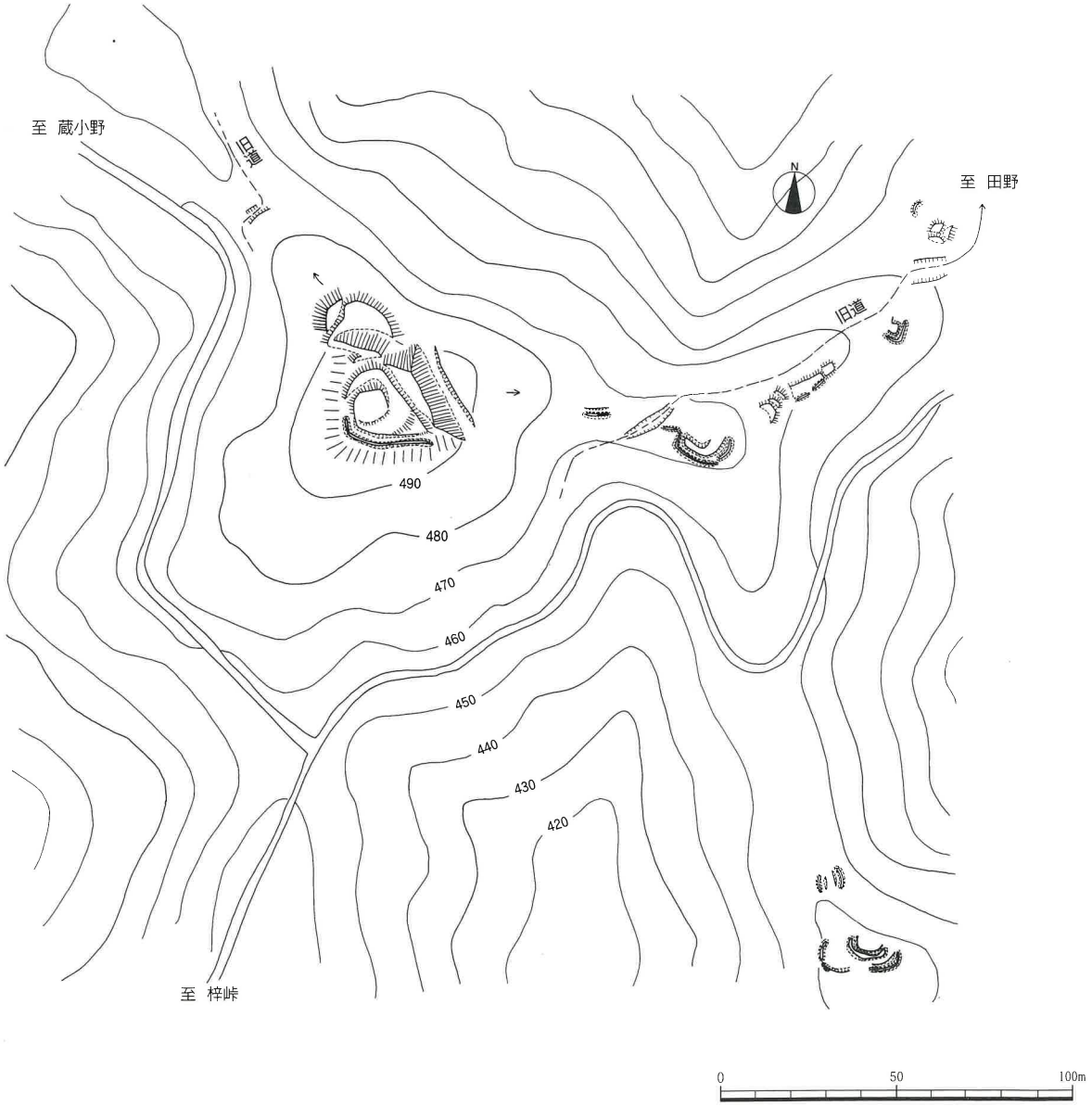
【374　城ノ腰古城　南海部郡宇目町大字重岡】

《立地》豊後、日向国境（大分、宮崎県境）付近の山頂に位置する。中世の段階で、日向から豊後に入る主要なルートは梓峠越えのルートであった。梓峠から黒土峠へ、そしてさらに豊後内部に入ると、宇目の蔵小野と田野に至る道の分岐点に差し掛る。この分岐する道に挟まれた山の頂上に古城がある。標高は494mで、旧道からの比高差は約30mである。周辺の最も近い集落までは直線で7kmほどあり、全く集落との関係は想定できない場所である。

《現状》山間部のため植林以外の開発は無かったが、現在は自動車の通る道が旧道と交差しながら通っており、全く旧景観を残しているわけではない。さらに、1877年(明治10)に起こった西南戦争の舞台の一つとして、西郷軍側と政府軍側の陣地跡が周辺に点在する。主郭も後述のように、この時に一部改変されている可能性がある。

《構造》8m四方ほどの小さな主郭の回りを帯曲輪が4分の3ほど廻り、さらに東側は一段の腰曲輪を設ける。そして、その東側には規模の大きな堀切を入れ、東側の尾根からの接近を防いでいる。また、主郭の南側には幅2mで、外側に低平な土塁を持つ堀が作られている。しかし、形態からこれは西南戦争時の「塹壕」と考えられる。これと規模のほとんど等しい塹壕は、主郭を東に下った尾根の先端部付近や、南東に延びる尾根の小さなピークにも見られる。

《歴史》『宇目梓山覚書』（文書番号・記録部二の一）に「城ノ越しの古城」とある。小規模な城郭であるが、「梓より田野村蔵小野村へ下り申し候三辻」にあるため、日向方面から豊後へ抜ける際の最初の城郭として重要な城郭である。天正14年の島津氏豊後侵攻の折にも機能していた可能性が高い。ここは、さらに明治の西南戦争時も激戦地の一つとなった場所であり塹壕が見られるが、これらの塹壕は掘られた向きを考えると、宮崎から大分に侵攻を企てた西郷軍の一部を迎え撃つ政府軍の手によるものと考えられる。（小柳和宏）



第108図 城ノ腰古城縄張り図（1/2,000）

【375　蔵小野砦　南海部郡宇目町大字重岡】

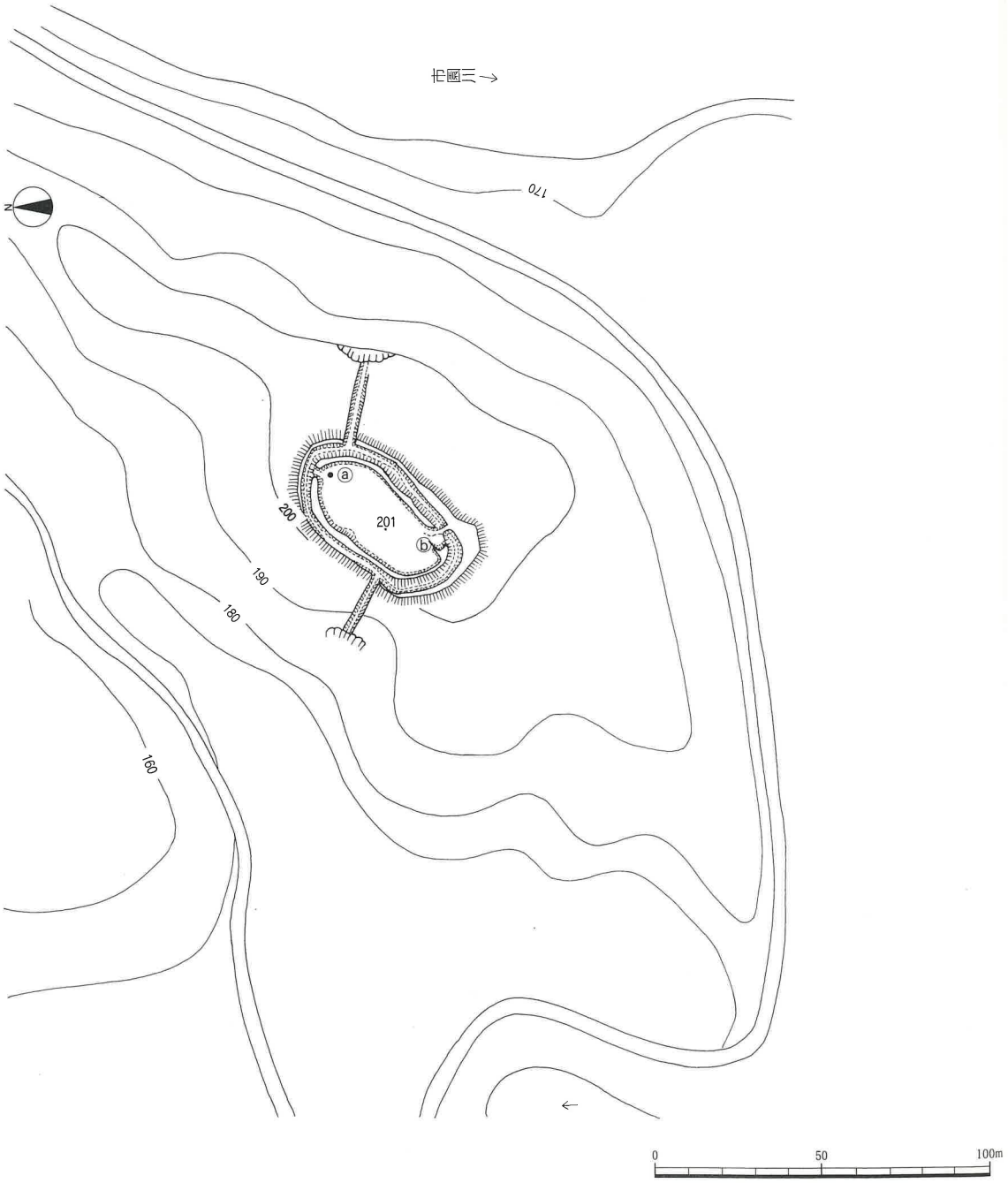
《立地》宇目町東部を西流する市園川流域にあり、蔵小野の集落を望む標高約201mの小高い丘陵に立地する。日向からの道は、県境の梓峠から水ケ谷・城ノ腰を経て、この蔵小野に至り、重岡・酒利経由で小野市へ通じる主要道路上に位置する。北西の駒鳴峠には、駒鳴砦がある。

《現状》現在、町指定となっており、公園として活用されている。

《構造》長径43m、短径20mほどの長楕円形プランの平場の周囲に、横堀とその内・外に土塁を廻し、横堀と連接する２条の竪堀を掘削している。虎口と思われる開口部は北東部と南東部の２ヵ所ⓐ・ⓑある。虎口ⓐは、堀底から曲輪内に通じるもので、おそらく、東と西側のほぼ対角線上に各1条ある竪堀を登り、掘底を通り、曲輪へ入るルートの虎口と考えられる。虎口ⓑは、外側の土塁上から土橋を通る構造となっているが、防禦上不自然な構造と言える。後世、堀を埋め、内側の土塁を壊して通路に改変した可能性もある。

本砦は、豊後への主要ルート上に位置していることから、もう一つの駒鳴峠ルートとともに、交通の要所を防備するために築かれたと考えることもできる。しかし、駒鳴砦の構造とは大きく異なり、蔵小野集落を臨む至近の小高い丘といった立地からも、アジュール的性格の強い砦の可能性が高い。

《歴史》本砦の記録はなく、詳細は不明である。（玉永光洋）



第109図 蔵小野砦縄張り図（1/2,000）

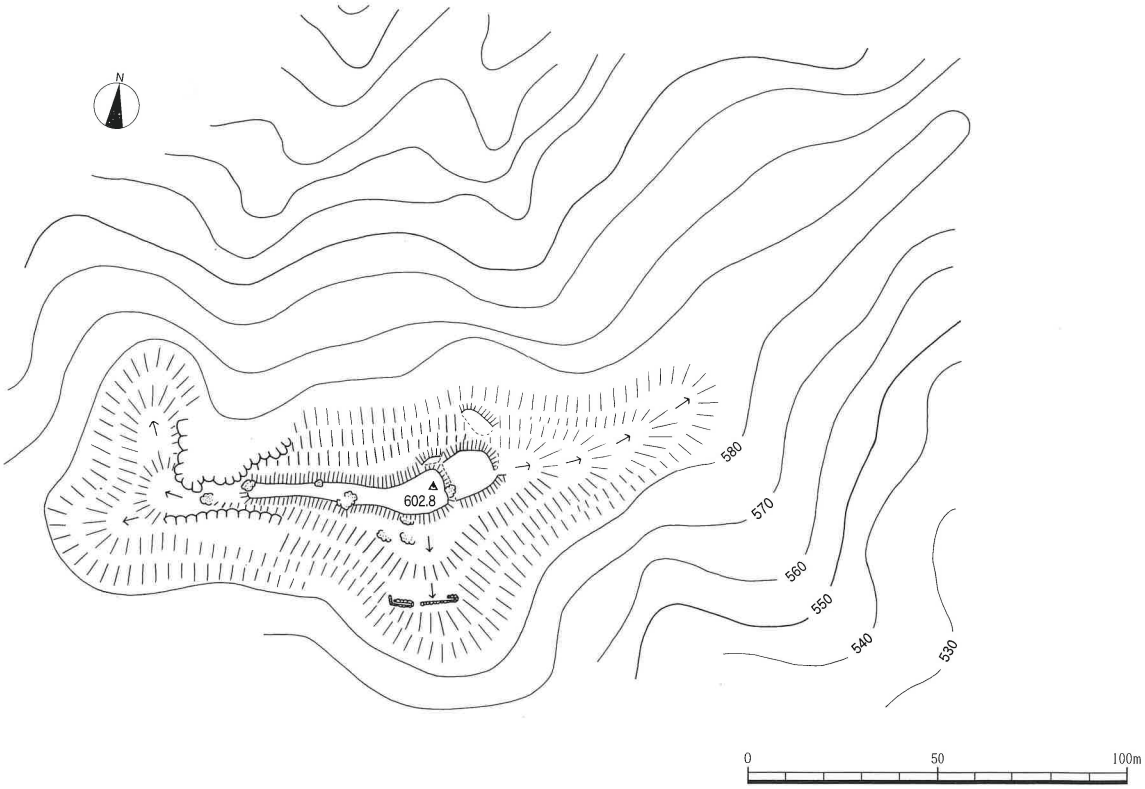
【376　荒内砦　南海部郡宇目町大字小野市】

《立地》豊後と日向の国境近くにあって、三重から宇目市越えの道路上にある城山（標高602.9m）に立地し、眺望は良い。

《現状》山間地であるため開発されないまま旧状を良く残して現在に至っているようである。西方山腹に広域農道ができた事により登山には便利となっている。

《構造》山頂部の主郭は東西50m、南北10mで、西方尾根の岩間を通る狭路を20m下ったところの虎口に石積みの小曲輪がある。また、主郭の東北部には2段の腰曲輪がある。天険に一部切岸で補強する程度の小規模な砦である。

《歴史》『豊後国志』には「荒打塞」と記しており、宇目郷上津小野村にあり、別称勝賀塞、小間弾正が薩摩来襲に備えて築いたが、少勢のため落城とある以外は詳細不明。（小野英治）



第110図 荒内砦縄張り図（1/2,000）

【378　駒鳴砦　南海部郡宇目町大字木浦内】

《立地》日向からの道は、県境の梓峠から水ケ谷・城ノ腰を経て、蔵小野に至り、重岡・酒利経由で小野市へ通じる主路の他、城ノ腰から駒鳴峠越しで中都留を経て小野市への道があり、本砦はその標高約364mの駒鳴峠に築かれている。峠の南東には蔵小野の集落が望まれる。

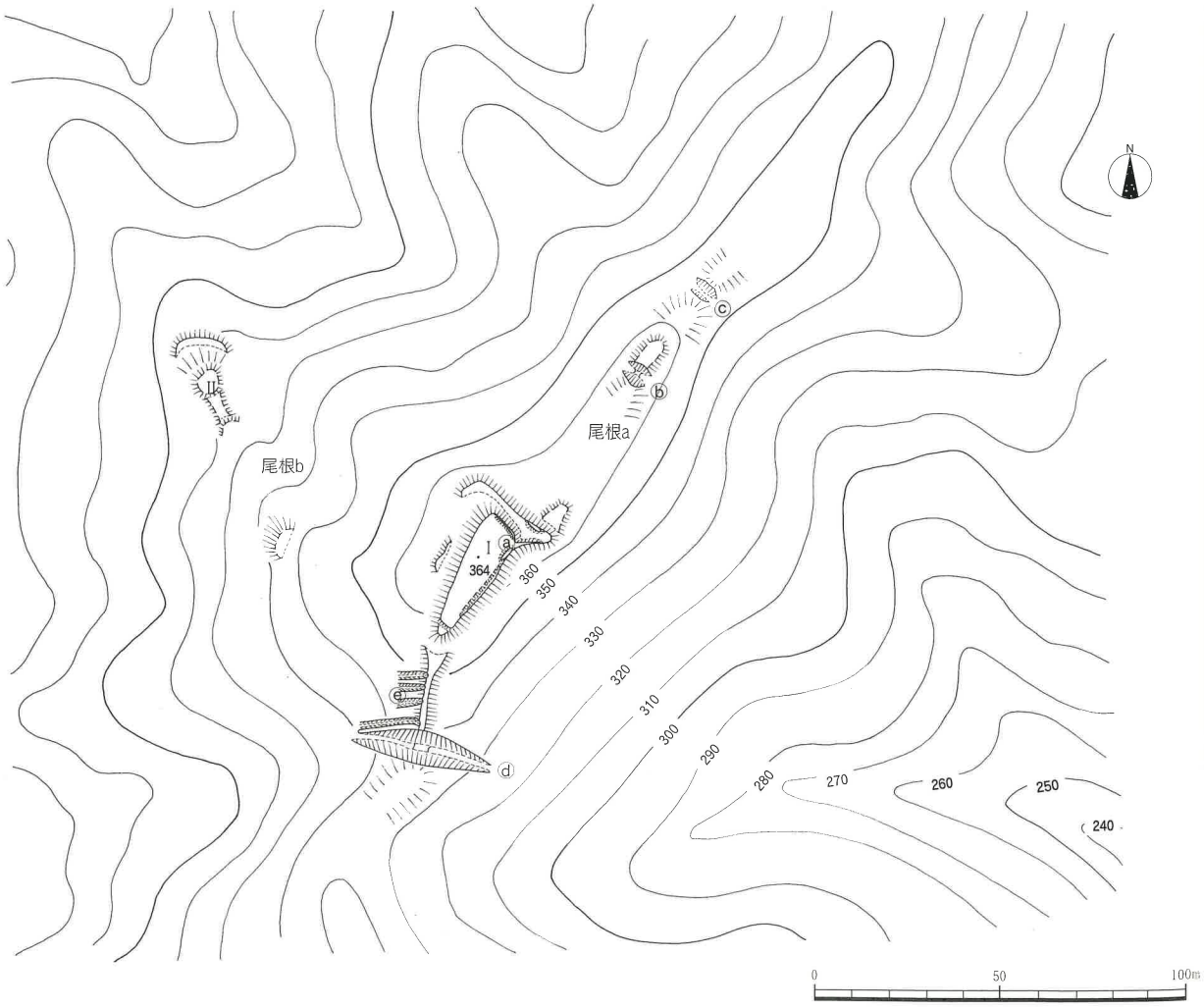
《現状》ほぼ南北につながる尾根の稜線は細く険しい形容を示しており、尾根上の約150mの範囲に確認される遺構群は極めて良好に遺存している。

《構造》峠の最高所の比較的広い尾根部分に、細長い略長方形の平場（曲輪Ⅰ）を造成し、周囲は高い切岸を中心に巡すが、北東隅の虎口ⓐと想定される開口部に連動するところに土塁を盛り、守りを堅固にする。さらに、平場の北、西、南側の切岸下にも帯状の平場や小規模な平場を設け、最高所の曲輪を固める。そして、北方へのびる尾根aは、2ヶ所の堀切ⓑ・ⓒで遮断するとともに、南方の鞍部となるところに大規模な堀切ⓓ（幅約8m、深さ約4m）で南のルートを遮断し、内側の西斜面に4条の畝状空堀群ⓔを掘削し、動きを封じている。また、最高所の南西より北西方向に下ってのびる尾根Bの先端部には、小規模な削平段に固められた一段高い櫓台状の曲輪Ⅱがある。北東ルートを抑えるためであろうか。さらに、最高所から南の堀切に至る東斜面には、これと言った施設は認められない。おそらく急崖となる地形のためその必要がなかったのであろう。

本砦は、単郭の最高所の曲輪を切岸と虎口周りの土塁、切岸下の曲輪で固め、それに通じる尾根を堀切と畝状空堀群で遮断するきわめてシンプルな縄張りであるが、土塁を伴う虎口周りや大規模な堀切と畝状空堀群の組み合わせ等、本地域の大規模城郭である朝日岳城に比べ、技術的により発達した内容と言え、峠のラインを防備するにふさわしい構えと言える。

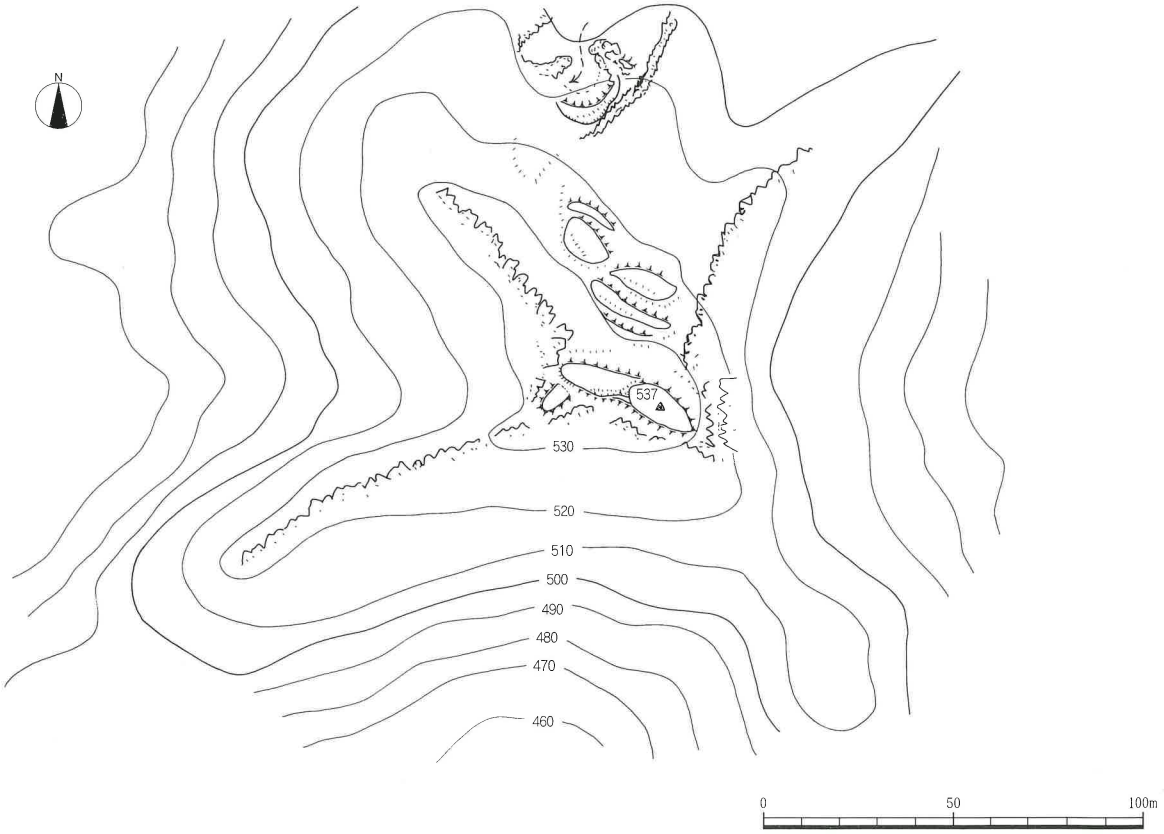
《歴史》駒なき峠には、「きふねと」と云う城山があり、薩摩の打入の3年前には岡城からのはり番が置かれた（文書番号記録部2/1）とあり、天正11年には、志賀氏が城番として入っていた。また、フロイスによると、志賀道輝は「実際難攻不落の所にある城の位置も信頼できず、山の峰を通る狭い道を数箇所、人力で切り崩させた。これで敵が攻めてきた場合、長くとどまって修理しなくては、いかなる場合でも通れなくした。」とある。すなわち、日向と国境を境にする宇目には、山の峰（峠）の数箇所に砦を築き、拠点城郭へのルートを堅く守っていたことがわかる。本砦は、そうした峠に築かれた城の一つと考えられる。

なお、豊後国志では「駒鳴塞」とあり、渡辺大学、小間弾正が拠っていたが、弾正は豊薩戦で戦死したとされる。（玉永光洋）



第111図 駒鳴縄張り図（1/2,000）

【375　皿内砦　南海部郡宇目町大字木浦内】
《立地》豊後と日向の境目の砦で、皿内集落の東方にある城山（標高536m・比高300m）に立地して眺望がよい。
《現状》現在城山周辺部は鉱山の採掘坑が多数みられるが、山頂部は急峻で容易に登れないところから旧状がよく残る。
《構造》岩崖に囲まれた山頂部の主郭は東西20m、南北９mで、西方に一段低く東西18m、南北７mの曲輪を配し、さらに南西下に小曲輪が突出する。東北の斜面部に５箇所の曲輪が散在している。虎口は北方岩山に囲まれた地に見られるが、堀切は確認されない。自然の岩崖を活用し、一部切岸で曲輪を構成している。
《歴史》『豊後国志』には「宇目郷皿内村にあり志賀親守ここにきずく、その子道際年幼なく、天正の戦で城陥」とある。天正12（1584）年12月24日、大友宗麟は義統にあてて島津軍侵入に対する備えとして志賀道輝（親守）を派遣して「切寄」を構える場所を検討し越年するように指示している（文書番号731）。フロイス『日本史』第８巻第61章には、志賀道輝がキリシタン宗団に対して放埒な言葉を吐いていたところから宇目の城で流謫の境遇をかこつ身となったとあり、同62章では道輝は宇目城の監視を担当したと記されている。『宇目町誌』では皿内の熊野神社棟札に「政所志賀親度」の記名と道輝の父安房親益が享禄元（1528）年代の宇目の政所と考えられるところから宇目の城は皿内城であろうと考察し、さらに道輝が切寄を検討して設けた場所として『豊後国志』などから悪所内寨・荒内寨・駒鳴堡・市園堡ではなかろうかとしている。（小野英治）



第112図 皿内砦縄張り図（1/2,000）

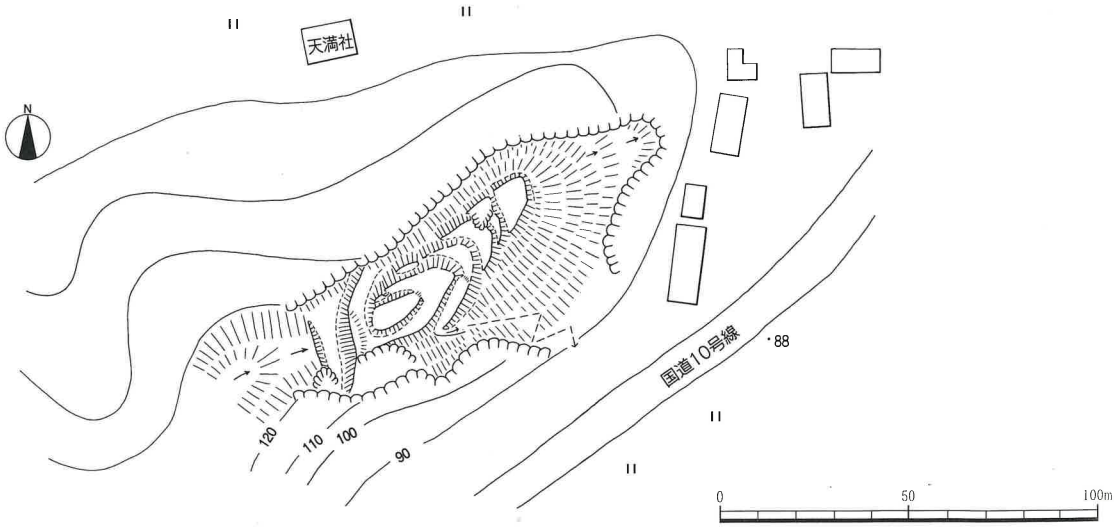
【381　用来城　南海部郡直川村大字仁田原】

《立地》久留須川に沿う狭い谷間を望む、東に下る丘陵の先端部に立地する。麓との比高差は50mである。すぐ横には国道10号線が走っており、宗太郎峠越えで日向に抜けるルート上ということになる。

《現状》植林、および雑木林となっている。

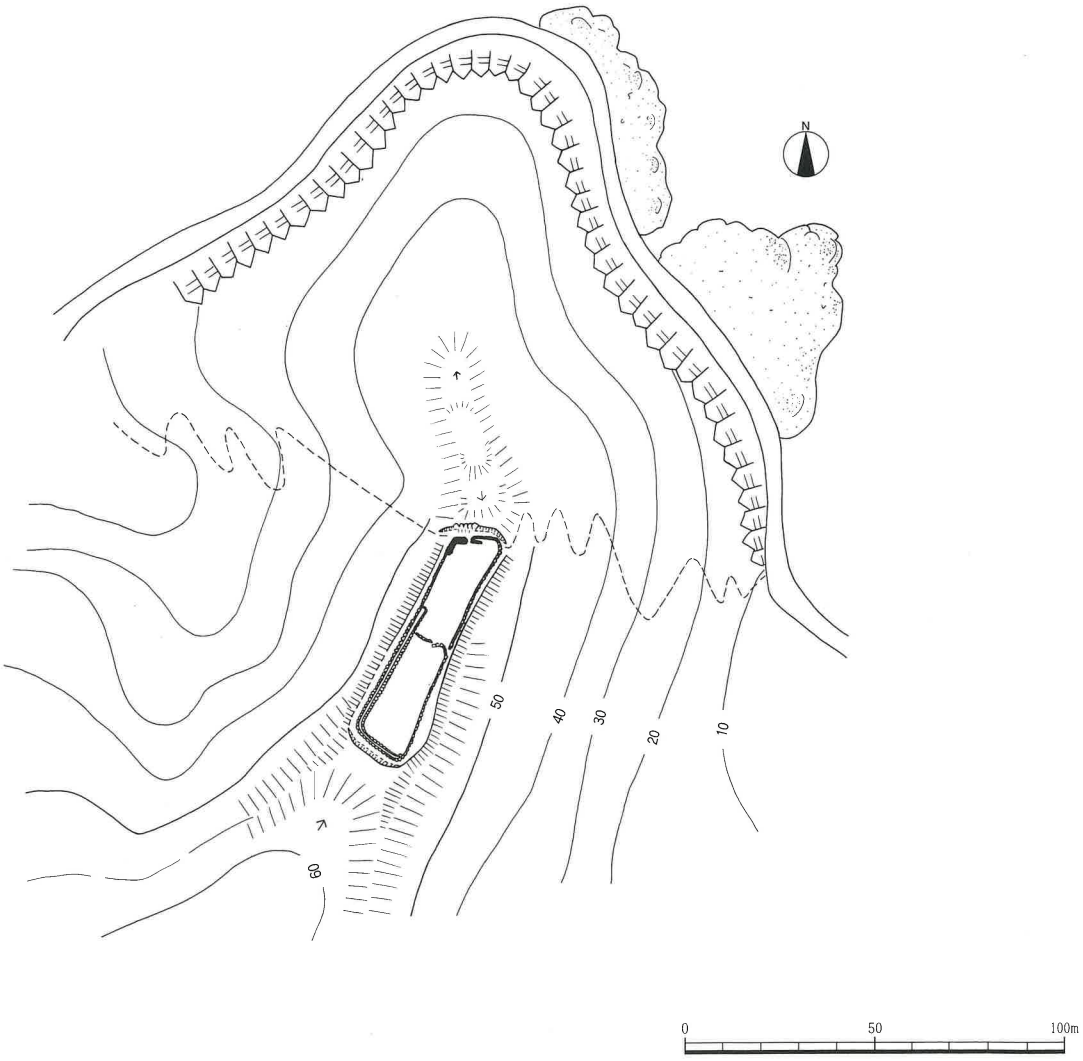
《構造》丘陵先端部を幅10mの堀切で遮断し、先端部を城域とする。堀切の内側には若干土塁を設け、主郭との間が僅かに堀状を呈している。この堀状の平場は、南側では主郭の一段下の曲輪から伸びる帯曲輪と繋がっているが、北側はそのまま崖に向かって落ちている。このあたりは、旧状が失われている可能性が高い。主郭は、6×12mほどの小さな略長方形を呈しており、そこから丘陵先端に向けて5段の階段状の曲輪を配している。曲輪群の周囲はほぼ垂直の崖が取り巻いており自然の要害の観を呈するが、僅かに尾根が下るa地点がこの城の虎口と考えられる。尾根を登ってきた道は、細長い曲輪に取り付き、階段状の曲輪に入ったものと考えられる。

《歴史》栂牟礼城の支城とも言われるが、同時代の史料、記録に記載が無く歴史的背景は不明である。(小柳和宏)



第113図 用来城縄張り図（1/2,000）

【383　宇土山砦　南海部郡鶴見町大字有明浦字宇土山】
《立地》瀬戸内海に大きく開かれた佐伯湾の南岸、小さな二つの半島に挟まれた有明浦と呼ばれる湾の一番奥まったところの小さな岬上の通称「的場」と呼ばれるところに立地する。北側は海に面しており、旧道は岬上を横切るように通過していた。
《現状》雑木林となっているが、アンテナ設置により若干削平を受けている部分があるものの、残存状況は良い。
《構造》岬の最も高い部分からやや南に下って鞍部をなした部分に小さな堀切（ただし、ここは旧道の峠となっている）を入れ、その南側の平坦面に曲輪を築いている。南北60m、東西10mほどの長方形に高さ2mほどの石垣を廻らせ、最も南側は堀切となる。石垣は北側の一辺中央部で途切れ、ここが虎口である。この部分と、西側の南半分から南側の一辺は幅50cmほどの石塁状をなす。また、東側の中央部でも曲輪に登るスロープが認められる。また、曲輪中央部で一段の段差があり、高さ50cmほどに石垣を積む。この石垣は中央部で途切れ、斜めに登るスロープを付している。石垣の隅角部は曲面を持っており、いわゆる算木積みとはなっていない。
《歴史》記録などには無く詳細は不明である。しかし、峠の頂部にそこから引き込むように虎口を設けていることから、古道との関係は窺える。石積みが中世まで遡るものかどうか確証はないが、曲輪の平面形態が佐賀関町一尺屋摺木砦（351）との共通点もあり、評価については今後の詳細な調査に待ちたい。なお、毛利高政が眼病治療と称してこの地に礼拝堂を建てたという伝承がある。（槙島隆二）



第114図 宇土山砦縄張り図（1/2,000）

【386　緩木高城　竹田市大字九重野】

《立地》大野川・緒方川の支流緩木川の上流に開けた九重野地区は、中世には緩木山に山岳信仰を担う寺坊が並び、高源寺などの地名に痕跡を残す。九重野の背後の山中に高城は位置する。

《現状》自然作用を除いては土木遺構はほぼ良好に残されている。

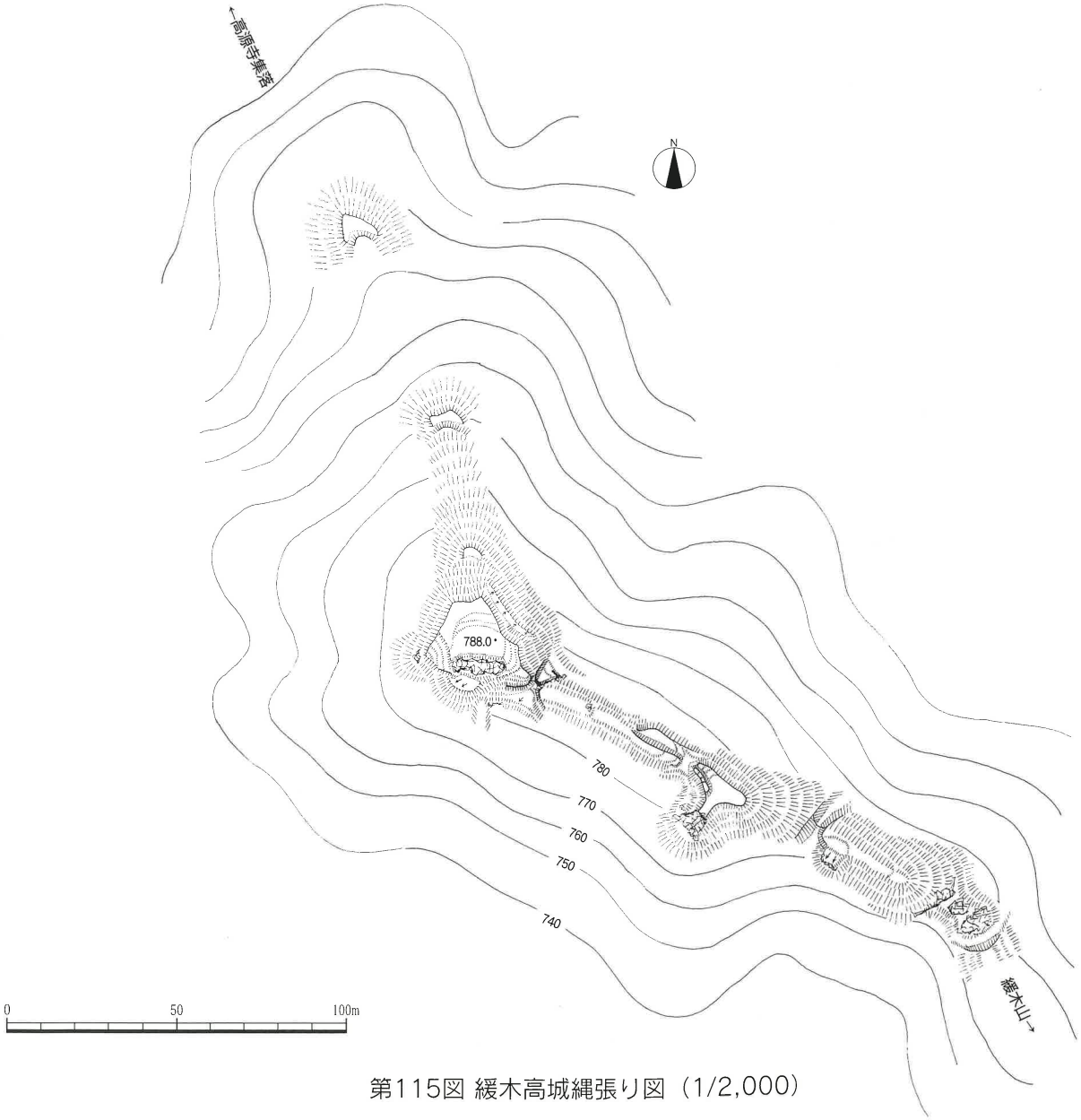
《構造》城域は両側に岩盤が剥き出しとなっている峯上に選地されている。峯の先端部（778m）が主郭になっている。眼下に九重野を見下ろすことができ、下方には帯曲輪が確認される。主郭の背後には堀切が配されている。ここから峯伝いに3本の堀切が配され、背後に続く緩木山からの侵入を警戒する意識がみられる。最も外側の堀切は岩場を穿って造られるなど費やされた土木量も大きい。

《歴史》直入郡の国人入田氏は祖母山など山岳寺院と結びつきが大きく、祖母山・緩木山・倉木山山麓から流れる緒方川上流地域を支配し統けた。

「上井覚兼日記」天正13年(1585年)10月14日の項目では、「豊後南郡入田方牢々候て、五六ヶ年前已前、又大友殿被召直候、併領知等如本に無之候故、此度此方へ申入、可散意霧企候処、豊後より被取懸候故、ゆる木と云う城取構、入田方一類六千程楯龍之由・・・」とある。この時の合戦では緩木山の寺坊は焼かれ入田義実は敗北したらしい。「入田氏系図」では戸次統貞の讒言を受け大友方に攻められ入田城に龍もるとある。翌年10月には薩摩方が豊後に攻め入り、高城を落として入田城に入ると記されている。一方、直入郡誌など地誌類には薩摩方に呼応して挙兵した入田義実は緩木城に拠った大友方佐田氏を攻めたとある。

これらの編纂史料では高城・緩木城が混淆して伝えられており注意を要する。緩木城・高城が同じ城を指すのか、それとも緩木山が緩木城であり、緩木城と高城で別々の城が機能していたのか確定できていない。

いずれの城も九州国分け以降は記録になく廃城になったものと考えられる。（中西義昌）



第115図 緩木高城縄張り図（1/2,000）

【387　緩木城　竹田市大字九重野】

《立地》　祖母傾山系の北端部、付近には1,000m級の峰が連続してある緩木山頂部に存在する。山頂部の標高は1,046mで、非常に急峻な山頂にあり全方向に見通しがきく。しかし、頂上部は思いのほか平坦であり曲輪としての機能を十分に果たすだけの広さはある。

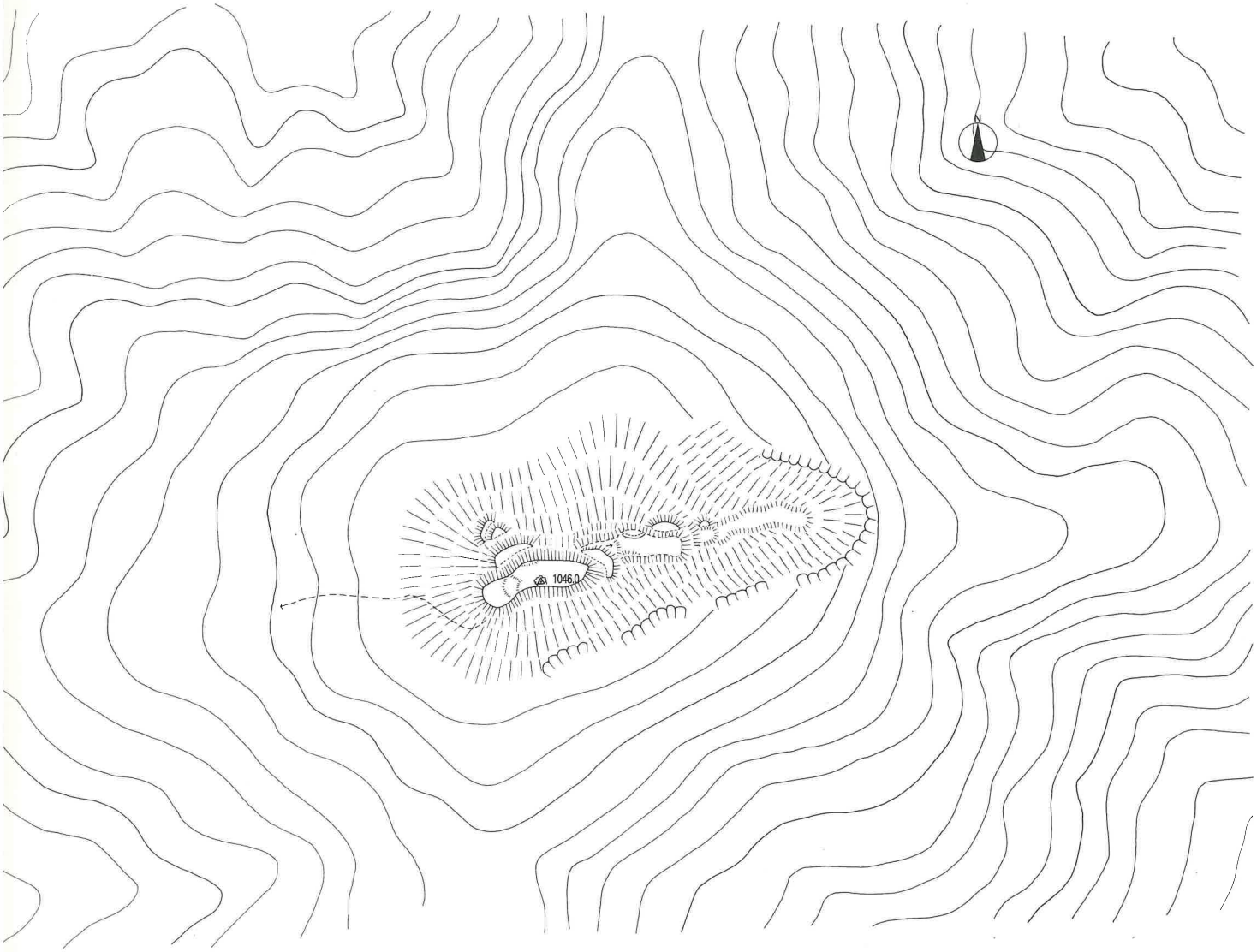
《現状》低木と雑草に覆われている。保存状態は良好。

《構造》山頂部は平場として成形され、主郭の役目を持つ。その曲輪から北側にのびる尾根に3段、東に延びる尾根に１段の曲輪を形成している。東に延びる曲輪は最終段の曲輪から、ダラダラとのびていくが、そこには目立った平場形成は見られない。また、堀切や竪堀等の遮断施設は見られなかった。

全体的にみて、高所にあることと主郭とされる郭といくつかの帯曲輪を有するのみの単純な縄張であることから詰城的な印象を受ける。

《歴史》豊後国志によると元緩木神社のあったところで、入田氏の城とされる。

天文19年二階崩れの変の後、入田郷を追われた入田氏は、天正7、8年頃、入田宗和（義実）の代になって復領するが、本領である入田郷に入ることは許されなかった。本拠であった津賀牟礼城には大友衆（戸次統貞か？『島津義弘譜』）が入っていたため、入田氏は九重野まで退き、緩木城や小松尾城などを本拠とするようになった。しかし、天正13年、積年の恨みをはらし本領への復帰を願う入田氏は、当時、豊後侵攻を計画していた島津方に内応を申し入れ、大友方との小競り合いの末籠城、大友麾下清野、進両氏に攻められ中尾、堀等が死守したと伝える（『上井覚兼日記』〈史料編古文書部741〉、『豊後国志』。翌年には、薩摩方に内通し、周辺の南郡衆の内応勧誘にも積極的に取りかかる。天正14年10月には島津義弘の率いる薩軍の侵入を助け、当地に迎え入れることとなる。（豊田徹士）



第116図 緩木城縄張り図（1/2,000）

0　50　100m

【394　岡城　竹田市大字竹田】

《立地》大野川支流の稲葉川と白滝川に挟まれた、標高325mの台地上にある。東西1.5km、南北約1km、東西に細長く延びている。中世においては、稲葉川と白滝川の合流地点である十川・挟田が城下町として、近世には城跡の西側に城下町が形成された。城下町との比高差は約100mである。

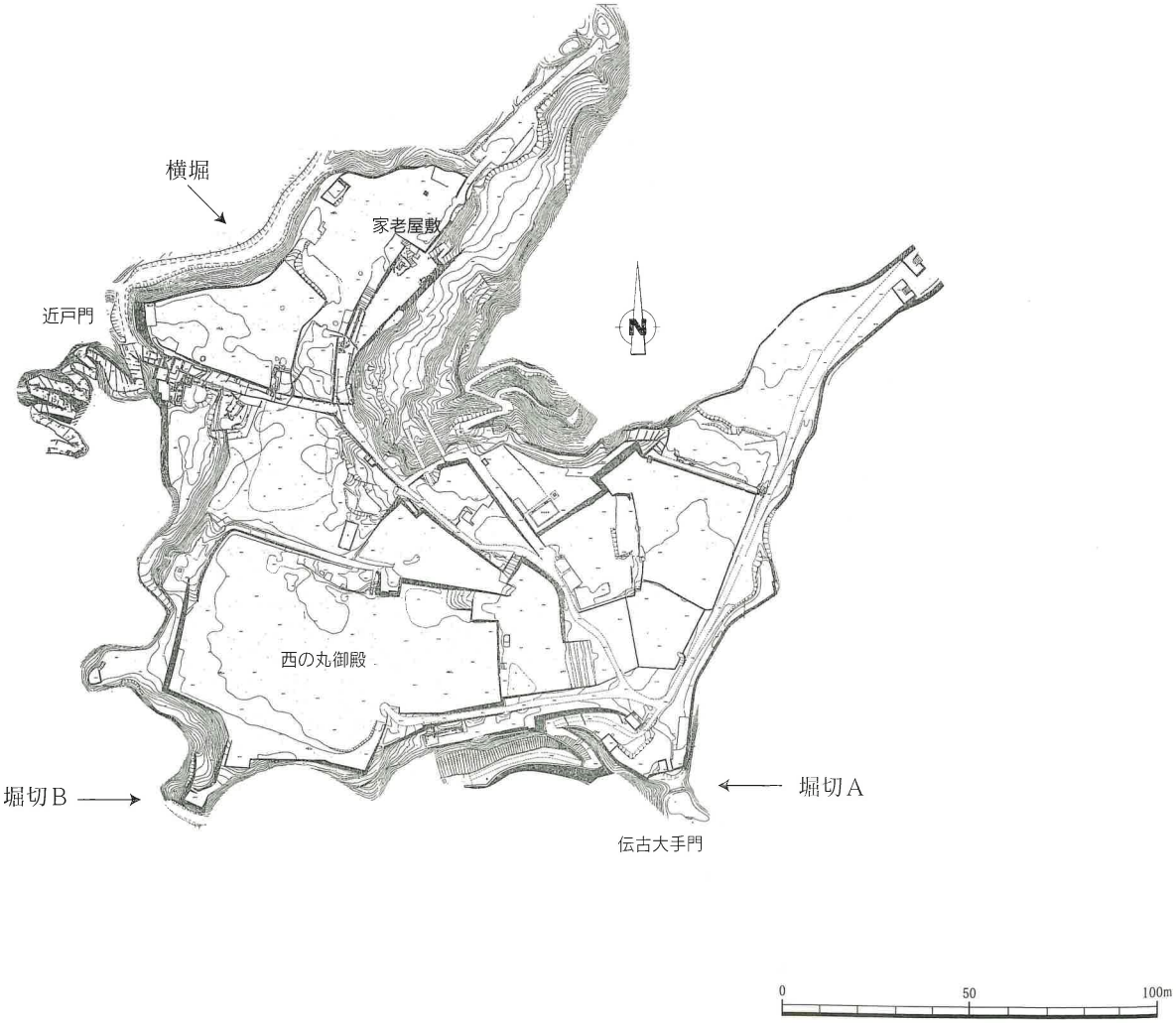
《現状》明治4年廃藩置県により建物はすべて取り壊され、石垣と地下遺構等が現存している近世城郭として国指定史跡となっている。指定地内は、昭和53年以降公有化事業が行なわれ、保存整備基本設計に基づき整備を実施している。

《構造》中世期の遺構は、近世城郭として改修されて西の丸御殿跡周辺の一部に堀跡が確認される（横堀、堀切A、堀切B）。台地の三方は河川により囲まれており、西側に面した古大手門と御殿西側隅櫓には尾根を掘削した堀切が存在し、近戸門跡から家老屋敷隅櫓跡の約170m間に横堀を築き西側からの進入を防いでいる。

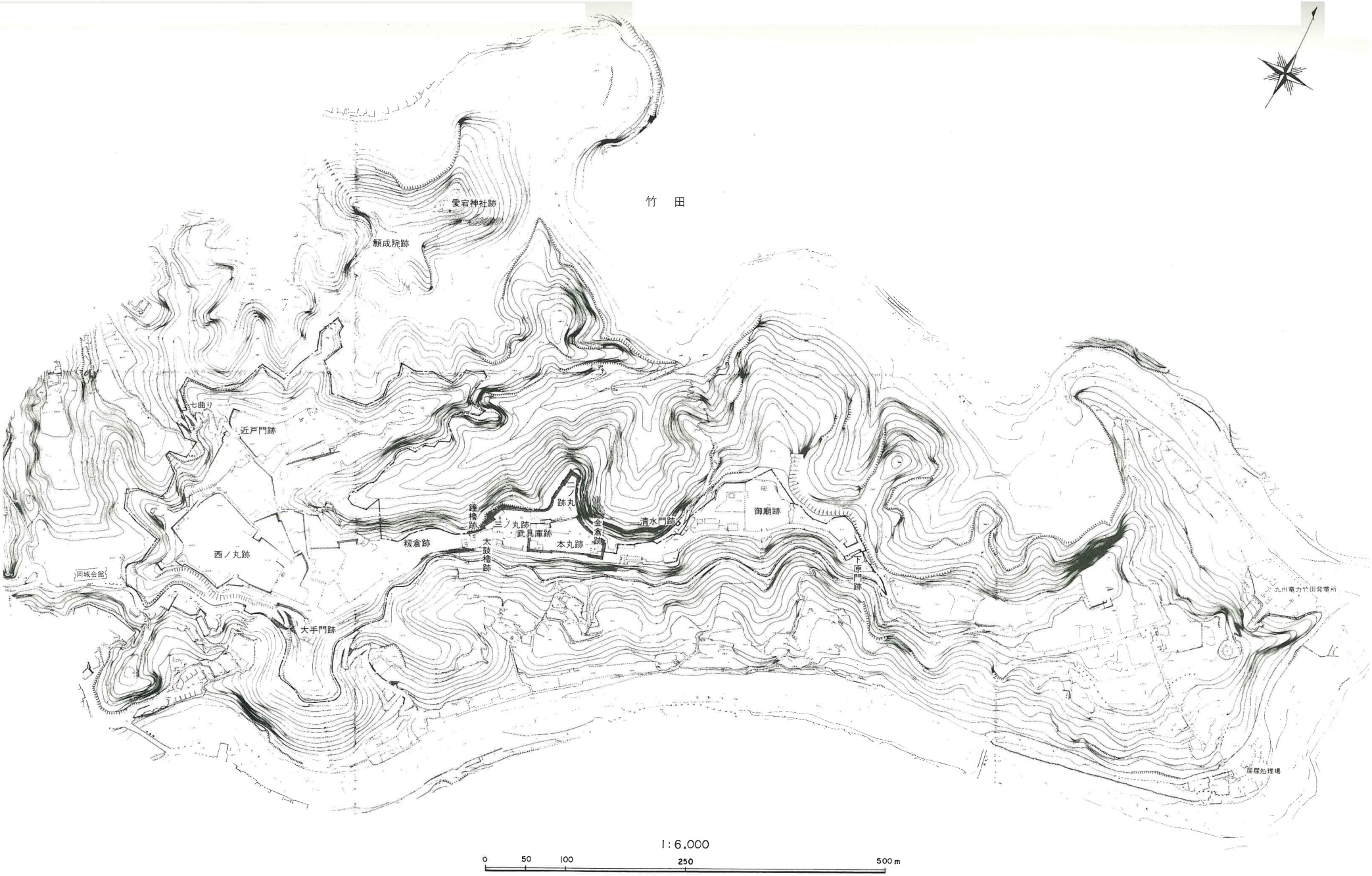
近世期になると、本丸が慶長元（1597）年に完成、寛文3（1662）年には西の丸御殿がつくられ、城の中心部分とされていった。岡城は山城的殿舎（御廟）、平山城的殿舎（本丸・二の丸・三の丸）、平城的殿舎（西の丸）で構成され、これらが一体となっていることは近世城郭史上特異な城である。

《歴史》『豊後国志』巻六によると、文治元（1185）年大野郡緒方荘の武将緒方三郎惟栄が築城し、建武のころ豊後国守護大友氏の分家志賀氏が旧堡を修理し居城とした。天正年中の豊薩戦争において城主志賀親次が城を死守した。しかし、文禄2（1593）年豊後大友義統が領地を没収されると、同時に親次も城を去ることになった。文禄3（1594）年、播磨国三木城（兵庫県）から中川秀成が入部以降、近世城郭として改修され中川氏の居城として幕末まで至った。しかしながら、建武年間までの記述については、史料的裏付けが希薄である。

『大内家文書録綱文』（文書番号71）には、貞治元（1362）年北朝軍の小弐冬資が菊池勢に押され岡城に退いたとある。さらに、『豊臣秀吉書状案』（文書番号785）および『豊臣秀吉朱印状案』（文書番号797）には、天正14（1586）年からの島津氏豊後侵攻の折に、岡城に本拠を置く志賀親次が幾たびの激戦で島津方を撃破して大功を立て、岡城の堅固さをうかがい知ることができる。（佐伯治）



第117図 岡城西の丸跡周辺の中世期の堀



第118図 近世岡城全体図

【396　騎群城　竹田市大字飛田川字騎群、大字会々字鹿口】

《立地》国道57号線から久住方面（旧久住街道）に向かう国道442号線との分岐点より約1.5kmの道路南側に接した、標高約380mの独立丘陵上に位置する。国道442号線から比高差は約40mである。国指定史跡岡城跡からは、西側の約3.5kmに位置し台形状に遠望でき、さらに城跡からは、遠く阿蘇山、久住連山、祖母・傾山を一望できる。

《現状》頂上部は、東西約410m、南北約50mの細長い平坦部分が造られている。現在城跡の東側は、公園として利用されており、山頂まで車道・登城道・駐車場が整備され旧状が失われている。西側の平坦部は、笹竹が繁茂し斜面部分は杉の植林地となっている。国道442号線に面した北東部は、宅地造成及び土取りのため機械により掘削が行なわれており、垂直に切り立った阿蘇溶結凝灰岩が露呈している。また、南西部においても一部土取りにより掘削が行なわれている。

《構造》前記した頂上部の細長い平坦部分は、大きく3つの曲輪が存在しその間に堀切を入れている。曲輪Ⅰは、西側隅に櫓台を有し、東西127m、南北30m、東側の一部と南側ほぼ全域に土塁を廻らしている。曲輪Ⅱは東西30m、南北35mの三角形を呈し土塁を廻らし、南西隅は石積みを施して櫓台的になっている。曲輪Ⅲは、曲輪Ⅰより約2m高く東西100m、南北30m南西側に土塁、北西側に楕円形の張り出しを設け北西に土塁を廻らしている。明治10(1877)年の西南戦争時における薩軍の陣地であったことから、現存する遺構の時代決定においては十分な検証が必要である。

《歴史》『志賀親家申状』(文書番号140)によると「……雖然、康暦元年(1379)の年、騎群の城をめされ候以後、検断職は……」とある。天正14年(1586)の島津氏豊後侵攻の折にも、岡城城主であった志賀親次の支堡として機能していた可能性は高い。さらに、西南戦争においては、薩軍の陣地として官軍と抗戦した激戦地でもある。なお、略史を下に記す。(佐伯治)

・仁平2年(1152)源為朝騎群城を築く（伝承）。
　『保元物語』－傍若無人であったので都においておくと悪い事が起きかねないので、父為義のはからいで豊後国に13才から居住させられた。
・康暦元年(1379)木牟礼城没収される。城主－志賀（氏房?）
・天正年間(1573～1592)志賀親次の支堡として薩摩軍が朽網より襲来するのに備える。
・楠公遥拝所の塔(文久元年(1861))建設
・明治10年薩軍據りて官軍と抗戦す。

＜＜もう一つの豊薩戦争＞＞

戦の証として、台地に刻まれた痕跡は何も中世城館だけではない。第二次大戦時の戦跡も近時注目を集めている。しかし、大分県では最近さらに注目されている遺跡がある。天正14年に島津氏に率いられた薩摩軍が豊後に侵攻して約300年後の明治10年、熊本県の中・北部での戦いで敗れた西郷軍の一部が大分県に攻め入り、政府軍と激戦を繰り広げた、その痕跡が明瞭に残されているのである。島津軍は日向豊後国境の梓峠を越えたが、西郷軍もほぼ同じルートで大分県に攻め入った。天正期には大友氏が国境の城郭整備に腐心したが、明治期では熊本鎮台を主体とした政府軍が西郷軍の北上を大分県で食い止めるため、各地に陣を築いて迎え撃ったのである。その痕跡は各地で中世城館と重なって見いだされる。上記の騎群城の土塁は大部分が明治期の塹壕の痕跡と言われている(『西南戦争の記録2』西南戦争を記録する会　2003)。また、宇目町の城ノ腰古城(374)にも塹壕がある。縄張り図作成時には、完全に中世段階の土塁と判断したものであった。しかし、よくよく注意して周辺の尾根や丘陵上を見ると、同じような土塁を伴った堀(つまり、塹壕)が至る所にあることがわかった。しかも、鉛製の弾丸がいくつも落ちている。当然鉄砲を主体とした戦闘の中で塹壕は大きな効果を発揮した。

後、西南戦争を記録する会の方々が更に広い範囲で陣地の跡が点在しているのを確認している。中世段階の遺構と明治段階の遺構は部分を取り出すと非常に似ている。しかし、全体の遺跡としてみると、明らかに異なる点も見えてくる。明治期の塹壕は背後に中世城館の様な平坦部(曲輪)を作らず、前線で身を隠し、射撃するためにのみ幅の狭い塹壕を掘り、前面に楕円状に土を盛り上げているのみである。(小柳和宏)

第119図 騎群砦縄張り図（1/2,000）

【398　津賀牟礼城　竹田市大字入田字矢原、十角、岩本】

《立地》緩木川と神原川を支流とする緒方川の本流と、倉木集落から流れる十角川が合流する独立した丘陵上にある。北に緒方川、南に十角川が流れており緒方川を挟んだ対岸には入田湧水群がある。

丘陵に沿い川が流れている部分では、基層となる阿蘇3、阿蘇4溶結凝灰岩が露頭、5mから8mの断崖を形成しており、矢原の集落からの新しい取り付け道か、岩木川側からの深く入り込む谷からの城道しか登城は難しい。丘陵頂部は細く長くのびていくいわゆるヤセ尾根によって形成されている、それぞれの尾根の比高差があまりなく全体が見渡すことができ、尾根間の移動も比較的容易だったのではないかと考えられる。

《現状》一部植林がなされているが、ほとんどが雑木林で覆われている。所々で風倒木が見られるが、表面観察に十分耐えられる遺構の残存状況である。

《構造》一の曲輪(A)は標高349mの山頂部に作られており、現状では、段を持たない一面の平場に造成されている。この一の曲輪(A)を中心とし東、西、南方向に派生する尾根に対して、執拗なまでに堀切と竪堀による尾根線の切断を行っている。しかしながら、堀切、竪堀以外でとくに際立った普請は見られず、曲輪部分に施された切岸と尾根線の寸断に終始した作りとなっている(B)。また、南側に延びていく尾根には切岸による平場の造成に加え、数段の曲輪が展開する二の曲輪となっている。一の曲輪(A)から帯曲輪状に連絡路がついており、登城道(E)も途中の分岐からこの郭に取付くことができる。一の曲輪との比高差は10m程、一の郭に次ぐ平場面積を有し距離も近いため、一の曲輪、二の曲輪が当城の駐屯域と考えられる。(C)

しかし、構造的に特筆すべき点は、この南側に伸びた尾根からさらに西へ延びる尾根(D)にある。

(C)の西端から(D)に接する点は、落差5mの巨大な堀切によって仕切られ、さらにその先には直線的に削られた切岸、大規模な竪堀や畝状竪堀が施されている。あきらかに、他の尾根(A～C)と比べ防御に対する意識の違いが見られ、この地点は城内でも突出した高度な技術をもって城普請が行われている。

特に(D)では、土塁、落差5～6mの切岸と堀切を築いて遮断し、さらにその堀底に向かって畝状竪堀を施している。また、切岸面の南端部も堀切り、(D)から(C)への侵入をこの切岸面で絶対に阻止するという意識が見ることができる。他の城域に比べあまりにも突出した縄張には、異様な雰囲気さえ感じられる一角であるが、これには城全体の構造から2つの理由が考えられる。

まず、一つには尾根(D)の南側に入り込んでいる谷は緩斜面で、城域の中でもっとも尾根筋に取付きやすい箇所であること。そこで、巨大な堀切①、竪堀②、切岸③さらには畝状竪堀④によって、直線的な侵入を防ぐ防御ラインが敷かれたのではないかと考えられる。もう一つは、この尾根(D)の西側を廻る谷が、主郭に取付く城道に直結していることである。いずれも、この谷筋を突破されると主郭部まで一気に攻めあがられる恐れがあるため、谷の入り口部分で食い止めるための重要な尾根として認識され、防御意識が集中した結果であるとうかがえる。

《歴史》県下最大級の城域を誇る津賀牟礼城だが、この津賀牟礼城を本拠とした入田氏は、大友加判衆にも名を連ねる有力家臣で、入田親廉の代には義鑑に重用され権勢をふるっていた。また、この豊後南郡と呼ばれるこの地域には、志賀氏(北志賀、南志賀)をはじめ戸次氏、一萬田氏ら南郡衆とよばれる勢力があり、同紋衆として大友政権の中で強い発言権を有していた。

しかし、天文19年、義鑑派の入田親廉は義鎮の廃嫡運動に関わったため、大友二階崩れの変の後に義鎮派の戸次鑑連らに追われることとなる(『大友興廃記』)。府内を落ちのびた親廉は子の親誠とともにこの津賀牟礼城に立て籠り抗戦、だが、早々と他家の取り込みをはかり体制を固めた義鎮に追いつめられ親廉は切腹する。また、親誠は舅である阿蘇惟豊を頼って肥後に逃げ延びたが、阿蘇の手によって討たれている。この一件により、入田氏の所領は没収され、戦功のあった諸氏に与えられた。そして、反対勢力の排除に成功した義鎮は義鑑から家督を継ぎ体制を固める。

この後、大内家、毛利家、龍造寺家らと北部九州の覇権を競い、六カ国守護へと成長を遂げた大友義鎮であるが、天正6年の日向高城の大敗を契機に衰退をはじめ、薩摩の影におびえるようになる。これまで国外からの圧力をまともに受けることのなかった豊後南郡にも不穏な空気が流れるようになり、西南方面に対する警戒が高まり始めた。

天正中頃には、薩摩軍の北進がいよいよ本格化し、南郡域の軍事的緊張はピークに達する。天正7、8年頃には入田親誠の子義実が義統に許され、旧領への復帰をはたすが、本拠であった津賀牟礼城には入れなかったため、旧領すべての回復を願う義実は不満を抱き島津方への内応を申し入る。天正13年には緩木城に立て籠り(『上井覚兼日記』〈史料編古文書部741〉)、大友方に攻めかけられることとなる(『豊後国志』)。

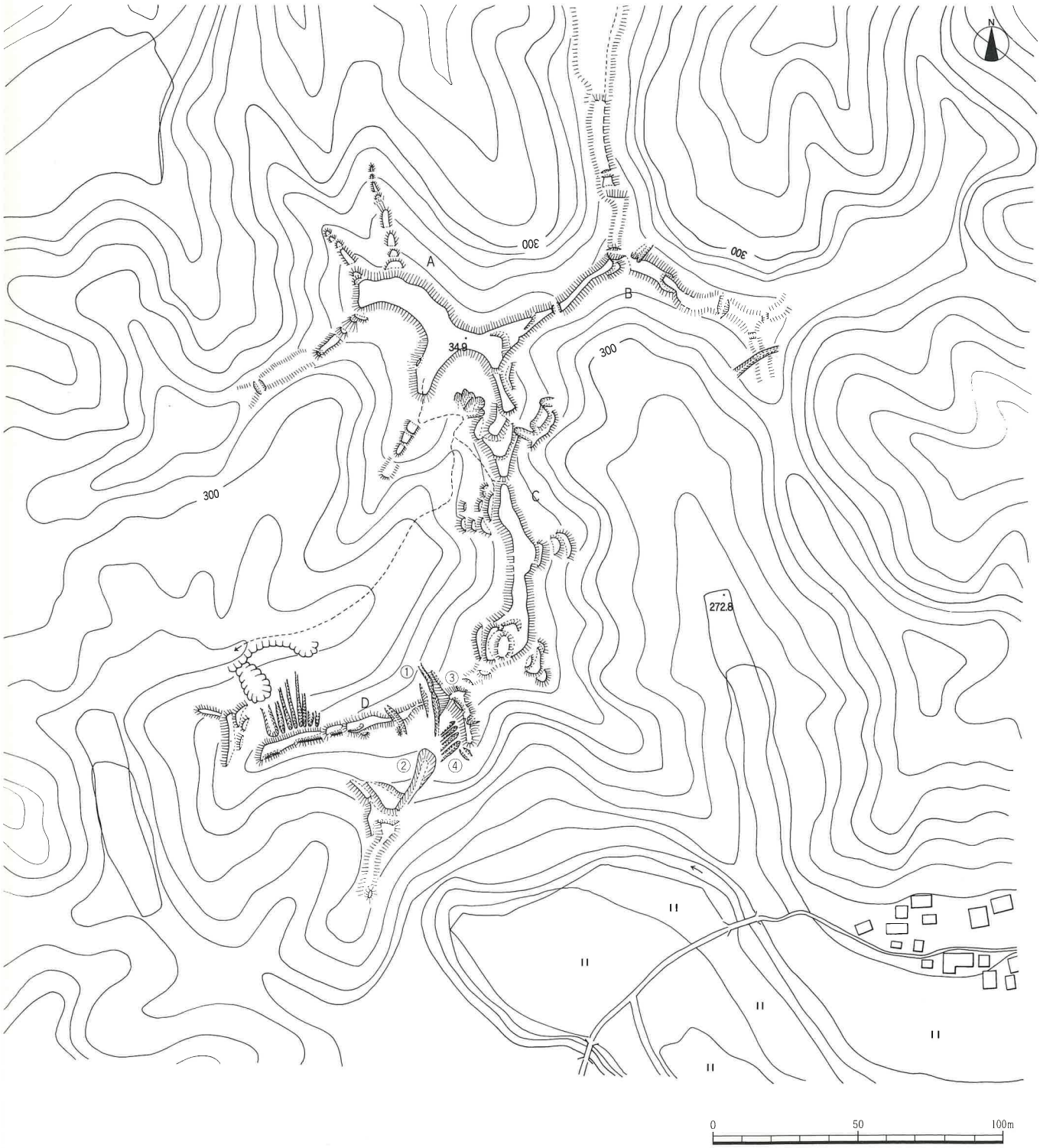
この混乱は、島津方の豊後侵攻への足がかりとされ、天正14年には義実が島津方に翻る。義実はその後、志賀道雲、道益(南志賀)、志賀親守(北志賀)ら南郡衆をも勧誘し、薩軍侵攻のお膳立てを計ることとなる。

この頃、津賀牟礼城主として誰が入っていたのかは定かではないが、後の記録によると、戸次摂津守統貞(源三)が入っていたとされ『島津義弘譜』(史料編記録部1)、極度の軍事的緊張状態に追い込まれていたのではないかと考えられる。その緊張度は尾根(D)に如実に現れており、復領してきた入田氏をはじめ在地の土豪衆や、豊後侵攻を計る島津軍を警戒する戸次氏が、巨大な津賀牟礼城の弱点に対し、最新の縄張技術を駆使し守りを備え、より実戦的な城郭へと改修した可能性が考えられる。

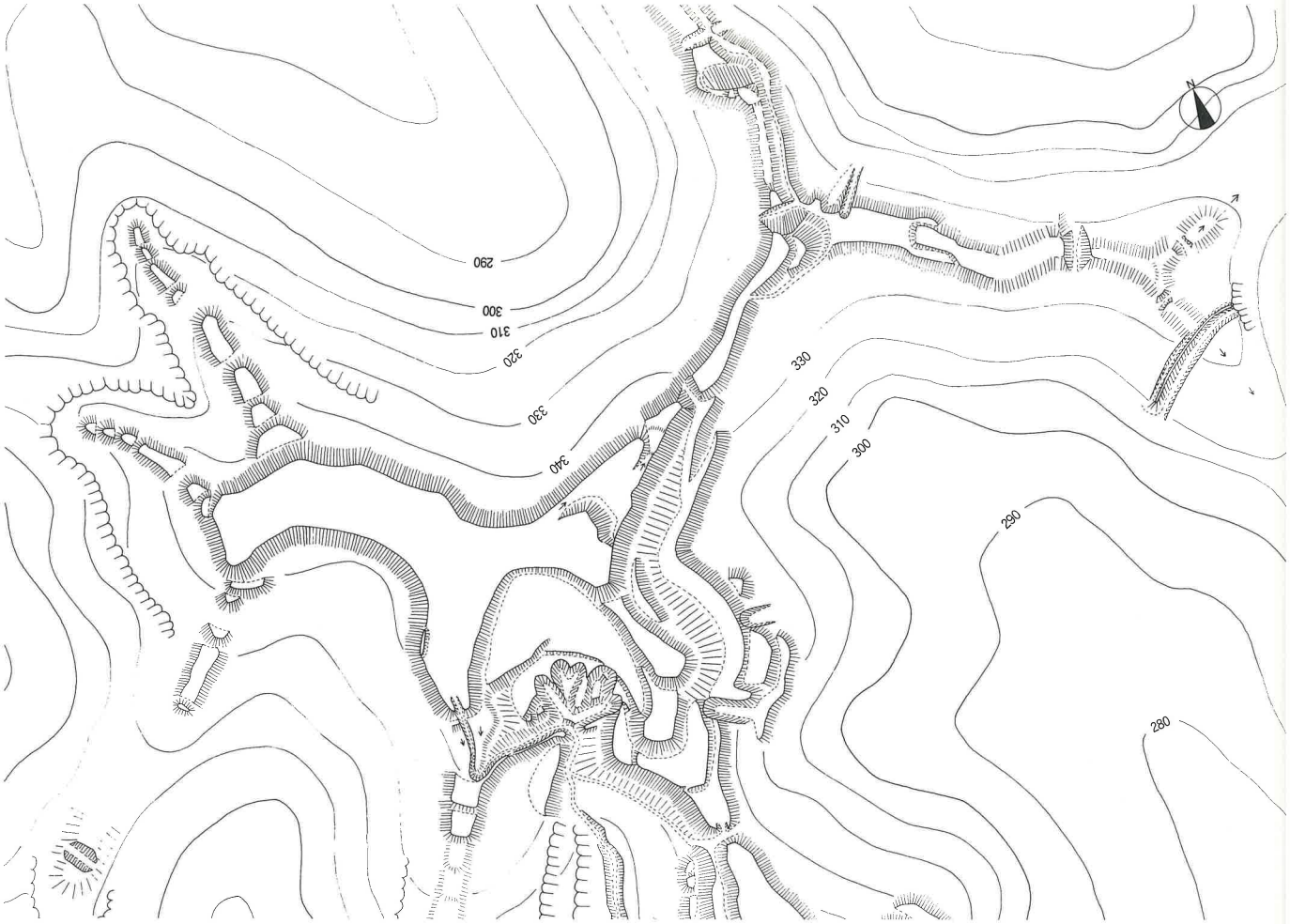
また、『豊後国古城蹟海陸路程』にこの津賀牟礼城を紹介する一文があるが、その中では「つかむれと申切寄、古城有」と記されている。このことから、江戸時代まで津賀牟礼城跡を「切寄」と「古城」の2つの「部分」として認識していたのではないかと考えられる。そして、少なくとも天文19年までに入田築城による「古城」が(A)、(B)、(C)の部分、天正7，8年以降戸次氏？の築城による「切寄」が（D）の部分に該当するのではないかと考えられる。

天正14年には、島津義弘の率いる１万余の本隊が肥後口より侵攻、入田らの内応により、難なく豊後に招き入れられた島津軍は周辺地を次々と制圧し、戸次統貞が守る津賀牟礼城も包囲する。入田宗和、志賀道益は戸次に投降を勧め、戸次は戦わずして開城し、義弘は入城する（『島津義弘譜』〈史料編記録部１〉）。

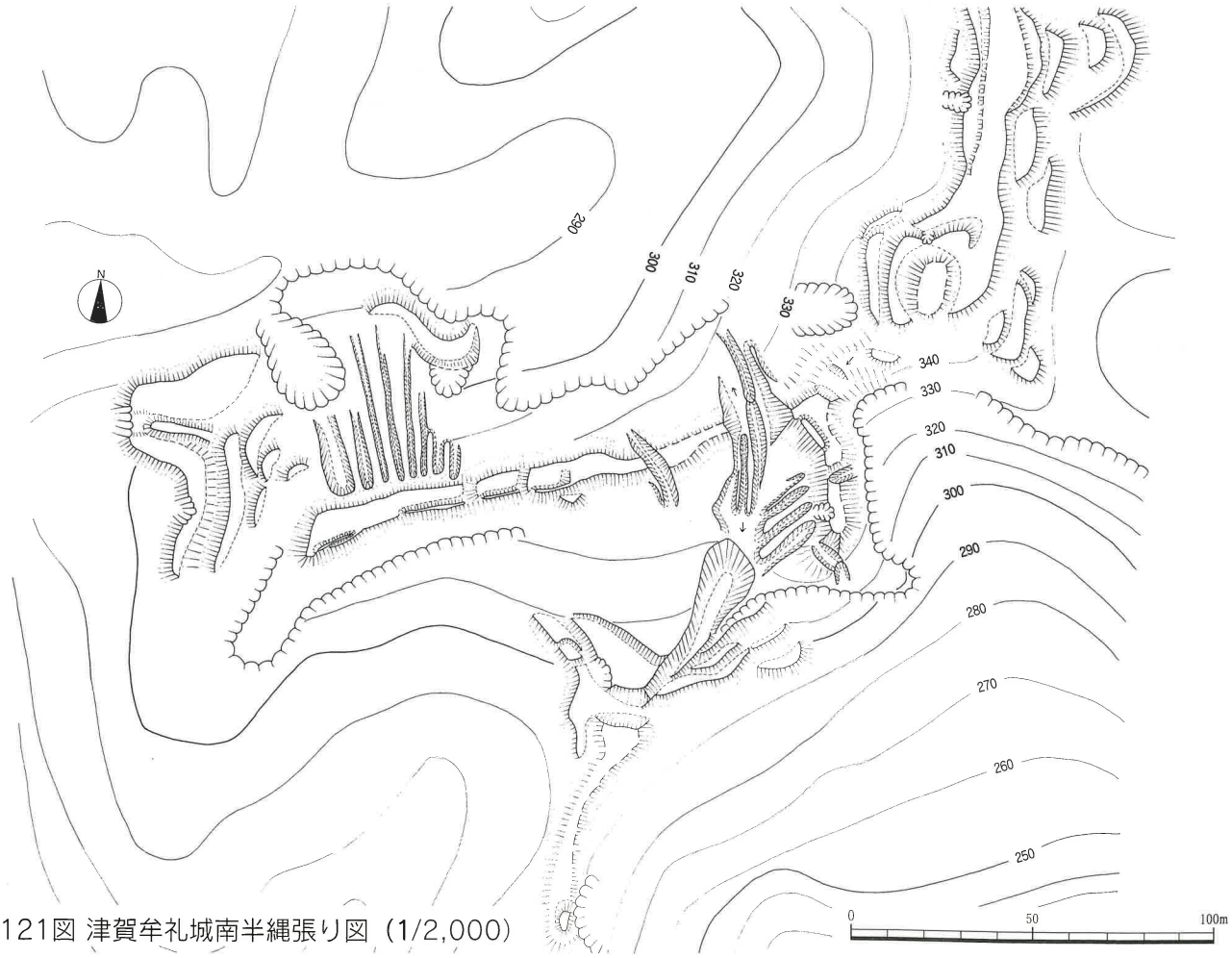
勢いを得た入田は、ついに念願の本領を奪還するが、秀吉による九州平定が開始され、薩摩軍が撤退をはじめると、追撃にでた志賀親次に攻められ島津と共に薩摩へ逃亡している。（豊田徹士）



第120図 津賀牟礼城全体縄張り図（1/4,000）



第121図 津賀牟礼城北半縄張り図（1/2,000）



第121図 津賀牟礼城南半縄張り図（1/2,000）

【400　武山城大野郡野津町大字都原／臼杵市武山】

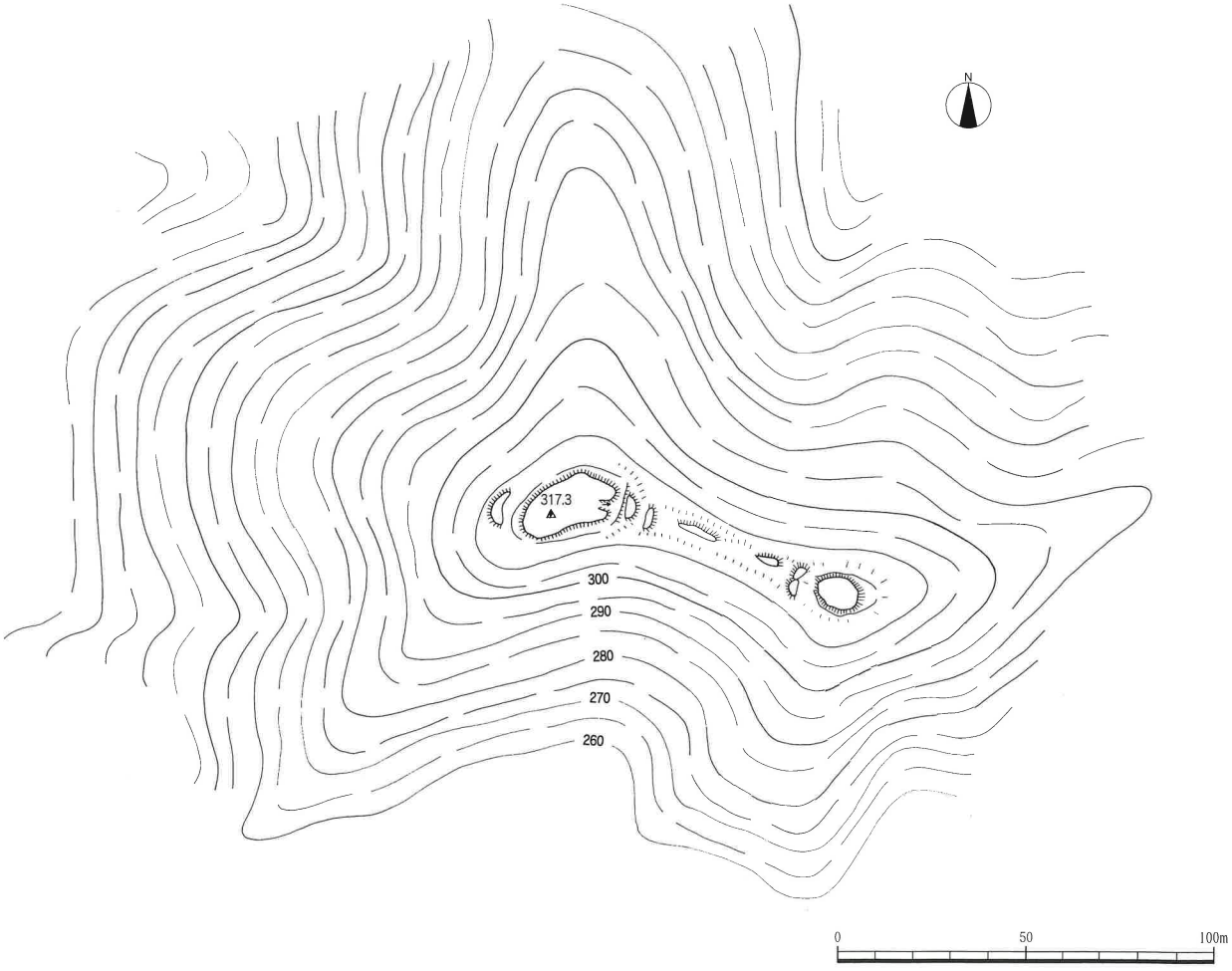
《立地》臼杵市と野津町境の武山（標高317.3m）の頂上部に立地する。眺望はよいが旧道から離れ、交通の要地ではない。

《現状》現在登山道もなく不便な地である。旧状を良く残すものの山頂部に小削平地と周囲に切岸が見られる程度である。

《構造》頂上部は東西20m、南北13mで、東部に虎口を設ける他は切岸である。西方下に小曲輪、東尾根続きに小曲輪が点在し、60m離れ直径10m程の頂部削平の曲輪がある。遠望すれば２つの峰からなっているが、これは出曲輪で、東方尾根に下る道があったと考えられる。急峻な自然地形を利用し切岸で防備するもので、堀切は見られない。

《歴史》『野津町誌（旧版）』によれば天正14（1586）年当時、実相寺統国が守備し、その居館は野津町寺田にあったという。統国は大友氏から采地800貫を給されて兵300余騎で守備し島津軍と戦ったが、部下の裏切りで落城したという。『旧貫史』では「本丸二畝二十一歩（６間半、１１間）二の丸一畝十六歩、廻り三十三町二十間」とある。

（小野英治）



第123図 武山城縄張り図（1/2,000）

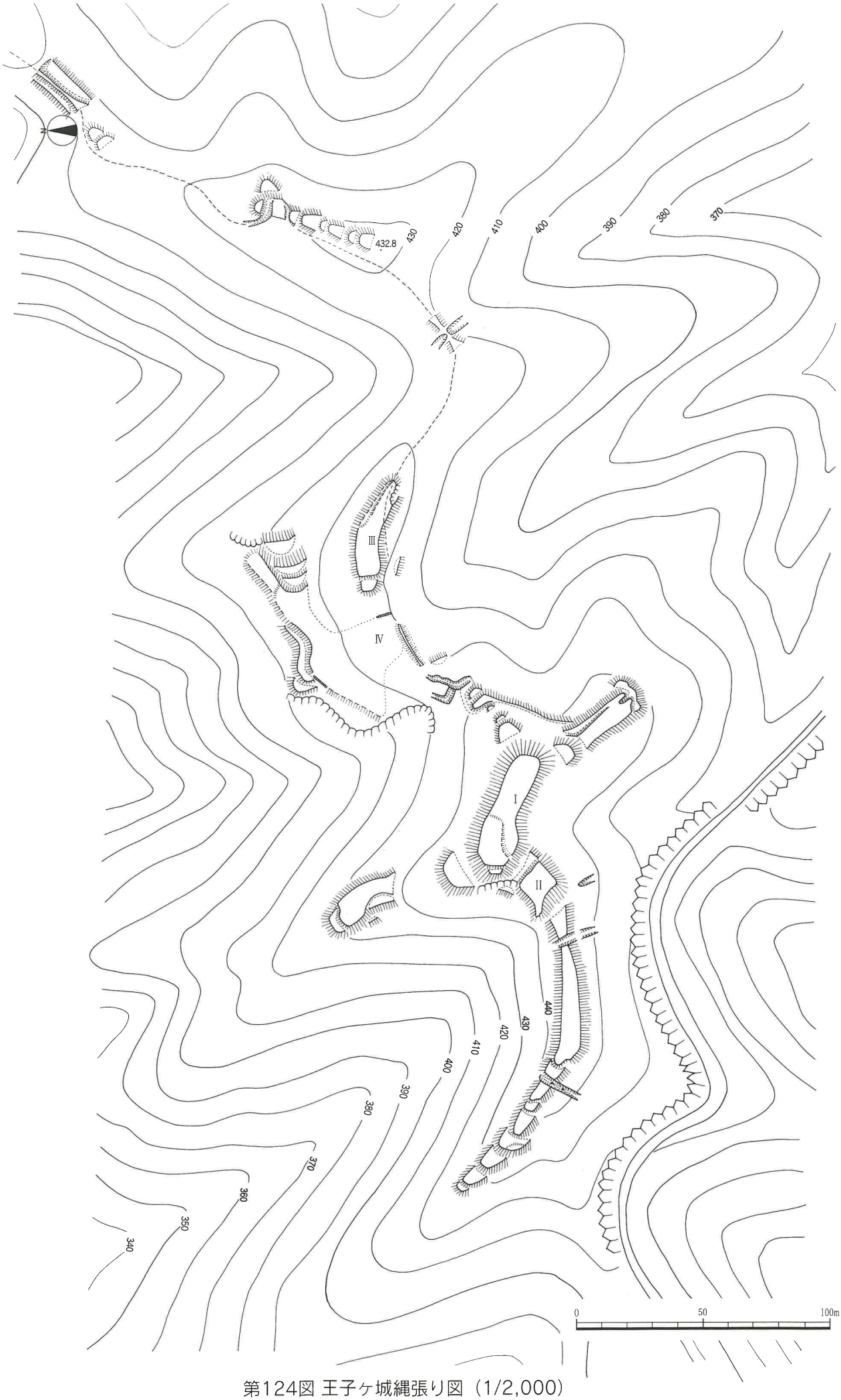
【403　王子ヶ城　大野郡野津町大字王子・西神野・福良木・泊】

《立地》大野川の支流である野津川に流れ込む垣河内川と臼杵川の間に連なる山麓のにあり、標高425m～455mの尾根上に位置する。垣河内川と併走する国道10号線から風連鍾乳洞を経て西神野へ通じる町道西神野線の北西部で国道10号線から比高差は約340mである。

《現状》現在城郭跡周辺は、雑木林と植林が行なわれ樹木が覆い繁っている。現状では、当時の城道を利用した山道が巡らされ、石積み・土塁・切岸・堀切等の遺構が良好な状態で残存している。

《構造》総延長約500mの尾根上に東西２つの頂部を有した自然地形を巧みに利用した防御施設を築いている。西側は、曲輪Ⅰ（主郭）・曲輪Ⅱを中心として四方の尾根上に腰曲輪を有している。曲輪Ⅰは、東西47m、南北15mの隅丸長方形の平場を作り、周囲は高さ約5mの切岸となっている。曲輪Ⅱは、東西12m、南北14mの方形を呈し、曲輪Ⅰとは上幅約4m、深さ約2mの堀切により画されている。さらに、西側には2本の堀切を入れ区画している。東側は、楕円形を呈した曲輪Ⅲの西側に曲輪Ⅳの平場が鞍部にある。曲輪の南側には、幅約2m、高さ約1.5mの土塁が東西方向に延び、東側と北側に石積みが確認された。さらに、東側に延びた尾根上には堀切により画された腰曲輪が続いている。

《歴史》永享7（1435）年から翌8年にかけて、室町幕府軍大内持世らが大友持直と臼杵市と津久見市の境にある姫岳を中心にして戦った合戦の折、持世が姫岳から王子城を経由して脱出する旨を知らせた『大内持世書状案』（文書番号120）に記述されている。さらに、天正14(1586)年の島津氏豊後侵攻の折に、野津院士が王子城に立籠り応戦した記録がある(文書番号759、760）。（佐伯治）



第124図 王子ヶ城縄張り図（1/2,000）

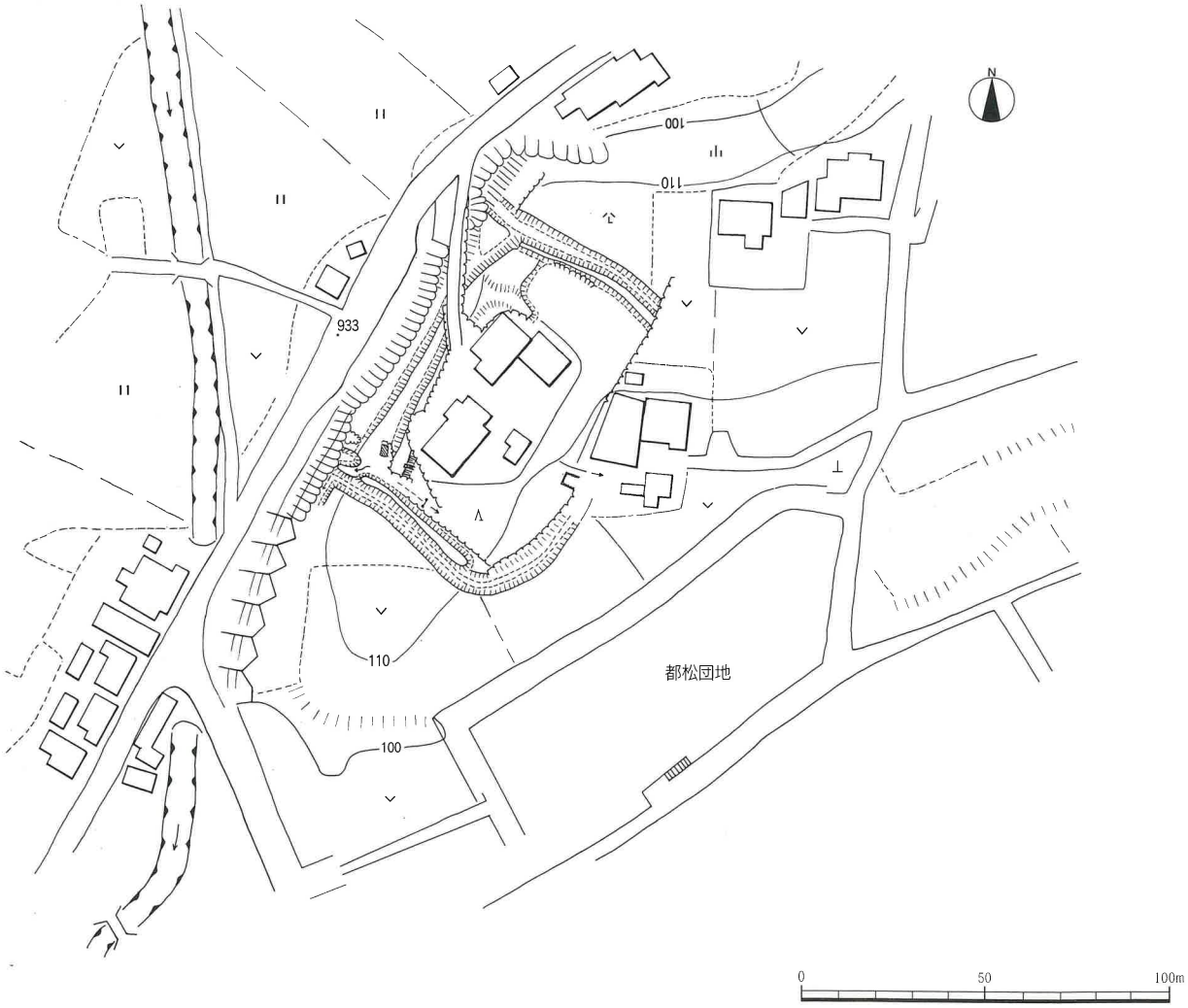
【411　寺田館　大野郡野津町大字新生】

《立地》南西方向に向けて突き出た低台地上の先端部付近、標高約110m付近にある。野津川支流の老松川沿いの沖積地を見渡せる位置である。南側付近には臼杵に通じる主要交通路があったものと推定される。

《現状》宅地化により一部消滅しているが、横堀については地下に遺存しているものと思われる。東側土塁付近等に永徳二年銘の角塔婆３基があるが、臼杵道の道標として造立されていたものと考えられ、後世の移設であろう。

《構造》北東側は崖となっており、それ以外は横堀が「コ」字状に囲み、長辺95m、短辺65mの規模と推定される。土塁は連続しないが北東・北西・南西側にあり、堀の底から２～４ｍの高さがある。曲輪は北西土塁と崖の間に二段の平場がある以外は中心部の主郭のみである。西側隅付近に竪堀状の溝があるが、この付近に虎口が設けられていた可能性がある。

《歴史》築城年は不明であるが、武山城主である実相寺氏の居館跡ともいわれている。（諸岡郁）



第125図 寺田館縄張り図（1/2,000）

【413　鍋田城　大野郡野津町大字西寒田】

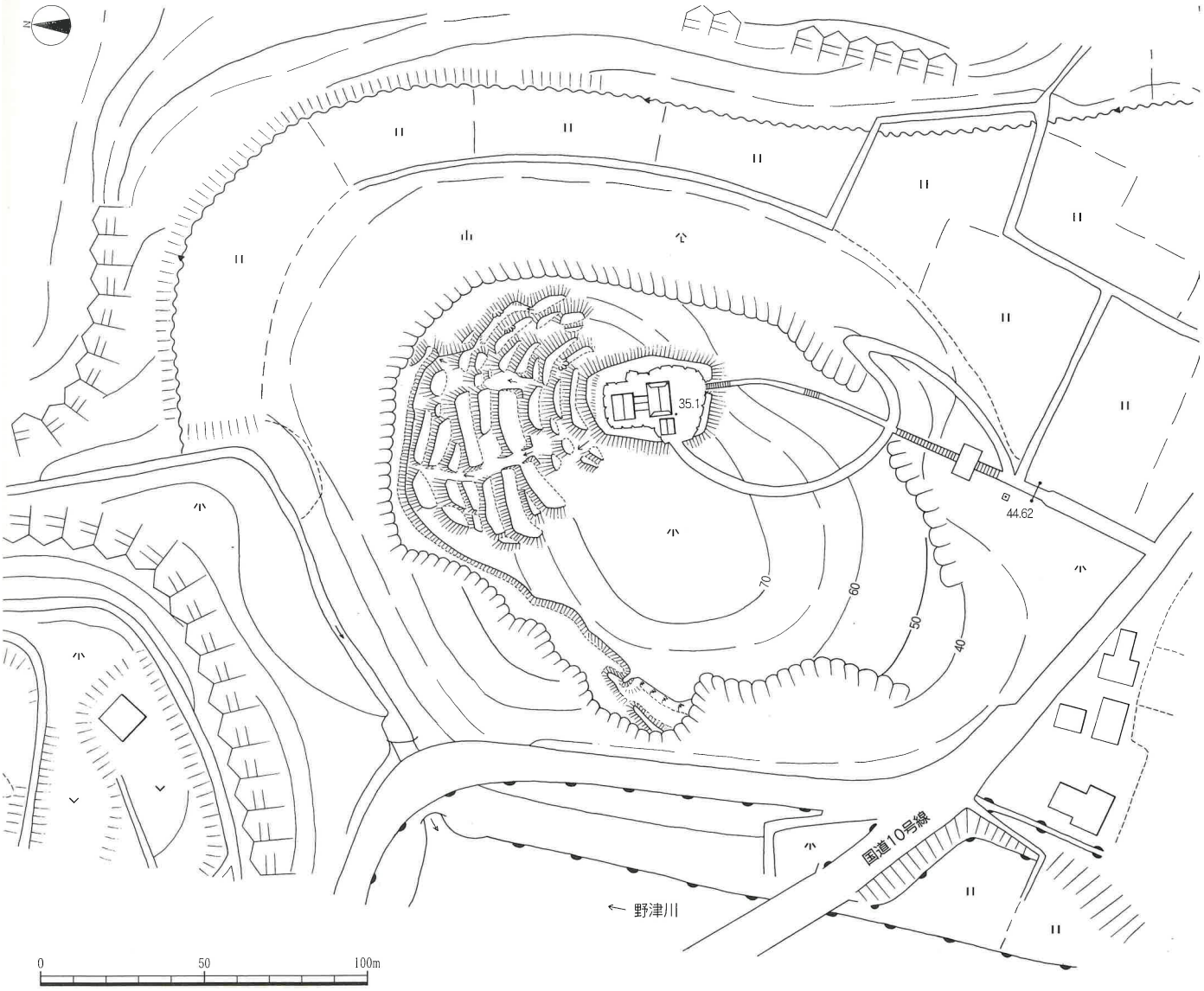
《立地》大野川とその支流である野津川河川沿いを府内（大分市）から臼杵へ抜けるルート上にあり、南へ小さく屈曲する野津川に向かって突出した小さな独立丘（標高85.1m）の頂上から北側斜面にかけて立地する。麓からの比高差は約35mある。小丘の周囲は大部分10m近い急崖となっており、唯一南側の一部が自然の斜面を残している。

《現状》現在、頂上部に神社があり、南北35m、東西25mの略長方形に平坦面が造られているが、この平坦面が曲輪の旧状をそのまま示すものかどうかは不明である。また、社殿に向かう参道が作られ、一部斜面を削りこむが大きな破壊とはなっていない。現在全体が雑木林、植林となっており、神社以外の旧状の変更は無いものと考えられる。

《構造》前記したように頂上部の平坦面が曲輪の旧状を示すものかどうかは不明であるが、北側斜面の段々畑状の曲輪群とのつながりを考えると、頂上部も当然曲輪として利用したものと考えられる。北側斜面の曲輪群は、北に下る二本の道状の空間を挟んで大きく3箇所に分かれる。そして、最も下（急崖の上）には西側に伸びる道（帯曲輪）状の平坦面が取り巻く。これは、東側で旧国道建設時に崖を削り込んだために途中で途切れているが、そのまま小丘を取り巻きながら下って、唯一崖の無い南側（現参道の西側）の麓に至る城道であったと考えられる。

《歴史》フロイスの『日本史』第8巻第67章（資料編２の文書番号65）に、「野津の善良な老人リアン」が約300名のキリシタンとともに立て篭もる「城塞（フォルタレーザ）」としてでてくる城が「鍋田城」と考えられる。「城塞」は「従わねばならぬ城主がいるわけではな」く、「付近の者や友人仲間が集まっているだけ」の城であった（註：藤木久志氏が「村の城」として取り上げているもの）。そして、城の中央には「聖（なるキリスト）像を付した大きな十字架」が建てられていた。当時の街道からは裏手にあたり、直接見えない北側に人々が立て篭もる平場（曲輪群）を作り、山頂部には十字架を建て、礼拝をする空間として利用していた可能性が指摘できる。

なお、島津氏は結果的にこの城を落とし、「味方を少々籠もり置」いた（資料編１記録部一の29号）。（小柳和宏）



第126図 鍋田城縄張り図（1/2,000）

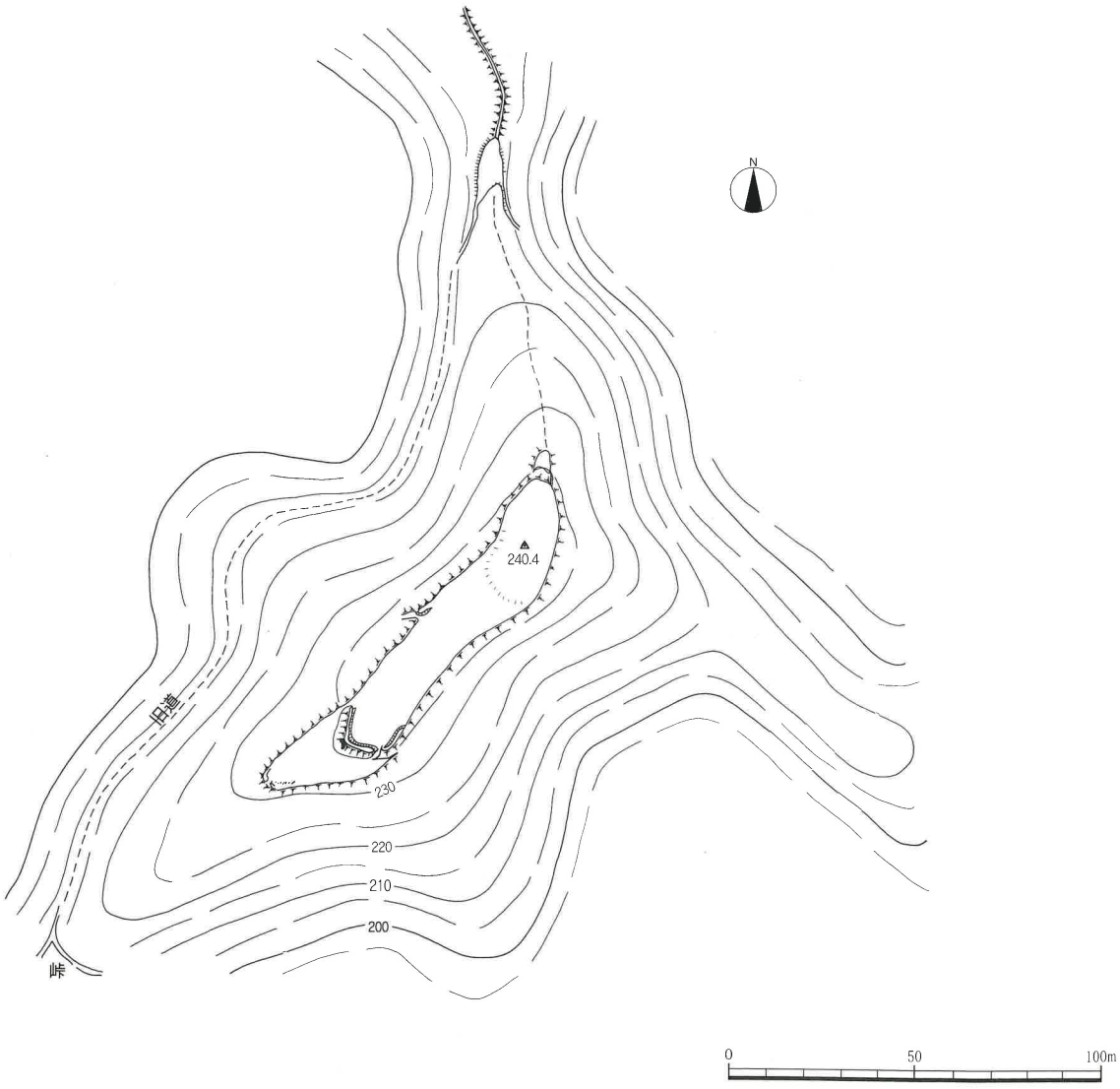
【417　筒井ヶ城　大野郡野津町大字都原】

《立地》野津町と臼杵市を結ぶ山間道路上（旧道）にあって、筒井集落から西北へ約1kmの標高240.4mの山頂部に立地する。

《現状》現在山頂部は明治16（1883）年と17年に建立された二基の石灯籠がある他は旧状を良く残している。

《構造》山頂部の主郭は東西15～20m、南北85mの削平地で周囲を切岸で囲む。北方に一段低く小曲輪を設け、ここが虎口となり尾根を下れば旧道の峠（三叉路）に通じる。主郭の西部に一部土塁を設けた虎口があり、南方に土塁と両端に虎口があり、3.2m切岸下の曲輪と連絡する。この曲輪は東西16m、南北20mで周囲は切岸。南端に土塁をともなう虎口があり、尾根を下れば旧道の峠にいたる。旧道は城跡の周囲を廻り、南北の峠で合流する。要地上にこの城は築かれているが、北方の道は幅員1m内外の狭い土橋状となり、城跡入口峠部は南北12m、東西6mの平場となっているのは注目される。『野津町誌（新版）』には筒井集落と城跡との尾根に幅1.5m、高さ0.8mの土塁が100mにわたって残っているとあるが、これは城跡北方の土橋道と同様と考えられる。

《歴史》武山城と関係があるのではないかと言われるが詳細は不明。天正役では当然戦場になったと考えられるが、『豊後国志』には「筒井堡、野津荘筒井村に在」としか記されていない。『臼杵藩領内絵図（臼杵市立図書館蔵）』は、江戸時代初期に稲葉氏により作成されたもので、当時の主要道路、古城、陣跡、有事の際の見張り所、軍勢の伏せ場、防御の場所など記入したものであるが、筒井は古城として竹山（武山）は物見山としているので筒井城が格上となっている。（小野英治）



第127図 筒井ヶ城縄張り図（1/2,000）

【420　若山の陣　大野郡野津町大字老松字城ヶ平】

《立地》野津町と臼杵市の境界に近い旧道に接した標高317.29mの台地上にあって、東面は臼杵川の上流、間戸川の深い渓谷となり、南面は若山、花原の谷がめぐり、北西面は武山谷の絶壁となる。さらに、東方は臼杵湾と城下を遠望するという要地に立地している。

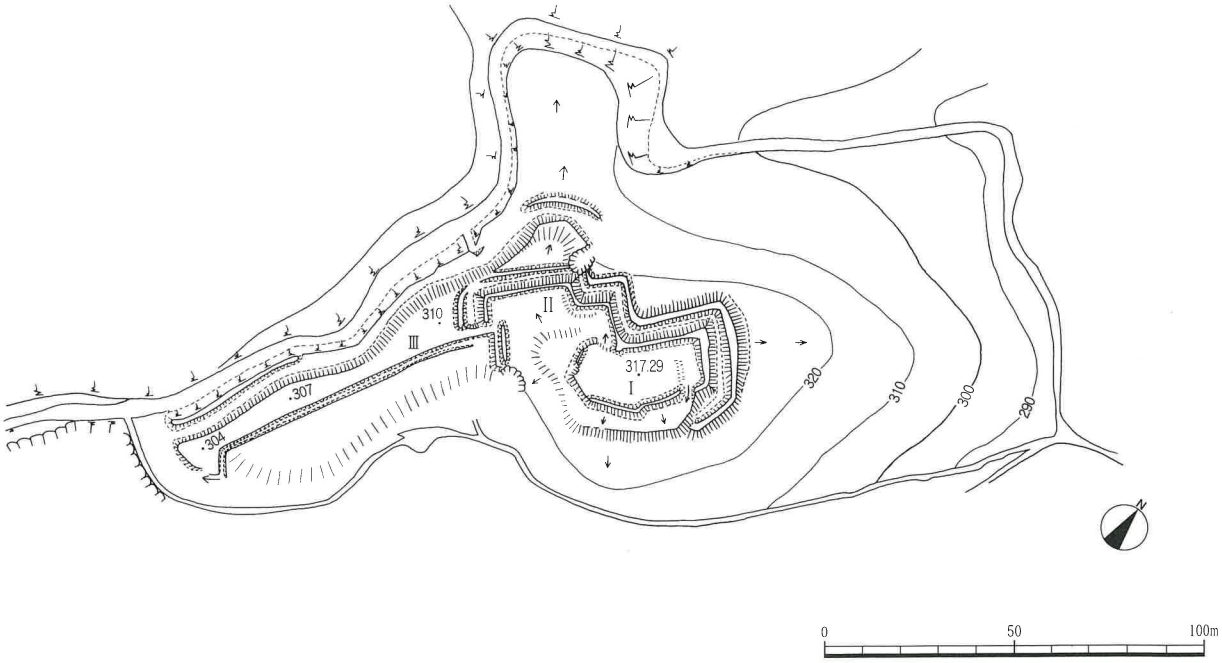
《現状》現在、愛鳥は台地上の遺構は野津町教育委員会で雑草の下草刈りなど管理がなされ、旧状が良好に確認される。

《構造》台地の頂部を主郭とし、北東部を掘り切り、北西部にかけては空堀（横堀）が一段下の第２郭に続く。その南西部が第３郭となり切岸で囲むが、主郭と第２郭が横矢掛かりの工夫がなされた縄張りとなっているのに対し、第３郭は自然地形を切岸で防備するといった構造で、旧道に接する虎口は南西部に設けられているが、これは第２郭に至らず、その外曲輪で行き止まりとなる。東部にも虎口があり、竪堀状の緩い坂道約80mで第２郭の虎口に通じている。

なお、主郭には東部と西部に第２郭に通じる虎口があり、東西30m、南北15mのほぼ長方形で、南隅の一部以外は土塁を設け周囲は切岸である。第２郭は東南部が主郭の腰曲輪となり虎口は北部が出曲輪に、西部が第３郭に開かれる。主郭は高低差の無い平場であるが、第２郭は高低差東西で4m余、第３郭は10m程で完全な削平地ではないが、洗練された縄張りは注目される。

《歴史》天正年間（1573～1591）、武山城の支城として構築されたのではないかと推測されるが詳細は不明。慶長５（1600）年９月15日の関ヶ原合戦で東軍が勝利したが、豊後では大友義統が旧領回復のため旧臣を率いて西軍につき石垣原合戦で黒田如水軍に敗れたのが９月12日であった。この時、岡藩の中川氏の配下となっていた田原紹忍がその旗を持ち出していた事が問題となる。中川秀成は徳川家康の疑いを解くため、西軍方の臼杵城主太田一吉を攻めるため岡城を出て臼杵に向かい、９月28日この地に本陣を構築した。『太田中川合戦記』には「慶長五庚子十月、中川秀成自ラ惣大将トシテ、中川平右衛門、古田喜太郎召供シ、大友ノ家臣田原近江守親堅入道紹忍ヲ案内者トシ、数多ノ軍勢ヲ引率シ、三重口ヨリ討入リ、野津原芝尾山ニ本陣ヲスヘラレタリ」とあり、『豊州乱記』には「中川秀成ハ臼杵ノ城ヲ退ク事二里半ニシテ、本陣ヲ備ヘ、夜ヲ日ニ継デ攻戦フ」とある。

以上から、若山の陣は中川氏が臼杵城攻めに際して構築した付城であったことが推測される。（小野英治）



第128図 若山の陣縄張り図（1/2,000）

【424　松尾城　大野郡三重町大字松尾】

《立地》三重町の東南方、三重川と松尾川の合流点付近の大門瀬に真言宗醍醐派吉祥寺、弘安7（1287）年に開創したとされる天台宗広福寺跡があり、遺構群は南方にそびえる標高約276mの城山山頂及び北麓の谷間に確認される。松尾城の築かれた三重郷は古代より豊後国府内から日向国に通じる主要道があり、交通の要衝に位置し、山頂からは、北西に緒方、北東に府内、東に臼杵、野津方面を眺望でき、峻険な山容を示す。

《現状》城山の中腹には、広福寺建立の際、守護神としたという山王宮（大同元〈806〉年　近江国日吉神社の分霊を勧進したと伝え、明治11年より城山神社と改称される）がある。遺構群はこの神社を境にして、山頂部分と山麓部分に確認される。山麓部は、山王宮直下の谷頭から開口部にかけての谷間全域にひろがる。西尾根の先端部は、慶長年間に伊予国から来住した栄賢に復興された吉祥寺（広福寺の奥院と伝える）の造営により改変され、遺構群の状況は不明である。広福寺跡は、谷の開口部にあり、一町ほどの広さのなかに、往時を偲ばせる石垣（加工石を使用）を築いた大小の区画が、数区画遺存する。全体に山林を形成するが、山麓部は杉や檜の植林となっている。

《構造》山頂部は、東西に長く全長約155mあり、周囲は急崖となる地形である。中央の狭小な鞍部を境に東と西の遺構群に分かれる。最高所である西側は、比較的しっかりとした東西40m×南北10mの略長方形の平場を造成し、周囲を数段の石積み（北辺２箇所、南辺１箇所の3箇所で確認される）と切岸で固める。南辺の中央付近には略方形の低位な高まり（一見櫓台とも見て取れるが、接続する土塁状遺構の東南隅が最も高いこと、また土塁状遺構の東端部にあたることなどから、土塁の崩壊した状況を示している可能性もある）があり、東方の削り出しによる土塁状遺構に連なる。東側は、尾根先端部において数段の削平段が認められ、大半が自然地形を残し、最小限の造作を行っているのみである。

山麓部は、東西の尾根に囲まれ、北に開口する谷間に隙間なく尾根頂部から谷底まで累々と階段状の大小の削平段が築かれて、スタジアムを彷彿させるような配置となっている。一部に数段の石積みの見られる削平段は、谷底や開口部に向かってしだいに規模を大きくし、レベルを違え、互い違いに配置する工夫も見られる。谷の開口部には、北側を衝立のような平場と帯状の曲輪をもつ尾根に囲まれた大きな空間（広福寺跡）が広がり、内部は東西の尾根と北面の尾根によって遮蔽される構造である。

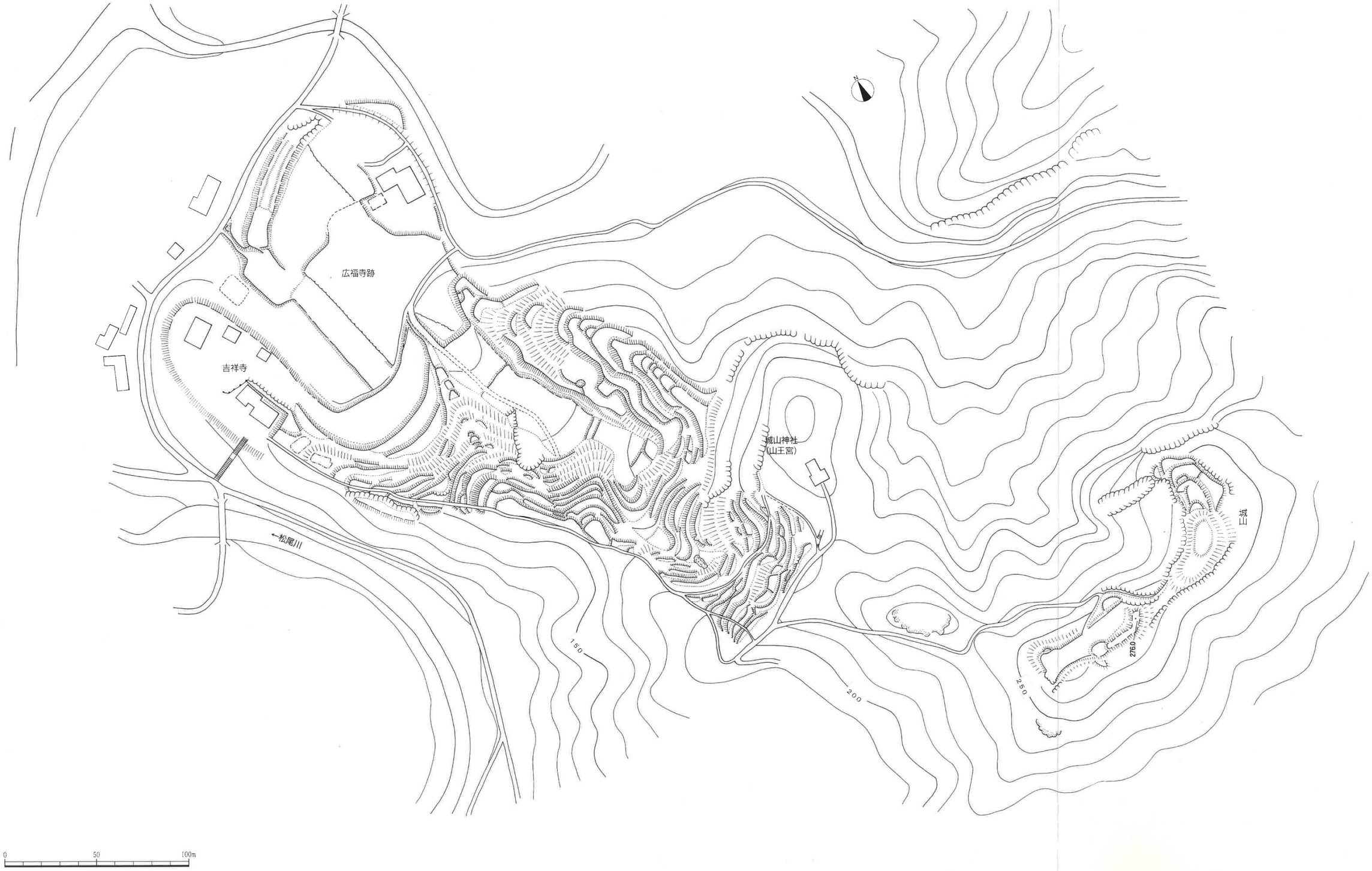
こうした山麓部に確認される削平段の評価について、当初、植林のための造成に伴うものではないかとの危惧があったが、中国やタイ産等の陶磁器やかわらけ、備前大甕、石臼などが山麓の広範囲の削平段に分布していることが確認でき、戦国期の遺構であると判断される。しかし、谷底や開口部付近の平場は、広福寺の坊跡の可能性もある。

《歴史》天正14年10月、島津義弘の弟家久が豊後国侵入に当たって家久軍１万余騎が在陣し、豊後府内、佐伯、大野方面侵攻の本陣となった。さらに天正15年3月1日島津氏討伐のため、豊臣秀吉が大阪城を出陣することを聞いた義弘は、3月15日に急遽府内を出発して、家久の迎えを受けて3月16日に帰陣し、評議を行い3月17日の撤退が決定された（文書番号記録部１/12・１/29）とある。構造については、「松尾の城へ上がり見申候、城ハ切岸廻し候而、番や一ツ作候而、平田狩野介麓に被居候、新納縫殿助も麓江候て、夫丸様成もの壱人ツツ番ニ上セ候」（文書番号記録部/24）とあり、山城は切岸を廻し、陣夫を上げ、物見の番屋を作り、麓には本陣を設置したと考えられる。本陣施設については、上記史料から家久の起居する建物の存在が推測されること、『大友興廃記』に松尾山広福寺を根城と定め、とあることなどから広福寺が利用されたと思われる。すなわち、家久は広福寺を本陣として、谷間を兵の駐屯施設として使い、山城に物見機能をもたせたと言えよう。島津軍の本陣松尾城は、「松尾山広福寺木版略縁起」（慶長16年）によれば、「堂裡山門十一ケの房舎に悉放火し、堂地坊跡空敷而已」とある。なお、「松尾城」の名称は島津史料の中に見え、豊後側資料では「陣松尾山」・「三重郷松尾山」と記される。（玉永光洋）

《松尾城表採の遺物》

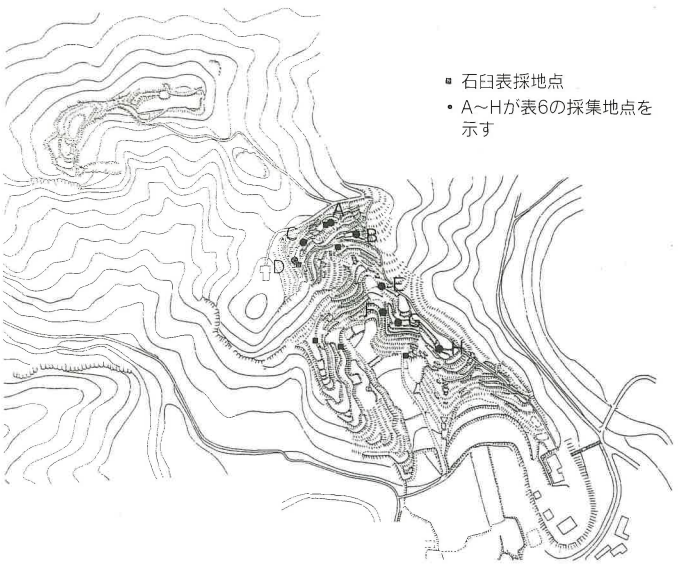
松尾城からは縄張り図作成の調査時あるいは地元の愛好家や三重町教育委員会の踏査の際に、多量の遺物が表面採集されている。今のところ発掘調査は行われていないが、現状でも山城の表面にかなりの量の遺物が散布しているようだ。表採遺物は三重町教育委員会が所蔵しており、その中には山城のどの地点で採集されているのかが注記されているものもある。本来は採集地点ごとに遺物を紹介するべきであるが、紙幅の関係から、山城全体から表面採集された遺物を一括して記述し、採集地点がわかるものについては遺物一覧表の中に記すことにした。また、表採遺物の全体量はかなり多く、その中でも大型破片や山城の構築・改修時期の特定に役立つものを優先して図化したが、今回紹介できるものは陶磁器類を主体としたごく一部の遺物に留まる。

松尾城から採集された陶磁器類には、中国産の五彩・青花・青磁・白磁、タイ産の陶器、国内産の瀬戸美濃系・備前系陶器がある。



第129図 松尾縄張り図（1/2,000）

第131図１は中国産の五彩盤（大皿）である。一部色彩が剥落しているが、少なくとも赤と緑の二色を上絵付けしている。２～11は中国景徳鎮窯系の青花製品である。１は口縁部が屈曲する盤（大皿）で、小野正敏氏の分類でＦ群に相当する器種である。３～７は青花皿のＥ群で、いずれも内底部に銘款が見られる。８は青花皿のＢ１群である。９・10は青花碗のＥ群に相当するもので、饅頭心碗と呼称されている製品である。やはり、２点とも内底部に異体字による銘款を有する。11は口縁部が欠損しているが、小型の鉢である。胴部にわずかに面取りが認められ、口縁部を上から見た平面形態が円形ではなく、多角形を呈する可能性もある。このほか、図示していないが、11と同様な器形で、口縁が多角形となる青花鉢の口縁部小片が複数出土している。12・13は中国漳州窯系の青花碗である。いずれも、景徳鎮窯系の製品と比較すると、呉須や透明釉の発色が不良で、文様も輪郭線を描かず一筆がきのような濃塗りをするのが特徴である。14は中国龍泉窯系青磁稜花皿で、口縁内面に櫛状工具による文様が認められる。15も中国産の青磁碗で、口縁部に雷文帯から変化した唐草状の文様が施されている。16は中国産の白磁皿で、口縁部が大きく外反する器形となる。森田勉氏の分類でE群に相当する製品である。



第130図 松尾城遺物出土位置図

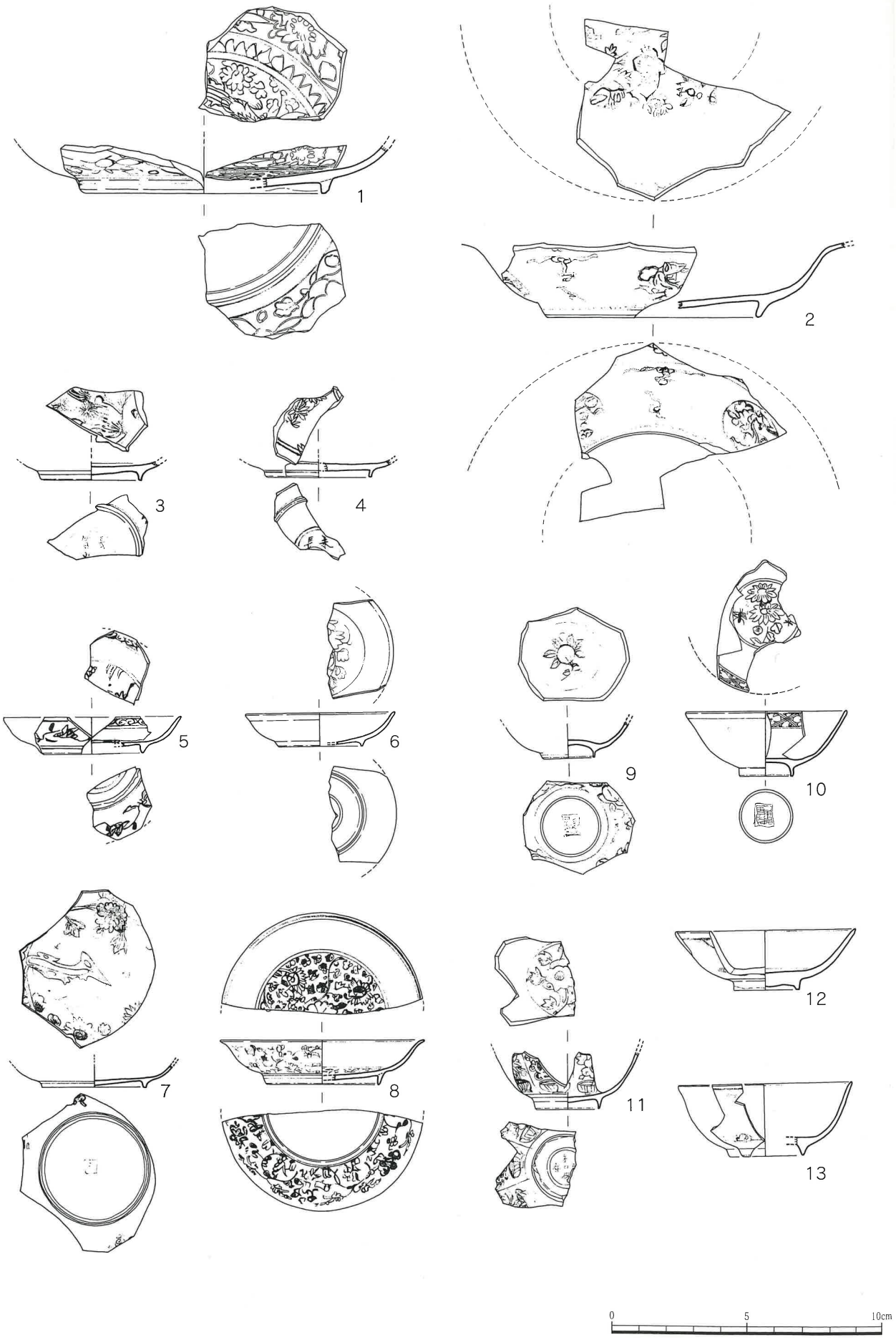
17はタイ産の焼締陶器四耳壺の肩部破片である。肩部付近にロクロ回転を利用した螺旋文を描き、この部位に把手の一部が残存する。タイのメナムノイ窯跡で生産された代表的な製品である。通常、メナムノイ窯の製品では肩部付近に白泥あるいは黄褐色釉の塗布がみられるが、当該資料は無釉のままとなっている。

18～22は国産の陶器である。18・19は瀬戸美濃系陶器の天目碗で、内外面に鉄釉を施す。大窯３期の製品である。20・21は備前系陶器の擂鉢で、内面には放射状擂目と斜め擂目が重ねて施されていると推定される。乗岡実氏による近世１a期または近世１ｂ期の製品であろう。22は備前系陶器の大甕で、口縁外面に凹線を巡らすタイプのもの。肩部にはヘラ記号が認められる。備前系陶器には、この他にも多量の大甕の破片や肩部に櫛描き波状文を施す壷の破片なども存在する。また、図示していないが、土師質土器・土錘・石臼・茶臼の破片なども表採資料中に認められた。

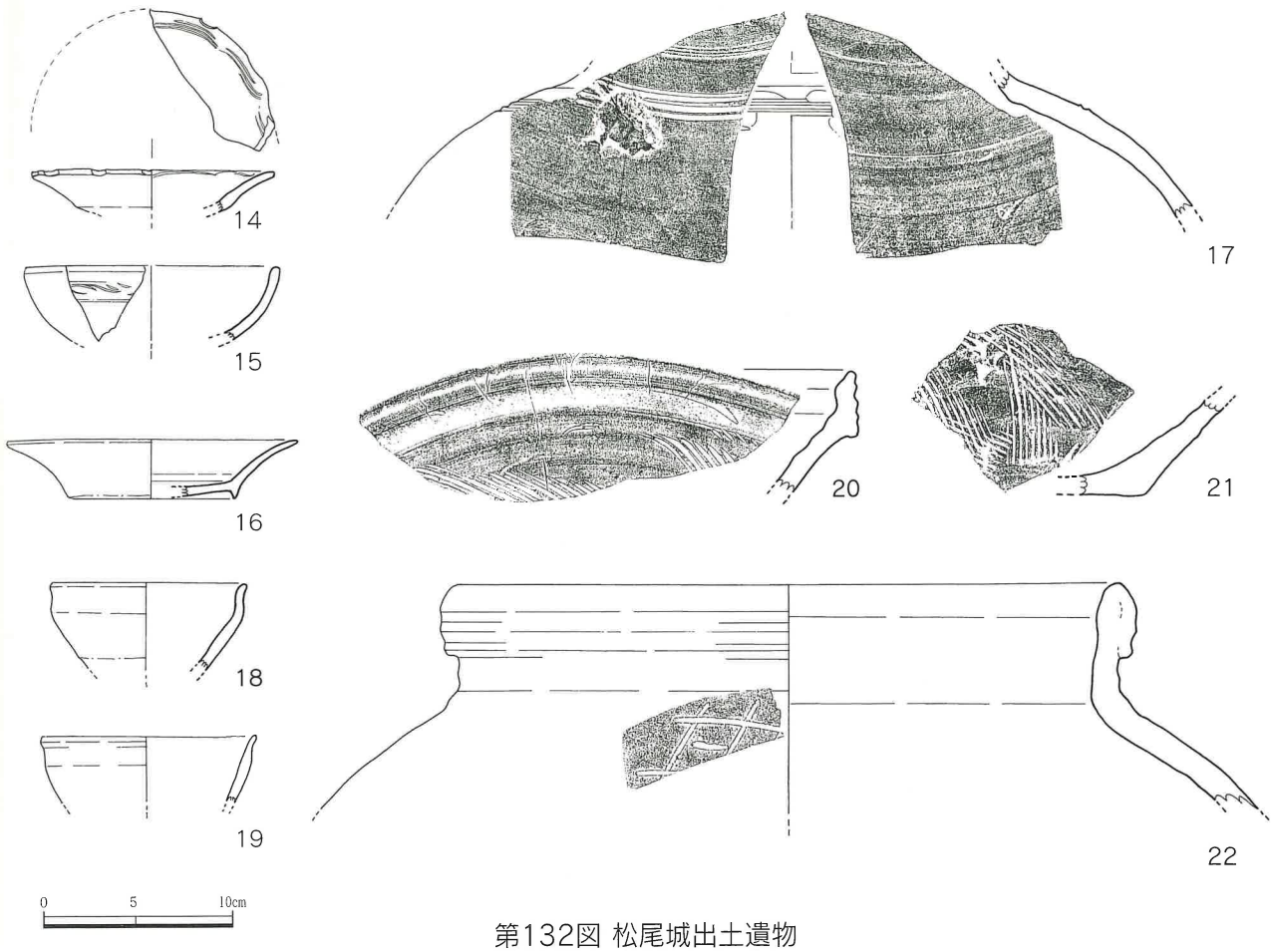
以上紹介した陶磁器類は、おおむね16世紀でも後半代の様相を示す。特に、中国産の青花に漳州窯系青花が認められること、タイ産のメナムノイ窯系四耳壷が採集されていること、備前系陶器擂鉢の内面に斜め擂目を重ねる製品が存在することなど、上記の遺物群を一括資料として仮定した場合、その年代が1580年代に限定されると考えて差し支えないものである。松尾城は天正14年（1586）における薩摩島津氏の豊後侵攻の拠点となった山城で、山城から大量に採集される遺物は、この豊後侵攻時に島津氏によって持ち込まれたか、現地調達された製品と推定される。表採遺物の大半が、大分市の中世大友府内町跡における天正14年焼土層（島津氏による府内侵攻時の焼土層）の遺物群と様相を同じくすることも、この推定を傍証する事象であろう。多量の遺物の存在は多くの兵士の駐屯を推測させるわけであるが、特に備前焼大甕の多さは、これらが山城での陣立てや生活の際に必需となる水甕として使用されたことを物語るものであろう。さらに、中国産磁器類の多さや五彩や青花の盤などの高級品、また天目碗・茶臼破片などが存在することは、これらが臨戦的な最低限の生活用具と言うよりは、むしろ平時の都市生活を彷彿とさせるような遺物群が山城に持ち込まれているような印象を受ける。

松尾城の表採遺物群はその年代と使用の背景が推測可能であり、16世紀後半から末葉において戦闘の拠点となった山城での遺物組成を考究する上で重要な資料であると考える。今後、発掘調査を伴ったさらなる検討が行われることを期待したい。（吉田寛）

（参考文献）
小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」（『貿易陶磁研究』No.2　1982年）
森田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」（『貿易陶磁研究』No.2　1982年）
乗岡実「近世備前焼擂鉢の編年案」（『岡山城三之曲輪跡－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査－』　岡山市教育委員会　2002年）



第131図 松尾城出土遺物①（1/2,000）



第132図 松尾城出土遺物

表6　松尾城表面採集遺物観察表

No.	器　種	産　地	年　代	文　　様	採集地点	備　　考
1	五彩盤	中国	16世紀	外面：花唐草　　内面：花唐草 見込：竜・花唐草	一括	赤・緑の上絵付け 一部色彩剥落
2	青花盤	中国景徳鎮窯	16世紀後半	外面：丸文に馬・霊芝　　見込：岩花	B地点	小野正敏皿F群
3	青花皿	中国景徳鎮窯	16世紀後半	外面：無文・圏線のみ？　見込：松樹 内底：二重圏線内に「長命富貴」	H 地点	小野正敏皿E群
4	青花皿	中国景徳鎮窯	16世紀後半	外面：圏線　　見込：松樹 内底：二重圏線内に「永保長春」	一括	小野正敏皿E群
5	青花皿	中国景徳鎮窯	16世紀後半	外面：花唐草　　見込：岩花？ 内底：二重圏線内に銘款	B地点	小野正敏皿E群
6	青花皿	中国景徳鎮窯	16世紀後半	外面：無文　　見込：花卉 内底：二重圏線内に銘款	一括	小野正敏皿E群
7	青花皿	中国景徳鎮窯	16世紀後半	外面：花唐草？　　見込：岩花 内面：銘款（異体字銘）	C地点	小野正敏皿E群
8	青花皿	中国景徳鎮窯	16世紀前半	内面･外面・見込み：花唐草	G地点	小野正敏皿B1群
9	青花碗	中国景徳鎮窯	16世紀後半	外面：岩花　　見込：花卉 内底：銘款（異体字銘・富貴佳器）	山頂	小野正敏碗E群 （饅頭心碗）
10	青花碗	中国景徳鎮窯	16世紀後半	外面：圏線　　内面：四方襷 見込：花虫　　内底：銘款（異体字銘・富貴佳器）	一括	小野正敏碗E群 （饅頭心碗）
11	青花鉢	中国景徳鎮窯	16世紀	外面：花盆　　見込：花卉（牡丹） 内底：二重圏内に「永保長春」	E地点	
12	青花碗	中国 州窯	16世紀末	外面:草花	B地点	
13	青花碗	中国 州窯	16世紀末	外面:草花	E地点	
14	青磁稜花皿	中国龍泉窯	15世紀後半	外面：無文　　内面：櫛描文	山頂	
15	白磁碗	中国	15～16世紀	外面：唐草	B地点	
16	白磁皿	中国景徳鎮窯	16世紀		一括	森田勉D群
17	四耳壺	タイ・メナムノイ窯	16世紀後半		F地点	無釉
18	天目碗	瀬戸美濃	16世紀		A地点周辺	鉄釉
19	天目碗	瀬戸美濃	16世紀			鉄釉
20	擂鉢	備前	16世紀末	内面：斜め擂目	D地点	乗岡実「近世1a～1b期」
21	擂鉢	備前	16世紀末	内面：放射状擂目と斜め擂目	A地点	乗岡実「近世1a～1b期」
22	大甕	備前	16世紀末		吉祥寺上 墓地上斜面	肩部にヘラ記号

※第130図の中の番号の地点を示す。

【433　鶴ヶ城　大野郡緒方町大字越生】

《立地》緒方町の北東方に位置し、大野川を北に臨む丘陵先端に立地する。丘陵先端は南側に大きな鞍部をもち、中央の谷部を挟み、二股に分かれる標高109mほどの独立的な丘陵である。

《現状》城山と呼称され、山林と墓地からなる。特に西尾根aの先端は近世以降の墓地形成によって、部分的に改変されている。

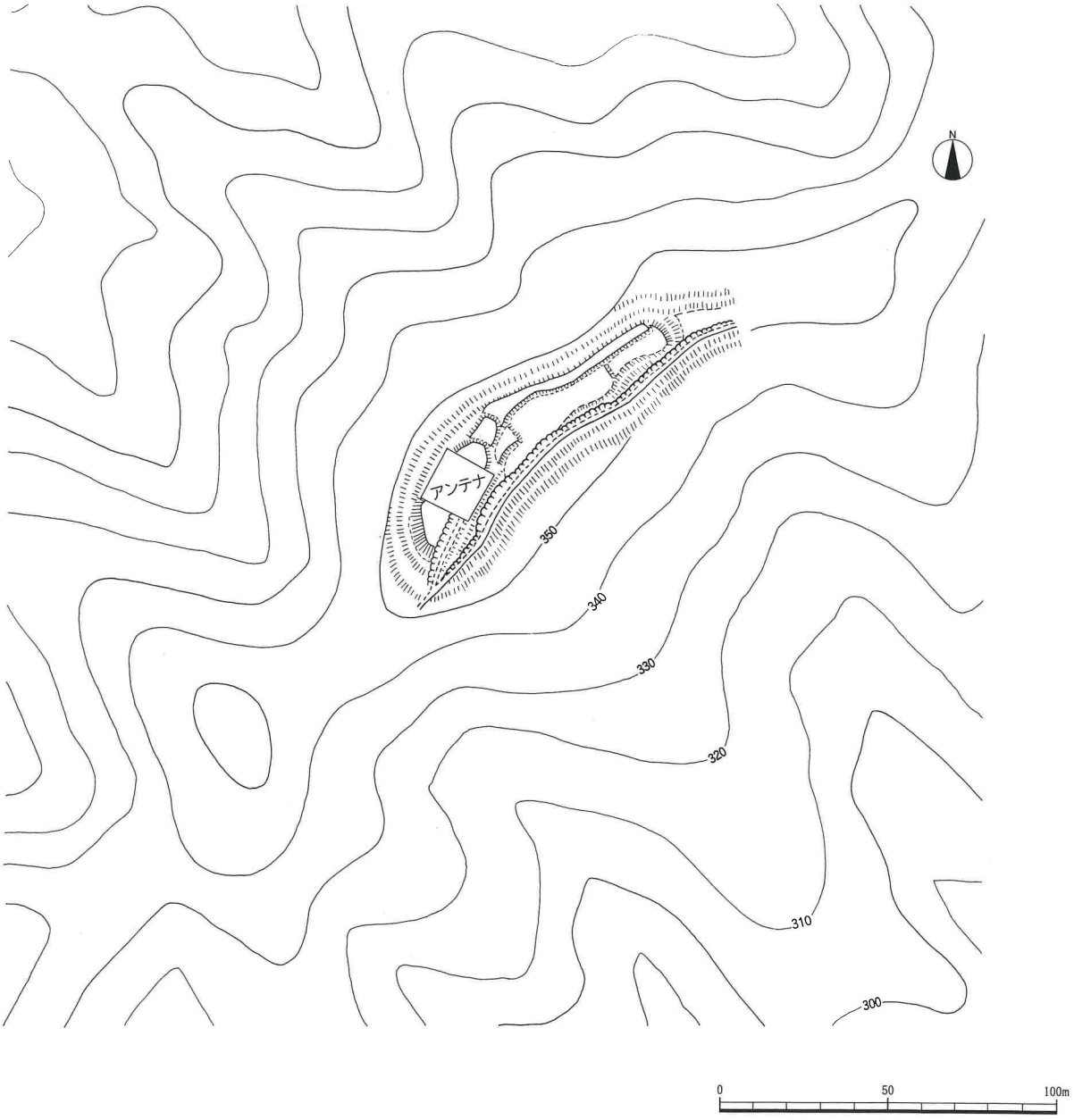
《構造》二股に分かれる丘陵上には、切岸による曲輪群が配置され、付け根（基部）に位置する曲輪は、櫓台状の方形の高まり（ⓐ）をもち、中心曲輪と考えられるが、総じて並列的な構成である。西尾根aの先端は、墓地によって部分的に削平され、改変されているものの平場が確認でき、北側に帯曲輪が廻る。東尾根bは、中央付近に尾根を遮断する土塁（ⓑ）を盛り、先端部に小規模な削平段を設ける。この城も大野川を背にする山城で、平場群の造成と切岸を中心とする縄張りである。

《歴史》豊薩戦争で、多田和泉等が拠って防戦したと伝える。

なお、緒方村史には、頂上に朱の痕跡がある石蓋（石棺）があると記され、古墳の存在が指摘されている。方形の高まりを、櫓台とするかは今後の課題である。（玉永光洋）

第133図 鶴ヶ城縄張り図（1/2,000）

【434　荒平城　大野郡緒方町大字久土地】
《立地》緒方町の南方、緒方川の支流清田川上流位置し、久土知集落の南方にそびえる標高367mの山頂に築かれる。
《現状》久尾城とも呼称され、最高所はすでに携帯電話の中継局建築により、大半が破壊され、丘陵東南側一帯についても林道によって削平を受けている。
《構造》最高所の曲輪は、遺存遺構の状況から平場の周囲を切岸で固める構造が復原される。最高所から北東には切岸による小規模な曲輪群が階段状に築かれ、続く尾根上は土塁機能を付加したような細長い平場と、東南斜面の一段低い平場を連ねる構造である。全長100mほどの規模で、最高所の曲輪を中心に、切岸による平場を群階段状に連ねる山城である。
《歴史》城主は、三代河内守重家と伝える。久土知の集落には三代家の祖重家を祀る石碑（文化５年/1808）がある。
（玉永光洋）



第134図 荒平城縄張り図（1/2,000）

【437　高尾城　大野郡緒方町大字軸丸】

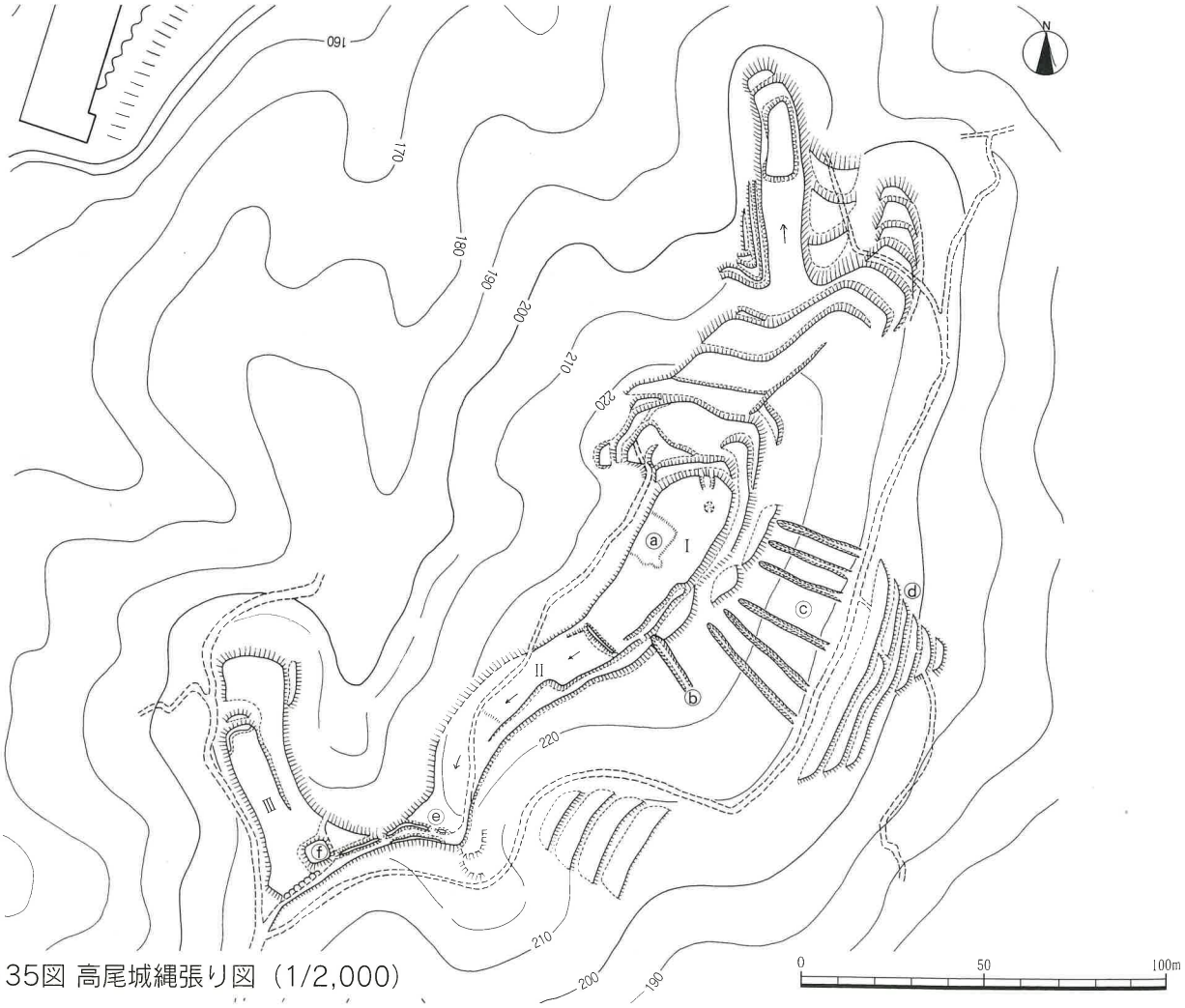
《立地》緒方町の北方、緒方町総合運動公園北東方の標高約230mの丘陵上に位置する。北側には大野川が東流し、対岸の山上には志賀城がある。丘陵頂部を中心に遺構が確認でき、全長約300mの山城である。

《現状》山林となっており、遺構の遺存状況は良好である。

《構造》大野川を背にする縄張り構造を取り、主郭と考えられる最高所の曲輪Ⅰは、南側を尾根に直行する土塁で区画し、周囲を大規模な切岸で囲う。長軸約50m、短軸約20mの細長い略長方形をなす主郭には、西の切岸に接して四角く一段高い空間(ⓐ)がある。北側の大野川方向には、帯曲輪や削平段を幾重にも設け、川筋からのルートを厳重に防備する。搦手側であろうか。また、主郭東側には、切岸下に帯曲輪を1段～2段設け、曲輪上での動きを遮断する1条の堅堀(ⓑ)を掘削している。緩傾斜部では左右の動きを封じる6条の畝状空堀群(ⓒ)とその下の6段ほどの帯曲輪群(ⓓ)で斜面部を防備する。主郭南西の曲輪Ⅱは、明確な平場の形成はなく、自然地形に近く南の方向へ緩やかに傾斜し、東南側の切岸に沿って、通路状の帯曲輪が取り付き、鞍部となる細尾根部には、逆L字状に折れる土塁があり、虎口(ⓔ)を形成する。この鞍部から分岐し北に延びる丘陵にも切岸による曲輪Ⅲがあり、曲輪Ⅱの虎口に通じる通路脇には約5mの櫓台状高まり(ⓕ)が確認される。

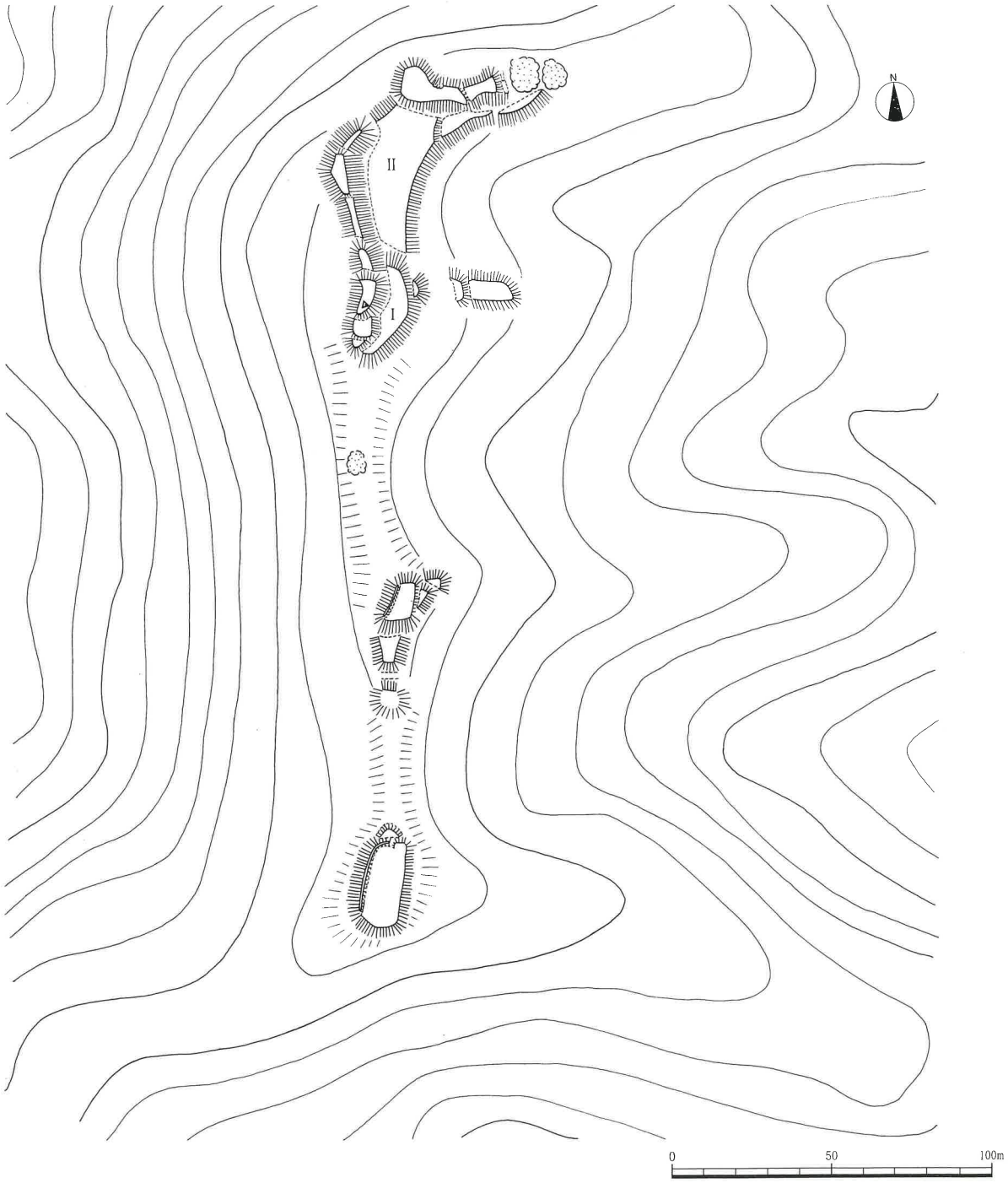
平成11年の確認調査によって、戦国時代後半期の山城であることが確認され、主郭から国内産の備前などともに中国や東南アジア産の陶磁器が出土している。特に中世大友府内町跡で見られるミャンマー産焼締陶器の出土は注目される。また、櫓台では柱穴が検出されている。本城は、主郭、虎口が明瞭で、緒方町では畝状空堀群をもつ唯一の山城である。

《歴史》『大友興廃記』巻之二十、「高尾要害之事」の條によれば、天正14年の島津氏侵入に際し、大友の家臣堀中務、軸丸大膳、鶴原因幡等により築かれ、10月27日、薩摩軍の伊集院美作守，白坂式部，伊地知民部少輔、平田新左衛門尉等を将とする兵3,000余騎の攻撃を受け，攻落されたとする。堀中務尉、阿南但馬、藤井右近、同右京、五郡民部、三代刑部らを代表格とする緒方武士200余りが籠り交戦したとある。また、「緒方荘36人の地士あり。佐伯惟定の属たり。耳忍郷(清川村北部及び緒方町野尻)の地士、これにくみす。塁を柏野・小牧・高知尾に築き、おのおの兵を分けてこれに拠る」(文書番号古文書部761)ともある。天正14年の構えについては、「大手口に馬場を通し、脇を大もがり竹の垣を結ひ、柵をふり、惣て外かはにわ土手をあげ、屏をつく。又其外に竹をもがりの垣を結び回し、弓鉄砲を矢狭間に配当し」とある。(玉永光洋)



第135図 高尾城縄張り図（1/2,000）

【441　烏岳城　大野郡緒方町大字小原、中野】
《立地》祖母傾山系に属す烏岳山頂にある。祖母傾山系によく見られる細く長くのびた尾根に立地するが、非常に急峻な地形で岩が方々で露出している。
《現状》一部植林がなされているが、ほとんどが低木の雑木林で覆われている。
《構造》本城のなかでの最高所に曲輪（Ⅰ）があるが、狭小な曲輪であり、中心部は、その下段にある比較的大きな面積を有す曲輪（Ⅱ）であると考えられる。（Ⅰ）と（Ⅱ）の曲輪の西側、北側には、削り残しと見られる巨大な土塁をもち、武者溜まり的な曲輪として機能していたのではないかと考えられる。南北に長く延びた尾根の両端は堀切によって仕切られ、そこには数段の曲輪がつく。南郡地域でよく見られる典型的な縄張り構造で、非常にコンパクトにまとまり実戦的である。強固な土塁の設置が西側に見られることから、緒方の集落側（西側）から攻めのぼる敵を意識して築城されたものと考えられる。
《歴史》天正14年、薩軍の豊後侵攻の際、梓峠を越え三重の松尾城に拠点を築いた島津家久と、肥後口より侵入した義弘隊が緒方に侵攻する。堀相模守が守っていたとされるこの烏岳城には島津義弘麾下の北郷忠虎、三久兄弟が攻撃したとされ、籠城していた堀は後に討ってでて、敗れたとされる（『北郷忠虎譜』）。（豊田徹士）



第136図 烏岳城縄張り図（1/2,000）

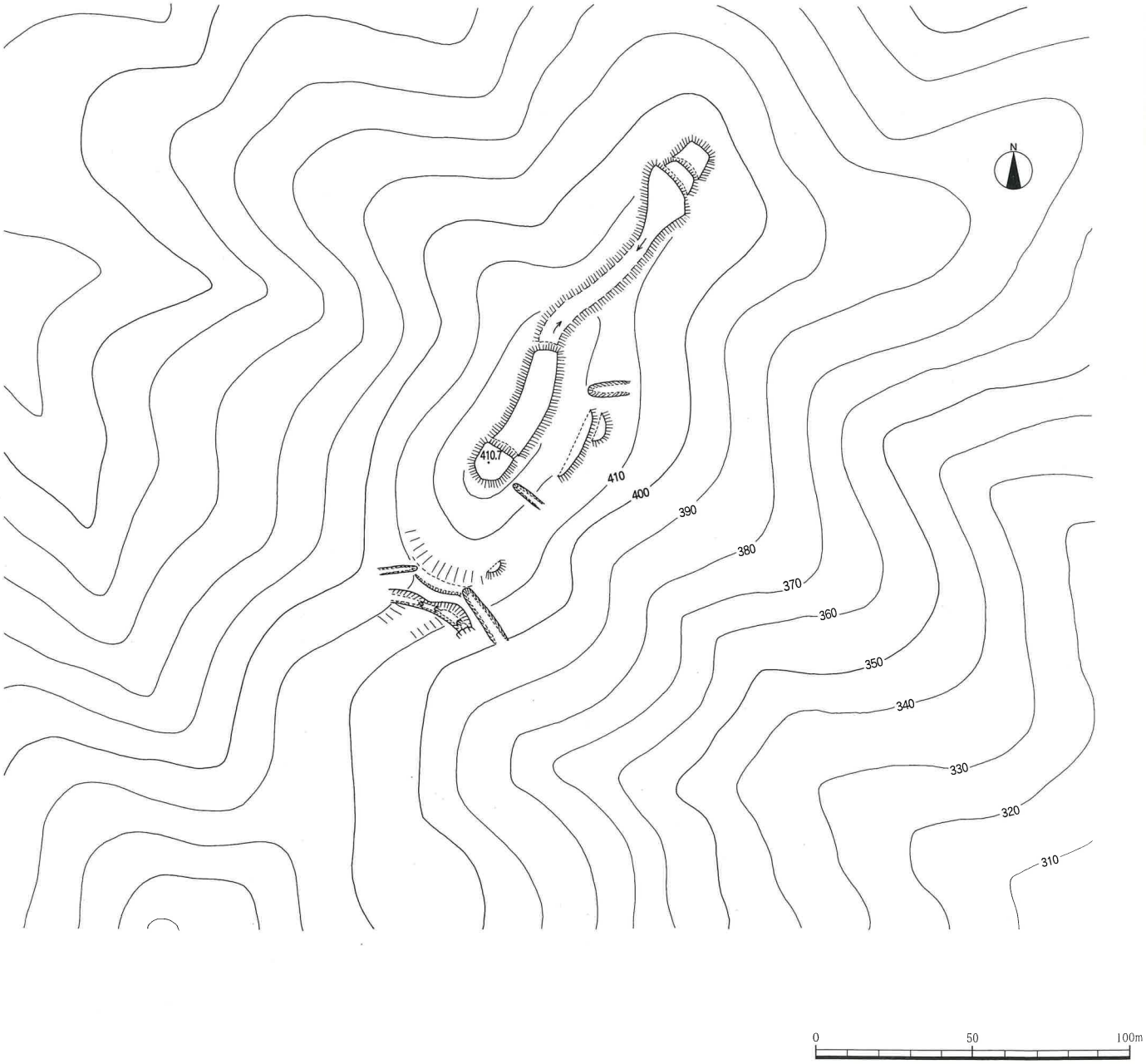
【442　加納塞　大野郡緒方町大字上冬原】

《立地》緒方町の西南方、緒方川の支流徳田川上流に位置し、標高430.7mの萩尾山の山頂に立地する。萩尾山南方の烏嶽城から連なる山岳にあり、烏嶽城―多和羅嶽城―加納塞と南北に連なる峠道上に築かれる。

《現状》山林となっており、遺存状況は良好である。

《構造》最高所（江戸時代の石祠あり）に切岸をめぐらした二段の曲輪を設け、東の斜面部に2条の堅堀とその間に小規模な曲輪を配している。両側が急峻となる北側の細尾根を介して、その北端にも切岸で固めた曲輪と前面に二段の削平段を設ける。南側の鞍部（比高差約20m）には中央に土塁を盛った2条の大規模な堀切とそれに連動させた堅堀が両側に掘られ、峠道（尾根）を遮断する。大規模な堀切やそれに連動する堅堀の存在などやや新しい技術が見受けられ、南側の多和羅嶽城・烏嶽城へ通じる峠道のルートを遮断する。

《歴史》この城についての記録・伝承は不明である。（玉永光洋）



第137図 加納塞縄張り図（1/2,000）

【448　小牧城　大野郡緒方町大字野尻】

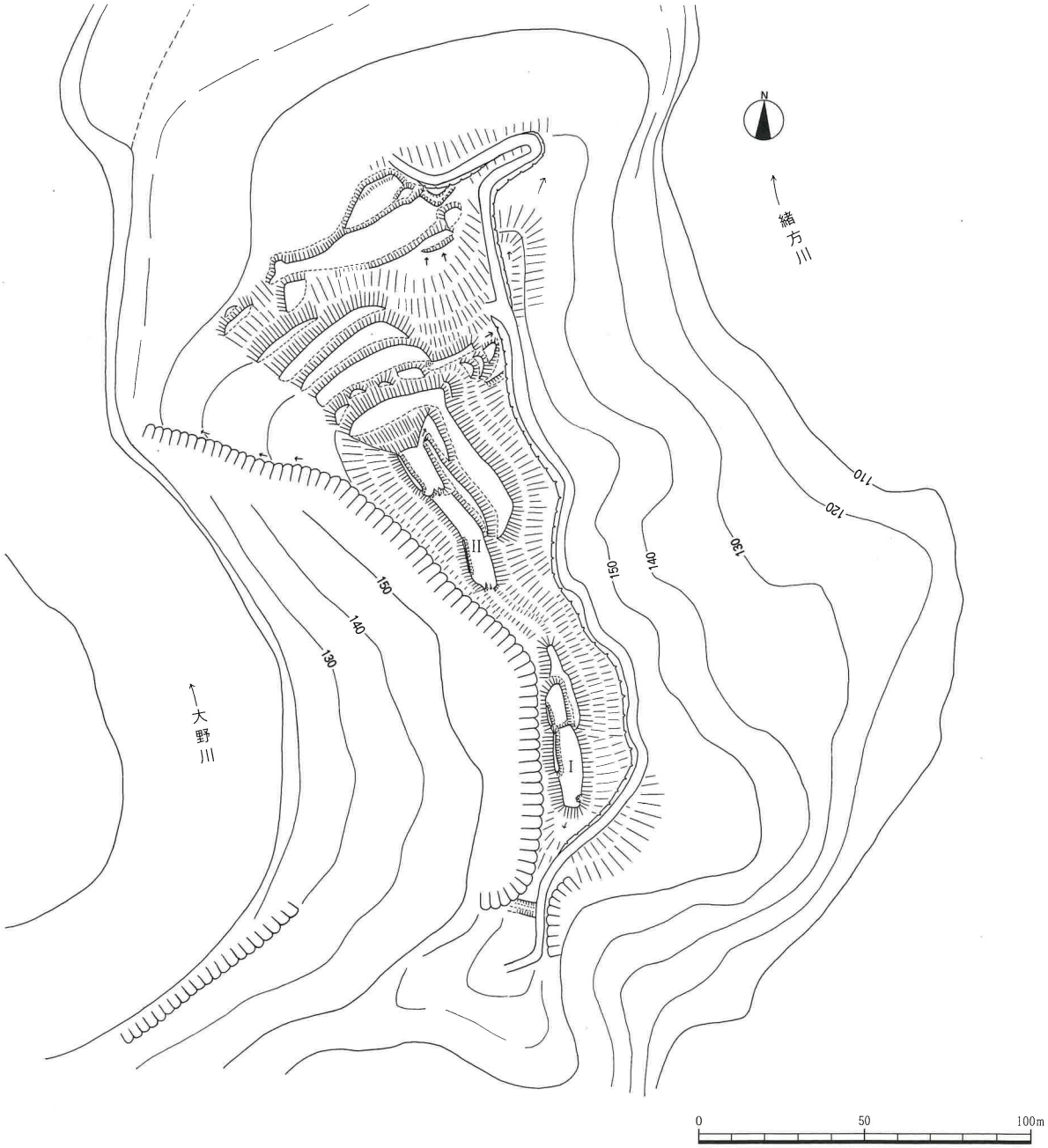
《立地》大野川本流と、その支流である緒方川が合流する地点の、川に挟まれた丘陵上に立地する。三方が川で、唯一南から丘陵の尾根がつながる。標高は180mで、川からの比高差は約60m、最も近い定付の集落との比高差は約40mである。

《現状》現在雑木林、及び植林であり、残存状況は比較的良い。しかし、集落に近いこともあり、椎茸栽培などでの人の出入りが考えられるので、細かな部分での改変はありうる。また、作業道が通り、堀切の一部や尾根先端部などを破壊している。

《構造》二つのピークにそれぞれ西側にのみ低平な土塁を持つ2段の曲輪が作られる。南側のピークの曲輪（Ⅰ）は幅5～6mで長さ37mで、北側のピーク（Ⅱ）に向けて腰曲輪を設けている。Ⅱの曲輪は幅5～7m、長さ50mで、北と東側に逆L字状の帯曲輪を回し、さらに北西に伸びる尾根には階段状に曲輪群を配している。南側につながる尾根については、最も狭まった部分を掘り切る。

『豊後国古城蹟并海陸旅程』には、「小牧切寄山」にあり、「南北五拾間、東西四間半、又三間の所も有」とある。また、入り口は南にあるとする。

《歴史》大友家文書録や島津氏側の諸記録によると、天正15年に島津側に占拠され、甲斐右京亮、丸田強（郷）兵衛尉を始めとした薩兵が「小牧塁」に入った、という。（小柳和宏）



第138図 小牧城縄張り図（1/2,000）

【449　小牟礼城　大野郡朝地町大字市万田字小群】

《立地》大野川の支流平井川は、大野町と朝地町の境付近で市万田川と酒井寺川に分岐する。二つの川によって削られた断崖上に小牟礼城は位置する。市万田川上流には中世の国人一万田氏の本拠であった一万田・池田地区などの盆地がある。酒井寺川上流には大野町西部の盆地がある。両地域とも神角寺の麓に位置する。小牟礼城の位置は大野荘西部を構成する両河川の結節点であるとともに、大野郡北部から直入郡へ通じる道が川を渡る地点でもあった。この地は、中世後期に一万田氏が進出し城郭を構え、近世初頭には中川氏が支城を設定するにふさわしい立地条件と言える。

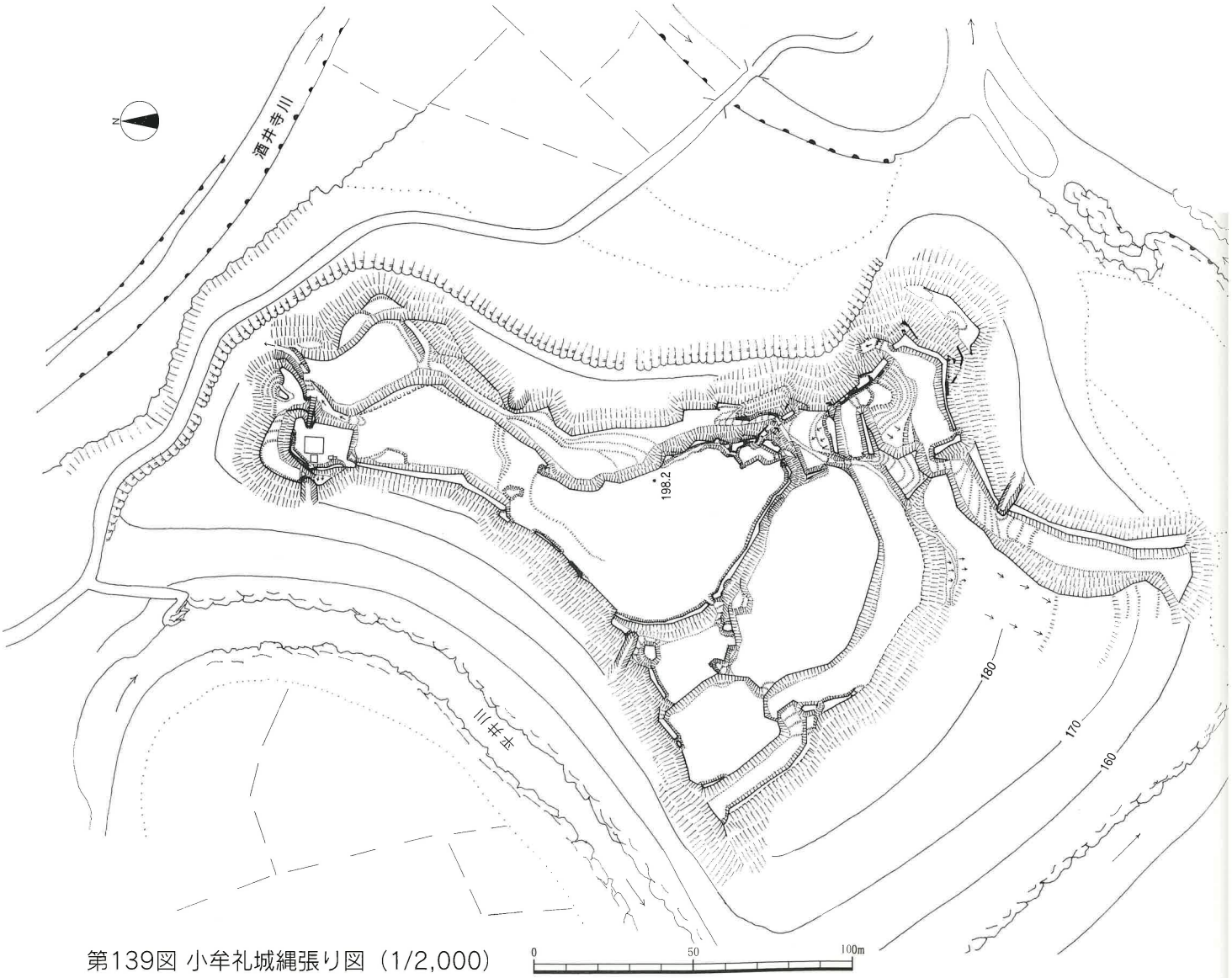
《現状》断崖であったこともあり、城郭部分はほぼ良好に残されている。主郭部は神社となったため北側から参道が通された際に通路部分が削られた程度に留まっている。畑・植林などの痕跡が残る。

《構造》文献史料的には戦国期の一万田氏による在城が想定されるが、現状の城郭遺構は明らかに豊臣政権進出以降の豊臣系・近世城郭の様相を示している。現時点では文禄年間以降の岡藩中川氏統治時代の記録は確認されていないが、元和の破城令までは岡藩領の支城として機能したものとみられる。

山上には広大な主郭部があり、南に面して曲輪が連なる。曲輪には土塁が配され、中には2m以上の巨大な土塁が残されている。主郭部の北側には神社地となっている高台があり、横堀が巡らされている。この箇所にはスロープ状の虎口が備えられており、主郭部の中でも最も奥まった「天守曲輪」のような機能を有する。この曲輪を基点に南に向けて横堀を横断して幾重にも枡形虎口・馬出しが設定されている。最初の虎口は主郭部に食い込む内枡形虎口の様相を示すが、そこからは外枡形虎口・馬出しが細かく連続する複雑な虎口プランを生み出している。虎口周辺には石垣が築かれ何箇所か横矢が設定されている。虎口の開口部からは斜面を横断する巨大空堀が川まで続く。

このように、小牟礼城の縄張りは周囲の中世城郭の縄張りとは全く異なっており、虎口の形状などは岡城等近世城郭と同等の技術を持つ。文禄年間以降に中川氏の支城として整備されたものと考えられる。

《歴史》小牟礼城に関する文献史料は極めて少ない。後世の編纂史料「豊後古城蹟並海陸路程」の小牟礼城の項には「いニしへ百姓等取あかり申場の跡也」とある。（中西義昌）



第139図 小牟礼城縄張り図（1/2,000）

【453　一万田館　大野郡朝地町大字池田字館】

《立地》狭い谷が複雑に入り込み、谷水田が小さな丘陵を囲むような地形にあって、「館」は比較的広い台地の上にある。台地は南北約500m、東西100～200mほどで、その内中心となる部分は南北200m、東西150mの長方形を呈している。標高は278mで、周囲は50m近い比高差で谷水田が展開している。

《現状》全面畑地として利用されており、一部について土塁などが残存している。

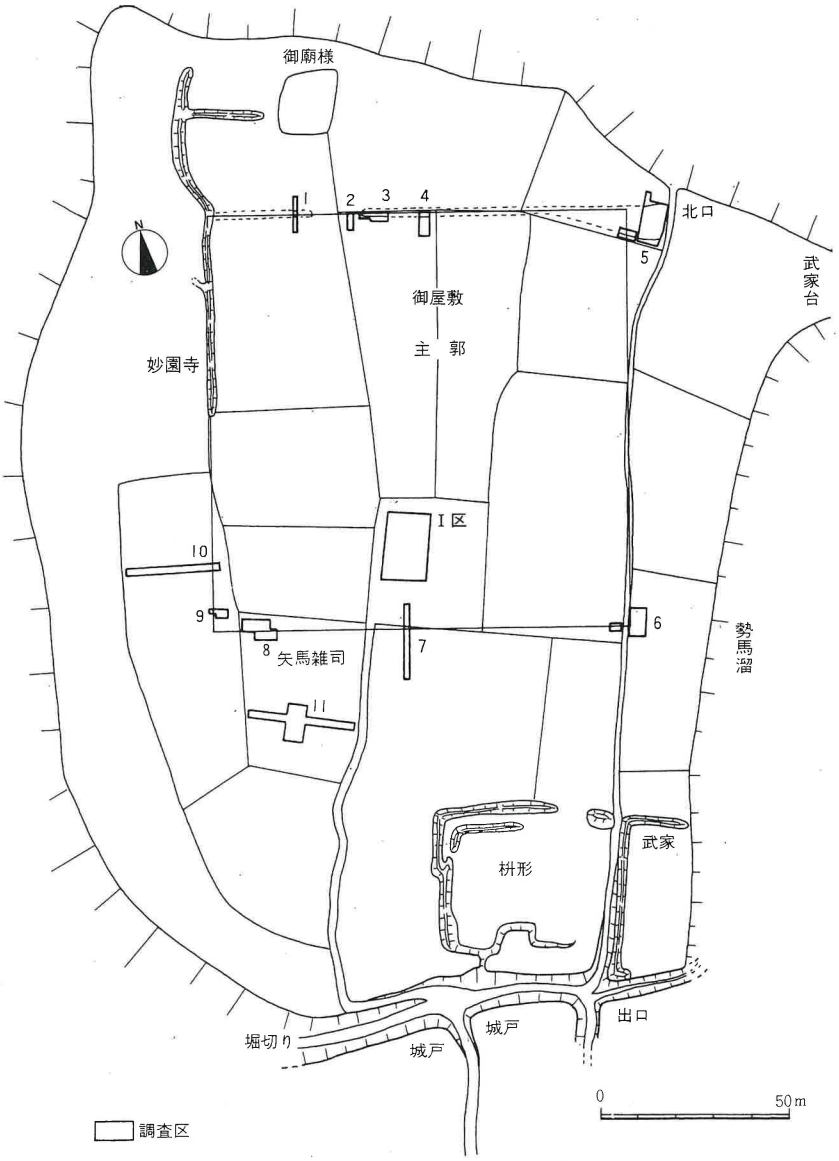
《構造》現状で残されている遺構と、過去発掘調査された成果を合わせてみると、館の基本的な構造が浮かんでくる。それは、長方形の台地の北側に方一町程度の方形の区画（通称「御屋敷」）を設け、その周囲には幅50m程度に帯状の平場を巡らせ、さらに南端には虎口と考えられる方半町程度の溝で囲まれた方形の区画を設けている。そして、その南側には通路を兼ねた堀切が一条入れられている。

主郭とも呼べる方一町の区画は、北は幅1.3mで深さ0.5mの溝で、西は土塁でそれぞれ画されており、東と南は柵列であったと考えられている。また、中央やや南に設定されたグリッドからは掘立柱建物６棟、柵列１、土壙２が検出されている。

この台地の上には地名が残されており、中心部の「御屋敷」の他に「矢馬雑司」、「勢馬溜」、「武家」、「武家台」、「城戸」などがある。

時期は、出土遺物により15世紀後半から16世紀後半に位置づけられる。

《歴史》小字「館（たち）」にあるこの館跡は、初代大友能直の六男景直を祖とする一万田氏の館の跡で、時期的には室町時代中頃から戦国期のものである。この館自身、かなりの比高差があり立地的には十分山城の機能を果たし得たが、平坦面が広い事もあってコンパクトに守る事ができなかったためか、一万田氏は詰め城としてさらに標高の高い山岳部に鳥屋城を築いている。（小柳和宏）



第140図 一万田館測量図（1/2,000）　〈『朝地地区遺跡群発掘調査報告書II』（朝地町教育委員会、1994年）より転載〉

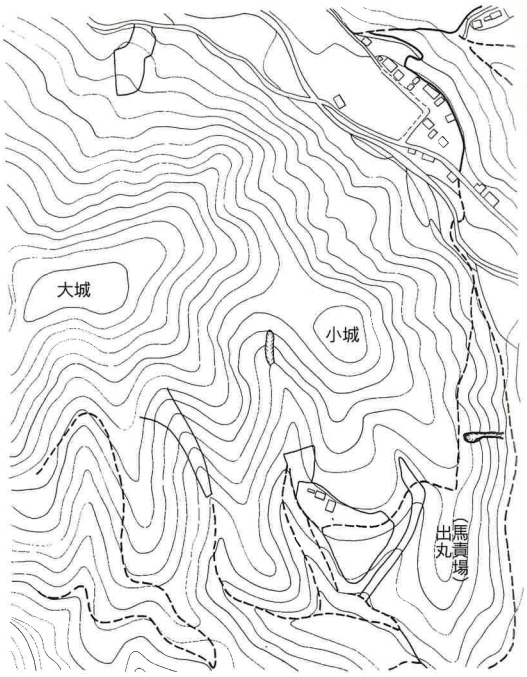
【461　高城（大城、小城）　大野郡大野町大字酒井寺】

《立地》標高767mの神角寺（城郭456）から尾根伝いに東南東方向に直線で約2.3kmほど（比高差にして約300mほど）下った山岳の2ヶ所の頂部に位置する。「大城」は標高約464m、「小城」は同約380mで、一番近い麓の集落との比高差は大城で約160m、小城で約80mある。麓の集落には、城主の子孫という「渋谷」姓の家がある。

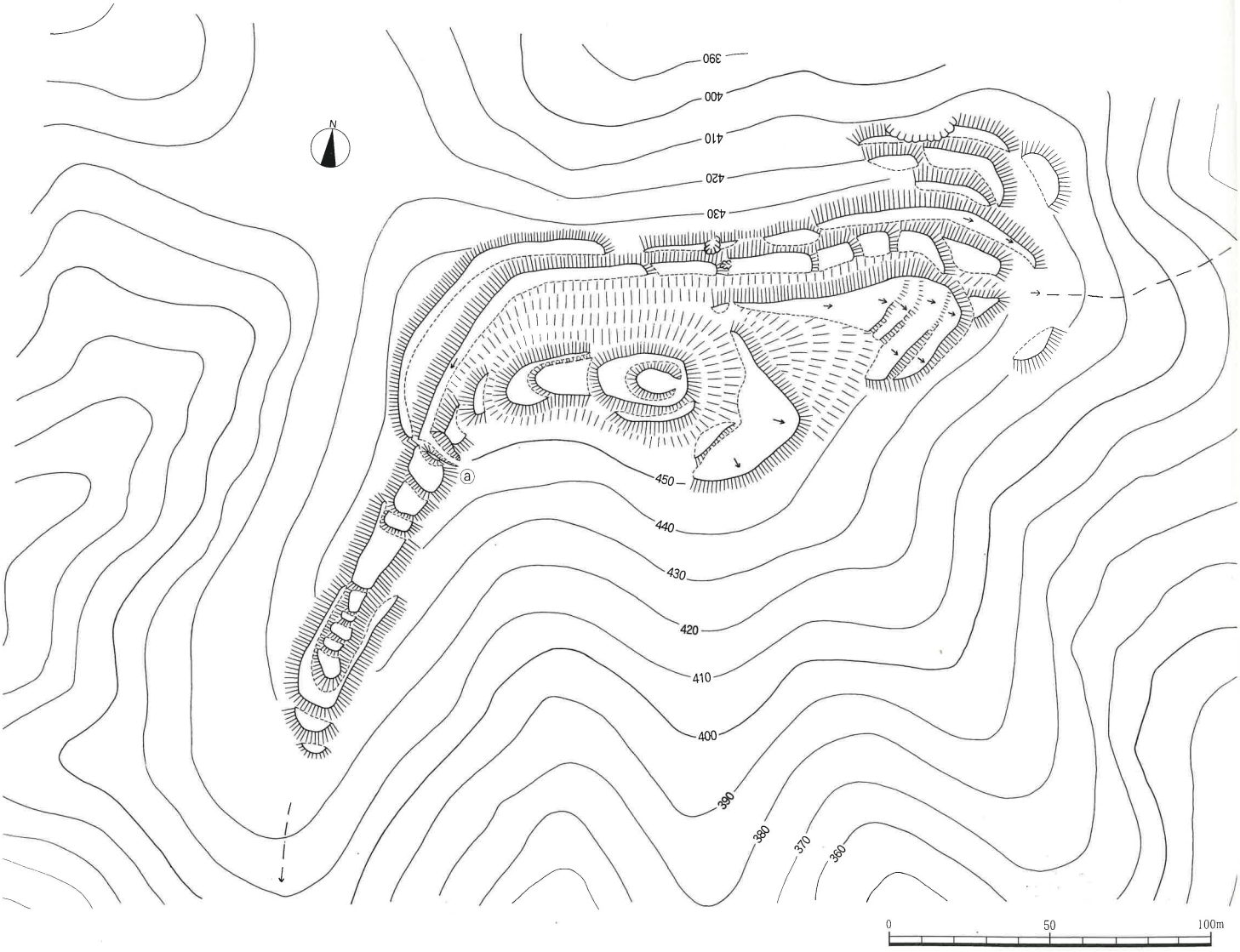
《現状》一部を除き植林で、保存状況は良好である。大城の主郭を中心とした部分は笹が生い茂り、やや見通しが利きづらい。

《構造》「大城」は基本的に曲輪の造成に終始した城作りで、尾根づたいに連続する小曲輪と北斜面を巡る帯曲輪が特徴である。丁寧に造成された切岸面には目を見張る物があるが、特に北側斜面にある切岸は精緻な作りで、それぞれの切岸面が平面的にも断面的にも直線的に処理されている。頂上部には主郭に相当する高まりがありそこから断崖である北斜面を除き曲輪を築いている。西側斜面は細い尾根筋であるため、小規模曲輪と堀切で構成され、東側は比較的大規模な曲輪で構成される。また、南側に2段ある帯曲輪は、東側の尾根に回り込んだところで堀切ⓐの堀底と連結することから、東西にのびる尾根筋を結ぶ通用路としても捉えることができる。

小城は、10m四方ほどの主郭の回りを幅広の帯曲輪が一周し、大城の方角の尾根鞍部に向けて2段の腰曲輪を設ける。

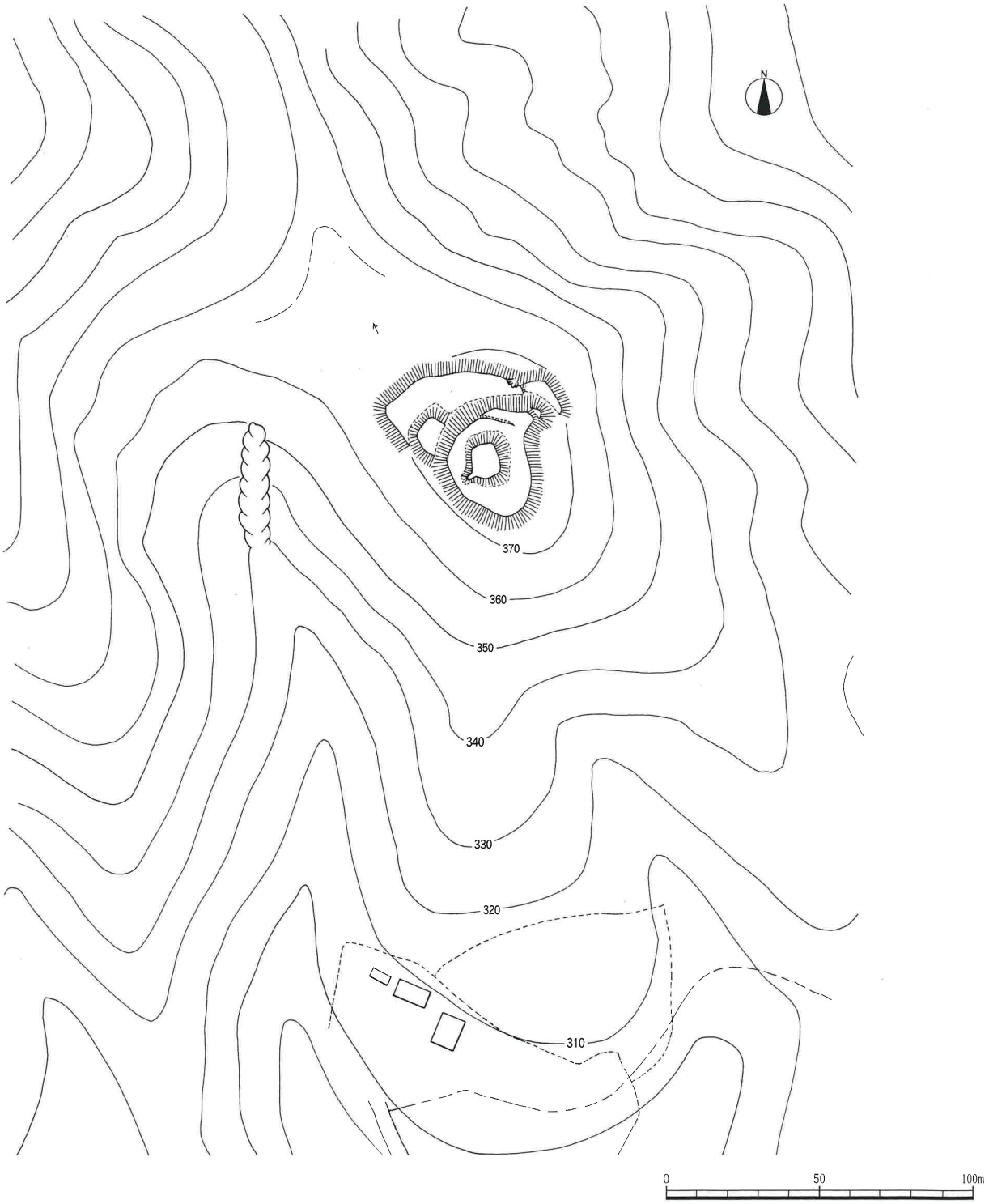


第141図 高城位置関係図



第142図 高城（大城）縄張り図（1/2,000）

《歴史》一説には、渋谷重泰氏の居城とされ、建久年間、神角寺戦の際に大友氏に抗して滅んだとされている。たしかに尾根つたいに神角寺へ通じており、大神一族の反大友拠点の一つなっていた可能性は否定できないが、この地が後に大友氏を支える有力氏族「戸次氏」の本領となっていることと、整然と整備された曲輪群の状況などから南北朝期の城としてそのまま捉える難しく戦国期に大きな改変を受けていると考えられる。「後鳥羽帝の頃、渋谷重泰の居城であったが、大野泰基と共に大友氏に抗して滅んだ」（『日本城郭体系 16』）という。しかし、鎌倉時代初頭まで遡るものではなく、伝承が付加されたものであろう。（豊田徹士・小柳和宏）



第143図 高城（小城）縄張り図（1/2,000）

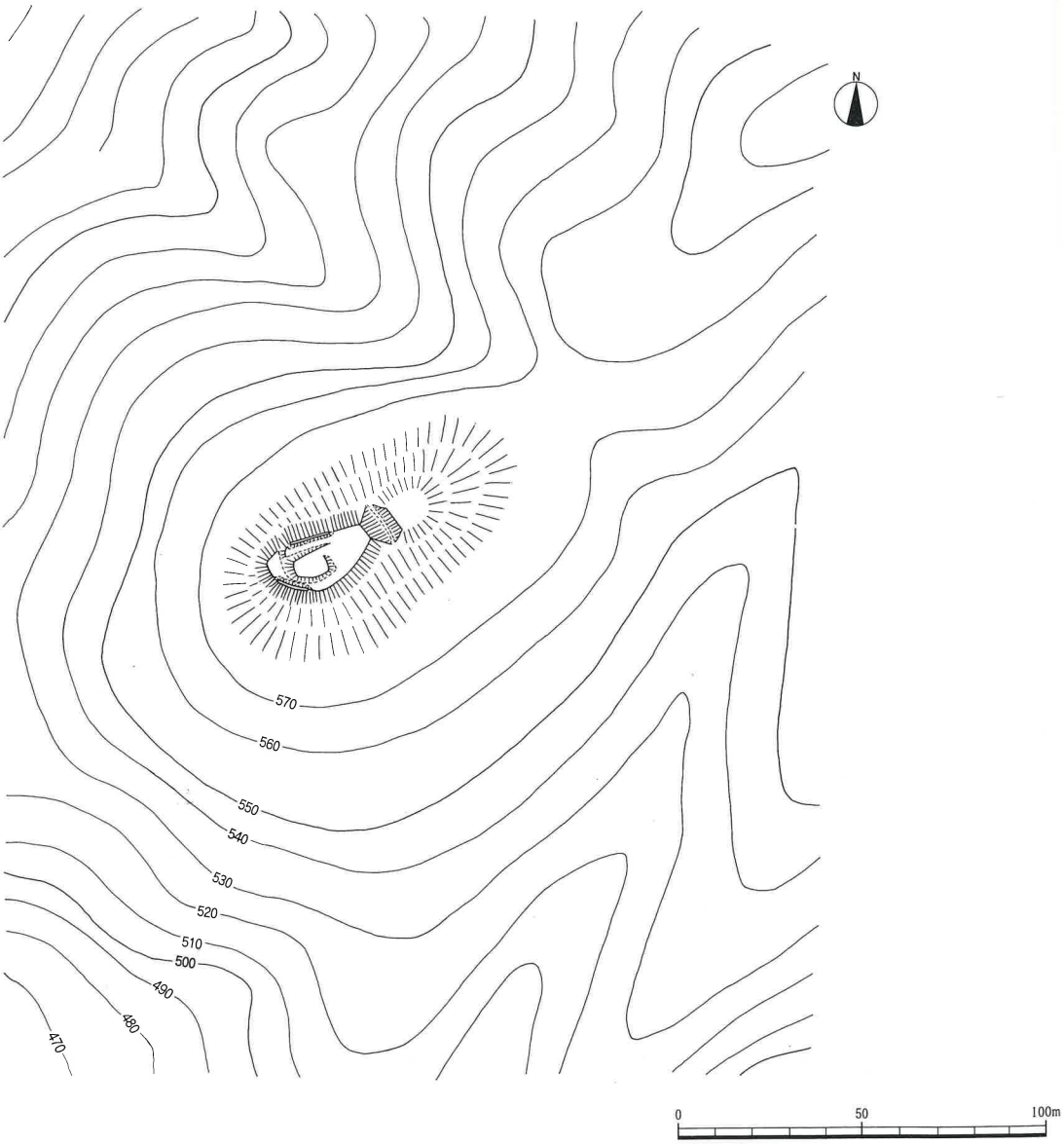
【464　田附城　大野郡大野町大字中土師】

《立地》大野郡から府内に抜ける最短ルートである現県道大分大野線の通る谷筋を見下ろす御座ヶ岳から南に延びる丘陵の先端部に立地する。標高は590mで、安藤の集落との比高差は130～180m近い。

《現状》雑木林及び茅場で、遺構は良好に残されている。

《構造》北東から伸びる尾根の先端部を掘り切り、南北10～15m、東西26mほどの城域を確保する。平場の中央が南北5m、東西7mほど高く、その西側は横堀状の帯曲輪となる。

《歴史》大友能直の臣安藤左近将監常宗の居城と言われるが、もちろんそこまで（鎌倉時代初頭）遡るものではない。（小柳和宏）



第144図 田附城縄張り図（1/2,000）

【472　上門手遺跡　大野郡千歳村大字下山】

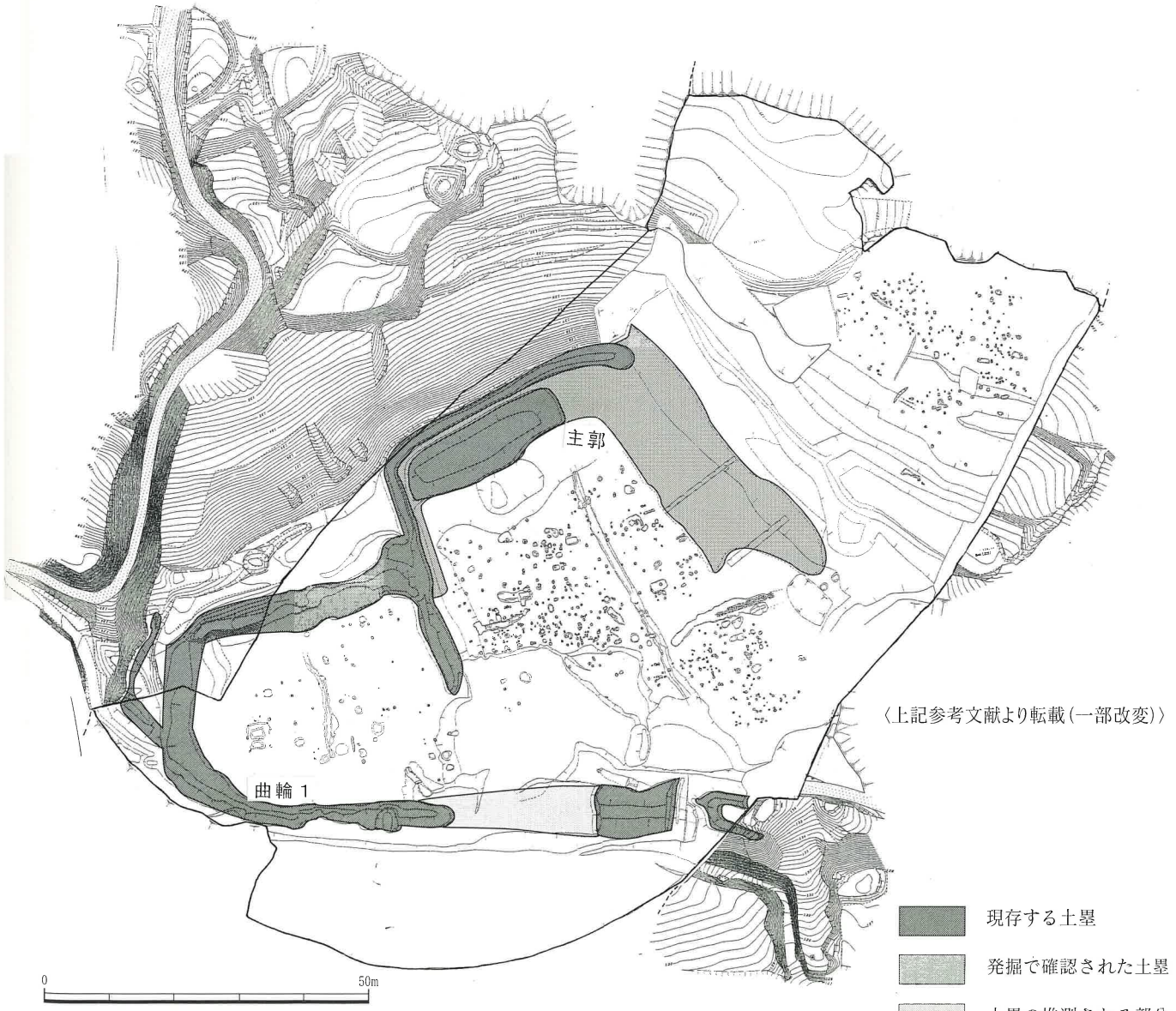
《立地》上門手遺跡は、茜川とその南を東流する大野川に挟まれた、東西に長く延びる凝灰岩から成る火山灰台地から分岐した標高約140mの丘陵の先端に立地する。

《現状》台地上には昭和まで民家があり、その他に杉林、竹林、及び畑であった。この遺跡は、調査に入る以前は周知されておらず、県道三重新殿線道路改良工事に伴って発見され、ほぼ全面が発掘調査されたものである。

《構造》上門手遺跡は、県内では発掘例の少ない「館城」である。丘陵が続く城の北側は堀切で遮断することで独立丘陵状にし、土塁と切岸で館の周囲を防御する。発掘調査の成果より、城内部の削平地は主郭(約3,300㎡)と曲輪1(約1,600㎡)の大きく2つに分割することができる。城の虎口は南に配置し、屈曲させながら城内に至る。主な検出遺構は掘立柱建物跡20棟、地下式土坑3基、主郭内を区画する溝2条、土坑などである。遺構について、掘立柱建物跡と土塁から最低3時期ほどの変遷が考えられる。遺物は、中国産貿易陶磁器と備前焼、京都系土師器を中心とし、在地の土師器はほとんど見られない。出土遺物などから城としての上門手遺跡の開始は上限で15世紀後葉～16世紀前葉を考え、少なくともて3時期ほどの変遷を経て、16世紀末葉には廃絶する。

《歴史》上門手遺跡に関わると思われる直接的な文献史料はない。しかしフロイスの『日本史』によると、井田郷には宗麟の「奥方イザベルの姉妹と結婚している（中略）ソウエキ」という領主がおり、天正14（1586）年の島津氏の豊後侵攻により殺害され、城や屋敷などは焼かれたとある。「ソウエキ」と上門手遺跡との関係は不明であるが、その上門手遺跡の廃絶状況（検出面直上に焼土が堆積）などから、天正14年の島津氏の侵攻との関連が指摘できる。（五十川雄也）

参考文献『上門手遺跡』大分県教育委員会 2004



第145図 上門手遺跡測量図（1/1,000）

【473　石五道原遺跡　大野郡千歳村大字高添】

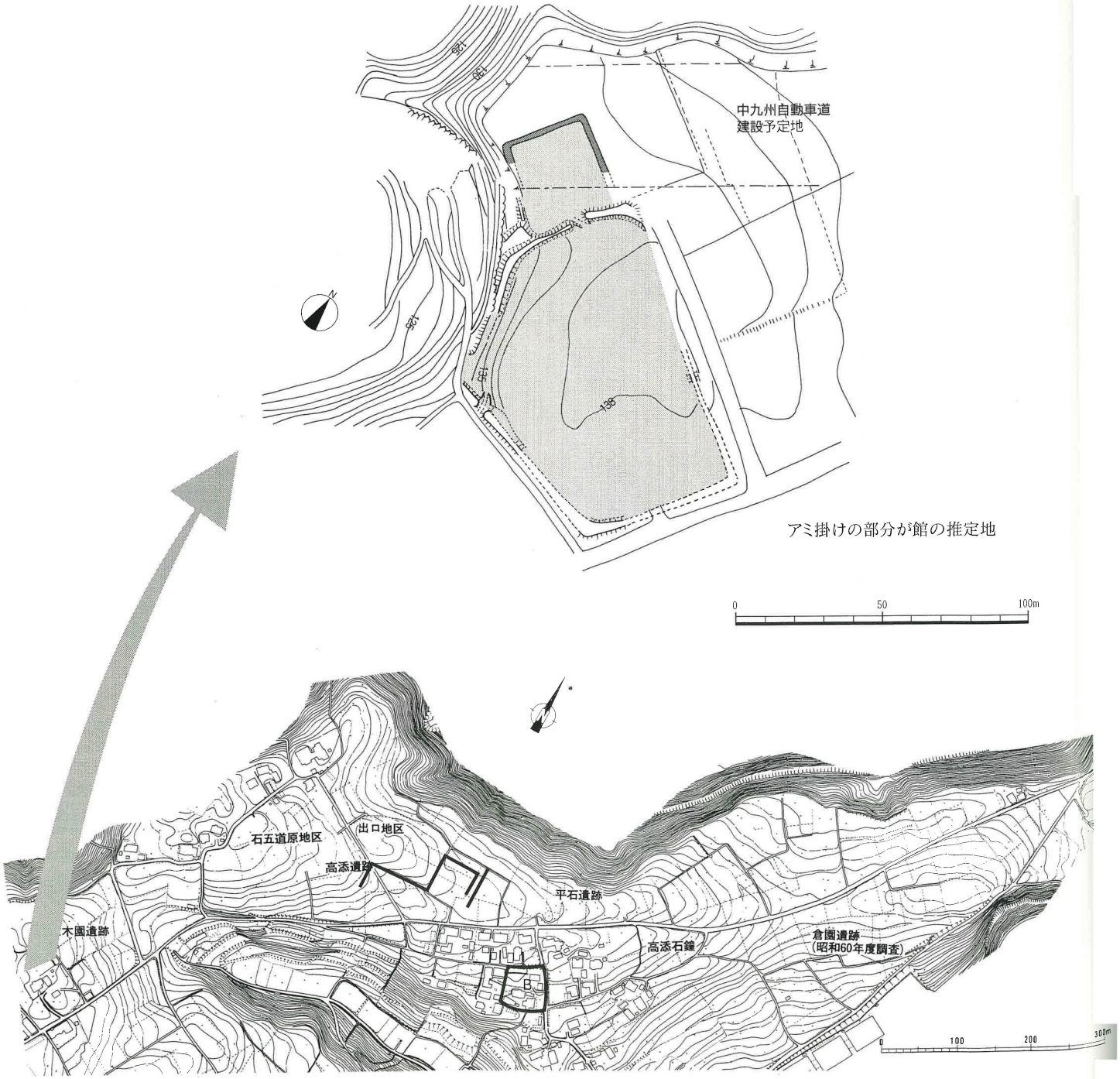
《立地》大野川支流の茜川と柴北川に挟まれた台地上にある。標高は130m程で、台地上の平坦面は東西約1km、南北200mに及ぶ。遺跡があるのはその内西側半分ほどである。

《現状》現在、家及び畑地となっており、数年前から道路工事に伴って発掘調査されている。

《構造》図示した遺跡は現状で確認できるもので、近世に庄屋屋敷であった。東西60m、南北100mの略方形に土塁が廻っていたと思われ(A部分)、北に一辺30m程の方形に溝で囲まれた区画が付設する。この小区画の一部は発掘調査され、16世紀の遺物が出土した事から、大型の区画も少なくとも16世紀には存在したと考えられる。

この遺跡以外にも、この台地上では畑地部分で発掘調査によって類似する方形の区画溝が見つかっており(図中の太線部分)、また現集落域の中にも方形に土塁が廻っていた可能性のある区画(B部分)があり、この大地上には連続、あるいは単独の居住区が広範に形成されていたと考えられる。

《歴史》中世は「井田郷」に属する地域で、その中核施設の一つが上門手遺跡と考えられるが、一方この台地上には溝で囲まれた区画が複数存在しており、井田郷の有力層の居住区と考えられる。(小柳和宏)



第146図 石五道原遺跡の位置（1/8,000）と館跡図（1/2,000）

【477　高旗城　大野郡犬飼町大字高津原】

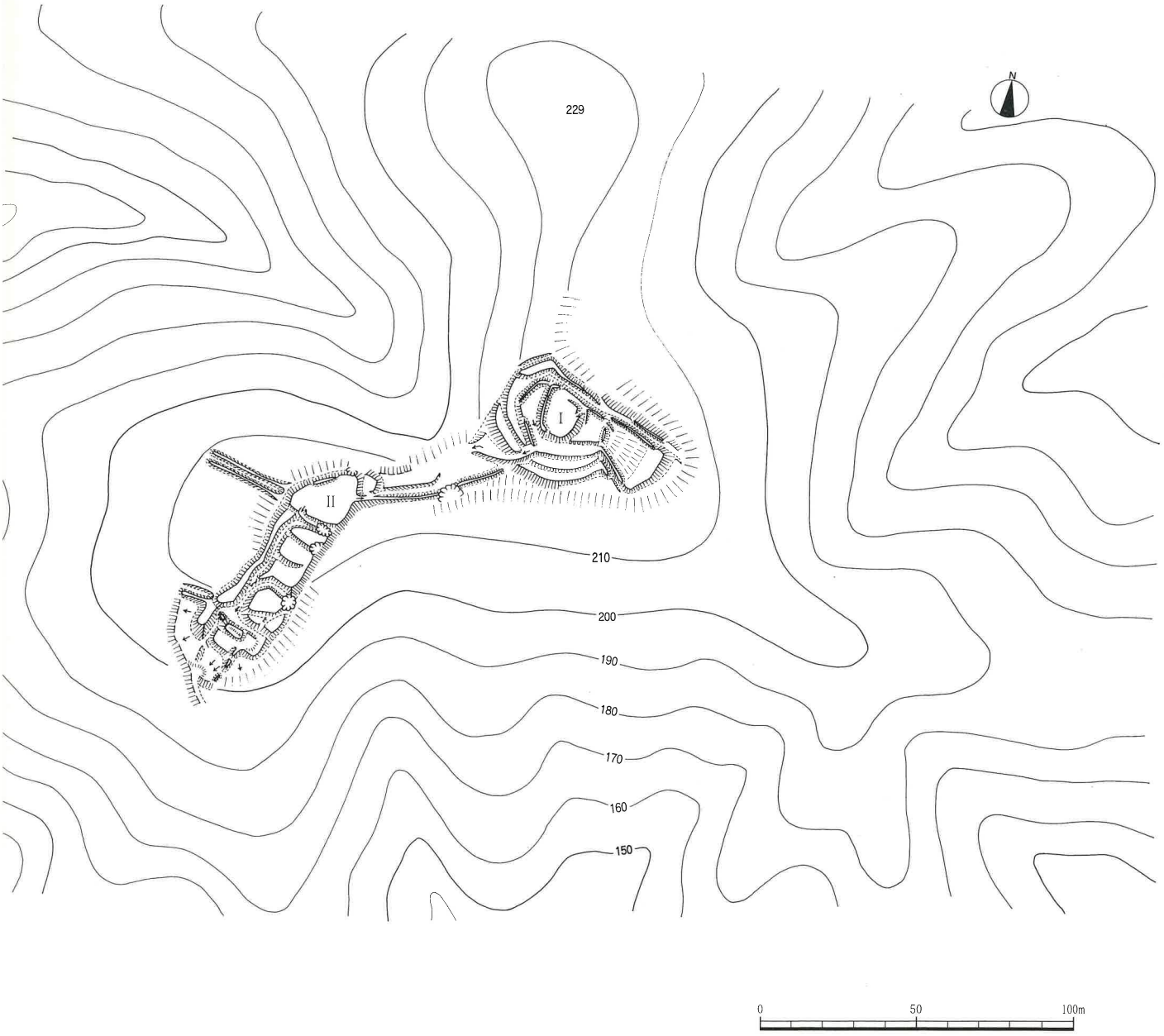
《立地》標高230mのほぼ独立した山の頂上にある3ヶ所のピークの内、南側に面する2ヶ所に遺構がある。麓との比高差は130mほどである。、

《現状》雑木林、および植林で遺構の残存状況は良好に見えるが、西側の遺構群についてはいたるところで細かな破壊が見られる。植林に伴う作業道と堀との区別が付きづらい部分がある。

《構造》東側の曲輪群は、北から伸びる尾根を二重に掘り切り、内側の堀切はさらに東西に回りこみ横堀状の帯曲輪となる。南と西の斜面にはさらに数段の帯曲輪を巡らせる。主郭（Ⅰ）は、南北13m、東西10mで、西側に低い土塁を持ち、さらにその西と東に一段の腰曲輪を持つ。南東に伸びる尾根は、堀切から伸びる竪堀と主郭南側の帯曲輪の東端から下る竪堀で挟み込み、最下段に曲輪を設ける。西側の曲輪群に向けた虎口は、帯曲輪の間を斜めに下るもので、南側に土塁を持つ尾根鞍部に下りた後、再び坂を上り西側の主郭に至る。

西側の曲輪群は、北側の一部分に低い土塁を持つ主郭（Ⅱ）から、南西に伸びる尾根上に階段状の曲輪を配し、その西側には通路を兼ねた竪堀と土塁を下らせる。その土塁と竪堀の終端付近はやや撹乱があり不明瞭となるが、ここに城の虎口が形成されていたと考えられる。また、土塁の両端付近の西側斜面には土塁を伴った竪堀が入れられている。

《歴史》記録、文書などに記載は無く、伝承も無い。（小柳和宏）



第147図 高旗城縄張り図（1/2,000）

【487　相ヶ鶴城　直入郡久住町大字白丹】

《立地》竹田の盆地に注ぐ稲葉川が南に大きく蛇行し小さな沖積地を造るが、その沖積地を見下ろす山の山頂付近に立地する。阿蘇の溶結凝灰岩は河川で深くえぐられ、いたるところで急崖を作るが、この相ヶ鶴城のある山も、南北70m、東西150m近くのなだらかな山塊を残し、回りはほぼ垂直の崖となる。頂上で標高494.94m、崖際で約450m、麓の沖積地までの比高差は頂上部から約70mある。

《現状》全体が雑木林と植林である。一部で台風による風倒木があるが、概ね良好に残されている。しかし、里山として人の出入りが頻繁にあったはずで、細部では旧状を留めない部分もある。

《構造》北から続く唯一の尾根筋を掘り切り、急崖で囲まれた城域を確保する。城は、最も標高の高い部分が主郭（Ⅰ）で、そこから北と西の崖線上に沿って土塁を伸ばす。北の崖線に沿った土塁は途中で途切れるが、土塁南側には階段状に曲輪が配される。さらに南向き斜面には小さな腰曲輪が点々と置かれ、その下には東西方向に90mで、幅5～7mの細長い曲輪（Ⅱ）や、さらに数段の面積の広い曲輪を雛壇状に配している。それらの曲輪の西側半分には低平な土塁が見られる。

虎口は、崖の間を唯一登って来ることのできるaの部分で、ここから坂を登って城内に入った後、北東隅部（b）を回り北の崖線に沿った土塁の内側を通って主郭に至ると考えられる。

《歴史》島津義珎書状（文書番号記録部一の25）には「白刃（丹？）之内候之哉相賀　并一両所岡より致破却候」とあり、天正15（1587）年には破却されたことが窺われる。（小柳和宏）

第148図 相ヶ鶴城縄張り図（1/2,000）

【488　南山城　直入郡久住町大字白丹】
《立地》竹田盆地に注ぐ稲葉川の上流で、肥後との国境から約1.4kmほど東に入ったところにある、頂部が台地上になった山の頂と八手状に広がる尾根に遺構はある。
《現状》中央部は3棟の鶏舎によって大きく改変を受けており、旧状を復元するのが困難である。鶏舎以外の部分も後世の畑などでかなり壊されており、比較的旧状を留めるのは南西に伸びる尾根部や、鶏舎北側の塁線などである。鶏舎以外の部分は雑木、植林、草地で、一部畑地となっている。
《構造》前記のように旧状が失われている部分が多いが、全体の大まかな縄張りは復元できる。図149のようにａからｄの5つの地区に分けて考えてみると、ａは北東角から北に延びる小さな尾根を二条の堀切で遮断し、北側の塁線に土塁を設ける。平坦面は鶏舎で破壊されている。ｂはａとの間を土塁で画し、北西に伸びる尾根部は途中で土塁を設け、さらに鞍部には堀切を入れ遮断する。大きくは二段の曲輪があり、上位の曲輪（ア）から下位の曲輪（イ）に対して土塁が伸びる。ｃはａより2m近く下がり、5つの広い平場を持つ。南東部は東側の山との間を堀切（道）で遮断する。ｄは標高608.4mの曲輪ウが最も高く、南から西側にかけては堀切と、それに続く帯曲輪オがある。堀切は南側斜面に貫通しておらず、堀切東側の一段高い曲輪エの南側に延びる帯曲輪オに繋がっている。堀切の外側（南西側）には逆Ｌ字状の幅の広い土塁があるものの、前記した帯曲輪を遮断するには至らず、曲輪カとオを繋ぐ虎口となっている。曲輪カは更に一段の切岸を設け、曲輪キに至る。曲輪キは北面にのみ低平な土塁を設け、さらに西端部では落差のある切岸を設け、一段の曲輪を配している。逆に土塁内側（東側）は、ピーク部より北東に向けて数段の平場があり、ｅに面する最下段が最も広いが（ウ）、ここは畑地として大きく削られている。ｅは、谷部にあたり、大きくは6段の曲輪状の平場が認められるが、古く畑地であった可能性もあり、曲輪かどうかの判断はできなかった。
また、城道と考えられる道がｆ地点において確認できる。現在家がある谷の一番奥まった所から、小さなクランクを持ち北に約40m延びたところで東西に延びる堀割り状の道に突き当たる。右（東）側に行くとすぐ山にぶつかり左折し、斜面の裾を堀状に削り込みながらｃの堀切に繋がる。左（西）側に行くとｅの谷の南側に取り付き、現在の道と重なるが、本来はｄの曲輪アから東に下る尾根に繋がっていたのかもしれない。ただし、これらの道は、現道ができる前の山での作業のための道（旧道）であった可能性は高く、城道を踏襲した可能性があるため図化したものである。
このように、外郭ラインは比較的残されているが、内部についてはほとんど旧状を留めていないか、後世のものか中世のものかの判断ができない状況である。構造的には竹田市の津賀牟礼城や騎群城、野津町の王子ヶ城のように、だらだらと続く尾根線上の要所を複数掘り切り、あとは切岸で斜面部を固めていくという手法に類似したものと考えられるが、比較的平坦面が広くやや異質な感も受ける。城郭のある場所は標高は高いが、集落自体が高い所にあり、集落との比高は小さい。この南山城は、山城というより日常的な居住地である館城と言えるものであろう。そのため、広い平坦面が確保されているものと考えられる。
また、地名が残っており、ａは「勢溜」、ｂは「おねまこと」、ｄは「本丸」、ｅは「辻の久保」と言われる。「おねまこと」は居館跡とも言われる。
主郭部は現状では明確にできないが、ａやｂに対して標高が高く、上記の地名から判断してもｄの曲輪ウであった可能性が高い。ウからキを含むｄは、周囲を大部分自然の急崖で守られており、東部が畑地で旧状が失われているものの、櫓台状の曲輪エや明確な土塁を伴った堀切の存在など、現状では他に比べ一段とグレードが高い。
《歴史》志賀氏の居城として著名であるが、同時代の文書、記録には出てこない。島津側の記録で、天正14（1586）年に豊後から撤退する際に出てくる「白根の城」（文書番号記録部一の35、42）とあるものが南山城であろう。それによると、島津左衛門尉歳久が占拠していた。後世の編纂物である『南山志賀記抄』には、南山城を巡る攻防の物語が記されている。（小柳和宏）

第149図 南山城縄張り図（1/2,000）

【489　小路遺跡　直入郡久住町大字仏原】

《立地》久住連山の南側の裾に広がる広大な高原の内でも東端部に近い場所に遺跡はある。この地域は、小さな河川によって台地は寸断されており、小路遺跡のある台地も、両側が10m近い急崖となる幅約200～300m近い南下がりの台地となる。その北端が最も高く標高が618mほどで、そこから比高差で約8m、直線で100mほど下った場所が遺跡である。南側は緩斜面が続く。

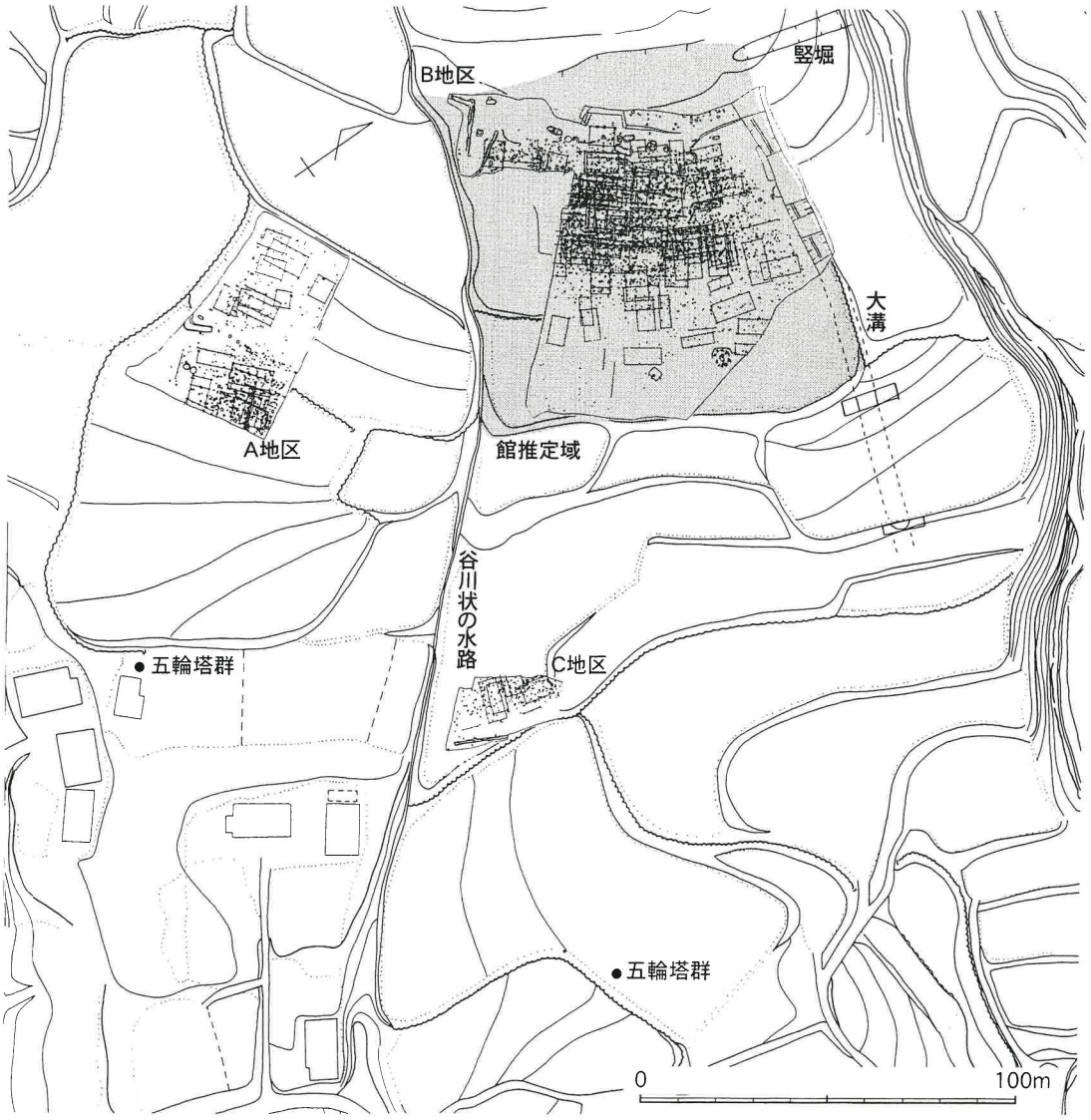
《現状》基盤整備事業に伴い発掘調査されたもので、現状では一部竪堀などを見る事ができる。

《構造》発掘調査によって新たに発見された。それによると、北側は発掘調査で確認された幅５mで深さ1.8mの直線的な溝、西側は現状で確認できる竪堀につながる段（切岸）で、東側も段落ち（切岸）で、南側は調査区外であるが谷川状の溝が想定できるとすると、一辺80～100m近い方形の館区画が復元できる。内部は約四分の三を発掘調査しているが、ほぼ中央部で重複する63棟の掘立柱建物と土壙などが検出されている。建物は大型のものが多く、遺物にも中国産法花や華南三彩、タイ産の壺など輸入品や京都系土器があるなど大友氏の府内城下での出土傾向と大差なく、この施設の重要性が窺える。時期は出土遺物より１５世紀後半代から１６世紀中葉が中心となる。

なお、この方形の区画の周辺部でもＡ区やＣ区で掘立柱建物が検出されており、周辺にムラ、または町、あるいは家臣の屋敷群などが広がっていた事が想定される。

《歴史》江戸期に書かれた『救民記』によると朽網鑑康の三男の屋敷が「小路」にあったとされ、在地領主で一時期大友氏の加判衆もつとめた朽網氏との関連が考えられる。詳細については下記文献を参照されたい。（小柳和宏）

参考文献『小路遺跡・小屋敷遺跡』（久住町教育委員会、2000年）



第150図 小路遺跡遺構配置図（1/2,000）

【490　上城遺跡　直入郡久住町大字仏原字尾迫】

《立地》久住連山の南裾に広がる高原状の台地の内、東部に位置し、芹川の支流によって細かく分断された台地の一つで、舌状に延びる尾根のほぼ先端部の比較的平坦な位置にある。標高は527m前後で、現在水田が営まれている沖積面との比高差は約10m近くある。

《現状》基盤整備事業により発見され、約6,400㎡が調査された。

《構造》二重に巡らせたL字状の溝と、その内外で39棟の掘立柱建物や土壙などが検出されている。外の溝は東西75m、南北50mにわたって検出され、幅3mで深さは1.2ほどあった。内側の溝は東西39m、南北28mにわたって検出され、幅1.3mで深さは0.5～0.6mであった。調査者によると、内側の溝が古く、その後拡張して外側の溝を作った。

建物は大型のものが多く、さらにその約三分の一の柱穴では扁平な礫の礎盤が据えられているなど、豊富な出土遺物と合わせて考えると、この区画の居住者が地域の支配者層であることは間違いない。

この建物群は、出土遺物より13世紀から14世紀にかけて存続したと考えられ、13世紀代がピークで、14世紀末には廃絶したとされる。

《歴史》朽網氏に係わる遺跡として、この高原状台地の南東部には山野城、三船城の二城と小路遺跡（489）がある。他にも中世の遺跡が点在しており、この地域が中世朽網氏の領域の中心的位置を占める事は間違いない。小路遺跡は時期的には上城遺跡の後に位置づけられる館跡であり、朽網氏の館が移動した事を示すものであろう。

この朽網の地は、フロイスの『日本史』でもたびたび登場し、豊後で最初に教会が建てられた地としている。さらに町があったこともわかり、この地の先進性を示すものとして注目される。（小柳和宏）

参考文献『上城遺跡』（久住町教育委員会、2002年）

第151図 上城遺跡配置図（1/1,000）

【491　山野城　直入郡久住町大字仏原字山口】
《立地》久住町の北東方に位置する。久重連山の一つである標高1587mの黒岳から派生する河内川、市川の浸食によって形成された標高約750m～700mの尾根状の丘陵に立地し、その尾根線は隣の直入町との境界となっている。丘陵の両側は河川による浸食が深く、急峻な断崖となり、自然の要害を巧みに利用した山城と言える。山城の南西方には城主朽網氏の本願地とされる有氏・仏原地区及び支城と伝える三船城を臨む。また、尾根筋には、久住・直入から黒岳裾野の上峠を越え、阿蘇野をぬけ、庄内に至る道が通っており、この方面への主要ルートの一つであり、交通の結節点でもあった。
《現状》町指定の史跡である。山城を縦断する旧林道の拡幅･舗装を目的とした保安林管理道開設事業（大分県竹田直入地方振興局）が平成５年度から平成７年度に実施され、曲輪や堀跡の一部が破壊及び埋め立てられているが、全体の約90％以上は良好に遺存している。
　なお、平成７年度、林道開設事業に伴う発掘調査（一万田堀と伝える堀切の一部＝記述記号堀切ⓐ）が行われ、陸橋部（土橋）が確認されている。（久住町教育委員会編『山野城跡』久住町文化財調査報告書　1995）
《構造》黒岳の裾野から北西―南東にのびる丘陵の付根付近に築かれており、北西の丘陵付根を遮断する堀切と南東方の尾根筋を切断する堀切によって画される全長約800mの県下最大級の山城である。曲輪等は丘陵尾根筋を利用して造成しており、城域の中央付近から逆「く」の字状に屈曲するプランである。前途のとおり、大きくは城域の両端を集中的に、しかも大規模に掘り切り、内部の曲輪群を防禦する構えであるが、尾根を切断する５本の堀切ⓐ～ⓔと曲輪群、さらには堀切と連動する土塁等の配置をみると、最終段階は大きくA～Cの３つのエリアに分け機能させた縄張りと考えられる。
エリアA　堀切ⓐ・ⓑで囲まれる全長約130mの北西端エリア。曲輪群は、尾根頂部の小規模な堀切や竪堀で切断される曲輪群と北側の階段状帯曲輪群、北斜面部の竪堀と組み合う削平段のみであり、南斜面への曲輪造成はなく、全体に曲輪の配置は稀薄で、しかも小規模である。堀切ⓐと接する曲輪A-Ⅰには堀切と連動する土塁をもち、最高所に位置することからこのエリアの中心曲輪と考えられる。曲輪形成のみられない南側斜面の防禦は厳しく、堀切ⓐとともに曲輪A-Ⅰに対する土塁を盛る横堀とそれと繋がる竪堀ⓕ、堀切ⓑ西側の竪堀群ⓖによって斜面横への動きを封じている。特に尾根筋頂部から北側への曲輪群配置は、堀切ⓐの発掘調査によって確認された土橋の存在（図中の黒塗り部分）と無関係ではないと考えられる。北西の虎口周辺と頂部裾の溜状空間に対する配置であろうか。尾根筋北側斜面についても堀切ⓑの西側において小規模な自然谷を利用した竪堀ⓖを掘削している。なお、このエリア東端頂部に位置する曲輪A-Ⅱは、櫓台的な施設と思われる。
　自然の谷を利用した壮大な規模の堀切と横堀・竪堀群、そして要所を固める曲輪・削平段等、北西方（牧ノ尾方面）からの進入に対する備えに特化させたエリアと言える。
エリアB　北西の堀切ⓑとそれに連動する土塁ⓗ及び南西の堀切ⓓと竪堀ⓘそれに連動する土塁ⓙ・ⓚによって完全に囲まれる全長約420mの中央部エリア。丘陵尾根筋の頂部に連続して造成された曲輪群と北・南側斜面全域に階段状の帯状曲輪群が隙間なく配置される空間にあたり、本城の中心域と考えられる。この中心域は、丘陵頂部の曲輪の配置や堀切ⓒによって、さらに２つ（B-a・B-b）に画される。
B-aゾーン　堀切ⓑから堀切ⓒまでの範囲に当たり、エリアＢの約３分の２を占める。堀切ⓒは、幅約30mと大規模ではあるが、丘陵を完全に分断するには到ってなく、土塁の構築もないことから堀切ⓐ・ⓑ・ⓓ・ⓔにみるような防御性は薄い。中心曲輪群を分割し、各ゾーンの役割を定めることで郭内の機能分化と防御を強くしたと考えられる。中央に位置する丘陵頂部の曲輪B-a-Ⅰは、西から南辺にかけて土塁を盛り、段差の大きい切岸による比較的大きな曲輪群で周囲を固め、南面直下には横矢の掛かる南に張出す曲輪（林道で一部破壊）、そして連動する虎口状の土塁開口部ⓘなど他の曲輪に見られない特段の配慮が認められ、このゾーンの中心曲輪と評価される。さらに、両堀切に取り付く丘陵頂部には櫓台状の曲輪（曲輪B-a-Ⅱ・Ⅲ）を置き、両端を固めている。
B-bゾーン　中心部ゾーンの東南部にあたり、約３分の１の範囲を占める。このゾーンについても、中央の丘陵尾根頂部に中心曲輪（曲輪B-b-Ⅰ）と両堀切ⓒ・ⓓに接する櫓台状の小規模な曲輪（曲輪B-b-Ⅱ・Ⅲ）を配し尾根筋を固め、北及び南斜面には階段状の細長い曲輪群を裾部まで配置する。さらに、南斜面裾部から堀切ⓓに沿う曲輪B-b-Ⅲに至る間（一部林道で破壊）と曲輪B-b-Ⅲから丘陵尾根頂部を繋ぎ曲輪B-b-Ⅰに至り、北斜面の竪堀ⓘに至る間を土塁ⓙ・ⓚで完全に囲い、東南方から城内への侵入を厳しく防禦している。
エリアC　堀切ⓔからエリアＢとエリアＣを画する土塁ⓙ・ⓚの南東端エリアである。エリアＡと同様、南東方（市・河内方面）からの進入の備えに特化した空間であり、他の空間に比べ曲輪群の造成は極めて稀薄である。丘陵尾根は、堀切ⓓを挟んだ曲輪Ｂ-ｂ-Ⅲの対岸から北東へ屈曲してのび、堀切ⓔ渡った頂部からさらに東南へ折れる形容である。したがって、堀切ⓓとⓔは、この丘陵を掘り切り、竪堀と連動させ両端の崖へ繋げ、丘陵上からの侵入を遮断している。
　さらに、両堀切間の東南から南斜面にも堀切ⓓと連接させた竪堀群ⓜ～ⓞ、支丘陵尾根を通る土塁ⓟ、竪堀ⓝ

と⓪の間の平場群（C-Ⅰ）等で横の動きをより強固に防禦するとともに、堀切ⓔと繋げる横堀ⓠで城内への進入を二重三重に遮断する。この地区は断崖とならない南斜面側を強く意識した構えをとっている。また、曲輪B-b-Ⅰの西側直下の曲輪C-Ⅱは、自然の谷底を利用した溜り状の平場であり、竪堀ⓘ・ⓡで両端を固めている。本エリアは、2条の壮大な規模の堀切とそれらと連動する竪堀、土塁に特徴付けられる。特に堀切ⓓは堀というより谷をイメージする規模で、幅約15m～40m、長さ約240m、最大深さ約15mである。

以上、大きくは3地区に機能を分けた縄張りと言えるが、本城の中心曲輪と言える主郭が不明瞭であり、各エリアとも中心曲輪と丘陵頂部両端の櫓台状の曲輪及び斜面部の階段状に造成された帯状の曲輪群を基本構成とするもので、各エリアとの曲輪間の階層差（エリアCは曲輪造成ほとんどない）も認められない。最終段階は、同等規模の連合体によって守備する陣城として機能していたと考えられる。

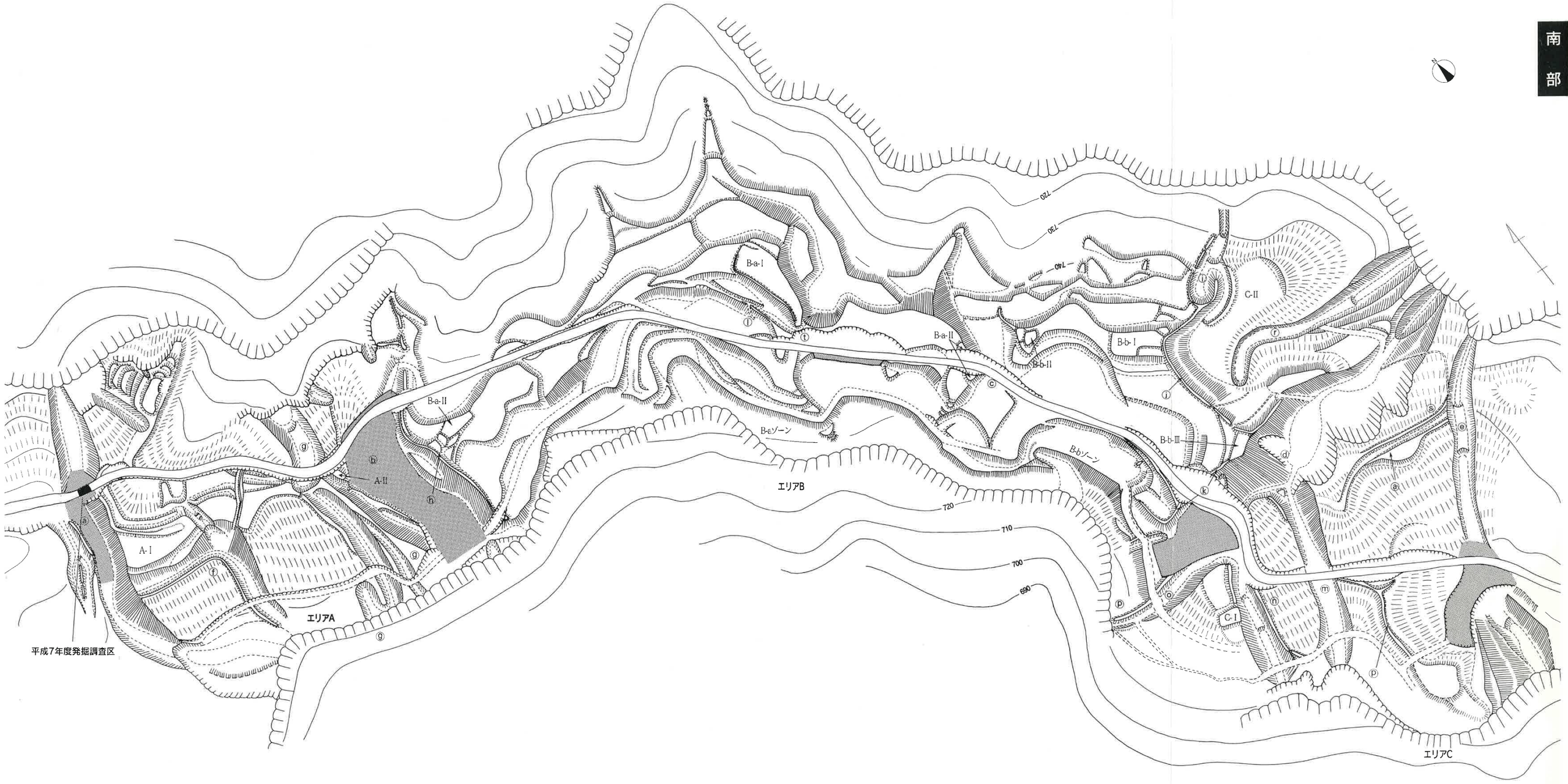
《歴史》城名「やまんじょう」の呼称については、文明7（1475）年の志賀親家申状に「くたミの山のしろ」（文書番号古文書部140）及び「豊後国古城蹟并海陸路程」の「山之城と申切寄山」（文書番号記録部2/2）、『朽網記』戦記編の「救民山ノ城根本ノ事」等に「ヤマノジョウ」の名がみえ、この呼び名が訛って今に伝えられたと推量されるが、大半の記録には「朽網城」（他に久多見城、九多網之城、九多細か居城とある）が当該期の名称として認識されており、これが山野城と考えられる。朽網城が史料に現れるのは、永徳2（1383）年九州探題今川了俊が都甲氏に宛てた感状（文書番号古文書部106）が最も古く、このころすでに朽網氏の山城であったと思われ、続く文明7年の志賀親家申状が古い事例である。他はすべて天正14・15年の豊薩戦争に関連する豊後・島津側の史料に集中している。これらよると、天正14年12月22日、島津義弘軍は、入田宗和（義実）や志賀道益（親孝）らの内応者により直入の諸城を降し、岡城の志賀親次に人質を要求するが拒否され、攻略も不可能とみて志賀道易の城に入り、24日には朽網城に「換陣」して越年した（文書番号記録部1/2・11・12・16・19・20・25・35・41）とある。この時の状況を『救民記』は、城主朽網宗暦（鑑康）は、追手(大手)口を固め、河内口、牧ノ尾口を能く掘り切り、三所の番所の備えを懈ることのないよう命じるとともに、空堀に乱杭、逆茂木を設け、宗暦の子鎮則以下朽網衆四千余騎が立て籠り奮戦したが、鎮則は和議の申し入れを受け開城したと記される。

また、築城及び改修等については、鎌倉時代の初め大友能直の養父中原能直が能直に供奉して朽網郷黒岳麓に城を築き本拠とし、朽網氏を称したとされ、永正13年（1516）、加判衆であった親満が大友親治に討伐（大聖院宗心の乱）された跡を継いだ入田親誠の第二子鑑康の時、南郡七家（南三ノ七士）の加勢（人夫ヲ出シ）を受けて構えを拡大し再築したとある。この再築について「上ノ堀ヲ一万田堀ト云、次ノ二溝ハ両志賀堀ト云、下ノ二塹ハ入田堀、田北堀ト云」と（「倒竹山城始築」）あり、加判衆鑑康が南郡における大友一門の諸将の扶助を請い、その記念に名付けたとも言われている。この大友氏の重臣名をあえて冠することは、大友氏の永禄から天正期の城郭整備政策の実態を示すものと考えられるとともに、豊薩戦争に向けて拡充されたことが理解される。

さらに、周辺には「ヒサゲノ口ノ番所」、「佛ノ塔ノ切寄」、「川内口ノ番所」等の関連施設とともに、山城には「本丸」、「西ノ丸」、「城代櫓」、「武具櫓」、「太鼓櫓」、「的場」、「釣瓶井戸」等の名称が伝えられている。

なお、「豊後国古城蹟并海陸路程」（文書番号記録部二の2）には、「…東西の方ハ岩立成。北ノ方ハ谷小川成。広さ壱間程。又、弐間、三間の処も有。深さ五寸、又ハ九寸の処も有。谷之深さ壱町四反有。木山也。南ノ方谷也。深さ壱町三反。上ニ而場の広さ、東西三町四拾間。南北四拾五間。西ノ方ニ入口有（発掘された土橋か）。牛馬の通ひも有。山上水なし。谷ニ水有。東ノ方ハ尾続堀切有。深さ三間、広拾四間。西ノ方今なり山と云、高山有。切寄山との間、三町有。いニしへ百姓等取あがり申場の跡也。」とある。（玉永光洋）

参考文献『山野城跡』（久住町教育委員会、1995年）



0 50 100m

アミ掛けの部分は埋土等で詳細が不明な部分　P181～182ページの第152図をこの図に差し替えて下さい。

第152図 山野城縄張り図（1/2,000）

【492　三船城　直入郡久住町大字仏原】
《立地》芹川の支流である七里田川が複雑に蛇行し作り出した残侵丘陵の頂部の標高535mに立地している。現在は西側を除く三方を小河川が取り巻いており、天然の要害をなしている。麓の沖積地との比高差は20mほどである。
《現状》唯一河川で囲まれていない西側は、水田の拡幅（圃場整備事業）のために削られ、旧状が失われている。残された城域も、里山としてあるいは畑地として利用されたと考えられ、旧状が改変されている可能性が高い。
《構造》ほぼ100m四方に正方形に画された部分（Ⅰ）が主郭と考えられるが、その北部には一段高い曲輪が存在して、やや不都合である。東に伸びる尾根は2段にわたって曲輪が配される。それも含めて南面する曲輪端部には土塁が作られており、斜面部の帯曲輪とともに南方面への守りを固めている。
《歴史》江戸期の成立になる『救民記』には、天正14（1586）年、領主であった救民（朽網）宗暦が病気であったため、子の鎮則らを山の城（491）に入れ、弟の式部大輔らを「三ツ船ノ城」に置き、島津氏の侵攻に備えた、とある。朽網氏は小路遺跡（489）や上城遺跡（490）に見るように、13世紀から16世紀にかけて高原状台地の広い平坦地に館を構えていた。三船城は、支城群のひとつと考えられよう。（小柳和宏）

第153図 三船城縄張り図（1/2,000）

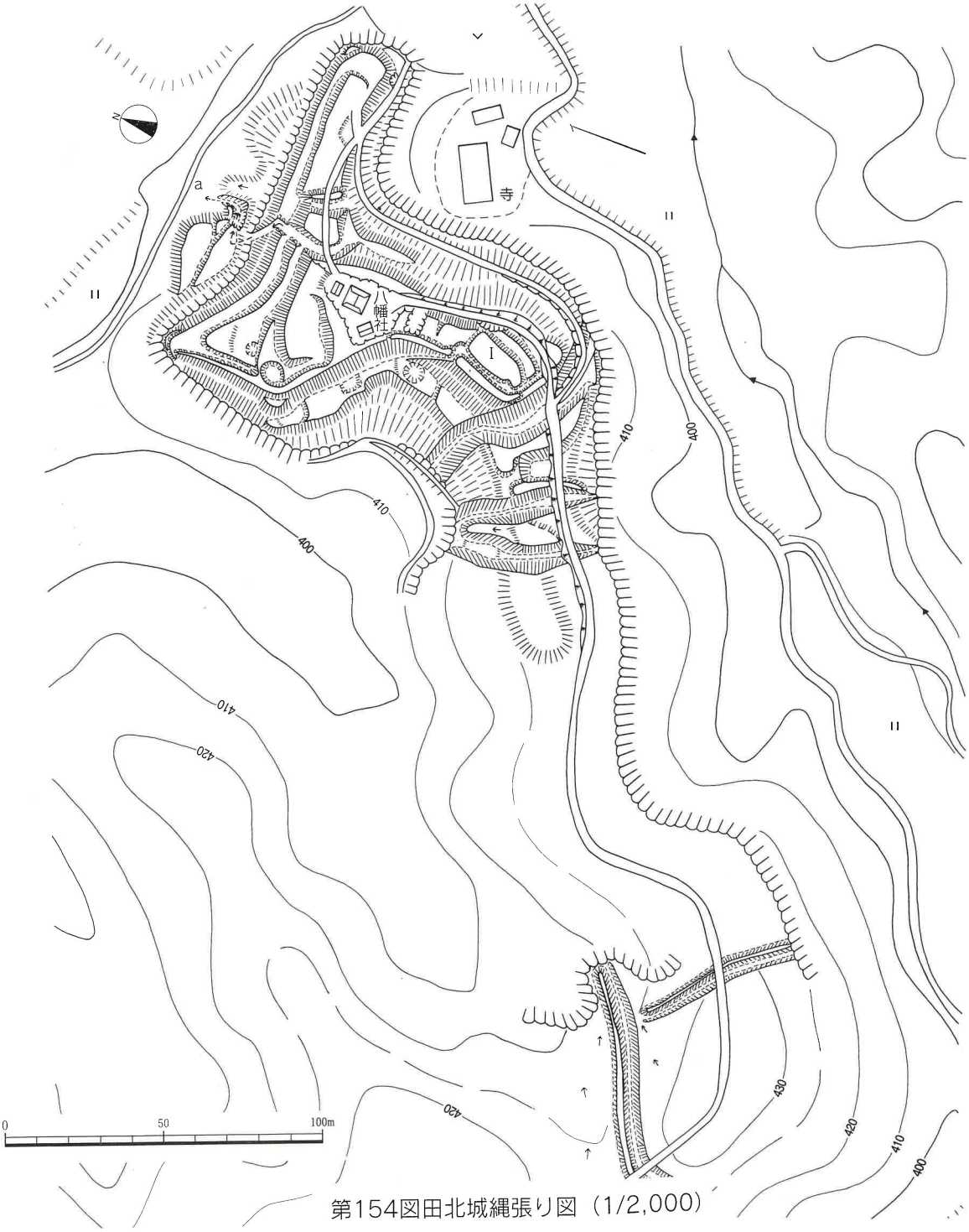
【495　田北城　直入郡直入町大字下田北】

《立地》幅20～50mほどの東西方向に伸びる丘陵の先端部に立地する。標高は430mで、麓との比高差は30mである。丘陵の周囲は凝灰岩の切り立った崖となっている。

《現状》台地上の最も広い平坦地に神社があり、そこに至る道も開削されていることから破壊されている部分があるが、全体的な構造は押さえる事ができる。神社地以外は植林、雑木林となっている。

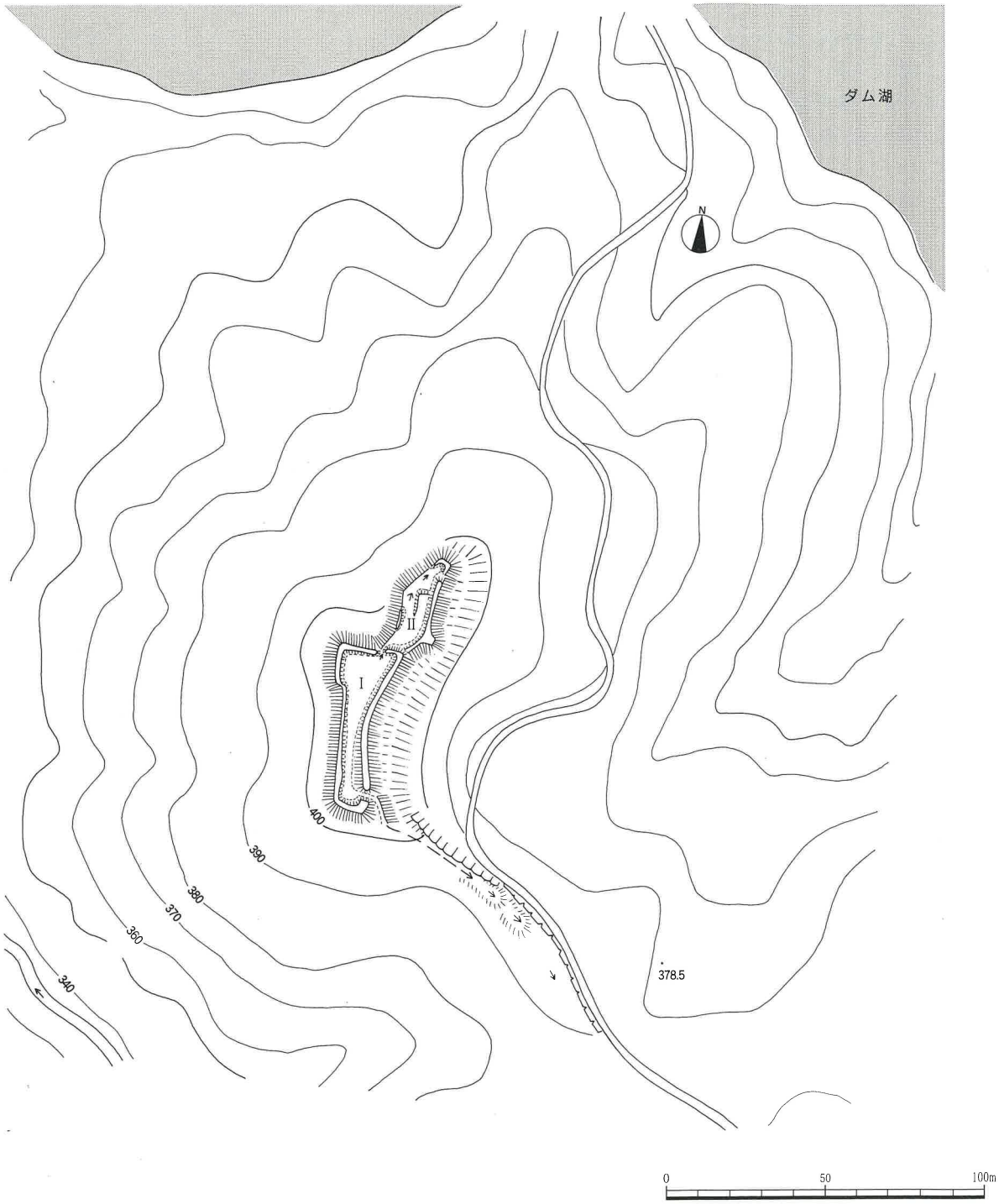
《構造》周囲を崖で守られた細長い丘陵の先端部に立地するが、その丘陵の基部を5本の堀切（＋竪堀）で遮断する。また、丘陵先端から東方向に伸びる尾根も2本の堀切を入れている。堀切と崖で固められた曲輪は、南西側の堀切に接する8×20mの長方形を呈する部分が主郭（Ⅰ）で、西側と南側に土塁を持ち、東側は一段低い帯曲輪となる。北側は東に土塁を持つ曲輪が階段状に配される。入り口は、神社の東に伸びる尾根を遮断した堀切を北側から登って、すぐ右折し帯曲輪に入ることが想定できる（a）。

《歴史》田北氏の館といわれる。集落とは隔絶しているが、比高差はほとんど無いことから館城と考えてよいであろう。同時代の文書・記録には記載が無い。しかし、天正14年の島津側の記録では、しばしば「瀧田城」と出てくる（文書番号記録部一の11、16など）が、これらは田北氏の城郭である「松牟礼城」を指すものと考えられる。（小柳和宏）



第154図田北城縄張り図（1/2,000）

【496　法螺貝城　直入郡直入町大字下田北】
《立地》現在は芹川ダムのダム湖を望む標高は408mの丘陵先端の高所に位置しているが、ダム構築以前は眼下に直入郡と大分郡を結ぶ街道を見下ろす要所にあたっていた。丘陵は南側から伸びており、細い尾根を介して須郷の集落と繋がっている。集落との比高差は50mほどである。
《現状》全体が植林で、残存状況は良好である。
《構造》幅の狭い曲輪（第Ⅰ郭）の回りを土塁が全周する。土塁は高さ1～0.5mほどで、南東角部と北東角部付近に途切れた部分があり、虎口となる。前者は城の虎口で、狭い尾根筋を登ると単純に開いた坂虎口に至る。後者は、第Ⅱ郭につながる虎口である。第Ⅱ郭は、東側に土塁を持ち、北に傾斜しながら細り、先端部に土塁を回す。
《歴史》文書・記録には記載が無く、位置づけは不明である。（小柳和宏）



第155図 法螺貝城縄張り図（1/2,000）

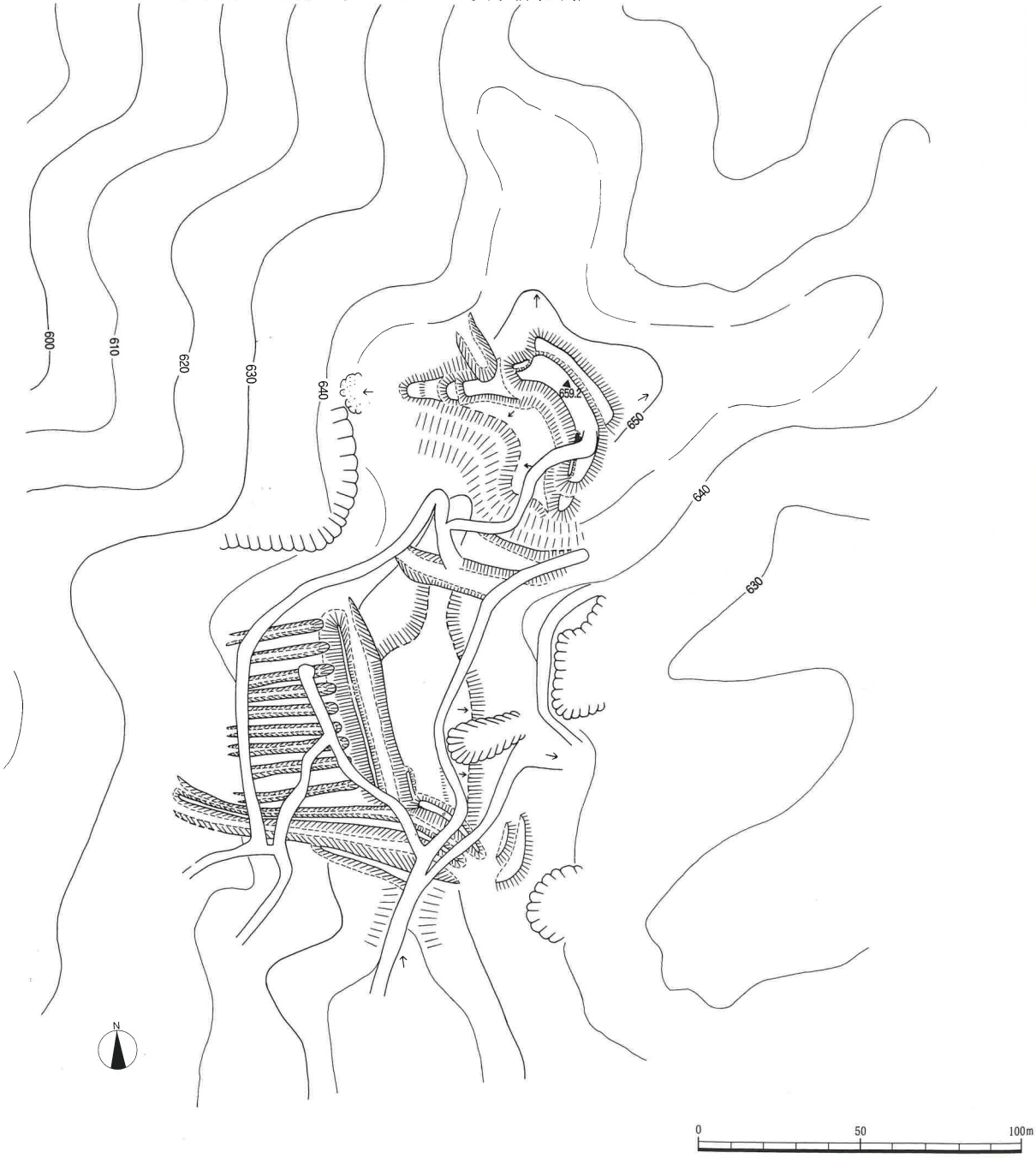
【498　松牟礼城　直入郡直入町上田北】

《立地》いずれも大分川の支流である城後川と阿蘇野川に挟まれた標高659mの山岳頂上部に位置する。至近には集落は無い。北側の阿蘇野方面を見下ろす事ができ、熊牟礼城を真向かいに望む事ができる。

《現状》風倒木を除去するための作業道等があり、城の全域で破壊が進むが、道路部分以外では比較的旧状を保っている。全域で植林、雑木林である。また、最も標高の高い主郭部分には松牟礼城の石碑が建っている。

《構造》主郭は最も標高の高い山頂部（Ⅰ）で、北東側には一段の帯曲輪を、南西側は一段の腰曲輪を設ける。西に伸びる尾根は階段状の曲輪を配し、北側斜面に一条の竪堀を入れる。南側に下る尾根鞍部には帯曲輪を伴う堀切を入れ、第Ⅱ曲輪と画する。第Ⅱ曲輪は、南側から伸びる尾根の細まった部分に二条の堀切（＋竪堀）を入れて遮断し、西側に横堀を持つが、平坦面の削平は不十分で、特に東側は明確な切岸を形成しない。しかし、一方西側斜面は9本の畝状空堀を整然と入れている。

《歴史》天正14（1586）年、田北統周は野原久内充に対して、松牟礼城から下城する際の「無別儀同心」に対して賞している。これは、松牟礼城が島津氏に攻められ落城したことを意味していると考えられ、その事は島津側の記録である「天正拾四年豊後へ発向之事」（文書番号記録部一の21）には「田北平介統員カ養母家頼ノ老若共、松牟礼ニ籠城シテ居タリケルカ、城中難所ナレハ輙攻落シカタク」云々、と描かれる。また、「豊後国古城蹟并海陸路程」（文書番号記録部二の2）には「松むれ山いニしへ百姓等とりあかり申候場の跡」であるとしている。（小柳和宏）



第156図松牟礼城縄張り図（1/2,000）

4．県西部の城館

ここでは、筑後川上流域に位置する日田、玖珠地域の城館20箇所を取り上げる。この地域は、筑後・筑前・豊前国境としても重要な地域であった。ここには、大友氏の「城誘」になる角牟礼城や高位岳城などがある一方、日田郡、玖珠郡の中小規模在地土豪層の中、小規模城館が存在するが、城館の数は少ない。

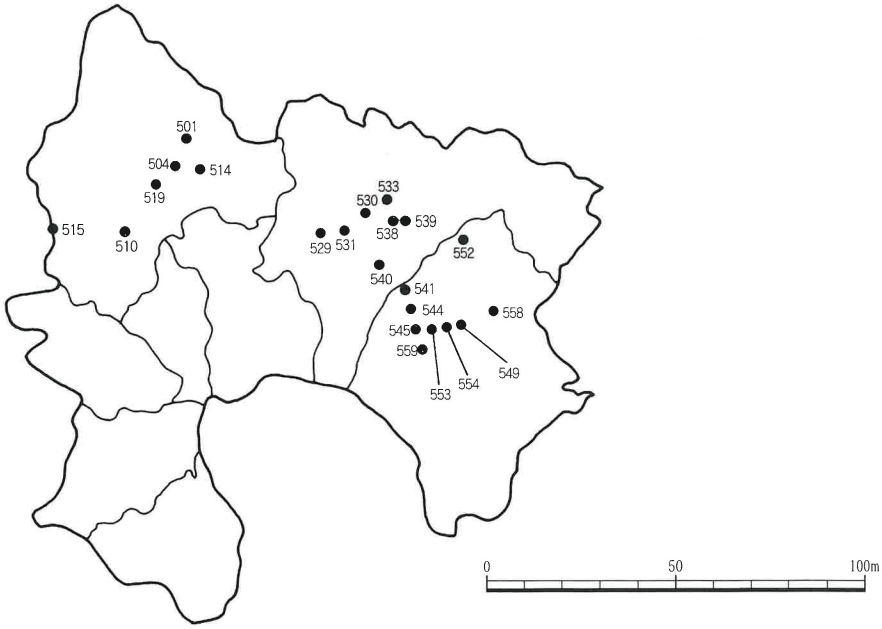
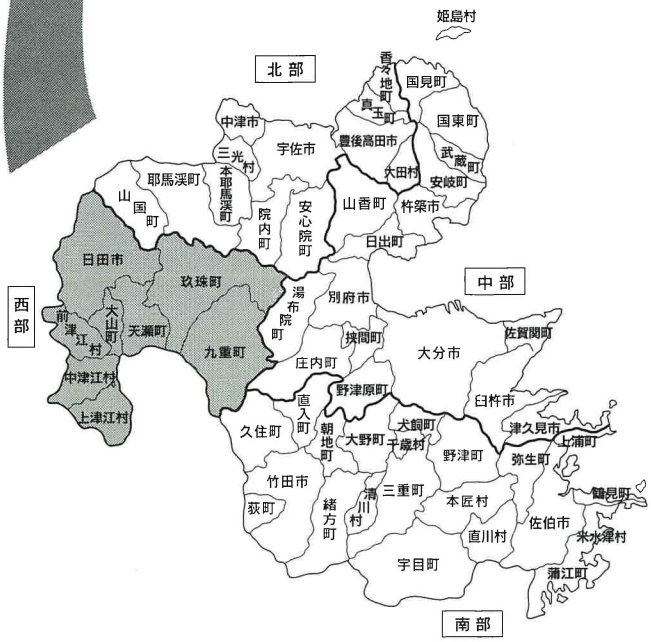


表7　県西部の掲載城館

番号	城館名	頁数
501	財津古城	188
504	坂本城	189
510	日隈城	190
514	蕪山城	191
515	高井岳城	192
519	大蔵古城	193~194
529	魚返城	195
530	古後城	196
531	野田城	197
533	角牟礼城	198~199
538	瀬戸遺跡	200
539	帆足城	201
540	伐株山城	202~203
544	城ヶ尾城	204
549	釘野城	205
552	松木城	206
553	陣の内山城	207
554	殿山城	208
558	野上城	209~210
559	岐部城	211



第157図 県西部城館位置図

【501　財津古城　日田市大字花月字城】

《立地》小野川と花月川の合流点を望む標高188m、比高差50mの丘陵上に立地する。

《現状》風倒木や竹藪がひどくて地表面を観察するのが困難な場所もあるが、概ね全形を窺うことはできる。しかし、石垣もいたるところで見られるなど、過去畑地であったことから細部で改変が進み、新しい道も作られるなど旧状を完全に復元することは困難である。

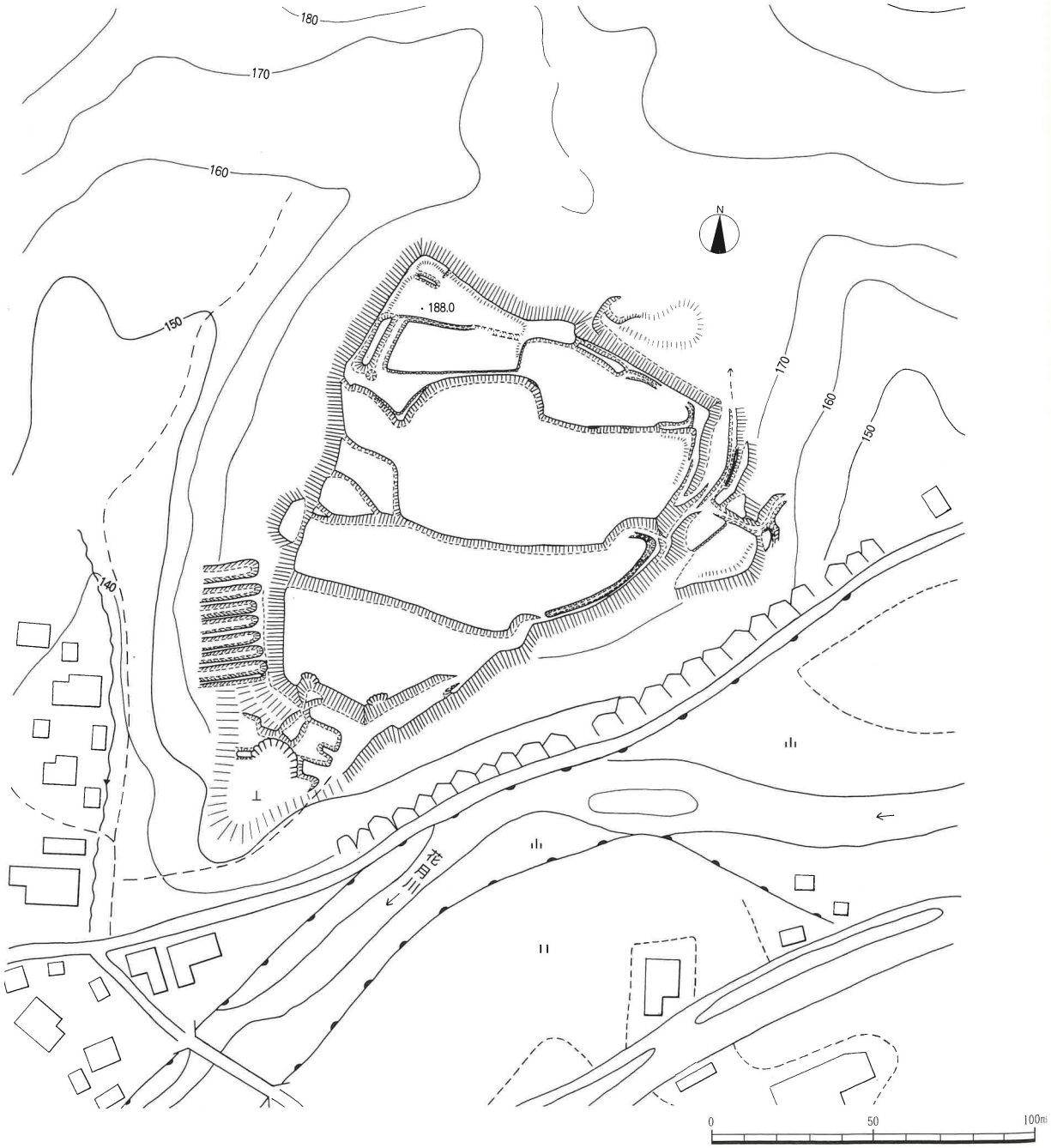
《構造》全体は二等辺三角形を呈しており、底辺にあたる北側は北から伸びてきた丘陵が細まり鞍部を造るところで、高さ7～8mほどの切岸で完全に切り落とす。西側は、やはり切岸で固めるが、やや斜面の緩やかになった南側には7条の畝状空堀を入れる。東側は切岸である。三角形の突端にあたる南側は切岸を形成するが、その先（南側）は墓地や畑地で破壊されており、旧状が失われている。

曲輪部分は、北側の切岸に接する部分が最も高く、南側に向けて階段状に曲輪を配するが、後世の畑地化で大きく削られており、当初のものとの判別が難しい。

現在この丘陵上に登る道は、南側の先端部から登る道（墓地に登る道）と北東角部から登る道の2ヶ所あるが、後の改変が著しく城郭に伴う道を復元するのは困難である。

《歴史》財津氏の居城といわれるが、同時代の文書や記録には記載が無い。形態から見ていわゆる館城と考えられる。

（小柳和宏）



第158図 財津古城縄張り図（1/2,000）

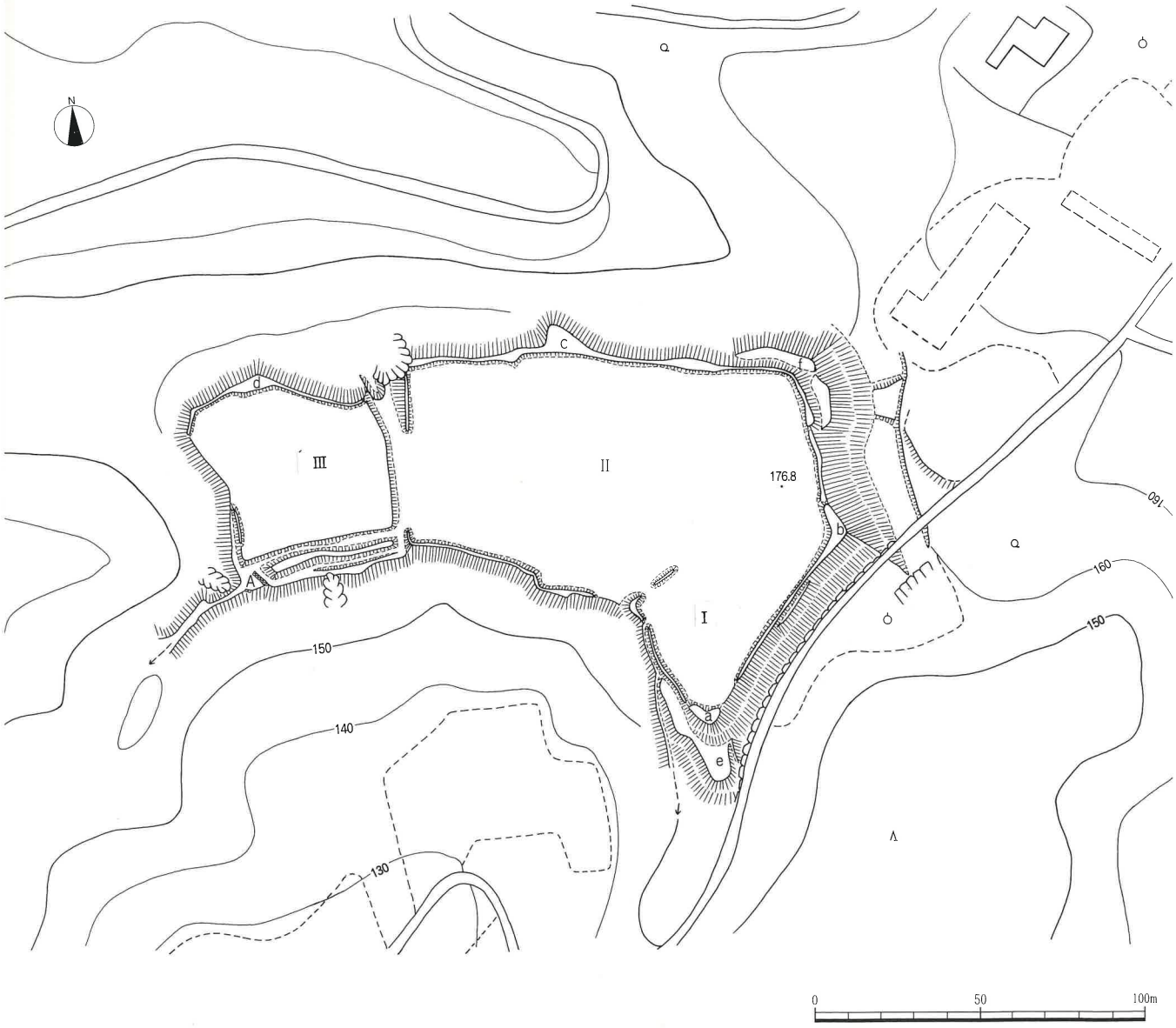
【504　坂本城　日田市大字坂井】

《立地》日田盆地北東部の大字西有田にある、通称葛ケ原と呼ばれる標高約170mの台地から、西に延びる台地の一端に位置する。平野部との比高差は70mで、台地の北と西を囲むように花月川が南に流れ、有田川に合流する。城の西側を流れる花月川に架かる橋は坂本橋と呼ばれ、その付近の字名は「屋敷」といわれていることから、坂本氏の居館があったと思われる。現在も坂本姓の民家が点在している。

《現状》現在台地上は、くぬぎ林であるが、近年までは畑としても利用されていた。東側は市道坂本・葛原線により若干削られているが、切岸の残りは良好である。

《構造》城域は、東西に約170m、南北に約50～100mを測り、約9000㎡ほどある。ほぼ長方形であるが、一角が南側に突出した形をしている。城は東西南北とも良好な切岸により区切られ、その上部には土塁が曲輪を巡るように残っている。良いところで曲輪内部より見上げて、3mほどある。土塁には、特に南側隅（a）と東側隅（b）、北側2カ所（c.d）と広場を造る。主郭は一番高いⅠと1mほど低いⅡで、堀切を挟んで、Ⅱとほぼ同じ高さで曲輪Ⅲがある。腰曲輪は主郭の南側e、北東側fの2ヵ所ある。虎口は西側の土橋状に造られたAと思われる。土橋を渡り終えた下部と、正面に石垣を築き、虎口を固めているようにも思われる。平虎口ではなく、食い違いとしている。

《歴史》別名「原城」とも言われ、大友義鑑に、日田八奉行の筆頭といわれている坂本伯耆守鑑次の居城。天文17年（1549）大友義鑑は、高瀬山城守征伐を他の奉行に命じるが、坂本因幡守が討ち取る。（佐藤祐二）



第159図 坂本城縄張り図（1/2,000）

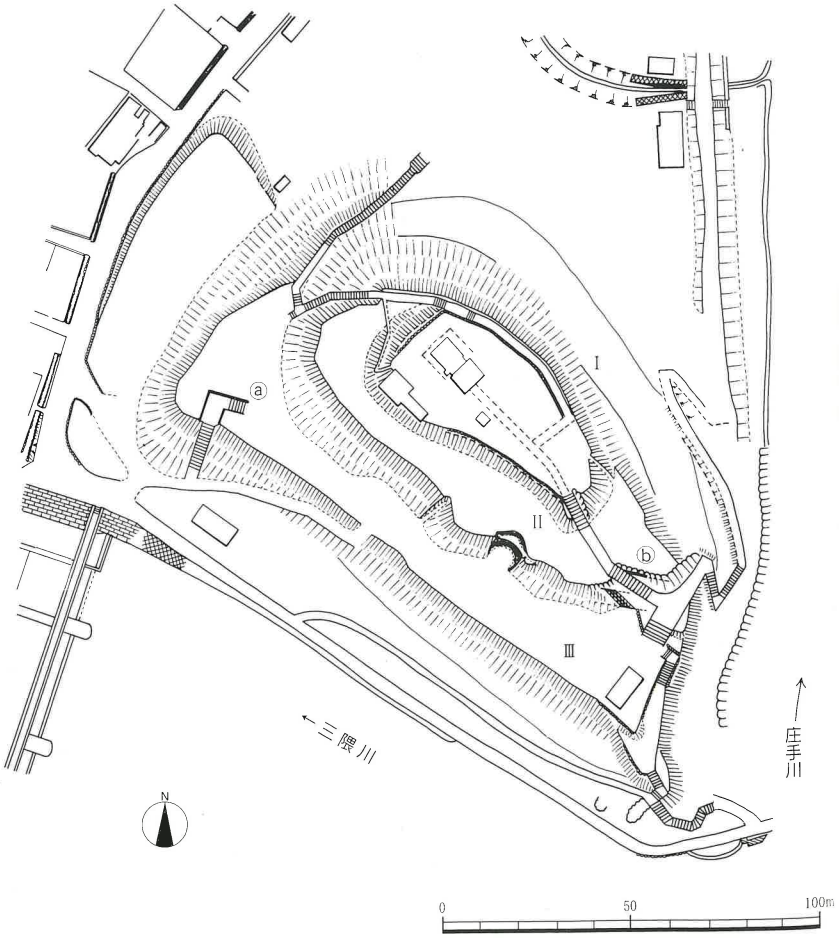
【５１０　日隈城　日田市大字庄手】

《立地》日田市のほぼ中央に位置し、西流する三隈川が庄手川と分流する地点の標高約112mの独立丘陵である日隈山に築かれている。庄手川と三隈川によって周囲を囲まれ、北・東・西側の三方は川を背にするといった天険の地形を利用して水運を意識した立地でもある。

《現状》三隈山の頂上には、明治元年に社殿を新宮し、同3年に日隈神社と奉称した神社があり、都市公園整備等の影響を受けたところが多いが、三段に造成された曲輪や虎口部等往時の姿を残している。

《構造》最高所の長径約60m、短径約20～30mの略長方形の曲輪（曲輪Ⅰ）を断崖となる北東側に寄せて岸切り、三隈川に面する東南斜面を大規模に岸を切り、２段の帯曲輪（曲輪Ⅱ・Ⅲ）で固めており、最高所の主郭を二つの帯曲輪で防禦する比較的単純な構造である。また、南西の裾にも切岸による平場が確認されるが、公園整備よる可能性も否定できない。帯曲輪は丘陵裾に向かって大規模となり、曲輪Ⅲは、最大長約155m、幅約10～40mであり、両端を大きく張出させ、北東側には小規模な平場を階段状に造成している。虎口は、曲輪Ⅲの南西隅ⓐと曲輪Ⅱの北東隅ⓑに確認される。虎口ⓐは右側を張出す外桝形状の構造であり、「L」字状プランに石垣を築く。石垣は全体に積み替えられているが隅石に立石を使うなど基部は文禄・慶長期の特徴を示す。虎口ⓑは、山道の工事によって当該期の状況を留めていないが、部分的に石垣が残存（破却も想定されるが）している。それによると現山道階段と残存石垣の方向は異なり、復原すると左側に張出す外桝状の虎口となり、虎口ⓐ同じ構造が想定されるが規模はやや大きくなると思われる。石垣は、自然石や粗割段階の石を横長に取り、横目地が部分的にとおる。天端はすでになく、しかも後世の崩壊などにより孕みが大きく、地すべり状にずり落ちたところもあるが、基礎部分は残存していると思われる。本城における石垣の使用は、表面観察の段階では虎口周辺に限られる。また、日隈神社の社殿周辺には、多量の瓦が堆積した状況で地表面に露出しており、最高所の曲輪には瓦葺の建物が建築されていたことが想定される。採集された軒平瓦や軒丸瓦は文禄・慶長期の織豊系瓦の特徴をもっている。

《歴史》文禄２（1593）年大友義統除国後は、豊後一国は太閤蔵入り地となり、文禄３年正月28日の秀吉朱印状によれば、宮木長次（豊盛）が日田・玖珠郡の内、5000石を扶助されて蔵入り地の支配を行っている。この時、隈城（日隈城）を築城し田島町を移転して城下とするが、慶長元（1596）年には日田・玖珠郡を去り、代わって毛利高政が20000石を拝領して隈城に入り、５層の天守と三階櫓を建て、外堀と城下を整備する。城の構造は南西に大手門（虎口ⓐか）、東を搦手とし、山は三段に築き、中段に井戸を掘り、下段北側に馬場を設け、北西の裾部で取水し堀とした（「豊西記」・「豊西説話」等）とある。実際には高政は、佐伯に転封される慶長６（1601）年までの５年間は、日田・玖珠の蔵入り地20000石を支配していたことから、本隈城と玖珠の角牟礼城を拠点として両郡の蔵入り地の代官であった（豊田寛三「文献からみた角牟礼城」『角牟礼城跡』玖珠町教育委員会、2000）と考えられている。慶長５年の関が原の合戦では、「又日田郡隈の城、玖珠郡角牟礼の城は、毛利民部大輔が城にて、留守居の兵籠れり」と（「黒田家譜」）ある。この戦いで、本城は降ち、黒田如水の家臣栗山利安が１年間在城するが、佐伯に移った毛利氏は引き続き蔵入り地を預かり（角牟礼城は慶長６年から久留嶋氏が入る）、代官毛利隼人佐を置き支配したという。その後、日田は幕府領（天領）、大名領とたびたび変遷を重ね、寛永16（1639）年幕府領が代官所（月隈城）となり、政治の中心が豆田地区に移り、やがて廃城（「日田造領記」）となる。（玉永光洋）



第160図 日隈縄張り図（1/2,000）

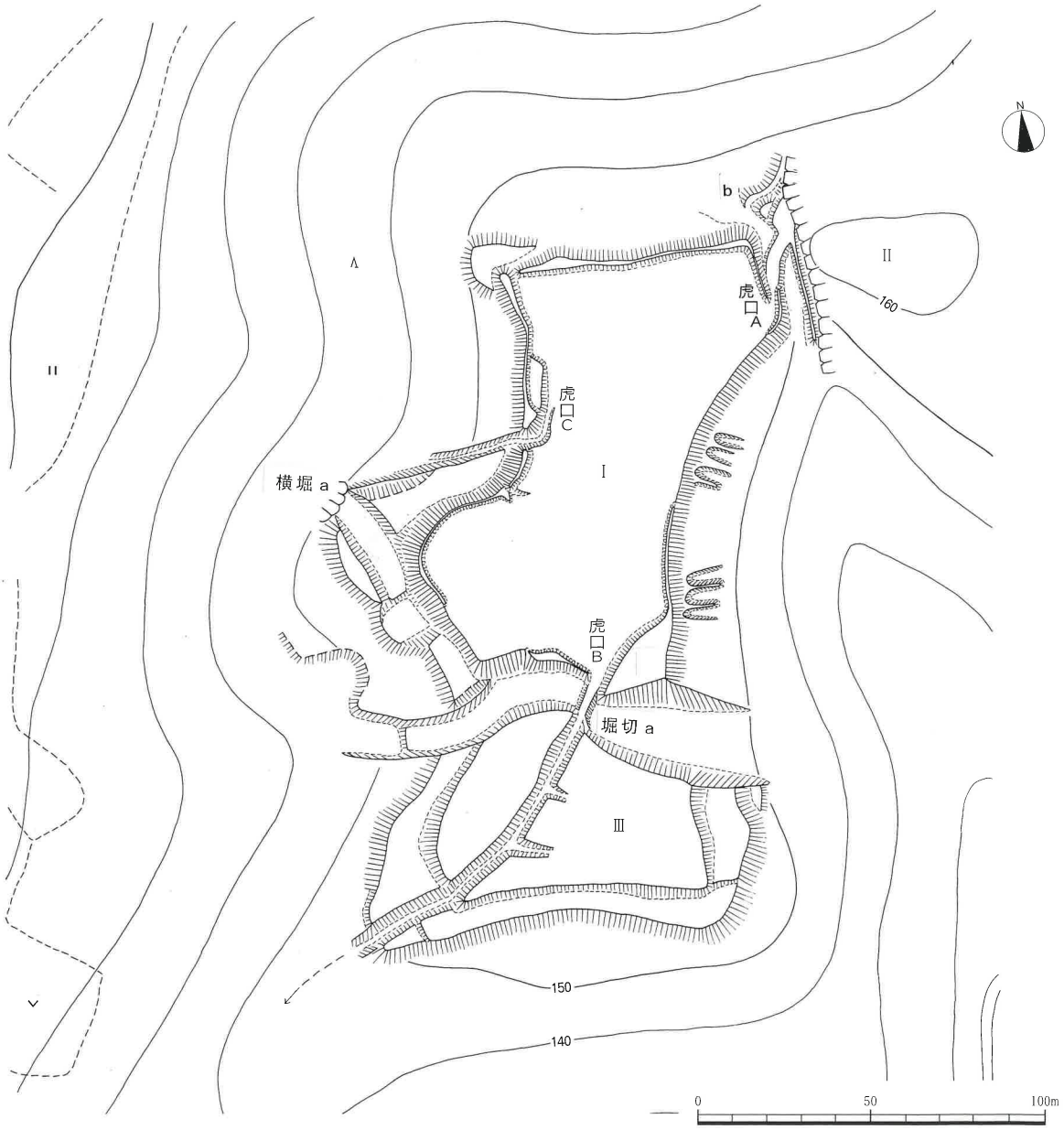
【514　蕪山城　日田市大字石松町】

《立地》日田盆地北東部の大字西有田にある標高約160ｍの台地で、坂本城の約１ｋｍ東側に位置する。平野部との比高差は約60ｍで、北東側には、ローレル日田カントリークラブが隣接する。台地の北側から西へ蕪川が、南側には石松川が流れ、有田川で合流する。南側の平野部は、石松町と呼ばれている。

《現状》台地上はくぬぎ林と竹林で、南側には墓地がある。北東側は、平成３年のローレル日田カントリークラブ建設により、曲輪ひとつ分が削られている。

《構造》城域は、東から南北に折れるＬ字形の台地で、東西に約70ｍ、南北に約200ｍを測り、約14000㎡ほどある。この城も坂本城と同じく、良好な切岸を残し、土橋を伴う２本の堀切により３つの曲輪（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）に分けられる。主郭は、竪堀・土塁・土橋等を伴うⅠであろう。主郭Ⅰは良好な切岸のうえに、土塁を巡らし、南東隅の土塁には110㎡程の平場を設けている。東側には６本の竪堀を畝状に造る。南側は幅15～20ｍ、深さ５～10ｍの堀切ａを造る。西側には横堀ａを造り、その中央部は掘り切っている。虎口は３ヶ所（Ａ・Ｂ・Ｃ）ある。虎口Ａは土塁が食い違うように造られている。Ｂは堀切ａと左手の平場、右手に土塁を伴う。Ａ・Ｂは共に堀切を渡る幅約２ｍの土橋で、堀切との高さはＡが１ｍ、Ｂが３ｍある。Ｃは左に折れて登り、主郭に入る。左手の土塁との差は５ｍほどある。堀切ｂで主郭Ⅰと区切られる曲輪Ⅱは、土塁の痕跡は残るが、大半がゴルフ場により削られている。曲輪Ⅲには土塁はみられず、中央部の山道は新しいものと思われる。

《歴史》別名「石松城」ともいわれる。日田八奉行の一人である石松肥前守廉正の居城。元亀元年（1570）、大友義鎮は龍造寺隆信を攻めたが、この時、石松肥前守は新原民部と出陣して両将とも戦死している。（佐藤祐二）



第161図 蕪山城砦縄張り図（1/2,000）

【515　高井岳城　日田市川下字高井岳他】

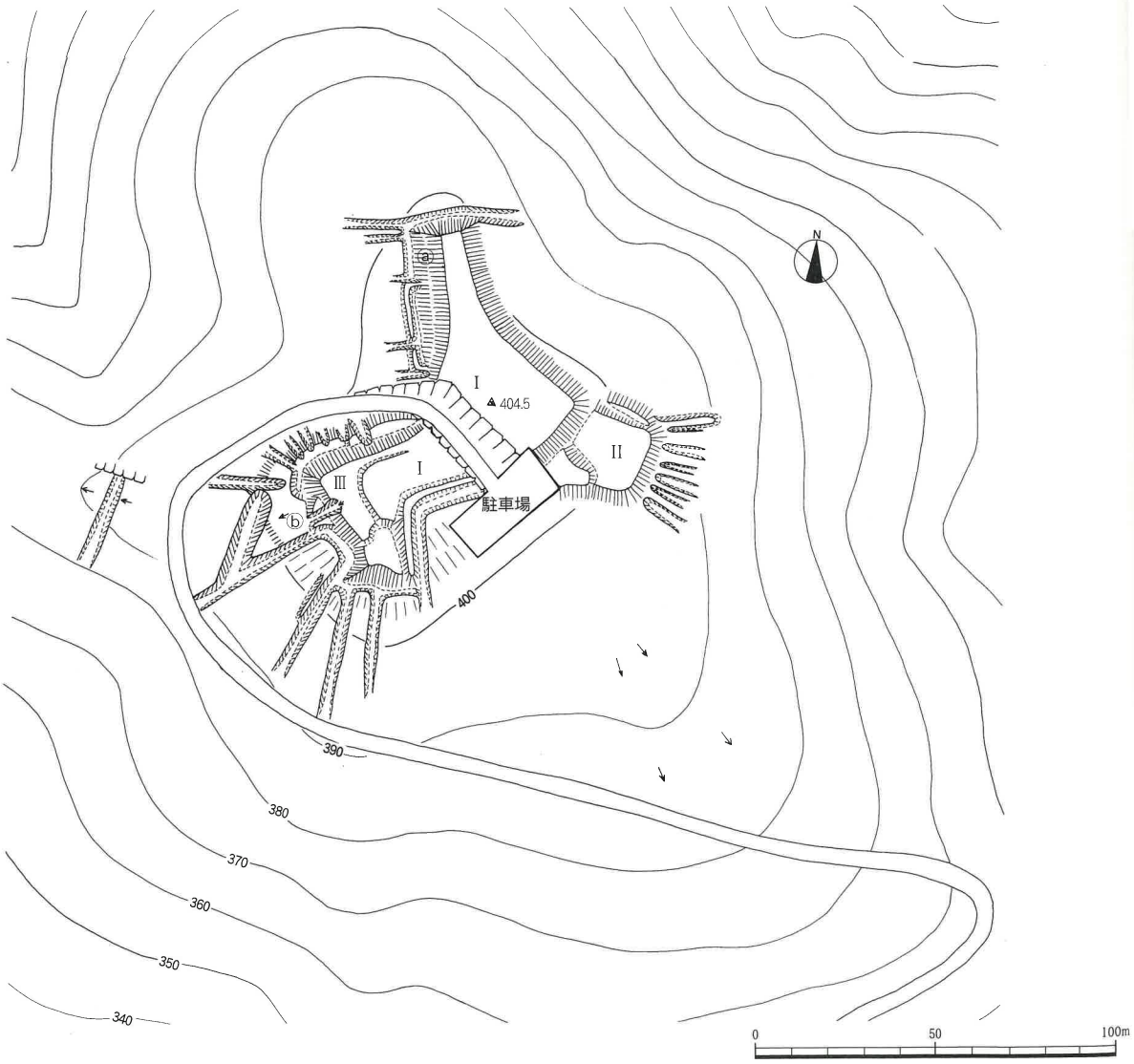
《立地》高井岳城は筑後川沿いを筑後へ抜けるルート上にあり、山頂部で福岡県と大分県を境する。高井岳は標高404.5mの独立峰で、南面の杭戸集落との比高差は約205m、筑後川との比高差は約340mある。

《現状》高井岳全域は杉などの植林がされ、山頂まで林道が敷設されている。また山頂部には駐車場や電話・テレビ等のアンテナが設置されており、主郭・曲輪・竪堀・土塁等の城郭遺構の一部が壊されているが全体的には遺構の残りは良いほうである。

《構造》高井岳は独立峰ではあるが、比較的傾斜の緩やかな西側に堀切を設けている。主郭（Ⅰ）は地形に沿って中央部から三方向に延びる放射状に造られ、東・南西側に曲輪（Ⅱ、Ⅲ）を配し、全体に角をもたせた平面プランとなっている。主郭北側の東西方向に掘られた堀切ⓐは南方向へ屈曲させ横堀、L字状土塁によって一旦切れる。その後土塁の内側に横堀を併行させ、土塁の切れ目部から竪堀を横堀に連結させるといった手の込んだものとなっている。南側の横堀も竪堀と連結させ、さらに南西には2本の竪堀をY字状に連結させ、その内側に虎口空間ⓑを造りだしている。虎口空間の北側及び東側斜面には畝状竪堀群を設けている。縄張り図全体を見ると、かなり西側（筑後方面）を意識した配置を見て取れる。

《歴史》天正6（1578）年、日向耳川の戦いで大友氏は島津氏に大敗し、その勢力が衰退した。肥前の竜造寺隆信と筑前の筑紫・秋月氏等が結び、筑後でも草野・黒木氏等が挙兵した。天正9年3月以降の大友・島津氏の和睦以後、同氏との直接的な対立はなかったが、代理戦争の様相を呈した対立が続いた。同年12月7日付で、問注所刑部大輔（統景）に対して府蘭（宗麟）が長岩・白石両城援護の構えとして、高井岳城の城誘に助力する様依頼している。高井岳は筑後と豊後のまさに境目の城であり、高井岳城の防御施設は主に西側に集中しており、筑後長岩城とともに豊後を死守する重要な位置を占めている。

「豊西記」によると、問注所親則は秋月種実に与し日田へ攻め入り、高井岳の城番堤越前守（安芸守の間違い）の弟平右衛門尉（安芸守嫡子三右衛門尉の間違い）と戦い、堤氏は敗れ高井岳城が陥落したと伝えている。この高井岳城での戦は年記がないが、「大友義統合戦手負着到一見状案」の天正10年12月1日の戦であったと思われる。この城誘が現在見る高井岳の姿か、あるいはこの後に続く豊薩戦に備え、新たに改修されたのかは不明である。（竹野孝一郎）



第162図 高井岳城縄張り図（1/2,000）

【519　大蔵古城　日田市大字北豆田字古城、高城】

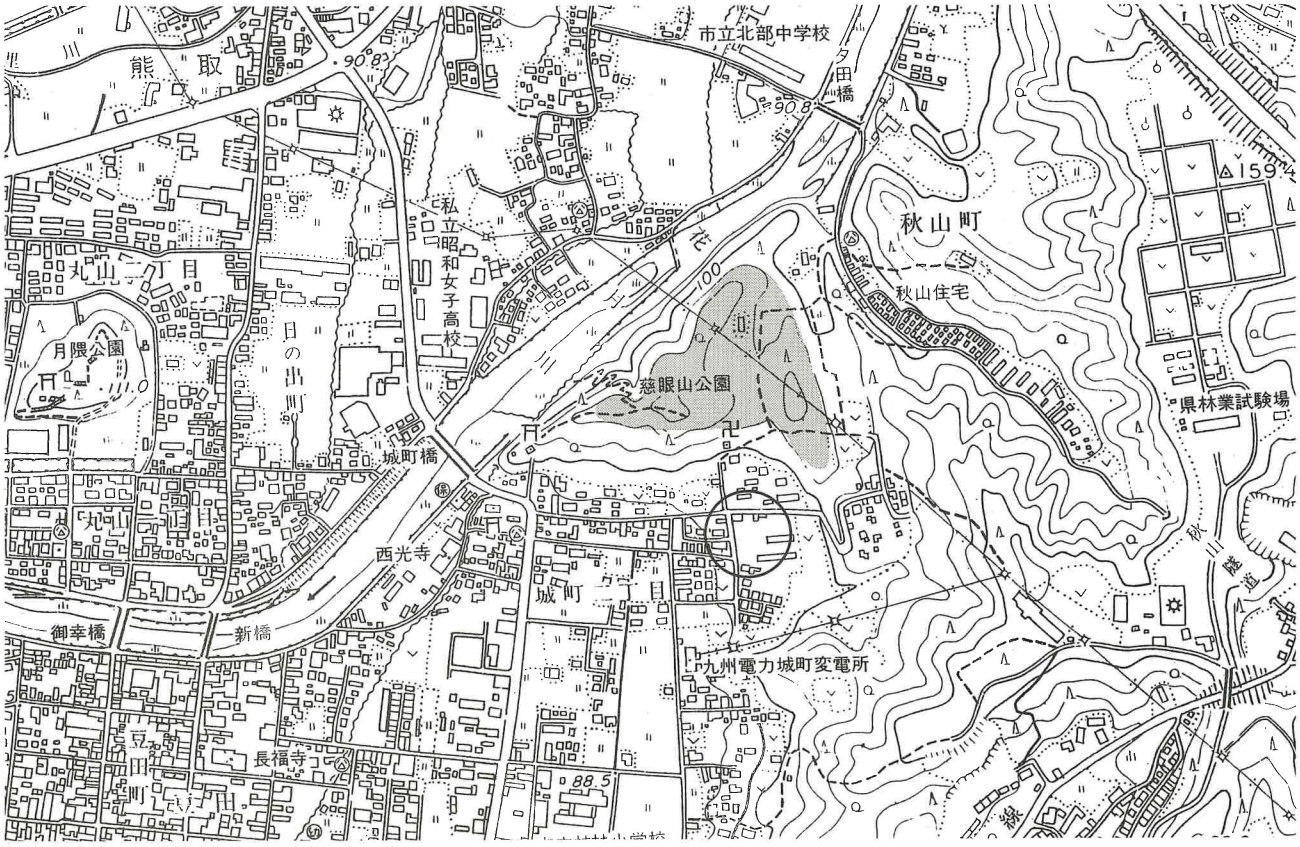
《立地》北西を花月川、東を浅い谷、南を日田の沖積平野で三角形状に画された丘陵に位置する。この三角形の丘陵は、細かく見ると中央に南北方向に浅い谷が入り、両側が高い。標高は中央の谷部で115m、東側の頂部で120.5、西側の頂部で136.8mで、南側の沖積地は90m前後である。なお、丘陵は細りながら西側に伸びており、丘陵先端部付近には慈眼山永興寺（ようこうじ：大蔵氏建立）がある。

《現状》明治21年調製の旧字図にとると、この丘陵上には3軒の家があった。現在は宅地はないものの、その区画は残っている（1軒は廃屋が残る）。また、明治期の３軒以外にも宅地区画と思われる区画があり、近世以後宅地化が進んだことが窺える。また、山部分は現在は大部分が植林であるが、旧字図では畑となっており、後世に開発の手が入ったことがわかる。なお、これらの家は「古城」姓であり、地名を姓としたことからわかるように、城郭廃絶以後に入ったものと考えられる。

《構造》三角形の頂部に位置する曲輪Ｉは、東側以外を土塁や自然地形の高まりで囲まれており、南側に開いた虎口は内枡状を呈する。ここは、明治期には宅地となっており、石組みの井戸跡も見られるが、城郭の曲輪を利用したものと考えられる。南側の土塁外側の堀は、通路を兼ねており、西側に行くと斜面を下って花月川に、東に行くとすぐ直角に折れてほぼ南北に直線的に伸びる道につながる。この道は、両側（東西）に石垣や石列で画された宅地区画が連続するが、これらは部分的に発掘調査されており、中世の遺物が出土していることから、区画そのものが中世まで遡る可能性が考えられる。

この道を挟んだ宅地区画の背後の両側は7～8m近い切岸で、特に小字「高城」の曲輪IIとした部分は西側に土塁を設け、ひとつの主郭と理解できる。さらにここから西に伸びる尾根の細まったところで２ヶ所の堀切があり、永興寺との間を遮断している。

《歴史》16世紀中ごろに滅んだ大蔵氏の城郭と言われているが、主郭Ｉに見る虎口の形成はいわゆる織豊系城郭成立以後にまで下るものである。また、主郭Ｉから南側に伸びる道に沿った両側が屋敷区画であれば、この三角形状の丘陵全体がひとつの城下町として機能していたことが考えられ、大友除国以後の日田の歴史を考える上で重要な城郭となる。また、丘陵の南側にある谷の、大蔵氏の館と考えられる慈眼山瀬戸口遺跡（520）も含め、一体的に考える必要がある。（小柳和宏）



アミ掛け部が大蔵古城で、○印が大蔵氏の館が推定される場所

0　500m

第163図 大蔵古城周辺地形図（1/10,000）

第164図 大蔵古城縄張り図（1/2,000）

【529　魚返砦 玖珠郡玖珠町大字戸畑】

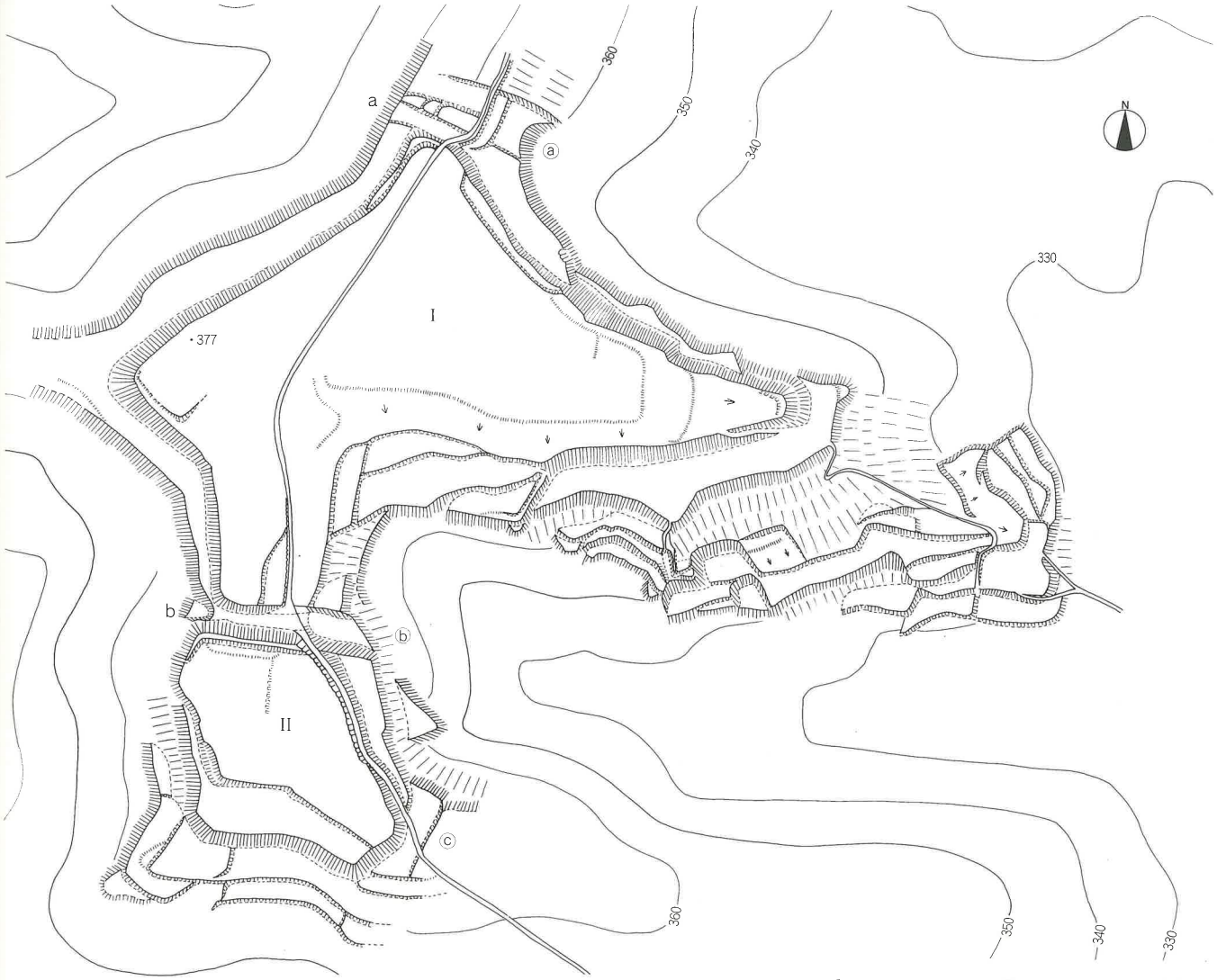
《立地》玖珠町の西方にあり、玖珠川の支流浦河内川下流右岸、現北山田小学校北側の標高約377mの丘陵先端部に立地する。大きくは玖珠川右岸にあたり、浦河内川によって形成された谷戸の出入口を臨む位置にあたるが、丘陵北方の最高所ではなく、比高約50mの魚返集落を臨む至近の丘陵先端部を利用している。

《現状》山林の他、一部に畑地や竹林として利用している。遺存状況は林道の取り付け等で、部分的な破壊があるものの、全体としては良好である。

《構造》東に開く谷を馬蹄形に囲むように築かれている。丘陵上には二つの曲輪があり、丘陵尾根の２ヶ所ⓐ・ⓑと先端部１ヶ所ⓒを堀切ることによって曲輪Ⅰ・Ⅱを固め、各曲輪周囲を大規模な切岸と腰曲輪的な帯状の曲輪群で防禦する比較的単純な構造である。丘陵上の曲輪は、等高線に沿う地形を巧みに利用して平場を造成しており、不定形となっているが、中心曲輪と考えられる曲輪Ⅰは、長径約150m、短径約110mと大規模で、内部は小規模な段差で区画される。東、南に向かって緩やかに下り、切岸と帯曲輪下の斜面部に小規模な階段状の削平段を配置している。西側は高さ5mを越す切岸と帯曲輪を巡す。尾根の北側を遮断する堀切aは、2条あり、丘陵最高所を強く意識している。曲輪Ⅰ・Ⅱを遮断する堀切bは、曲輪Ⅱ側に土塁を盛り、斜面部の竪堀へ連接させている。曲輪Ⅱも内部に段差による区画施設をもち、長径約65m、短径約40ｍの規模である。西側を大きく切岸り、東には切岸下の帯曲輪、南は高さ４ｍ程の切岸下に数段の帯曲輪と先端部の削平段で防禦し、丘陵尾根を掘り切る（堀切ⓒ）構造である。

本砦は、曲輪の規模や平場の状況からいわゆる砦のイメージはなく、館城的な性格が考えられ、谷の開口部周辺一帯には集落が展開する可能性が高い。

《歴史》魚返砦についての記録はない。魚返氏は、小田氏の庶流で、平安時代末から鎌倉時代には浦河内川流域の魚返に進出して魚返氏を名のる。南北朝期には、北朝方として小田氏とともに玖珠城（伐株山城）に籠もっている。戦国時代には、玖珠郡の12家による連判衆に列し、玖珠郡の経営に参加しており、天正１４年の豊薩戦では、一族を率いて角牟礼山城に籠もり、義統より感状を受けている。（玉永光洋）



第165図 魚返砦縄張り図（1/2,000）

【530　古後城　玖珠郡玖珠町大字戸畑】

《立地》玖珠川の支流である大田川によって開析された沖積地を望む低丘陵先端部に立地する。この丘陵は、東部で元畑から伸びる台地とわずかにつながるが、ほぼ独立した丘陵となる。もっとも標高の高い部分で約380m、沖積地との比高差は約50mである。

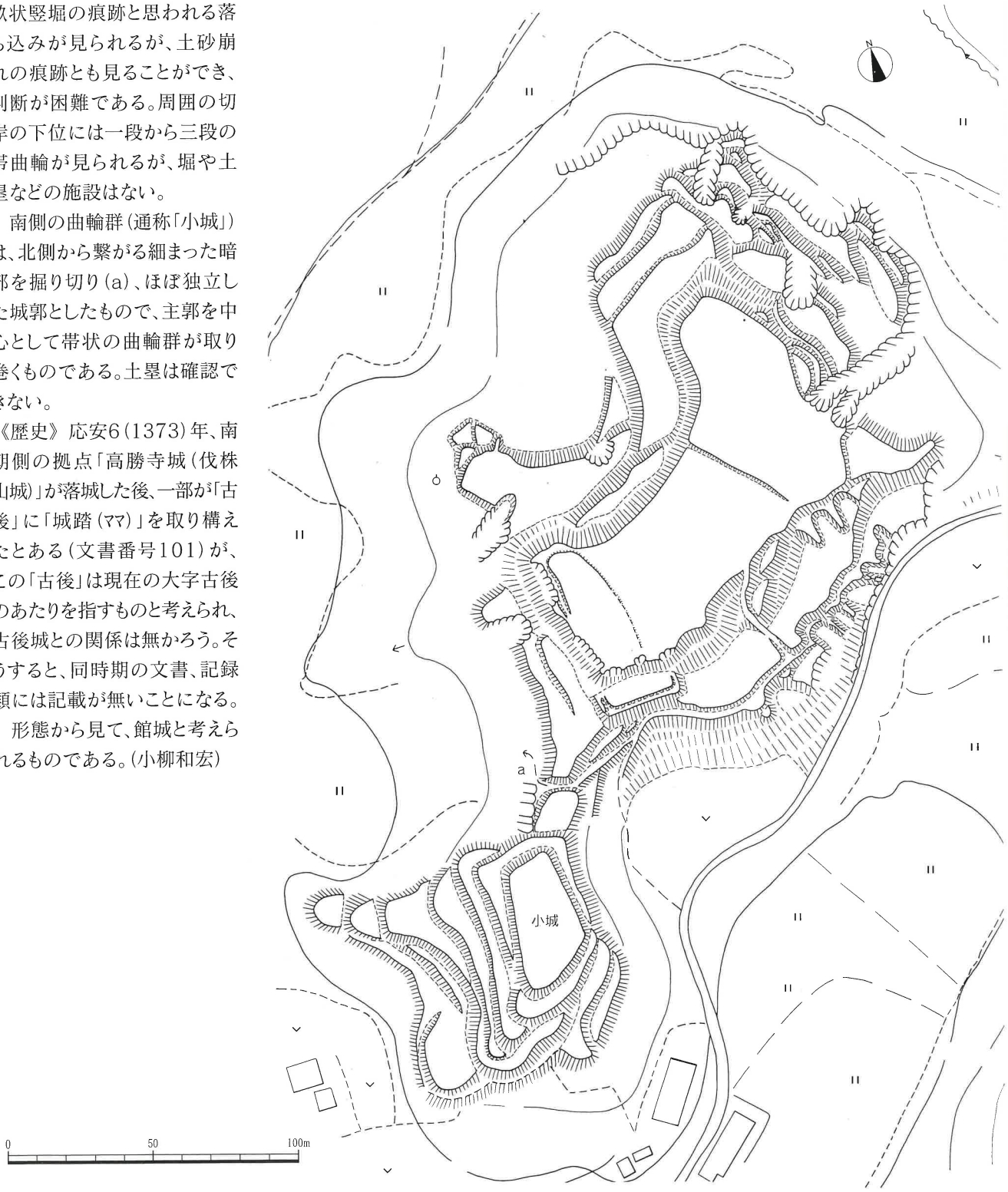
《現状》丘陵上の平坦地は果樹園等になっており、畑地としての改変が予想される。また丘陵斜面部は植林であるが、平成3年の台風19号による風倒木被害がひどく、特に曲輪を平坦に確保するために盛土したと考えられる部分は土砂崩れを起こし、いたるところで旧状が失われている。集落に近く、里山としての利用が考えられるので、細部については改変を受けていることが予想される。

《構造》大きく南北2つの曲輪群に分けることができる。北側は広い平坦面を有する曲輪で、周囲を落差5～7m近い切岸で固めている。南東斜面部には畝状竪堀の痕跡と思われる落ち込みが見られるが、土砂崩れの痕跡とも見ることができ、判断が困難である。周囲の切岸の下位には一段から三段の帯曲輪が見られるが、堀や土塁などの施設はない。

南側の曲輪群（通称「小城」）は、北側から繋がる細まった暗部を掘り切り（a）、ほぼ独立した城郭としたもので、主郭を中心として帯状の曲輪群が取り巻くものである。土塁は確認できない。

《歴史》応安6（1373）年、南朝側の拠点「高勝寺城（伐株山城）」が落城した後、一部が「古後」に「城踏（ママ）」を取り構えたとある（文書番号101）が、この「古後」は現在の大字古後のあたりを指すものと考えられ、古後城との関係は無かろう。そうすると、同時期の文書、記録類には記載が無いことになる。

形態から見て、館城と考えられるものである。（小柳和宏）



第166図 古後城縄張り図（1/2,000）

【531　野田城　玖珠郡玖珠町大字戸畑】

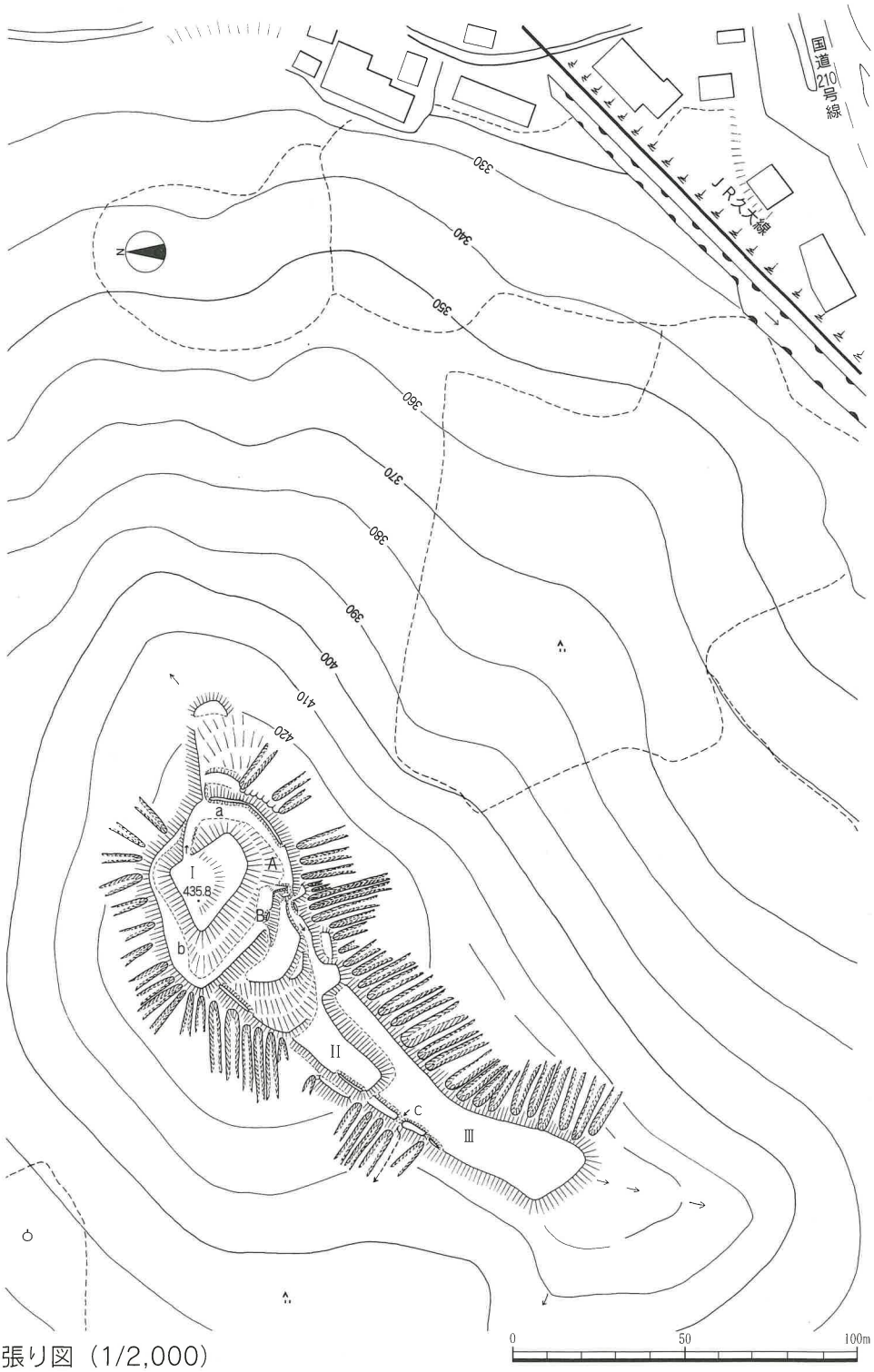
《立地》玖珠盆地西部の大字戸畑字戸上にある標高約436mの野田山の山頂部に位置する。平野部との比高差は約120mで、通称「城山」と地元では呼ばれている。東側から玖珠川が、野田山に突き当たるように流れ、南側へ折れる。南側の沖積地には、中島姓の民家が点在する。

《現状》山頂は杉山で、植林してからあまりあたっていないようで、雑木や大木も点在する。南側の畝状竪堀は、平成3年の台風被害による風倒木の処理により、小型貨物車で横断され、削られているものもある。

《構造》城の規模は全長約170mで、曲輪全体を58本の畝状竪堀で囲む形である。曲輪は3つ（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）確認でき、西側にいくほど低く、一番高い東側の曲輪Ⅰが主郭である。主郭Ⅰには、腰曲輪が2つ（a・b）ある。北側から西側に廻るものbと、東側から南側に廻るものaがある。aには土塁が残り、石垣を伴う虎口Aが明確に残る。石垣は、Aの左手に土塁を伴い、左に登り、虎口を入った右手下部にも石垣を造る。虎口Aは、他の虎口とは別格のように固めている。腰曲輪bには土塁を切るように、下の曲輪から入る虎口Bが残る。主郭に入るには、A・Bの2つの虎口があるが、Aだけに石垣を使っている。曲輪Ⅱには北西側に土塁が残る。土塁の基底部には石積みをしている。曲輪Ⅲには平虎口Cがあり、この城に入る虎口と思われる。Ⅲの南西側には急傾斜であるためか、竪堀はない。畝状竪堀は、全ての曲輪を囲むように北西から南に廻り、全部で58本ある。幅は2mのものから、5mのものまであり、土塁を伴い、長さは様々である。

玖珠町の中では、最も完璧に畝状の竪堀を造っている山城である。

《歴史》別名「野田峰山城」ともいわれ、中島尾張守の居城。天正年間、島津軍の玖珠郡侵入の時には、対岸の伐株山麓の陣ケ台布陣と呼応して、島津軍を大いに悩まし、魚返伊豆入道とともに後方へ撤退し、天正15年正月の角牟礼城跡籠城軍と合流したと伝える。（佐藤祐二）



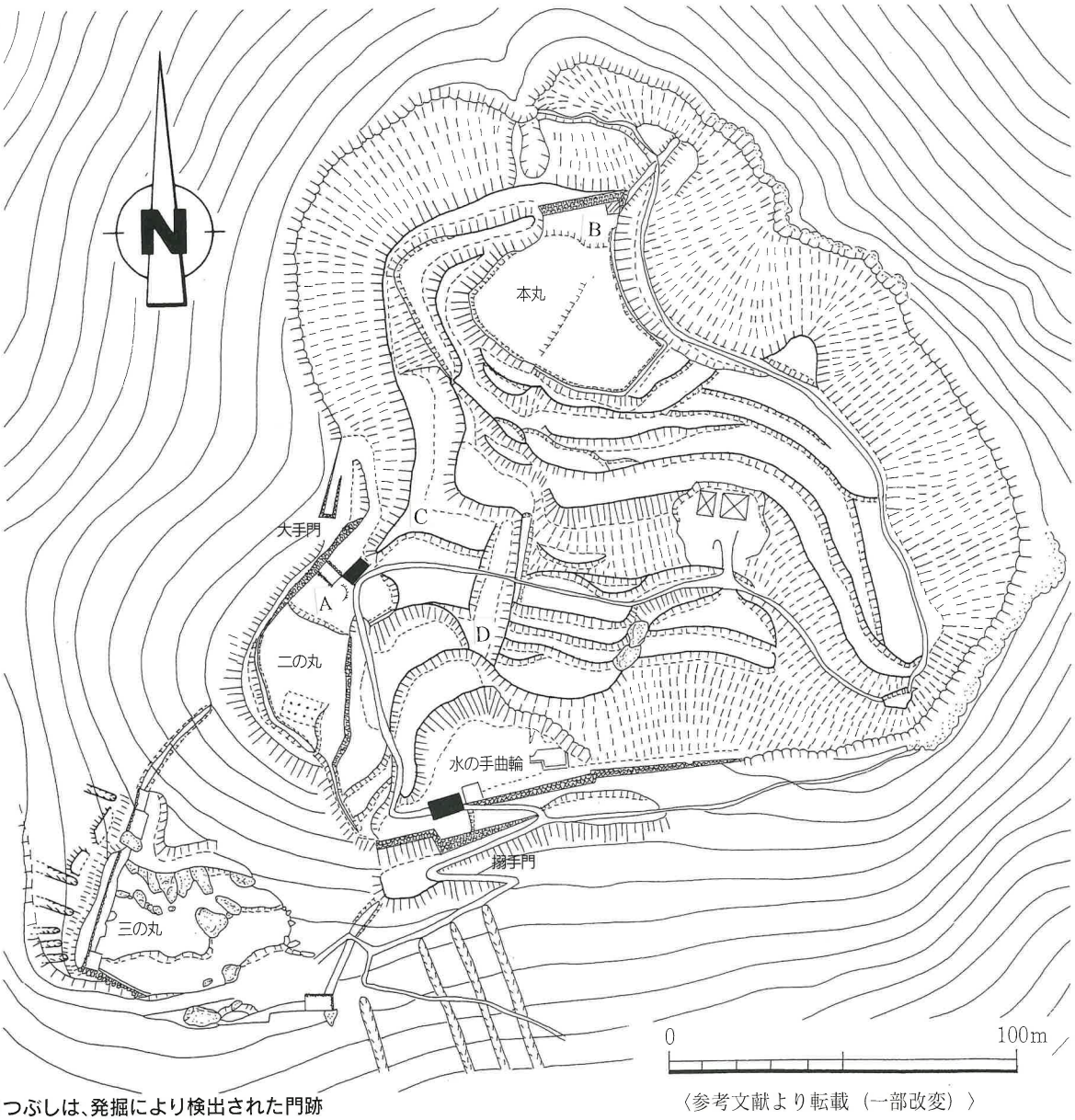
第167図 野田城縄張り図（1/2,000）

【533　角牟礼城　玖珠郡玖珠町大字森】

《立地》玖珠盆地北部の大字森字角埋山にある標高約577mの角埋山頂上部に位置する。角埋山は、伐株山城の北約4kmに位置し、玖珠川を挟んで対称的な位置にある。天然の要害にふさわしく、3方を切り立った険しい岸壁で囲まれ、平野部との比高差は約240mである。東側には森川が流れ、現在でも宇佐市や中津市に通じる主要道路である国道387号線が通り、玖珠郡と豊前地方を結ぶ交通の要衝地に位置する。

《現状》山頂部は、国指定の名勝耶馬渓や鳥獣保護区、保健保安林になっているため、自然木や大木が良く残っている。しかも、三の丸と呼ばれているところから本丸までは、町有地のため、後世に大きな改変もなく、植林されたままの杉山である。平成3年の台風被害の処理により、本丸部分は伐採している。遺構は、非常によく残っており、通称「馬洗い場」といわれる水の手曲輪には、現在も湧水がある。

《構造》現在、山頂に残る遺構は、近世初頭の縄張りであり、伝本丸、伝二の丸、伝水の手曲輪（通称馬洗い場、井戸曲輪）、伝三の丸といった4つの曲輪を高い石垣で囲み、自然の岩壁へつなぎ、いわゆる城全体が総石垣の形態に徹底された縄張りである。虎口は2ヶ所あり、その内二の丸の虎口（通称大手門跡）は、織豊系城郭に特有の攻撃的な外桝形であり、多折して入る二の門の位置Aから、瓦葺き、礎石建ての櫓門跡がほぼ完全な形で検出された。天目碗片やかんぬき金具が出土している。　伝本丸は、短辺43m、長辺53mの不定形な曲輪で、北を除く曲輪の縁辺部には土塁を巡らし、最も残りの良いのは、北側隅櫓Bの右側に取る付くように、高さ約1mが残る。北側には高さ5.5m、長さ25mの石垣が張り出すように造られ、この石垣の天端隅部Bには、6m×4mの隅櫓跡が検出された。本丸の虎口は、南側の土塁が開いた部分で、幅約4mの石敷きの階段が発見され、両側には数段の自然石を積み、平虎口としている。



※黒塗りつぶしは、発掘により検出された門跡

〈参考文献より転載（一部改変）〉

第168図 角牟礼城縄張り図（1/2,000）

中世期においても、一番高いこの曲輪が主郭であったと思われ、虎口もこの場所だと思われる。

本丸の東南側に続く尾根部は段々と大きめの曲輪が連なり、虎口の南側には、小規模な腰曲輪がジグザグに降りられるように連なっている。西側は良好な切岸が残り、北側から西へ廻る腰曲輪がある。ひとつは土塁がよく残り、ひとつは本丸北側石垣底部から伝大手門跡の土塁Cに出られるようになっている。このことからも、本丸石垣は、文禄期に増築してものと思われる。

伝本丸南斜面の小規模な曲輪の南には、1本の土塁を伴う大きめの竪堀Dがある。これは左右の曲輪群を遮断するように造られ、土塁や規模から見て、天正15年の豊薩戦に関連する遺構とも考えられる。

伝二の丸跡は、周囲を石垣で囲み、縁辺部には土塁が残る。曲輪内には、南側奥の三ノ丸を見渡せる位置に礎石建物跡が検出された。虎口は北側に平虎口であった。南側には搦手門の石垣に取り付くように土塁が下る。

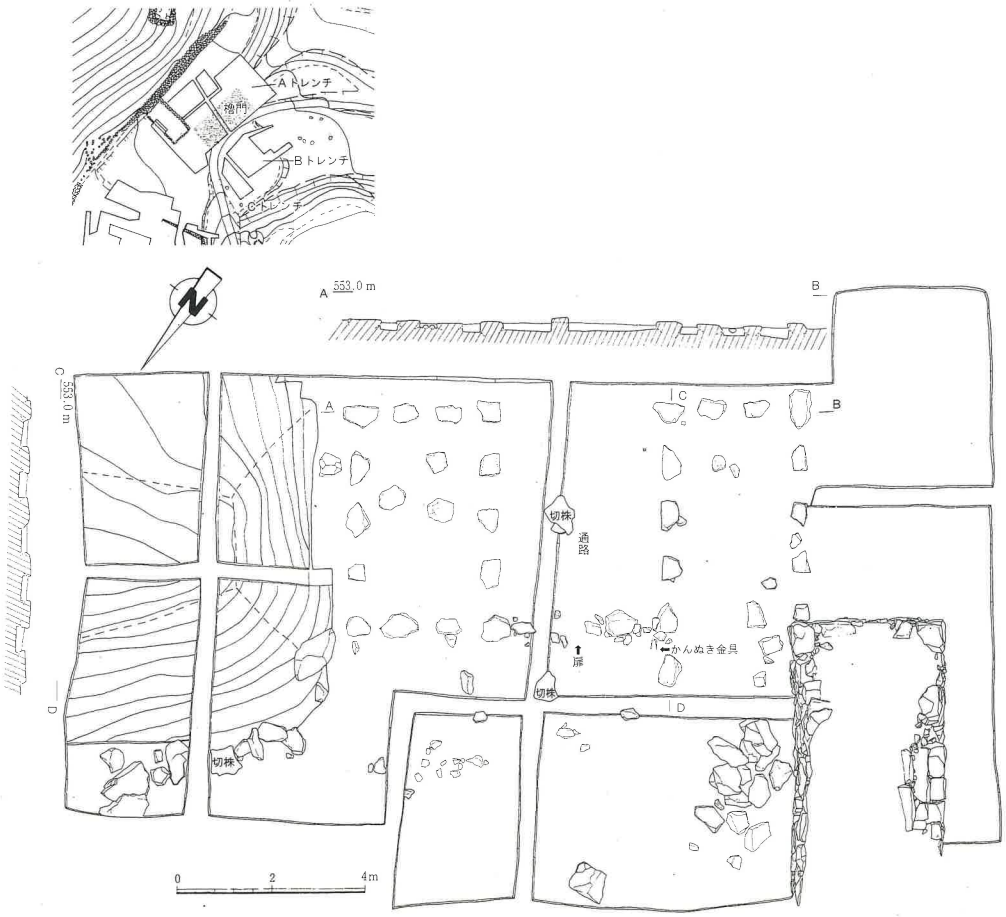
伝三の丸は、二の丸と比高差約30mある。曲輪内に大きめの岩が点在し、自然地形をそのまま残した状況で、人工的に造成したようには見えない。その三の丸の東側に4本、西側に6本の竪堀がある。竪堀より下には明確な遺構はない。三の丸石垣は東、南、西の3方にある。東側石垣は、伝搦手門跡石垣に取り付くように「登り石垣」となり、西側も二の丸に向かって登っていく。

虎口は、伝大手門跡と伝搦手門跡の2ヶ所で高石垣を伴い、2つとも自然の岸壁に取り付くように造られている。両門跡とも外桝形の形態で、発掘調査では、両門跡から同配置、同規模の櫓門が発見された。

これらの遺構から考えると、角牟礼城跡は、中世山城の古い曲輪群をいかし、文禄・慶長期には石垣を使った近世城郭へと移り変わった城であると考えられる。

《歴史》角牟礼城跡の名が文献上に始めて登場するのは、文明7(1475)年の志賀親家文書であり、その中には「くすつのむれの城らっきょ以後までも」とあり、これによりそれ以前に山城として築城されていたことがわかる。このようにもともとは、玖珠郡衆の一人、森氏の詰め城として存在していたと思われ、その後、天文2(1533)年の平井文書に「為角牟礼勤番、長々在城」と、3年の長野文書には「角牟礼新堀之事」と出てくるように、大友氏の指導のもと、城の改修が図られ、古くから豊前側からの侵入を防ぐ、豊後の境目の城であったと思われる。その後、周辺の玖珠郡衆による共同管理の城(番城)となり、天正15年の豊薩戦では唯一落城しなかった要害堅固な城であった。そして、文禄期に毛利高政が入り、現在の石垣を築き、近世城郭へと変貌した。(佐藤祐二)

参考文献『角牟礼城跡』(玖珠町教育委員会、2000年)



〈参考文献より転載〉

第169図 角牟礼城大手門実測図

【538　瀬戸遺跡　玖珠郡玖珠町大字帆足】

《立地》玖珠盆地に流れ込む森川の流域に開けた沖積地を見下ろす丘陵の先端に位置する。平野部との比高差は約50mである。狭く、深い谷を挟んで東隣の丘陵には帆足城がある。

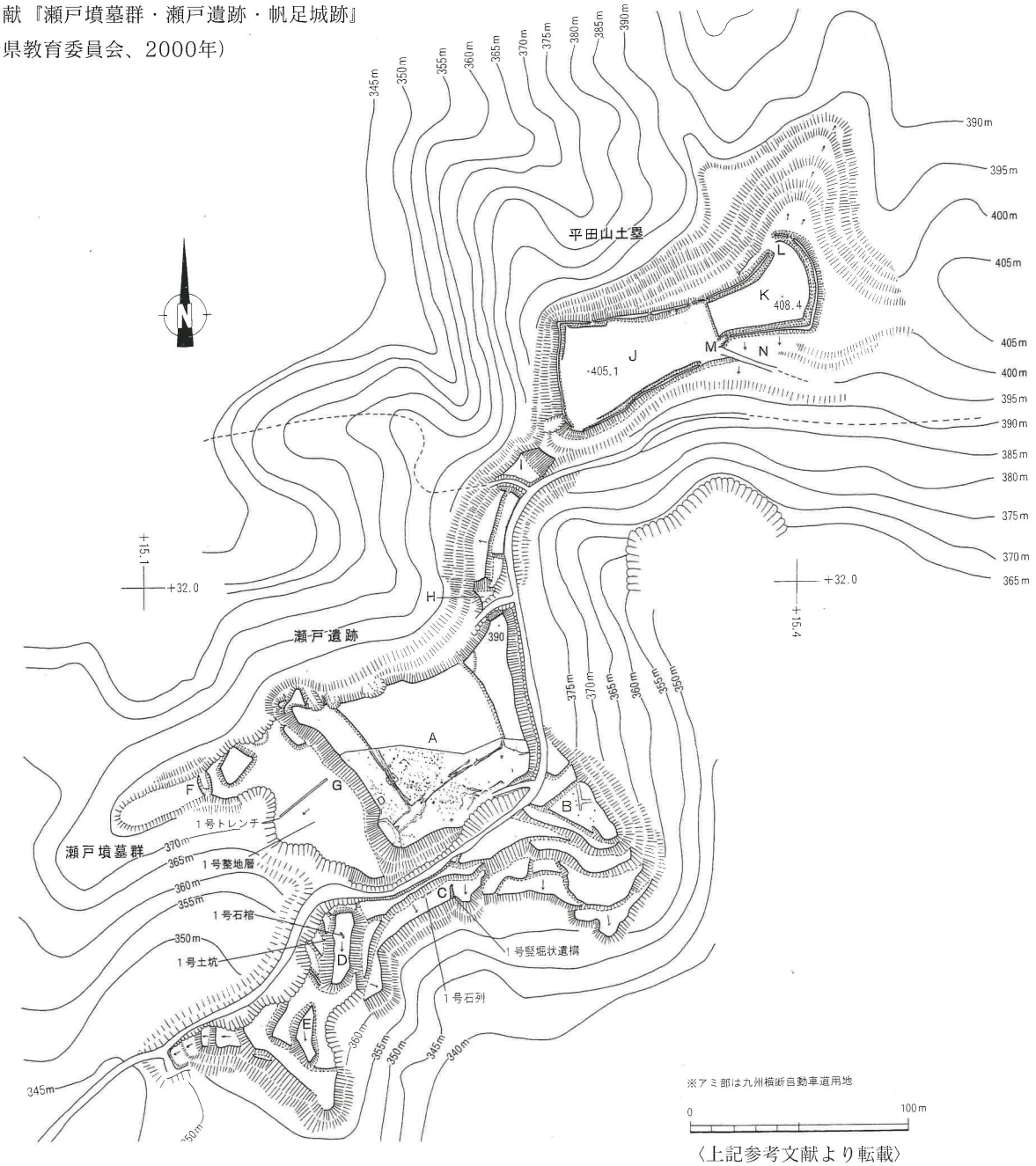
《現状》大分自動車道建設工事により半分が破壊されているが、残りは畑地などで良好に残る。

《構造》北から延びた丘陵が一度くびれ、大きく広がる地点に立地する。約60m四方の主郭（A）の回りを、幅10～15mの帯曲輪が「コ」字状に巡るものであり、地形に沿って東側の一辺が50cmほど高くなっている。帯曲輪と主郭面との間は、溝を挟んで僅かに帯曲輪面が低い程度である。帯曲輪の四つの角部は尾根につながり、階段状の曲輪群を築くが、北側と西側に延びる尾根には堀切（H、I）が入れられる。

発掘調査された部分は主郭と帯曲輪の約半分から三分の一程度であるが、掘立柱建物7棟と柵列などが検出されている。ただし、それらの主軸と曲輪の方向が一致しておらず、出土遺物も12世紀後半から13世紀前半を中心としており、方形の城郭遺構の形成前の遺構である可能性が高い。主郭西側の版築された整地層からは若干新しい13世紀後半から14世紀前半の遺物が出土しており、この時期以降に曲輪としての形成がなされたと考えられる。また、北側に延びる尾根を断ち切った2条の堀切は大規模であり、平田山土塁の形成に合わせて戦国期に作られたものと考えられる。

《歴史》文書や記録などには記載がない。出土遺物などから見ると、鎌倉期には居住機能を持った館的な施設が作られ、さらに南北朝期以降になって防御機能を備えた館城に改変されたものと考えられる。また、周辺の帆足城や平田山土塁の存在など、この地域の特異性を考えねばならないであろう。（小柳和宏）

参考文献『瀬戸墳墓群・瀬戸遺跡・帆足城跡』
（大分県教育委員会、2000年）



〈上記参考文献より転載〉

第170図 瀬戸遺跡縄張り図（1/3,000）

【539　帆足城　玖珠郡玖珠町大字帆足】

《立地》玖珠盆地に流れ込む森川によって形成された平野を見下ろす丘陵の先端部に立地する。隣接する丘陵には瀬戸遺跡がある。主郭のピークと谷部との比高差は約50mほどである。

《現状》大分自動車道玖珠インターチェンジ建設工事により完全に破壊された。

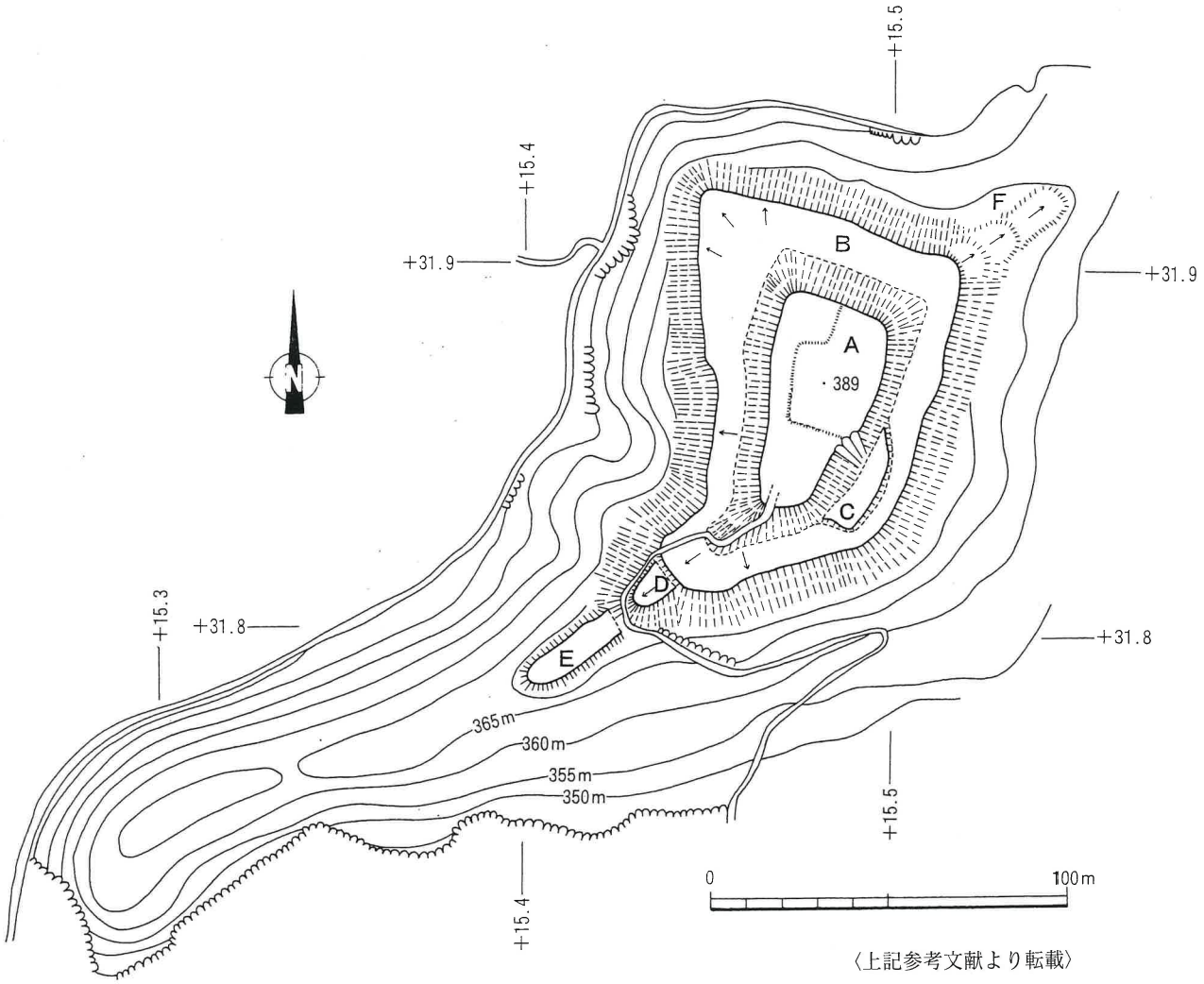
《構造》工事に先立つ発掘調査により、概要が知られる。それによると、南北66m、東西30～20mの長い台形状の主郭に対して、7～13mの比高差で幅10～20m近い帯状の曲輪が取り巻くという基本的な構造を持つ。そして、帯曲輪は南西部尾根に向かって突出しており、その先に二段の曲輪を設ける。

発掘調査によっては遺構、遺物がまったく検出されておらず、時期は不明であるが、遺構のあり方は単相を示しており、短期間の一時的な利用が想定できる。

《歴史》玖珠郡衆のひとりである帆足氏の城郭といわれていたが、隣接する瀬戸遺跡や平田山土塁が発見されたことにより、この地域全体での居住区の変遷や城郭の移り変わりを検討する必要が出てきた。（小柳和宏）

参考文献『瀬戸墳墓群・瀬戸遺跡・帆足城跡』（大分県教育委員会、2000年）

西部



〈上記参考文献より転載〉

第171図 帆足城縄張り図（1/2,000）

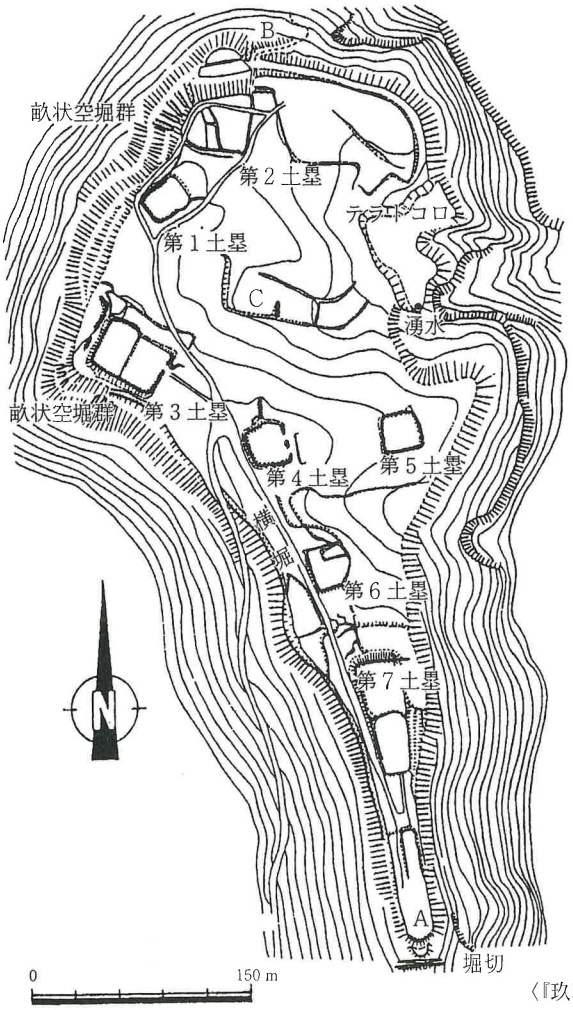
【540　伐株山城】

《立地》玖珠盆地南部の大字山田字高正寺にある標高約685mの伐株山の山頂部に位置する。平野部との比高差は約350mで、東西南北とも急斜面で、南側はかなり細く、岩場である。断崖絶壁のまさに天然の要害である。北側に玖珠川が流れ、西側には多くの遺跡がある小田地区がある。山頂からは玖珠盆地が一望でき、玖珠川を挟んで角牟礼城跡や、町内に点在する中世の城館すべてを見渡すことができる。

《現状》山頂部は自然公園となっており、ブランコ等いくつかの遊具と東屋2棟、トイレ1棟があり、広大な原野で、高校生に鍛練遠足場ともなっている。形は南北方向に杓子形をし、南側に向けて細くなっている。細かく見ると、南の狭く細くなるところが最も標高が高く、北に向かって低くなる。平坦ではなく、西辺から北辺に沿って尾根が廻り、その尾根から東へ向けて傾斜する。その傾斜した一番奥、東側に通称「テラドコロ」といわれるところがあり、山岳寺院の高勝寺があったところである。ここには湧水がある。

《構造》山頂部は非常に広く、全体を見ると、山城的な形状をしているところは、最南部の細い尾根部分である。この場所は、テレビ中継所の建設で少し現状が変わっているが、最南端の高いところから北側へ長方形の曲輪が連郭状に配置されて、第7土塁遺構あたりから、この尾根が北側に広がりを見せる。第7土塁遺構の傾斜部には段状に帯曲輪がついている。この第7土塁遺構から北側一帯は、連郭状には造れられておらず、曲輪群は窪地のテラドコロを取り巻くように、山頂の外辺部をほぼ等間隔に位置する。

これらの曲輪郡は、居館によく見られるような、4方または3方に土塁を廻らし、土塁の外側に部分的に溝を掘っている。規模は、第1土塁遺構が約40m、第3土塁遺構が短辺約30m、長辺約50mとやや大きく、土塁内部は上段と下段に区画され、北側に帯曲輪がついている。その他の土塁遺構は、ほぼ約30mと同様な大きさである。また、中央部の窪み部Cは、自然地形ではなく、緩やかに東へ傾斜するところを土塁や段で区画し、平場としているなど、土塁遺構の周辺だけでなく山頂の大半がなんらかの改変を受け、城郭の一部として構成されている。さらに、これらの曲輪郡の外辺部をみると、第2土塁遺構の西側斜面の畝状竪堀群、北側を廻る馬場といわれる切岸と道路状の帯曲輪や扇状の出曲輪と竪堀1条、第3土塁遺構の西側斜面部には畝状竪堀群、第7土塁遺構の最南端の尾根を遮断する堀切と出曲輪、また、その上の虎口Aにある弧状に廻る土塁が確認される。



〈『玖珠町史上巻』(玖珠町、2001年)より転載〉

第172図 伐株山城縄張り図（1/5,000）

またその他には、南側の連郭部の西側から第３土塁の西側まで高さ約１ｍ（下幅約２ｍ）の土塁を持つ幅約３～４ｍの横堀が確認できた。

この城に入る虎口は２ヶ所あり、第７土塁遺構の南側の細い尾根を切った堀切のところ虎口Ａと、第２土塁遺構の北側の竪堀を伴うＢと思われる。各曲輪の虎口は、第3、4、5、７土塁遺構とも土塁の一部が開いており、そこが出入口と考えられ、平虎口である。

《歴史》伐株山城は別名「高勝寺城」とも言われ、鎌倉時代から通称「テラドコロ」といわれている窪地に、高勝寺という山岳寺院があったといわれている。南北朝期の建武３（1336）年には、南朝方の拠点となり、この時、城には高勝寺の僧徒や小田氏、魚返氏などが立て篭もり、それに対し、北朝側には、一色頼行と今川四郎を大将として、野上氏や綾垣氏、帆足氏などが攻撃軍に加わり、玖珠郡衆も双方に分かれて戦った。戦さは落城まで8ヶ月にも及び、すさまじい攻防戦であったといわれている。この時期においても「高勝寺之城」と呼ばれている。その後も、応安６（1373）年に田原氏の玖珠郡進出に際しても、小田氏が立て篭もり、さらに、永正13（1516）年には、巧綱親満の謀反に際しても、玖珠郡衆による親満派の拠点して高勝寺の名が見える。

つまり、室町時代においても寺が存続していることが史料上確認されているが、この高勝寺城がどのような構造であったのかは現段階ではわからない。

そして、天正14（1586）年12月、島津軍の侵入の際には、中嶋氏や魚返氏などの玖珠郡衆が、その一族約600人と籠城して、城は天然の要害に守られ、攻撃軍は攻めあぐんでいたが、同月24日に城内から内通者が出て、城に火をかけられ、落城した。これ以後、伐株山城跡は長い歴史の幕を閉じる。

昭和54年から58年にかけては発掘調査が行われ、出土遺物は15世紀後半から16世紀前半代と、16世紀後半代に大別される。（佐藤祐二）

参考文献『伐採山城跡』（玖珠町教育委員会、1984年）

〈上記参考文献より転載（一部改変）〉

第112図 伐株山城第１土塁内部の遺構（1/500）

【544　城ヶ尾城　玖珠郡九重町大字東野字長釣】

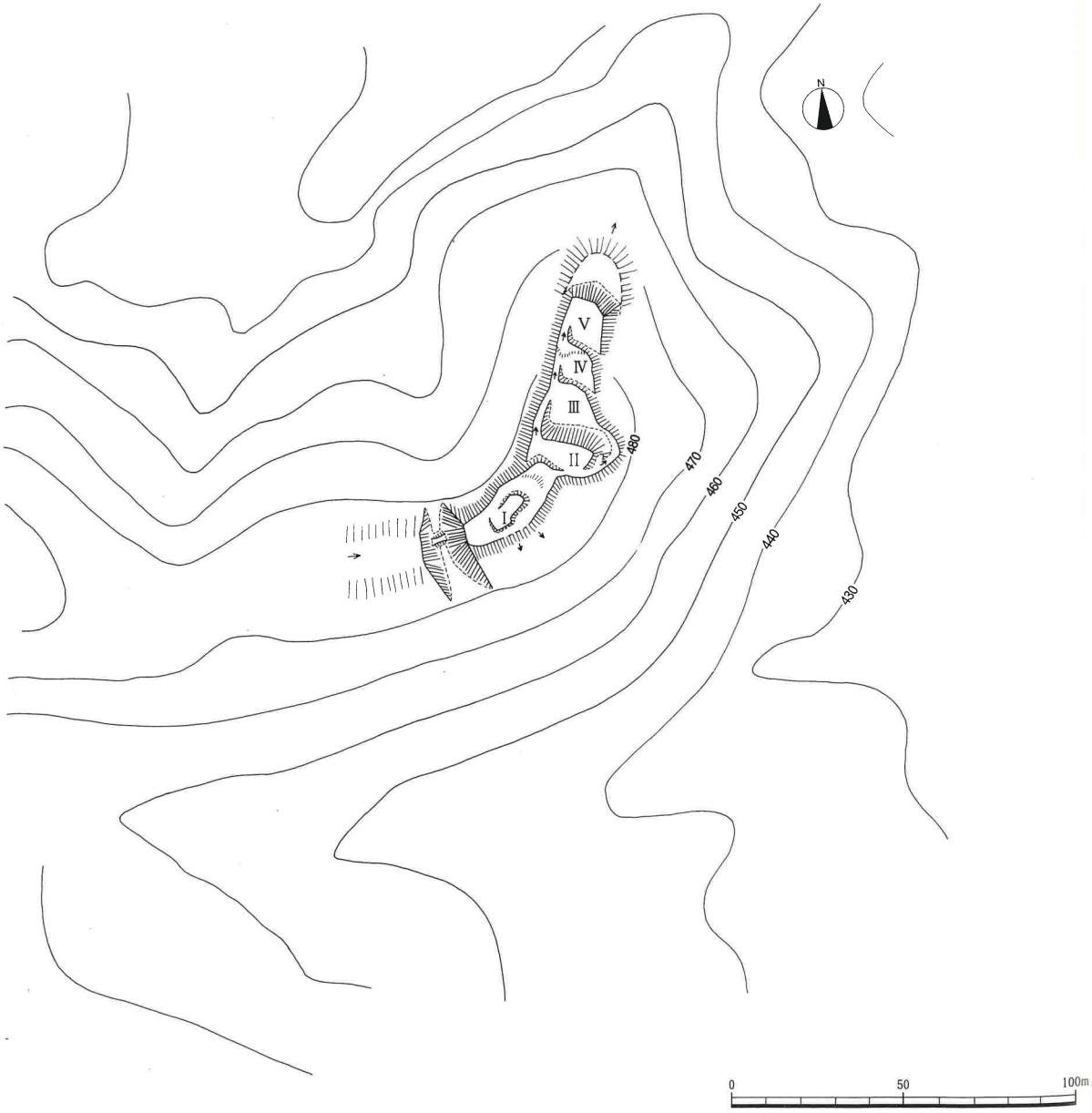
《立地》町田川を望む標高480mの東側の尾根の先端に位置する。麓の集落からの比高差は80mである。

《現状》城域には雑木林が広がっていて遺構の残存状況は良好である。集落とは隔絶されているため、人の手が加わったような形跡は無い。

《構造》尾根の先端を幅約12m、長さ約8mの堀切で切って城域にしている。この堀切には土橋が存在していて、ここが城虎口として機能していたと考えられる。堀切の他に竪堀などは城域の周りには確認できなかった。

尾根に沿って階段状に曲輪が4つ（II～V）存在し、曲輪Vから曲輪IIの西側には土塁状に通路が確認できる。曲輪IIIから曲輪IIの東側にも通路と思われる遺構がある。主郭Iの中央には略長方形で数十cmの高まりが確認できる。

《歴史》文書、記録に記載が無く、歴史的背景は不明である。（畔津宏幸）



第174図 城ヶ尾城縄張り図（1/2,000）

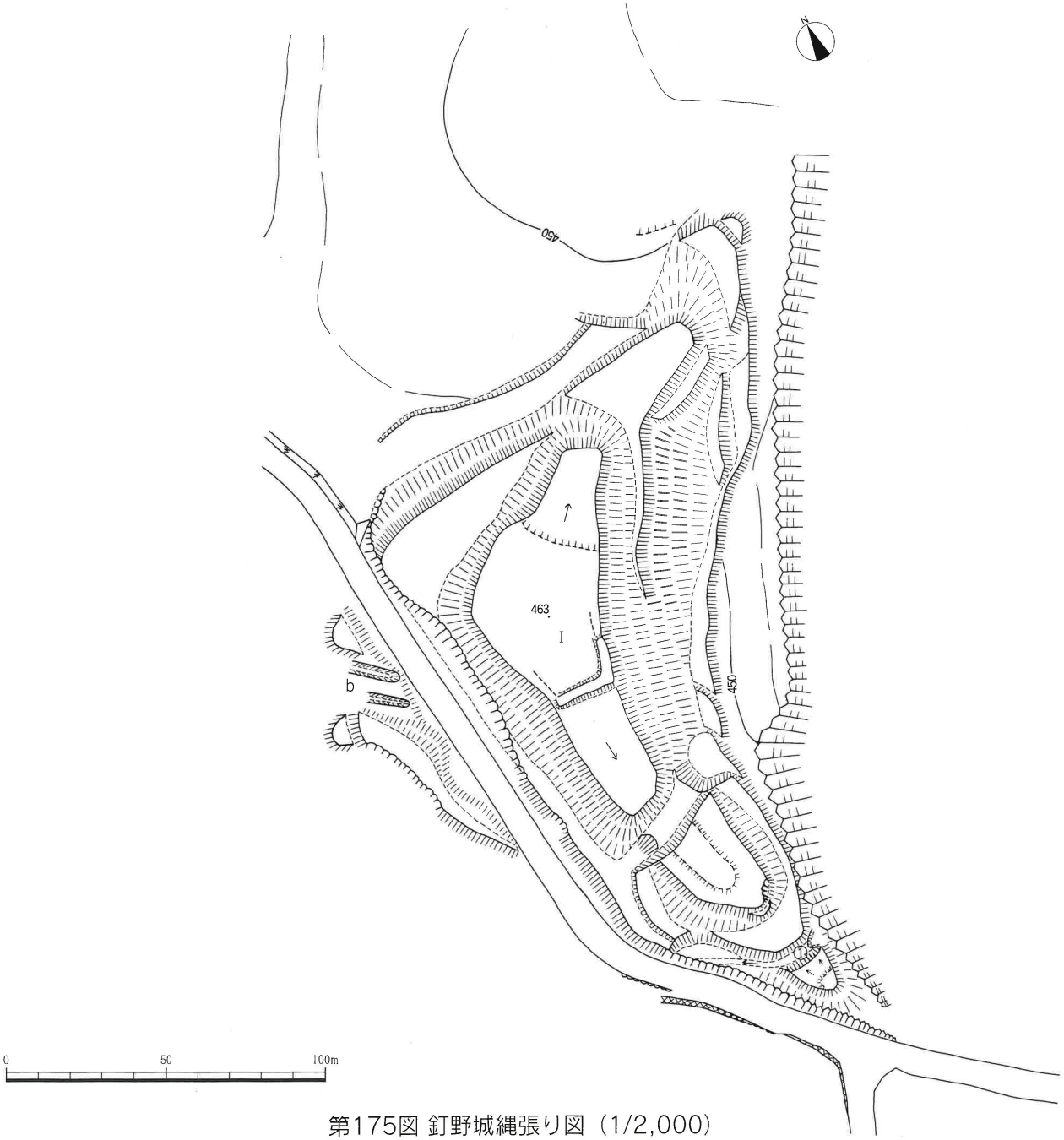
【549　釘野城　玖珠郡九重町大字後野上字釘野】

《立地》玖珠川本流とその支流である野上川が合流する半島状の河岸段丘のつけ根部分に立地する。かって河岸段丘上には３つの小丘陵があったが、城郭遺構の残る最南側の１つを残し２つは削平された。釘野城は標高４６３mで、山麓北東部の「釘野千軒遺跡」との比高差は43mである。釘野千軒遺跡では、16世紀末に比定できる掘立柱建物跡47棟が妻側の軒を連ねた状態で検出された。

《現状》釘野城の現状は山林で、城地の西側は旧佐賀県道（現町道釘野－後野上線）によって切られ、その後の拡幅工事によって腰曲輪の一部も消失した。また本来主郭部を一周していた土塁も所有者によって取り除かれ、南側隅に一部を残すのみとなっている。

《構造》釘野城は３方が河川によって遮断され、特に東と西側は急な崖となっている。唯一南側から丘陵の尾根に繋がる位置に２本の堀切を設け、堀切①には竪堀を連結させる。縄張りは、基本的には土塁で四方を囲む主郭と腰曲輪からなる単郭式の山城で、主郭部分を中心に南北方向に翼状に曲輪を配する。西斜面には帯曲輪から横への移動を遮断するため２条の竪堀を設けている。竪堀の存在と鋭い切岸から見て、戦国的要素をもった城である。

《歴史》中世文書や軍記類には記載がないが、「小田原系図」に「小田原鎮郷釘野城主」とある。また肥後細川藩家臣団の「先祖付」小田原平十郎の項に、「一、私高祖父小田原左京亮儀大友修理大夫殿家来小田原三河守倅ニ而、三河守家督相続仕、右修理大夫殿ヨリ息大友左衛門佐殿其息大友左兵衛佐殿此三人之家来ニ而、豊後国玖珠郡釘野ニ居住仕由御座候、」とあるのみで、詳細は不明である。（竹野孝一郎）



第175図 釘野城縄張り図（1/2,000）

【552　松木城　玖珠郡九重町大字松木字竜門寺】

《立地》玖珠川の支流である松木川には、筑紫溶岩台地を削ってできた名勝耶馬溪竜門滝がある。松木城は、鎌倉時代に宋から帰ってきた蘭渓禅師によって創建されたと伝えられる竜門寺の背後地、標高495,2mの山頂部に立地する。小滝橋脇の水準点と松木城との比高差は、約91mである。松木城の北側には近世の永山布政所道があり、この場所が府内から日出生を経て筑後方面へとぬける要衝の地であった。

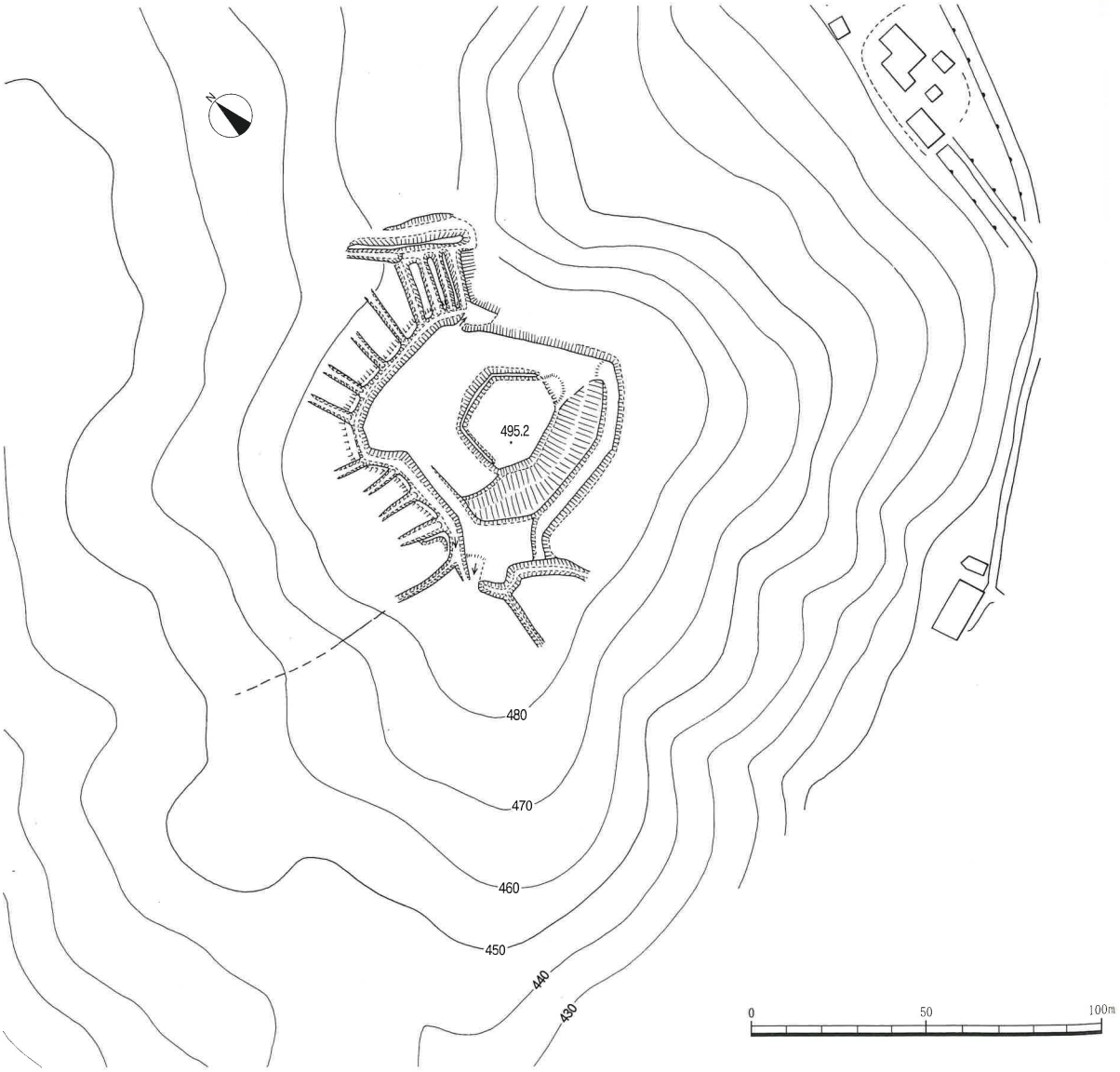
《現状》等高線が密集する南側から南東部斜面は風致保安林に指定され、広葉樹の自然林が残っている。主郭部から北・西側には杉が植林されているが、遺構の残存状況は良い。

《構造》松木城は、基本的には主郭と腰曲輪からなる単郭式の山城である。主郭部は南側を裾の長い切岸で、西・北・東側を土塁で囲み、さらにその周囲に「コ」字状に腰曲輪を廻らしている。東北に延びる細尾根部は2条の堀切で遮断し、内側の緩傾斜部分を4条の畝状空堀群で防備している。

南から東側の急崖となるところ以外の緩傾斜部には、横堀と連接する11本の竪堀を放射状に配している。横堀にクランクをつけ、南西隅と北西隅を大きく張り出させ、特に南西部には横堀に開口部が設けられ、平入りではあるが内枡状の虎口空間を形成している。こうした外縁部を高度に防御する特徴は、戦国時代末期の特徴であり、天正14・15年の豊薩戦にむけて改修されたと考えられる。

《歴史》松木城の所在する丘陵は、通称「城ン台」と呼ばれている。永正13(1516)年、大友氏の加判衆朽網親満が直入郡久住町山野城を本拠として反乱を起こしたとき、玖珠郡衆の松木氏もこれに加担したため、永正14年2月に大友氏の兵によって攻撃された。永正14年2月28・29日付の「大友親安感状」には、「於玖珠郡松木合戦」・「於玖珠郡松木残党懸合、遂合戦」と見えるのみで、松木城が使われたかどうかは分からない。

天正15(1586)年2月7日付の「島津義珍書状」には、「‥先々松木与申城令落去‥」とあり、豊薩戦で松木城が使われ落城したことが見える。(竹野孝一郎)



第176図 松木城縄張り図 (1/2,000)

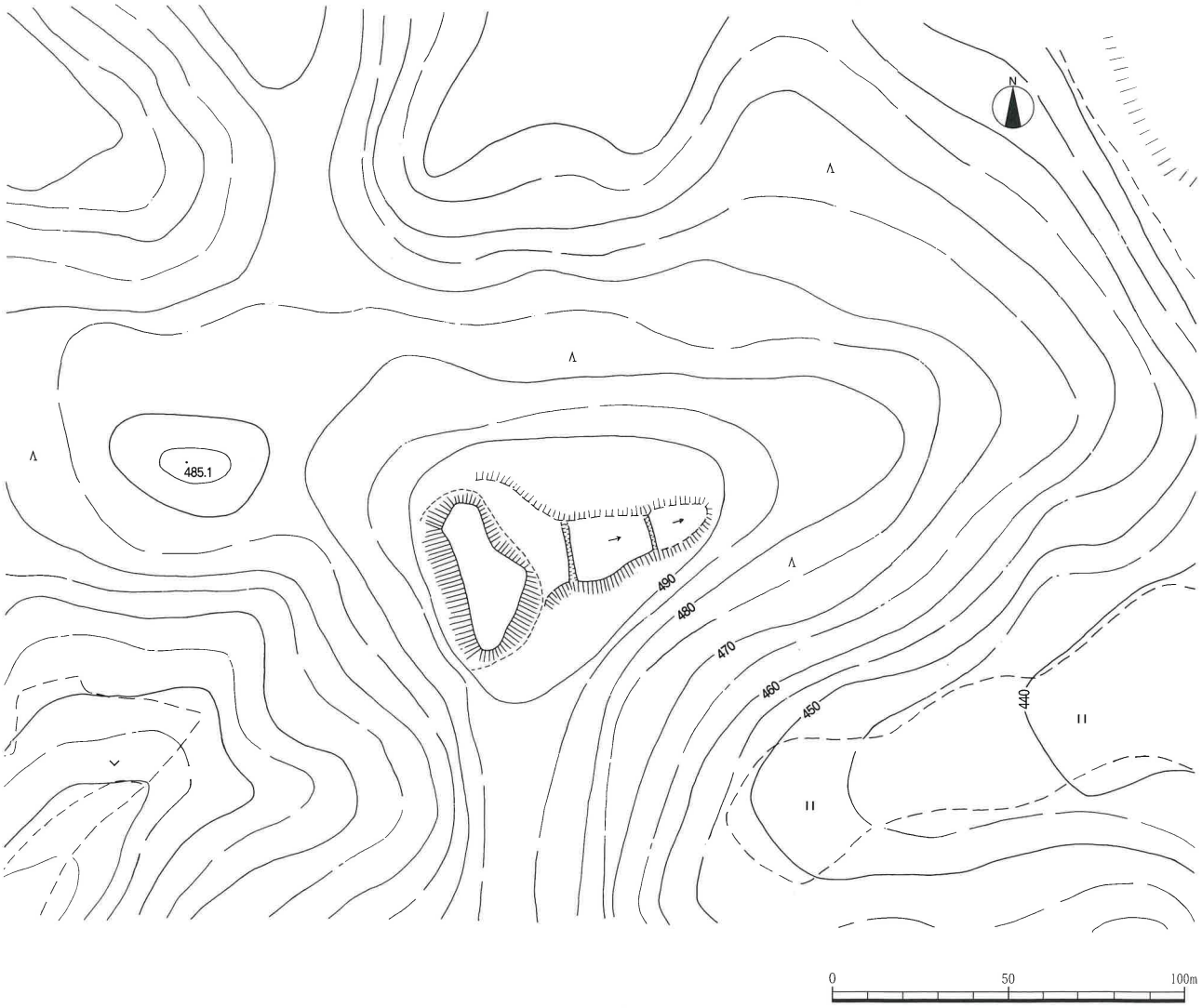
【553　陣ノ内山城　玖珠郡九重町大字町田字下恵良】

《立地》小倉岳から北西部に延びる稜線の末端部付近に位置し、標高495mの山頂に立地する。南西側の川東集落との比高差は約75mで、岐部城から直線距離にして約1.6ｋｍの位置にある。

《現状》現状は山林原野で、陣ノ内山山頂に小規模な２本の堀切があったが、一部は鉄塔建設で破壊された。

《構造》陣ノ内山城は、地形に合わせ削平した主郭と腰曲輪からなる単郭式の山城である。比較的等高線の緩やかな東側を２本の堀切で遮断し、主郭周囲は鋭い切岸で防御している。

《歴史》『豊球雑考』によると、「岐部ガ一類、近辺の土民等合六百八十余人、陣之内山ニ切籠、」るとあり、岐部氏の一類が豊薩戦の際土民と共に籠った城である。同資料には他に「六ヶ所城、其外の切立ヲ構へ引籠ル」という記述が見られる。陣ノ内山城は粟野の城ヶ尾城、田野の乾城、粟野の向ン城と類似した縄張りであり、これらの城は豊薩戦における土民等の籠った一連の「切立」と思われる。（竹野孝一郎）



第177図 陣ノ内山城縄張り図（1/2,000）

【554　殿山城　玖珠郡九重町大字町田字荒田】

《立地》標高770mの小倉岳から派生する稜線の末端、標高約470mの舌状丘陵上に立地する。西側には谷を挟んで陣ノ内山城が所在する。

《現状》殿山は杉の植林がなされ、南側の細尾根部の堀切の一部は道によって壊されているが、全体的には遺構の残存状況は良い。

《構造》舌状丘陵の南側の稜線が延びる細尾根部を1本の堀切で遮断し、城地としている。主郭と腰曲輪は自然地形に合わせ削平されている。腰曲輪は主郭を鉢巻状に一周し、等高線の緩やかな東側に土塁を設け防御線としている。

《歴史》文書、記録類に記載がなく、詳細は分からない。(竹野孝一郎)

第178図 殿山城縄張り図（1/2,000）

【558　野上城　玖珠郡九重町大字三ツ群】

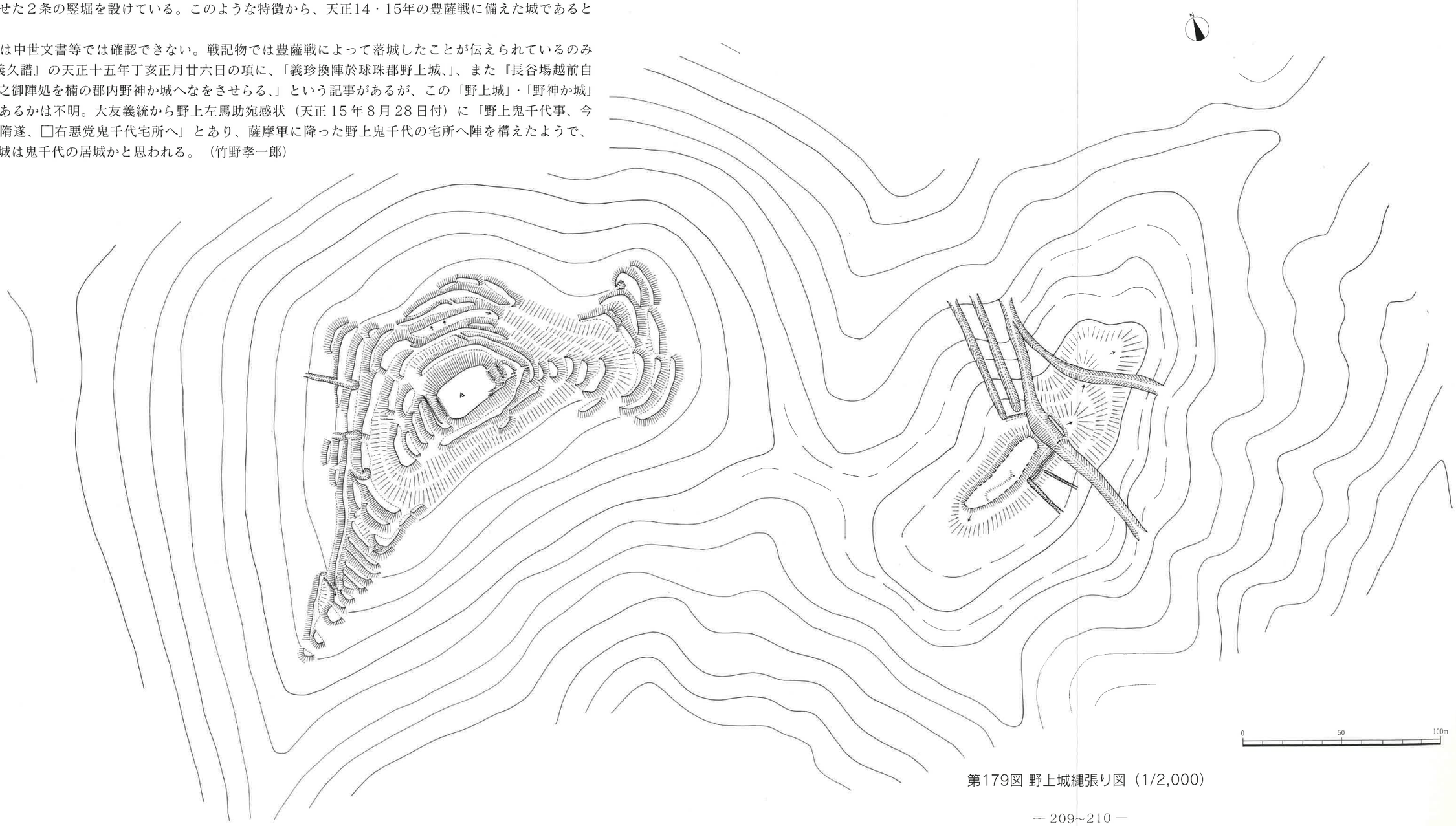
《立地》野上城は九重町の東端、湯布院町と境する水分峠付近に位置する。玖珠川の支流野上川の南側の独立峰の城山山頂部及び傾斜地に立地する。さらに城山の南東部には小城山（標高660m）があり、それぞれ独立峰をなしている。城山の標高は710mで、国道210号線との比高差は約200mである。

《現状》城山は杉及び檜の人工林で、小城山は原野となっているが、遺構の残存状況は良い。城山南西部の一部は、採石が行われているが、幸い城郭部分には至っていない。

《構造》城山野上城の縄張りは、山頂部に切岸と一部土塁で囲った長方形の主郭（東西約29m、南北約21m）を設け、主郭の周囲の斜面には切岸による帯曲輪や削平段、さらに西斜面には腰曲輪から横への移動を遮断するため、２条の竪堀を設けている。城山野上城は、竪堀の存在から天文～永禄期と考えられる。

城山山頂から南東へ約250mの位置に、小城山野上城がある。丘陵頂部には、周囲を地形に合わせた切岸によって、細長い平場を造りだしている。その東側には大規模で長大な２条の堀切（幅約12.3m、深さ2.3m）を設け、斜面と尾根筋を遮断している。堀切内側の北と南の斜面には、平場と平行させた横堀を堀切に連結させ、さらに横堀と組み合わせた２条の竪堀を設けている。このような特徴から、天正14・15年の豊薩戦に備えた城であると推測される。

《歴史》野上城は中世文書等では確認できない。戦記物では豊薩戦によって落城したことが伝えられているのみである。『島津義久譜』の天正十五年丁亥正月廿六日の項に、「義珍換陣於球珠郡野上城、」、また『長谷場越前自記』に「義久様之御陣処を楠の郡内野神か城へなをさせらる、」という記事があるが、この「野上城」・「野神か城」がこの野上城であるかは不明。大友義統から野上左馬助宛感状（天正15年8月28日付）に「野上鬼千代事、今度薩摩之逆徒令隋遂、□右悪党鬼千代宅所へ」とあり、薩摩軍に降った野上鬼千代の宅所へ陣を構えたようで、この場合の野上城は鬼千代の居城かと思われる。（竹野孝一郎）



第179図 野上城縄張り図（1/2,000）

【559　岐部城跡　玖珠郡九重町大字野田】

《立地》九重町の南西方に標高770mの小倉岳がそびえ、その西方を北流する町田川下流域の潜石あり、町田川右岸の通称「シロトコ」と呼ばれる標高約506mの丘陵先端部に築かれている。城跡の北・南側は深い谷を形成し、東は小倉岳の裾野から伸びる小さくくびれた尾根が連なる。この地区は、熊本県阿蘇郡小国町と境を接し、玖珠盆地から肥後方面へ通じる交通の要衝地である。

《現状》周辺には「シロトコ」(城床)、「マトバ」(的場)、「タチムラ」(立村)、「ナカジョウ」(中城)、「タケノシタ」(竹ノ下)、「オオキド」(大木戸)などの城館地名がよく残り、山城北麓の河岸段丘上には立村(館)屋敷跡と呼ばれている。城跡は、山林となっており、遺存状態は良好である。

《構造》山城は、130mほどの規模である。丘陵先端部を城域としており、主郭は、南側の三方を大規模な土塁と切岸で囲った30×25mの略長方形の曲輪Ⅰが考えられ、東側土塁が一部食い違い開いているところが虎口ⓐと推定される。また、丘陵先端部の小高い台状の平場は、おそらく櫓台ⓑであろう。周辺部は、切岸による帯曲輪や斜面部の削平段によって構成される。城内に通じる北東側の細尾根を三条の大規模な堀切とそれをのばした竪堀によって遮断し、主郭周囲の斜面部を40条の畝状空堀群(北東の先端部は一部小規模な横堀と組み合わせる)で防禦する。本城の縄張りは、櫓台をもつ単郭の曲輪を食違い虎口、大規模な土塁、切岸などで固める内部の構えとともに、畝状空堀群や大規模な堀切、竪堀といった曲輪外辺部の構えを極めて強固にしていることが特徴である。

《歴史》城主は、国東半島の浦辺水軍の一派で紀氏一族の岐部氏と伝えられ、天文12(1543)年岐部弾正忠に綾垣名4町2段などが譲られるなど、野上氏や恵良氏らとともに玖珠盆地西部への進出が見られる。岐部城に関連する具体的な記録は少ないが、「嶋津豊後江発向之事」(文書番号記録部1/2)によれば、肥後口から豊後に侵入した島津義久の弟、義弘は、天正14年12月6日岡城の攻略に向い、新納忠元以下6000余騎は玖珠郡の津ノ無礼(角牟礼)城を攻め、義弘本隊も天正15年正月26日には野上城に入っている。これにより、玖珠郡の諸城の大半は旗下に入り、岐部、恵良、伐株各城及び肥後の小国の北里氏らも降ったと記される。

なお、周辺の館跡地名の存在などから、居館と町田川流域の集落を見渡せる背後の丘陵上に詰城(岐部城)を築いたと考えられる。(玉永光洋)

第180図 岐部城縄張り図 (1/2,000)

表8　掲載城館一覧表（1）

番号	城館名	作図者	調査員	協力者・協力機関	作図（調査）年月日	備考
005	末廣城		原田・薬師寺		平成12年2月8日	左は現地調査の日付
007	八並城		薬師寺・東保		平成12年3月9日	〃
014	中尾城		原田・薬師寺		平成12年2月24日	〃
015	犬丸城		原田・薬師寺		平成12年2月24日	〃
016	岩丸城		薬師寺・東保		平成12年3月22日	〃
017	池永城		原田・薬師寺		平成12年2月8日	〃
023	坂手隈城	小柳	小柳・遠部		平成13年6月15日	〃
026	中津城					中津市教育委員会提供
027	妙相寺城					
028	仮屋敷遺跡					
029	長久寺城	林	小柳・大久保・〆野		平成10年1月16日	
030	福島城		原田		平成12年3月6日	
033	屋山城	小柳	林・小柳・槙島・畔津		平成15年5月18日、24日	県立歴史民俗資料館作成の測量図を補足、修正
037	佐野鞍懸城	玉永	小柳・大久保		平成7年12月27日	
039	奥畑鞍懸城	小柳	小柳・豊田		平成10年1月12日、13日	
048	知恩寺西域					報告書から転載
051	蕗政所跡					報告書から転載
053	烏帽子岳城	小柳	井川・薬師寺		平成12年1月25日～26日	県立歴史民俗資料館作成の測量図を補足、修正
059	ズリヤネ城					報告書から転載
069	一ツ戸城					木島氏論考より転載
078	長岩城	小柳・首藤	高橋信武・甲斐・小柳・永井・首藤・五十川	長岩城址保存会、耶馬渓町教育委員会	平成11年3月15日～18日、23日～26日、4月12日、13日、16日	
081	馬台城	小柳	竹野・小柳・畔津・井上		平成15年5月2日	
086	古庄屋遺跡					報告書から転載
090	吉久遺跡		井川		平成12年2月9日	左は現地調査の日付
091	高山城（a）	小柳	林・小柳		平成9年1月17日	
091	高山城（b）	小柳	小林・小柳・石堂		平成13年2月26日	
091	高山城（c）	小柳	小林・小柳・石堂		平成13年2月26日	
095	宮熊城		薬師寺・野口		平成12年3月2日、平成8年度	
099	荒木城		原田・平野		平成12年2月24日	左は現地調査の日付
100	高森城					宇佐市教育委員会提供ほか
107	山本砦	小柳	林・小柳		平成9年1月16日	
108	山本切寄					宇佐市教育委員会提供ほか
115	西原遺跡		小柳・東保		平成12年2月15日	左は現地調査の日付
116	時枝城		小柳・東保		平成12年2月15日	
117	平田城		井川		平成12年2月16日	
120	宇佐公通館跡		原田・平野・江島・東保		平成12年2月24日	
126	光岡城					宇佐市教育委員会提供
130	広崎氏切寄		平野・東保		平成12年3月7日	左は現地調査の日付
132	敷田城		野口・平野・東保・薬師寺		平成12年3月6日	〃
134	高家城		原田・平野		平成12年3月1日	〃
138	藤田遺跡（宇佐町含む）					報告書より転載
149	城山城	小柳	小林・小柳・石堂		平成13年2月27日	
150	和気城	林	〆野		平成12年1月19日	
167	副城	小柳	小柳・井川・東保・平野	院内町教育委員会	平成12年1月7日、17日	院内町教育委員会作成の測量図（1,000分1）を基に作図
172	妙見岳城	小柳・甲斐・野口・江島	甲斐・小柳・野口・江島・井川・永易		平成12年2月7日～10日、14日～17日、22日～25日、29日、3月1日～3日、6日、13日	
174	赤井城	小柳	小柳・槙島・畔津		平成15年5月20日～22日	
177	佐田城（a），（d）	玉永	玉永・林・大久保・〆野・染矢	安心院町教育委員会	平成7年12月18日～20日、22日、25日、26日	
	佐田城（b）	小柳	小柳・首藤	安心院町教育委員会	平成11年1月12日、13日	
	佐田城（c）	小柳	小柳・首藤	安心院町教育委員会	平成11年2月2日	
	佐田城（e）	小柳	小柳・首藤	安心院町教育委員会	平成11年1月28日	
	佐田城（g）	小柳	小柳・首藤	安心院町教育委員会	平成11年1月18日～20日、22日、25日、26日	
189	龍王城					木島氏論考より転載
192	金輪城	小柳	小柳・豊田	岩尾（山香町教委）	平成10年1月27日	
193	田原山城					報告書より転載
198	真玉氏館					
201	竹の尾城	坪根・平川・小柳	小柳・槙島・畔津		平成10年2月26日～29日、平成15年5月8日補足	
204	生桑城	小柳	小柳・平川・畔津		平成15年5月8日	

表9　掲載城館一覧表（2）

番号	城館名	作図者	調査員	協力者・協力機関	作図（調査）年月日	備考
206	奈多城	小柳・坪根・平川	小柳・槙島・畔津・坪根・平川		平成10年2月24日～25日、平成15年4月16日補足	
211	ふいが城		小柳			報告書より転載
220	岐部城	小柳	平川	国見町教育委員会		
221	成仏城	小柳	藤本	宮川、小深田、溝部	平成8年11月18日～20日	
222	御所の陣	小柳	藤本	宮川、小深田、溝部	平成8年12月2日、4日	
223	小城	小柳	藤本	宮川、小深田、溝部	平成8年12月9日、11日	
224	雄渡牟礼城	小柳	平川	宮川、小深田、溝部	平成8年12月11日	
225	亀城	小柳	小林	宮川、小深田、溝部	平成8年11月12日、13日、15日	
232	吉広城	小柳			平成12年12月8日	
238	安岐城		槙島・畔津			
251	真嶽城	小柳	高松・神田・藤本・平川・坪根・小柳		平成15年4月10日	
253	鹿鳴越城	玉永	玉永・江田・染矢		平成8年1月16日～18日、22日	
260	甲ノ尾山城	玉永	豊田		平成8年1月9日～11日	
261	小松城	小柳	豊田	岩尾（山香町教委）	平成10年1月28日	
262	龍ケ鼻城	小柳	槙島・畔津	岩尾（山香町教委）	平成10年1月28日	
267	日指城	小柳	豊田		平成15年4月15日	
268	樋掛城	小柳		岩尾（山香町教委）	平成10年1月26日	
272	立石城	小柳	首藤、豊田、平川、坪根		平成11年2月22日、23日、3月3日	
279	天面山城	宮武			平成7年11月30日	
285	大友氏館（城下町含む）					
287	高崎城	宮武	玉永、小柳、坪根		平成15年2月14日、12月12日	大分市作成の測量図に加筆修成
293	上野大友館					玉永氏論考より転載
295	千歳城	小柳	田中・坪根		平成8年1月29日、30日	
299	鶴ケ城	高畠・小柳	槙島・畔津・坪根・五十川		平成15年4月23日	高畠氏作図の全体図の内、中心郭のみ小柳が補足、修正
300	小岳城	小柳	槙島・畔津・古庄・松田		平成15年4月21日、22日	
307	丹生島城					
308	水ケ城	諸岡	小野		平成10年2月11日、3月23日、29日	
317	久保泊城	豊田	諸岡・小野		平成12年2月16日	
342	権現岳城	玉永	小柳		平成8年11月25日～27日	
351	天屋摺木砦	玉永	高橋徹・小柳・神田		平成8年1月23日、24日	
352	烏帽子岳城	玉永	小柳・坪根	佐藤（佐賀関町教委）	平成8年11月25日～27日	
359	八幡山城	小柳	小林		平成13年2月19日、20日	
362	褥牟礼城	小柳	山内・小林		平成13年2月22日、23日、3月1日、2日	報告書所収の測量図を、現地調査の上縄張り図に書き直した。
366	小田山城	（高畠）				報告書より転載
368	彦岳城	小野	諸岡	五十川千代見	平成10年2月11日、4月4日	
372	朝日岳城	玉永	小野・小柳	軸丸（宇目町文化財調査員）	平成8年12月24日、25日	
374	城ノ越古城	小柳	高橋信武・薬師寺・五十川		平成11年6月18日、22日	
375	蔵小野砦	玉永	小野		平成8年12月25日、26日	
376	荒内砦	小野・小柳	諸岡・槙島・畔津	軸丸（宇目町文化財調査員）	平成11年3月9日	小野作図の縄張り図を小柳が加筆
378	駒鳴砦	玉永	小野		平成8年12月26日	
379	皿内砦	小野	諸岡		平成11年3月10日	
381	用来城	小野・小柳	諸岡・槙島・畔津		平成11年3月9日、10日、平成15年5月1日	小野作図の縄張り図を小柳が加筆
383	宇土山砦	小野・小柳	諸岡・槙島・矢部		平成12年2月16日、平成15年4月28日	小野作図の縄張り図を小柳が加筆
386	高城	中西			平成13年2月	
387	緩木城	豊田	小野・佐伯・諸岡		平成12年2月15日	
394	岡城					竹田市教育委員会提供
396	騎群城	玉永	佐伯		平成8年1月27日～29日	
398	津賀牟礼城	玉永・豊田・小柳	江田・佐伯・五十川・上角・首藤・藤内		平成11年2月9日、10日、15日～18日、2月25日、26日、3月2日～5日、8日、9日	
400	武山城	小野	諸岡		平成12年12月27日	
403	王子ケ城	玉永	佐伯、神田	長田（野津町教委）	平成9年2月24日～26日	
411	寺田館	小柳	諸岡・槙島・畔津		平成15年5月6日	
413	鍋田城	小野・小柳	諸岡・槙島・矢部・畔津		平成12年12月27日、平成15年5月7日、	小野作図の縄張り図を小柳が加筆
417	筒井ケ城	小野	諸岡	内藤、長田	平成13年3月24日	
420	若山の陣	小野・小柳	諸岡・槙島・畔津	内藤、長田	平成10年2月20日、平成15年5月19日	小野作図の縄張り図を小柳が加筆
424	松尾城	玉永	小野・諸岡		平成9年1月13日、14日、2月18日～20日	

表10　掲載城館一覧表（3）

番号	城館名	作図者	調査員	協力者・協力機関	作図（調査）年月日	備考
433	鶴ヶ城	玉永				
434	荒平城	玉永				
437	高尾城	玉永		高野（緒方町教委）	平成12年2月	
441	烏岳城	小柳	豊田	高野（緒方町教委）	平成10年2月4日	
442	加納塞	玉永				
448	小牧城	小柳	豊田		平成10年2月5日、6日	
449	小牟礼城	中西	小柳・豊田		平成13年3月23日、26日、28日	
453	一万田館					報告書より転載
461	高城（小城）	小柳	栗田・近藤	後藤（大野町教委）、戸崎（大野町文化財調査員長）	平成10年1月19日	
461	高城（大城）	豊田	小柳・五十川	後藤（大野町教委）	平成10年3月13日、16日、17日	
464	田附城	小柳		後藤（大野町教委）・戸崎（大野町文化財調査員長）	平成10年1月20日	
472	上門手遺跡					報告書より転載
473	石五道原遺跡					
477	高旗城	小柳	五十川	犬飼町教育委員会、由見（犬飼町文化財調査員長）	平成14年2月27日	
487	相ヶ鶴城	小柳	豊田	渡辺澄人	平成10年2月9日、10日	
488	南山城	小柳・豊田	高橋信武・甲斐・上角・五十川・井川・永易		平成11年3月11日、12日、16日～18日、4月14日、15日、平成12年2月2日、3日	
489	小路遺跡					報告書より転載
490	上城遺跡					〃
491	山野城	玉永・小柳	江田・小柳・小野・佐伯・諸岡		平成8年2月6日、7日、19日、20日、22日、23日、26日～28日	
492	三船城	小柳	諸岡		平成8年2月＝日	
495	田北城	小柳		橋本（直入町教委）	平成10年3月16日、17日	町教委作成の実測図を、現地調査の上縄張り図に書き直す。
496	法螺貝城	小柳	小林	橋本（直入町教委）	平成13年1月18日	
498	松牟礼城	小柳	豊田・五十川	橋本（直入町教委）	平成10年3月9日、10日、12日	
501	財津古城	小柳	小林		平成13年1月11日、12日、19日	
504	坂本城	佐藤	竹野		平成13年2月8日	
510	日隈城	玉永	松下		平成8年12月18日	
514	蕪山城	佐藤	竹野		平成13年2月9日	
515	高井岳城	竹野・小柳	佐藤・今田・小柳		平成11年3月1日～5日	
519	大蔵古城	小柳	宮田・井川		平成12年1月13日、14日、28日	
529	魚返城	玉永	今田・松下		平成8年12月4日～6日、16日	
530	古後城	玉永・小柳・豊田	槙島・佐藤・畔津・豊田・五十川・染矢・栗原	野口（玖珠町教委）	平成10年2月16日、17日、19日 平成15年5月13日	玉永作図の2000分の1縄張り図を、小柳が現地調査の上1000分の1に書き直す。
531	野田城	佐藤	竹野・東		平成12年1月25日、27日、28日、2月3日	
533	角牟礼城	（玉永）				報告書より転載
538	瀬戸遺跡	（染矢・小柳）				〃
539	帆足城	（染矢）				〃
540	伐株山城	（玉永）				〃
544	城ヶ尾城	小柳	槙島・畔津・佐藤	野口（玖珠町教委）	平成15年5月13日	
549	釘野城	玉永	松本・竹野・松下		平成8年5月23日、24日	
552	松木城	玉永	小柳・竹野・佐藤		平成8年5月28日～30日	
553	陣の内山城	竹野	佐藤・松下	坂本（九重町文化財調査員）	平成10年2月4日	
554	殿山城	竹野	佐藤・松下		平成10年2月6日	
558	野上城（小城）	竹野	佐藤・松下		平成10年2月5日	
558	野上城（ｼﾛﾝﾃﾞｰ）	佐藤・竹野	竹野・佐藤・松下・今田・首藤・小柳		平成10年12月6日、7日、平成11年1月5日、6日、27日	
559	岐部城	玉永	栗原・小柳・松本・竹野・佐藤・松下		平成8年5月13日、14日、22日、23日	

第3章　考察

1．大友氏の領国経営と城郭

1．はじめに

本稿に与えられた課題は、戦国期の大分県内の諸城郭について、地域権力である大友氏との関係を文献資料から見えてきたことについて報告することである。そのため、戦国期の大友氏の領国内における諸城郭について、大友権力が如何にして、自己の支配のために、その城郭を掌握し、また活用していったかという点。また、領国の統治者である大友氏、特に宗麟と義統が、どこに所在して支配を展開していたのかという点の2点について、本報告書第1集及び第2集の編纂を通じて見えてきたことを中心に卑見を述べてみたい。なお、最初の点については、すでに拙著『大名領国支配の構造』（2003年、校倉書房）と多くの部分が重複するととなるが、本稿の内容上ご容赦願いたい。

さて、大分県内には多数の中世城館があるが、それらの諸城郭が網羅的かつ全時代的に文献史料上にあらわれるのではなく、限られた城郭が、ある時期に集中して文献史料にあらわれる特徴がある。時期が集中するのは、城郭と戦争との関係からして当然のことであるが、限られた城郭が多数見られるというのも、戦争が展開された城郭がかなり限られてくるということによるのかもしれない。

実際、戦国期において文献史料上抽出できた城郭もいくつかのピークであらわれており、1520年代から30年代にかけて、110点もの文書があり、その内の大多数が妙見岳城と鹿越城と角牟礼城である。この時期は大内義隆と大友義鑑とが豊前の領有を巡って豊前と豊後の国境で度々合戦を展開しており、この社会情勢から、妙見岳城と鹿越城と角牟礼城に関する史料が多数検出できたと思われる。

また、1580年という1年で170点の文書がある場合もある。しかも、これらの文書のうち65パーセントが鞍懸城と安岐城となっている。これは、1580（天正8）年の田原親貫の乱によるものであり、大友家に反した親貫が籠もった鞍懸城と、その支城として機能した安岐城を攻略することを命じた大友義統らの文書が多数伝えられてきたことによるものと思われる。

そして、1586年年から翌年にかけて105点の文書がある。これは、天正14年から翌年にかけて島津軍が豊後に侵攻してきた折りに出された文書であり、島津軍の豊後侵攻時には、国内のほぼ全域が島津軍の攻撃を受けているため、単独の城郭が数多く検出できるということはなく国内の多数の城郭が検出できる。

つまり、文献史料においては、戦闘行動があった限られた時期に、しかも、戦闘行動が実際に展開された城郭に限られて、記録として残されており、その他の多くの城郭については文献史料として、あまり多くのことが記録されていないという状況となっている。

以上のような状況において、戦国期の大友氏の領国内における諸城郭について、大友権力が如何にして、自己の支配のために、その城郭を掌握し、また活用していったかということを見るためには、どのようなメルクマールを設定する必要があるのか。文献史料として今に伝えられている史料群の多くは、合戦に於ける感状様式の中に、その当該城郭としての名が見えるものであり、城郭と大友権力との関係を直接的に明示するものはあまり見ることができない。その場合、大友権力との関係を示すものとして、大友氏が、その城郭の運営に直接関与したと考えられる「城誘」というタームが重要となるのではないだろうか。また、「城誘」という表現は見えないが、その城郭の維持・整備において大友権力が関与したと考えられるものとして、普請行為や点検行為の有無も重要なメルクマールとなると考えられる。そのため、本稿においては、大友氏の城郭整備・維持行為について見ることを通して、戦国期の大友権力と城郭の関係を見ていくことにする。

2．大友氏が整備を命じた城郭

1）角牟礼城

まず、大友氏が整備・維持等を行った城郭について、その名が明確に出てくるのは、大友義鑑が1533（天文2）年12月1日付で森壱岐守に宛てた感状案（1－254：報告書の集とその資料番号を示す。以下同じ。）に「就角牟礼城番、夜白辛労、不及申候、殊城誘等之事、別而馳走之由候」と見えるのが管見の限り初見と思われる。そして、同月8日付では平井左衛門尉に対しても「就角牟礼城番、夜白辛労不及申候、殊城誘奉行等之事、別而馳走之由候」と命じており（1－255）、大友義鑑が、角牟礼城の所在する玖珠郡の在地領主である森や平井に対して、角牟礼での城番を労うとともに城誘奉行としての馳走を感謝している。そして森や平井は義鑑の命に従い角牟礼城に城番として在城し、かつ城誘を務めていることが理解できる。

当時、大友義鑑は大内義隆と対峙しており、前年には大内義隆に加担する豊前の在地領主らが籠もる妙見岳城へ出兵しており（1－199～205・207～229）、また、角牟礼城の城誘を実施した年の4月には鹿越城に籠もっ

た大内氏に加担する牢人の討伐を行う（1－235～250）など、豊前と豊後の境界において大友対大内の合戦が頻繁に展開していた。そのため、大友義鑑としては、豊後の境界線を守るべく、豊前に接する玖珠郡の角牟礼城での勤番を平井等の玖珠郡衆に命じ（1－251）、同時に、豊前・筑後から豊後府内への交通の要衝でもある角牟礼城の防備を固めるべく、玖珠郡衆をして「城誘」を実施させたものと考えられる。

また、「城誘」の表記は見えないが、大友義鑑は「角牟礼新堀之事、各被存寄別而馳走之由令悦喜候、弥可被添心事頼入候」との記載がある書状（1－295）を、年未詳の8月5日付で古後中務少輔等8名の玖珠郡衆に宛てて出している。史料の文言に「城誘」の直接表記は見られないが、角牟礼城の城誘の具体的行為の一つとして、新堀の築造が考えられる。豊後への侵攻を試みる大内軍に対して、角牟礼城の防御機能を一層高めようとする義鑑の意志を見て取ることができるのではなかろうか。

2）鹿越城

先に見た角牟礼城とほぼ同じころ、大友義鑑は山香郷の木付右衛門大夫等10名の山香郷衆に対し、7月28日付で「鹿越城誘之事、去年以来申付候処、于今延引太曲事候、為奉行衆中、稠以催促、急度可被相調事肝要候、聊不可有緩之儀候」（1－294）と申し述べている。これによると、大友義鑑は、山香郷の木付等に対して、鹿越城の城誘を昨年より命じているが、その城誘が停滞しているため、奉行衆を通じて厳しく催促する旨を伝えており、大友義鑑にとって鹿越城の城誘がいかに重要であったかを推測できる。年未詳であるため、明確な年は出せないが、鹿越城に籠もった大内氏に加担する牢人の討伐を実施した1533（天文2）年以降で、大内義隆と豊前と豊後の境界をめぐって合戦を繰り広げていた天文年間の初頭に、境界防御の必要性から鹿越城の城誘を命じたいのもであろうと思われる。

この鹿越城は、豊前と豊後の境界に位置する山香郷の豊後よりに所在し、豊前の大内氏に対峙する意味で、豊後の境界を固持するため戦略上必要不可欠であり、また豊前から豊後府内へ侵攻する際の交通の要衝地でもある。そのため、大友義鑑は、豊前より侵入する大内氏に対するため、鹿越城のある山香郷の武士団たちに城誘を命じて早急な整備をする必要があったのであろう。

大友義鑑の代において、大友氏が領国内で整備・維持行為を実施した城郭は角牟礼城と鹿越城の二つである。この二つの城郭はすでに見たように、豊前と豊後の境界に接しており、境目の城郭として重要な役割が与えられたと思われる。義鑑は豊後へ侵入する大内氏に対処し、豊後の国境を固めるため鹿越城・角牟礼城と城誘を命じ、享禄3年の条々においては城誘の停滞を危惧する（1－198）ほど、当該社会状況にあって、大内氏に対抗するための早急なる城誘が必要だったと思われる。また、義鑑は、鹿越城・角牟礼城ともに「城誘」の整備を通じて、城郭の所在する地域の武士団の求心的結集を図ろうと考えたのではあるまいか。

3）妙見岳城

（天文19）年の二階崩れの変で大友義鑑が横死したのち、家督は嫡子義鎮が継承した。義鎮は家督継承時に豊後・筑後・肥後の守護職も継承し、その支配権を3カ国に拡げていった。そして、1557（弘治3）年に大内家に養子に入っていた弟晴英（大内義長）が毛利元就に攻められ自刃したのち、義鎮は佐田・恵良・弥富等の宇佐郡衆に大内家滅亡により大友家に忠節を誓うことを約束させ、豊前支配に乗り出した。以上のような背景のもと、義鎮は次の史料（1－348）に見られるように妙見岳城誘を命じた。

「豊州御代二妙見岳御城誘之儀、至当社領被仰付之時、御一社中以御詮儀被付田原親賢□内者案文、永禄弐八月七日」

妙見岳御城誘之事、不謂寺社免許之地、可被仰付之由、預御催侯、前日以来如令申侯、当宮領諸点役御免除之事、近年非相始儀候、（中略）然処、今度於当社領御城誘事、被仰付侯条、往代以来諸役御免除之由、雖申理候、不預御信用候哉、乍恐難測神慮存侯、以前従諸家一往雖被申詰候、右子細依令演説、諸役預御免許、聊無牢籠之儀侯、（以下略）

八月七日　　一社中連署　案書

田原民部太輔殿　御陣所

これによると、妙見岳城の城誘に関する負担を命じられた宇佐社中が、当宇佐宮が往古より諸点役免許であることを理由に、その役負担の免除を田原親賢に願い出ていることがわかる。この段階の妙見岳城は大友氏の管轄する城郭となっており、その整備は地域の武士団ではなく宇佐宮社中にまで命じられていたのである。大内氏滅亡後すばやく豊前支配に乗り出した大友義鎮にとって妙見岳城は、大内氏の場合と同様に豊前支配の拠点、また豊後防衛の意味からも極めて重要な城郭として認識されたのであろう。

その後、年が下り1579（天正7）年3月には、大友義統から妙見岳城に籠もることを命じられた波多等に併せて城の普請が命じられる（1－407～412）。これは前年末の日向高城敗戦後に、旧領返還を求め宗麟・義統のいた臼杵から、無断で国東に帰郷した田原宗亀が謀反するのではないか、との疑念に対応した大友義統が、備えとして妙見岳城の整備を命じたものであり、妙見岳城は北部九州から豊後に襲来する敵に対するだけではなく、国

東の田原氏に備えるための城でもあったことが想定できる。

4）県外の城郭

永禄年間になると、北部九州へ支配を拡げようとする毛利と大友宗麟は対峙することとなる。特に筑前・豊前での戦いは活発化し、そのため、宗麟としては筑前・豊前そして筑後へ拠点城郭を把握する必要に迫られてくる。その段階で特定城郭の整備・維持行為として出された史料が以下の３点である。

①立花城誘被相調之由、御辛労不申及候、然者奴留湯主殿助事堅申付、今日廿八差立候、若輩之条別而被添心、勤番無緩様可被申聞候、仍立花弥十郎進退之義、度々如申候、向後之徳失能々思惟肝要候、以口能承候上者、雖可申談候、既至主殿助申与、無幾程悔返如何候、賢察之前候、将亦秋月・宗像一着候者、日田表陣衆如穂波郡取出候様、可加下知通尤存候之間、則可申遣候、殊肥後衆催促之儀、聊非油断之趣、尚吉岡越前入道可申候、恐々謹言、

七月廿八日　　宗麟（花押）

吉弘左近大夫殿

戸次伯耆守殿

②就馬岳軍勢取之儀、浦部衆急度可有出張之由、申付候之条、乍辛労、早々以出国、城誘之儀、堅固可被申触事、肝要候、聊不可有緩之儀候、恐々謹言、

九月廿三日　　宗麟（花押影）

渡辺式部少輔殿

③長々在陣、軍労之次第感悦候、殊山隈城誘奉行等、別而無緩馳走之由候、喜悦候、弥鑑連被得指南、毎事無油断覚悟肝要候、必追而可賀之候、恐々謹言、

十月十九日　　宗麟（花押）

法華津隼人佐殿

まず、①であるが、これによると立花鑑載の居城であった立花城について、吉弘鑑理と戸次鑑連が城誘を行い、その辛労を宗麟が労っていることがわかる。立花鑑載を討伐したのち、宗麟は筑前支配のための拠点城郭として維持していくため、吉弘・戸次に命じて立花城に城誘を実施して城を整備して、怒留湯を城番として派遣するに至ったと思われる。また、立花城誘の労働主体は（永禄11年）７月９日付の大友宗麟書状に「然者彼城普請等、雖無申迄候、諸勢被申諫、早々可被取誘事頼存候、彼山事、於其堺者第一之儀候間、則時人数差籠、堅固可申付覚悟候、」と見えることから、立花城攻撃を実行した軍勢だったと考えられる。

次に②を見ると、大友宗麟は、豊前攻略のため出陣するよう申しつけた浦部衆に対し「城誘之儀」を堅固に申し触れるように命じている。この場合、城誘を行うべき城郭は、毛利方に就く武士団が拠る古処山城・香春岳城・松山城に対峙する意味において、大友の支配下にあった馬岳城と考えるべきであろう。宗麟は大友に反し、毛利方に就く武士団の籠もる筑前・豊前の諸城郭に対峙すべく、馬岳の城誘を命じたのであり、その城誘を行う主体は、この書状を見る限りにおいて出国した速見の浦辺衆たちと思われる。

宗麟は、毛利氏と対峙しながら領国の拡大を進めていく上において、その地域の主要なる城郭を「城誘」を通じて整備していったのであり、その際、新たに支配を展開していく地域にあっては、豊後本国より派遣した軍勢をもって整備を実施した。

最後に③であるが、大友宗麟が法華津隼人佐に対して、長期にわたる在陣を賞し、なかでも山隈城誘を奉行したことを賞賛している。この山隈城は、筑後と筑前の国境にあたる城山の山頂部に築かれた山城で、筑後と筑前の国境に接するとともに肥前との国境も近く、まさに毛利氏に通じる筑前古処山城の秋月や宝満山城の高橋、そして肥前の龍造寺ら三者の結節点に位置する城郭であろう。つまり宗麟は、毛利氏に通じ反旗を翻した秋月・高橋・龍造寺らに対処し筑前・筑後を堅固におさえるために山隈城の城誘を命じて、彼らに対応すべき拠点となしたのではなかろうか。

以上見てきたように、大友宗麟がその支配領域を、従来の豊後・筑後・肥後から新たに豊前・筑前に展開して行くに当たって、その支配領域を確実に維持していくため、拠点城郭として城誘を通じて整備していったのが、妙見岳城・立花城・馬岳城・山隈城であった。また、特に新たな支配領域で行う城誘という行為は、大友義鑑の代の、その地域の在地領主層へ命じて行うのではなく。多くの場合、派遣した軍勢をもって当該城郭の整備を実施したと考えられる。

5）高位岳城

大友宗麟の治世下において、これまで見てきた城郭は領国を拡張していく最中にあって、その新たなる支配地域の維持のために整備されてきたものであった。しかし、ここで見る日田の高位岳城は、1578（天正６）年の日向高城合戦敗戦後、凋落していく大友氏が、豊後本国最後の守りとして、その整備を命じたものである。

大友府蘭（宗麟）は、北上する島津軍に対処するため、豊後本国の守備を固めようと試み、筑後との国境であ

る日田の高位岳城に城誘を実施した。1581年、府蘭は筑後の在地領主である問注所統景に対して「殊両城差搦、就中、長岩・白石両城為覚悟、高位岳城誘、従昨日加下知候、方角之儀候条、別而奔走専一候」（1－629）との書状を出し、長岩城（浮羽郡浮羽町）・白石城（八女郡星野村）の両城を支援するため高位岳（日田市）城誘に、「方角之儀」をもって助力するよう依頼がなされている。長岩・白石の両城は、豊後と筑後の境界を挟んで筑後側に所在する境界の城であり、この段階において、大友領国内の筑後側の防衛ライン的役割を担っていた。そのため、大友氏としては、その防衛ラインをより強固にするためにも、筑後と豊後の境界線上に位置する高位岳に城誘を命じたものであろう。また、城誘に関する動員の手段として、下知ではなく、「方角之儀」といった在地慣行を利用することによって、それを成しえようとした点に、大友権力の変化が見て取れる。

6）宇目の城郭

1584（天正12）年になると、既に薩摩・大隅・日向を支配下に治めていた島津軍は肥後を攻略して筑後・肥前へと侵攻し、まさに豊後へ迫ってくる。そのため、大友府蘭（宗麟）は、日向と国境を接する豊後の宇目の城郭の整備に着手する。1584年12月24日付の大友府蘭書状では「至宇目村、前日道輝罷越、切寄所柄等被見合」（1－731）と、あるように志賀道輝を派遣して宇目の城郭を点検させている。またその後、道輝に宇目の城郭に在城を命じていたことが、次の1585年11月13日付のフロイス書簡（2－29）からもあきらかである。

> 国主の嫡子は、ドン・パウロの祖父を豊後と日向の国境にある宇目と呼ばれる国境の城に配置したが、この者は記述の通り豊後における我らの最大の敵の一人である。この老人は頑健であったが、実際難攻不落の所にある城の位置も信頼できず、山の峰を通る狭い道を数カ所、人力で切り崩させた。これで、敵が攻めて来た場合、長くとどまって修理しなくては、いかなる場合でも通れなくした。

これによると、大友義統は、志賀道輝に宇目に城郭を配置し滞在を命じ、道輝はいったん城に入り「山の峰を通る狭い道を数カ所、人力で切り崩させた」とあるように堀をめぐらすなど、城郭の整備を行った。が、しかし道輝はここで在城し続けることに不安を感じたようで、島津軍襲来の風聞によって城をでてしまい、かわって、孫の志賀親次が、この宇目の城郭に在城し、島津軍に備える。島津軍の襲来に対して豊後本国の堅持が使命であった大友氏にとって、筑後との国境に高位岳を配置したと同様に日向との国境に城郭を配置する必要があった。

以上、これまで戦国期の大友氏の城郭整備について見てきたが、この城郭整備と大友権力との関係を整理すると以下のようになると思われる。

① 義鑑は豊後へ侵入する大内に対処し、豊後の国境を固めるべく、領国内の防衛戦略上必要不可欠な城郭を城誘を通じて整備し大友氏の直接管轄する城郭として把握していくことを目指すため鹿越城・角牟礼城とに城誘を命じていった。

② 義鎮・義統の時代になると、筑前・豊前への進出を図ろうとする毛利氏に対応すべく、大内氏滅亡後に、新たに獲得した豊前支配の拠点としての宇佐郡妙見岳城について、支配下の武士団だけではなく、宇佐宮にまで城誘が命じられる。また、妙見岳城は北部九州から豊後に侵攻する敵に備えるだけではなく、国東の田原氏に備える要素も兼ねていた。

③ 支配を北部九州に拡大していく最中にあっては、筑前の立花城、豊前の馬岳城、筑後の山隈城に城誘が命じられ、その行為は反対勢力討伐のために派遣された軍勢が主体となって実行されており、城郭の整備も、そこに赴いた軍勢らが「以在城」という当事者負担の原則で行っている。

④ 天正六年の日向敗戦以降、領国の衰退時における、高位岳の城誘は、その城郭の立地関係から豊後本国の最終防衛線としての必要から実施され、その行為には「方角之儀」を媒介として、相互扶助の原理を理由に、問注所という筑後の在地領主を動員する必要があった。

⑤ また、島津軍の侵攻直前において、大友氏は筑後との国境に高位岳城誘を実施したのと同様に、日向との国境である宇目村にも城郭を点検・整備させ志賀氏を在城させて備えようと試みた。

⑥ 大友氏における城誘は、領国を維持・管理していくため非常に重量な課題であり、交通の要衝や国境の堅持などの観点から、領国の維持・管理上必要となる城郭に関して、城誘を積極的に実施することによって領国の防備を固め、従来、他の領主の所有であったり、在地に所在していた城郭を自己のもとに求心的に掌握していく術であった。同時に、城誘を通して城郭を求心的に掌握するだけではなく、その造作を命じられた在地の武士団を求心的に掌握することを狙っていた。

3．大友宗麟・義統の所在について

前節では、大友権力と城郭との関係について見てきた。ここでは、本稿にけるもう一つの課題である領国の統治者である大友氏、特に宗麟と義統が、どこに所在して支配を展開していたのかという点について、文献史料を通じて見ていきたい。なお、すでにおわかりと思うが、大友氏に関する当該古文書の中に、宗麟や義統がどこに所在していたのかを明記しているものは存在しない。ゆえに、後世に作成された絵図や軍記物などと、近年の発

掘成果などからの推測で議論が展開されている。しかしながら、今回の報告書第2集作成の課程において、16世紀後半に豊後に居住していた宣教師たちの資料を見ていくと、彼らの記録の中に、宗麟や義統がどこにいたのかを明記している資料がある。そのため、本稿においてはそれら宣教師たちの資料から、宗麟・義統がいつどこに居住していたのかを明らかにしたい。

まず、宗麟の所在が最初に見えるのは、1554年付アルカソヴァ書簡（2－1）に「国主を殺そうとする3人の有力な大身のために同地は騒乱状態にあった。そして1553年の四旬節の第二日目になると…市が焼かれて略奪されるであろうから司祭の財貨を隠すように…フェルナンデスが宮殿に着くと、そこには貴人たちがあふれ…」とあり、この時宗麟は、市つまり府内の宮殿に居住していたと考えられる。この1553年は天文22年にあたり、閏1月に一万田・服部・宗像等が謀反し宗麟に誅伐された時である。そして次に宗麟の所在が分かるのは、1557年10月29日付ガスパル・ヴィレラ書簡（2－2）に「国主は謀反を指図した大身数名を殺させ、彼自らは安全に対処するため、或る城のような島に引き籠もった」とある。これによると、宗麟は府内を出て城のような島に居住しており、その城は「その地から5里のところにある」とされ、恐らく臼杵の丹生島城を指しているものと思われる。また、このヴィレラ書簡と同内容の記述が「フロイス日本史」第14章（2－36）にもあり、それには「私たちが着く十五日前に、国主は謀反の疑念を抱きました。事実それは、さっそく本庄殿と田北殿と二人の有力な殿の間の争いとなって勃発しました。そのため国主はそれまでは先祖と同様につねに府内の市に住んでいたのですが、今や（その市）を去って、よりいっそうの安全をはかるために新しい城に引き籠りました。その城は彼が当時、府内から七里距たった臼杵に築いたもので、自然の岩の上に建っていて三方が海に囲まれています。」とあり、つまり1556年の小原鑑元の乱に際し、宗麟はこれまで居住していた府内から臼杵の丹生島城へ移ったと記録されている。

また、この段階における宗麟の臼杵移住に関連して、宗麟が府内で住んでいた屋敷については次のように記されている。「国主は我らに杉材で造った当国で最良の家屋数軒と毎年50クルザードの俸禄をあたえた。…我らは同国主の同意を得て、広くて好ましい地所を購入した。この地所は、かつて国主が我らに与えた別のはなはだ良い地所の側にある」（1557年付トルレス書簡）。「当修道院は彼（宗麟）が我らに与えたものであるが、かつては彼の家であり、すべて杉材で造られている」（1557年11月1日付アルメイダ書簡：2－3）。「これは、国主の宮殿であった当市（府内）の教会にも勝とも…」（1561年10月8日付フェルナンデス書簡：2－5）。つまり、これらの資料から考えられることは、臼杵に移住するまでに宗麟が生活していた府内の杉材で造られていた屋敷は宣教師たちに与えられ、その屋敷は教会になっていたというのである。この宗麟が臼杵移住前までに住んでいた屋敷が府内のどこに存在したのか、明確に示す宣教師の記録もなく、また当該古文書にもその所在を明示するものは管見限り見えない。しかし、これら宣教師の記録からは、府内にあった宗麟の屋敷は、宗麟の臼杵移住に伴って宣教師へ譲渡された可能性が高いのではなかろうか。

宗麟は、この後1578年に政治を嫡子義統に完全に譲り、丹生島城を出て隠居屋敷へ入るまでの間、臼杵の丹生島城に居住し政治を行う。1578年10月16日付フロイス書簡（2－16）には、宗麟が隠居する時の様子を次のように記している。

「老国主は以前から諸事を整え、身を置くべき新しい家屋数棟を慎重に城外に建て、国の政治を息子に譲ると、さっそく彼はその家に移り、奥方と共に政庁にいた一人の貴婦人を密かに呼び寄せた。彼女は国主の息子ドン・バスティアン（田原親家）の妻の母で、すでに40歳を過ぎ、多少病弱であったが、国主はこの女性を夫人として迎え、奥方は離縁されて政庁に留まった。…（嫡子：大友義統は）デウスのことを大いに好んでこれを高く評価し、（イエズス）会員に深い親愛の情を抱き、諸人が皆驚嘆するほど慈愛をもって会員を遇している。彼は当所の司祭に沢山の進物と共に伝言を送り、「自分は今や諸国を統治しているが、予も父君に劣らず、むしろ叶うならば父を凌ごうと意を決したので、司祭が学院を豊後に設置することに決定したならば、予の政庁があるこの臼杵に司祭が最も良い思われる場所を選び、また、これについて望むことを書面で予に知らせてもらいたい。」と伝えた。」宗麟が隠居し、臼杵の丹生島城外（場所は特定できない）に隠居するための家屋を建築して、そこに新夫人ジュリアとともに移り住んだことがわかる。しかし、この史料からはさらに特筆すべきことが読みとれる。それは、嫡子義統がフロイスに伝えた文に「司祭が学院を豊後に設置することに決定したならば、予の政庁があるこの臼杵に…」と述べていることからもわかるように、従来、近世に作成された軍記物や大友家文書録の綱文などから宗麟は臼杵、義統は府内と考えられてきた大友氏の支配体制ではあるが、宗麟が隠居した時に、義統は臼杵に居住し政治を行おうとしていたことが理解できる。つまり、義統が府内ではなく、臼杵に居住して領国の統治者として政治を行うためにも、隠居した宗麟はあえて臼杵の丹生島城を出て行く必要があったのではないだろうか。義統が府内に居住し府内で政治を行うのであれば、宗麟も隠居にあたって臼杵の丹生島城を出て行く必要はなかったのである。

その後、臼杵が大友氏の政庁として機能していたことを伝えるものとして、1579年付カリオン書簡（2－20）

では「正月の少し前に、（田原）親宏はここ臼杵で行われた協議に加わっていたが、国主と嫡子に一言も告げることなく、祭礼を行うため急ぎ私邸に向かうと言い残して豊前に近い邸へと立ち去った」とあり、1578（天正6）年の日向高城合戦敗戦後の軍議が臼杵において行われ、田原親宏が無断でその場から引き上げたことを伝えている。

しかし、大友義統は、政庁をいったん府内へ戻すこともあったようで、1581年9月15日付カブラル書簡（2－22）では「学院は同国の首都である府内の市にあり、当市には国のいっさいの政治を司っている嫡子が2カ月前から住んでいる」と見え、また1582年2月15日付コエリュ作成1581年度日本年報（2－23）では「臼杵の城下〔豊後全土でもっとも強固であり主要なる城下町の一つで、かつてはここに政府が置かれていたが、現在は国主フランシスコが家族と共に住んでおり、彼の子息である国主は政庁と共に府内に移り、爾来3年になる〕」ともあり、日向敗戦と田原親宏・親貫の反乱など契機に、義統は府内へ政庁を移したと思われる。ところが、1584年9月3日付フロイス作成1584年度日本年報（2－27）には「臼杵は世子（義統）が政庁と共に居を構えているところなので、国主フランシスコは…」とあり、義統が再び政庁を臼杵に戻していることがわかる。

以上見てきたように、これまで、推測の域をでないままで、論じられてきた宗麟・義統の居住地であるが、これら同時代に作成された宣教師の報告によれば、1556年の小原鑑元の乱を契機に宗麟は府内を離れ臼杵に移住しており、府内の住居は宣教師たちへ譲渡されたと考えられる。そして1578年に隠居するにあたり臼杵の丹生島城を出て隠居所（おそらく津久見と思われるが）に移っている。また、義統についても、従来は常に府内にいたように思われがちであるが、1578年の宗麟の隠居に際しては臼杵の政庁に居住しており、1581年の段階ではいったん政庁と共に府内に移ったかと思われたが、1584年には、再び政庁を臼杵に戻し居住していたことがうかがえる。

4．おわりに

戦国期の大友氏にあって、大名権力が関与する城郭は、その支配を展開する必要から選定され、整備・維持されてきた。それが大友義鑑の代にあっては、対大内氏との関係から豊後の国境を守るべく、角牟礼城であり鹿越城であった。そして義鎮の代においては、支配が北部九州に広がっていく段階では、豊前の妙見岳城をして国東の田原氏、豊前地域の反大友勢力に対抗し、対毛利氏との関係から筑前の立花城、豊前の馬岳城、筑後の山隈城が、そこへ派遣された軍勢が主力となって城郭の整備・維持を展開した。しかし1578（天正6）年の日向高城敗戦以降、領国の衰退期においては、迫りくる島津軍に備えるため、筑後との国境に面した高位岳城と日向との国境に面した宇目の城郭の整備を行うのが精一杯ではなかったろうか。大名権力が直接関与してくる城郭にあっても、そのあり方として積極的な政策のもとで整備・維持がなされるものと、ぎりぎり最後の防衛のためとして整備・維持がなされるものとの二つがあるように思われる。

また、時の大友権力の政庁も、義鎮（宗麟）の代に及んで、鎌倉時代より続いてきた府内から臼杵への移遷がなされ、臼杵が政治の場として機能し始めることとなり、それはその後の義統の代まである程度継続されていく。1587（天正15）年の豊臣秀吉の九州平定によって、大分の戦国時代はいったん終わりを告げるが、その時、義統は政庁をどこへ定めようとしたのであろうか、それを示唆する資料が次の1588年度日本年報（2－33）である。「既述の国主（大友義統）は、過ぐる戦さのなかで薩摩の軍勢によって焼かれ破壊された臼杵の市街を再建するために、本年大いなる努力を払った。そして自ら命令をくだして老中たちや貴人たちもそのほかの人民と同様、そこに自分たちの家々を造るようにさせた。かの国ではもっとも堅牢で、しかも重立った城の再建に調子を合わせるのがそのねらいであった。某日の正午近くのことである。或る貧しい人の小さな家から火の手があがった。…火はデウスの裁きに導かれるかのように這いあがって行った。…ついに大きくしかも贅沢な諸々の屋敷に襲いかかった。これらの屋敷は国主フランシスコ（大友宗麟）が五カ国の君主だったころに造らせたものである。（中略）家財道具などは救えず、すべてが焼けた。城内ではわずかに一つの倉庫が焼けずに済んだ。以上は国主（大友義統）が既述の城を留守にしていた時に起こったことである。父君で先代の国主が造ったあの贅沢な家であるが、現国主はこれを所有するに値しないことを示そうと…」このように、大友義統は、秀吉によって安堵された豊後国の政庁として府内ではなく臼杵を再建しようとしていたと思われる。なぜならば、島津軍の攻撃に耐えた丹生島城に比べ、義統によって戒厳令がしかれていた府内は攻撃により焦土と化していたのだから。（三重野誠）

2．戦国期の宇佐下毛地域と城館　－16世紀後半を中心に－

1．はじめに

現在の大分県域のうち、宇佐市・宇佐郡（以下、宇佐地域とよぶ）と中津市・下毛郡（以下、下毛地域とよぶ）は旧豊前国に属する。中世城館という視角の下で、文献史料からこの地域を眺めた時、注目すべきものとして天正期の諸史料に頻出する切寄がある。そこで、以下では宇佐・下毛地域の戦国期の概況を素描し、切寄を中心に同地域の城館について若干の検討を加えるものとしたい。

2．中世後半の豊前国

豊前国は西瀬戸内海に面し、北は関門海峡を隔てて長門国と、南は豊後国、北西は筑前国と境を接している。宇佐・下毛地域はその南部に位置し、九州きっての荘園領主であった宇佐宮が所在する。同地域のほとんどが、宇佐宮あるいはその神宮寺である弥勒寺の所領で、同地に割拠した土豪は宇佐宮領の名主職などを務め、宇佐宮・弥勒寺と何らかの形で関係を有していた。

こうした宇佐・下毛地域の15世紀代以後の状況をみると、支配面では基本的に天文20（1551）年まで大内氏が守護職を務めている。ただ、周防山口、豊後府内を各々本拠とする大内・大友両氏にはさまれる形にあった豊前国は、両氏の領国支配とその拡大を志向するなかで焦点となる地であった。大内氏と大友氏の対立は、室町幕府将軍家足利氏による跡目相続への介入なども含めて、政治上複雑な様相を呈する。紙幅の点からも、これを詳述することはできないが、豊前国は大内氏と大友氏との対立の中で、たびたび両氏の角逐の場となった。

例えば、永享3（1431）年には大内持世の死をうけて大友持直は豊前国に侵入しているし、明応7（1498）年には、大友政親・義豊の内訌の後、家督を継いだ大友親治は宇佐・下毛地域や国東へ軍をすすめ、結果親治は豊前国守護職を手にしたとされる。あるいは、文亀1（1501）年には、細川政元によって都を追われた足利義尹（義材）を支援する大内義興に対して、政元と結んだ大友親治・義長父子は豊前国京都郡馬ヶ岳に兵をすすめ合戦に及んでいる。この合戦後、大内・大友両氏の間で講和が結ばれるが、天文1（1532）年に大内義隆が家督を継いだことを機に大内氏包囲網が形成され、先の大内・大友氏の講和も破られた。豊前・筑前で両氏の合戦が起き、天文3（1534）年には大内氏が豊後国勢場ヶ原（現山香町）まで侵入し合戦となっている。宇佐・下毛地域における城館に関する記録も、この15世紀後半から多くなる。

さて、大内氏の支配下では、宇佐郡代佐田氏を中心に宇佐・下毛地域の土豪は大内氏に属した。明応7年の合戦では、佐田氏は菩提寺に籠り、宇佐郡院内衆は「執誘妙見尾致在城」（「佐田泰景軍忠状」『大分県の中世城館』第1集160号、以下『大分県の中世城館』第1集・第2集の収載史料は、1－160のように巻名－史料番号という形で表記する）とあるように、妙見岳城の整備を行い籠城している。あるいは、天文1年以後の一連の戦いでは妙見岳城をめぐる合戦もおき、佐田氏ら宇佐・下毛地域の土豪は大内方として参戦し（1－202・209など）、天文期には妙見岳城の修理が佐田氏らの手によってなされている（1－305・306・309など）。妙見岳城（院内町）は大内氏の支配下では豊前国南部の支配拠点であり、大友氏に対抗する「境目の城」であった。その後、天文20（1551）年に大内氏が滅亡し、大友氏が豊前国を支配するに至ると、佐田氏をはじめ宇佐・下毛地域の土豪は大友氏の支配下に入り、「宇佐郡衆」などと呼ばれた。

さて、大友氏の豊前国支配の特徴は、1つには荘園領主宇佐宮の存在を否定しようとした点が挙げられる（稲本1969）。宇佐宮への妙見岳城誘の点役賦課（1－348）や神職らの所領の改替など、社奉行奈多鑑基を中心とし強権的ともいうべき形ですすめられた。こうした動きは、宇佐宮内部を中心に反大友の姿勢を生み出す要因の1つとみられる。また、下作職の展開をはじめとする在地構造の変化などによって生じた矛盾を大友氏も止揚することはできなかったことも留意される。永禄9（1566）年、豊前国麻生（現宇佐市麻生）を本拠とした麻生氏は大友氏によって討たれている（1－368・369）が、宇佐・下毛地域において大規模に反大友の動きが顕在化するのは、天正6（1578）年に大友氏が日向で島津氏に敗北した後のことであった。

3．田原親貫の乱と「郡内動乱」

天正6（1578）年、大友氏が日向耳川の合戦で島津氏に敗北すると、「今度秋月并豊筑之者共悪逆之企不及是非候」（1－405）とあるように、大友氏の領国支配は動揺をきたした。天正7年には田原親宏が叛意をみせ、豊前などでも不穏な状況となった。こうした状況を『大友家文書録』は「守豊前国龍王・妙見城以備不慮有授於上野・恵良・香志田・波多義統書」と伝えているし、下毛郡では「悪党」－すなわち反大友勢力－が蜂起している（1－416）。そして、同年12月には『大友家文書録』に「田原親貫、叛義統、応秋月・龍造寺、挙烽所々、自在豊後国東郷浦辺別構鞍懸塁」（1－419）とあるように、親宏の養子であった田原親貫も叛乱を起こした。この叛乱は、日向遠征の後に大友宗麟が子供の親家を田原親宏の跡目にしようとしたことに、親貫が反抗したためといわれ

ている。

田原親貫は鞍掛城（豊後高田市）と安岐切寄（安岐町）を主な拠点とし、大友側は妙見岳城に田原紹忍が在城し、ここを拠点とした。宇佐・下毛地域の土豪は「田原近江入道妙見岳在城之儀申付之処、従最前以同城別而辛労之由悦喜候、毎事紹忍被得指南、弥可励馳走事」（1－432）という大友義統の言葉に端的に示されるとおり、田原紹忍の指揮下で妙見岳城に在城するなどして親貫と対峙した。しかし、戦いは天正８（1580）年３月には大規模な兵力を投入する（1－450）が、叛乱を鎮圧することができなかった。結局、10月９日鞍掛城は落城するが親貫を討ち取ることはできず（1－568)、親貫は豊前善光寺で討ち取られたともいわれる（1－565)。

この田原親貫の叛乱については注目すべき点がある。それは、田原親貫などの叛乱の背後に広汎な反大友勢力－史料上「悪党」・「悪徒」と表現される－の存在を看取できる点である。前述したとおり、天正７年には下毛郡での「悪党」の蜂起がみられるが、親貫の叛乱の折も「豊前表悪徒等為鞍懸加勢取出之候処」（1－542）などとあり、大友氏は親貫だけでなく反大友勢力とも対峙せねばならなかったのである。この時期、宇佐下毛地域の各地で「悪徒」と大友方の土豪による合戦が起きている（1－436・468・534など)。こうした「豊前表悪徒」の具体的な構成は判然としないが、天正８（1580）年４月に佐田弾正忠に宛てられた大友義統の書状には「宮成右衛門尉・益永民部少輔・時枝備後守・橋津佐渡入道」が狼藉の振る舞いをなしたとある（1－483)。ここに挙げられた者のうち、宮成氏は宇佐宮大宮司職、益永氏は宇佐宮政所検校職、時枝氏は弥勒寺寺務職、橋津氏は宇佐宮領の根本所領の１つである封戸郷の郷司職などを務めている。いずれも宇佐宮内部の者というべき存在で、宇佐宮に属する神職らが宇佐・下毛地域における反大友勢力の中核をなしていたことが窺える。この他、下毛郡の野中氏も反大友の動きをみせており（1－532)、さらには城井氏や長野氏といった豊前国上毛郡域の土豪らも侵入し（1－534)、各地で戦いが引き起こされた。

このような在地の状況について、田原紹忍は天正８年閏３月10日付の書状で「今度郡内動乱」と述べている（1－474)。この紹忍の言葉に端的に表現されるように、田原親貫の叛乱は宇佐・下毛地域などの反大友勢力と大友氏との戦いであり、宇佐・下毛地域全体を戦乱の場とするものであった。一連の戦いの中で、たびたび大友宗麟・義統父子は宇佐郡衆の中心にあった佐田氏に書状を送っているが、そこでは「此節郡衆中（宇佐郡衆中－引用者注）被申談可励忠貞事」（1－439）などとあるように、その支配が不安定となった宇佐郡での勢力維持と叛乱鎮圧のため宇佐郡衆の大友氏への忠節を求めたのである。

ところで、田原親貫の叛乱は鞍掛城などの落城によって一応の終息をみているが、これによって宇佐・下毛地域の在地の動乱状態が終わりを告げたわけではなかった。天正９年には再び時枝氏らによる蜂起がみられ、「宇佐郡合戦」（1－625）が起きている。田原紹忍は「里郷再乱之儀」（1－621）と述べ、同年11月には大友氏は宇佐宮の焼き討ちを行っている。その後も、天正10年には「時枝表」（宇佐市時枝）で合戦が行われている（1－647～653）し、宇佐宮大宮司家の１つ安心院氏が神楽岳要害に籠り反乱を起こしている。さらに、翌天正11年には大友氏が「豊前国発向」を行い、時枝氏や「西部逆徒」と合戦している（1－700など)。このような宇佐・下毛地域での争いは、基本的に天正15年の黒田氏の中津入部まで続くこととなる。

天正年間の一連の動乱は、従前の戦いとは異なりはるかに長期にわたって在地を巻き込むこととなった。そして、こうした状況は、例えば、反大友勢力の急先鋒であった時枝氏の本拠（現宇佐市時枝）は、大友方の土豪中嶋氏の拠点（現宇佐市高家）と２kmほどしか離れていないように、近接する土豪同士が敵味方に分かれるという状況を生み出したのである。宇佐・下毛地域の土豪にとっては、緊張状態が継続したともいえよう。

４．切寄について

（１）これまでの研究

さて、こうした天正年間の動乱に関わる一連の諸史料に頻出するのが切寄なる言葉である。

この切寄については、阿蘇品保夫氏（阿蘇品1981）・乙咩政已氏（乙咩1986）・吉本明弘氏（吉本2003）の研究がある。ここで従前の研究を振り返っておくと、まず諸氏が一致して認められていることは３点ある。１つは切寄は史料上天正７年から15年に登場し、それは基本的に大友氏およびその家臣団発給の史料にみられるという点である。もう１つは、切寄が宇佐・下毛郡と豊後国東郡に多く認められる点である。ただ、この点をめぐっては、阿蘇品氏が大友氏の下で豊前国の支配を担った田原紹忍の支配地に分布するとされたが、切寄は豊後国南部や筑前などにも分布したことが乙咩・吉本両氏によって明らかとなっている。３点目としては、切寄は城館の一種とする点である。

次に、諸氏で見解が異なる点についてみていくことにしよう。切寄に初めて着目された阿蘇品氏は、以下のように切寄を位置付けられた。

①切寄の機能の１つに在地の連絡、補給路の維持が期待された。また、地域で反乱が発生した時には周辺の戦力を結集して対処する拠点の役割を果たし、日常的な郡内防衛の拠点であった。

②切寄は豊前国を統括した大友家臣団の田原紹忍が領域内の反乱抑止・外的奇襲に対処するため、本来本領志向の強い在地領主たちの希望を利用する形で生まれたものと考えられる。田原紹忍が拠点とした妙見岳城と切寄は本城と支城的関係にあり、領域内の軍事的分担を行った。

乙咩氏は主として阿蘇品氏の論点の②を取り上げられ、次のような見解を示された。

①切寄は田原紹忍の支配地域以外にも分布することから、広義に解すると切寄は大友氏によって命名された在地領主の城郭である。

②田川郡・築城郡にも切寄は所在したとみられるが、この地域は天正７年以後反大友勢力の拠点である。こうした地に切寄があること、また高家切寄は永和２（1376）年にみられる高家城を前身とするものであろうことから、大友氏が豊前国を安定的に支配した時点において従前存在した城郭を切寄と呼称した。

さらに、こうした両氏の研究をふまえて、吉本氏は切寄を大友氏の領国支配との関わりから取り上げられた。次ぎのような見解を示された。

①切寄は、史料上では天正７年以降の動乱期に在地領主の既存の城あるいは新たに構築した城を大友氏が公の城として認定したものに使用された。

②大友氏による叛乱鎮圧への対処として、豊前国では妙見岳城を支配拠点とし、切寄には他の在地領主が籠もるような地域の防衛拠点として意味をもつものもあった。大友氏の領国支配においては、こうした拠点としての切寄を他の切寄で周辺を固めるという境目地域における城郭編成をとった。

③切寄の語義は、切寄の間で在地領主を移動させるような軍事編成をとった。こうした在地領主を分断し寄せ集めることから「切寄」という語が生まれたといえる。

④島津氏領国での「拵」との比較から、切寄や拵などの城館に付随する地域独特の城や城的なものを示す用語は、戦国大名の領国支配の中で、動乱期における境目地域への強化策として編成されたものに使用された。

以下では、このような一連の研究をふまえて、主として切寄の規模や構造および構築主体という側面から、改めて切寄の特徴を同時代の史料を中心に検討していきたい。

（２）切寄の特徴

（ア）切寄の規模と構造

史料上、切寄の規模や構造についてはなお明確でない。その中で、注目される記述としては大友宗麟から佐田鎮西綱への書状（１－543）の一節の「赤尾三河入道宅所江取懸、村中令放火、於切寄雖詰寄候」（１－543）が挙げられる。ここでいう赤尾氏は現在の宇佐市赤尾を本拠とした土豪であるが、上の記述から切寄が赤尾氏の宅所という日常の施設と別に構築されたことを確認することができる。従来、この赤尾氏の切寄は光岡城（宇佐市赤尾）に比定されている。光岡城は標高約140ｍの丘陵上に位置し、尾根に沿って南北85ｍ、東西35ｍの長方形の郭があり、周囲に濠がめぐることが確認されている。ただ、遺構の年代は不詳であり、上でいう赤尾氏の切寄が光岡城にあたるとは断言し難いが、いずれにせよ切寄は土豪の宅所とは別に築かれる場合があったことをまず抑えておきたい。

次に注目されるものとしては、宇佐市四日市に所在した四日市切寄に関わる一連の史料である。同切寄は、天正８年のものとみられる諸史料に四日市切寄渡辺寄合中（１－526・539）あるいは渡辺石見守・市左衛門尉・三郎右衛門尉・兵部丞・縫殿助・壱岐守・其外切寄衆中（１－590）という文言があり、渡辺氏一統を中心とする集団によって維持されたことがわかる。また、天正12（1584）年の大友義統の書状には「当切寄商売人方々往返之刻」（１－729）とあり、四日市切寄には商売人が住したことも窺える。

この四日市切寄については、天正８年８月の発給とみられる大友義統の書状には「最前以来寄合中切寄取誘」（１－526）とあり、四日市切寄は天正８年に近い時期に築造されたことが窺えるし、前述したように四日市切寄には商売人も在したこともふまえると、その比定地は現在の四日市中心部にあたる平地部とみられる。同切寄の構造などは判然としないものの、渡辺氏を中心とした集団によって構築維持されたことから、宅所を含む一定のエリアを囲い込むものであったと考えられる。

以上の点をまとめておくと、切寄には赤尾氏の切寄のように土豪の宅所とは別に構築されるものと四日市切寄に示されるように一定のエリアを囲い込むような、惣構というべきものの２つのタイプが存在したことを史料から想定することができる。ただ残念ながら、諸史料にみられる様々な切寄について、後述する安岐切寄を除けば埋蔵文化財調査もほとんど、「賀来安芸守切寄」と「築地村切寄」というように、人名を冠するものと地名を冠するものという分類もできるが、その差違がどこにあるのかなどは詳らかでない。

（イ）構築主体

次に構築主体についてであるが、切寄に関する諸史料をみると、前述した四日市切寄は渡辺寄合中が「取誘」

たものであり（1－526）、田原親家が賀来安芸守に「切寄取誘、堅固相支」と述べている（1－423）ことなどから、切寄は在地土豪によって築かれたものであることが確認できる。ただここで重要なことは、切寄という言葉は大友方・反大友方を問わず使用されていることである。例えば田原親貫方の拠点の１つは「安岐切寄」（1－512など）と呼ばれたし、反大友方であった時枝氏の拠点は「時枝切寄」と記されている（1－589など）。このことは、本来切寄という言葉が在地土豪によって築かれた城館を称するものであり、それは大友方の土豪に限定するものでないことを示しているだろう。すると、吉本氏がいわれるように切寄を大友氏の防御拠点と位置付けるのみでは理解できない面が生まれるし、氏がいう切寄の語義もなお検討を要するであろう。

天正７年以降の動乱期に諸史料に登場する切寄については、「武蔵要害并福寿院切寄」（1－593）などと同時代の史料では「～城」と書き分けられ、「～城」と称された城館とは異質のものと認識されていたことを確認できる。あるいは、「今度西表之悪党令現形候之処、其方事切寄取誘」（1－534）という表現に示されるように、切寄は動乱状態をうけて在地においてきわめて短期間に築かれたものといえる。これらをふまえると、切寄は例えば妙見岳城を典型とする、「～城」として表現されたものと異なり、大規模で計画的な工事を伴う城館でなく、動乱の中で土豪によって急造されたものともいえる。このような切寄の構築については、宇佐・下毛地域の支配を担った田原紹忍の指示があったことも想定されるが、大友氏権力が関与するものではなかったとみられる。大友方の土豪が築いた宇佐・下毛地域の切寄は、大友氏にとっては同地域の支配維持と動乱抑止において田原紹忍が在する妙見岳城と「本城－支城」という関係が結ばれ、防衛拠点として領国支配の中に位置付けられたといえる。そうした切寄の中には、吉本氏が指摘された四日市切寄は検使の派遣（1－433）などを通じて、地域の中核とされたものも認められる。

切寄の構築という点に関しては、吉本氏が指摘されているが、新たに構築する場合と既存の施設の再整備や改変という２つの場合を想定できる。前者の例としては、史料上なお判然としないが、諸史料に「取誘」と記されたものを挙げることが可能である。一方、後者の例としては安岐切寄が注目される。同切寄は諸史料にみられる切寄の中で唯一発掘調査がなされたものであるが、その調査所見によると、遺構は３期に分類され、第３期にあたる文禄期の熊谷氏による大規模改造以前の遺構は居館というべき特徴を備え、その画期は16世紀後半から末期に画期があるとされる。この第１・第２期の遺構は連続性をもち、第２期では土塁や薬研堀が築かれ、従前の施設の防備強化がなされたという（玉永・小林1988）。こうした所見は、動乱状態をうけて既存の施設を再整備した切寄の一例を伝えると同時に、切寄と呼ばれるものの構築が大規模かつ計画的な工事を伴うものでないことを示唆しているのではなかろうか。

ちなみに、史料上切寄は豊後国の南部でも検出できる。その初見は天正12（1584）年の志賀道輝による宇目（豊後海部郡）の諸切寄の点検を伝える史料（1－731）である。これは「薩摩衆も気をゆるしかたく」という緊張状況をうけてのことであった。また、『豊後国古城蹟并海陸路程』（1－記録部二－2）に記された豊後国の大野・直入郡などの諸切寄は天正14年の島津氏の侵入ルートに位置している。これまでみてきた切寄の特徴をふまえると、これらは対島津氏との緊張状態あるいは動乱の中で在地の土豪などが構築したことが窺える。宇佐・下毛地域に遅れて豊後国南部で切寄が登場することは、同地における動乱状況が天正12年以後に現出したことと無縁ではないのである。

（ウ）小　括

これまで述べてきたことをまとめておくと、切寄として表現された城郭は、天正７年以降に創出された動乱状態をうけて、在地の土豪が新たに構築あるいは既存の城郭を再整備したものを大友氏が呼称したものである。大友方の土豪が築いた切寄は、大友氏の領国支配のなかで防衛拠点として編成されたのである。

さて、このような切寄を中世城館と我々が把握するものの中で位置付けるならば、それは千田嘉博氏が示された小規模城館にあたることがまず指摘できよう（千田1991）。前述したとおり、切寄には宅所と別に構築されたものと惣構というべきものの２種が存在するとみられるが、このようにみると切寄という言葉は単一の用例を持つ言葉と規定できないことも窺える。ただ、諸史料にみえる切寄はその構造を明瞭に確認できる事例がほとんどないこともあって、土豪の存在形態や在地構造とどのようにリンクするのか明らかでない。

ここで改めて大友氏の領国支配との関わりから切寄を捉え直すと、その構築は「城誘」として表現された大友氏が直接関与する、体系的な城郭整備に基づくものでないことがまず指摘できよう。既に、大友氏の領国支配をめぐっては、有力家臣を「方分」として一定のエリアを統括させたこと、大友氏が新たに自己の領域とした地では、在地に存在する土豪らの相互扶助の論理で問題解決を図ろうとしたことが指摘されている（藤木1969・三重野2000）。このように大友氏の領国支配は、そのすべてで大友氏が主従制的ヒエラルキーによる一元的支配（三重野2000）を貫徹させたわけではなく、特に新たに支配地としたエリアで在地における緊急性・危険性を伴った状況下では各地域にその解決を委ねる部分があったといえる。動乱状況の中で在地土豪によって構築された切寄が、基本的

に宇佐・下毛地域をはじめとする大友氏の本領でない周縁部に分布していることは、こうした大友氏の領国支配の在り方を端的に示すものといえるだろう。

5．おわりに

天正15年、豊臣秀吉の「九州仕置」の後、黒田氏は中津に入部した。それに先だって、豊前国の城破と境目の城の維持が命じられている（1－839）。この時点まで残存した切寄などの破却はこの段階で行われたとみられる。その中で黒田氏によって、山国川河口に新たな城郭－中津城－が築造された。これは山国川の治水を前提とするものであり、こうした海岸近くに立地する城郭は、九州でも嚆矢となるもので注目すべき城郭といえる。一方で、妙見岳城と龍王城は大友氏の下に残されている（1－840・841）が、その理由は詳らかになし得ない。

さらにその後、いわゆる「一国一城令」によって宇佐・下毛地域では中津城を除いて城郭は破却されたが、切寄は地域の「歴史の記憶」に留められた。本来の意味は忘れ去られようとしながらも、例えば17世紀初頭の成立とみられる『豊州城堡記』（2－補遺15）は「～城」と「～切寄」を書き分けているし、正保期に成立した『豊後国古城蹟并海陸路程』でも切寄の言葉がみられ、豊後国南部でもなお記憶された言葉であったことがわかる。だが、時代を下るにつれ城郭であったという点でもって、切寄の言葉自体が忘れ去られ「～城」などという言葉で統一されたのである。（櫻井成昭）

註

（1）「田原親家感状案」（1－669）で、親家が尾長居切寄（現宇佐市尾永井）に籠もった津崎兵庫助に対し「至切寄悪党等取懸之刻、城内各一段粉骨之故、敵即時引退之由」と述べたように、切寄と城内という言葉が併せて使用されており、切寄は城館の1種として認識されたことがわかる。

（2）四日市切寄については、従来享保10（1725）年の年紀を有する『四日市村年代記』序文に、黒田氏入部とともに渡辺氏は「狐塚山の切寄を転して、村土井に引籠、荒野一町余開発前後に堀を構、石垣を築上、（中略）一村に三屋敷を開き、四至の堺を極め」とあり、狐塚山は宇佐市四日市の小倉池の北側にあることから、現在の四日市中心部の南西にある丘陵部とされている17世紀初頭の成立とみられる『豊州城堡記』に記述がある。これによると、明徳年中に渡辺氏は狐塚山に一城を構え、「下邑ニ土井ヲ営」み、弘治年間以後渡辺一族は繁昌し和泉守・筑後守・三郎右衛門尉の兄弟は「各切寄土井ヲ構」とあることからも、天正期の諸史料にみられる四日市切寄は現在の四日市中心部に立地したと推察される。

（3）宇佐市大字宮熊は、土豪萩原氏の拠点である。現在、この地は集落を囲う土塁が確認でき、集落内に城という小字がある。ただ、この地が切寄と称されたかは史料上詳らかでないために即断はできないが、ここに四日市切寄のように土豪の本拠たる集落などを囲う切寄の1タイプをみることができよう。

＜参考文献＞

阿蘇品保夫「切寄考」（『石人』257・260・261号　1981年）
稲本紀昭「戦国的権力編成の成立－豊前国の場合－」（『日本史研究』108号　1969年、のちに『九州大名の研究』戦国大名研究論集7　吉川弘文館　1983年に再収）。
乙咩政已「中世末期から近世初頭にかけての城郭について」（『大分県地方史』122　1986年）
千田嘉博「村の城館をめぐる五つのモデル」（『年報中世史研究』16　1991年）
玉永光洋・小林昭彦『安岐城跡・下原古墳』（大分県教育委員会　1988年）。
藤木久志「室町・戦国期における在地法の一形態」（『聖心女子大学論叢』31・32合併号　1969年、のちに同氏著『戦国社会史論』東京大学出版会　1974年に所収）。
三重野誠「戦国期大友氏と方角衆・方角之儀」（『相剋の中世』東京堂　2000年、のちに同氏著『大名領国の支配構造』校倉書房　2003年に所収）。
吉本明弘「中世城館から見る大友氏の領国支配－「切寄」を事例として－」（『大分県地方史』189号　2003年）

3．城郭構成要素の変遷　～城館編年のための基礎作業～

はじめに

中世城館は、様々な要素が複合的に絡み合って一つの形をなしている。さらにそれらは、築造当時の姿の上に時間の経過とともに修築、改変などにより様々な要素が加味され、さらに城館の使命の終焉とともに意識的に破壊されるか、または崩れるに任せてその姿を変えていくことになる。

このことは、例えば一度きりの焼成によってその姿が決まる土器と比較したとき、いかに城館を時間軸上に位置づけるのに困難を伴うものかが想像できるであろう。しかし、歴史的なモノは正しく時間軸上に配置しない限りは、そのモノに対して歴史的評価が十分に与えられないのは言うまでもない。[1] 最近の中世史研究の飛躍的深化に歩調を合わせるように、城館研究でも「地域論」、「権力論」などが注目されているが、やはり基本である城館年代決定論の深化こそが、城館そのものの正しい評価を与えるものであり、城館から見た社会論の構築には必要なものであろう。

ここでは、先ず原点に還って城館そのものの編年にあたっての基礎的な作業を行った上で、幾つかの城郭についてその遺構の変遷を考えてみたい。

個別要素の出現年代とその変遷

大分県の城館において、城館を構成する要素の内、地表面観察で確認できるものをすべて抜き出してみると次のようになる。それは、平坦面（曲輪）、切岸、竪堀、畝状竪堀、横堀、堀切、土塁、石垣、石塁の９つの要素である。すなわち、僅か９つの要素の組み合わせですべての城館が表現できることになる。その要素をどこに配置するのか、あるいはどの要素とどの要素を組み合わせるのか、長さや形、幅、高さはどうするのか、数は幾つ配置するのか、といったことがらを城館を作る対象である自然地形の起伏を勘案しながら決定していくはずである。では、同じような地形であれば、必ず同じような城館が出来るかと言うとそうではない。その際、当然ながらその当時の戦術を反映した作りになるし、流行、技術的な裏づけ、あるいは築城にあたっての動員力や家臣団との関係といった事柄が反映したものになってくるので、ほとんど同じような城館は無いと言っても良い。

では、これらの城館を構成する各要素について、主に文書資料と各城郭の縄張り分析、さらには発掘調査の資料などによりながら個別にその出現年代と変遷を押さえていくことにする。

（平坦面と切岸）

平坦面は曲輪として利用するとともに、崖面を切岸として利用することにより防御面も担っていた。曲輪回りの斜面や尾根の斜面を登ってくる敵を防御するために、階段状の平場（曲輪）を幾段も築き、斜面の傾斜を急にした。おおよそ、主郭の面に比べて20から30ｍほど下まで加工が見られる。高城や立石城、野上城などが典型的である。これらの城郭には基本的に堀切が存在しないが、高城では尾根上の階段状曲輪の下に堀切が一条あるものの、通例の堀切のように斜面に貫通しておらず、片一方は等高線に沿って回り込み、帯曲輪を形成する。これは堀切の機能を十分に発揮したとは言えず、その初現形態といってもよいだろう。

発掘調査された瀬戸遺跡は、13世紀前半から14世紀前半の館城的な施設であるが、沖積地からの比高差が50ｍほどあり、切岸で約50ｍ四方に画された主郭と、それを取り巻く帯曲輪、さらに傾斜のきつい尾根には階段状の平場が形成されていた。この例からも、この段階では尾根部の処理にあたって、堀切よりも階段状の平場が用いられていたのが分かる。

一方、佐田城ｇ曲輪群の斜面にも同様の階段状の平場があるが、片側に竪堀があり、平場のみに比べて防御性が一段と高まっている。立石城も同様である。佐田城が15世紀末の「佐田山所々御陣」に相当するならば、それより古い形態を示す高城や野上城などの単純な階段状平場の形成は、直接構築を示す史料はないが15世紀末以前に遡るとすることができるであろう。

また、もう一つ平場で特徴的なものに、主郭回りを取りまく横堀状の帯曲輪がある。亀城や雄牟礼城、帆足城、鹿鳴越城などで見られるもので、雄渡牟礼城や鹿鳴越城などは明応段階（15世紀末から16世紀初頭）ですでに機能しており[2]、これらの横堀状の帯曲輪がこの段階で存在したことが考えられる。前述の瀬戸遺跡も50ｍ四方の平場の周囲に帯曲輪状の平場が巡っており、同タイプと思われる。そうすれば、山頂部から幾重にも腰曲輪を造るタイプと、帯曲輪を１回回すタイプのものが同時に存在していたことになる。

（竪堀）

天文年間に玖珠郡の在地土豪等に出した大友義鑑の書状に「角牟礼新堀之事」とある。これは、その前年に筑後、豊前方面の押さえとして大友義鑑が平井左衛門尉を「城誘奉行」に任じて造らせた具体的な内容を示すものである。角牟礼城には竪堀以外の堀は無いので、「新堀」は竪堀を指すと考えられる。そうすると少なくとも16世紀第２

四半期には確実に竪堀が存在したことになる。[3] この竪堀は、虎口付近で東側への回り込みを防ぐために掘られたもので、同様の機能を果たしたと考えられる竪堀は、他のいくつかの山城で確認できる。

下毛郡に位置する馬台城には虎口付近に２本の竪堀が入れらている。この城は16世紀前半、大内氏の豊前支配の拠点的城郭として妙見岳城とともに機能していたが、豊前が大友氏の支配に移ると馬台城は役割を終えたと考えられる。すなわち、16世紀前半代の遺構と考えられるのである。同時期に機能した妙見岳城を見ると、一見南側斜面には多くの畝状竪堀が施されているように見えるが、曲輪直下に始まる畝状竪堀群と、堀切に伴うと考えられる竪堀群とに分けることが可能である。後者の竪堀群が馬台城などと同様虎口周辺に伴う竪堀であるとすると、この部分の構築は大内氏の手による15世紀末ころからの城誘に伴うものである可能性が高い。なお、畝状竪堀と堀切の評価については後述する。

大友氏の本城である高崎城は、18条の竪堀があるが、虎口周囲にありお互いの間隔が広い一群は竪堀群と解釈するのが適当である。そうすれば、その一群の竪堀は、少なくとも16世紀代でも早い段階で構築されたものである可能性が高い。

佐賀関の烏帽子岳城は、虎口に近接すると思われる位置を中心として５本の竪堀が見られる。この城は、永禄年間に大友宗麟に許されて四国から豊後に戻った佐伯惟教が築いたとも言われており、この竪堀も永禄年間の築城である可能性がある。[4] 更に、鹿鳴越城は天文３（1533）年の大群山合戦時に「城誘」がなされたが、明応年間にはすでにその存在が明らかであり、複数回の改修が想定できる。中でも堀切から連なる竪堀の発達は顕著でこの城の特徴となるが、やはりこの初現は天文期の改修になるものであろう。

また、屋山城や小岳城、鶴ケ城などは、畝状竪堀と一体となりながら、虎口への通路を狭める目的で竪堀を巧みに使用しており、さらに時代が下るものであろう。これらは屋山城が天正７年の「要害誘」とあり、他も天正14年からの島津氏豊後侵攻時に機能していた。よって、この虎口付近の竪堀は天文期から天正期にかけて曲輪との連携を深めながら、虎口の明確化とも相まって技術的進歩を遂げた考えられる。

また、竪堀でも虎口とは別な個所に掘られるものがある。それは、平坦面のところで記したが、立石城に見られるように尾根に階段状の平場を形成し、片側（基本的には外側）に竪堀を入れるものである。同様の竪堀は、佐田城のｇの曲輪群や高旗城の東西の曲輪群、天面山城などに見られる。妙見岳城のＩの曲輪群からIIの曲輪群に下る土塁を伴う竪堀もそうであろう。[5] ところで、尾根部を階段状に加工し防備する技法は、前記のように野上城西曲輪群や高城などに典型であるが、これらには竪堀が伴わない。しかし、野上城の西側に伸びる尾根は、その北側に城道と考えられる長い帯曲輪を持ち、高城も南側に伸びる尾根の先端部には長く帯曲輪を巡らせている。これらは、尾根に沿って下る竪堀の初現形態とも考えることが出来る。竪堀を伴う佐田城の遺構が15世紀末の「佐田山所々御陣」に相当するならば、この段階で尾根線を縦に下る竪堀が出現していたと考えられる。しかし、この竪堀は尾根を階段状平場で処理をしなくなるようになると用いられなくなる。

以上のように、竪堀は二つの系譜があり、尾根上の階段状の平場に接して下る竪堀は15世紀末には出現していた可能性があり、虎口周囲の竪堀は16世紀前半代には出現していた。そして、特に後者は後に出現する畝状竪堀などと組み合わせられながら、虎口に至る通路を狭めるために曲輪との関係を深めながら、天正年間にかけて巧みに配されるようになっていく。

（畝状竪堀）

畝状竪堀は現在大分県内で24個所の城館で確認している。まず、その形態によって分類するのが一般的であるが、ここではこの遺構が16世紀代に限定されたものであるという前提の上に、地域の歴史的状況からその出現年代に迫ってみたい。

豊後から豊前南部にかけての地域における緊張時期にはいくつかのピークがある。16世紀後半に限ると次のようになる。

まず、豊前南部を見ると、弘治３（1557）年に大内氏が滅亡するとともに、大友義鎮は豊前、筑前方面の支配に乗り出し、永禄２（1559）年には豊前、筑前の守護職を手に入れる。こうして、九州北半を押さえるが、すぐに周防の毛利氏が九州に侵攻し、北部九州は混乱する。さらに永禄５年には豊前南部にまで侵入し、大友義鎮は府内から臼杵の丹生島城に移らざるを得なくなる。元亀２（1571）年に毛利元就が死去するまで混乱は続くが、その中で大友氏は永禄２年に妙見岳城の「城誘」を行い、鹿鳴越城の守りを固めるなど、府内から見て北部方面の防備を厳重に行っているのがわかる。

引き続いて豊前南部では天正７（1579）年頃、広範に緊張感が高まる。その中で、大友義統は「屋山要害誘」や妙見岳城の「普請」を、そして「鞍懸要害」の城番を堅固に申しつけるなど豊前、豊後国境付近の城郭に対して守りを厳重にすることなどを促している。この動きは翌天正８年の田原親貫の乱となって現実のものとなり、さらに翌９年には大友宗麟による宇佐宮焼き打ちがあり、天正11年頃まで豊前南部の宇佐郡と下毛郡は騒乱状態となる。それに対して、大友氏は天正７年頃から在地土豪の小規模城郭を「切寄」として直接掌握する動きにで

る。[6]

以上のような状況から考えると、妙見岳城や立石城、烏帽子岳城、屋山城、日指城など豊前、豊後国境に集中的に展開する畝状竪堀は、天正７年前後に構築されたものである蓋然性が高くなる。その場合に、畝状竪堀の形式に差があるのは、元もとの城郭の型に規制されたものであり、時期差を示すものではなかろう。例えば、烏帽子岳城などは主郭との関係が明瞭で、城郭プランの中で当初から想定されていた位置に施されているように見えるが、屋山城や立石城、妙見岳城などは後から弱い部分に追加したように見える。[7]

一方、天正９（1581）年に豊後西部の筑後国境に位置する高井岳城の城誘を問注所刑部大輔に命じるなど、やはりこの頃からこの地にも豊前の動きと連動した騒乱状態が生じてくる。高井岳城にも畝状竪堀があり、この時の構築であろう。また、財津古城にも畝状竪堀があるが、この構築が文書上の「財津讃岐入道所宿誘」に相当するならば、やはり天正10年のこととなる。

日田からさらに上流に上った玖珠盆地周辺にも畝状竪堀が集中する。ここは、筑後との緊張関係で出現する理由に乏しいが、豊前の動乱がこの地と境を接する下毛郡に及ぶようになると、やはり豊前、豊後国境地域として大友義統は玖珠郡衆に対して、備えを怠らないように伝えている。これは天正９年のことであり、この地も日田と同様、豊前南部よりやや遅れて畝状竪堀が採用されたと考えられる。

また、豊後中枢部（府内、臼杵）以南に点在する畝状竪堀は、天正14年からの島津氏豊後侵攻に係わる構築であると考えられる。この南部地域は、16世紀後葉の天正14年以前には基本的に地域を巻き込む大きな戦乱の舞台にはなっていない。そのためか、この地域では大友氏が直接城誘を命じたことを示す文書はない。一方、地域の拠点的城郭に畝状竪堀が見られることからすると、大友氏が豊前南部から豊後北部～西部の在地で「〇〇衆」などに命じた「城誘」と異なり、天正14年の島津氏侵攻に備えてある程度自立的に構築、改修したことが考えられる。[8]

以上、畝状竪堀は地域を巻き込む戦乱状態の中で地域的にまとまって出現した可能性が指摘できる。その中では院内から山香、さらには玖珠郡にかけての豊前・豊後の国境付近がもっとも古く天正７年頃、やや遅れて筑後境の日田地域で天正９年頃、その他の南部地域では天正14年の島津氏侵攻に備えてに構築された可能性が考えられた。

（横堀）

横堀は、考古学的な発掘調査によって14世紀代の「ふいが城」で確認されている。発掘調査前の状況でも横堀は明瞭に確認されており、かなりしっかりした直線的な横堀である。しかし、この横堀の系譜やその後の展開は不明である。[9]

豊後から豊前南部では横堀を有する城郭は少ない。まず、部分的にでも使用した城郭をあげると天面山城、御所の陣、小城、松牟礼城、佐田城の各曲輪群、副城、高井岳城、吉広城、甲ノ尾城、坂手隈城、日指城、高森城、山本砦、山本切寄、高山城の15城となり、その内５城に畝状竪堀が伴う。その５城の畝状竪堀はいずれも横堀と密接な位置に掘られており、同時期に構築されたものと考えられる。即ち、天正７年から同14年にかけてのものである。

その他の城郭では、御所の陣が天正８年、天面山城は天正14年と考えられることから、概ね横堀の構築、使用は突出したふいが城を除き天正後半期に限定できるものである。特に、高森城と山本切寄、高山城は、横堀に折れ（横矢掛かり）を持ち、櫓台状の突出部を持つなど共通点が認められる。高森城が天正16年に宇佐郡に入った黒田利高の築城と言われており、それが事実であれば他の山本切寄や高山城もその支城として構築されたことが考えられる。

このように、横堀は鎌倉期からの伝統があるが、城郭の防衛ラインとして主体的に用いられるようになるのは天正期後半代と考えられる。

（堀切）

堀切は、尾根線の防御を階段状平場とともに担う施設である。しかし、この両者が共存する城郭は少ない。

高城には主郭からかなり下った地点に階段状平場に伴って堀切がある。この堀切は両側の斜面に竪堀として下らずに、斜面を回り込んで帯曲輪につながる。これが15世紀末以前に出現したことが想定できたが、このように尾根線の防御を階段状の平場と切岸が担い、その後堀切を入れるようになったとすれば、主郭から離れた地点に堀切を入れる事はその名残と考えることもできる。津賀牟礼城や栂牟礼城、山の城などの城郭は、主郭から遠く離れた尾根筋を幾重にも掘り切るという共通点がある。[10]

一方、このように尾根の遠いところを掘り切るものとは別に、曲輪に接する部分に堀切を施すものがある。屋山城、佐田城、岐部城、成仏城、御所の陣、龍ケ鼻城、日指城、城の越古城、田附城、高井岳城などである。これらは、尾根部に階段状の曲輪群を設けて防備しようという発想から抜け出し、曲輪回りをコンパクトに守ろうという意識が見て取れる。屋山城は天正７年に「要害誘」、高井岳城が天正９年に「城誘」、龍ケ鼻城が天正９年

に三ヵ年の城番で感状があるなど、総じて天正期後半代の城郭に認められる。

すなわち、前者から後者への変遷が認められるならば、16世紀前半代に曲輪から離れた尾根の先のほうを掘り切る堀切が出現し、天正期後半（16世紀第４四半期）には曲輪に接する部分を掘り切るようになっていったものと考えられる。

（土塁）

土塁にはいくつかのパターンを認めることができる。一つは佐田城や副城などのように主郭の周りをしっかりした高さの土塁が囲むもの。これは、横堀の出現と軌を一にするものである。一つは低平な土塁が曲輪の一部に認められるもの。そしてもう一つが曲輪の片側にのみ比較的高い土塁を持つものである。この３番目の土塁は地域性が明瞭に認められるもので、いわゆる「南郡」と呼ばれる大野郡の城郭に特徴的に認められる。

松尾城、荒平城、烏岳城、鳥屋城などにあり、状況から判断して削り残し（削り出し）で土塁を造っているものと考えられる。つまり、平坦面を確保するために山頂部全体を削平するのではなく、片側のみ掘り残す事によって頑丈な土塁を確保したものである。なお、杵築の竹の尾城にも類似の土塁があり、関連が考えられる。しかし、今のところ、この種の土塁の年代を想定できる資料が無いが、天正期にその使用が確認される城郭にもあるので、使用の下限は天正期に求めることができる。

（石垣、石塁）

最も特徴的で、突出した存在でもある長岩城は、まさに石垣と石塁の城である。この城での石の使用は二つに集約できる。すなわち、主郭回りの石垣と、塁線としての石塁である。石積みは板状節理の安山岩（山に転石として無数に散在）を単純に小口積みにしたもので、高さは２ｍほどが最大である。これに類似した石塁は雁股城などに認められるが、基本的には石材の有無に左右されるものであり、石垣技術として広く広まるものではなかった。

その他に石積みの認められる城郭は、佐田城ａ、ｅ曲輪群、矢部城山城、光岡城などで、いずれも天正期後半以降のものと考えられる。

城郭の年代決定について

前節では城館の個別要素について出現年代と変遷について述べてきた。ここでは幾つかの城郭に焦点を当てて、その変遷を具体的に見ていきたい。

文書上で複数回の改修が確認できる妙見岳城を見ると、最高所を中心として、四方向に伸びる尾根線上の平場を曲輪として利用し、斜面部に竪堀を施すことによって防御ラインを形成し防備を固めるというのが基本的な縄張り構造の城郭である。それを個別の要素に分解して見ると、先ず、最高所から階段状に曲輪を配すという15世紀代の手法があるのがわかる。さらにこの階段状の曲輪群の横には一部に通路状の竪堀が確保されており、15世紀でも終わりに近い構築が想定できる。階段状の曲輪群のさらに先に堀切が何重にも掘られているのは、16世紀前半代に入ってからのものと考えられ、それには主郭西側の竪堀群が伴うものであろう。そして、天正７年前後には尾根先端部の曲輪を守るように畝状竪堀群が掘られるのである。つまり、大内氏から大友氏と築城主体が変わっても、当初に形造られた基本的な縄張りは変わることが無く、弱い部分に新しい要素（技法）を採用することによってより頑丈な城郭に変えていったと解釈することが可能である。この妙見岳城は、文書では明応８（1499）年に大内氏のもと宇佐郡院内衆が同心して城郭を拵え、永禄２（1557）年には大友氏が宇佐宮社領などへ「城誘」の負担を命じ、さらに天正７（1579）年には田原氏が差し籠って普請をなしていることがわかる。この文書で確認できる３回の築造、改修が三段階の遺構の変遷に対応する可能性が高い。

次に明応段階（15世紀末）に構築されていた佐田城を見てみると、ここは６カ所の独立した城郭の集まりであるが、特にｂとｇの曲輪群には階段状の平場群がよく残り、15世紀代の構築であると想定できる。ｇ曲輪群には尾根上の平場に伴う竪堀が下り、15世紀末の指標と考えたものである。さらに、全体的に独立的な堀切の多用は認められず、ｃやｅ、ｆ、ｇに認められる堀切は横堀と連結するなど新しい要素があり、これらはいずれも天正期に一斉に改修がなされたものと考えられる。中心のａ曲輪群は、更に一段とグレードが高いが、同時期の改修であろう。このように、佐田城の変遷は、徐々に改変が加えられていったというより、古い城郭の上にある時期突然と改変の手が加わったと見ることが出来る。そして、外見上（曲輪回り）はまったく別な城郭に造り替えられたのである。

次に、文書上は「改修」の文言は確認できないが、南北朝期から大友氏の持ち城であった高崎城を見ると、基本的には尾根を階段状に削り出し曲輪群を設けるもので、現在見ることの出来る遺構の基本的姿は15世紀代には成立していた可能性が高い。さらに、その曲輪群の南側には「城道」として機能している竪堀があり、妙見岳城や立石城、佐田城ｇ曲輪群などと同時期の15世紀末段階の姿をとどめている。しかし、本来であれば階段状の曲輪群で繋ぐべき主郭ａの部分と主郭ｂの部分の間に大きく自然地形を残している。これは、主郭ａ部分の特異性にその要因があると考えられる。すなわち、主郭ａは主郭ｂの西にある堀切により、それより下位の曲輪群と厳

密に区別される存在であったということである。そう考えれば、主郭ａから東側に展開する曲輪群は、一連のものとすることができ、初めて全体的に古い様相を残していることが頷けるのである。そして、16世紀前半から中ごろにかけて虎口部周辺に竪堀群を入れ、東側に回り込まれるのを防ぐ手立てをする。更に、天正期には一番弱い東側の尾根の先端部付近に畝状竪堀を施すのである。

おわりに

以上代表的な３つの城郭を例として取り上げ検討を加えたが、いずれも発掘調査で確実に年代が押さえられているわけではない。改修を重ねて古い遺構を壊す場合は発掘調査でも年代が押さえられない可能性もあり、基本的には単相の城郭の年代を押さえることの積み重ねが、改修を重ねた城郭の変遷を読み解く鍵になるであろう。その意味で、個別小規模城館の持つ意義は大きい。（小柳和宏）

註

(1) 千田嘉博氏による織豊系城郭の虎口編年が、城館研究に飛躍的な進展をもたらした事を見ても明らかなことであろう。

(2) 雄渡牟礼城は更に南北朝期に遡る。

(3) この角牟礼城は、後に織豊系城郭に改変されており、当初の姿が不明な部分が多いが、竪堀は基本的に最終段階まで機能していたものと思われる。しかし、その竪堀の築造が文禄期にまで下ることはないので、おそらく天文期のものであろう。

(4) 竪堀が曲輪との関係を強めて入れられており、単独に近い馬台城や高崎城などど比べて新しい要素と見ることができる。

(5) 高崎城の曲輪群の南側にある城道などは、これらの発展形態と見ることができる。

(6)「切寄」という用語は天正７年以後に新たに造られた、あるいは、まったく別な城の改修された城郭、または防御的な集落を指すと考えられるので、この時期、面として戦乱状態が継続していた豊前南部の特異性を見ることができる。

(7) 烏帽子岳城の構築年代を示す文書はないが、この時期に新たに造られた城郭と考えられる。また、立石城は主郭からかなり下った階段状の曲輪群の下に畝状竪堀が入れられており、一見すると古い畝状竪堀に見えるが、これは城郭の型が古いのであって、そこの一番弱いと考えられた部分に畝状竪堀を施した、と考えられる。

(8) 畝状竪堀を有する府内に近い小岳城、鶴賀城、水ヶ城は、それぞれ清田氏、利光氏、臼杵氏といった大友氏に近い一族の城郭であり、大友氏の高崎城や丹生島城と一体となって豊後領国防衛の最終ラインとして機能していた。また、南郡の津賀牟礼城、松牟礼城、高尾城の畝状竪堀は天正期に機能しており、宇目の駒鳴砦は島津氏侵攻に備えて岡城の志賀氏が入ったが、ここにも小規模な畝状竪堀が見られるなど、天正14年の島津氏豊後侵攻が契機となって南郡の国人クラスの大友家臣が主体となり築いたのは間違いないと考えられる。

(9) 伐株山城の麓にある丘陵上の陣ヶ台遺跡では、13世紀代のやや湾曲する溝が確認されている。比高差90ｍほどの丘陵上で、しっかりした溝が巡ることは注意される。

(10) これらの想定される城主が入田氏、佐伯氏、朽網氏といずれも16世紀前半から中ごろにかけて大友氏に反旗を翻した一族であることが興味深い。言われるように、これら半ば独立的な家臣団の自立性の高さが、大規模で、かつ防御に重点を置いた城郭を生み出していったエネルギーであったとも言えるであろう。

第4章　特論

1. 寺と山城

飯沼　賢司
別府大学教授

朝鮮式山城から山岳寺院へ

古来、寺と山城は密接な関係をもっている。663年、白村江の戦いで新羅・唐の連合軍に破れた日本側は、大宰府を整備し、その防備を固めるため、水城や朝鮮式山城や烽火（狼煙台）などを設置した。大宰府のすぐ北裏に位置する大野城は、百済から亡命した貴族の指導の下で造られた新しい城であった。山頂部を土塁で囲み、谷にも石塁を築き、城壁のような構造を持たせ、その中に倉庫などさまざまな施設が置かれていた。山などを神の住む恐ろしい場所としてみてきた日本人には、このような山城の発想は新しいものであった。そのため、新羅との緊張はそれから200数十年維持されるが、大野城の機能は永くは続かなかった。

山城としての大野城に替わって新たに設置されたのは寺院であった。大野城の山は四王寺山と呼ばれている。これは、宝亀5年（774）3月に新羅が日本に対して、毒心を懐き、常に呪咀を為すため、「高顕淨地」に災い攘却のために四天王寺を造り、四躯の四天王像を安置したところから起こった名前である（『類聚三代格』）。天平宝字のころ、新羅と日本は一触即発の状態となり、その後、新羅船などの到着する度に緊張が走った。この四王寺の設置もそのような緊張の結果であり、宝亀5年（774）から律令制府は漂着新羅人は放還するという方針に転換した。この緊張は、大野城の補修や整備という方向には向かわず、新羅の呪咀から国土を護る方法として仏教を前面に登場させることになった。

新羅との関係は、九世紀に入ると一段と悪くなり、新羅船が海賊行為に及んだり、国内での新羅人の反乱事件などを契機に悪化の一途をたどった。このような事態は、城の整備ではなく、宝亀五年からの流れを受けて寺の設置によって新羅の脅威に対処する方向に進んだ。貞観9年（867）5月26日には、八幅の四天王像がそれぞれ伯耆、出雲、石見、隠岐、長門に五箇所に配布された。これらの国は西極の地にあり、新羅国と近く、他国とは異なり、特別な警備が必要であった。大宰府の四王寺と同じく、新羅の賊心を調伏するため、尊像の前で僧4人が最勝王経四天王護国品を昼夜転読することになった。（『三代実録』）。

これらの四天王の安置された場所は、「須く地勢高敞にして賊境を瞰瞰す道場を点択すべし」とあり、高地であり、新羅の国の動きを監視できる場所が撰ばれた。石見、隠岐の寺跡は確認できないが、伯耆は倉吉市四王寺山、出雲は松江市山代町、長門は山口県下関市にそれぞれ四王寺の遺跡があり、烽火が置かれるような見晴らしのよい山の上に設置されている。平安時代、軍事的脅威が存在しても古代の軍事的施設は整備、強化される方向には進まず、宗教的施設へ転換していった。

大分県では、古代の烽火が置かれた場所として高崎山や玖珠の伐株山などが想定されているが、ここにも、平安時代以降、神社や寺院などの宗教施設が置かれてゆく。玖珠の伐株山には、「高消寺」「高勝寺」という寺院があった。この寺の設置時期は不明であるが、平安まで遡る寺院と思われる。また、高崎山には、天台僧金亀和尚によって天長四年（827）に由原八幡宮が創建される。由原八幡宮の創建理由は「四海擁護」のためとされ、瀬戸内海に出没した新羅海賊などの脅威と関連したものと思われる。

奈良時代までは、神は人々に災害をもたらす脅威の存在として、それに近づけば人を殺すと恐れられていた（『風土記』）。平安時代、神仏習合が展開してゆく中で、山々に鎮座した自然の神々は、人間世界の中に取り込まれ、神の住む山にも多くの寺院が建立され、恐ろしい、大魔所は浄土の世界に変わってゆく。しかし、そのような理念とは別に、平安時代の後期にはいると、寺社は多くの荘園などを抱える権門勢力として、みずから僧兵などをかかえ、寺院そのものが現実の武力の拠点としての機能するようになった。殊に山岳寺院は、観念的な宗教上の砦だけではなく、現実の城としての役割を見せ始めるようになる。それでもまだ神域や仏域を犯して、武家勢力が山に入ることはめったになかった。

寺院の城塞化

しかし、14世紀以降になると、寺院が城として現実の戦いの戦場となるケースが急激に増加した。たとえば、玖珠の郡名の由来となった楠の巨木の切株といわれた伐株山の城はその典型であった。南北朝時代、この山の頂上にあった城は「玖珠城」「高消寺」「光勝寺」「光勝寺之城」などと呼ばれた。玖珠城には南朝方の勢力が籠もり、豊後の南朝方の拠点として大友惣領家の率いる北朝方と攻防を続けていた。

建武3年（1336）7月28日の稙田寂円軍忠状には、「豊後国球珠郡高消寺凶徒のうち、敷戸孫三郎入道普練、賀来弁阿闍梨、孫五郎以下の輩、当城を忍び出し、同国霊山寺に楯籠り、当山衆徒等と相語らい、今月廿五日、稙田大輔房有快之館に押し寄せ、数十宇の在家を焼き払う」【原漢文】とあり、 玖珠城の南朝方が城を抜け出し、大分郡の霊山寺に入り、そこから山下の稙田荘の地頭である稙田有快の館を攻撃した。

この史料では、玖珠城のことを「高消寺」といい、他の史料では「光勝寺之城」ともいい、寺そのものが城であった。敷戸普練らが楯籠もった霊山寺もまた天台宗の山岳寺院であり、寺と山城は同じ立地にあり、城と寺院という二つの顔をもっていた。このように、南北朝時代から山城の時代が本格的に始まるが、この時代の初期の山城の多くが寺の場所に置かれたり、寺と密接な関係をもちながら登場したことに注目する必要がある。しかも、それまでの寺院が武力を所持したという段階から、宗教勢力でない一般の武士が宗教勢力と一緒になり、寺院を城塞として使用するようになっている点も新しい展開である。

伐株山城遠景

大友氏の山城であった高崎山城もその中腹に由原八幡宮があり、先にも述べたように、城と宗教施設は深い結びつきをもっていた。国東の山々でも天台山岳寺院の六郷山に関係して、鞍懸城や華岳城のような山城が築かれた。鞍懸城は六郷山の寺院のひとつ鞍懸山の場所にあった城と思われる。当時、六郷山を統括する六郷執行（僧侶）は北朝方に付き、国東の都甲氏などの在地武士は、六郷山の執行の手に所属し、鞍懸城に入り、南朝方と奮戦していた（4月5日付大友氏継感状案、康安2年10月22日付九州探題斯波氏経御教書／都甲文書）。南北朝の動乱の中では、宗教勢力が武家と同様に戦いの最前戦に立ち、在地武士を巻き込んで、寺そのものが城として機能するようになった。

山香町と宇佐市との境界に位置する華岳城は、南朝方が豊前と豊後の道を遮断するために設けた城である。この城のすぐ南には六郷山の津波戸山があり、その東北には鞍懸城があった。南朝方の華岳城の設置はこのような六郷山の寺院勢力、しいては、六郷執行の下に組織された国東の武士の分断をねらってものと思われる。このような城の登場は、山岳寺院などの宗教勢力の手にあった山の支配に武家側が参入することであり、前代まではほとんど見られなかった新たな展開であった。

戦国の山城の意義

戦国時代はまさに山城の時代であった。日本各所の山にはさまざまな山城が築かれ、それまで、寺院や神社が独占してきた山の世界はさまざまな階層の人々の入り込む世界へと変化していった。それは、人々の開発が山へ入り、その利用がついに頂上に到達したという見方ができるのである。

鎌倉時代、武家勢力は、山野に狩倉という演習場を設定し、そこを梃子に山野支配を目指そうとしたが、いまだ山野には寺社の強い支配が存在し、国東半島でも奥の山間地にある天台六郷山寺院と谷の入口にある荘園と地頭とが山野の「畑」（焼畑）をめぐってしばしば衝突を繰り返していた。在地領主は狩倉と称して、山野を焼き、実際には畑を切り開いた（松平島原文庫所蔵文書）。 しかし、この段階では、山の頂部の支配は、在地領主の手には入っていなかった。

ところが、南北朝期に入ると、動乱の中で、先にも述べたように、山岳寺院を城郭として利用することがしばしば行われるようになった。聖域であった山の世界に麓の俗人たちが踏み込んだのである。この時代から、山への俗人たちの開発は急速に広がっていた。里山と呼ばれる村の近辺の山々は焼かれ、採草や放牧や焼畑として利用され、樹木のない裸山の景観が一般化していったと思われる。里の人々の山への利用度は飛躍的に高まり、山の尾根道など頻繁に利用された。

山城の増加は、戦国時代の不断の戦争状態が原因と説明されがちであるが、在地領主の支配の点からみると、開発の結果、山を支配する重要性が高まり、それ故に、里を支配する拠点として山城が設けられたということをいえるのである。

戦国時代の山城は、領主の山城だけてはなく、村持ち山城が史料に登場する。城は、決して領主だけのものではなく、山を支配する村もまた山に城を築き、他の村や領主の力に対抗したのである。

2．戦国期城下町としての豊後府内と臼杵

小島　道裕
国立歴史民俗博物館 歴史研究部助教授

はじめに

大分県を代表する戦国期の城下町としては、大友氏が自らの本拠地として築いた豊後府内と臼杵をまず挙げることができ、また、特に豊後府内については、近年大規模な発掘調査によって、急速にその実態が明らかにされつつある。ここでは、その城下町としての構造について、最近の見解を整理しながら、若干の考察を行ってみたい。（以下、豊後府内については、発掘調査報告書、現地調査説明会資料、および現地での調査担当者各位から多くの御教示を得た他、大分市教育委員会・中世都市研究会2001、および鹿毛敏夫2003を特に参考にした。臼杵については、神田高士2003と同氏の御教示によった。）

府内古図と地籍図による復原

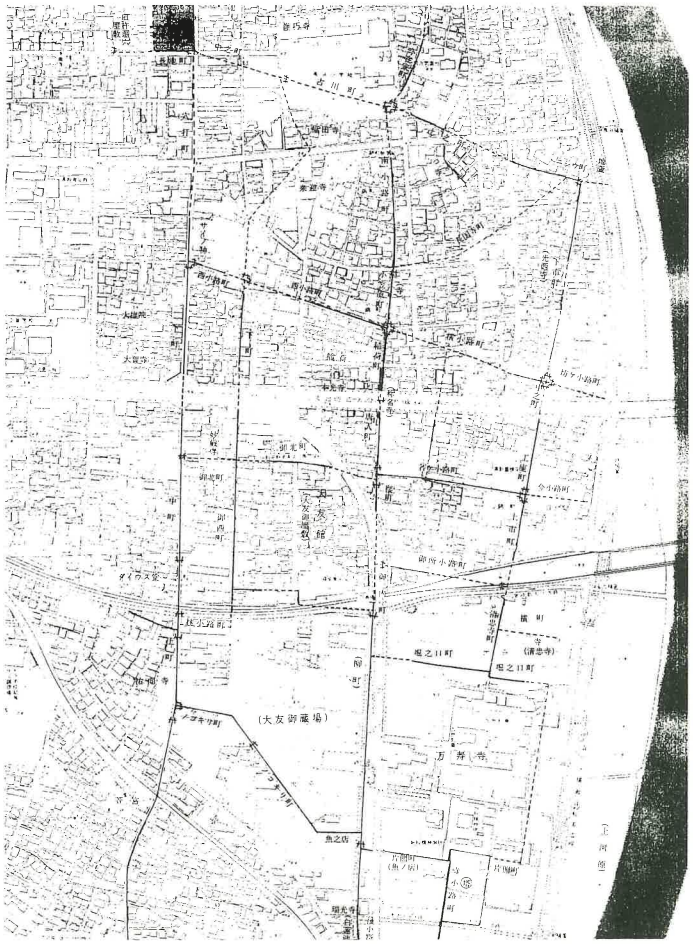
豊後府内については、その最終時期を描いた古図が残されており、これと明治期の地籍図によって、復原想定図が作成されている（『大分市史』中巻付図＝図１）。この古図は、現在の大分市中心部となる近世府内城下町へ移転した後に、旧住人の記憶をもとに描かれたものと推定されており、地割りや近年の発掘調査とも基本的に合致することから、特に原図に近いＡ類においては、その信憑性はかなり高いと見なされている。（古図とその写本の分類については、木村幾太郎2000を参照。）

府内の成り立ち

これと発掘調査の所見をもとに府内の都市としての成り立ちを考えると、まず都市域の東端にある「上市町」「下市町」などを含む南北路は、大分川沿いに発達した市町であったと思われ、方位も他の南北路とは異なって、東に9度振れている。遺物としては、今のところほぼ15世紀以降のものしか出土しておらず、守護大友氏の制定した仁治3年(1242)の「新御成敗状」に見える「町」がここであるかは確定できないが、いずれにしても、この都市域の中では町として比較的早くから発達した部分であると言えよう。

これに対して、大友氏の館がどこにあったかは、早い時期ではなお不明な点が多いが、古図に記された「大友館」については、文献的な徴証としては、大友義鑑の時期に当たる天文13年・16年（1544･47）に「土蔵」「乾屋敷」などの館の諸施設が、また義鎮期の天正元年（1573）には築地塀と思われる「土囲廻屏」の建設が命じられており、それぞれ、考古学的に確認された、16世紀中頃と後半の整地事業に対応する館の整備と見なされる。方２町規模の館が完成するのは、後者の時期である可能性が高い。

東から2番目の、館の東側に接する南北路や、館西方の南北路は、いずれも東に4度振れる方位で作られており、このような16世紀代の館の整備に伴って行われた区画整理と考えられる。



第1図 戦国時代の府内復元想定図（『大分市史 中巻』より）

京都的な要素

以上の都市整備の結果、絵図に描かれた府内城下の中心部は、南北に4本の道路と、それに交差する５本の東西路からなる、やや歪んではいるが方形の街区を持った、京都的な格子状の区割りを持つに至っている。

大友館もまた、古図A類・B類では、京都の将軍邸などと同じように、礼門と脇門の２つの門が描かれており、また館内で検出された、16世紀中葉から後半に整備された広大な池も、やはり京都の将

軍邸の構造にならったものと言える。京都と同じ儀礼が行われたことを示唆する京都系かわらけも大量に出土している。

以上のような点から、16世紀中葉以降の府内中心部の整備に当たっては、京都が意識されていることは間違いなく、格子状の街路を持つことなどは、戦国期城下町の中でも、特に京都に近いものと言える。

そして、この中心部には、町を区切る木戸はあっても、明瞭な総構えの施設は見あたらず、また館の東向かい、すなわち門の正面に位置する「桜町」付近では、町屋と思われる屋敷群が検出され、武家屋敷と思われる屋敷跡も混在している。これらについても、一般的な戦国期城下町のイメージ、すなわち、館を中心に武家屋敷が広がりその周縁部に町が存在するという構造とは異なった、京都的なものとする見解もある。

城下町と「計屋」

しかし、府内の構造は、やはり戦国期城下町の特質として理解できる面も少なくない。

まず、都市の成り立ちとしては、東部の川沿いから発達した町の部分と、中央部の館およびその西に位置する部分とでは、基本的に機能ないし土地利用が異なる。館より西側の様相は、発掘調査ではまだ明瞭になっていないが、近世府内城下に移転した町が少ないことや、西端の南北路が、大友氏のもう一つの館である南方丘陵上の上原館に通じることから、大友氏の家臣団の屋敷が存在した可能性が考えられている。東側の町と館以西の地区の間は、本来空地だったであろう。

館の正面向かい側に位置する前述の「桜町」などは、この後から充填された部分に属する町と思われるが、「桜町」の町屋群と考えられる一画の北端、角地の部分には、ひときわ大きな、良質の陶磁器や秤の分銅を出土した一軒の家があることが注目されている。

大友氏の発給文書によれば、府内、臼杵、関（佐賀関）には、大友氏によって「計屋」が置かれていた。（天正16年（1588）6月28日大友義統関両浦掟書（若林文書、国立歴史民俗博物館1989、大分県立先哲資料館2003所引。注参照。）。

計屋は、単に秤量を管理するだけではなく、府内へ出入りする地方の商人を管轄する立場にもあったことが知られており（年未詳11月9日田原紹忍書状（蛎瀬文書、大分市教委他2001所引））、商人頭的な存在と言える。桜町の北端で検出されたこの屋敷が「計屋」であったと断定はできないが、大友氏と関係の深い、商人頭的な存在であることは十分考えられる。

町立てと商人頭

当時の城下町建設においては、このような存在が重要な役割を果たした。狂言にも制札を立てて「市司」「商人の親方」を募集する、という筋立ての一群があるし（小島1995）、長浜の創設時の町年寄の一人で、近年屋敷地の発掘調査が行われた下村藤右衛門家は、当初城側から伸びる「竪町」として設定された町の、城寄りの部分の角地に存在した。江戸においてはより端的に、町の角地には草創名主の屋敷が置かれている（玉井哲雄1986）。このように、城主の意向を受けて、町を組織する際に重要な役割を果たした町人の存在は、戦国末期～織豊期ころの城下建設においては普遍的に認められ、府内においても、同じ方法での町立てが行われていた可能性が高い。（ちなみに、京都においては、町の角地には住人の需要を満たすための床屋が置かれることが多く、その光景はすでに16世紀前葉の洛中洛外図屏風（歴博甲本）に認められる。）

臼杵においても、臼杵川の対岸にあって早くからの商業地であったと思われる市浜の「里正」であった高崎氏は、天正6年（1578）耳川合戦で当主が戦死した後に掛町へ移ったとされており、「石敢当」を設置していることなどからも、家臣かつ商人頭的な存在として、町の再編成（凝集化）に参加していたと考えることができる。城下町の建設・再編にあたっての同様の事例の一つと見なすことが可能であろう。

凝集域の外

以上、大友館を中核とする府内中心部について、それが京都的様相を持ちながらも、やはり城下町的な構造を持っていることを見たが、そのことは、さらに広い散在的な部分も含めた府内全体で見るとより明瞭になる。

まず町屋地区は、対外交易の港としても知られる沖の浜が古絵図にも描かれており、また上原館の南方、古国府にも、性格はよく分からないが、16世紀代の町屋と考えられる街村状の集落がある。また、家臣団館については、大分川東側の下郡遺跡群などに方形館群があるとのことであり、この他確認はされていないが、上原館付近にもその可能性は考えられよう。

大友館付近の格子状街路を持つ部分は、全体として府内の都市機能を構成している散在する部分域の一つであり、それを大友館を中心に、凝集度の高い地区として再編したものと見なせる。

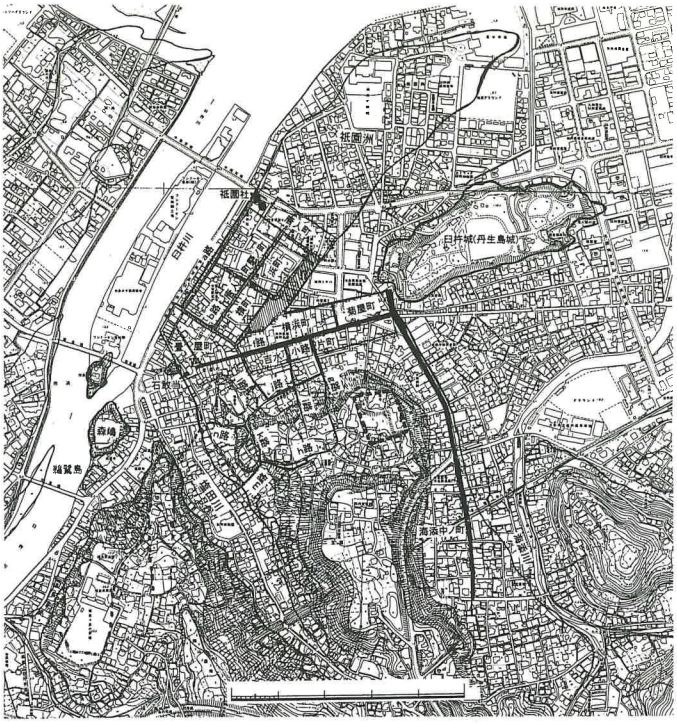
館の位置づけ―山城と平地居館

この地区以外の要素で特に注意すべきなのは、大友氏のもう一つの館である上原館である。発掘調査の所見では、年代の上限は15世紀後半とされ、また16世紀末には、大規模な土塁と堀が構築されている。先述のように、府内西端の南北路の上町・中町・下町などはこの上原館につながっており、主従制的な軸線を構成していたと考えられるが、府内凝集域にある「大友館」との関係はどう理解すべきであろうか。

私見では、これは当時の大名や有力国人の城に普遍的に見られる、山城と麓の館の使い分けに相当すると思われる。

すなわち、毛利氏の郡山城、六角氏の観音寺城、斎藤氏と織田信長の岐阜城、あるいは越後上杉氏の春日山城と直江津にある方形館（至徳寺遺跡・御館）など、16世紀前葉頃から、大名権力は平地の方形館から山城に移っており、山上を日常の生活空間、麓の館を公的な政庁として使い分けている。大友氏の場合も、義統は上原館で生まれ、義鑑が殺害された「二階崩れの変」も上原館が舞台とされており、大友氏当主の日常生活はこちらで営まれていたと見なせる。

また、臼杵についても同様の事を指摘できる。義鎮が住んだのは、町とはやや離れた島状の丹生島城であり、これとは別に、町に接し、家臣団屋敷が置かれた二王座の台地には、政庁が置かれていたと推定されている。この面でも、基本的には府内と同じ構造を持つということができよう。



第2図 文禄期臼杵町復元想定図（神田2003に加筆）
[ ] は神田氏の想定する政庁の位置

おわりに

以上、大友氏によって平行して営まれた府内と臼杵というの二つの城下町は、今後の発掘調査の所見などを加えつつ、さらに比較しながら考えていく必要があろう。またそれは、全国的なこの時期の都市建設の動きとも決して無縁ではなく、他の都市との類似性と独自性を見極めていくことも重要である。あるいはむしろ、飛躍的に情報が増えつつある府内は、他の都市にとっての重要な比較対称となりつつあると言うべきであろう。

（注）関両浦掟の「計屋」については、小島1989では、くずし字が似ているため「斗屋」ともしていたが、「計屋」に確定したい。また、織豊系の他の城下町掟に比べて、統制色の強いこの掟の内容も、都市の未発達を一因と考えたが、むしろ既に都市的発達があり、その再編成を目的としたためと考える方が妥当かもしれない。

＜引用・参考文献＞
大分県立先哲資料館2003『大友水軍―海から見た中世豊後』（展示図録）
大分市教育委員会・中世都市研究会2001『南蛮都市・豊後府内』
大分市史編纂委員会1987『大分市史 中』大分市
鹿毛敏夫2003「戦国大名館の建設と都市―大友氏と豊後府内」『日本歴史』666号
金子拓男・前川要編1994『守護所から戦国城下へ―地方政治都市論の試み』名著出版
神田高士2003「文禄期臼杵町を復元する」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会
木村幾太郎2000「府内古図再考」『府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報』Ⅸ、大分市歴史資料館
小島道裕1989「豊後若林家文書の舞台」『中世の武家文書―館蔵資料から』（国立歴史民俗博物館企画展示図録）
小島道裕1995「楽市令と制札」『日本国家の史的特質 近世・近代』思文閣出版
玉井哲雄1986『江戸―失われた都市空間を読む』平凡社

３．大分県における戦国期城郭の特徴

千田　嘉博
国立歴史民俗博物館 考古研究部助教授

はじめに

大分県教育委員会によって実施された中世城郭の調査によって県内の中世城郭の様相がはじめて判明した。多くの県で中世城郭の悉皆調査がすでに行われているが、大分県の調査は質の高さ、遺構概要図（いわゆる縄張り図）の精度の高さで特筆される。重要な点は単純に平坦面（曲輪）や堀を確認しただけでなく、城郭としての構造分析資料として使用可能なレベルで一貫して全県的な中世城郭の概要図を揃えたことである。

こうしたことはいずれの県の悉皆調査でも目標とされてきた。しかし多種多様な地形に立地し、時には踏み込むことさえ困難な植生に覆われた膨大な数に及ぶ城郭跡のひとつひとつについて、城郭構造分析の結果としての縄張り図を高いレベルで等質的につくり上げていくことは、きわめて困難である。ひとつひとつの図面の背後にそうした苦心をはっきりと見て取れるだけに、調査の実務を担われた方々に心から敬意を表したい。

それでは縄張り図の質の高さは、何をもって評価したらよいのだろう。本報告書の刊行以前には、県内の中世城郭の構造を分析できる資料集は存在していなかった。こうした状況を想起すれば、曲輪や堀の配置の概要がわかるだけでも大きな前進といえる。しかしそうした質の図面集成では、図面から城郭構造の特性を読み取ることはできない。

そこで求められるのが、ただ個別の曲輪や堀を把握するだけでなく、曲輪と出入り口、そこから伸びた城道による曲輪群の連結の如何、堀・竪堀・土塁と曲輪との連関の如何、それらの総体から生み出された城郭構造の組み立ての如何を的確に読み取って、適切に図化した図面の集成である。わたくしが本調査を高く評価するのは、こうした諸課題に応えうる図面集成を実現しているからである。

本報告書は今後、中世城郭跡の保護と整備の基礎資料となるばかりでなく、大分県の中世を城郭から考えるための最も重要な資料集になるだろう。本稿では、この調査で明らかになったいくつかの特徴的な城郭構造について述べ、検討を加えてみたい。

１．城道と出入り口

出入り口のない城郭は存在しなかった。しかし地表面観察や、時には発掘調査を行ってもなお城道や出入り口の位置がはっきりしないものは少なくない。全国的には戦国期になれば出入り口が顕在化し、堀や土塁・石垣を組み合わせて防御力を高めたものが多くなっていった。

杵築市の竹の尾城（201）は、削り残した厚い土塁の間を出入り口として設定していた。意図的に横矢（防御のために敵の側面から矢や鉄砲などを放つこと）を狙ったわけではないが、城道が土塁を取りまくようになっていたので、単純だが効果的な出入り口になっていた。

武蔵町の吉弘城（232）は、堀底道になった城道がまさに城域に入った部分の真上に土塁囲みになった武者隠し状の陣地を置いた。出入り口そのものは単純であるが、みごとな縄張りである。また佐伯市の八幡山城（359）は、城域の中央に鮮やかなくい違い虎口を備えた。一見ひじょうに進んだタイプの出入り口であるが、城道が尾根上から見下ろされる位置になっており、くい違い虎口の出撃性の高さを活かしきれていなかった。

院内町の副城（167）は典型的な館城の形態であるが、戦国期に多重の横堀と畝状空堀群を付加して要塞化を進めたことが読み取れる。東に向いた主郭の出入り口は四角く整った土塁で防御されており、櫓があったことが推測できる。出入り口を出た城道は北へ屈曲したのち曲輪群を守った土塁の上をスロープ状に伸びており、上下の曲輪の連携もよくできていた。

出入り口は城道を屈曲させて守る方法から、出入り口と空間を組み合わせて機能させるようになっていった。それが近世城郭の枡形へと最終的に行き着いたのだが、大分県の戦国期城郭にも、そうした虎口空間の展開を確認することができる。

山香町の日指城（267）は城域南東の堀を土橋で渡ると、矩形に土塁で囲んだ虎口空間があった。虎口空間のなかでさらに城道を屈曲させて主郭へ進ませたところなど、よくくふうしていた。この出入り口を避けて北側斜面に回り込もうとした敵には、対岸に土塁を配して塹壕状にした陣地を曲輪に沿って設けて備え、南側斜面からの回り込みには土塁を長く伸ばして対処した。たいへん手慣れた洗練された縄張りといえる。しかし主郭の削平が不充分な点を考慮すると、砦としての要素が高い。また　佐伯市の栂牟礼城（362）は主郭群南方の出入り口に竪堀を添えた２重の虎口空間をもった。一見大づくりではあるが、発掘を行えば細かな配慮がつかめるに違いない。

大分県の戦国期城郭で特徴的なのは竪堀や畝状空堀群と出入り口を組み合わせたものがあったことである。豊後高田市の屋山城（033）は、城域南西にこの城全体の出入り口をもった。ここでは竪堀の底を伝う城道を設定し、竪堀で狭めた空間を進んで出入り口にとりつくようになっていた。出入り口だけを取り出せば、特筆する点はないが、畝状空堀群との組み合わせ方の巧みさは出色である。近世城郭にはつながらなかった防御方法であるだけに貴重である。

2.畝状空堀群

畝状空堀群は北は青森・秋田県から南は熊本・宮崎県まで広くおよび、戦国期山城に限って使われた特徴的な防御施設であった。大分県内の戦国期山城にも多くの畝状空堀群を見ることができる。院内町の妙見岳城（172）は永禄年間に大友義鎮が改修した城で、大分県内ではもっとも初期の畝状空堀群と考えられる。妙見岳城の畝状空堀群は曲輪直下もしくは腰曲輪の下の斜面に竪堀を連続は位置したもので、畝状空堀群の形態としては古く初期の導入例にふさわしい。臼杵市の水ヶ城（308）、日田市の財津古城（501）なども同様の形態である。

またすでに堀があったところに畝状空堀群を加えることで防御力を高めた例も見受けられる。宇佐市の山本砦（107）、直入町の松牟礼城（498）の畝状空堀群は堀切りの外側に畝状空堀群をさらに布設したものであった。興味深いのは大分市の小岳城（300）で、もともとあった帯曲輪を破壊して畝状空堀群を築いていた。段々の帯曲輪による防御から畝状空堀群を用いた防御への変化を読み取れる。それは帯曲輪に分散的に城兵を配置した防御方法から畝状空堀群上の主郭に城兵を集中配置したことを意味しており、防御システムの集約化を物語る。

発達した形態の畝状空堀群は大分市の鶴ヶ城（299）に見ることができる。主郭西側の斜面に設けた畝状空堀群は頂部を横堀でつないだものになっており、進化のようすがわかる。すべての畝状空堀群がそうしたタイプに変わってはいないが、新しい展開の方向性は明らかである。この城は1586年（天正14）に府内防衛の拠点として改修されたことが確実であり、実年代を押さえられる例として重要である。

3.縄張りと築城主体

城の曲輪の形態、あるいは曲輪群の連結方法の如何は、築城主体の権力構造のあり方をよく反映した。こうした特徴を利用して中世の城跡から地域の政治や社会の構造を検討していくことが可能である。最初に述べたように今回の調査成果が高く評価されるのは、そうした歴史研究の資料集として使用に耐えるものだからである。だからひとつひとつの図面から実に多くの歴史的検討ができる。ここではいくつか特徴的な事例を瞥見したい。

野津町の鍋田城（413）は、ルイス・フロイスが農民が立て籠もった城と記述した城である。国道建設工事で遺構がかなり破壊されていることが惜しまれるが、神社が建つ主郭の北方に小さな腰曲輪状の削平段が連なっていたことはわかる。小屋掛けの段の集合体を基本性格にし、領主の館を核にした館や城とは形態が著しく異なったことが読み取れる。現在残る遺構を「村の城」と評価してよいだろう。

安心院町の佐田城（177）は、ひじょうに大規模な山城である。佐田城は大きく７ヶ所の城郭群が複合してできた山城であった。佐田城は1498年（明応７）に大友氏が佐田古城を攻めた際、佐田氏が飯田山とともに佐田山の所々に陣を設けたことが知られている。分散的な曲輪群の立地は所々の陣という文書の記述とまさに一致しているが、現在残る遺構は石垣を備え、横堀をもち、堀の何カ所かには横矢の屈曲を見ることができるから、明らかに戦国末期である16世後半のものと考えざるを得ない。

７ヶ所の曲輪はいずれも削平が不充分な点を残すこと、堀などの規模が小さいことから陣もしくは臨時の砦として築かれたことがわかる。ただし曲輪の各所に裏込めをもたない石積みがあり、要所を効果的に固めたことがわかるから、臨時のものとはいえ、最終段階の佐田城は一定の期間使用することを念頭に築いたものであった。

それぞれの砦は相互に連携しながらも一応独立した形態になっていた。そして谷筋が開けた南西方面を一貫した防御正面にした。尾根の端部に築いた砦はいずれも堀切りをもち、腰曲輪を経由するかたちの出入り口を備えた点で一致しており、現状の形態は同時期に成立したと考えられる。

それに対して最高所に占地した中心の砦は、塹壕としても使った横堀をほぼ全週させ、その要所に竪堀を組み合わせるといったより進んだ縄張りを確認できる。そして中心砦の主郭は明らかに矩形を意識した曲輪取りをしており、ここが佐田城を構成した砦群のうちで、もっとも高位の人物の本陣であったと考えて間違いない。

周囲の砦群との構造の違いにはそうした築城主体の階層差を表した部分もあるが、無視できない防御施設の発達差があることから、基本的には時期差と考えるべきである。するとこの城の歴史は、１.現在遺構が確認できない1498年の所々の陣（砦）群としての佐田城、２.戦国期のある段階の分散・分立的な佐田城、３.中心砦を横堀と竪堀で飛躍的に強化し、周辺の砦とともに石積みを導入した戦国末期の今見る佐田城という、少なくとも３段階におよんだ佐田城が積み重なっていることが推測できるのである。

たいへん印象的なのは、最初の佐田城から今地表面で見えている最終段階の佐田城まで、いずれも城郭プランは、分立・分散的という基本構造を踏襲しつづけたことである。このことはいくつかの画期はあっても、築城主体の分立・連合的権力構造が少なくとも15世紀末から16世紀末の100年間に渡ってつづいたことを物語る。それは佐田氏の権力構造、あるいは宇佐郡の一揆的な領主権力の構造と深く関わったと評価される。

いずれにせよ佐田城は地域にとって連合して籠城すべき山城として長く認知され、最終的にはこの地域の連合的な領主権力が達成し城郭構造の到達点を示す山城と位置づけられる。佐田城は近世城郭の本丸を中心とした階層的な構造とは正反対の分立・分散型の城郭であったが、それがこの地域の戦国期権力にとって重要なことだったのである。

おわりに

鍋田城や佐田城をはじめ、本書で明らかにされたすべての城郭は、さまざまな築城主体がそれぞれの城郭を重層的に築いていった中世社会の実像をわたくしたちに語りかけている。しかし中世の城郭はほとんどが土づくりであり、適切な植生の管理、雨水の処置などをしなければ次第に滅失してしまう。わたくしたちが山で薪を拾わなくなり、また林業も衰退したことで、いま中世城郭跡の多くは荒れ果て、大きな危機に瀕している。

ひとつでも多くの城跡が地域の人びとに意識されるものとなり、保護され、次の世代によりよいかたちで伝えられることを願いたい。深い歴史を秘めた大分県の中世城郭をどのように保護し、活用していくのかの選択は、県民にゆだねられている。

4．高良山陣所群に見る大友氏関連城郭の構造的特質

宮武　正登
佐賀県立名護屋城博物館学芸員

はじめに－小稿の目的

大友氏の関連城郭に限らず、特定の勢力下における築城技術の共通性を見出す事は、言うまでも無いが容易なことではない。その最大の理由は、各城の創築・改造履歴を明確にすることの困難さによる。残存遺構の構築時期の上限及び機能下限を地表踏査によって特定する作業はおのずと限界があり、考古学的手法に拠ってでも確定できない場合さえある。

不穏政情の慢性化により城郭の恒常的利用が全国的に定着する16世紀代になると、例えば「豊薩戦争」のような大きな戦乱を契機とせずとも、常時管理の過程で次第に補修・改造が加えられ、その結果として城郭の全体プランが成り立っていく経緯を勘案せねばならない。したがって、実年代を定め難いこうした増改築行為を含めて、特定の城郭の沿革を遺構内容から解読するためには、よほど時間軸が固定的な判断材料を別の対象から見出さねばならない。

本稿では、その問題に対応するための指標資料として、一定の効果性が期待できるという意味から「陣」に注目してみたい。もとより「陣」は一過性の施設であり、その性格上、平常時管理の対象から外れ、故に構築後の二次的利用の機会が他の城に比べて極端に少ないため、使用段階の構造上の特徴を凍結的に留めるという利点がある。ただしその本来的な設置目的のために残存する確率が極端に低く、遺構そのものの現認が困難な対象でもある。ところが福岡県久留米市東部の高良山には、大友氏の軍事行動に関連する遺構が奇跡的にも極めて良質な状態で遺存している。他県の事例ではあるが、大分県下の城郭の、年代的特徴を検討する際の重要な対比史料となり得るので、以下に紹介しておきたい[1]。

(1) なお、現地踏査に当たっては久留米市教育委員会の近澤康治氏より情報の提供等、数々の御配慮を賜った。この場にて謝意を表したい。

1．大友氏陣跡としての可能性－文献史からの検証作業

耳納山地の西端に当たる高良山一帯は、その北・西麓を流れる筑後川と共存して筑前・肥前と筑後・肥後とを分ける障壁のごとき地勢をなしている。中世においては、筑前以北と肥後以南の勢力同士の広域間抗争に際し、相互に前線基地として重視された。大友氏にとっても、豊後を出て広沃な筑紫平野に入り大宰府・博多に向かうには、日田を経た後この山系の北裾を西進するよりなかった。

中世社会を通じて北部九州の軍事上の要衝であったことを如実に物語るように、現在この山系で把握されている陣所（陣城）跡の類は8箇所を数え、史料上に散見する陣地設営の経歴は、おおまかに推移を辿っても以下のような目まぐるしさを呈している。

① 南北朝期…征西府の設置による懐良親王、菊池氏ら南朝勢の拠点化。一色範氏、今川了俊ら幕府勢の布陣[1]。

② 寛正６年（1465）４月、菊池為安が「高良山別所城」攻めにて大友親繁軍の反撃に会い戦死（同年卯月23日付・志賀親家宛大友親繁感状写『大友文書録』所収文書[2]）。

③ 文亀３年（1503）11月、大友義長張陣か（年未詳11月23日付・高良山大祝宛大友義長書状「鏡山文書」〔『久・資』〕）。

④ 天文３年（1534）９月、大友義鑑、西牟田氏討伐のため高良山に軍勢派遣（〔同年〕７月29日付・城後次郎宛大友氏奉行人連署書状「直入・田北文書」〔『久・資』〕）。

⑤ 永禄12年（1569）3月、大友宗麟、高良山に布陣。龍造寺氏攻撃及び毛利氏との立花城攻防戦に臨む（本文中に史料後掲）。

⑥ 天正12年（1584）８月、大友義統、立花道雪・高橋紹運・朽綱宗歴らを筑後鎮定のため派遣。高良山を本営とする（本文中に史料後掲）。

⑦ 天正14年７月、島津軍在陣（『長谷場越前自記』、『勝部兵衛門聞書』[3]、『神代弥左衛門遺戒書』〔『久・資』〕他）。

⑧ 同15年４月、豊臣秀吉、島津氏征討の途上に張陣（『九州御動座記』〔『久・資』〕、『神代弥左衛門遺戒書』他）。

『北肥戦誌』や『太宰管内誌』などの著述までを仮に持ち出すなら、さらに布陣事例は増加する。これほど頻繁な軍勢駐屯を経験した地所は、九州でも恐らく他例がないであろう。他方そのことは、筑後支配の行政拠点となる城郭として整備され、継続機能した経験をついぞ持たなかったということを証明している[4]。これは、当山が「九州惣鎮守」とも称された筑後一宮「高良大社」の鎮座する神域であり、鎌倉期以来、地域に隠然たる影響力を誇った社家勢力の根拠地であったことと無関係ではないだろう。

現在確認されている山系各所の城塞関連遺構群が、これら一連の軍事行動の結果として成立したことは疑いないが、きわめて大規模な遺跡であるだけに、どの時期の陣所に係る遺構として認定できるかが問題となる。

後述するように、現地に分布する畝状竪堀群や横堀、石積みなどは、南北朝・室町期の城郭においては未発達の要素であり、その大半が16世紀代以後の所産であることは動かし難い。また、東西2kmにも及ぶ広大な陣域は、相当の大軍の長期滞在を意味している。したがって、上記⑦にある島津氏の3日間の在陣（天正14年7月3～5日）、⑧の豊臣秀吉の1泊滞在（天正15年4月10日）に際する構築とは考えにくい。秀吉の遠征時における工兵の圧倒的機動力はその指令書の内容から理解できるが、長期在陣ではなく移動中継の際には作事を主体としている[5]。ましてこの時は、南下ルート上で敵対する筑前の秋月氏を4月2日に屈服させたばかりで、その直後から工兵を高良山に先遣させ陣所築造を実施したと想定しても（無論そうした史料はないが）、わずか1週間程度でこれだけの規模の要塞を完備することは物理的に不可能であろう。なによりこの推論を待たずしても、現存する遺構群のグランド・プランからは、豊臣氏系統の城郭の特徴的要素は全く看取できない。両例とも、既存の施設の一時再利用と見るべきである。

次に、高良山社家勢力の“詰城”と仮定した場合だが、やはりその勢力規模に相応する遺構ではないと判断できる。天正12年に比定できる3月19日付の高良社大祝に充てた大友義統書状（「鏡山文書」〔『久・資』〕）、および同日付の大宮司宛義統書状（「宗崎文書」〔『前同』〕）では、それぞれ「東光寺」「長増山」在番に対する慰労が記されているが、「東光寺（城）」は高良山北西の尾根先端に位置する要塞で、その実態は主要陣所の一つである吉見嶽城の支塁に相当する（後述）。「長増山（城）」は「茶臼山城」として周知されており、高良山から外れて西に突出した小丘陵上に比定される。どちらも広大な高良山陣域の片隅を占める存在に過ぎず（図1参照）、社家単独による管理能力の限界を物語っている。

したがって、現存遺構の大半は、筑後守護職を兼任する豊後大友氏が主体となって、筑肥経略の際の基地として構築された陣所のものと解釈するよりない。なかんずく永禄12年の宗麟布陣、天正12年における大友軍布陣時の築造の可能性が、その時の軍事行動の規模と使用期間から判断するに、最も高いと結論付けられる。

永禄12年の宗麟出兵は、九州戦国史上最大の合戦とされる毛利氏との立花山城攻防戦に移行するわけだが、「五カ国之御人数被奉待候」（『豊前覚書』[6]）という大軍勢の高良山集結の後、戸次道雪が「敵味方及三十箇国諸勢出合殻之内対陣」[7]と評した鬩ぎあいの本営として、当山が使用されたことになる。おのずと設営された陣所の壮大さが窺い知れよう。

この時、宗麟自身は同年3月22日以前には着陣していたと考えられるが（同日付・「鶴原掃部入道」宛大友宗麟書状写『大友文書録』所収文書〔『編・大』22〕）、その帰還時期が明確ではない。『北肥戦誌』は「大友入道宗麟は年内高良山を立って府内に馬を納られけり」[8]と記すが、これを証するだけの史料に不足する。卯月18日付の高良社大祝宛宗麟書状写（『鏡山家旧記写』所収文書〔『久・資』〕）により4月中旬まで滞在していることが確実だが、9月13日に筑後鷹尾城主の田尻鑑種に宛てた宗麟書状[9]に「既宗麟出張之上者、弥々以長陣、可被励馳走事」との文言が見え、なおその時点で在陣中の可能性が高い。いずれにせよ、毛利氏との緊張関係は翌元亀元年2月の将軍足利義昭の仲介による和解成立まで続き、その時の宗麟宛義昭書状（2月3日付・『大友文書録』所収文書〔『編・大』23〕）にある「今度、永々令在陣、悉属本意、早速帰陣珍重候」との慣用句的書出を積極的に捉えれば、高良山の軍事的重要性はこの段階まで持続していたと解することができよう。現にこの和解直後の3月から、宗麟は再び筑後を足がかりに佐嘉の龍造寺隆信攻撃を開始している[10]。

要するに、高良山陣所には、宗麟本軍が6ヶ月以上にわたって連続滞在しているわけで、その遺構からは、1570年前後の大友氏城郭の防衛思想を解読する上で極めて有用な情報を得ることができる。なお、『豊前覚書』には「屋形様御陣所高良山ノよしみ嶽取誘」と明記してあり、高良大社の北西に位置する吉見嶽城跡がこれに比定できる。

次いで天正12年の大友軍布陣だが、龍造寺隆信の横死に伴う九州の勢力均衡の崩壊に当たり、筑後での主導権奪回と島津軍北上への牽制策とを兼ねた派兵であって、耳川の敗戦以来、急速な衰退を示す大友氏勢力にとって「乾坤一擲」の軍事行動であった。したがって、具体的軍兵の員数こそ知り得ないものの、戸次道雪・高橋紹運・朽綱宗歴の3重臣を主力とし筑後国内の大友派在地領主を召集させ、黒木氏、草野氏、星野氏らの離反勢力を攻撃し、さらに龍造寺家晴と対峙する等といった連戦の様子から見ても、一定の大軍が派遣されたものと推測される。この時の大友勢の高良山在陣期間は、戦局の変化に応じた途中下山もあるが、天正12年の8月[11]から翌年9月末[12]にかけてという長期間に及んでおり、陣施設の充実化が当然推定できる。

加えて、この時の布陣は大友義統本軍の出兵を前提としていた向きがあり、『豊前覚書』には「豊州御人数今日々々と御待被成候へ共、遂豊後衆無出張、申酉両年、道雪様・紹運様高良山ニ而徒ニ日送被成候」と記されている。さらに、攻略の主導的役割を担った道雪・紹運と高橋統増・立花統虎の4将が、出兵事前の留意事項を列記し連署している7月18日付（天正12年）の覚書[13]には、「御屋形様御陳所之事、付、至親家能々可被成御熟談事」とある。このため遺構分析に当たっては、大友家当主の本陣としての再整備が計画された可能性をも考慮しておく必要が生じてくる。

以上のように、高良山の遺構群は、2度にわたる大友氏の大規模な陣所設営を経て形成されたものと見て良く、当該段階の豊後国内で最も成熟した実戦的な築城技術が応用されたことは想像に難くない。

註

(1)この南北朝期の軍事行動は、特に複雑かつ目まぐるしい推移を示すので、ここでは経過を触れない。詳細は、小川信『中世都市「府中」の展開』369～370頁(思文閣出版2001)を参照されたい。

(2)『久留米市史』第7巻(資料編－古代・中世、1992)。以下同書出典の史料は『久・資』と略す。

(3)ともに『後編旧記雑録』巻十七所収(『鹿児島県史料―旧記雑録後編2』1982)。

(4)事実、ここが特定勢力による筑後統治の行政府となったことを示す徴証はなく、正平8～16年(1353～61)と文中元～3年(1372～74)の2度にわたって西征将軍府が置かれているが(前注〔2〕小川氏著書346～347頁)、これはあくまでも幕府方の圧迫による大宰府からの一時退避が長期化した結果であって、永続的な拠点構築を前提としてこの場所を選択したものではない。

(5)接収し破却した城の部材を再利用して陣所(「御座所」)の建築物設営を実施している様子は、九州、関東、奥羽攻略時の史料上に散見できる(〔天正18年〕7月28日付・伏屋十内他宛豊臣秀吉朱印状「大阪城天守閣収蔵蔵文書」〔跡部信他「平成8年度新収蔵資料紹介」『大阪城天守閣紀要』26　1998〕他)。

(6)川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『博多・筑前史料　豊前覚書』(文献出版　1980)。

(7)天正3年5月28日付・「きんちよ」宛戸次道雪譲状「立花家文書」(田北学『増補訂正編年大友史料』23〔私家本　1966〕。以下同出典の場合『編・大』巻数と略記する)。

(8)千住武次郎編『肥前叢書』第2輯(肥前史談會1939－青潮社1973復刻)。

(9)「田尻家文書」(『佐賀県資料集成』第17巻)。

(10)有名な今山夜戦に繋がるこの時の肥前侵攻に関して、宗麟は高良山を再び本陣としたと諸書に記されるが、実際にはそれを裏付ける直接的史料を見出せない。『北肥戦誌』は同年3月中旬から10月3日までの高良山在陣を記すが、その著述の根拠が今一つ判然としないのである。2月18日にイエズス会宣教師アルメイダが日田で宗麟に謁見していることから(「1570年10月25(15)日付、平戸発信、ルイス・デ・アルメイダのイエズス会司祭および修道士宛書簡」〔『大分の中世城館－第二集　文献史料編2』大分県教育委員会2003〕)、臼杵を出て豊後国境まで進駐したのは確実のようだ。肥前今山での敗戦の報に接した宗麟が8月23日に田尻鑑種に宛てた書状(「田尻家文書」・前注〔9〕)には「宗麟事も千栗迄急度可差寄候條…」とあるが、肥筑国境の筑後川渡河点である千栗(佐賀県北茂安町)を覗っているところからすると、この時実際に高良山に布陣していたことの傍証となるかもしれない。

(11)「去月廿八日以来至高良山、被遂在山…」(9月6日付・「三原山城守」宛大友義統書状「三原文書」〔『久・資』〕)。

(12)『上井覚軒日記』天正13年9月25条　「高良山北野之豊陳二当候て、火色顕然候、定而敗北候哉之由也」、同月29日条「高良・北野豊陳敗北候由也」(『大日本古記録　上井覚軒日記・下』岩波書店1957)。

(13)柴田礼能・葛西宗筌宛高橋紹運外三名連署覚書「森文書」(芥川龍男・福川一徳編校訂『西国武士団関係史料集3　森文書』文献出版1992)。なお、この場合は行軍途上での陣所を指している可能性を再考せねばなるまい。

2. 各陣の構造上の特徴

高良山系における遺構の広がりについて、筆者もまだ全容を完全に把握しているわけではないが、主要部だけを見てもその分布範囲は、九州自動車道の沿線を最西端として東西約2km以上に及び、南北は長軸1.2kmに達する(図1参照)。

その中で、遺構群に一定のまとまりを持つ区域が3箇所あり、西より吉見嶽城、杉ノ城(住厭城)、別所城(毘沙門岳城)というように、それぞれの高所を利用した個別の「陣城」として従来から理解されてきた。しかし実質的には、以下で解説するようにほとんど連続する一つの陣域として機能したものと見て良い。この他にも、鶴ノ城、磐井城などの個別把握されている陣城の比定地が隣接しており、正確な範囲はさらに広がる可能性が大である。なお、史料上には「高良山城」などといった呼称例はなく、「陣」という本来的性格に即した表記が主なのだが、現在の遺跡名称では「城」となっているため、本稿では煩いを避ける目的から便宜上それに従うこととする[1]

(1)別所城(毘沙門岳城)－図2

最東端に位置する陣所で、標高312mの毘沙門岳(＝高良山頂)を占有する。最高所にある主郭A自体は小規模で、その南西に向かって延びる尾根B上の曲輪との一体化が顕著だが、これらは頗る単純な空間配列をなし、虎口の位置・形状も曖昧である。北西側の尾根Cは「久留米市つつじ公園」整備の進行により旧態が著しく損なわれており、構造上の特色を知り得ない状況だが、同様のプランに基づいていたものと考えられる。

主郭から東尾根Dにかけての北側斜面には、堀切から派生する竪堀を基軸とした畝状竪堀群Eが付随しており、その下位には長さ40m程の土塁を片岸に見立てた横堀Fが残存する。この尾根D先端は、南北から迫る谷に挟まれて土橋状に縊れた鞍部Gに接しており、天然の大堀切に相当する遮断性の強い地勢に依拠している。これより東方を横断している耳納山経由の峠道や、しばしば大友氏に抵抗した草野氏の本城・発心岳城などの存在を強く意識しているものと見て良い。また尾根B上の曲輪群でも、鞍部Gを形作る谷に面した側の東辺塁線全体を土塁で網羅しており、陣の中心的役割が、連山稜線をつたって東方向から侵攻する動きの阻止に置かれていたことが明らかである。

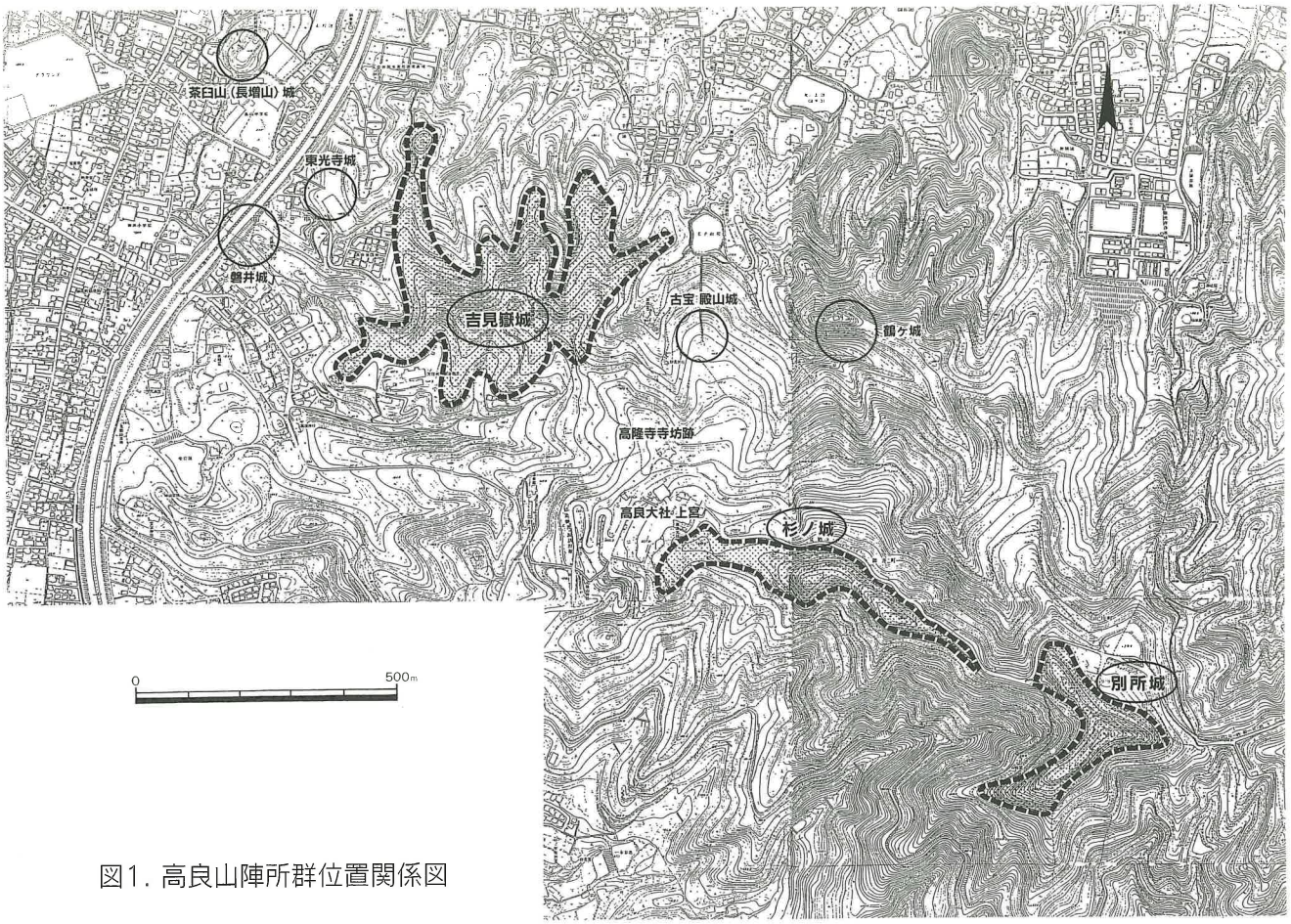


図1. 高良山陣所群位置関係図

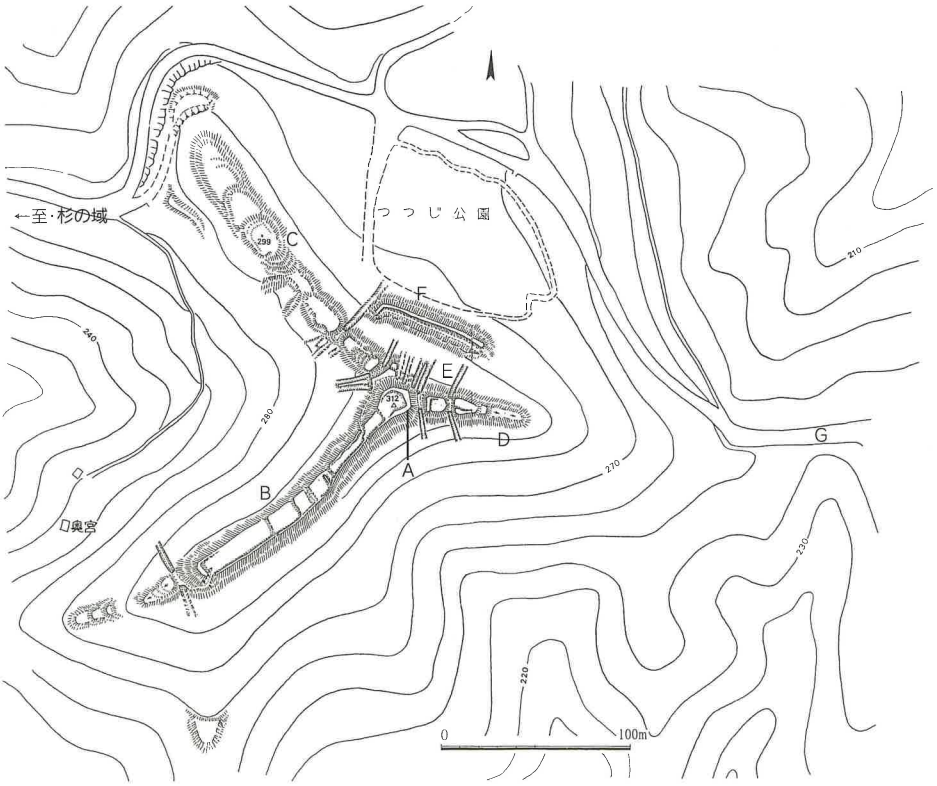


図2 別所城縄張り図（宮武 踏査・作図）

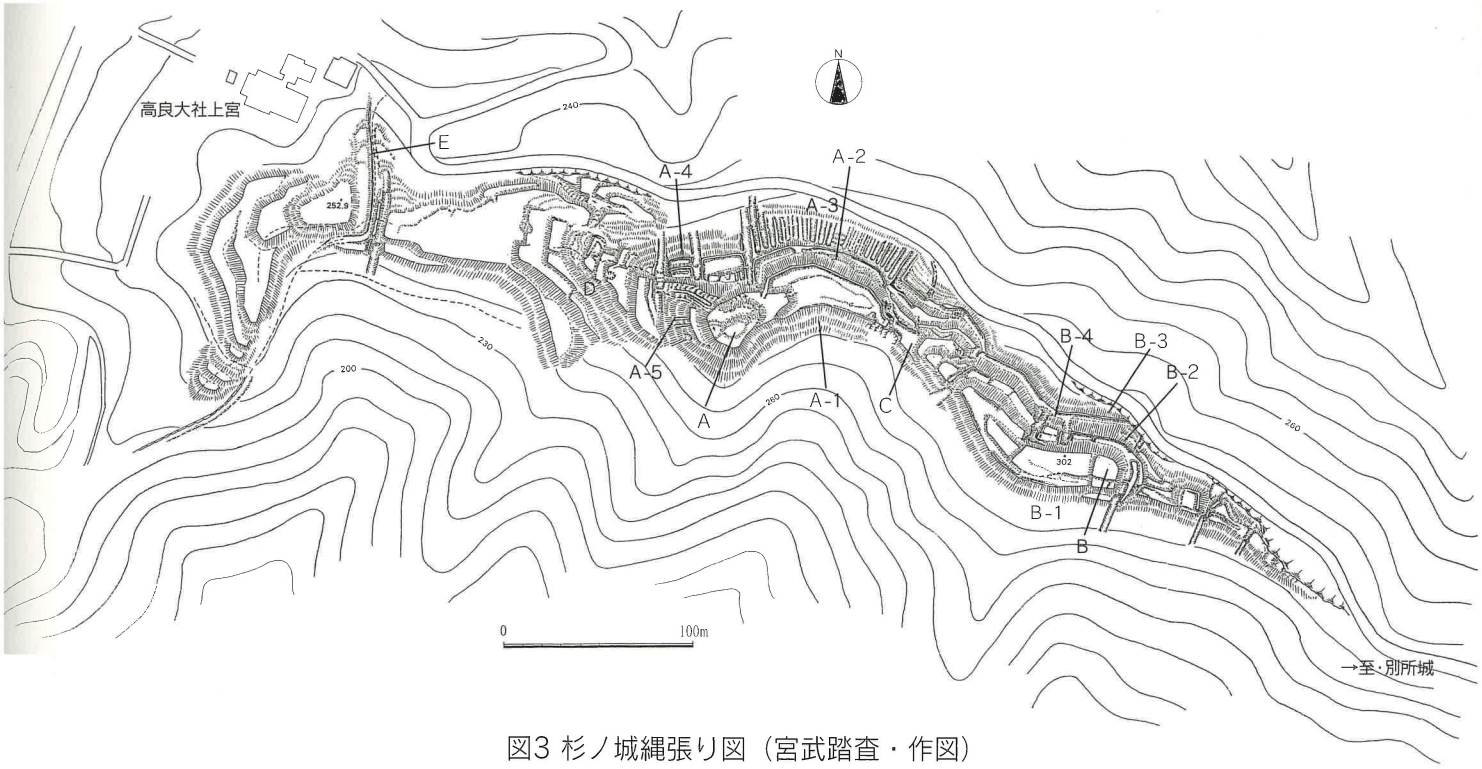


図3 杉ノ城縄張り図（宮武踏査・作図）

諸伝では懐良親王が拠点として構築したとされるが[2]、南北朝期にまで遡及できる構造ではない。先に掲げた寛正6年の大友・菊池抗争時の史料に登場する「高良山別所城」時期が、正しくこの陣城に該当するであろう。各曲輪の狭小な敷地規模や簡略な曲輪配列がこの段階の骨格の継承を示すと考えられる一方、畝状竪堀や横堀の存在が戦国後半期における総改修を明示している。やはり宗麟在陣以後に、現況形態の成立を求めるべきだろう。

(2) 杉ノ城（住厭城）－図3

別所城の北西尾根Cの先端付近から西へ連続する尾根上に展開する陣城である。両陣間を耳納山スカイラインが通過しているため分立しているようにも見えるが、相互の間隔は50m程度の至近距離にあり、実態としては直結した一つの陣所と解釈できる。

東西650mにわたって遺構群が密集しており、西端は高良大社上宮の境内と接して、本殿裏山の本宮山を取り込んでいる。興味深いことに、朝鮮式山城として著名な高良山神籠石の一部を曲輪切岸として利用している部分が認められる（E）。

東西2ヵ所のピークに中核的な曲輪A・Bを配し、両者の前後に多数の防御施設を付随させ、中央の鞍部に設けた曲輪Cを介して相互を連結する基本構造にある。西側の曲輪Aには大きな副郭A－1が付属することから、こちらの方が陣内での中心的機能を担っていたとも判断できよう。A－1は南北長軸65m・東西長軸23mに及ぶ広い曲輪で、周囲には土塁（厳密には石塁の残痕）が廻り、生活機能の集中をも想像させる平面規模を誇る。この副郭に対して主郭Aは、内部空間の平坦地化が粗雑で、自然地形の全くの転用に近い状態にある。こうした土木施工上のアンバランスさは、一般の城郭との相違点を端的に示しており、「陣所」ならではの特徴とも言えるだろう[3]。

このA＋A－1の関係と同様に、Bの西隣にもB－1が付随し、同じ空間構成を主軸とした2つの曲輪群体が、Cを境にして向き合うような配列を示すが、C北縁の土塁の西端には虎口と見られる開口部が認められ、北下を走る帯曲輪群に連絡している。開口部の脇には残存高1.2m程の石積みも施されており、塁面の耐久力強化への配慮も認められるなど、陣内の主径路上のジャンクションに相当するCの役割の重要性が窺われる。

B～B－1の北裾には、曲輪東面を仕切る堀切から派生した横堀B－2が回り込み、その下段にも横堀B－3が随走している。一方、A～A－1の北側にも横堀A－2が取り付いており、結果、両エリアに跨る250m以上に及ぶ防御線が、竪堀を仲介しながら陣北麓を遮断するように展開している。この遺構群から解読できる防備の主方向は、別所城における横堀Fと畝状竪堀Eの設置意図とも整合するもので、両陣が一体的に機能していたことの傍証にもなり得る。

そしてこの陣のプランで最も目を引くのが、横堀A－2の外岸下の斜面を完全網羅した畝状竪堀群A－3である。全部で22条の竪堀が視認できるが、極めて規格性の高い造作であり、「畝」も石積みで補強されていた様子が看取できる。大友氏の領国下での、土木施工能力の発展度を知るための好素材と言って良い。

※…近世期以後の開発行為で改変が著しいため積極的図化をしていないが、
人工による階段状地形が続くエリア

図4 吉見嶽城縄張り図（宮武　踏査・作図）

(3) 吉見嶽城－図4

杉ノ城西端から直線距離で480mほど北西に離れた地点にあり、標高157mの半独立丘陵一帯に遺構が展開している。杉ノ城との間には高良大社上宮とその神宮寺である高隆寺寺坊を挟むため、相互間隔が若干離れる位置関係にある。しかし、社家自体が大友氏への帰属を基本姿勢としていたことからすると、両陣間の連絡上に大きな障害はなかったであろう。

永禄時の宗麟本陣に該当し、山頂にある平面長方形の主郭Aを中心とする南北320m×東西360mの範囲で曲輪が連続しており、北・西に向かって長く延びる複数の尾根の先端付近には、堀切や出丸に類する施設群が分布している[(4)]。

主郭Aの規模は東西55m×南北22mを測り、東・西・北の3辺と南辺の一部に土塁を設けている。北辺中央部に平入り虎口A－1が開口し北下の帯曲輪に連絡しており、この径路を補佐する意図から、主郭北西隅には腰曲輪A－2が突出している。その西隣の12mほど下位に、第二郭に相当する規模の曲輪Bがあるが、こちらは地形に規制された平面形をなし土塁も完備されていない。主郭の優位性が如実に表れた曲輪形状・配置関係となっており、空間序列から言えば単郭構造の中心部と見なせる。

Bの南側尾根から主郭南下の谷筋にかけては無数の塁段が密集し、軍勢の駐屯スペースの確保を推測せしめる（現況は竹林・荒地だが、後世の耕地との判別が困難）。尾根中央には主郭に順ずる敷地面積の曲輪Dが存在するが、土塁等の明確な遮蔽施設は認められない。

曲輪Bの西には上幅約8mの堀切Eがあり、主郭Aの東側には深さ10m前後を測る巨大な堀切Fが設けられ、中心郭群の東西の境界を規定しているが、その外側にも遺構群が展開している。堀切Fの東岸上のピークから北に延びる尾根には、曲輪の残痕と思しい階段状地形の連続が観察でき、その北端には支塁Gが存在する。自然丘陵を転用した主郭を起点として腰曲輪を階段状に配したシンプルなプランながら、尾根との境界部には土塁を併走させた幅4m前後の堀切を設定し、自己完結的な空間を形成している。こうした「出城」とも言うべき半独立の駐屯施設が、各尾根の先端に分布していたものと見られ、植林・公園化などの改変が著しいH・I・Jでも同様の支塁設置の蓋然性が指摘できる。前述のように、磐井城、東光寺城（ともに開発による破壊が進行）の性格についても、これと同じ広域防備の構想に位置付けて理解すべきで、この吉見嶽陣城の構造的特徴を構成する一要素になっていると考えられる。これにより、広義の陣域は南北450m・東西800mに及ぶ山系を取り込んだものと見なせる。

もう一つの大きな特徴として、主郭北裾を起点とした帯曲輪・横堀ラインの発達が挙げられる。各所で竪堀に遮られる形にあるため完全な連結状態にこそないが、横堀機能を兼備した帯曲輪が、主郭北東裾の塁線に沿って副郭との連結部まで至り、さらに畝状竪堀群A—3を越えると曲輪B北下の帯曲輪が出発し、堀切Eの西から再び始まって尾根の東斜面沿いを北上している（図中△印）。特に堀切L以西の曲輪群に付属する帯曲輪は長さ100m以上の走向が確認でき、その先は植林地との峻別をつけにくい現状ながら、延長痕跡をさらに北へ辿ることが可能で、最終的には尾根端部にある支塁Iまで直結していたものと見られる。北方からの攻撃に対抗する意図からの防衛線であることが明確であり、主郭から突出する小曲輪A—2も、その補強機能を兼備していた様子が見えてくる。

このように、筑前・肥前国境を睨む構築目的に立脚した陣であることが、平面構造上の特色からも確認できるのである。

註

(1) 一般的な「陣」のイメージを下敷きにして、それよりも規模が大きく高水準にあるという“漠然とした”ニュアンスを表現する意図から、「陣城」との用語が実態の吟味に関わりなく使用される傾向がある。しかし、実際に当該期に使用された歴史的用語・概念として普遍的なものかどうか、甚だ曖昧なのである（宮武「「陣」を再考する－武家社会下の仮設要塞の実態」『歴博』第114号　国立歴史民俗博物館2002）。この用語は『応仁別記』や『安西軍策』等の中にいくつか散見できるものの、発受給文書等の一次史料上に見出だすことは容易ではない。近年、恒常性と臨時性のバランスから城郭の属性を再整理しようとする試み（松岡進『戦国期城館群の景観』校倉書房2002）も現れてきているだけに、この用語の使用に当たっては、より慎重さが求められるべきであろう。

(2)『久留米市史』第1巻（通史編、1981）、児玉幸多他監修『日本城郭大系』第18巻－福岡・熊本・鹿児島（新人物往来社1979）他。

(3) 下野の要衝として上杉・北条・佐竹各氏らが度々布陣したことで著名な多々木陣（栃木県）、尼子氏が安芸郡山城に毛利氏を包囲した時の本陣とした風越山（広島県）、肥前筑紫氏の勝尾城下「総構」に付設された支塁である葛篭城（佐賀県）など、「陣」に代表される恒常的使用度の低い軍事施設が通有する特徴であり、主郭よりもその周囲での土木力投入が勝っている点で共通する。必ずしも構築年代の新旧を語る形態とは限らない。

(4) 昭和49年（1974）に山口淳・近澤康治両氏が中心部分のみの測量調査を実施しており、その成果は『久留米市史』第12巻（資料編—考古、1994）で紹介されているので参考とした。当時の考古学界全体の動向を考えれば、極めて先駆的な調査であったはずで、研究史上で再評価されてしかるべき仕事である。

3. 遺構内容から見た各陣所の成立背景

これら3つの陣所の特徴を並べて概観してみると、山系北麓からの外圧に対する牽制という基本コンセプトが、3陣の構築にあたって徹底されている点が容易に理解できる。別所城の畝状竪堀Eと横堀F、杉ノ城の横堀群（A—2、B—2・3）と畝状竪堀A—3、吉見嶽城の支塁群と横堀・帯曲輪群は、全体として長大な防衛線を形成するための構成要素であったことが解る。各支塁は防衛線維持のため最前面に展開するが、それ以外のほとんどの曲輪空間は、このラインの内側（南）に納まる形になっている。この設計理念は、杉ノ城の重層的配列を示す横堀や主要な竪堀が、全て北に対向している様子に最も明確な形で現れている。さらに、吉見嶽城の主郭土塁が南側塁線を開放して走行している上に、南裾の谷頭を囲むような勢いで主郭南東・南西隅から単独の土塁が法面上にまで延び出しているなど、各陣のプランの細かな部位においても体現されていることが解る。また、吉見嶽城の堀切E西岸を形成する曲輪Cにも、主郭と同じ理念がコンパクトな形で反映されており、北・東・西の三辺に小規模な土塁を設定し、そのうち西辺土塁を曲輪外部に長く延ばして南からの導入部を形成している。

こうした構築目的の一貫性が各陣で看取できる一方で、それぞれの空間配列の面では著しい差異がある。とりわけ吉見嶽城における中枢部優位のプランは、杉ノ城の「二頭式」（隣接する別所城の主要部を含めると「三頭」になるが）とも言える中核部の分立状態と比べた時、その求心力の強さが余計に際立って見える。この相違は、吉見嶽が宗麟自身の「御座所」という性格を持つ点に直接的理由が求められ、そしてこの形態のアウトラインは、天正時の義統動座計画においても継承されたのではないだろうか。

ところが杉ノ城には、本陣である吉見嶽城には見られない縄張上の卓越性が指摘できる。杉ノ城を特徴付けている畝状竪堀群は、前述したように見事な統一的仕様に基づいており、石積みによる「畝」構築技術に加えて、空堀A—2との連携による防備の相乗効果が図られている。また、単独で設けられている竪堀も、すべて腰曲輪との併置状態にある。特に注目すべき部位がA—4とB—4の2段の腰曲輪で、「横矢掛」のように塁線から突出する構造までにはないが、両サイドに竪堀を深く引き入れることで、①横方向への死角を生み易い帯曲輪の短所の解消、②帯曲輪突破の事態に対処するための分断、③竪堀対岸の曲輪との連携による一種の「合横矢」効果の付加、といった多機能を有したものと見て取れる。斜面の遮断という竪堀の基本的効能を応用しつつも、守兵の足元近くにまで攻め手を引き込んでの白兵戦をも想定した工夫が凝らされているのである。

しかし、これらと同等レベルの縄張上のテクニックは、吉見嶽城にはあまり投入されていない。畝状竪堀群の形態を比較しても、主郭北西の竪堀群A－3は幅員・深さ・起点ともに一様ではなく、畝の構築も一部分に留まる。副郭北西下の竪堀列B－1も、並走して設置することで得られる根本的効果性から逸脱してしまっている。各所にある堀切も単発的な分布を示し、横堀と直結して隣接する曲輪を囲いこむ意識は希薄である。複数の堀切に挟まれた空間の斜面部を竪堀で埋めるような発想もない。これらの点のみを重視するなら、小型ながら畝状竪堀群Eを備えた別所城の方が、むしろ技巧的とも言える。

この相違の理由については、永禄時と天正時との2度の長期使用による、微妙な時期差の表出と見ることが妥当であろう。杉ノ城に比して古的な手法が目立つ吉見嶽城は、その意味において正しく永禄段階の宗麟本陣なのであり、より先進的構築法を明瞭に留める杉ノ城・別所城は、天正の布陣での大友氏重臣層の共同による陣所設営の結果と見られる。後者における中心郭群の分立構成の意味は、この背景から考えると理解できる。

ただしこのことは、吉見嶽城が天正段階に全く再整備されなかったことを意味するものではない。それは、具体的に遺構の実態に現れている。例えば、主郭南下には土橋を伴う横堀A—4が見られるが、塁線全体を網羅する状態になっておらず、東端は極めて曖昧な処理の形となって消滅しており、しかも土橋からは主郭へ登頂することができないという最大の矛盾点を抱えている。また、竪堀列B—1の西側竪堀の末端は、堀切Eから派生した大型の竪堀によってモノの見事に断ち切られており、大竪堀の東岸にはその断面が露になっている。つまりこれらは、増改築実施を示す痕跡に他ならない。主郭南東隅から派生する土塁先端と小規模な堀切A－5との関係にしても、その発揮する遮断機能の方向を異にしている点で同化しきれていない印象を持たせるが、これも同じ解釈を適用できるだろう。

それでは、改築に着手しながらも、杉ノ城と同等水準の縄張り手法が駆使されていないのはなぜか。この問題は、山系全体の陣施設に配分された防備の力点を分析した上で再考すべきで、今は即断を避けたいが、開戦当初の予定であった大友義統着座が延引されるに従い－しかも先延ばしの挙句に中止となったわけだが－、陣全体の指揮系統が実質的には杉ノ城へ集約されていったことを想像させるのである。

他方、杉ノ城の西端付近、曲輪Aの西側斜面に見られる小規模な畝状竪堀A—5や不規則な配列の腰曲輪群Dの存在は、永禄段階の陣施設の踏襲を示すものと考えたい[1]。また、別所城の畝状竪堀Eと横堀Fの関係も、本来の有機的セット関係から言うと上下が逆の配列にある。維持管理上の観点に立てば、横堀FはEから流れる雨水や土砂に絶えず晒される状態にあり（実際、Fの底部には「堀障子」と見紛う性格不明の起伏が幾つも認められる）、やはりこれも両者の付設時期が微妙に異なることで生じた現象と推測できる。

註

(1) 千田嘉博氏は長野城(福岡県北九州市)の大規模な畝状竪堀群について、永禄8年にはその基本形が成立していたと考察し、この種の遺構を有する九州地方の城郭の年代観を探る上で、注目すべき見解を提示している(『長野城－長野城の分布・確認調査－』第6章第1節　北九州市教育委員会2000)。

おわりに―大分県下の諸城との対比の中で―

前節で見たように、固定的な時間軸の中で機能した高良山陣所群であっても、1570年前後と1580年代半ばとの間の僅か14、5年の時間推移の中で、築造技術の内容に明らかな格差が生じていたことが理解できる。特に今回は、畝状竪堀群の規格的発達の度合、腰曲輪と竪堀との連動性、堀切と横堀との一体化の状態などに、縄張りの計画性と技巧上の精度の面での差異が、顕著に現れていることを確認したわけである。

では、この各パーツの特徴を大分県下の城郭に対比させると、どのようになるのだろうか。

防備ラインの徹底に対する拘りは、大友本城の高崎城(大分市)に特にはっきりと表れており[1]、妙見嶽城(院内町)主郭の西～北西尾根の一部に部分的採用が窺われ、日指城(山香町)、天面山城(大分市)、高城(大野町)などにも積極性は乏しいが同じ意識が働いている。西日本の中世山城の中でも"異彩を放つ"存在と言って良い耶馬溪町の長岩城だが、その奇矯な構造の意味を考えるには、この防衛論理に立つよりないであろう。

高良山陣の畝状竪堀群に見られる2つの類型のうち、吉見嶽城や杉ノ城西端に残る比較的粗放な配列のものは、妙見嶽城[2]、立石城(山香町)、野田城(玖珠町)、水ヶ城(臼杵市)、高尾城(緒方町)などに見られる。高崎城の例も、竪堀相互の間隔が開き「畝」の構築が曖昧な状況からすると、同種の古的な様式の範疇に含めて良いだろう。これらは規模の大小に関わらず、土塁や横堀などとの相互連携の意識が低いという点でも共通している。

対するに、杉ノ城・別所城の規格的なタイプの畝状竪堀群になると、松牟礼城(直入町)を典型として小岳城(大分市)、角牟礼城(玖珠町)などに見られ、非常に小規模ながら宇佐市の山本砦にも整然さが見て取れる。院内町の副城や日田市の高井岳城、九重町の松木城では横堀との連結意識が顕著であり、天正14年の島津氏の府内侵攻に対する最終防衛の拠点となった大分市の鶴ヶ城にも同類型の竪堀群が存在する点は重要であろう。

これらの内容差を、永禄12年と天正12年の定点的年代観に直結させることは極めて乱暴な話であり、筆者も現段階では、この傾向の普遍妥当性を殊更に強調するつもりは無い。しかし、高良山の遺構群を指標とした比較検証を今後も進めることによって、少なくとも宗麟期から義統期へという緩やかな時間枠での変化(＝15世紀第3四半期から第4四半期へ)ならば、大友氏関係城郭の技術的編年の絞り込みが実現するものと予見できる。

付－高崎城との対比

最後に、高良山陣と大友氏の本城である高崎城(105～106頁・第87図)とを比較した時、見えてくる事柄について若干触れておきたい。

第一に、城外の特定方向に面して長く防御線を連続させる理念が、この城にも適用されている点に気付く。山頂にある主郭(曲輪Ⅰ)南裾から城域東端の曲輪群まで、南面する一本の帯曲輪を貫通させ、その縁辺に石塁を付設し部分的に横堀の機能を持たせる発想は、正しく高良山陣城の特徴に通ずる。最終期の主郭と思しい曲輪Ⅱの、東に連なる列状配置の曲輪群が、この帯曲輪へ出るための虎口をそれぞれに備えている点が明示しているように、城内の各ユニットを相互連絡するための主要経路としての役割を果たすと同時に、各曲輪内の兵卒を一斉に、しかもスムースに石塁際へ配置することを眼目とした構造となっている。別言すればこの特徴は、曲輪相互の有機的結合による城内導線の複雑化をもって迎撃の効率化を指向した近畿型(いわゆる「織豊系」)の城郭との、決定的な理念上の相違を示していると言って良い。

この狭長な帯曲輪に拘りながらも、一方では侵入時を想定して部分封鎖をも図りたいというジレンマを解消すべく、数箇所で石塁を櫓台状に肥大させて曲輪幅を"絞る"(恐らく「木戸」等の作事を伴う)策を採用している。この発想は吉見嶽城にも見る事ができ、曲輪Cの北西尾根に続く帯曲輪が、尾根上の曲輪から突出する土塁によって、仕切られるように幅員を狭めている箇所が認められる(K、L)。高崎城では、より恒久性を持たせて石塁を用いているが、両者の機能に質的格差はない。曲輪Ⅱ南西隅の堀切ラインと接する部分に、曲輪Ⅱの法面から石塁が帯曲輪に向かって突出していた痕跡があるが、これにいたっては部位・形状ともに吉見嶽城のものと全く同種の遺構と評価できる。

ところで、高崎城をめぐっては、豊臣政権下に服属した大友義統による改修の可能性が取り沙汰されているが[3]、筆者は前記のような縄張上の骨子から見ても、なお検討を要する点が多いと判断している。石積み技法の駆使や主要虎口の平面構造、竪堀横の「登り石垣」状の構築物など、確かに目を引く部分が多いが、いずれも豊臣氏系統の築城技術とは「似て非なる」ものと評価せざるを得ないからである。

石垣構築技術で言えば、勾配角度の調節方法が確立していない在地系城郭に特有の「段積み」が基調となっている(曲輪Ⅱ東面、石塁の各所)。隅角部は、「算木積み」未発達のために「立石」で代用するか(曲輪Ⅱ正面虎口)、ランダムな重ね積み

により曲線に仕立てるしかない（前同北東隅部）中世期の技術限界が明瞭に現れている。一部の石垣には、面の平滑化を意識した石材吟味が看守でき、その点ではさすがに大友本城としての「意匠手間」を感じるのだが、肝心の配石状況に関しては杉ノ城の石積みと変わらない発展段階にある。とは言え、臨時の陣営であってさえも畝状竪堀の「畝」を石塁化する程なのだから、大友氏独自の石積み技術の再評価も必要であるが[4]、高崎城の竪堀脇石塁もその構造からすると（注視すればこれも「二段積み」であることが解る）、近畿系の技術に頼らずとも自前の工法で創出可能な構築物と判断できる。

最終的にこの城では、帯曲輪完備に依存する防衛方針を整理縮小し、曲輪Ⅱを実質的主郭として再整備しその求心力下に列状曲輪群を統合して、堀切・竪堀と石塁でこのエリアを区切り直した結果（その時点で旧主郭部の中枢機能が移転）、現在の姿が出来たものと見たい。これこそが、島津氏侵攻に備えた天正14年の改修[5]における基本構想であったと考えられ、その新たな主要部の境界施設として竪堀脇の石塁が必要となったと捉えられる。

虎口についても、仔細に観察すると全て「平入り」構造ないし城道「2折」のアレンジ形態が基本である。問題となるのが南東部の推定「大手口」で、2基の櫓台に挟まれた開口部が一見テクニカルな印象を与えるが、西側櫓台の設置主眼は虎口前面のスロープに対する牽制と門口の保護にあって、コースラインの折曲の規定を一義とした措置とは考えにくい。佐賀県の三瀬城（神代氏）や住吉城（武雄後藤氏）など、他地方の戦国期領主拠点となる城郭にも同じ虎口防護の発想の具体例が認められ、県下の副城や御所ノ陣（国東町）にも片袖の土塁を肥大させた虎口が存在する。東側の櫓になると、わざわざ開口部から距離を置き、虎口に向けての直接的な「横矢」機能を発揮しにくい位置を選んでいる。この両櫓台の現実的機能としては、虎口前面へ接近途中の攻め手に対する牽制を主とし、内的には、前述した帯曲輪内における移動の調整策を果たすものと考えられる（特に東の櫓台）。

虎口通過後の導線を考えてみても、「内枡形」特有の「クランク走向」を強く設定しているわけでもなく、開口部を通過してから「T字」に行き先が振り分けられているに過ぎない。これも杉ノ城の、帯曲輪群から曲輪Cに入ってからA・B郭を中心とする左右二つのエリアに分岐する導線設定と、骨子はさほど変わらない。帯曲輪の塁線中腹に付設しただけの虎口であるのだから、櫓台の有無に関わらず、そうしたコース取りになるのは自明である。

そして、何より重視すべきは、虎口「空間」としての閉鎖性・完結度の非常な脆弱さで、塁線自体の折曲と組み合わせにより封鎖性の高い虎口を形成する、豊臣氏の城郭の縄張りにおける規範的手法とは、大きく相違していると言わざるを得ない。一方、開口部に至る「つづら折れ」のスロープを俯瞰するように、東側の櫓台から竪堀とセットで石塁を延ばす工夫などは、この城の防備発想の最終的成熟度を示す技巧と言って良い。戦国大名大友氏の築城技法の到達点を、素直にそこに見るべきであろう。この他にも、高良山陣所群と共通する構造上の特徴は多々あり、高崎城の最終形態の形成をめぐっては、上記の視点から改めて慎重な検討を行うべき余地を残している。

註

(1) この種の防衛ライン完備の発想は、武家社会下で古くから具体化していたことが、現存する奥州藤原氏の阿津賀志山防塁（福島県）、『太平記』に記される近江坂本の足利方陣所などから理解できる。確かに戦国期における北部九州の城郭の特徴を考える上で留意すべきプランの一つではあるが（木島孝之・中西義昌「天正・中後期の北部九州における城郭の様相」『戦国の城と城下町Ⅱ』鳥栖市教育委員会1998）、山内上杉氏の高山城（群馬県）、今川氏の賤幡山城（静岡県）など他地域の拠点城郭にも同じ意識は内在しており、決して九州「固有」の理念ではない。したがって、これのみで大友氏ないし県下の城郭の個性を特定できるものではない。むしろ注目したいのは、陣所の縄張りに摘要されている“守り”優先の基軸が大友氏本城にそのままスライドしている点で、高崎城の最終的な利用目的を考察する上では重要な意味を持つ。

(2) 妙見嶽城に関しては永禄2年（1559）に宗麟（義鎮）が改修している点（8月7日付・田原親賢宛宇佐宮一社中連署申状案「到津文書」〔『編・大』20〕）、天正7年（1578）に田原紹忍らをして再普請させている点（3月27日付・香志田兵部丞宛大友義統書状「香下要氏蔵文書」〔『編・大』25〕、他）、天正14年10月の島津軍府内侵攻まで在番が確認できる点（10月12日付・佐田鎮綱宛大友義統書状案「宇都宮文書」〔『編・大』27〕）などから、各段階の遺構の混在が想定できる。城の南東端と北西尾根に付設された畝状竪堀群には、横堀や帯曲輪と連動する部分も存在する。

(3) 木島孝之「九州における織豊期城郭－縄張り構造にみる豊臣氏九州経営－」（『中世城郭研究』6 1992）など。

(4) 安心院町の龍王城には、細川氏時代の石垣とは別に、自然石を主体とした残存高2m余の石垣が主郭南側塁面の一部で観察できるが、現時点で実見できる遺構の中では、これが大友氏の自得した近世的石積技術の成果として、唯一検討の俎上に乗せられる存在である。石材寸法の規格性は低く間隙の多い配石ではあるが、「面合わせ」の意識が現れており勾配角度の調節技法も見て取れ、小規模ながらも高崎城の技術水準を凌駕している。天正15年の豊臣政権からの城領安堵以後、文禄2年の改易までの間に、義統がこの城の再整備に着手していた可能性を暗示する遺構である。

(5) 11月21日付・賀来社大宮司宛大友義統書状案『大友文書録』所収文書（『大分県史料』33）。

第5章　総括　　～大分県における中世城館の位置付け～

はじめに

大分県域の中世城館を考える場合、二つの大きな要素がある。一つは鎌倉時代に豊後国の守護職を得た大友氏が戦国時代末まで一度も豊後国を失うことなく存続した事、そしてもう一つがそれとも大きな連関を持つが、中世文書が豊富に残された地域であるという事である。前者により、特に中世後半期の地域支配や家臣団掌握、領国防衛の考え方が時代の変遷とともにパラレルに中世城館に反映している可能性があり、後者でそれを検証できる状況があるということである。

大友氏は守護として豊後国に下り、守護大名、戦国大名と進展を遂げていった。このような大名は、九州では他に薩摩の島津氏のみである。そして戦国末期にはこの両者が相まみえる事によって、豊臣秀吉による九州平定が遂行されるのである。この天正期の薩摩軍の豊後侵攻、そして文禄期の大友氏豊後除国に至るまで、戦国末期に凝縮された豊後における歴史の大転換は、多くの中世城館を歴史の表舞台に引っ張り出す事になる。現在知られる大分県、特に豊後の中世城館は、多かれ少なかれこの時期に何らかの関わりを持っているものが多い。それを示すのが同時期の文書であり、江戸期の編纂になる地誌類であり、地元での伝承である。さらに天正14年から15年にかけては島津氏側の記録（「上井覚兼日記」など）や、戦国期後半からは宣教師フロイスなどによるキリシタン関係資料（『日本史』など）といった、他地域ではほとんど見る事のできない性格の史料群があり、主要な人物の意思までが直接に（といっても、記述者に当然思想的、立場的な偏向があるのは否めないが）伝わって来るという希有な地域である。このような様々な性格の史料群と縄張り図における城館の姿が重なる時、初めて城館の意味が明らかになるのではないか。

今回、文化庁の補助を得て9カ年に渡って調査をしてきたのは、まさにこの点の解明に他ならなかった。これを明らかにする事が、中世城館全体に対する今後の取り組みの方向を定める事になるし、個別城館の史跡指定化、さらに活用に向けた方向付けにつながるのである。

以下、様々な場面毎に主要な城館を取り上げ、今回の調査の総括として大分県内における個別中世城館の歴史的位置づけを明らかにしておきたい。（城館名の後のゴシック体の数字は城館番号を示す。）

大友氏の城郭～領国支配の拠点～

大友氏と城郭を考える場合、先ず第一にあげられるのが高崎城(287)である。豊後において最も早く文書に登場する城郭は高勝寺城＝伐株山城(540)であるが、それから約20年後の正平14（1359）年、高崎城は南北朝の戦いの中で北朝方の拠点として登場し、守護大友氏時が立て籠もった。この時が初めての築城であったのかはわからないが、当該期の文書に記載のある他の幾つかの城郭もそうであるように、遺構としては押さえる事ができない。これら南北朝期の城郭を巡る攻防の共通点は、麓からの比高が数百m以上はある高い山に立て籠もった、という事である。高崎城の立地もまさにこれに合致する。

この高崎城が再び歴史の舞台に登場するのは、加判衆の一人であった朽網親満が永正13（1516）年に大友氏に対し反乱を起こした際である。永正16（1519）年正月には、高崎城に立て籠もった「朽網以下之凶徒」を大友方が攻めて、2月には落城させている。何故、反乱を起こした朽網氏が高崎城に立て籠もったのかは、文書からはわからないが、高崎城が大友氏を象徴する城であったからかもしれない。

その後、天正期以前までは大友家文書録綱文にはいくらか記載があるが、現存する文書では確認できない。天正14（1586）年11月になると、大友義統が賀来社大宮司に対して高崎に登城して普請を行った事への謝意を表している。この文書が天正期以降では唯一のものであるが、フロイスの『日本史』には、薩摩軍が府内に侵攻した天正14年12月のある夜、大友義統は「嫡子の伯叔父（田原）親賢が監視している」高崎に避難した、と記されている。しかし、「そこも安全ではなかったので」豊前の妙見岳城に逃げる事になる（その後、妙見岳城にも居る事ができずに、最終的には龍王城に移る）。つまり、少なくとも11月以前に普請をして島津氏に備えたが、攻防戦の前に高崎城を捨てて安全な豊前に敗走するのである。この時点で大友氏の高崎城が終焉を迎えたと言っても良い。この最重要な高崎城が文書に頻出しないのは、三重野氏が触れるように[(1)]、大友氏直営の城郭としていわゆる「城誘」の対象ではなかったことによるものであるとすると、文書には表れない事実が隠されている事になる。この事は、高崎城の高度な縄張りを見ると明らかになる。つまり、豊後の他の城郭と比較した時、技術的にも、そして築城思想も明らかに突出した存在であるという事である。天正14年の普請の具体的内容や、それ以後、すなわち大友氏が完全に豊臣大名化する天正15年以降、豊後を除国される文禄2年までの間に普請が行われたのかどうかは文書からはわからないが、最終段階で独自の技術により古い城郭の上に所々に櫓台を付設する石塁で長城的な防御ラインを築き、大部分の主要な、そして階層差の認められる曲輪群を一体的に囲い込む城郭プランは、明らかに豊後国内の他の城郭には見られないものである。このプランは、最終的に居住することをも視野に入れたものと考えられる（これについては後述）。

また、高崎城と並んで大友氏の城郭であったのが丹生島城(307)である。大友義鎮(宗麟)は、天文19(1550)年のいわゆる「二階崩れの変」によって家督を得たが、その後数年間、他姓衆らの反義鎮の動きに府内が動揺を深める中、義鎮は臼杵に居を移す。ガスパル・ヴィレラの「イエズス会員宛書簡」(文献資料編2宣教師記録部二)の中ではこの時のことを「国主は謀反を指図した大身数名を殺させ、彼自身は安全に対処するため、或る城のような島に引き籠もった」と記している。この段階で丹生島に城郭を構えたのかどうかはわからないが、少なくとも1563年のルイス・アルメイダの書簡(文献資料編2宣教師記録部七)では、国主(義鎮)は臼杵におり、「政庁」があったことがわかる。この政庁所在地であった臼杵には、天正7(1579)年頃まで家督を継いだ大友義統も住んでおり、天正6年の日向耳川の戦いでの敗戦までは、臼杵の丹生島城が豊後の中心的な城郭であった。義統が府内に移ってからも、すなわち政庁が府内に移ってからも、天正8(1580)に宗麟は津久見に居所を移すものの、天正14(1586)年に島津氏の攻撃を受けるまで、丹生島城は宗麟の城として、そして豊後第二の都市の中核として機能していた。丹生島城は、その後近世城郭に大きく改変されており、往時の姿はほとんど知ることはできないが、フロイスは次のように記している。臼杵(丹生島)城は「三方が海面に囲まれて自然にも、また人工的にも強化された攻めにくい位置」(1588年イエズス会総長宛書簡:文献資料編2宣教師記録部三二)にあり、「満潮時に海から行くと大きく迂回することになる」(『日本史』)とある。

また、『日本史』によると丹生島城の内部には教会のある義統の館や蔵、そしてある時期までは宗麟の邸宅があり、宗麟らは城の中に常住していた。それまでの高崎城に代表される詰めの城としての山城から、居住機能を持ちかつ防御に優れ、政庁を有した城郭を大友宗麟、義統は作り上げたのである。つまり、丹生島城は山城ではなく「館城」的な城郭であった。すなわち、大友宗麟は臼杵に移った段階で、府内では実現不可能であった城と一体となった町作りを指向していたのではないかと考えられる(この点については後述)。

「南郡」の巨大城郭～有力家臣の反乱と城郭～

豊後南部は、大友氏の豊後における根本的な荘園があった大野郡などがあり、そこには有力な庶家が盤踞しており、さらに古代以来の大神氏に系譜を持つ一族もいる。大野郡には大友系の志賀氏や一万田氏、さらに周辺の直入郡には朽網氏(大友系?)、田北氏(大友系)、入田氏(大友系)、海部郡には佐伯氏(大神系)、臼杵氏(大友系)、府内周辺の大分郡には有力な大友一族である戸次氏、吉岡氏や他姓の小原氏や雄城氏などがあり、これら他姓衆、同紋衆の中から大友家臣団の中枢をなす加判衆が選ばれている。

「南郡」と呼ばれるこの地には大規模な城郭が散見できる。これらの城郭は、巨視的に見ると日向・肥後国境に沿ってやや豊後内陸部に配置されているように見える。しかし、これら城郭群を大友氏が直接把握しようとしていたかどうかは疑問である。府内以北、あるいは豊後西部方面の主要な城郭は、国境の緊張の高まりの中で大友氏が「城誘」を在地に命じ、城郭の直接的な把握を行った。[2]そこは、宇佐・院内衆や山香東西一揆、玖珠郡衆など、大友氏が「衆」として把握した地域であり、傑出した在地領主が存在しない地域であった。逆に加判衆に名を連ねる国人の領域である南郡を中心とする地域は、それら国人に城郭の築造を委ねていたものと考えられる。そこから、16世紀前半代、すなわち大友義長・義鑑の代以降独自に城郭が展開していったものと考えられる。

その結果、いわゆる「国衆」と呼ばれる人々の築いた巨大な城郭が出現する。それらは、朽網氏の山野城(491)、佐伯氏の栂牟礼城(362)、入田氏の津賀牟礼城(398)などである。そしてそれらの城郭は、主郭回りの防備は単純な切岸のみで、主郭から離れた尾根上を何重にも掘り切るという共通点を有しており、編年的には16世紀前半代に基本的な姿が成立していた可能性が高い。注目される事は、16世紀前半から中頃にかけて反大友的立場をとったとの理由で、城主であった朽網親満、佐伯惟治、入田親廉が大友義鑑あるいは義鎮(宗麟)から誅せられていることである。[3]このことは、偶然では無かろう。そして、それらの城郭は、おそらく島津氏豊後侵攻に備えて大きく改変されるまで、古い形態を有したままであった可能性が高い。栂牟礼城は、尾根続きに新しい城「小田山城(366)」(近世の絵図では「新城」)を、津賀牟礼城はやはり尾根続きに「切寄」(近世の史料では本来の城郭を「古城」とし、新しく機能した部分を「切寄」としている)[4]を、山野城でも、新しく「切寄」(近世の史料では、「山之城と申す切寄山」とある)を造るのであり、少なくとも天正期後半代では旧来の城郭は機能していなかった可能性がある。すなわち、栂牟礼城と津賀牟礼城(の「古城部分」)は古い形態を残し、山野城は改変により大きくその姿を変えているということである。

そのように考えられるとすると、戦国期になり南郡各地で力を蓄えつつあった国衆は、大友氏を脅かすほどの規模の城郭を作り出したものの、主要な一族が大友氏に誅せられた事により城郭作りのエネルギーが一端そがれる事になったのではないか。それは、大友氏が戦国大名として家臣団を把握してく過程で必然のことでもあった。

国東の城郭～田原氏の世界～

では、一方これら南郡の国衆の反大友的立場の形成に大きく係わったと考えられる国東の田原氏はどのような城郭を作り出していったのであろうか。初代大友能直の12番目の子(正妻の子ではなく、京都の白拍子の子と言われる)であった

泰弘が半ば強引に田原別符の地頭職を手に入れた時から、大友惣領家との確執が始まる。室町時代には、田原氏が幕府の奉公衆として独自の活動を行い、朽網親満の乱に際しては行動を支援するなど、大友家臣団の有力な一員であるにもかかわらず一貫して大友氏と距離を置いていた。

田原氏は、国東半島中央部の田原別符からさらに海上交通の要衝であった国東の地を得、さらに発展する。この国東田原氏は、半島中央部のやや東側にある独立峰「小門山」に城郭を構える。雄渡牟礼城(224)である。ここは、大友氏の高崎城と同様、田原氏にとって南北朝期以来の拠点である。一部破壊されているが、四段に拵えた曲輪の回りを一回り横堀状に帯曲輪を巡らせるもので、斜面には4箇所竪堀が入れられるという極めて明快な城郭構造を持つ城である。この城郭の構築時期がどこまで遡るのか明確な史料はないが、田原氏の館といわれ、天文13（1544）年に築造されたといわれる亀城(225)も基本的には同じ構造を持つことからすれば、少なくとも16世紀中頃以前には成立していた可能性がある。この城と館は、国東に勢力を張った田原氏の在地における拠点として重要な城館である。

そして、国東田原氏は、ついに天正8（1580）年に親貫が大友家に反旗を翻す。俗に言う「田原親貫の乱」である。この時親貫方が立て籠もったのが安岐切寄＝安岐城(238)と鞍懸要害＝佐野鞍懸城(037)であり、さらに宇佐郡、下毛郡といった豊前南部地域を巻き込んだ動乱に発展する[(5)]。これに対して大友義鎮は、義統の弟である親家を雄渡牟礼城に入れ田原氏を継がせるとともに、田原親貫とその勢力を一掃するために豊後から大量の兵士を送り込む。大友方の入った雄渡牟礼城が、田原氏の雄渡牟礼城そのものであったのかについては文書からは不明であるが、今回の調査で雄渡牟礼城から峰続きにある御所の陣(222)と呼ばれる城郭が確認された。そこが親家の入った城郭ではないかと考えられる。御所の陣は、効果的な堀切の配置と虎口部で横矢が掛かる工夫など、この段階での大友氏の城作りの到達点を示すものとして注目される。

国境の城郭群～国境の攻防と大友氏の城誘～

大友氏の根本的な領国である豊後は、北は豊前、西は筑前・筑後、南西部は肥後、南は日向に接しており、戦国大名として成長する過程でそれらの地域との直接的な関わり合い（具体的には多くは大友領国の拡張）を有するようになる。その中でも豊前の背後にある周防の大内氏、あるいはその後の毛利氏に幾度も直接豊後にまで侵攻を許すという過程を経て、豊前国境の重要性の意識は古くから大友氏の中にあった。それは、三重野氏が指摘するように、[(6)]大友義鑑の代では日出の鹿（鳴）越城(253)と玖珠の角牟礼城(533)の城誘を天文2（1533）年頃相次いで命じ、大友義鎮の代では宇佐郡の妙見岳城(172)の城誘を永禄2（1559）年に命じていることから具体的に知る事ができる。

鹿越城は文書上で明応年間から知られるが、そこには田北氏など「鹿越城衆」が城番として立て籠もっていた。そして、天文2年に鹿越城に籠城した大内軍を討伐した後に「城誘」が山香郷の給人あてになされているのである。つまり、国東ルート、宇佐ルート、あるいは安心院ルートによって豊後の中心である府内に至る場合に、いずれも最終的に越えねばならない「鹿鳴越峠」を押さえるために、近在の土豪を「鹿越城衆」として把握し、その構築には山香郷の有力な給人を充てていたのである。鹿越城は、帯曲輪を一回りさせるだけの長方形の主郭に対し、堀切とそこからつながる竪堀は、統一的な技巧性には乏しいものの、主郭とは不釣り合いなほどに規模が大きく、片側の土塁もしっかりとしている。また、斜面の所々に兵の溜まる平場を造るなど、臨戦的で実践的な城郭である。豊後の中核である府内防衛の北の最終的な砦として16世紀を通じて機能していた。

豊前と接する玖珠郡では、南北朝期には玖珠城＝伐株山城(540)が南朝方の拠点として中核的役割を担っており、この城は“国侍持切の城”[(7)]であった。しかし、永正年間（16世紀第1四半期）を最後に文書上では確認されなくなり[(8)]、かわって玖珠郡の中核的城郭として登場するのが角牟礼城である。そして、角牟礼城では天文2（1533）年に玖珠郡衆に対して城誘が命じられた。ただし、この城誘は「新堀」の掘削に留まっており、この段階で大方の城郭構築は済んでいたと考えられる。角牟礼城は、文書上で15世紀段階から知られるが、最終的に織豊系城郭に改変されておりこの段階の姿を復元するのは難しい。しかし、主郭から幾段かの腰曲輪を設け、その最下段から竪堀を4本入れる姿は往時のものであろう。

妙見岳城は明応8（1499）年に大内氏のもと宇佐郡院内衆が同心して城郭を拵えたが、大内氏の滅亡に伴う豊前撤退によって妙見岳城は大友氏の城となる。そして、実質的な豊前・豊後国境の最重要城郭として豊前、周防方面の押さえを担っていた。そのような中で大友義鎮は永禄2（1557）年に宇佐宮社領などに対して城誘の負担を命じ、さらに天正7（1579）年には田原氏が差し籠もって普請をなしている。そして、この妙見岳城は天正期には大友宗麟の第三子で、田原親賢の養子となった田原親盛が「守将」を務めており、天正14年12月に府内が薩摩軍の侵攻で焼き討ちされると、大友義統は妙見岳城を目指して敗走する。この妙見岳城は、比高差のある山頂部の主郭から下る尾根上に階段状の平場（曲輪）を築き、その先端に幾重にも堀切を入れ、さらに斜面には60本余の畝状竪堀を

施して防御ラインを固める頑丈な城郭である。

さらに、この豊前国境には妙見岳城以外にも畝状竪堀を多用する城郭が多く見られる。国境を挟んで豊前側に３箇所、豊後側に３箇所ある。豊後側のひとつである烏帽子岳城(053)は烏帽子岳頂上に築かれ、急崖の南方向以外の三方に畝状竪堀を54本入れる、畝状竪堀で防御ラインを築いた典型的な城郭である。城誘などの文書は無いが、宇佐宮領荘園であった田染荘の南端にあって田原山越えで山香に抜けるルート（国東方面を経由して豊後中枢に至る重要なルートの一つ）を押さえる位置にあることから、大友氏の意思が大きく働いていると見られる。

また、豊前豊後国境で縄張り的に最も重要な城郭は佐田城(177)である。文書上では明応7（1498）年に「佐田古城」、あるいは「佐田山所々御陣」と記され、以後全く史料上では確認されないが、大内氏の宇佐郡代であった佐田氏の城郭として知られていた。今回の調査で初めて詳細が知られた佐田城は、山頂部に横堀と竪堀を巧みに配する主郭を中心とする曲輪群を置き、そこから派生する尾根の先端部5箇所に共通する技法で6つの曲輪群を築き、山岳を一体的に守備している大規模な城郭群である。豊前が大友氏の領国に組み入れられると佐田氏は大友氏に従い、天正7（1579）年以降数年続く豊前南部の動乱の中で、佐田鎮綱は田原紹忍と並んで鎮圧にあたっている。佐田城は、明応年間の城郭の上に新たに技巧的な城郭を築いており、その時期は永禄期から天正期と考えられるが裏付ける史料が無い。

薩摩軍豊後侵攻と城郭～陣城と村の城

一方、天正14（1586）年に薩摩の島津氏が侵入した日向や肥後の国境付近の状況は不明な点が多い。前節で述べたように南郡には巨大城郭が認められるが、国境地域の防備に特化した城郭の存在も幾つか確認できる。大友府蘭（宗麟）は天正12（1584）年に岡城の志賀道輝に宇目の「切寄」を点検させており、島津氏侵攻が現実になりつつあったこの段階では、大友氏が直接南郡の城郭の普請に関与したものと考えられる。その一つが朝日岳城(372)で、近世の史料（文献資料編１記録部二の一）には「薩摩もの打入之年拵申」とある。この朝日岳城は、島津側の記録である『上井覚兼日記』に「朝日岳ハ堺目寄々にて候間、輙針伏させ可申候」とあるように、朝日岳城が豊後を調伏するための象徴と見なされていた。ここに、大友氏は城郭を築いたのである。しかし、城郭は狭い主郭に切岸で階段状の腰曲輪を取り回し、尾根の先端付近を掘り切るという最先端の城郭にはほど遠いものであった。

また、確実に島津氏侵攻に備えた城郭に駒鳴砦(378)があり、ここは近世の資料では「薩摩もの打入三年已前ニ岡ノ城よりはり番を置候所」（文献資料編１記録部二の一）とされ、少なくとも天正11年には岡城(394)の志賀氏が城番として入っていた事が想定される。フロイスの『日本史』によると、天正13年頃「国主の嫡子（義統）はドン・パウロの祖父（志賀道輝）を豊後と日向の国境にある宇目と呼ばれる国境の城に配置し」たが、道輝は臆病であったため「難攻不落の所にある城の位置も信頼できず、山の峰を通る狭い道を数カ所、人力で切り崩させた」という（文献資料編２宣教師記録部二九）。この城が駒鳴砦か、または皿内砦(379)であった可能性が高い。

このように、日向国境の防備については、臼杵にいた宗麟主導のもと南郡の重鎮であった志賀道輝を中心として当たったが、大友氏と姻戚関係にある一部の国人クラスの城郭では、畝状竪堀による防御ラインの形成に向かったものもあるが、多くは堀切と切岸を多用した古い様相を残すものであった。そして結果的に多くが島津氏に内応し、豊後崩壊を導く事になることは、16世紀代を通して形成されてきたこの地域の家臣団との関係に要因があると考えられ、従前から言われている戦国大名としての大友氏の未完成さを如実に表すものであろう。

天正14年11月には島津氏は日向国境を突破し、松尾城(424)を本陣とする。この松尾城は、縄張り調査によって、旧来の城郭に大幅な改変が加えられている事が判明した。おそらく島津氏が手を入れたものであろう。この点に付いての史料は無いが、構造を見ると山頂部の片側を削り残した土塁は旧来のもので、そこから麓にかけて下る谷に造られた数十箇所にわたる平場（帯状の曲輪）が新しく造られたものである。ここからは島津氏が持ち込んだと思われる16世紀後半代の優品の陶磁器が出土する。ほぼ完璧に残存する松尾城の遺構は、陣城として貴重な遺跡である。

島津氏は、12月になるとこの松尾城を足場に府内や丹生島城の攻略を目指し北上する。府内には大友義統と共に秀吉から派遣された長曽我部元親、千石秀久らがいたが、まず府内の町を守るために「上原と称するある場所に一城を築」き、さらに、薩摩軍が攻め寄せた府内防衛の南の最終拠点であった鶴ヶ城(299)に救援に駆けつける。鶴ヶ城は「利光と称するキリシタンの貴人の城」（『日本史』）で、土塁で囲まれた主郭に対して8m近い段差のある切岸と、そこから下る畝状竪堀で堅固に守られた城郭であったが、麓の戸次河原での戦いに敗れ、薩摩軍の府内進入を許す事になった。

この他にも、大友氏関連の史料や島津側や宣教師の記録などに豊後国内の城郭が頻出する。その数はおそらく50箇所は下らないであろう。これらの城郭の内、いくつかは近世の記録（文献資料編1記録部二の二）によると「百姓等取あかり申場」であったとされる。代表的な城郭に鍋田城(413)がある。フロイスの『日本史』にリアンという老人が近隣の人々300人ばかり（最終的には3～4千人）と立て籠もった城郭と描かれる。そこには「従わねばならぬ領主はいない」とされており、いわゆる「村の城」の典型とされる。構造的にも、山頂部背後に階段状に曲輪を設けるなど、特異なものである。

豊前南部の平地城館～豊前動乱と切寄～

豊前南部の宇佐平野、中津平野は大分県内では最大の平野で、この平野を主舞台として展開したのが天正期に勃発する前述の田原親貫の乱と、それに引き続く動乱である。この平野にはいわゆる平地城館や村そのものを大きく囲い込むような土塁と堀が点在する。宮熊城(095)は、「城」と呼ばれる城郭部分とそれに引き続く集落部分を大きく一体で囲む土塁と堀があり（現状では一部で残るのみ）、全体で防御を意識した村を形成していた。時枝城(116)は、やはり狭義の時枝城があり、それを含み込む集落部分にも土塁や堀が広がっているのが確認された。高家(134)の集落も同様である。これらが文書上では「切寄」と表現されるものであった。[9]すなわち、天正7（1579）年から同11（1583）年にかけて頻出する「時枝切寄」や「高家切寄」がそうである。

しかし、一方「切寄」は山の上にもあった。必ずしも平地城館や防御的な村とイコールではない。田原親貫が立て籠もった城郭も、一方は「切寄」で、一方は「要害」であった。このことから判るように、「切寄」と「要害」、「城」などの用語が厳密な使い分けがなされていることからすると、当時「切寄」に何らかの共通点があったということである。しかし、今回の調査を通してみても、様々な「切寄」に形態的な共通点は見いだしがたい。そうすると築城主体の共通性や大友権力の掌握の問題になるが、いずれとも決定力に欠ける。ここでは、天正7年以降、豊前動乱に伴って新しく出現した城郭と防御的な村を「切寄」と呼んだというように理解したい。すなわち、「切って寄せる」という大規模な土木工事がほぼ一斉に行われたことが、そのような固有名詞を作り出した要因と考えられる。[10]

そのように考えられるとすると、逆にそのような用語を生み出すほどの動乱であったことになる。それは、大友方と反大友方の争った、かつて経験した事がない地域を巻き込んだ争乱であった。隣村との戦が行われる中で、必然的に集落そのものの防御に向かわざるを得なかったのであろう。そのような背景から、宇佐、中津平野の中核に「城」を持つ集落を囲む村の大部分は出現したのであった。

館城の成立と展開～詰めの城から住む城郭へ～

武士の館の出現については、いわゆる「方形館」の出現が14世紀にまで下る、という橋口氏の指摘[11]以来、発掘調査による検証が全国的に続けられている段階といってもよい。一方、室町期になると足利義満の「花の御所」の成立後にその影響を受け、各地に類似する方形館が出現するとされる。

では、豊後においては武士居館としての館はいつ出現し、その後の展開はどのようになったのであろうか。今回の調査で確認された館、あるいは館城は100箇所余ある。最も古いものは13世紀の上城遺跡(490)や古庄屋遺跡(086)で、13世紀後葉には岡の前遺跡(195)があり、西遷御家人である地頭の矩形を基本とする館が鎌倉時代には成立していた。このことは、旧来の勢力との軋轢や交通の要衝を占める意味、あるいは農業経営の拠点としての意味があったと考えられる。さらに、14世紀には外郭を有する真玉氏館(198)が成立していた可能性があり方形館の展開をたどれるが、15世紀前年代は不明ながらも少なくとも15世紀後半から16世紀前半にはやや比高差のある館城が居所として通例となった可能性がある。発掘調査がなされておらず厳密な時期の比定には至らないが、奈多城(206)や赤井城(174)など方一町規模のものや、発掘調査で15世紀後葉の築造が明らかになった上門手遺跡(472)や時期不明の沓掛城(196)など方半町規模のものがそうである。この脈略の中で大友氏の上野原館(293)が出現すると考えられる。上野原館は一部発掘調査されており、15世紀末から16世紀前葉には小規模な土塁が作られ、その上に大規模な土塁が16世紀後半に構築されたことがわかっている。この15世紀末から16世紀前葉は大友義長、または義鑑の代であり、将軍の権威失墜と共に領国意識の芽生え始めた時期であり、平地館から防御に優れた館城へと居所を移したものと考えることができる。これを更に推し進めたのが天文19（1550）年に家督を継いだ義鎮であり、前記したように館と政庁を備えた丹生島城に移り、城下町と一体となった先進的な城郭を作り上げた。

この丹生島城は、終始一貫して大友惣領家の私的な空間でもあり、かつ天正7年頃までは政庁が置かれた。城下町には家臣の集住が行われたと推測される。しかし、天正8年前後には義統と共に政庁機能が府内に移る。この政庁が置かれたのは、方二町に復元できる府内大友館をおいて他に無いであろう。しかし、発掘調査によると、現時点での知見では、この段階で厳重な防御施設が作られていたとの確証は無く、むしろ築地塀などの京風の屋敷という趣が強いと考えられている。そうすると、館城である上野原館から丹生島城へ、という居住機能と政庁機能を兼ね備えた、より防備に優れた城郭へという流れの中で、丹生島城のすべての機能が大友館に引き継がれたとは考えられない。特に、天正6年の日向における敗戦以後の豊後の混乱の中ではなおさらである。そこには、それを補う意味で高崎城の再整備という大きな課題が存在した

はずである。平地の大友館とともに高崎城の大改修が必要だったのである。それまでの詰めの城から居住機能を備えた城郭への改変である。しかし、町とあまりに比高差があり、遠く離れているという地理的要因を克服できないまま、天正14年の薩摩軍侵攻という事態を迎え、最終的には山城への居住を実現できないまま高崎城は廃城に至ったものと考えられる。

大友氏以後の城郭～織豊系城郭の展開～

天正14(1586)年の島津氏豊後侵攻による領国崩壊の後、秀吉の国割によって大友氏は豊後一国の大名となる。その結果、豊前は妙見岳城と龍王城(189)を除いてまったく大友氏の影響力は排除され、新たに黒田氏が豊臣系大名として豊前国六郡に入部した。黒田如水は山国川下流の河口付近に中津城(026)を築城する。これは、秀吉が秀長に出した朱印条々(案)の一項目にある「豊前国之儀」に忠実に則ったものであった。中津城は、九州ではもっとも古い本格的な織豊系城郭の一つとして整備されたと考えられるが、後の細川氏や小笠原氏による改築が大きく、現状では当時の姿を詳細に追う事はできない。しかし、最近の堀の発掘調査によって黒田段階の石垣の確認が進んでおり、総石垣の城郭の姿の一端が浮かび上がってきている。

この中津城と同時に造られたと考えられる城郭群が豊前南部(宇佐郡、下毛郡)に点在する。まず、先に見た「豊前国之儀」(秀吉条々)で触れられた豊後と豊前の「堺目之城」とされる高森城(100)がある。高森城は、宇佐平野を望む駅館川右岸台地上の川に突出した先端部を三条の堀と土塁で画した平城で、横堀の折れ(横矢掛かり)と櫓台状の突出部が組み合わされ、さらに土塁の切れ目には礎石建ちの櫓門が確認されており、石垣は現状では認められないものの、明らかに織豊系城郭の影響下に出現した城郭である。この高森城と同様の横堀の配置をする城郭に、台地上の山本切寄(108)と山城である光岡城(126)、高山城(091)がある。これらが黒田氏の支城として築城された城郭群と位置づけられる。

黒田氏の入部に対しては、天正15(1587)年に「豊前一揆」が起こる。宇佐、下毛、上毛郡の土豪が城井(宇都宮)鎮房らとともに立ち上がり、城郭に依りながら反抗を試みた。その城郭の一つ下毛郡の長岩城(078)は宇都宮一族の野仲氏の城で、野仲鎮兼は天正16(1588)年に長岩城に立て籠もるが、黒田勢により城郭は落城したという。長岩城は、豊後・豊前南部にあっては他に例を見ない特異な城郭で、扁平な安山岩を平積みした石塁とそそり立った屏風のような自然地形を利用して塁線を形成し、石垣を回す主郭を防備している。ベースにある城郭は尾根を複数掘り切り虎口部周囲に竪堀を有するもので、16世紀前半から中頃に形成された通例の城郭であるが、最終的に黒田氏の豊前入部に備えて石垣と石塁を多用した臨戦的な城郭に改変したものと考えられる。「天下統一」の過程で、在地側が如何に対応したのかがわかる好例である。惜しむらくは後世の石積みの積み直しがどれほどなされたかが判らないが、基本的な姿は留めていると考えられる。

一方、豊後は豊前に遅れること6年の文禄2(1593)年に大友氏除国という事態を迎える。大友氏ばかりか、その家臣団が豊後を放逐されたのである。そして、その大友家臣の闕所地には、豊田寛三氏の研究によると府内に早川長敏、岡に中川秀成、臼杵に福原直高、高田に竹中重利、富来に垣見家純、安岐に熊谷直陳、角牟礼に毛利高政、隈には宮城長盛が大名として入ったという。[12]これにより、新たに造られたのが府内城、隈城、富来城で、他は旧来の城郭を改変したものであった。また、岡城と臼杵城(大友時代は丹生島城)は近世を通して藩が存続したので幾回もの改変が重ねられる。それに対して、安岐城と高田城、隈城は藩としての存続期間が短く、後世の改変が少ない。さらに角牟礼城は築城後すぐに毛利高政が佐伯に改易され、その後森藩に入った久留島氏は小藩ということで城郭を持つ事ができず、角牟礼城の麓に陣屋を築き角牟礼城は「古城」となったため、文禄2～3年の姿を留めているとされる。その意味で、織豊系城郭の当初の姿を残す角牟礼城は全国的にも重要な城郭である。

まとめ

以上、大分県域の城館について見てきた。その結果、いくつかの重要な城館が浮かび上がってきた。それらは、高崎城や丹生島城、大友館など大友氏に直接関わる城館、佐田城など国境付近に造られた城郭や大友氏が城誘を命じたような領国の防衛戦略上重要な城郭、南郡の巨大城郭や国東田原氏の雄渡牟礼城など大友氏にやや距離を置き、独自の世界の中で作り出していった城郭、大友氏が豊臣秀吉の被官となり、そしてその後豊後も除国されたことにより出現した角牟礼城のような織豊系城郭などであった。これらが、県内569箇所におよぶ城館の頂点に位置するものである。しかし、これらの城館の下には、さらに地域に密着した数多くの城館群があり、全体として大分県域(＝大友氏の根幹的な領国)の中世を形作っていたのである。これらの城館群は、また地域に還元することによって初めてその意味が浮かび上がってくる存在でもある。地名や伝承、近世以降の地誌類など地域の様々な事象も広く勘案し、個別にその意義付けを行って行かねばならないであろう。この報告書では、城館を取り巻く周辺の状況も含めて、個別城館の掘り下げはまだまだ十分ではなく、その意味では調査、研究はまさに緒についたばかりである。

ところで、大友氏は、「大友系」と呼べるような城郭プランあるいは技術の創出にたどり着いたのか否かという問題が残るが、現状では否定的にならざるを得ない。直接的に「城誘」に関与した妙見岳城、鹿越城、角牟礼城などは、時期的な問題から来る共通性はあっても独自の技法や共通の城郭プランの導入、さらにそこに独自の築城思想を見いだすことはできない。大友氏の豊後領国内での城作りは、対外的な緊張感の比較的少ないまま戦国期を迎え、天正期の後半になって急展開を見せたことから、当時流行していた畝状竪堀を活用した防御ラインの導入には積極的であったものの、独自の城作りを創出するまでには至らなかったものと考えられる。しかし、16世紀中頃以降、(実態は不明ながらも) 館や蔵を備えた丹生島城を作り上げていったことや、天正期後半には高崎城でさらに居住機能を持つ城郭作りを目指した可能性があることは、結局高崎城での常住は実現する事がなかったとはいえ、大友氏の領国防衛政策や領国経営の一端を示すものであろう。

また、今回は縄張り調査と文書・記録の調査が中心となって城館の評価を行ってきた。しかし、発掘調査はそれらでは知る事のできない情報を提供する場合がある。例えば、記録には全くなく、しっかりとした横堀を有するふいが城 (211) が発掘調査によって14世紀代には築城されていた事が明らかになった例、また小路遺跡 (489) や岡の前遺跡など地表面では確認できなかった「館跡」が発掘調査によって検出された例、府内の中核施設であり豊後支配の拠点の一つでもあった大友氏館跡の発掘調査によって、その概要が明らかになりつつある例など、今後城館の評価を行う場合の重要な要素になることは間違いない。検証を行うためにも、埋蔵文化財としての中世城館の重要性をあらためて指摘しておきたいと思う。(小柳和宏)

註

(1) 三重野誠『大名領国支配の構造』校倉書房　2003年

(2) 第3章1三重野氏論考参照

(3) しかし、一族は断絶せず、後も大友家臣団の一員としての活躍が見られる。

(4) 文献史料編1に所収の「豊後国古城蹟并海陸路程」では、津賀牟礼城は「つかむれと申す切寄、古城有」と記され、切寄と古城という2つの城があったと認識されていた。このことは「滑瀬ヨリ宇田枝迄御案内記」(『豊後国村明細帳』8巻、大分県地方史研究会、1975年) で、「梅 (ママ) 無礼切寄」には「岩向所所堀きりあり」と「古城」の存在を示唆していることと符合する。つまり、畝状竪堀を有する部分が「切寄」で、堀切と切岸で形成された一角が「古城」と理解できる。この場合「切寄」は、「古城」と対照的な「現役の城郭」を示す用語として認識されていたと考えられよう。

(5) 第3章2櫻井氏論考参照

(6) 第3章1三重野氏論考参照

(7) 『伐株山城』(玖珠町教育委員会　1984年) 所収の海老沢氏論考

(8) 他の城郭に比べ平坦面が圧倒的に広く、戦国期において主郭回りをコンパクトに防衛するという方向性とは相容れない山容であることも、ここが角牟礼城に取って代わられた要因であろう。平坦面に7箇所見られる方形の土塁で囲まれた“曲輪”群の位置づけも含めて、再検討の要があるだろう。

(9) 宮熊が「切寄」と呼ばれた史料はないが、他の平野部の「切寄」構造と同様なあり方を示す。

(10) 「切寄」については第3章2櫻井氏論考にまとめられている。

(11) 橋口定志「中世東国の居館とその周辺」(『日本史研究』330号 1990年) ほか

(12) 『大分県の歴史』(山川出版社　1997年)

おわりに

「中世城館等発掘調査事業」を開始した平成７年頃、大分県の城館は竹田市の岡城が国指定史跡に、宇佐市の光岡城、臼杵市の臼杵城、真玉町の真玉氏館、大分市の府内城の一部が県の史跡に指定されているに過ぎなかった。このうち中世の城館は光岡城と真玉氏館跡のみであった。光岡城は、地元の球技場計画に伴う保護策として一部の発掘調査をふまえ県史跡に、真玉氏館は典型的な武士居館の姿を残すとして県史跡になっていた。

しかし、昭和40年代以降の開発は、未指定の中世城館のある台地上や山頂部にまでおよび、昭和54年から４年次にわたって行った玖珠郡玖珠町伐株山城跡の調査は山頂での運動公園計画に伴うもので、県内初の本格的な城館の発掘調査であった。この伐株山城跡は、建武三年の「足利尊氏軍勢催促状」などにある玖珠城であることは伝えられていたが、それが考古学的調査と並行して行われた古文書調査等によっても確実なものとなった。また、輸入陶磁器や土師質土器など多くの土器類も出土し、大分県の中世遺跡調査研究の嚆矢ともなった。結果的にはこうした調査の成果により遺跡は現状のまま保存され、地元のイベント等に活用されている。

昭和60年には、大友氏の詰め城である高崎城跡に管理用道路の建設が計画された。高崎城のある高崎山はサルの生息地として国の天然記念物に、また瀬戸内海国立公園にも指定されておりその取扱いが論議されたが、高崎城の縄張りの解明や、県下の城館の中における位置づけがなされておらず、結果的には竪堀の一部を損壊しながら道路は建設された。その他にも、黒田如水の弟黒田利孝によって築かれたとされる宇佐市高森城や東国東郡安岐町の安岐城等は道路建設によってその一部が失われ、一方では、各地で行われた土地改良工事等に伴う調査で、記録には見られない館跡等の発見も相次ぎ、さらに平成３年の台風19号による山林被害の復旧に伴う林道工事が幾つかの城館を傷つけることになった。

中世遺跡の重要性が認識されるにつれ、こうした事態は何としても避けねばならないという思いから基礎資料の収集が急務となり、今回の調査が立案された。調査には、各市町村教育委員会文化財担当者及び地元文化財調査委員等の協力をいただき、可能な限りの縄張り図作成を行うこととし、またこの間の平成8年は大分郡湯布院町、９年は宇佐市、10年は大野郡三重町で一般県民を含めた調査報告会を開催したが、県内各地から多くの方々の参加があり、新たな情報やその確認等の依頼が増加し、中世の城館に対する県民の深い熱意を感じた。

調査の結果、確認された城館数は569ヶ所に及んだが、これらを県下全体の中で見通すことによって、大友氏の城館、大友氏除国以後の城館、豊後南郡の城館、国境の城館など地域性や歴史的背景の中で捉えることができたが、これはあくまで基礎資料を提示したに過ぎない。しかし一方では、この調査によって伝承が史実となり新たな歴史が誕生した地域も少なくないのである。

今後はこの成果を生かし、それぞれの地元での考古学的な調査等によるさらなる歴史的位置づけの解明や、城館の活用を含めた保護のための対応が必要であるが、過疎化や木材の需要不足等による山の崩壊が進んでおり、そうした山頂部等にある多くの城館の保存と活用は、地域が一体となって取り組まなければ実現不可能である。

さて、平成10年、大分市顕徳町の一角で巨大な景石を伴う大規模な庭園が発見された。これは、中世府内の町割りを記した「府内古図」と呼ばれる古絵図の世界が、現実的なものとして出現した瞬間であった。この「府内古図」については、その信憑性について疑問視する声もあったが、この発見は大分県の歴史を知る上でのビッグなニュースとして注目された。

さらに、「府内古図」にある横小路町から初めて16世紀代の道路が確認され、その後も大友氏館の東限を示す南北大路（二の大路）とその大路に面した御内町、桜町、堀ノ口町等の町屋の様子や、さらに、「府内古図」にあるダイウス堂南側でキリシタン墓を含む墓地が発見され、キリシタンの町、国際貿易都市中世府内の町がよみがえろうとしている。現在、大友氏館跡については大分市が国指定史跡として土地の公有化を進めており、いずれ近いうちに大友氏館の再現した姿を見ることができるであろうが、市街地にありマンションや住宅等が立ち並ぶ約４万㎡の土地が完全に史跡として活用されるにはまだ多くの時間と財源を必要とする。地域の理解と行政の積極的な取り組みがなければ実現できないものである。

いずれにしても、城館は地域の財産であり地域の活性化の起爆剤にもなりうるものである。単なる町おこしや観光施設として整備するのではなく、その城館の持つ歴史を正しく理解できるような本来の姿を可能な限り再現することによって本当の意味の保護にもなり、地域の人たちが地域の歴史を考えるきっかけが生まれるのである。

その意味で、今回の調査によって明らかになってきた各城館の位置づけは、今後の一つの指針としての役割を果たすものであり、県の行政機関として責任を持って対応していきたいと考える。（渋谷忠章）

索　引

あ

相ケ鶴城	あいがつるじょう	久住町	174
赤井城	あかいじょう	安心院町	61
安岐城	あきじょう	安岐町	86
朝日嶽城	あさひがだけじょう	宇目町	129
荒内砦	あらうちとりで	宇目町	133
荒木城	あらきじょう	宇佐市	36
荒平城	あらへらじょう	緒方町	161

い

生桑城	いくわじょう	杵築市	74
池永城	いけながじょう	中津市	11
石五道原遺跡	いしごどうばるいせき	千歳村	172
一万田館	いちまんだやかた	朝地町	167
一尺屋摺木砦	いっしゃくやするぎとりで	佐賀関町	118
犬丸城	いぬまるじょう	中津市	9
岩丸城	いわまるじょう	中津市	10

う

上野大友館	うえのおおともやかた	大分市	108
上城遺跡	うえんじょういせき	久住町	178
宇佐公通館跡	うさきんみちやかたあと	宇佐市	36
宇土山砦	うとやまとりで	鶴見町	137

え

烏帽子岳城	えぼしだけじょう	豊後高田市	23
烏帽子岳城	えぼしだけじょう	佐賀関町	119

お

大蔵古城	おおくらこじょう	日田市	193
王子ヶ城	おおじがじょう	野津町	148
大友館	おおともやかた	大分市	99
魚返砦	おがえりとりで	玖珠町	195
岡城	おかじょう	竹田市	140
奥畑鞍懸城	おくはたくらかけじょう	豊後高田市	20
小城	おじろ	国東町	82
小岳城	おだけじょう	大分市	113
雄渡牟礼城	おどむれじょう	国東町	83

か

樋掛城	かけいじょう	山香町	95
鹿鳴越城	かなごえじょう	日出町	89
金輪城	かなわじょう	大田村／山香町	69
加納塞	かのうさい	緒方町	164
蕉山城	かぶやまじょう	日田市	191
亀城	かめじょう	国東町	84
上門手遺跡	かもんでいせき	千歳村	171
烏岳城	からすだけじょう	緒方町	163
仮屋敷遺跡	かりやしきいせき	中津市	15

き

岐部城	きべじょう	国見町	78
岐部城	きべじょう	九重町	211
騎群城	きむれじょう	竹田市	142
伐株山城	きりかぶさんじょう	玖珠町	202

く

釘野城	くぎのじょう	九重町	205
沓掛城	くつかけじょう	大田村	70
久保泊城	くぼどまりじょう	津久見市	117
蔵小野砦	くらおのとりで	宇目町	132
鞍懸城	くらかけじょう	豊後高田市	18、20

こ

小路遺跡	こうじいせき	久住町	177
甲ノ尾城	こうのおじょう	山香町	91
古後城	こごじょう	玖珠町	196
古庄屋遺跡	こじょうやいせき	本耶馬渓町	30
御所の陣	ごしょのじん	国東町	81
小田山城	こだやまじょう	弥生町	128
小牧城	こまきじょう	緒方町	165
小松城	こまつじょう	山香町	92
駒鳴砦	こまなきとりで	宇目町	134
小牟礼城	こむれじょう	朝地町	166
権現岳城	ごんげんだけじょう	庄内町	120

さ

財津古城	ざいつこじょう	日田市	188
坂手隈城	さかてくまじょう	中津市	12
坂本城	さかもとじょう	日田市	189
佐田城	さたじょう	安心院町	62
佐野鞍懸城	さのくらかけじょう	豊後高田市	18
皿内砦	さらうちとりで	宇目町	135

し

敷田城	しきだじょう	宇佐市	49
下高城	しもたかじょう	宇佐市	44
城ヶ尾城	じょうがおじょう	九重町	204
城の腰古城	じょうのこしこじょう	宇目町	131
成仏城	じょうぶつじょう	国東町	79
城山城	しろやまじょう	宇佐市	55
陣ノ内山城	じんのうちやまじょう	九重町	207

す

水ケ城	すいがじょう	臼杵市	116
末広城	すえひろじょう	中津市	7
ズリヤネ城	ずりやねじょう	三光村	24

せ

瀬戸遺跡	せといせき	玖珠町	200
千歳城	せんざいじょう	大分市	110

そ

副城	そいじょう	院内町	58

た

高井岳城	たかいだけじょう	日田市	192
高尾城	たかおじょう	緒方町	162
高崎城	たかさきじょう	大分市	104
高城	たかじょう	竹田市	138
高城	たかじょう	大野町	168

高旗城	たかはたじょう	犬飼町	173
高森城	たかもりじょう	宇佐市	38
高山城	たかやまじょう	宇佐市	32
田北城	たきたじょう	直入町	184
高家城	たけいじょう	宇佐市	50
竹ノ尾城	たけのおじょう	杵築市	73
武山城	たけやまじょう	野津町/臼杵市	147
龍ケ鼻城	たつがはなじょう	山香町	93
田附城	たづくじょう	大野町	170
立石城	たていしじょう	山香町	96

ち

智恩寺西城	ちおんじにしじろ	豊後高田市	21
長久寺城	ちょうきゅうじじょう	中津市	15

つ

津賀牟礼城	つがむれじょう	竹田市	144
筒井ケ城	つついがじょう	野津町	152
角牟礼城	つのむれじょう	玖珠町	198
鶴ケ城	つるがじょう	大分市	111
鶴ケ城	つるがじょう	緒方町	160

て

寺田館	てらだやかた	野津町	150
天面山城	てんめんざんじょう	大分市	97

と

栂牟礼城	とがむれじょう	弥生町/佐伯市	123
時枝城	ときえだじょう	宇佐市	42
殿山城	とのやまじょう	九重町	208

な

長岩城	ながいわじょう	耶馬渓町	26
中尾城	なかおじょう	中津市	9
中津城	なかつじょう	中津市	13
奈多城	なたじょう	杵築市	75
鍋田城	なべたじょう	野津町	151
南山城	なんざんじょう	久住町	175

に

丹生島城	にうじまじょう	臼杵市	114
西原遺跡	にしはらいせき	宇佐市	42

の

野上城	のがみじょう	九重町	209
野田城	のだじょう	玖珠町	197

は

八幡山城	はちまんやまじょう	佐伯市	122

ひ

彦岳城	ひこだけじょう	弥生町など	127
久尾城	ひさおじょう	緒方町	161
日指城	ひさしじょう	山香町	94
一ツ戸城	ひとつとじょう	耶馬渓町	25
日隈城	ひのくまじょう	日田市	190
平田城	ひらたじょう	宇佐市	42
広崎氏切寄	ひろさきしきりよせ	宇佐市	46

ふ

ふいが城	ふいがしろ	別府市	77
蕗政所跡	ふきまんどころあと	豊後高田市	22
福島城	ふくしまじょう	中津市	15
藤田遺跡	ふじたいせき	宇佐市	53

ほ

帆足城	ほあしじょう	玖珠町	201
法螺貝城	ほらがいじょう	直入町	185

ま

馬台城	まだいじょう	耶馬渓町	29
真嶽城	まだけじょう	日出町	88
真玉氏館跡	またましやかたあと	真玉町	71
松尾城	まつおじょう	三重町	154
松木城	まつきじょう	九重町	206
松牟礼城	まつむれじょう	直入町	186
松山城	まつやまじょう	宇佐市	42

み

光岡城	みつおかじょう	宇佐市	45
三船城	みつふねじょう	久住町	181
宮熊城	みやぐまじょう	宇佐市	34
妙見岳城	みょうけんだけじょう	院内町	59
妙相寺城	みょうそうじじょう	中津市	15

や

八並城	やつなみじょう	中津市	8
山本切寄	やまもときりよせ	宇佐市	41
山本砦	やまもととりで	宇佐市	40
山野城	やまんじょう	久住町	179
屋山城	ややまじょう	豊後高田市	17

ゆ

緩木城	ゆるぎじょう	竹田市	139
緩木高城	ゆるぎたかじょう	竹田市	138
用来城	ようらいじょう	直川村	136

よ

吉久遺跡	よしひさいせき	宇佐市	31
吉広城	よしひろじょう	武蔵町	85

り

龍王城	りゅうおうじょう	安心院町	68

わ

若山の陣	わかやまのじん	野津町	153
和気城	わきじょう	宇佐市	57

大分県文化財調査報告書　第170輯

大分の中世城館

第四集　総論編

2004年3月31日

発行　大分県教育委員会
〒870-8503
大分市府内町3丁目10-1
097－536－1111(内5498)

印刷　株式会社　高山活版社